千葉県文化財センター調査報告第236集

佐倉市南広遺跡

―― 佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書X ――

1993

千葉県土地開発公社
財団法人 千葉県文化財センター

佐倉市南広（みなみひろ）遺跡

―― 佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ ――

1993

千葉県土地開発公社
財団法人 千葉県文化財センター

序　　文

千葉県北部に位置する印旛沼周辺は、豊かな水と肥沃な土地に恵まれ、古代から現代にいたるまですぐれた文化を育んできました。印旛沼の南に位置する佐倉市は、城下町としての面影を今日に残し、近世においては西の長崎・東の佐倉と並び称されるほど学問・文化の栄えたまちでありました。また、市内を流れ印旛沼に注ぐ大小の河川や恵まれた自然環境により、古くから旧石器時代をはじめとして、数多くの遺跡の存在が知られていました。

一方、現在の佐倉市は、千葉県が推進してまいりました内陸工業団地建設計画にたいして、新東京国際空港に近く、道路網の整備により首都や臨海工業地帯との交通アクセスが良いなどの好条件を備えております。このため、第一・第二工業団地の建設に続いて、千葉県土地開発公社によって第三工業団地の建設が計画されたため、工事に先立ち千葉県教育委員会は予定地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて千葉県土地開発公社はじめ佐倉市教育委員会等関係機関と協議を重ねてまいりました。その結果、公園等として古墳をはじめとする埋蔵文化財をできる限り保存するよう努力してまいりましたが、やむを得ない部分については発掘調査を行って記録保存の措置を講ずることになりました。発掘調査は当文化財センターが担当することになり、昭和50年度と昭和54年度から昭和60年度にかけて実施いたしました。

このたび、昭和59年度から昭和60年度に発掘調査を実施した南広遺跡の整理作業が終了し、報告書を刊行することになりました。南広遺跡では旧石器時代から近世にわたる遺構・遺物が発見されました。その中心は古墳時代と歴史時代の集落で、本遺跡と谷津を挟んだ位置にあり、すでに報告書の刊行されているタルカ作遺跡や腰巻遺跡などとともに、当時の人々の生活や集落の変遷を解明するうえでの貴重な資料となるものです。また、近世の建物跡などの一部が発見され、近世の庶民の生活を知るうえでも数少ない貴重な資料を提供することができました。本書が学術資料としてはもとより文化財の保護と理解のために広く活用されることを願っております。

終わりに千葉県教育委員会、千葉県土地開発公社、佐倉市教育委員会をはじめとする関係諸機関の皆様の御指導と御協力に厚くお礼申し上げるとともに、発掘調査から整理作業にいたるまで御協力をいただいた調査補助員の皆様に心から感謝いたします。

平成５年３月

（財）千葉県文化財センター

理事長　奥山　浩

凡　　例

1．本書は千葉県佐倉市大作（おおさく）２丁目（旧地番佐倉市宮本（みやもと）字南広（みなみひろ）41番地ほか）に所在する南広遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は佐倉第三工業団地建設に先立ち、千葉県土地開発公社の委託を受けて千葉県教育委員会の指導のもとに財団法人千葉県文化財センターが実施した。本調査面積は17,700㎡である。

3．調査で使用した遺跡のコード番号は212-025である。

4．現地の調査は昭和59年（1984）度と昭和60年（1985）度に実施した。調査の期間は昭和59年（1984）10月１日～昭和60年（1985）３月31日、昭和60年（1985）11月21日～昭和61年（1986）１月31日である。

昭和59年（1984）度は調査部長鈴木道之助、調査部長補佐岡川宏道の指導のもとに班長矢戸三男、調査員蔀淳一、同小畑巌が担当した。また昭和60年（1985）度は調査部長鈴木道之助、調査部長補佐岡川宏道の指導のもとに班長矢戸三男、調査員石倉亮治が担当した。

5．整理作業は平成元年（1989）度から平成３年（1991）度にわたって行った。

整理作業および本書の編集は調査部長堀部昭夫、調査部長天野努（平成３年度）、調査部長補佐阪田正一、班長谷　旬の指導のもとに主任技師森本和男、同金丸誠、同山口典子、同麻生正信（平成４年３月）、技師豊田秀治（平成４年１月～３月）が行った。執筆作業の分担は森本（第１章、第２章第１節・第２節の遺構、第４節１、第５節２）、金丸（第２章第１節・第２節の遺物、第４節２、第５節１、第３章）、技師井上哲朗（第２章第３節）、豊田（第２章第６節）である。

6．第２章第４節２．小鍛冶関連の執筆については、穴澤義功氏に御指導、御教示をいただいた。

7．土器容量の計測、算出方法については、小川貴司氏に御教示をいただき、森本和男がソフトを作成し、エリアラインメーターとパソコンを用いて実測図から計測した。

8．第１図で使用した地形図は国土地理院発行の50,000分の１地形図「佐倉」「成田」「千葉」である。

9．発掘調査から本書の作成にいたるまで、千葉県土地開発公社、千葉県教育庁生涯学習部文化課、佐倉市教育委員会の関係各位をはじめ多くの方々の御指導と御協力をいただき、深く感謝の意を表したい。

目　　次

序　文

凡　例

第1章　序　章……1

　第1節　遺跡周辺の地形とその環境……1

　第2節　遺跡の概要……3

　第3節　調査にいたる経緯と経過……4

　第4節　調査および整理方法……6

第2章　検出された遺構と遺物……11

　第1節　古墳時代……11

　　1．竪穴住居……11

　　2．土　坑……62

　　3．溝……64

　第2節　歴史時代……67

　　1．竪穴住居……67

　　2．掘立柱建物……173

　　3．柵　列……174

　　4．土　坑……178

　第3節　近世遺構群……181

　　1．遺　構……181

　　2．遺　物……185

　　3．まとめ……191

　第4節　そのほかの遺構……197

　　1．時期不明の土坑……197

　　2．小鍛冶関連……197

　第5節　遺構外出土の遺物……203

　　1．縄文時代以降……203

2．縄文時代 ……208
第6節　先土器時代 ……219
1．概　要 ……219
2．石器群の出土グリッド ……219
3．出土石器 ……220
4．接合資料 ……227
5．まとめ ……230
第3章　調査成果のまとめ ……231
第1節　古墳時代から歴史時代の土器について ……231
1．出土土器の分類 ……231
2．時期区分 ……239
第2節　集落の変遷 ……248

挿 図 目 次

第 1 図　南広遺跡の位置とその周辺の遺跡 …… 2
第 2 図　佐倉第三工業団地内における南広遺跡とその周辺の遺跡 …… 3
第 3 図　遺跡周辺の地形 …… 5
第 4 図　遺跡調査範囲とグリッドのよび方 …… 7
第 5 図　先土器確認グリッドおよび調査区 …… 8
第 6 図　凡　例 …… 9
第 7 図　遺構配置図 ……10
第 8 図　竪穴住居001……12
第 9 図　竪穴住居002……13
第 10 図　竪穴住居008B ……14
第 11 図　竪穴住居017A ……15
第 12 図　竪穴住居020D ……16
第 13 図　竪穴住居022B ……17
第 14 図　竪穴住居025……19
第 15 図　竪穴住居025竈……20
第 16 図　竪穴住居027……21
第 17 図　竪穴住居030……22
第 18 図　竪穴住居032……23
第 19 図　竪穴住居035B ……25
第 20 図　竪穴住居037D ……26
第 21 図　竪穴住居038……27
第 22 図　竪穴住居039……29
第 23 図　竪穴住居040B ……30
第 24 図　竪穴住居042……31
第 25 図　竪穴住居043……33
第 26 図　竪穴住居044……34
第 27 図　竪穴住居047……35
第 28 図　竪穴住居050・058・110……37
第 29 図　竪穴住居001・002・008B・017A出土遺物(1) ……39
第 30 図　竪穴住居017A出土遺物(2)……41
第 31 図　竪穴住居020D・022B出土遺物……43

第 32 図　竪穴住居025出土遺物……45
第 33 図　竪穴住居027出土遺物……46
第 34 図　竪穴住居030・032出土遺物……47
第 35 図　竪穴住居035B出土遺物(1)……48
第 36 図　竪穴住居035B出土遺物(2)……49
第 37 図　竪穴住居037D・038出土遺物……51
第 38 図　竪穴住居039・040B出土遺物……54
第 39 図　竪穴住居042出土遺物……55
第 40 図　竪穴住居043出土遺物……56
第 41 図　竪穴住居044出土遺物……57
第 42 図　竪穴住居047出土遺物(1)……59
第 43 図　竪穴住居047出土遺物(2)……60
第 44 図　竪穴住居050・058出土遺物……61
第 45 図　土坑055・078・111……63
第 46 図　土坑 055・078・111出土遺物……64
第 47 図　溝005……65
第 48 図　溝005出土遺物……66
第 49 図　竪穴住居003……68
第 50 図　竪穴住居004・006・008A竈……69
第 51 図　竪穴住居008A・009……71
第 52 図　竪穴住居012……72
第 53 図　竪穴住居012竈……73
第 54 図　竪穴住居013・014……74
第 55 図　竪穴住居015・016……75
第 56 図　竪穴住居017B・018……77
第 57 図　竪穴住居020A・020B・020C……79
第 58 図　竪穴住居020C竈・021……81
第 59 図　竪穴住居022A……83
第 60 図　竪穴住居023……84
第 61 図　竪穴住居023遺物出土状態……85
第 62 図　竪穴住居024……86
第 63 図　竪穴住居026……87
第 64 図　竪穴住居028……89

第65図　竪穴住居029……90
第66図　竪穴住居031・033……91
第67図　竪穴住居034・035A……93
第68図　竪穴住居036……94
第69図　竪穴住居037A・037B……95
第70図　竪穴住居037C・040A……97
第71図　竪穴住居041・046……99
第72図　竪穴住居054・065……101
第73図　竪穴住居065竈・066……102
第74図　竪穴住居067・068……103
第75図　竪穴住居068竈・069……105
第76図　竪穴住居070……107
第77図　竪穴住居071……108
第78図　竪穴住居073・074……109
第79図　竪穴住居075・076……111
第80図　竪穴住居003出土遺物……113
第81図　竪穴住居004・006出土遺物……115
第82図　竪穴住居008A・009出土遺物……117
第83図　竪穴住居012・013出土遺物……119
第84図　竪穴住居014出土遺物(1)……120
第85図　竪穴住居014出土遺物(2)……121
第86図　竪穴住居015出土遺物……123
第87図　竪穴住居016・017B出土遺物……125
第88図　竪穴住居018・020A出土遺物……129
第89図　竪穴住居020B・020C出土遺物……131
第90図　竪穴住居021・022A出土遺物(1)……133
第91図　竪穴住居022A出土遺物(2)……135
第92図　竪穴住居023出土遺物(1)……137
第93図　竪穴住居023出土遺物(2)……139
第94図　竪穴住居024出土遺物(1)……141
第95図　竪穴住居024出土遺物(2)……143
第96図　竪穴住居026出土遺物……145
第97図　竪穴住居028・029・031出土遺物……149

第98図　竪穴住居033・034・035A出土遺物 ……151
第99図　竪穴住居036・037A・037B・037C出土遺物 ……155
第100図　竪穴住居040A・041出土遺物 ……157
第101図　竪穴住居046・054・065出土遺物 ……161
第102図　竪穴住居066・067・068出土遺物 ……163
第103図　竪穴住居069・070・071出土遺物 ……167
第104図　竪穴住居073・074・075出土遺物 ……169
第105図　竪穴住居076出土遺物 ……171
第106図　掘立柱建物079 ……173
第107図　掘立柱建物100・101・102 ……175
第108図　掘立柱建物103・106、柵列104・105……176
第109図　掘立柱建物107・108……177
第110図　土坑048・072・077 ……179
第111図　土坑048・072・077出土遺物 ……180
第112図　近世遺構群 019……182
第113図　近世遺構群 019土器・陶磁器出土状態……183
第114図　近世遺構群 019金属・石製品等出土状態……184
第115図　近世遺構群 019出土器類構成比（個体数） ……185
第116図　近世遺構群 019出土陶磁器……186
第117図　近世遺構群 019出土土器……188
第118図　近世遺構群 019出土土人形・硯ほか……189
第119図　近世遺構群 019出土銭貨(1)……190
第120図　近世遺構群 019出土銭貨(2)……191
第121図　近世遺構群 019出土キセルほか……192
第122図　近世遺構群 019出土鉄製品(1)……193
第123図　近世遺構群 019出土鉄製品(2)……194
第124図　土坑007・049・052・109……198
第125図　小鍛冶関連遺物（羽口） ……202
第126図　遺構外出土遺物（土師器） ……205
第127図　遺構外出土遺物（須恵器・玉類・鉄器） ……207
第128図　遺構外出土遺物（縄文土器１） ……209
第129図　遺構外出土遺物（縄文土器２） ……210
第130図　遺構外出土遺物（縄文土器３） ……211

第131図　遺構外出土遺物（縄文土器４）……212
第132図　遺構外出土遺物（縄文土器５）……213
第133図　遺構外出土遺物（縄文土器６）……214
第134図　遺構外出土遺物（縄文土器７）……215
第135図　遺構外出土遺物（縄文石器１）……216
第136図　遺構外出土遺物（縄文石器２）……217
第137図　先土器時代Ａブロック出土状況……220
第138図　先土器時代Ｂブロック出土状況……221
第139図　先土器時代Ｃブロック出土状況……222
第140図　先土器時代Ｅブロック出土状況……223
第141図　先土器時代出土石器１……224
第142図　先土器時代出土石器２……225
第143図　先土器時代出土石器３……226
第144図　先土器時代接合資料１……227
第145図　先土器時代接合資料２……228
第146図　先土器時代接合資料３……229
第147図　古墳時代主要土器変遷(1)……242
第148図　古墳時代主要土器変遷(2)……243
第149図　歴史時代主要土器変遷(1)……244
第150図　歴史時代主要土器変遷(2)……245
第151図　歴史時代主要土器変遷(3)……246
第152図　歴史時代主要土器変遷(4)……247
第153図　集落変遷　古墳時代Ⅰ期……254
第154図　集落変遷　古墳時代Ⅱ期……255
第155図　集落変遷　古墳時代Ⅲ期……256
第156図　集落変遷　歴史時代Ⅰ期……257
第157図　集落変遷　歴史時代Ⅱ期……258
第158図　集落変遷　歴史時代Ⅲ期……259
第159図　集落変遷　歴史時代Ⅳ期……260
第160図　集落変遷　歴史時代Ⅴ期……261

表　目　次

第１表　近世遺構群 019出土器類個体分類表 ……195
第２表　近世遺構群 019出土銭貨計測値一覧 ……196
第３表　出土鉄滓一覧 ……202
第４表　竪穴住居計測表 ……262
第５表　玉類観察表 ……264
第６表　土器観察表（古墳時代） ……266
第７表　土器観察表（歴史時代） ……269
第８表　土器観察表（遺構外） ……277
第９表　出土土器破片数一覧（古墳時代竪穴住居） ……278
第10表　出土土器破片数一覧（歴史時代竪穴住居） ……280
第11表　出土土器破片数一覧（そのほかの遺構） ……284
第12表　縄文土器一覧 ……286
第13表　縄文時代の石器一覧 ……290
第14表　先土器時代の石器一覧 ……291

図　版　目　次

図版１　南広遺跡（航空写真・西から）
図版２　１．近景（調査区西側・台地先端部）　２．先土器時代Ａブロック
　　３．先土器時代Ｂブロック
図版３　１．先土器時代Ｃブロック　２．竪穴住居 001　３．竪穴住居008Ａ・Ｂ
図版４　１．竪穴住居 025　２．竪穴住居 032　３．竪穴住居037Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ
図版５　１．竪穴住居 038　２．竪穴住居 039　３．竪穴住居040Ａ・Ｂ
図版６　１．竪穴住居 042　２．竪穴住居 044　３．竪穴住居 047
図版７　１．竪穴住居003遺物出土状態　２．竪穴住居003　３．竪穴住居009
図版８　１．竪穴住居 012　２．竪穴住居 013　３．竪穴住居 014
図版９　１．竪穴住居 015　２．竪穴住居 016　３．竪穴住居017Ａ・Ｂ
図版10　１．竪穴住居 018　２．竪穴住居020Ｂ　３．竪穴住居020Ｃ・Ｄ
図版11　１．竪穴住居 021　２．竪穴住居022Ａ・Ｂ　３．竪穴住居 023
図版12　１．竪穴住居 024　２．竪穴住居 026　３．竪穴住居 027
図版13　１．竪穴住居 028　２．竪穴住居 029　３．竪穴住居 031

図版14　1．竪穴住居 033　2．竪穴住居 034　3．竪穴住居035A・B
図版15　1．竪穴住居035A・B 遺物出土状態　2．竪穴住居037A・B
3．竪穴住居037C
図版16　1．竪穴住居 041　2．竪穴住居 046　3．竪穴住居 065
図版17　1．竪穴住居 054　2．竪穴住居 066　3．竪穴住居 067
図版18　1．竪穴住居 068　2．竪穴住居 069　3．竪穴住居 070
図版19　1．竪穴住居 071　2．竪穴住居 073　3．竪穴住居 074
図版20　1．竪穴住居 075　2．竪穴住居 076　3．掘立柱建物 100・101
図版21　1．掘立柱建物 107　2．近世遺構群 019（南から）
3．近世遺構群 019（西から）
図版22　先土器時代出土遺物
図版23　縄文時代の土器(1)
図版24　縄文時代の土器(2)
図版25　縄文時代の土器(3)
図版26　縄文時代の土器(4)
図版27　縄文時代の土器(5)
図版28　縄文時代の土器(6)
図版29　縄文時代の土器(7)・石鏃
図版30　縄文時代の石器
図版31　竪穴住居 001・008B・017A出土土器
図版32　竪穴住居017A・020D出土土器
図版33　竪穴住居022B・ 025・ 027・ 032出土土器
図版34　竪穴住居 032・035B出土土器
図版35　竪穴住居035B出土土器
図版36　竪穴住居035B・037D・ 038・ 039出土土器
図版37　竪穴住居040B・ 042・ 043・ 044出土土器
図版38　竪穴住居 044出土土器
図版39　竪穴住居 044・ 047出土土器
図版40　竪穴住居 047出土土器
図版41　竪穴住居 047、溝 005、土坑 055・ 078出土土器
図版42　竪穴住居 003・ 004・ 006・008A・ 009出土土器
図版43　竪穴住居008A・ 012・ 013出土土器
図版44　竪穴住居 014出土土器

図版45　竪穴住居 014・ 015出土土器
図版46　竪穴住居 015・ 016・017B出土土器
図版47　竪穴住居 018・020A・020B出土土器
図版48　竪穴住居020B・020C・ 021・022A出土土器
図版49　竪穴住居022A出土土器
図版50　竪穴住居022A出土土器
図版51　竪穴住居 023・ 024出土土器
図版52　竪穴住居 026・ 028・ 031・ 033・ 034出土土器
図版53　竪穴住居 034・035A・ 036・037A・037C・ 041出土土器
図版54　竪穴住居040A・ 041・ 046・ 054・ 066・ 067出土土器
図版55　竪穴住居 070・ 071・ 073出土土器
図版56　竪穴住居 074・ 075・ 076出土土器
図版57　竪穴住居 076出土土器
図版58　竪穴住居 076、土坑 048・ 077出土土器
図版59　遺構外出土土器
図版60　墨書（赤外線写真１）
図版61　墨書（赤外線写真２）
図版62　墨書（赤外線写真３）
図版63　墨書（赤外線写真４）
図版64　墨書（赤外線写真５）
図版65　鉄器(1)
図版66　鉄器(2)
図版67　鉄器(3)
図版68　紡錘車
図版69　鉄滓(1)
図版70　鉄滓(2)
図版71　土製装飾品・そのほか
図版72　１．近世遺構群 019出土陶磁器（椀・皿）
　　２．同上（徳利・平鉢・香炉）　３．同上（擂鉢）
図版73　１．近世遺構群 019出土土器（かわらけ・焙烙）　２．同上（土人形・硯等）
図版74　近世遺構群 019出土銭貨
図版75　１．近世遺構群 019出土銅製品　２．同上鉄製品

第1章　序　　章

第1節　遺跡周辺の地形とその環境

佐倉市は房総半島北部に位置する。市の北側に印旛沼が横たわり、周囲から大小の河川が印旛沼に流入している。佐倉第三工業団地は印旛沼の南約8kmに所在する（第1図）。

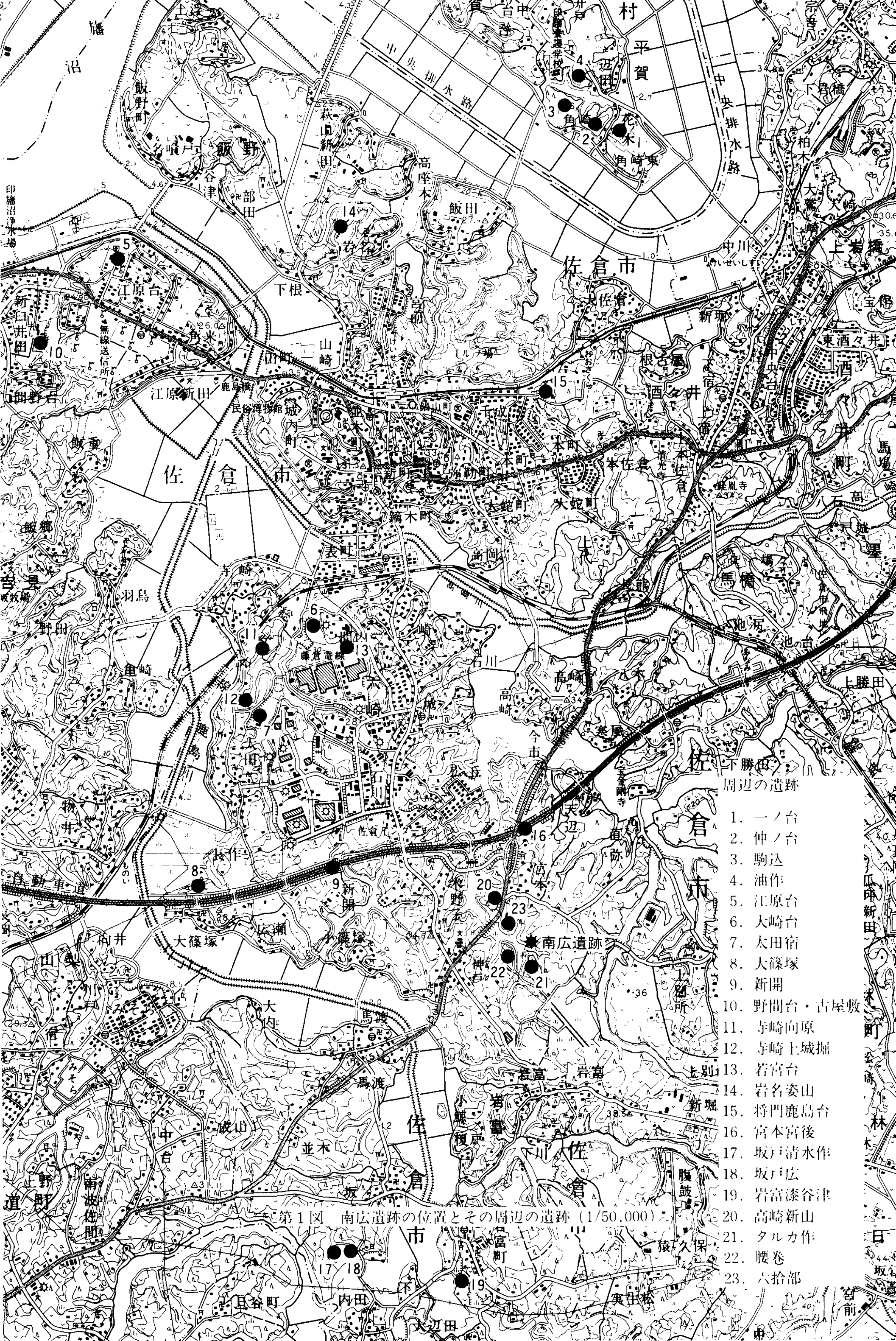
印旛沼と手賀沼は下総台地の平坦面を各地に分断して存在し、「樹枝状谷」とよばれている。台地表層は広く関東ローム層でおおわれ、麦、蔬菜、落花生、果樹等の栽培に肥沃な土壌を提供している。

下総台地は数段の地形によって分類されている。その分類方法はいくつか提案されているが、ここでは千葉県の発行する『土地分類基本調査』を参照した。『土地分類基本調査』によると、下総台地を大きく上・中・下・低の4段に区分している。印旛沼の南側に、利根川水系と東京湾水系を分ける上位砂礫台地が広がっている。佐倉第三工業団地は、この上位台地の一部に位置し、印旛沼に流入する鹿島川と高崎川にはさまれた台地に位置する。標高は約34mである。工業団地周辺には細長い谷底平野が入り組み、小規模な独立した台地がいくつも形成されている。それぞれの小規模な台地上には、先史から古代にかけて各時代の遺跡が残っている。開発以前、台地上には畑地雑草群落が広がり、台地斜面にはコナラ群落、松・杉の植林が広がっていた。狭い谷部は谷津田であった。

佐倉市に所在する各時代の遺跡分布状況については、佐倉市教育委員会発行の『千葉県佐倉市埋蔵文化財分布地図』、および千葉県文化財センター発行の『佐倉市タルカ作遺跡』に略述されているので、ここでは省略する。南広遺跡はおもに古墳時代後半から歴史時代にかけての集落遺跡である。同じ時期に存在した集落遺跡としては、平賀遺跡群、江原台遺跡、岩富漆谷津遺跡、太田宿遺跡、大崎台遺跡、大篠塚遺跡、新開遺跡、坂戸広遺跡、宮本遺跡、高崎新山遺跡等、印旛沼周辺の遺跡が挙げられる。

佐倉第三工業団地内の同時期の集落遺跡には、谷を越えて南側にあるタルカ作遺跡、腰巻遺跡、同じく西側にある六拾部遺跡と、古墳群をはさんで台地の東側に存在する池向遺跡がある。集落遺跡が印旛沼周辺および鹿島川流域に多く分布しているのに対し、古墳の分布はやや薄い。佐倉第三工業団地内では、台地中央部を南北に縦断するようにして古墳群が形成された。

南広遺跡を始めとする佐倉第三工業団地内の発掘調査は、古墳時代の集落と古墳の関係について良好な考古学的資料を提供するであろう。



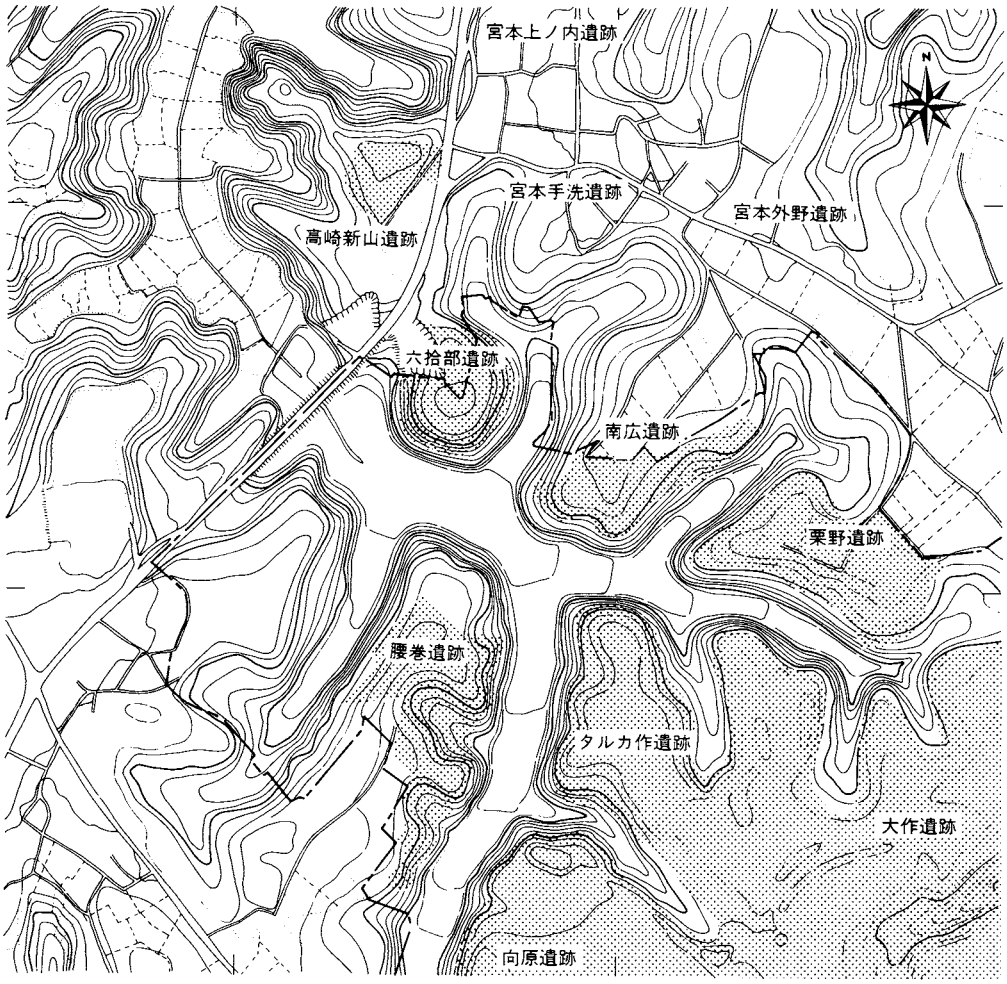
第１図　南広遺跡の位置とその周辺の遺跡（1/50,000）

周辺の遺跡

1. 一ノ台
2. 仲ノ台
3. 駒込
4. 油作
5. 江原台
6. 大崎台
7. 太田宿
8. 大篠塚
9. 新開
10. 野間台・古屋敷
11. 寺崎向原
12. 寺崎上城掘
13. 若宮台
14. 岩名姿山
15. 将門鹿島台
16. 宮本宮後
17. 坂戸清水作
18. 坂戸広
19. 岩富漆谷津
20. 高崎新山
21. タルカ作
22. 腰巻
23. 六拾部

第２節　遺跡の概要（第２・３・７図、図版１）

南広遺跡は佐倉市宮本字南広に所在する。遺跡は鹿島川に流れ込む高崎川上流の小さな支流に面した台地上にある。遺跡周辺の台地上には、古墳時代から平安時代にかけての遺跡が多く分布している。遺跡のある台地には南広遺跡以外に、平安時代の遺跡と思われる宮本外野遺跡、宮本手洗遺跡が北側に所在する。調査された範囲は台地の南から南東部にかけての部分だけであるが、おそらく遺跡の範囲は台地全体におよんでいたと思われる。台地と谷との比高は約16mを計る。谷をはさんで南側の台地上にはタルカ作遺跡、西南の台地斜面には腰巻遺跡、西側の台地上には六拾部遺跡が所在する。さらに六拾部遺跡の北西には高崎新山遺跡が続いている。それぞれの遺跡は南広遺跡とほぼ同じ年代であり、谷をはさみつつ遺跡群を構成していた。遺跡群全体で古墳時代から平安時代にかけての大きな集落を形成していたのであり、南広遺跡はその一部に相当するといえる。



第２図　佐倉第三工業団地内における南広遺跡とその周辺の遺跡（1/10,000）

南広遺跡は、おもに古墳時代から歴史時代にかけての集落遺跡であるが、先土器時代と縄文時代の遺構、遺物も若干検出された。先土器時代の遺構、遺物としては、石器の集中箇所（ブロック）が4か所あり、総数約30点の石器が出土した。縄文時代の遺構は検出されなかったが、遺物包含層が調査区中央の台地縁辺に分布していた。遺物には土器と石器があり、その一部を図化することができた。

古墳時代の遺構は、竪穴住居22軒、溝1条、土坑3基が検出された。これらの遺構は、調査区東側の台地斜面と、調査区中央の台地先端から台地斜面にかけて分布し、重複している遺構はほとんどなかった。歴史時代の遺構は、竪穴住居45軒、土坑3基が検出された。これらの遺構は、調査区全体にわたり、台地先端から台地斜面にかけて分布していた。重複している遺構が若干見受けられる。明確な時期判定の材料に欠けるが、おそらく歴史時代に属すると思われる掘立柱建物6棟と柵列2基が、調査区中央から検出された。

佐倉第三工業団地内の発掘調査にかかわる土層層序は、タルカ作遺跡の報告書であらまし紹介されている。南広遺跡全体の土層層序について新たに特記すべき点はみあたらない。

第3節　調査にいたる経緯と経過

佐倉第三工業団地は千葉県北部に位置する。この工業団地は「千葉新産業三角構想」の一貫として計画され、東京と成田を結ぶ首都圏工業団地の一つとして整備され、先端産業を中心とする生産、流通拠点という性格が強い。広さは 114.4haにおよぶ。1969年に用地の買収が開始され、1981年に工事着手、1984年に分譲開始、1988年に完売となった。

工業団地予定地内の埋蔵文化財の発掘調査が計画され始めたのは、1972年のことである。その後1975年からまず星谷津遺跡の発掘調査が開始された。途中一時中断があったものの、以来10年にわたり延べ352,500㎡に広がる埋蔵文化財調査が実施された。

南広遺跡は工業団地内の北西部に位置し、調査は1984年度と1985年度に行われた。遺跡全体の調査面積は16,000㎡に達した。1984年10月1日から11月29日までに確認調査をし、1985年3月31日までの間、台地南側の10,300㎡の本調査を行って、竪穴住居53軒、掘立柱建物3棟、土坑8基、近世遺構群、先土器時代石器群3か所を検出した。1985年11月21日から1986年1月31日までの間、前年度調査区の南東部、 5,700㎡についての本調査を実施し、竪穴住居11軒、掘立柱建物1棟、土坑1基を検出した。

南広遺跡の発掘に伴う整理作業は1989年度から始まり、遺物の水洗、注記、復元を行った。1991年度に遺物の実測、写真撮影、図版組、原稿執筆等の作業を行った。

Y＝37.200
Y＝37.400
Y＝37.600
Y＝37.800
X＝－35.600
X＝－35.800
X＝－36.000
X＝－36.200
X＝－36.400
X＝－36.600
六拾部遺跡
南広遺跡
栗野Ⅱ遺跡
栗野Ⅰ遺跡
腰巻遺跡
タルカ作遺跡
大作遺跡
立山遺跡
池向遺跡
向原遺跡
0
250m

第３図　遺跡周辺の地形

第4節　調査および整理方法

佐倉第三工業団地予定地内の遺跡の発掘は、1979年度に50×50mの方眼大グリッドを設定し、それを基準に調査を行ってきた。この大グリッドには、国土座標に基づく南北に走るX軸に1から35までの数字、東西に走るY軸にイからケまでの片仮名を付した。南広遺跡は工業団地予定地内北西部に位置し、X軸では6～9、Y軸ではル～レの範囲に属している(第4図)。この大グリッド内を10×10mの中グリッドで分け、さらに中グリッドを2×2mの小グリッドに分割した。それぞれの大グリッドと中グリッドには、25の下位グリッドが含まれる。この方眼グリッドを基準にして、遺構の測量、地形測量、遺構配置図の作成等を行った。

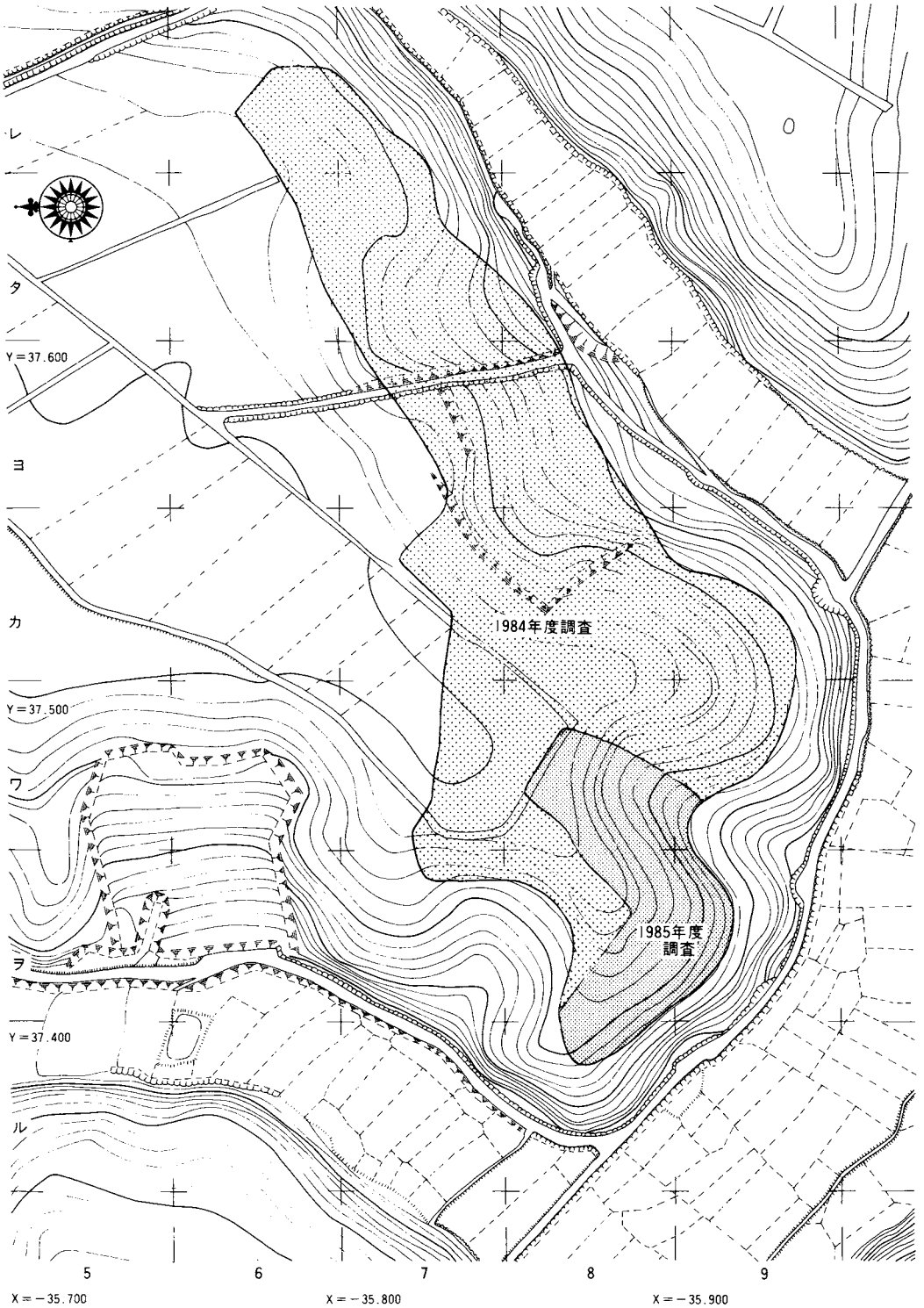
上層の確認調査で、2×4mのグリッドを調査地域全体に 200か所設定して、遺跡内の遺構分布状況を把握した。確認調査の成果にもとづいて、16,000㎡の範囲を本調査範囲とし、表土層を機械で除去した。縄文時代までの遺構を調査した後、先土器時代の調査を行った。先土器時代の調査では、2×2mの試掘グリッドを調査地域全体に 160個設定し、石器の出土したグリッドの周辺を拡張して調査した（第5図)。

遺構番号は遺構の種類に関係なく通し番号となっており、調査時に001から検出順に付け、整理作業においてもそのまま使用した。ただし、近世遺構群 019は、調査の時点で関連する遺構すべてについて同じ遺構番号で調査を行っていたが、整理作業の過程で、明らかに古墳時代の遺構と考えられたものについてだけ、新たに遺構番号を付けることにした。先土器時代の調査については、4か所から石器群および炭化物が検出され、各検出地点にAからCおよびEの名称を付けた。

整理作業にあたり、各遺構のデータおよび各種の遺物データについては、パソコンを使用してデータベースを構築し、今回は一覧表の形で提示することができた。データベースを作る際には、南広遺跡だけでなく、佐倉第三工業団地内の遺跡群全体を把握できるように工夫した。また、遺跡群周辺の地形データと組み合わせ、地理的情報と遺跡との関連性を探るよう努力し、その作業は現在も継続中である。土器の実測は空間座標測定装置（ベクトロン）を使用して行った。その方法については、すでに中永谷遺跡の報告書中で詳しく述べられているので、それを参照していただきたい。

遺構の平面規模は確認面で計測したものであり、遺構の中央で交わるように設定した軸の長さで表わした。竪穴住居の床面積は、壁の下場で計測し、竈や貯蔵穴などは考慮しなかった。方位はすべて西回りで計測し、竈や貯蔵穴の位置、周溝の巡り具合などについては数値化して表記した。竪穴住居の計測値は計測表にまとめた（第4表)。

遺構図の縮尺は竪穴住居・先土器時代出土状況1/80、竈1/40、土坑1/50、近世遺構群 1/150で、土層断面図・エレベーション図も同じ縮尺である。溝は平面図 1/200で、土層断面図とエ



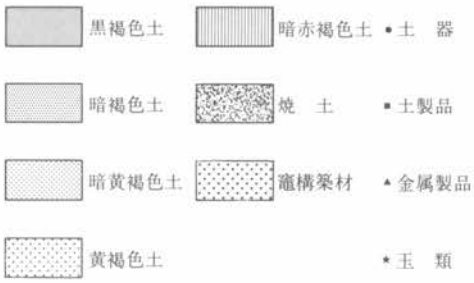
第4図　遺跡調査範囲とグリッドの呼び方（1/2,000）

第５図　先土器確認グリッドおよび調査区

レベーション図 1/100である。

土層断面は黒褐色土・暗褐色土・暗黄褐色土（ローム土混入）・黄褐色土（ローム土主体）・暗赤褐色土（焼土混入）・焼土・竈構築材の7種類に整理し、これをスクリーントーンで区別した(第6図)。このほかの混入物については本文中で説明を加えた。また、遺構の遺物出土状況図中の遺物の種類別の表記は第6図で行ったが、先土器時代の出土状況は別に挿図中に凡例を設けた。

遺物の実測図の縮尺は土器類 1/4、玉類・金属製品 1/2、縄文土器拓影図 1/3、石器類は基本的には 2/3としたが、一部 1/2としたものがあり、それらについては挿図中に明記した。土器は土器観察表、玉類は計測表を作成した（第5～8表)。なお、挿図番号は遺物の種類に関係なく遺構ごとに通し番号とし、出土状況中の番号、図版番号と一致させた。



第6図　凡　例

主要参考文献

『土地分類基本調査　佐倉』　千葉県企画部企画課　1981

『千葉県佐倉市埋蔵文化財分布地図』－佐倉市遺跡詳細分布調査報告書－　佐倉市教育委員会　1984

『平賀』平賀遺跡群発掘調査報告書　平賀遺跡群発掘調査会　1980

『岩富漆谷津・太田宿』　佐倉市教育委員会　1983

『佐倉市タルカ作遺跡』　㈶千葉県文化財センター　1985

『千葉県佐倉市　高崎新山遺跡発掘調査報告書』　㈶印旛郡市文化財センター　1987

『千原台ニュータウン　Ⅳ　中永谷遺跡』　㈶千葉県文化財センター　1991

『佐倉市腰巻遺跡』　㈶千葉県文化財センター　1987

『六拾部遺跡発掘調査報告書』　佐倉市教育委員会　1986　なお、同一台地上の隣接地域について、㈶千葉県文化財センターで現在整理中。

第７図　遺構配置図

第２章　検出された遺構と遺物

第１節　古墳時代

１．竪穴住居

遺構　古墳時代の遺構として、竪穴住居22軒、溝１条、土坑３基が検出された。これらの遺構は、調査区東側の台地斜面と、調査区中央の台地先端から台地斜面にかけて分布し、重複している遺構はほとんどなかった。

竪穴住居001（第８図、図版３）

位置　レ６グリッド。調査区東側北端に位置し、台地縁辺に近い。北西コーナーが調査区域外となり、発掘できなかった。

形状・規模　一辺５ｍ強の正方形を示す。南壁に竈があり、主軸は南を向いている。

埋土　最下層に暗褐色土層が堆積し、次に黒褐色土層、ローム粒子混じりの暗黄褐色土層が堆積し、最上層に暗褐色土層が堆積する。

床面　ローム土、ロームブロックの混合土による貼り床である。住居中央は硬いが、壁周辺は軟らかい。

柱穴・貯蔵穴　主柱穴は４本あった。貯蔵穴が南東コーナーに設けられている。

竈　竈は南壁の東側にあり、遺存状態は良好であった。天井部と袖部に竈構築材が残る。中央に支脚が残存し、周囲には焼土混じりの暗赤褐色土が堆積している。

遺物出土状態　少数の遺物が床面から出土している。

竪穴住居002（第９図）

位置　レ６グリッド。調査区東側の台地縁辺に位置する。大半を溝005によって破壊されている。

形状・規模　大半が破壊されているので、形状・規模は不明である。

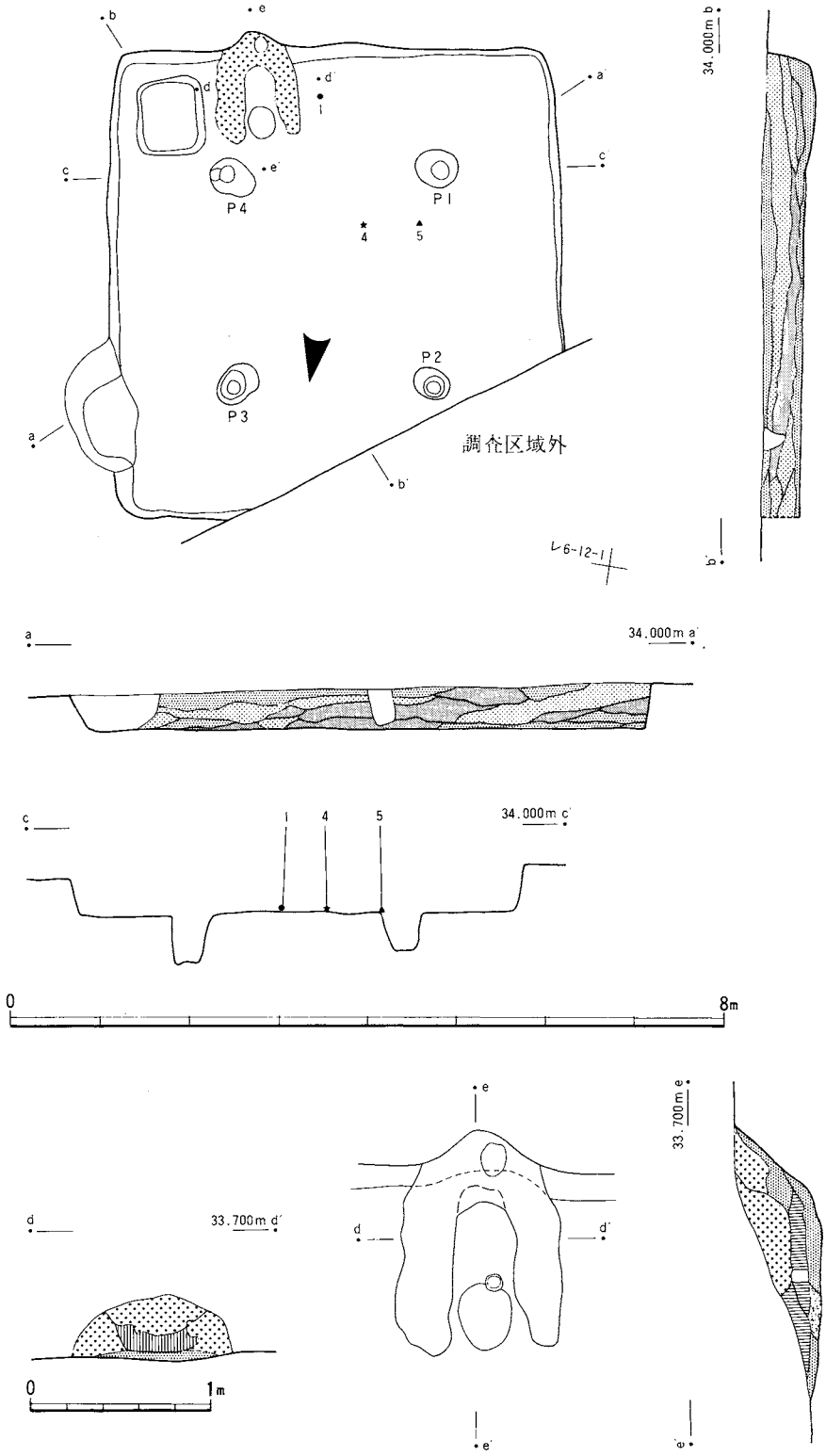
埋土　暗褐色土層とローム粒子混じりの暗黄褐色土層が堆積している。

柱穴・貯蔵穴　ピットが竪穴住居の南側から２本、溝005から６本検出された。溝から検出されたピットは、確実にこの竪穴住居に伴うピットかどうか不明である。

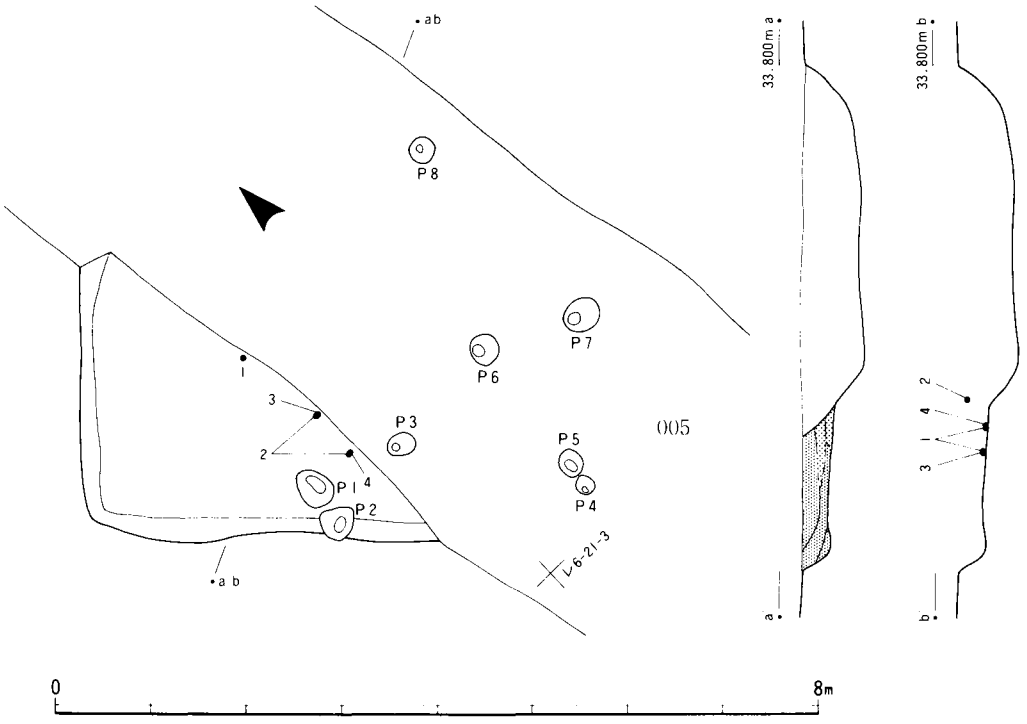
遺物出土状態　少数の遺物が床面から出土している。

竪穴住居008B（第10図、図版３）

位置　タ６グリッド。調査区東側の台地縁辺に位置する。南部を竪穴住居008Aによって破壊


b
e
d
d'
1
a
c
e'
P4
P1
4
5
P2
P3
a'
c'
調査区域外
b'
34.000m b
b'
6-12-1
a
34.000m a'
c
1
4
5
34.000m c'
0
8m
e
33.700m e
d
33.700m d'
d'
0
1m
e'

第8図　竪穴住居001



第９図　竪穴住居002

されている。また、西壁も攪乱を受けている。

形状・規模　一辺５m弱のほぼ正方形を示す。主軸は北西を向いている。

埋土　主に暗褐色土層と黒褐色土層が堆積し、壁ぎわにローム土混じりの暗黄褐色土層が堆積している。

床面　全体的に硬質で、よく踏み固められている。

柱穴・貯蔵穴　主柱穴が４本あるほかに、小さい柱穴が１本検出された。貯蔵穴が竈の左側に設けられている。

竈　北西壁中央に位置する。煙道の一部が破壊されているが、遺存状態は良好であった。袖部と煙道部付近に竈構築材が残る。中央に支脚があり、その前面に焼土が残存している。

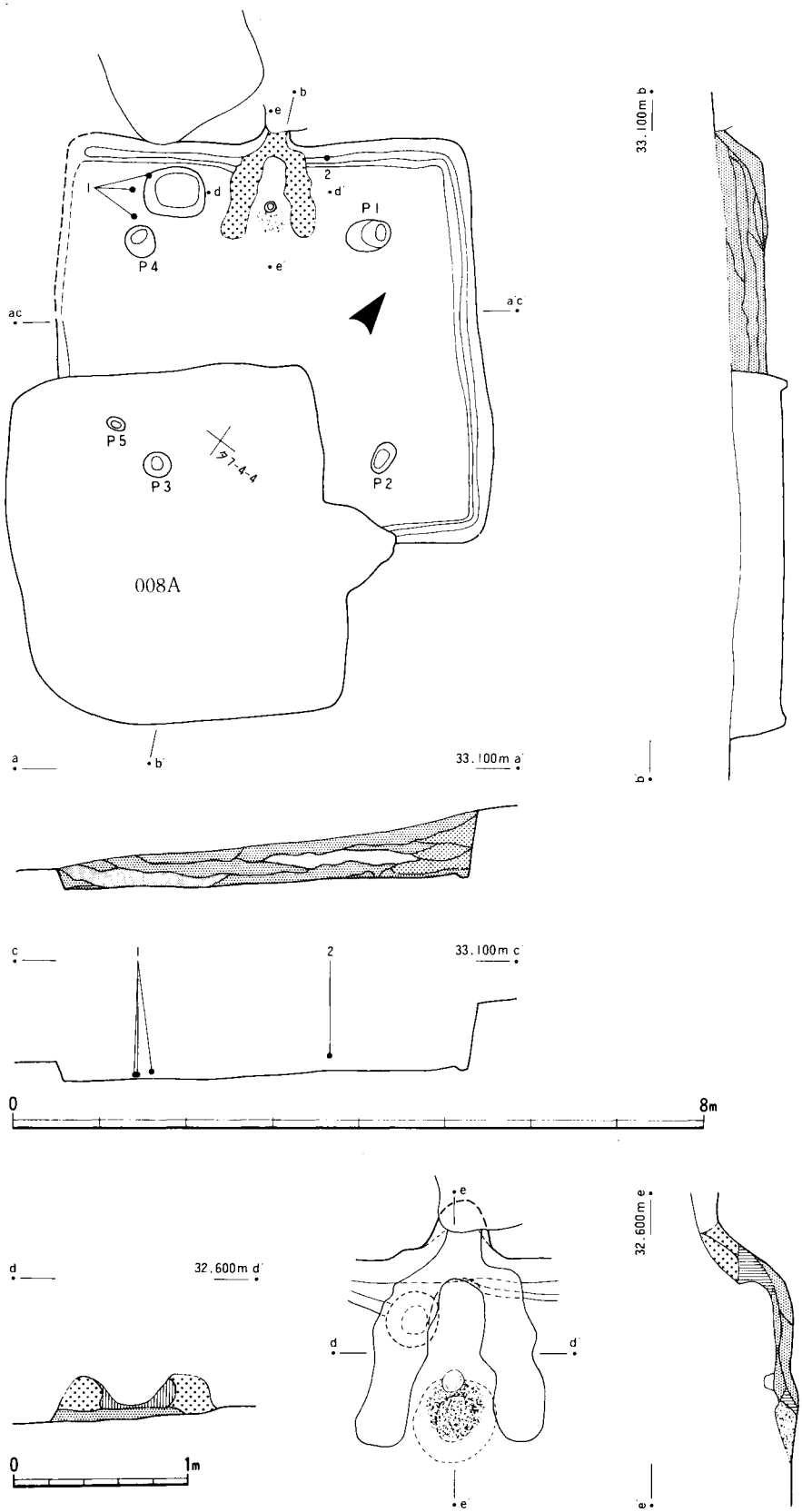
壁溝　残存する壁のほとんどに壁溝が巡っている。

遺物出土状態　住居内全体から多数の土器片が散在して出土している。しかし、図化できた土器は少なかった。

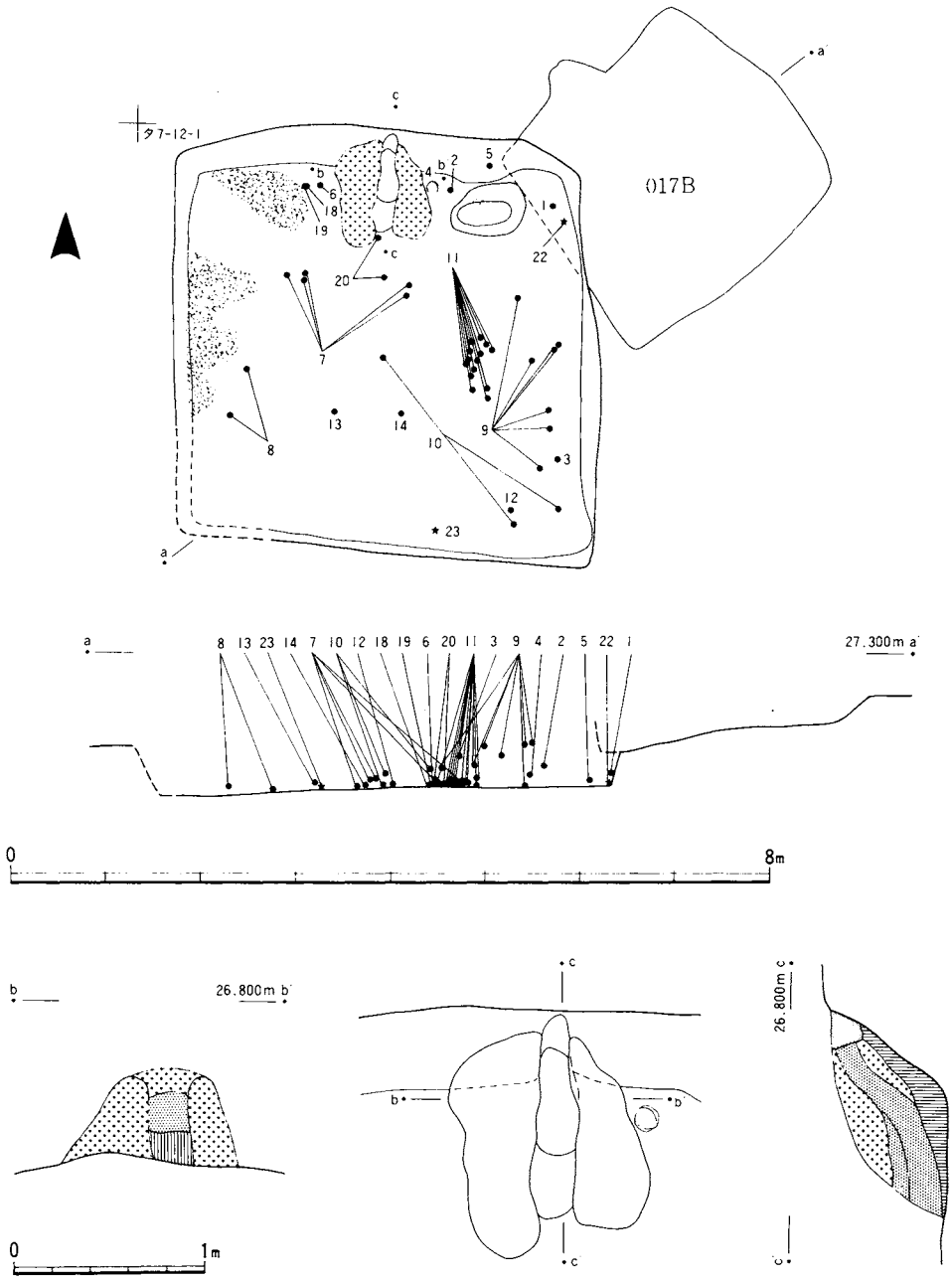
竪穴住居017A（第11図、図版９）

位置　タ７グリッド。調査区東側の台地斜面に位置する。北東コーナーを竪穴住居017Bによって破壊されている。また、南西コーナーも攪乱を受けている。

形状・規模　一辺約4.5mの正方形を示す。主軸は北を向いている。



第10図　竪穴住居008B



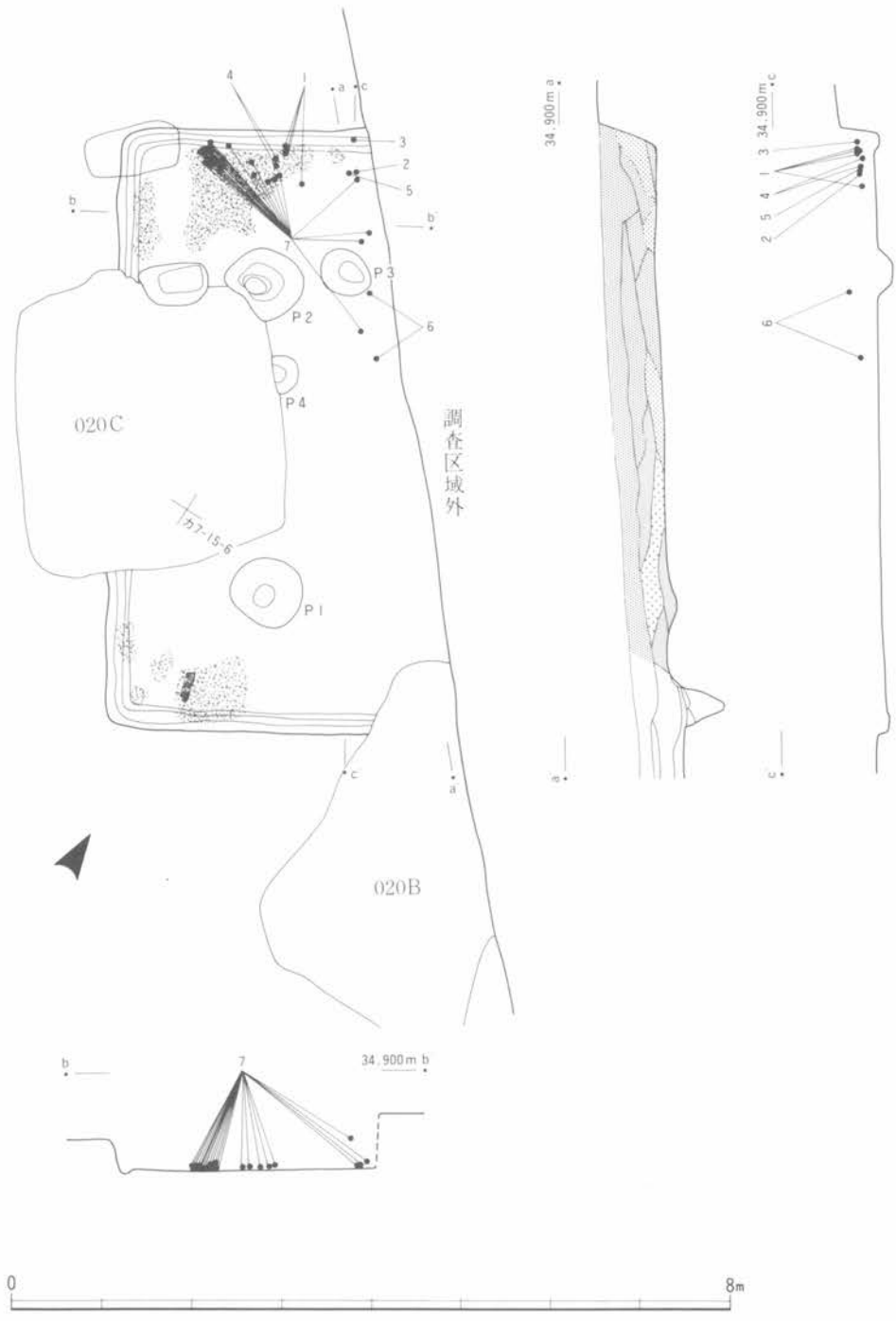
第11図　竪穴住居017A

埋土　主に暗褐色土が堆積している。焼土が住居内北西部分に分布している。

柱穴・貯蔵穴　柱穴は検出されなかった。貯蔵穴が竈の右側に設けられている。

竈　北壁中央に位置する。遺存状態は良好であった。天井部と袖部に竈構築材が残る。

遺物出土状態　住居内全体から土器片が散在し、竈周辺から杯が多く出土している。



第12図　竪穴住居020D

竪穴住居020D（第12図、図版10）

位置　カ7グリッド。調査区中央、北側の境界付近から竪穴住居が4軒重複して見つかった。

この竪穴住居はそのうちの１軒である。北東側半分は調査区外にあり、発掘できなかった。

形状・規模　西壁の長さは6.7mある。おそらく形状は一辺約6.5mの正方形であろう。

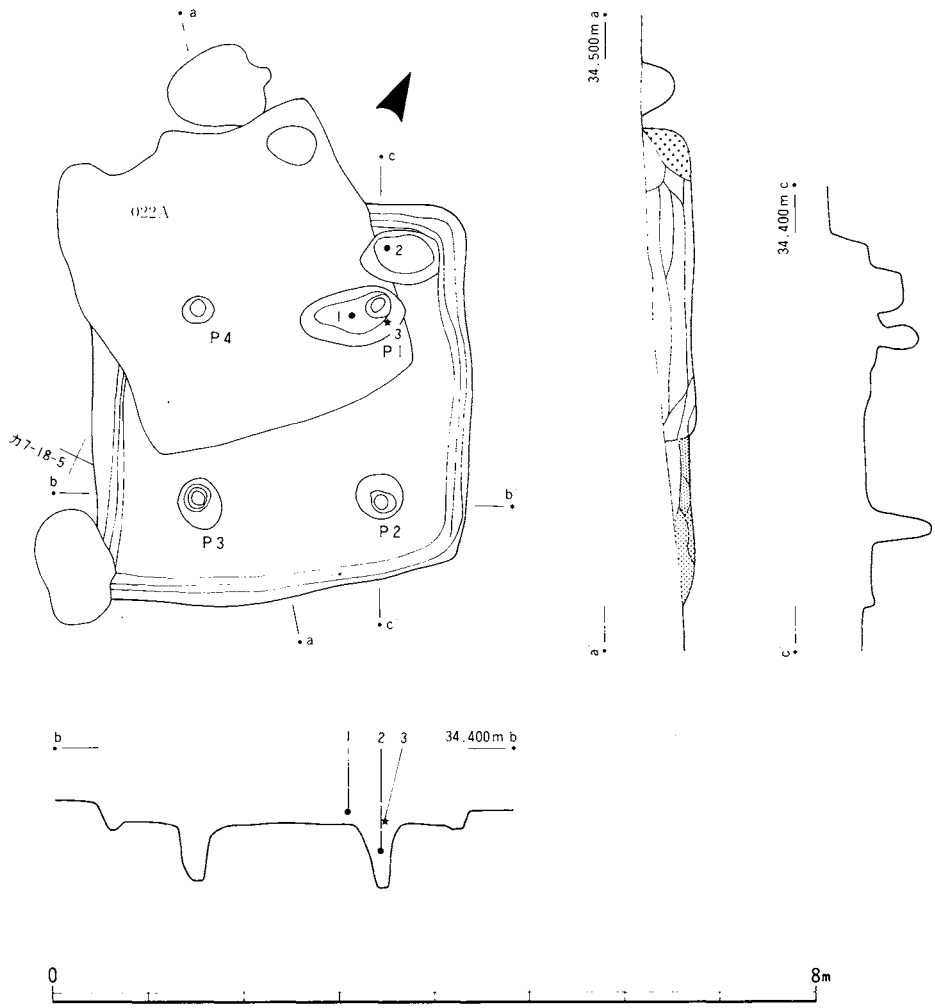
埋土　主に暗褐色土層が堆積し、下層で黒褐色土層とローム土混じりの暗黄褐色土層が堆積している。焼土が壁ぎわに分布し、少量の炭化材も出土している。

床面　比較的軟弱で、緩やかな凹凸がある。

柱穴・貯蔵穴　柱穴は主柱穴２本、支柱穴２本が検出された。貯蔵穴が主柱穴Ｐ２の左側から検出された。

竈　調査区外に存在すると思われる。

壁溝　検出された部分全体に巡っている。



第13図　竪穴住居022B

遺物出土状態　床面からやや浮いた状態で、壁ぎわを中心に土器片が出土している。

竪穴住居022B（第13図、図版11）

位置　カ７グリッド。調査区中央北側、台地縁辺に位置する。北西部を竪穴住居022Aによって破壊されている。

形状・規模　一辺４ｍ弱の正方形を示す。主軸は北西を向く。

埋土　主に暗褐色土層と黒褐色土層が堆積し、壁ぎわにローム土混じりの暗黄褐色土層が堆積している。

床面　全体的に軟質で掘り込みが浅い。凹凸が著しく、平坦ではない。

柱穴・貯蔵穴　主柱穴が４本検出された。

竈　竪穴住居022Aによって破壊された。

壁溝　全周する。

遺物出土状態　きわめて少量の遺物が床面付近から出土している。

竪穴住居025（第14・15図、図版４）

位置　ワ７グリッド。調査区中央、台地先端部に位置する。掘立柱建物102と重複している。

形状・規模　一辺約7.5mの大形の正方形を示す。主軸は北西を向く。南東壁の中央部分が外側に張り出し、長径３ｍの楕円状の溝が巡っている。壁外側の張り出した部分にピットが３本掘られている。

埋土　主に暗褐色土層が堆積し、一部で黒褐色土層が堆積している。

床面　比較的硬い。

柱穴・貯蔵穴　主柱穴が４本ある。南東壁張り出し部にあるＰ５は貯蔵穴であろう。Ｐ６、Ｐ７はそれに伴う支柱穴である。

竈　北壁中央に位置する。遺存状態は良好であるが、煙道の一部が破壊されている。天井部と袖部に竈構築材が残っている。

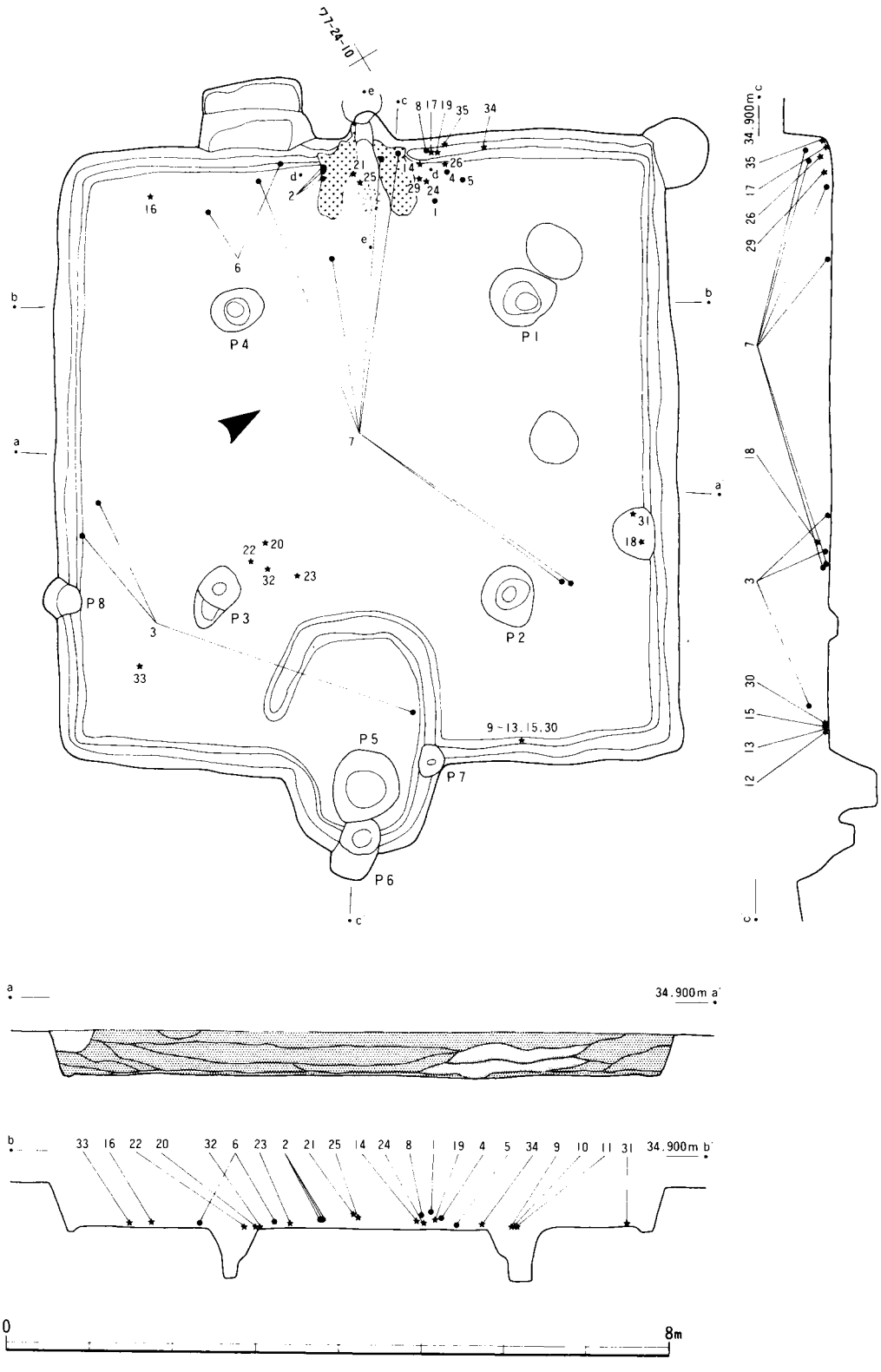
壁溝　全周する。南東壁張り出し部にも巡り、竪穴住居内部に延びる溝とあわせると長径３ｍの楕円形に巡っている。

遺物出土状態　広い住居内全体から少量の遺物がやや散漫に出土している。竈周辺と柱穴Ｐ３の周辺の床面近くから、土製の勾玉、臼玉が比較的多く出土している。

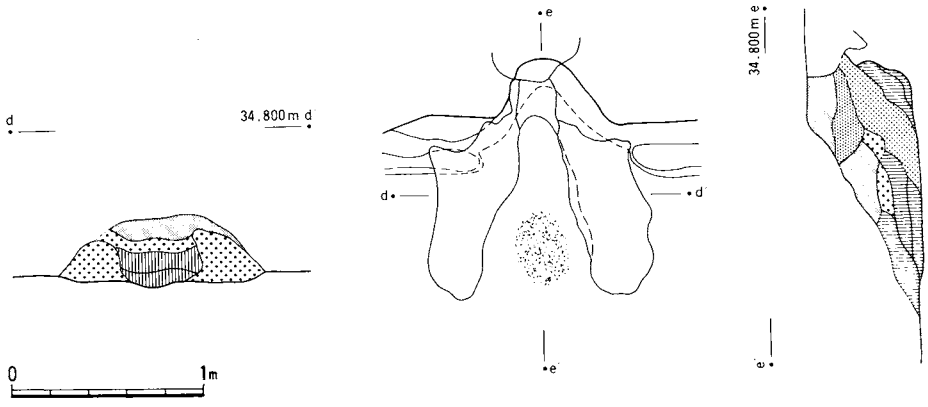
竪穴住居027（第16図、図版12）

位置　ワ７グリッド。調査区中央西側、台地先端部に位置する。

形状・規模　一辺４ｍ強の正方形を示す。主軸は北西を向く。



第14図　竪穴住居025



第15図　竪穴住居025竈

埋土　上層に暗褐色土層が堆積し、下層に黒褐色土層が堆積している。壁ぎわにローム土混じりの暗黄褐色土層が堆積している。全体的に埋め戻されたような感じを受ける堆積状態であった。

床面　それほど堅くないが、南側には堅い部分もある。

柱穴・貯蔵穴　主柱穴が4本ある。P5は出入口用ピットである。貯蔵穴が南側のコーナーに設けられている。その周囲に2本のピットがある。

竈　北西壁中央に位置する。遺存状態は良好であった。袖部に竈構築材が残存している。火床に焼土が少量残存している。

壁溝　全周する。

遺物出土状態　少量の遺物が住居の中央付近から出土している。貯蔵穴から甕が1個出土している。土製装身具がP1と北東壁との間から集中して出土している。

竪穴住居030（第17図）

位置　オ7グリッド。調査区西側の台地縁辺に位置する。北半分が調査区外となり、発掘できなかった。

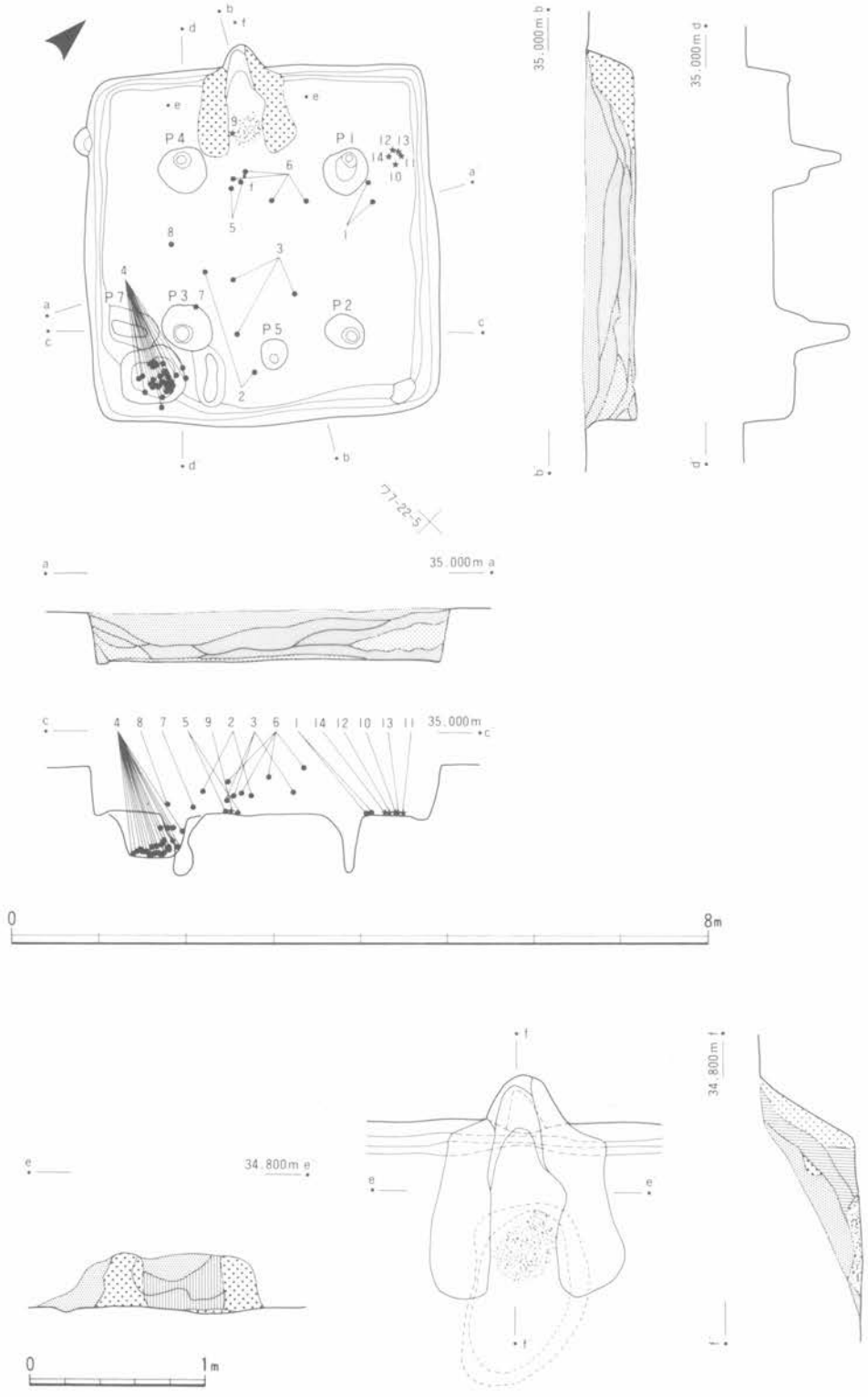
埋土　上層に暗褐色土層が堆積し、下層に黒褐色土層が堆積している。壁ぎわにローム土混じりの暗黄褐色土層が堆積している。

床面　ローム土、ロームブロックからなるが、それほど硬くはない。

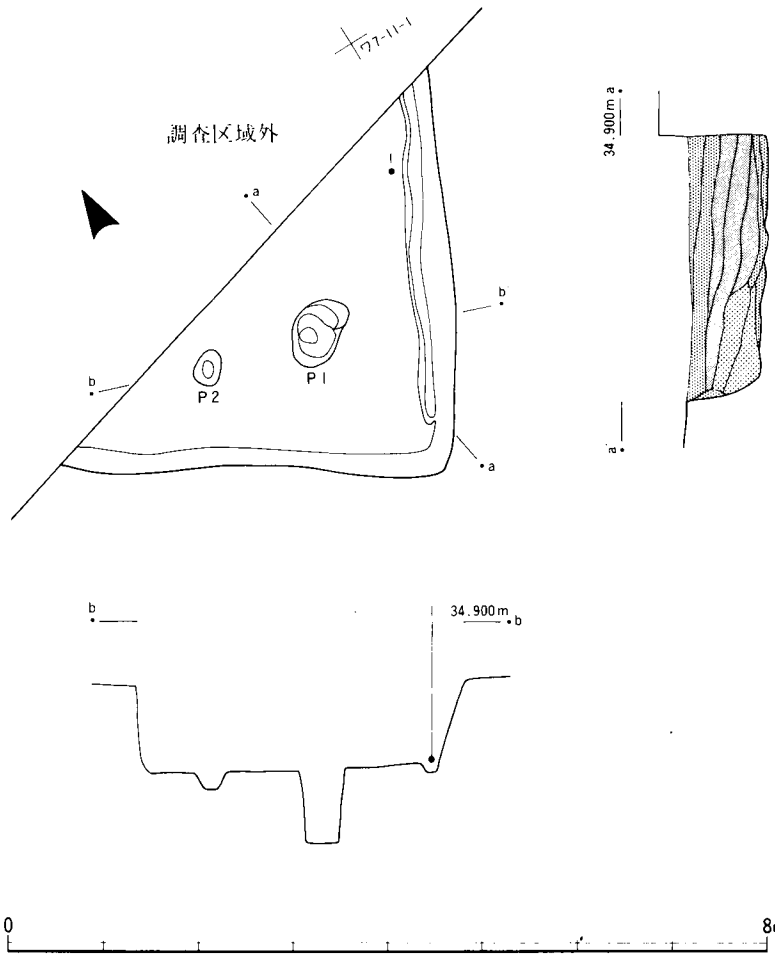
形状・規模　発掘できた部分の2辺の壁の長さは、それぞれ4m強であった。

柱穴・貯蔵穴　主柱穴1本と、出入口用の支柱穴1本が検出された。

竈　未調査区に存在すると思われる。



第16図　竪穴住居027



第17図　竪穴住居030

壁溝　発掘された南東壁に溝が巡る。

遺物出土状態　遺物はほとんど出土していない。

竪穴住居032（第18図、図版４）

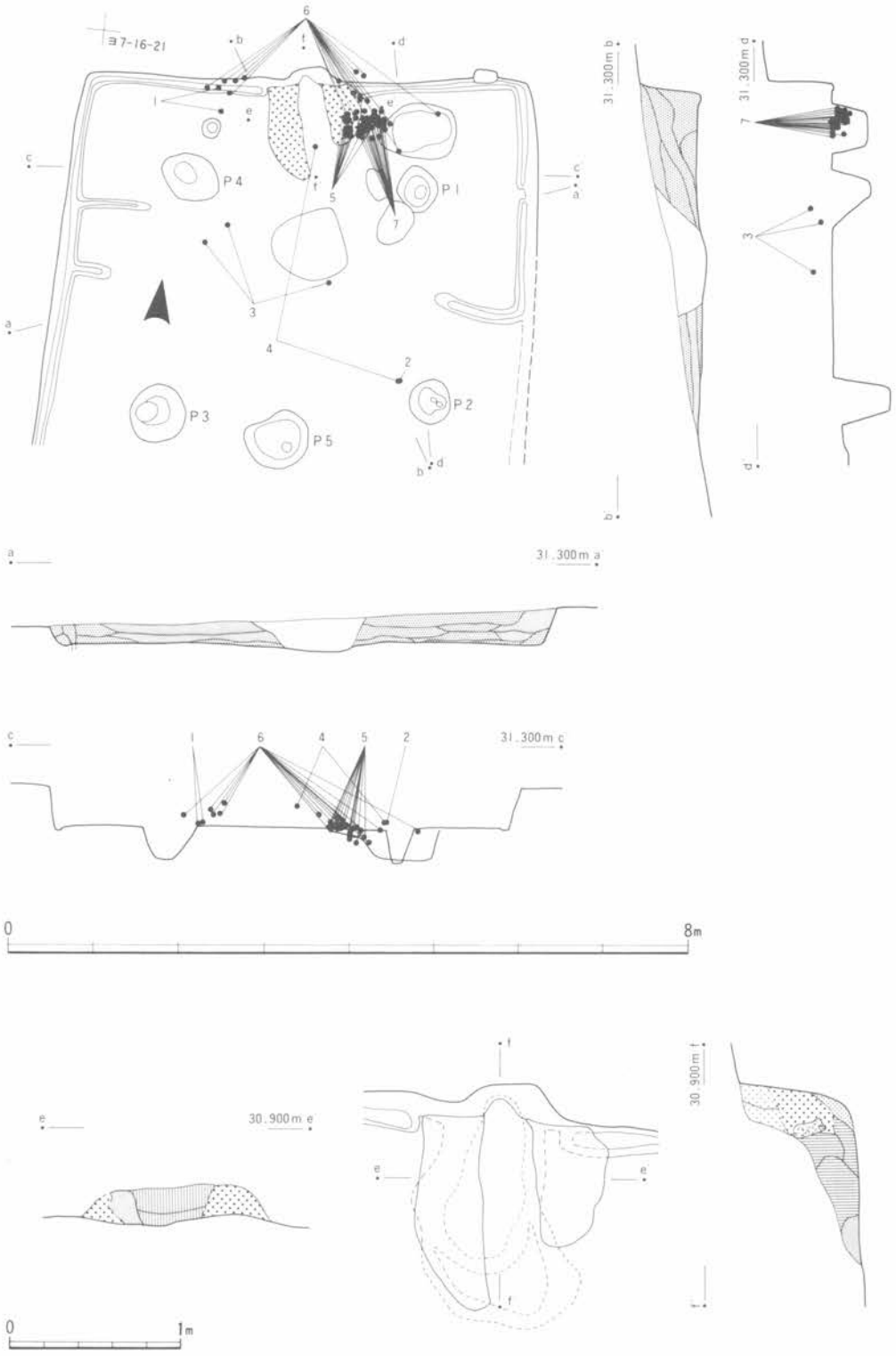
位置　ヨ７グリッド。調査区中央、台地斜面に位置する。斜面に位置するため南壁部分および東南部分が削平されてしまった。

形状・規模　北壁は5.6mある。本来、一辺5.6mの正方形を示していたと思われる。主軸は北を向く。

埋土　主に暗褐色土層が堆積し、一部に黒褐色土層が堆積している。

床面　比較的硬い。

柱穴・貯蔵穴　主柱穴４本と出入口用の支柱穴１本が検出された。貯蔵穴が竈の東側に設けられている。



第18図　竪穴住居032

竈　北壁中央に位置する。遺存状態は良好であった。天井部と袖部に竈構築材が残っている。

壁溝　残存する壁全体に巡る。間仕切の溝が3本はしる。

遺物出土状態　竈周辺から遺物がやや集中して出土している。住居全体に鉄滓が散在している。特に北壁側の埋土中に鉄滓が多く出土している。

竪穴住居035B（第19図、図版14・15）

位置　ワ8グリッド。調査区中央、台地先端に位置する。北東コーナーで竪穴住居035Aと重複している。

形状・規模　一辺6mの正方形を示す。主軸は南西を向く。

埋土　上層と下層に暗褐色土層が堆積し、中間に黒褐色土層、ローム粒子混じりの暗黄褐色土層が堆積している。

床面　それほど硬くない。

柱穴・貯蔵穴　主柱穴4本と間仕切溝に伴う支柱穴1本が検出された。貯蔵穴は南側コーナーで検出された。

竈　南西壁の中央やや南よりにある。遺存状態は良好であった。天井部と袖部に竈構築材が残っている。焼けた火床が残存している。

壁溝　全周する。間仕切の溝が5本はしる。

遺物出土状態　住居全体から散漫な状態で遺物が出土している。貯蔵穴周辺から甑が複数出土している。

竪穴住居037D（第20図、図版4）

位置　カ8グリッド。調査区中央、台地先端に位置する。南西部を竪穴住居037Cによって破壊されている。

形状・規模　大型の住居で縦7.6m、横8.3mの、やや横長の長方形を示す。主軸は北西を向く。

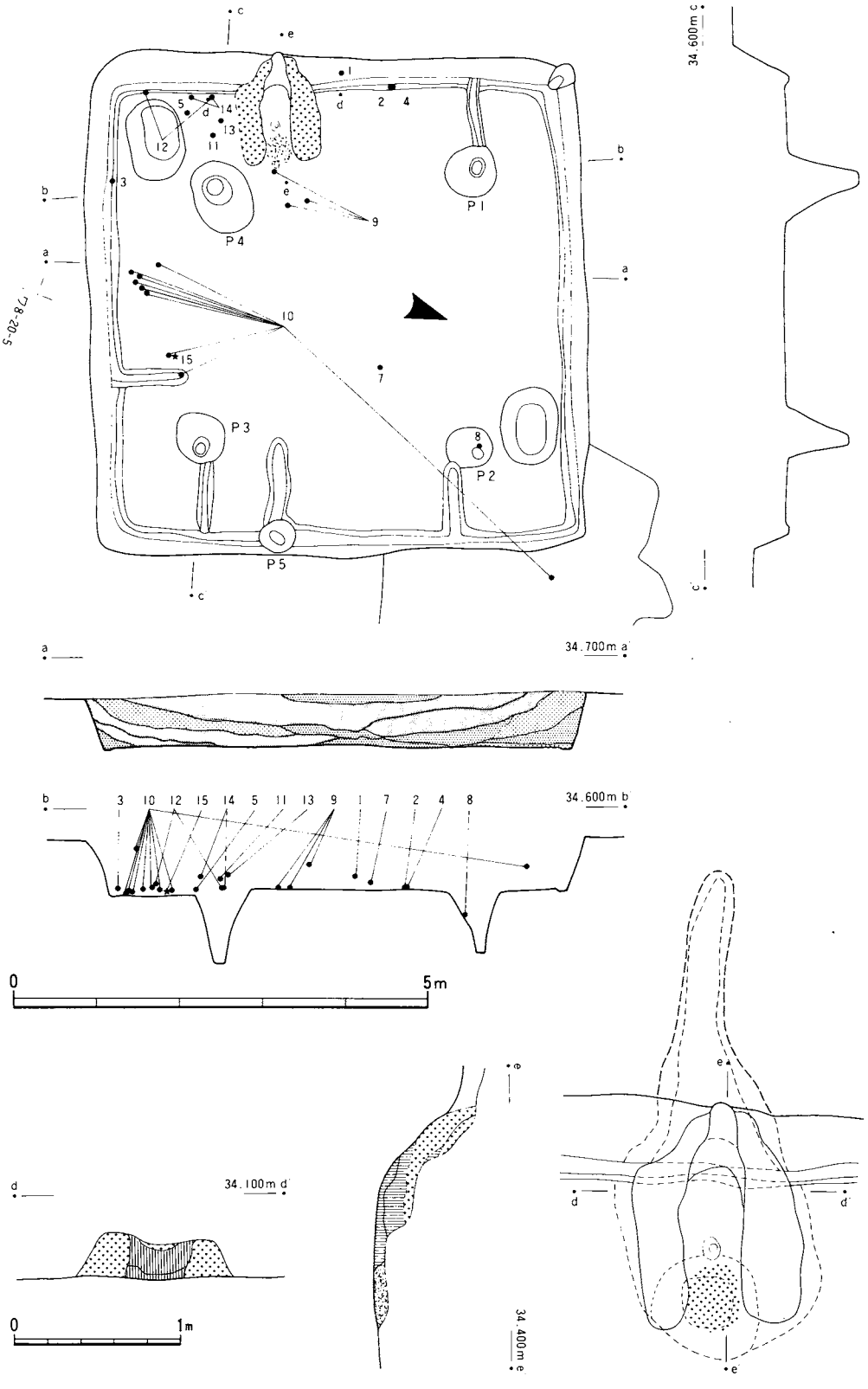
埋土　ローム土混じりの暗黄褐色土層が中間にあり、その上下に暗褐色土層と黒褐色土層が堆積している。自然的な堆積でなく、人為的な埋め戻しと思われる。

床面　やや軟質で、暗褐色土とローム土を混ぜたような床であった。ただし、竈前面と住居中央はよく踏み固められている。

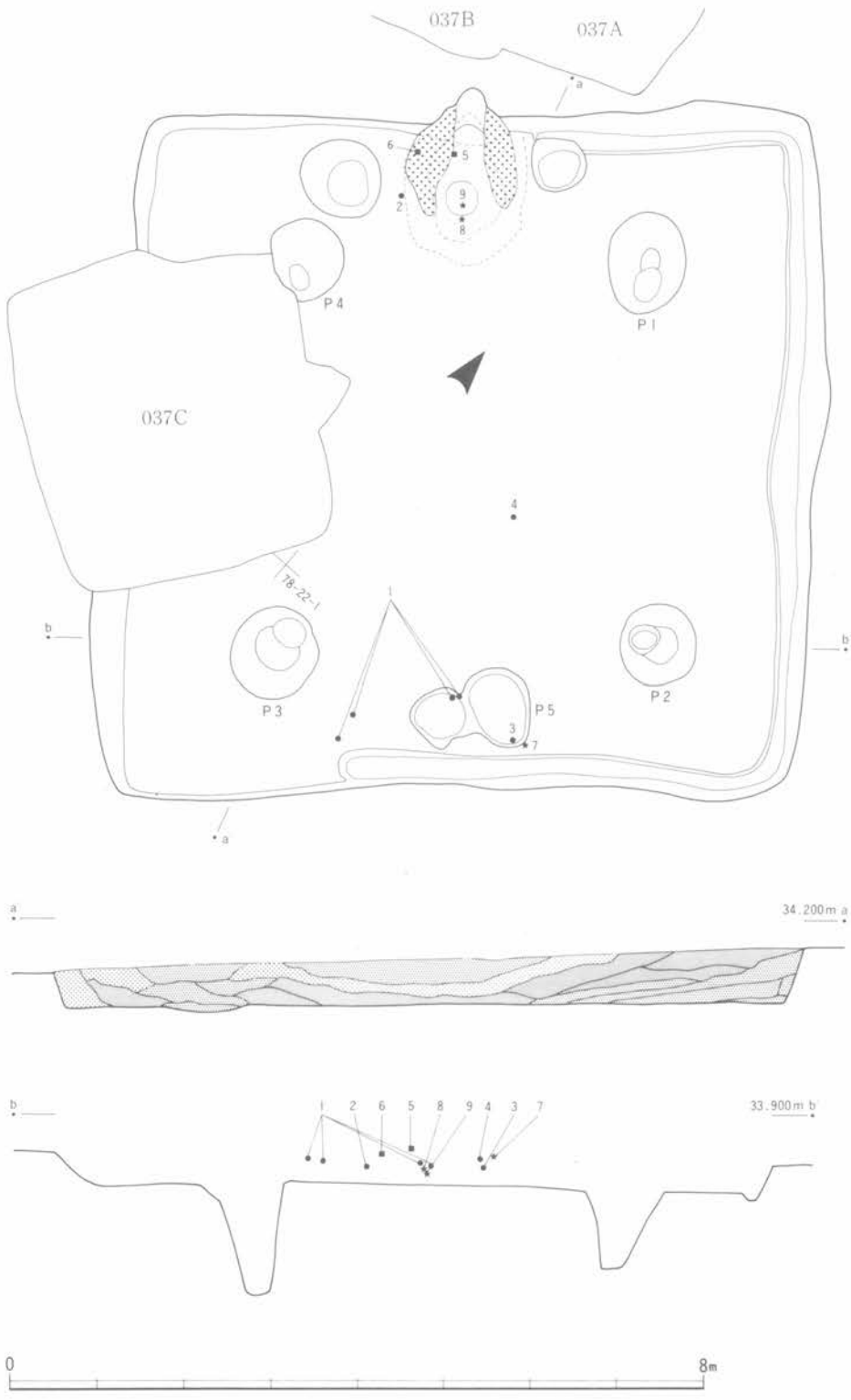
柱穴・貯蔵穴　主柱穴4本と出入口用の支柱穴1本が検出された。竈の両脇から貯蔵穴が2か所検出されたが、支柱穴の可能性もある。

竈　北西壁の中央にある。遺存状態は良好であった。袖部に竈構築材が残っている。

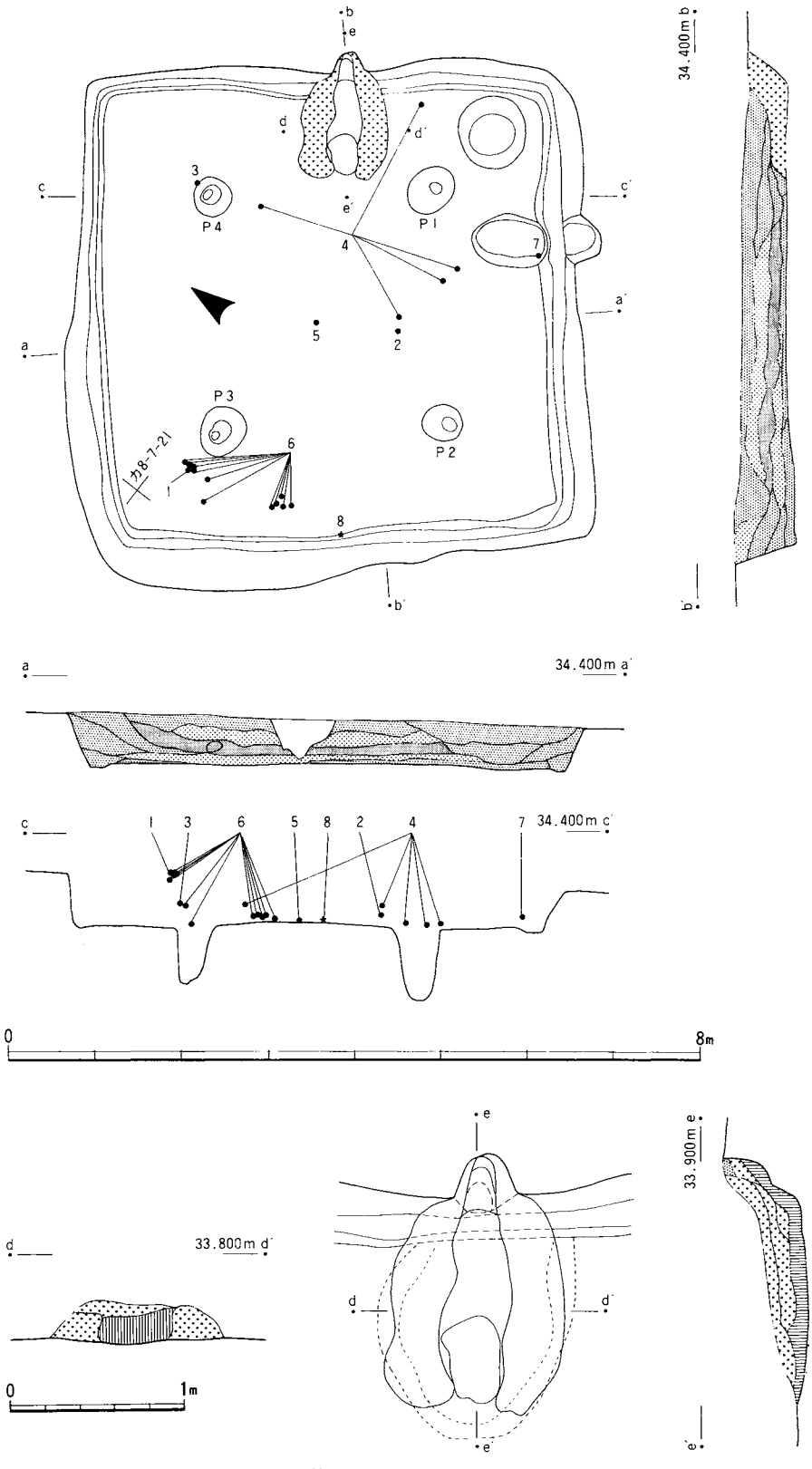
壁溝　北東部分の壁に巡る。



第19図　竪穴住居035B



第20図　竪穴住居037D



第21図　竪穴住居038

遺物出土状態　埋土中から比較的多く遺物が出土しているが、床面および床面付近からはほとんど出土していない。

竪穴住居038（第21図、図版５）

位置　カ８グリッド。調査区中央、台地先端に位置する。

形状・規模　一辺６ｍの正方形を示す。主軸は北東を向く。

埋土　最上層と最下層に暗褐色土層が堆積し、ローム粒子混じりの暗黄褐色土層と黒褐色土層が中間に堆積している。

床面　住居中央と竈前面は踏み固められている。

柱穴・貯蔵穴　主柱穴４本が検出された。東側コーナーから貯蔵穴が検出された。

竈　東北壁の中央にある。遺存状態は良好であった。天井部と袖部に竈構築材が残っている。

壁溝　全周する。

遺物出土状態　少数の遺物が散漫な状態で出土している。

竪穴住居039（第22図、図版５）

位置　カ８グリッド。調査区中央、台地先端に位置する。

形状・規模　一辺6.4mのほぼ正方形を示す。主軸は北西を向く。

埋土　暗褐色土層が主に堆積しているが、ローム土混じりの暗黄褐色土層と黒褐色土層が南西部の上層に堆積している。この堆積状態は自然的な流入堆積でなく、人為的な埋め戻しと思われる。木炭および焼土が住居内から検出された。

床面　住居中央と竈前面は踏み固められている。

柱穴・貯蔵穴　主柱穴４本が検出された。貯蔵穴は竈の左側に設けられている。

竈　北西壁の中央にある。遺存状態は良好であった。天井部と袖部に竈構築材が残っている。焼けた火床が残存している。

壁溝　竈の両脇を除いて全周する。

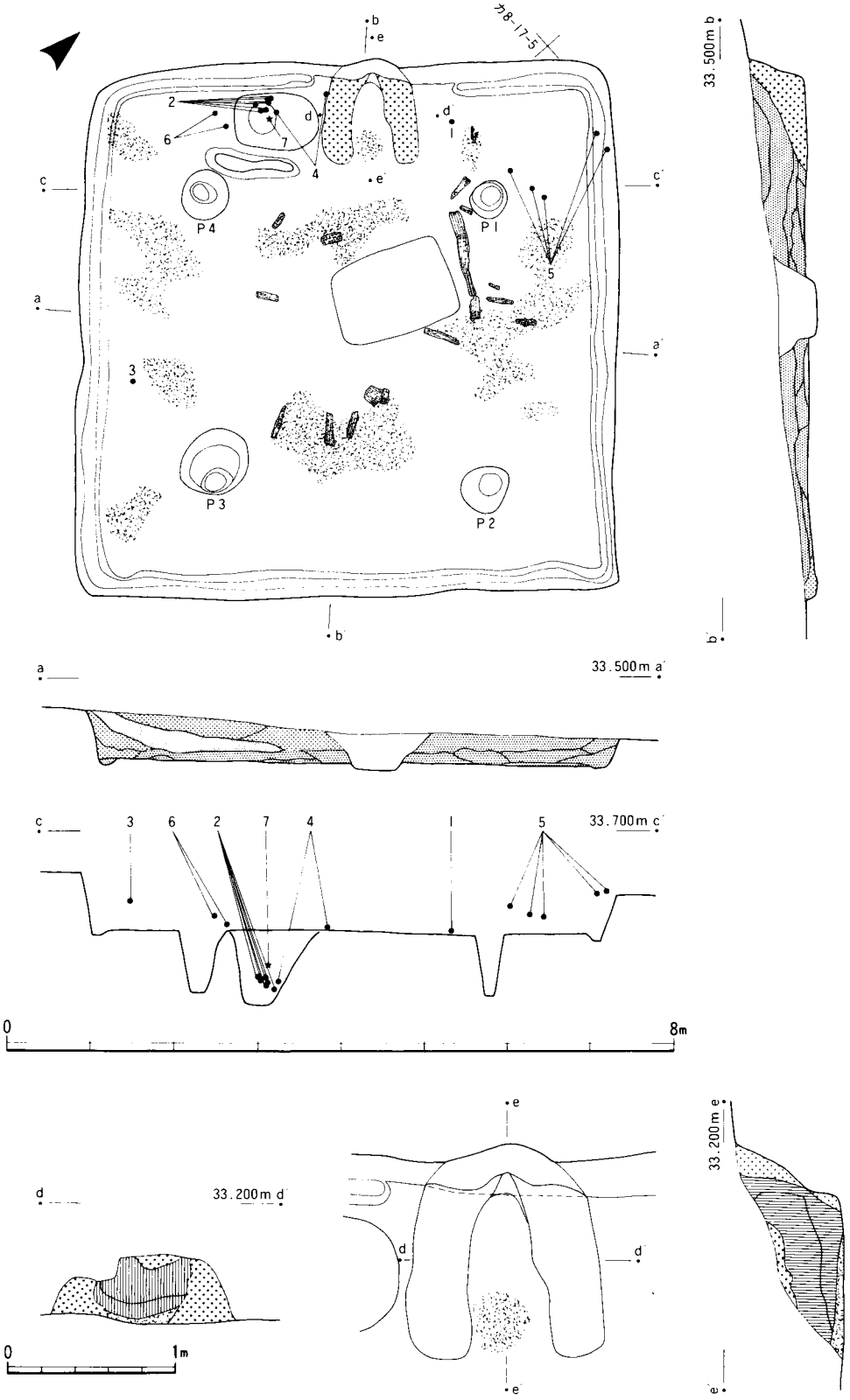
遺物出土状態　床面、貯蔵穴内、埋土中から少数の遺物が出土している。

竪穴住居040B（第23図、図版５）

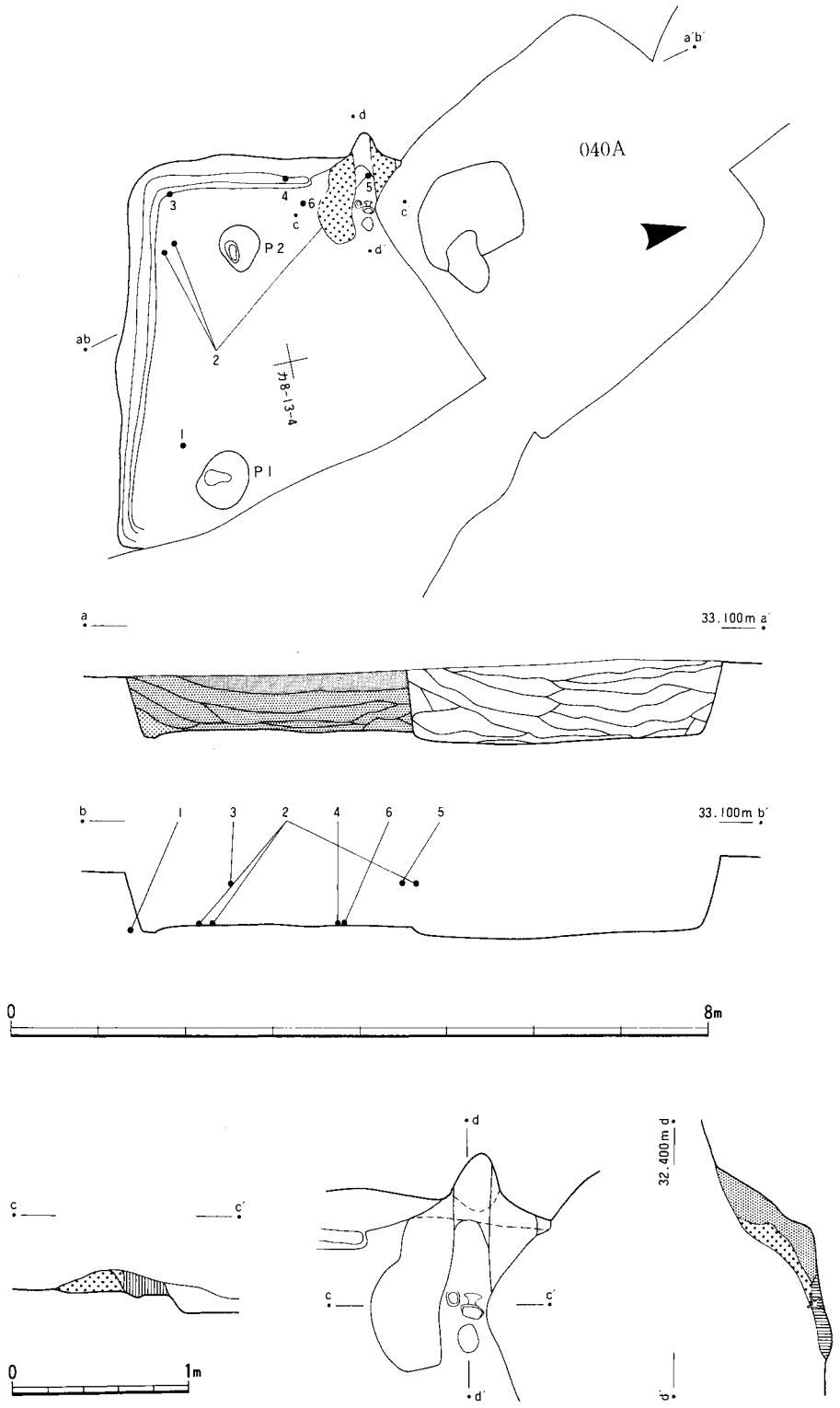
位置　カ８グリッド。調査区中央、台地縁辺に位置する。北西側コーナーは竪穴住居040Aによって破壊され、東半分は斜面のため削平された。

形状・規模　現存する南壁の長さは4.4mであった。おそらく一辺５ｍ弱の正方形を示していたであろう。主軸は西を向く。

埋土　最上層に黒褐色土層が堆積し、その下層に暗褐色土層が堆積している。壁ぎわの下部



第22図　竪穴住居039



第23図　竪穴住居040B

にローム土混じりの暗黄褐色土層が堆積する。

床面　ローム層主体で、きわめて硬い。

柱穴・貯蔵穴　主柱穴２本が検出された。

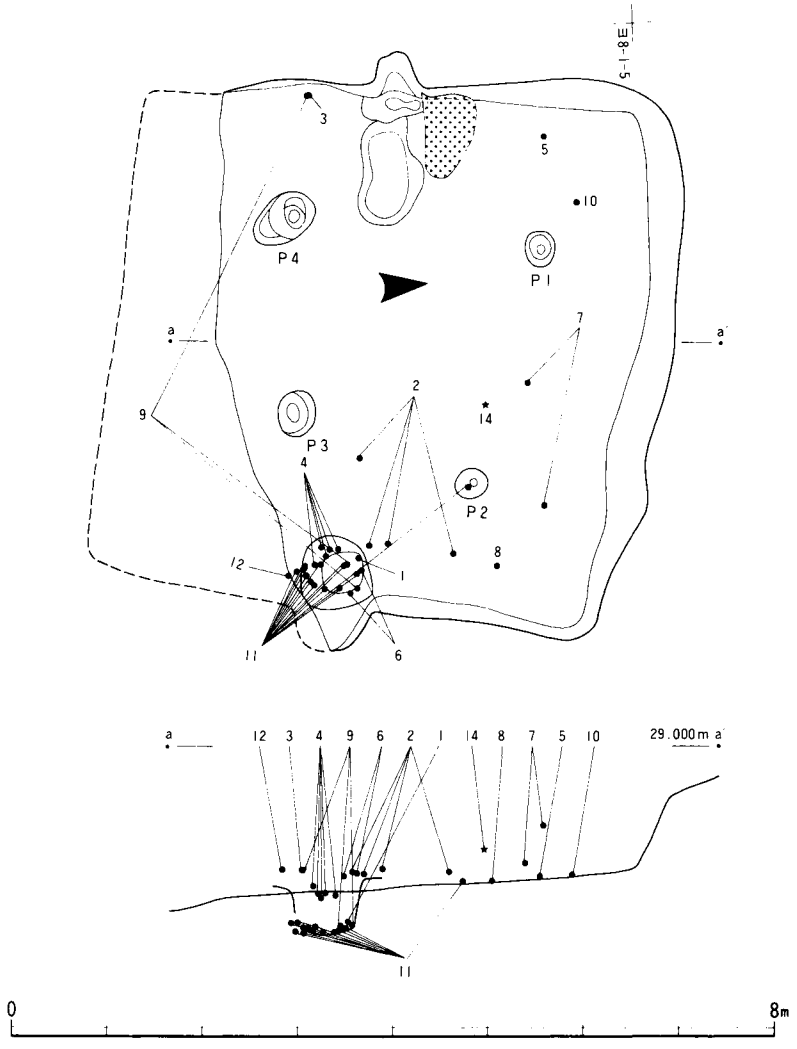
竈　西壁の中央にある。右袖が竪穴住居040Aによって破壊された。天井部と右袖部に竈構築材が残っている。

壁溝　竈の脇を除いて遺存する壁全体に巡っている。

遺物出土状態　遺物の出土量は少ない。壁周辺、竈、床面から主に出土している。

竪穴住居042（第24図、図版６）

位置　ヨ８グリッド。調査区中央、台地斜面に位置する。南壁は削平されてしまった。



第24図　竪穴住居042

形状・規模　残存する北壁の長さは5.8mであった。おそらく一辺６m弱の正方形を示していたであろう。東壁中央が張り出し、貯蔵穴が設けられている。主軸は西を向く。

埋土　黒褐色土層が堆積している。

床面　竈前面が硬かった。

柱穴・貯蔵穴　主柱穴４本が検出されたが、Ｐ３の位置はほかの３本の柱穴と比べて企画性に乏しい。貯蔵穴は東壁中央の張り出した部分に設けられている。

竈　西壁の中央にある。左袖が削平されてしまった。右袖の遺存状態も悪かった。

遺物出土状態　住居内全体から、床面および床面から少し浮いた状態で少量の遺物が出土している。貯蔵穴内から甕が出土している。

竪穴住居043（第25図）

位置　カ８グリッド。調査区中央、台地斜面に位置する。斜面であるため南側２辺の壁の検出が困難であった。

形状・規模　残存する西北壁の長さが約６mであった。おそらく一辺６m弱の正方形を示していたであろう。主軸は北東を向く。

埋土　暗褐色土層の下にローム土混じりの暗黄褐色土層が堆積する。

床面　竈前面が硬かった。

柱穴・貯蔵穴　主柱穴４本、出入口用支柱穴１本のほかに、性格不明のピットが数本検出された。貯蔵穴は西北壁付近でＰ４とＰ７に挟まれるような形で設けられている。

竈　北東壁の中央やや南側に位置する。遺存状態はさほど良好でなかった。

壁溝　残存する北西壁と北東壁に巡る。

遺物出土状態　少数の遺物が貯蔵穴および住居内全体から出土している。

竪穴住居044（第26図、図版６）

位置　ヨ８グリッド。調査区中央、台地斜面に位置する。

形状・規模　横4.5m、縦4.2mのやや横長の長方形を示す。主軸は北西を向く。

埋土　主に黒褐色土層が堆積し、壁ぎわの下部にローム土混じりの暗黄褐色土層が堆積する。

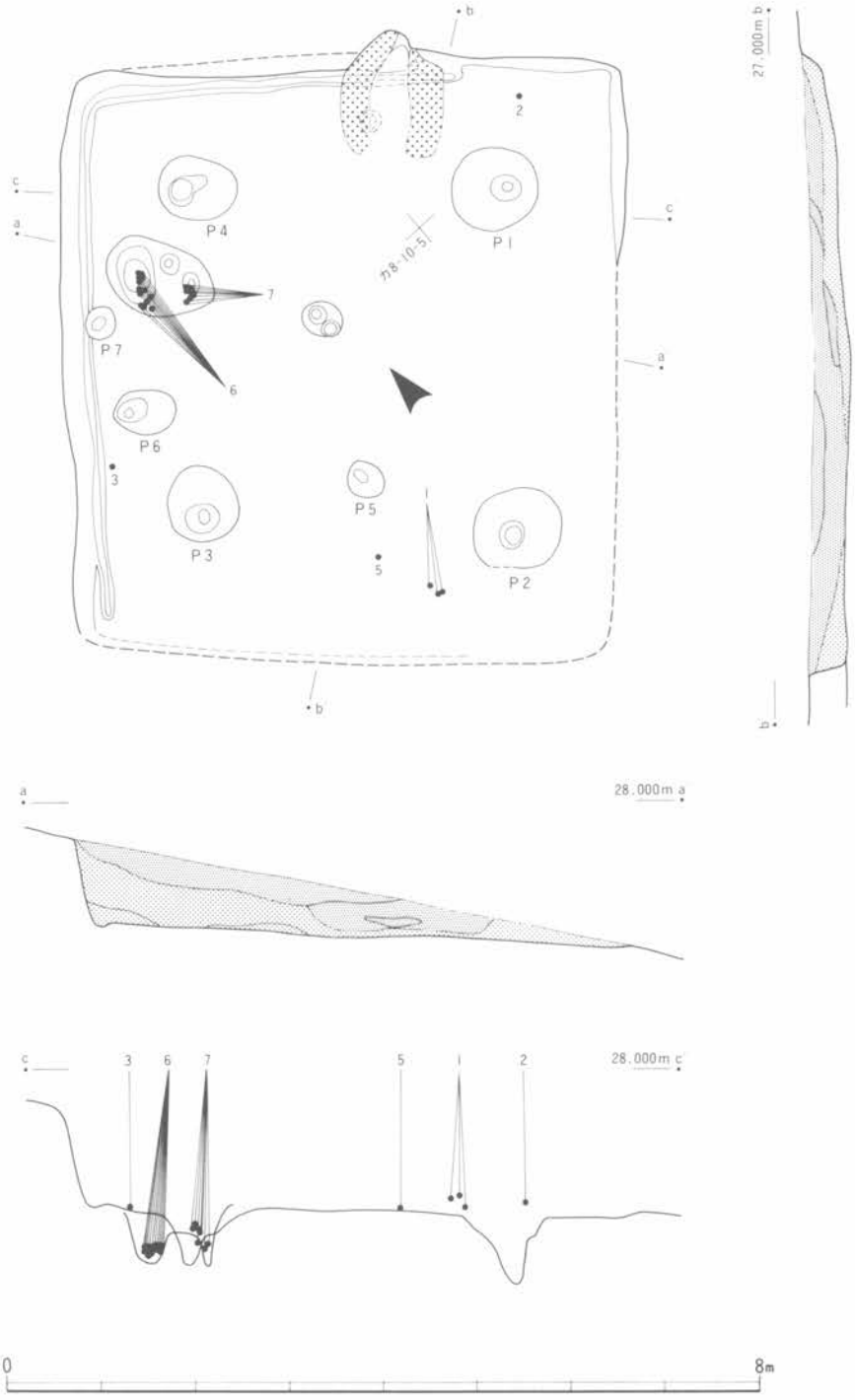
床面　竈前面が硬かった。

竈　北西壁の中央やや北よりに位置する。袖部に竈構築材が残っている。

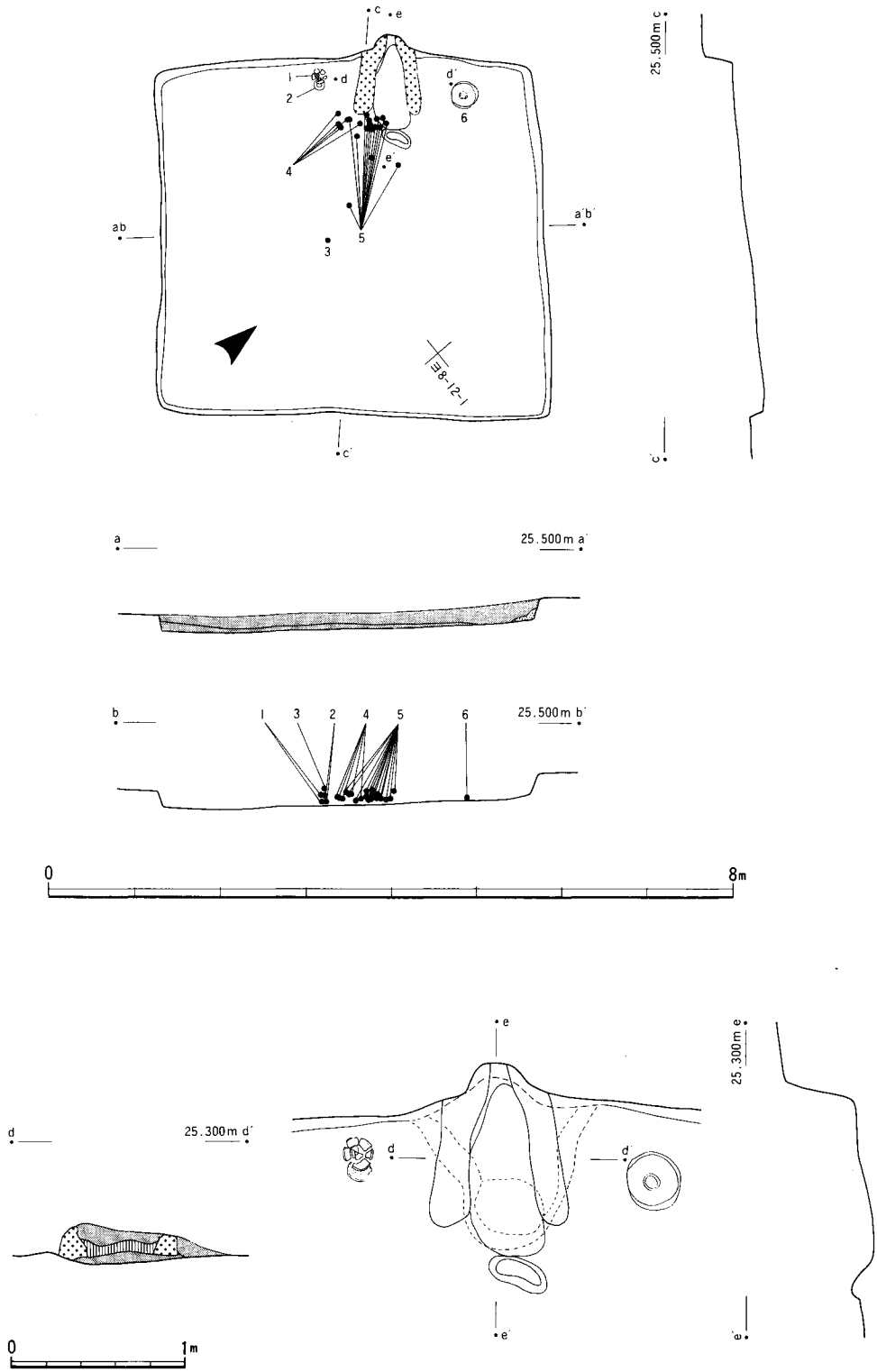
遺物出土状態　竈周辺から杯、甕が出土している。

竪穴住居047（第27図、図版６）

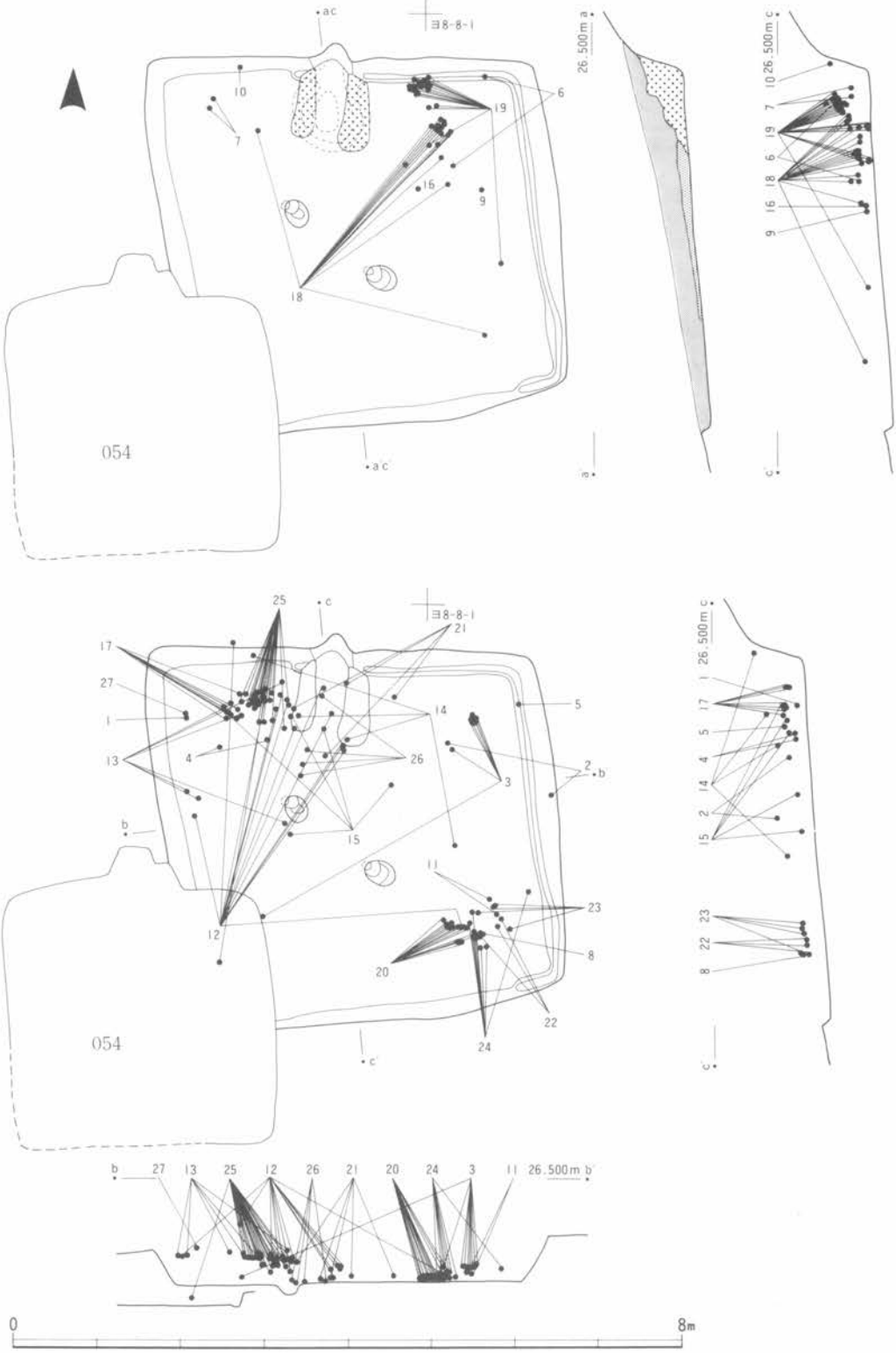
位置　ヨ８グリッド。調査区中央、台地斜面に位置する。竪穴住居054と重複する。



第25図　竪穴住居043



第26図　竪穴住居044



第27図　竪穴住居047

形状・規模　横4.7m、縦4.3mのやや横長の長方形を示す。主軸は北を向く。

埋土　主に黒褐色土層が堆積している。

床面　竈前面が硬かった。

柱穴・貯蔵穴　性格不明のピットが2本検出された。

竈　北壁の中央やや西よりに位置する。遺存状態はさほど良くなかった。

壁溝　東半部に巡る。

遺物出土状態　住居全体にわたり、埋土中からかなり多くの土器が出土している。

竪穴住居050（第28図）

位置　カ8・9グリッド。調査区中央、台地斜面に位置する。南東側は削平された。この遺構を竪穴住居と想定するのは難しいが、一応、竪穴住居の範疇にいれておく。

形状・規模　北西壁の長さが8.6mあるが、削平された部分が広いので原形を予測するのは困難である。

埋土　主にローム土混じりの暗黄褐色土層が堆積している。

床面　床面はソフトローム中に作られ、特に硬い面はなかった。

遺物出土状態　床面付近から遺物が少量出土している。

竪穴住居058（第28図）

位置　ヨ8グリッド。調査区中央、台地斜面に位置し、北壁を除いて大部分削平される。

形状・規模　残存する北壁の長さは5.7mであった。

埋土　黒褐色土層が堆積している。

床面　軟弱な面しか検出できなかった。

柱穴・貯蔵穴　ピットが4本検出されたが、いずれも小規模なものであった。

壁溝　残存する北壁に巡る。

遺物出土状態　ごくわずかの遺物が出土している。

竪穴住居110（第28図）

位置　ヨ7グリッド。調査区中央、台地縁辺に位置する。調査区の境界域に存在し、大部分を近世遺構群019によって破壊された。わずかに北東コーナー部分を検出できただけである。

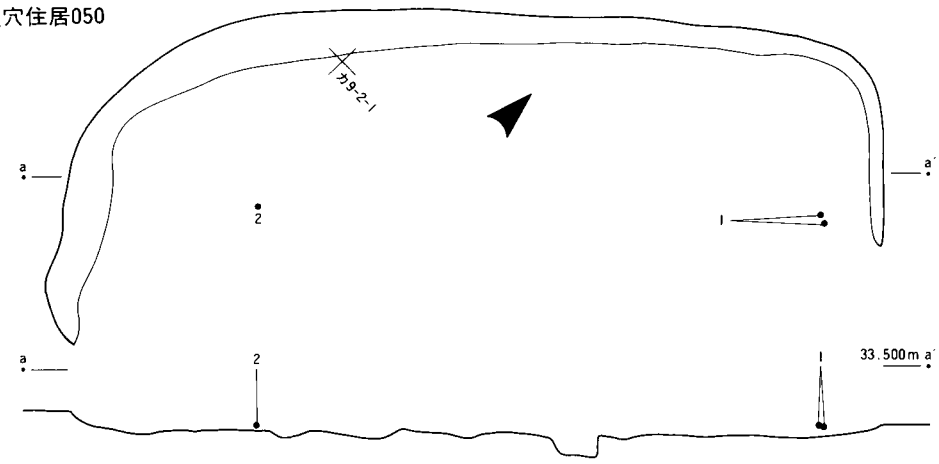
形状・規模　残存する部分から全体の形状・規模を予測するのは困難である。

柱穴・貯蔵穴　貯蔵穴は北東コーナー部に施けられている。

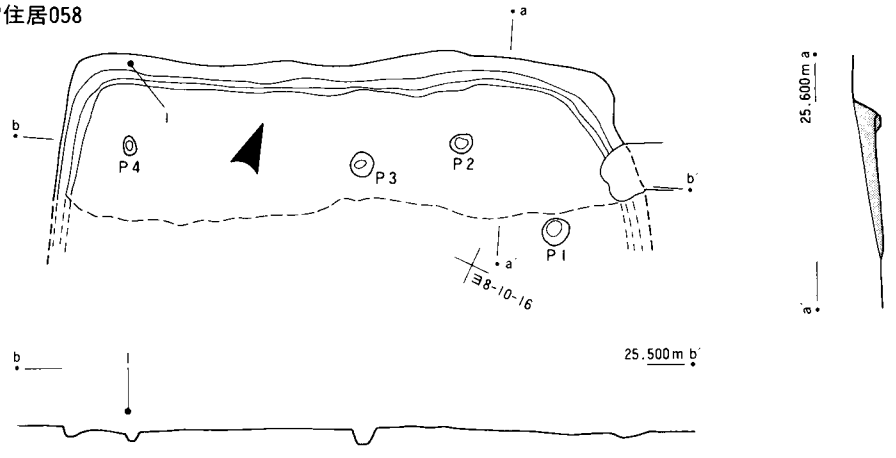
竈　調査区外に存在すると思われる。

壁溝　残存する壁に巡っている。

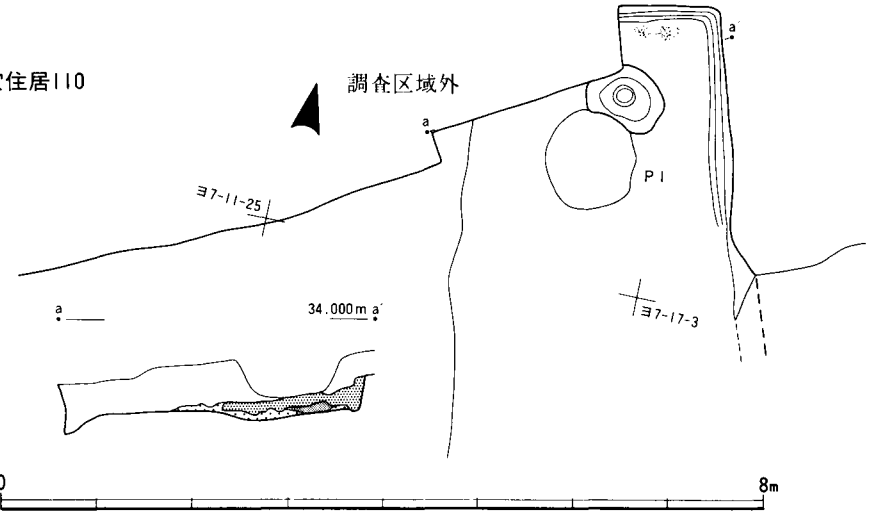
竪穴住居050



竪穴住居058



竪穴住居110



第28図　竪穴住居050・058・110

遺物

古墳時代の竪穴住居から出土した遺物は、土器のほかに鉄製品・土製品などがある。土器のうち図示できた遺物は145点を数える。そのうち須恵器は蓋が1点のみである。図示できなかった資料の総数は5,716点で、土師器が重量比で全体の95%を占めている（第9表）。遺存状態はさほど良好とはいえず、杯・甕類を中心として、破片資料が多い。図示できた遺物も復元によるものが多い。出土点数が多く、器種もまとまって出土しているのは、竪穴住居017A・035B・047などがあげられる。また、竪穴住居025からは土製の勾玉や臼玉が多く出土しており、ほかの竪穴住居とやや趣を異にしている。

竪穴住居001（第29図、図版31・71）　［土器観察表P266］［玉類観察表P264］

杯2点と土製勾玉・管玉、鉄製鎌のそれぞれ1点ずつが図示できた。図示できなかった資料の総数は103点で、土師器甕と杯が多数を占めている。1・4・5は床面上、3は埋土中からの出土である。それ以外は大部分が小破片で、埋土上層からのものである。また、土製支脚が竈火床部から出土したが、被熱し非常に脆い状態であり、図示することはできなかった。

1・2は杯である。1は椀形で、底部内外面を除いて赤彩を施す。2は須恵器杯身模倣杯である。外面に稜をもち、口縁部はほぼ直立し、口唇部が若干外側に開く。遺存する範囲のすべてに赤彩を施す。1に比べ胎土も密で丁寧な作りである。

3・4は土製玉類である。3は勾玉で、尾部の一部を欠損するほかはほぼ完形である。表面は比較的平滑であるが、光沢はなく粘土のしわがみられる。4は管玉で、約半分ほどが遺存している。表面は平滑で光沢をもつ。

5は鉄製の鎌で、遺存する部分は少ないが、柄の一部と思われる木質部が遺存する。遺存長51.0㎜、刃幅21.0㎜、背厚4.5㎜、重さ16.00ｇを計る。

竪穴住居002（第29図）　［土器観察表P266］

杯・壺・高杯・甕各1点が図示できた。図示できなかった資料の総数は、甕の小破片が7点のみである。遺構の大部分を溝005によって破壊されているので遺物の出土数はきわめて少量である。2の壺が埋土中であるほかは、ほぼ床面上からの出土である。

1は浅い椀形の杯で、底部内外面を除いて赤彩を施す。体部外面に輪積み痕が残る。

2は壺で、胴部外面はナデで、一部ヘラ磨きが行われる。

3は高杯で、脚柱部のみが遺存し、外面に赤彩を施す。

4は甕で、底部のみが遺存する。

竪穴住居008B（第29図、図版31）　［土器観察表P266］

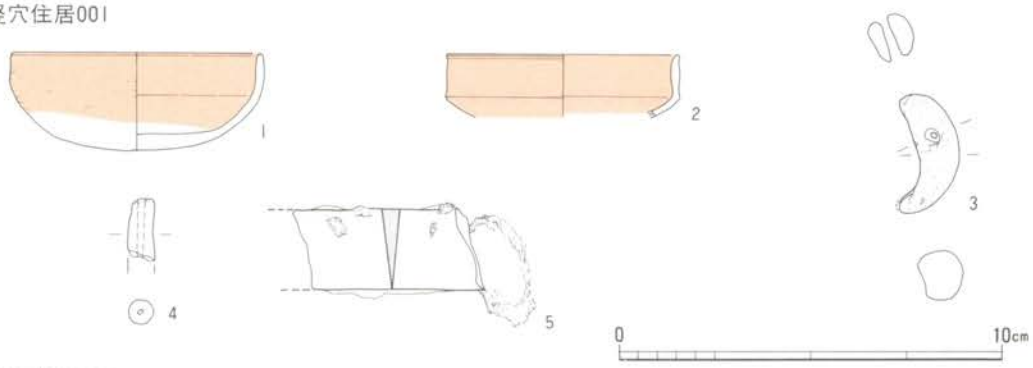
杯・小型土器各1点が図示できた。いずれも竈付近の床面に近い位置から出土している。土製支脚が竈内から出土したが、被熱し非常に脆い状態であり、図示することはできなかった。

図示できなかった資料の総数は239点で、甕が大部分を占めており、竪穴住居の東半分に多くみられる。高杯の中には脚部に赤彩を施すものがみられる。

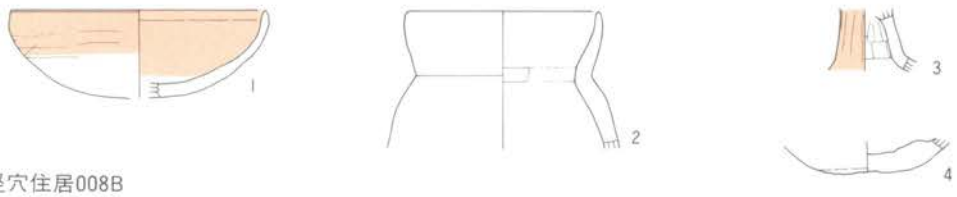
1は須恵器杯蓋模倣杯で、体部外面はヘラ削りの後ヘラ磨き。内面は全面ヘラ磨きで、口縁部は特に丁寧に行う。

2は小型土器で、完形である。口縁部は製作時の亀裂がそのまま残り、体部内外面にも粘土のしわなどが残る。全体に磨きなどの調整はなく指頭の痕跡がみられる。

竪穴住居001

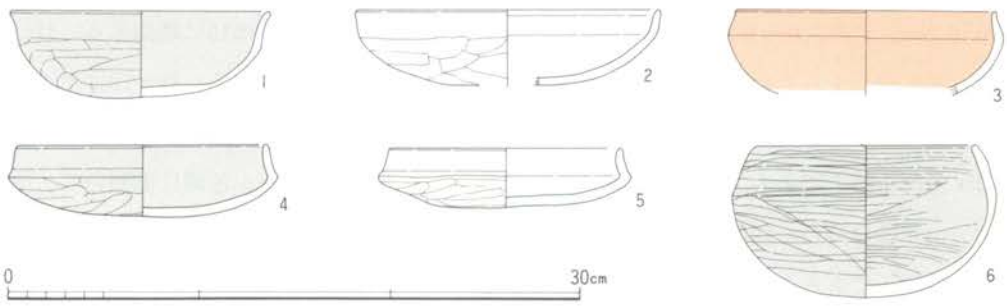


竪穴住居002



竪穴住居008B

竪穴住居017A



第29図　竪穴住居001・002・008B・017A出土遺物（1）

竪穴住居017A（第29・30図、図版31・32・71）　［土器観察表P266］［玉類観察表P264］

杯6点、鉢1点、甕6点、甑1点、土製品6点、土製玉類2点、琥珀玉1点が図示できた。出土状況は床面に密着しているか、あるいはそれに近く、大形の破片や1個体分の破片がまとまっているものと、9・10の甕のように破片が広く飛び散り、床面からも浮いているものとに分かれる。後者は明らかに本竪穴住居廃絶後に投棄されたものと思われる。しかし、前者も甕・甑などは竈の対壁に寄った位置から出土しており、必ずしも使用状態の位置を示しているとは思われない。4の杯は竈右袖脇から正位の状態で出土している。14の甑は横位で、押し潰されたような状態で出土している。18～20の土製品は竈周辺から出土している。15～17・21は埋土中からの出土である。

図示できなかった資料の総数は350点である。土師器の甕と杯の破片がほとんどで、そのほかに小型土器と思われる小破片が9点出土している。土師器杯は椀形で赤彩されたものが多くみられ、内面に黒色処理を施すものがわずかにみられる。

1～6は杯である。1～3は外面に緩い稜をもち、1・2は口縁部は緩やかに外反し、内面はヘラ磨き。3は口縁部はやや内傾し、体部内外面はヘラ磨きで、底部外面を除いて赤彩を施す。4・5は須恵器杯身模倣杯である。体部は浅く、体部外面に明瞭な稜を作り、口縁部は内傾気味に立ち上がる。4は体部外面を除いてヘラ磨き。6は椀形の深いもので、体部は内彎し、口縁部は内傾する。内外面ともにヘラ磨き。1・4・6は内外面に黒色処理を施す。

7は鉢である。口唇部を欠損し、器面は内外面とも荒れている。

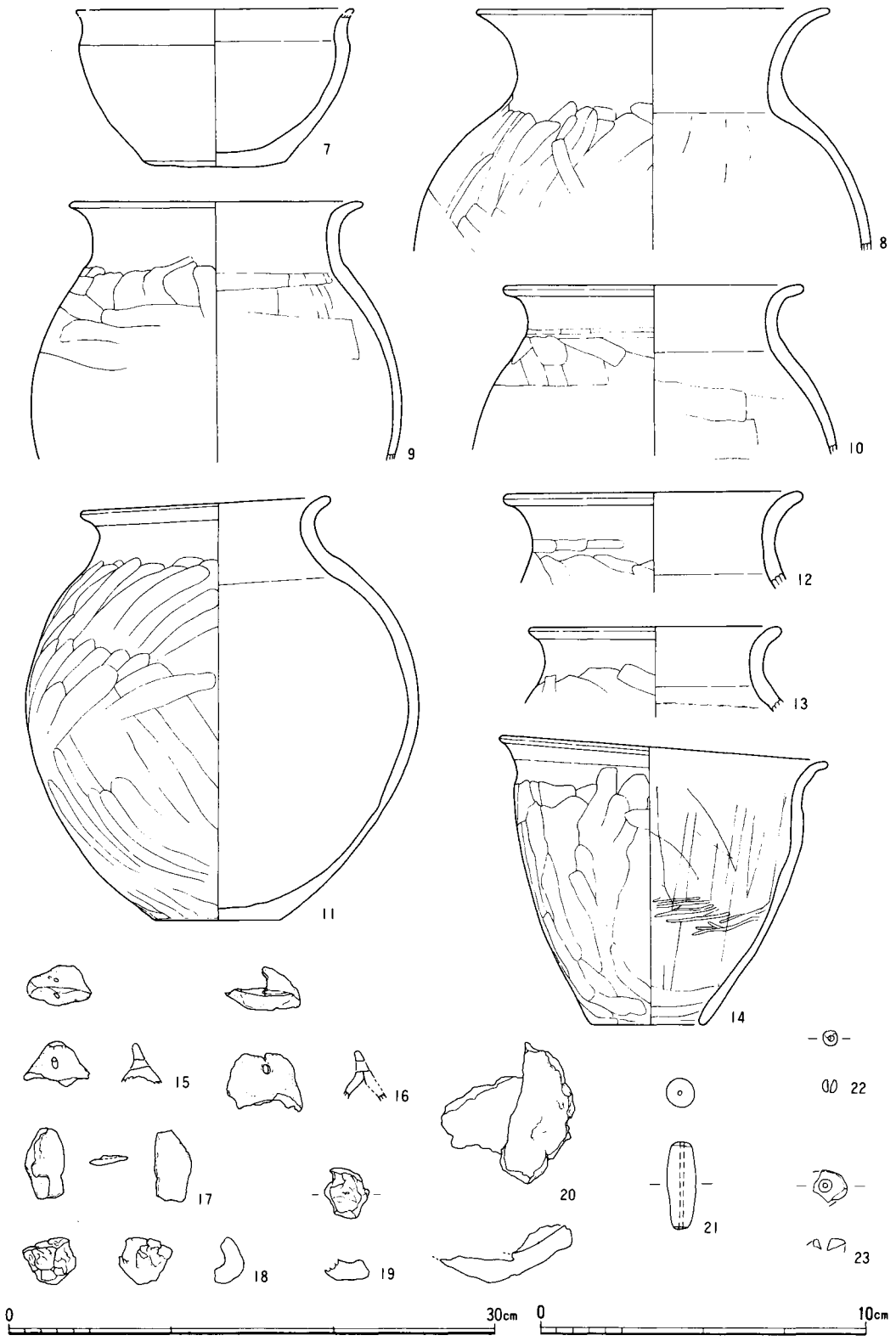
8～13は甕である。口縁部はいずれも強く外反し、球形の胴部をもつものと思われる。口縁部内外面はナデ、胴部外面はヘラ削りで、内面はヘラナデである。10・12は頸部外面に1条のヘラ磨きないしはヘラナデを巡らす。13の口縁部内面端部には繊維質の圧痕がみられる。

14は甑である。一孔形態で、口縁部に最大径をもつ。口縁部内外面はナデで、胴部外面はヘラ削り、内面はヘラナデで、一部ヘラ磨きする。

15～20は土製品である。15～17は鐸形土製品で、埋土中からの出土である。15・16は鈕部分と考えられる。15は遺存高23.0㎜、遺存幅40.0㎜、孔径4.0㎜を計る。外面はヘラナデで、内面は指頭で押える。色調は明褐色、胎土はやや密、焼成はやや良である。16は遺存高36.0㎜、遺存幅46.0㎜、孔径7.0㎜を計る。内外面ともナデで、色調・胎土・焼成は15に類似する。17は鐸身の一部に相当するものと思われる。調整・色調などは15・16に類似する。18～20は用途不明の土製品である。どのような器形をなすものかも不明で、小型土器の可能性もある。

21・22は土製玉である。21は管玉で、完形である。表面はヘラ磨き、色調は赤褐色で、胎土は密で、焼成は良い。22は臼玉で、一部を欠損している。色調は黒色。

23は琥珀玉である。一部が遺存するだけである。



第30図　竪穴住居017A出土遺物 (2)

竪穴住居020D（第31図、図版32）　［土器観察表Ｐ266］

杯５点、甕２点が図示できた。出土状況は、竈が想定される位置の左側から多く出土している。床面に密着しているものは７の甕だけで、それ以外は若干浮いた状態で出土している。

図示できなかった資料の総数は91点で、土師器杯と甕がほとんどである。

１～５は須恵器杯蓋模倣杯で、５を除いて内外面に赤彩を施す。１～３は外面に緩い稜を作り、口縁部は外反気味に開く。２を除いて体部外面は荒いヘラナデ。４は口縁部は大きく開き、底部内面は円形に無彩の可能性がある。５は外面に緩い稜を作り、口縁部は外反気味に開く。内面は細かなヘラ磨きで、内外面に黒色処理を施す。

６・７は甕である。６は小形の甕で、口唇部直下から胴部外面はヘラナデにより比較的平滑に仕上げられ、外面に赤彩を施す。７は球形の胴部をもつ甕で、口縁部と底部は接合しないが、色調・胎土などから同一個体になるものと思われる。

竪穴住居022B（第31図、図版33）　［土器観察表Ｐ266］

杯・甑・砥石各１点が図示できただけである。２の甑は貯蔵穴内のやや浮いた位置から出土している。図示できなかった資料の総数はわずかに６点で、土師器甕の小破片だけである。

１は杯である。外面に稜をもたない椀形のものである。内面の器面は荒れている。外面は全面に、内面は上からみて「㊀」状に赤彩を施す。

２は甑である。口縁部に最大径をもつ、一孔形態である。内外面ともに器面が荒れ、剝落がみられる。胴部外面下端部はヘラ削りによる面取り。胴部下半の内面に輪積み痕がみられる。

３は砥石で、上部を欠損する。遺存長5.9cm、幅3.3cm、厚さ4.2～1.8cmを計る。石材は凝灰岩質である。

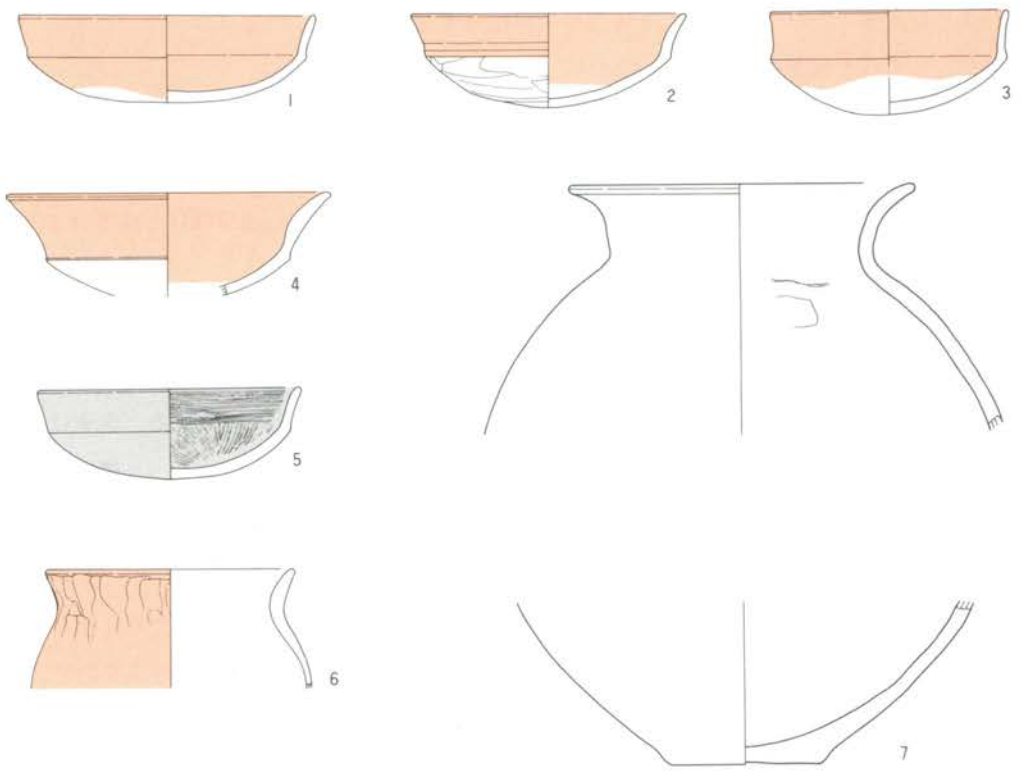
竪穴住居025（第32図、図版33・71）　［土器観察表Ｐ266］［玉類観察表Ｐ264］

杯６点、甑１点、土製品１点、土製玉類18点、鉄鏃１点が図示できた。出土状況は３の杯と７の甑は破片が広く飛び散り、床面から浮いた位置から出土しているので、後からの投棄によるものと思われる。杯類は竈周辺に集中してみられる。土製勾玉は竈対壁の壁溝内からまとまって出土し、また、そのほかの土製玉類も、竈周辺とＰ３周辺に集中している。26の鉄鏃は埋土中からで、18・31の土製玉類は掘立柱建物の埋土中からの出土である。

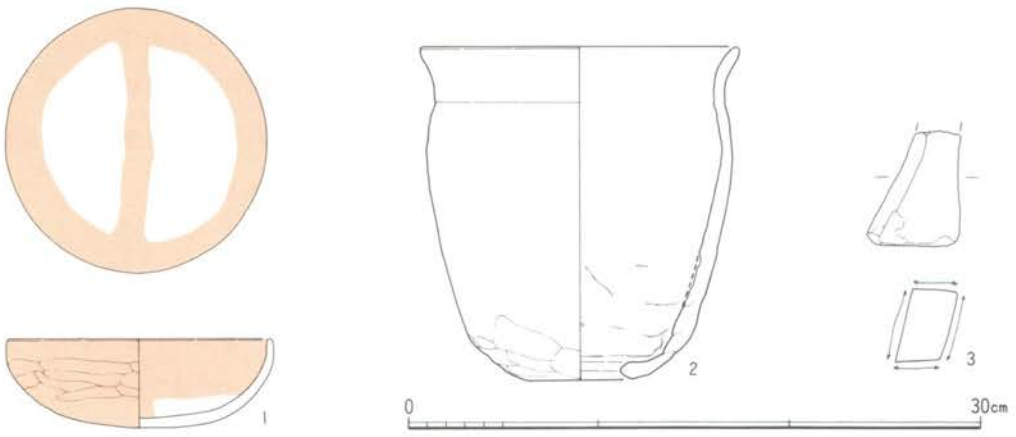
図示できなかった資料の総数は355点である。破片資料の須恵器はいずれも本竪穴住居に伴うものではない。土師器では甕の破片が最も多いが、ほとんどが胴部などの小破片で、器形を復元できるものはない。

１～６は杯である。１は椀形の体部で、外面に緩い稜を作り、口縁部は短く外反する。体部から底部にかけて内面がヘラ磨きで、外面はヘラ削り。口縁部内面と外面は全面に赤彩を施す。

竪穴住居020D



竪穴住居022B



第31図　竪穴住居020D・022B出土遺物

2は須恵器杯蓋模倣杯である。口縁部はやや外反気味に開く。内面はヘラナデ、体部から底部の外面はヘラ削り。3～6は須恵器杯身模倣杯である。3は内外面ともにヘラ磨きし、黒色処理を施す。4～6は体部外面に明瞭な稜を作り、口縁部は内傾する。いずれも内面は細かなヘラ磨きをし、4・6は内外面に、5は内面に黒色処理を施す。特に内面については丁寧に行っており、いずれも光沢をもつ。

7は甑である。口縁部に最大径をもつ、一孔形態である。胴部内面はヘラナデで、下端部はヘラ削りによる面取りを行う。また、内面には部分的に輪積み痕がみられる。

8は不明土製品である。口縁部の一部が遺存する。遺存高は3.9cm、遺存幅は6cmを計る。内外面には指頭痕が残る。色調は明赤色、胎土はやや密、焼成は良い。

9～26は土製玉類である。9～16は勾玉である。図示できたもののほかに4点出土している。9～13は完形で、13を除いて表面をヘラ磨きし、光沢をもつ。10は孔の近くにヘラの当たり痕が残る。色調は9・12が黒色、ほかは茶褐色である。14は頭部の一部が遺存する。表面はあまり平滑ではないが、一部光沢をもつ。15は尾部を欠損する。表裏面ともによくヘラ磨きされ、光沢をもつ。16は頭部を半分欠損する。表面と側面は比較的丁寧にヘラ磨きされ光沢をもつが、裏面はやや雑である。破片資料での観察で、内部の色調が茶褐色で、表面だけ黒色のものがみられる（14･16)。また、それは孔の内面にもおよんでいることから、黒色処理を施したものと考えられる。17・18は棗玉である。17は表面を平滑にヘラ磨きし、色調は内部が茶褐色で、表面に黒色処理を施す。18は表面を平滑に仕上げるが、形は整っていない。色調は黒色。19・20は臼玉である。このほかに小破片が1点出土している。19は完形で、色調は暗赤褐色。20は孔付近の一部が欠損する。色調は内部が暗茶褐色で、表面に黒色処理を施す。21～26は丸玉で、23を除いて完形である。21と26の表面は平滑ではなく、26の下部の孔はきわめて小さい。

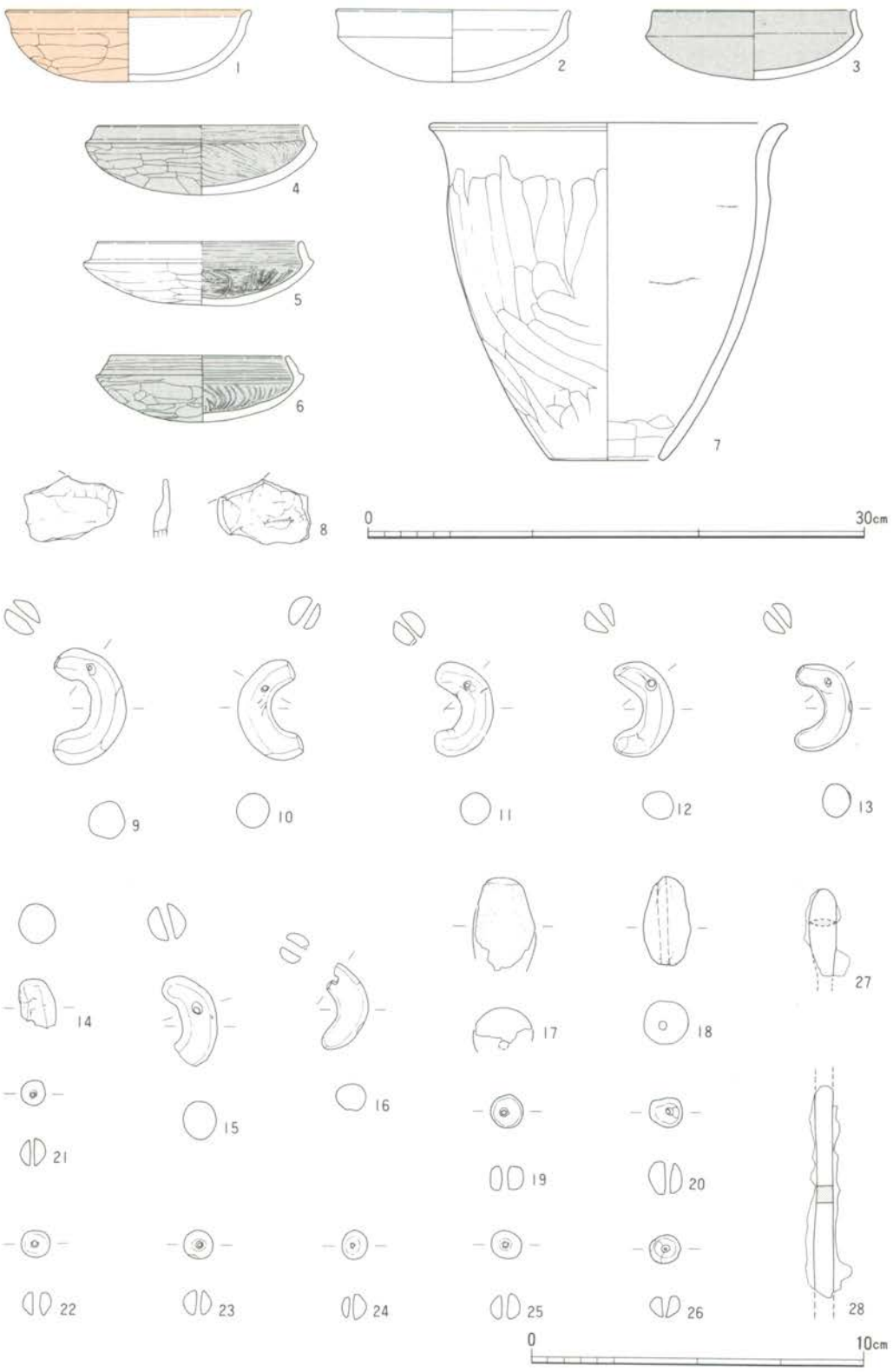
27・28は鉄鏃で、出土位置などから同一個体と考えられる。27は刃部で、錆膨れが著しく、推定の断面形から両丸造りと思われる。遺存長26.0㎜、幅7.5㎜、厚さ3.5㎜、重さ1.93ｇを計る。28は頸部のみで、遺存長63.0㎜、幅5.0㎜、厚さ5.0㎜、重さ7.56ｇを計る。

竪穴住居027（第33図、図版33・71）　［土器観察表Ｐ266］［玉類観察表Ｐ265］

杯3点、甕4点、小型土器1点、土製玉類6点が図示できた。2・3の杯と6の甕は床面より浮いた状況で出土しており、投棄されたものと考えられる。4の甕は貯蔵穴内からまとまって出土し、土製玉類はＰ1と壁との間に集中している。9の土製管玉は竈内から出土した。

図示できなかった資料の総数は278点で、ほとんど土師器である。甕の破片にやや大形のものがみられるほかはいずれも小破片である。杯の中に黒色処理を施すものが少量みられる。

1～3は杯である。1は須恵器杯身模倣杯である。体部は深く、口縁部は外反気味に内傾する。底部内面の器面はやや荒れ、煤の付着がみられる。内外面に赤彩を施す。2は須恵器杯蓋



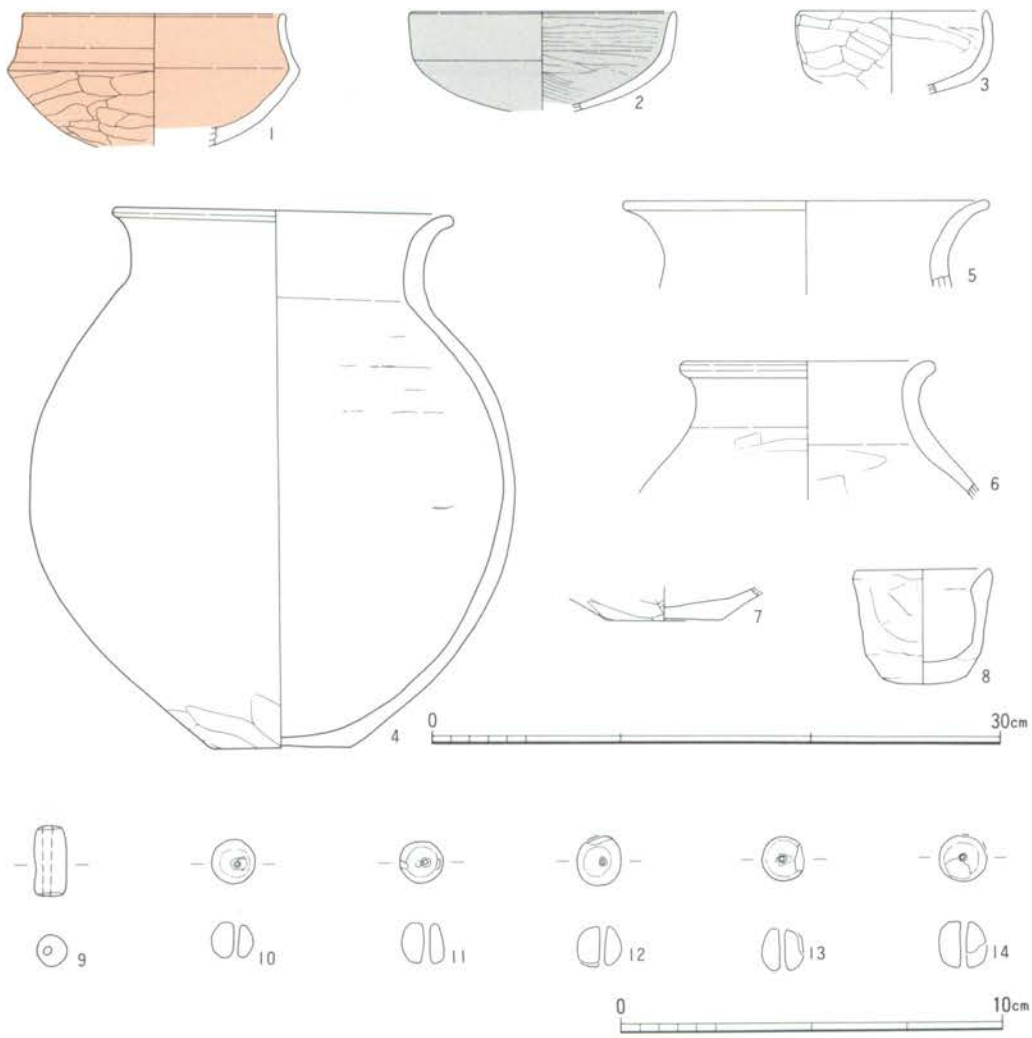
第32図　竪穴住居025出土遺物

模倣杯である。外面の稜は弱く、口縁部は外傾気味に立ち上がる。内外面はヘラ磨きで、黒色処理を施す。3は小振りで、椀形のものである。体部外面のヘラ削りは口縁部直下までおよぶ。内面に輪積み痕がみられる。

4～7は甕である。4は球形の胴部をもち、胴部は内外面ともヘラ削りの後ヘラナデを行い、ヘラ削りの痕を消している。胴部外面には底部付近を除いて煤の付着がみられる。内面には輪積み痕がみられる。5・6は口縁部のみが遺存する。4と同様に球形の胴部になるものと思われる。7は底部で、内面の器面が荒れている。

8は小型土器で、口縁部内面に明瞭な稜を作り、端部は尖頭形になる。内外面ともヘラナデ。

9～14は土製玉類である。9は管玉で、完形である。表面を平滑に仕上げる。10～14は丸玉で、10は完形でそのほかは一部が欠損している。図示したもののほかに別個体の小破片が1点出土している。いずれも表面は平滑で、黒色処理を施す。



第33図　竪穴住居027出土遺物

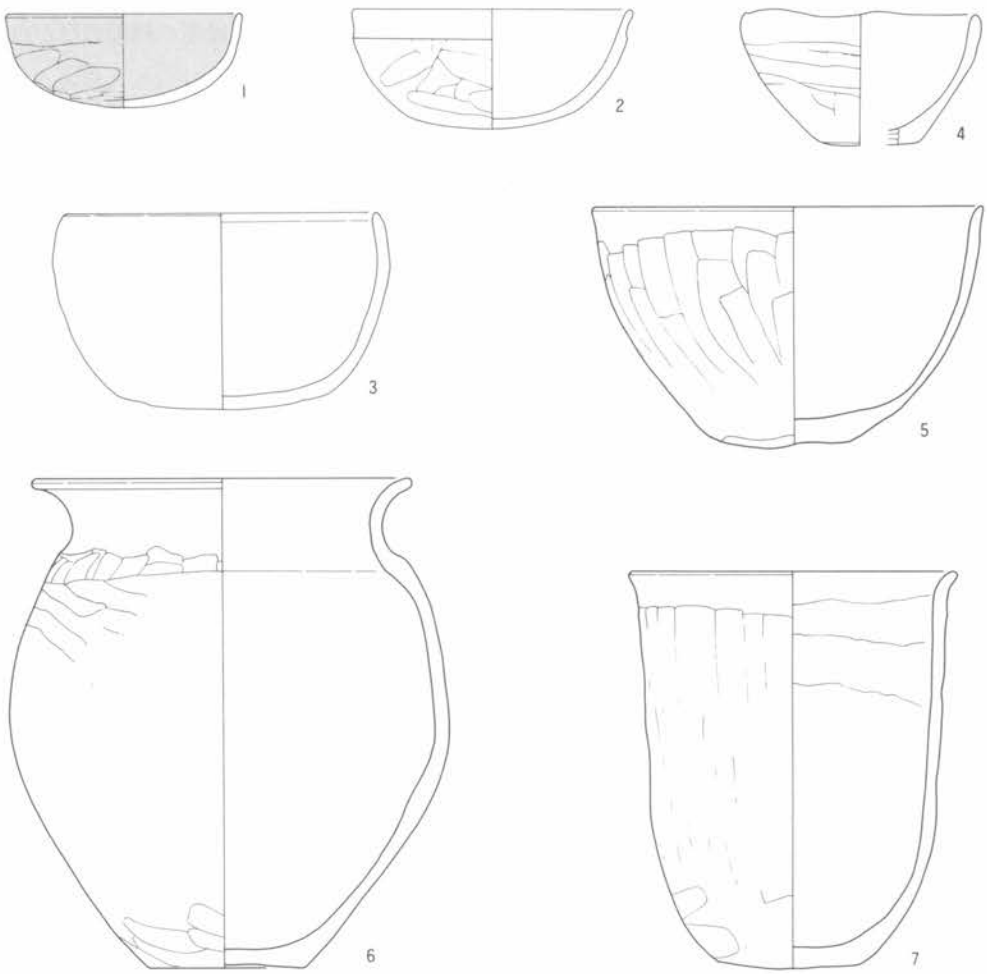
竪穴住居030（第34図）　［土器観察表P266］

杯1点のみが図示できた。図示できなかった資料の総数は43点で、土師器が多く、須恵器は本竪穴住居に伴うものではない。杯の中に内外面に赤彩を施すものがみられる。

1は杯で、須恵器杯身模倣杯である。比較的浅い体部から、外面に稜を作り、口縁部は内傾する。口唇部端部は尖頭形になる。内外面ともにヘラ磨きされるが、内面と口縁部外面は特に丁寧に磨かれる。内外面に黒色処理を施す。

竪穴住居030

竪穴住居032



第34図　竪穴住居030・032出土遺物

竪穴住居032（第34図、図版33・34）　［土器観察表P266］

杯3点、鉢2点、甕2点が図示できた。1は床面からの出土である。3の杯・4の鉢・6の甕は床面から浮き、破片が散らばっていることから投棄されたものと思われる。5の鉢は竈の袖の下や床面下からも出土しており、本竪穴住居構築時に混入したものと思われる。

図示できなかった資料の総数は321点である。土師器がほとんどで、須恵器は本竪穴住居に伴うものではない。杯のなかには赤彩や黒色処理を施すものがみられる。埋土上層中から羽口片や多量の鉄滓が出土しているが、内容については第2章第4節2．小鍛治関連で記述する。

1～3は杯で、椀形のものである。1・2はやや浅い体部から、口縁部はわずかに外反する。両者とも外面がヘラ削りで、内面がナデ。1はやや小振りで、内外面に黒色処理を施す。3は体部が深いものである。内外面ともにヘラナデで、外面の器面は荒れている。

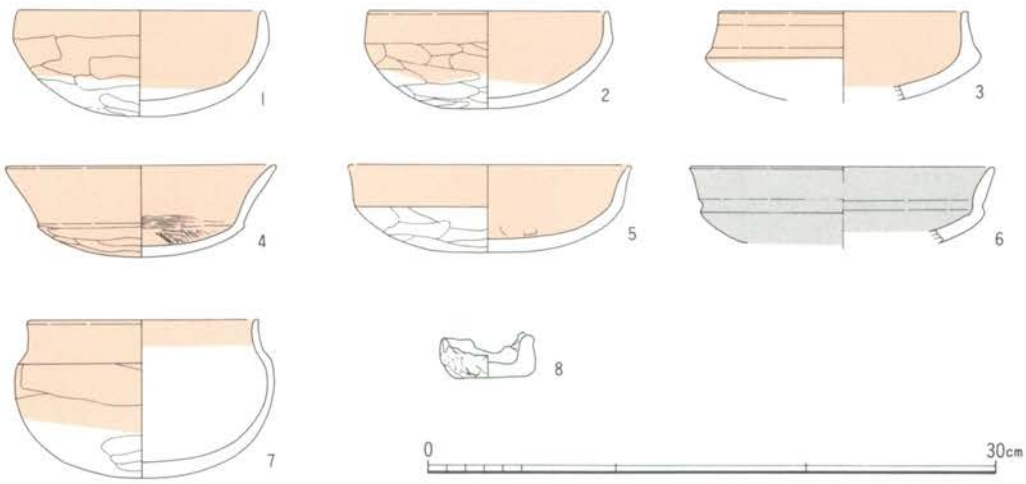
4・5は鉢である。4はやや小振りで、外面に輪積み痕がみられる。5の底部は平ではなく、やや不安定である。外面はいずれもヘラ削りで、内面はナデ。

6・7は甕である。6は球形に近い胴部をもつものである。7は口縁部や胴部の径がほとんど変わらない、筒形のものである。内面はナデで、胴部上半には輪積み痕がみられる。

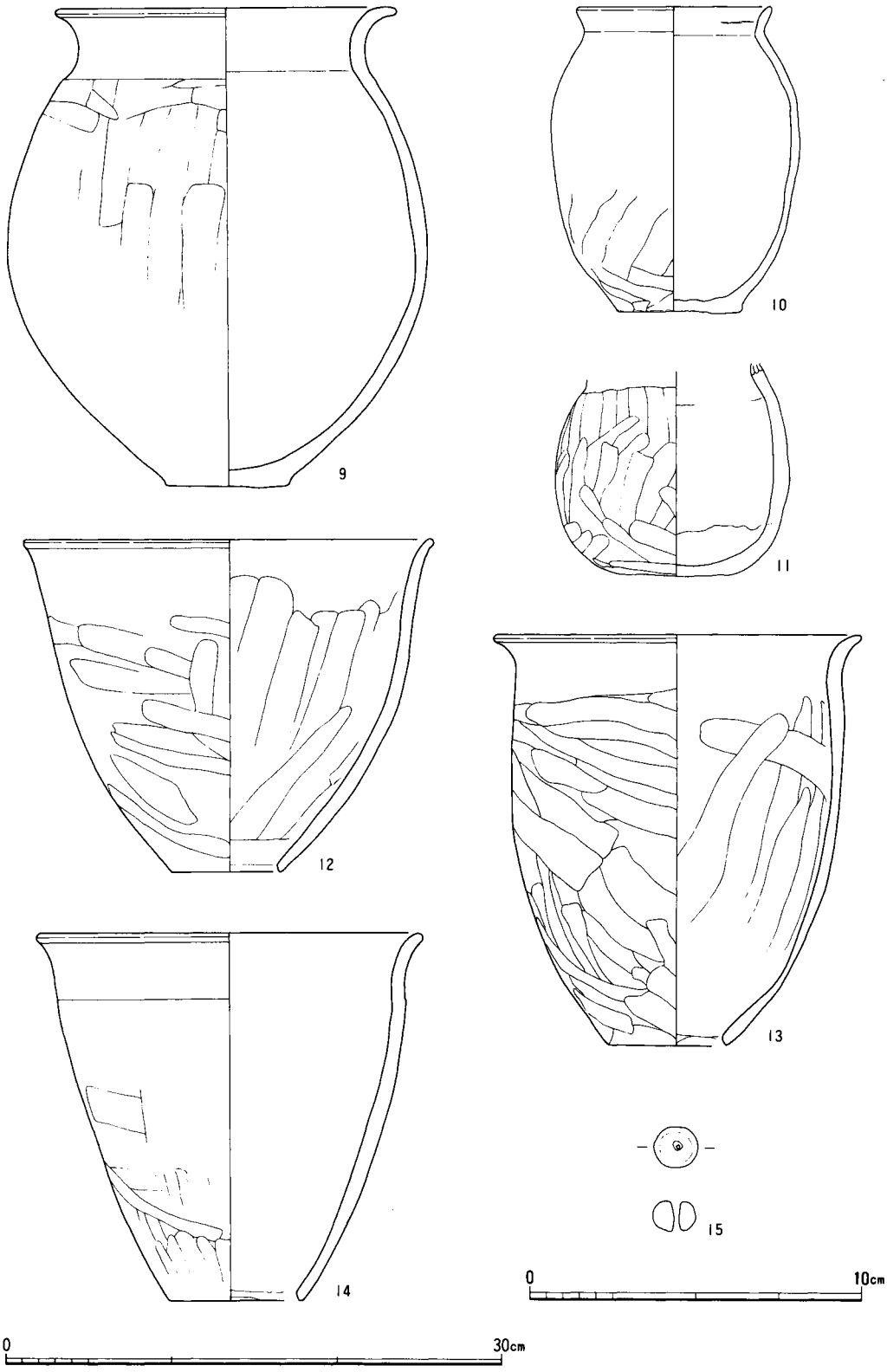
竪穴住居035B（第35・36図、図版34・35・71）　［土器観察表P267］［玉類観察表P265］

杯7点、小型土器1点、甕3点、甑3点、土製玉類1点が図示できた。出土状況は竈を中心にして、P1につながる間仕切り溝から、南壁にみられる間仕切り溝に囲まれた範囲に集中している。甑は3点とも竈左側の貯蔵穴周辺に集中し、杯も竈の両側に集中する。8の小型土器はP2内から出土している。6の杯は埋土中からの出土である。

図示できなかった資料の総数は609点で、土師器甕が大部分を占める。土師器甕の胴部破片に



第35図　竪穴住居035B出土遺物（1）



第36図　竪穴住居035B出土遺物 (2)

大形品がみられるほかは、いずれも小破片である。須恵器は本竪穴住居に伴うものは少ない。

1～7は杯である。1・2は椀形のもので、口縁部はわずかに内傾する。いずれも底部内外面を除いて赤彩を施す。3は須恵器杯身模倣杯である。体部外面に強い稜を作り、口縁部は直立する。口縁部外面と内面に赤彩を施す。内面の器面は剝落が著しい。底部外面も器面が荒れ、砥石として使用したと思われる筋状の擦痕がみられる。4～6は須恵器杯蓋模倣杯である。4は浅い体部から外面に稜を作り、口縁部は大きく外反する。内面はヘラ磨きで、全面赤彩を施す。5は口唇部を欠損する。外面の稜は弱く、口縁部は外反気味に立ち上がる。口縁部外面から内面に赤彩を施すが、底部の一部が塗り残される。6は浅い底部から外面に段を作り、口縁部は外傾する。内外面は黒色処理の後にヘラ磨き。7は体部が深い椀形で、口縁部は外反気味に短く立ち上がる。体部内外面はヘラナデで、体部外面の中位から口縁部内面まで赤彩を施す。

8は小型土器である。内面は指頭によるナデであるが、外面は無調整のままである。

9～11は甕である。9は球形の胴部をもつ。胴部外面は、被熱により器面が荒れ、口縁部から頸部にかけての内面は、使用により器面が著しく荒れている。10・11はやや小形の甕である。10は胴部があまり張らず、口縁部は短く外反する。胴部外面の上半部はヘラナデ。内面は著しく器面が荒れている。11は底径が器高や胴部径に比べて大きく、安定感がある。

12～14は甑で、いずれも一孔形態である。12・14は鉢形で、13は胴部中位にやや膨らみをもつ。胴部内面はいずれもヘラナデ。12・13の胴部内面には黒色の付着物がみられる。また、14の胴部外面の中位に、器面が著しく荒れている部分が2か所みられる。

19は土製丸玉である。表面は器面がやや荒れているが、比較的平滑に仕上げられている。

竪穴住居037D（第37図、図版36・71）　［土器観察表P267］［玉類観察表P265］

杯1点、甕2点、小型土器1点、紐状土製品2点、土製玉類5点が図示できた。出土状況は竈の周辺と、その対壁にあたる出入口ピット周辺に集中するが、やや床面から浮いた状態である。紐状土製品は竈の周辺からの出土である。10・11の土製玉類は埋土中からの出土である。

図示できなかった資料の総数は359点で、土師器の甕と杯の破片がほとんどであるが、杯の数がほかの竪穴住居に比べて多いように思われる。須恵器杯は本竪穴住居に伴うものではない。

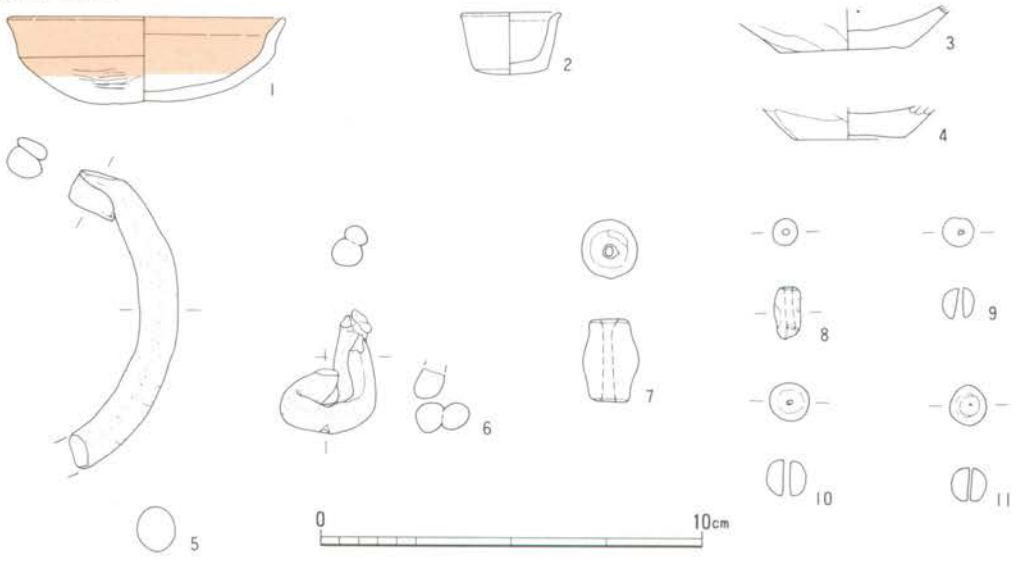
1は須恵器杯蓋模倣杯である。浅い体部から外面に弱い稜を作り、口縁部は外反する。口縁部外面を除いてヘラ磨きするが、器面はやや荒れる。体部上半以上の内外面に赤彩を施す。

2は小型土器である。遺存度は悪い。口縁部内外面と体部外面はナデ。それ以外はヘラナデ。

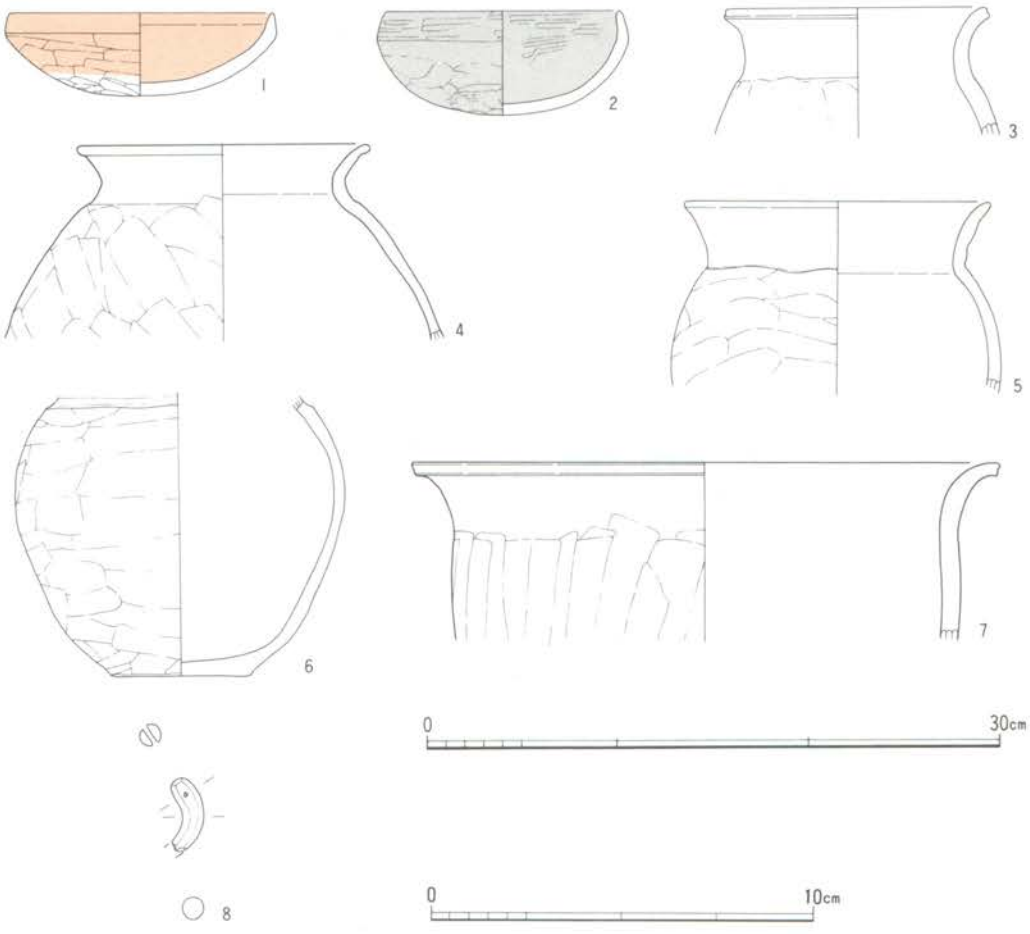
3・4は甕で、底部のみが図示できた。

5・6は紐状土製品である。5は2本の粘土紐を図示した上の部分で、押し付けて繋ぎ合わせたような状態である。色調は赤褐色で、表面は比較的平滑である。遺存長78㎜、径は最大で11㎜を計る。6も2本の粘土紐を束ねたもので、5と比べてさらに密着の度合いが少ない。色

竪穴住居037D



竪穴住居038



第37図　竪穴住居037D・038出土遺物

調は明褐色で、表面は比較的平滑である。遺存長32㎜、径5～7㎜を計る。図示した2点のほかに同じような紐状土製品と思われる小破片が2点出土している。これらは、土器製作に使用した粘土紐が、なんらかの原因で焼成を受けたものと考えられる。

7～11は土製玉類である。7は棗玉で、表面は平滑に仕上げられる。色調は黒褐色で、内部は茶褐色である。8は管玉で、表面は平滑であるが、剝落部分が多い。色調は赤褐色。9～11は丸玉である。色調はいずれも赤褐色で、表面は平滑ではあるが、さほど丁寧ではない。11の孔径は0.8㎜ときわめて小さい。

竪穴住居038（第37図、図版36・71）　［土器観察表P267］［玉類観察表P265］

杯2点、甕4点、甑1点、土製玉類1点が図示できた。出土状況はやや散漫で、特に集中しているところはみられない。1と6は西側コーナー部から投棄されたものと思われる。床面に密着しているものは少なく、多くはやや浮いた状態である。

図示できなかった資料の総数は453点で、土師器杯と甕がほとんどである。土師器杯は、須恵器模倣杯で赤彩を施したものが多くみられる。図示することはできなかったが、小型土器の小破片が2個体分出土している。

1・2は杯である。1は浅い椀形のもので、口縁部はわずかに直立する。底部内面に炭化物が付着している。底部外面を除いて赤彩を施す。2はやや深い椀形のもので、口縁部は内傾する。内面と口縁部外面はヘラ磨きで、内外面に黒色処理を施す。

3～6は甕である。いずれも破片資料で、全体を復元できるものはなかった。3は長胴になるものと思われる。口唇部はわずかに窪み、胴部外面は被熱する。4は球形の胴部をもち、口縁部は短いが強く外反する。5は胴部上半部に最大径をもつと思われる。6は口縁部を欠損し、球形の胴部をもつ。胴部外面は全面にわたって横方向のヘラ削り。

7は甑である。竪穴住居035Bの14の甑と同じ器形をもつものと思われる。口唇部は3の甕と同様にわずかに窪む。

8は土製勾玉である。尾部を欠損する。表面は平滑で光沢をもつ。色調は黒色で、内部は暗褐色である。

竪穴住居039（第38図、図版36・71）　［土器観察表P267］

杯4点、甕・甑・土錘各1点が図示できた。出土状況は2・4の杯と7の土錘は貯蔵穴内からの出土である。1の杯は竈右側の床面に密着している。3の杯と5の甕は投棄されたものと思われる。

図示できなかった資料の総数は88点と少ない。土師器甕がやや多く、大形の破片が若干みられる。土師器杯は須恵器模倣杯で、赤彩を施すものが多い。

1～4は杯で、1～3は椀形のものである。1は口唇部が全体的に破損しており、遺存状態が悪い。底部外面を除いて赤彩を施す。口縁部の一部が打ち欠かれたような状態になっており、その破損面にも赤彩を施す。また、内面の赤彩の色調は口縁部が底部に比べ濃いことから、一定期間使用した後に、再度赤彩を施したと考えられる。2は口縁部は外反気味に内傾する。体部外面は被熱した痕跡がみられる。内面はヘラ磨き。口縁部内外面に煤が付着する。口縁部から体部の一部にかけての内外面に赤彩を施す。3は椀形の体部から、口縁部は強く外反する。口縁部から体部内面はヘラナデ。底部外面を除いて遺存部すべてに赤彩を施す。4は須恵器杯身模倣杯である。体部は浅く、口縁部は外反気味に直立する。底部外面を除いてナデで、その範囲に赤彩を施す。

5は甕で、胴部に最大径をもつ長胴の甕になるものと思われる。胴部外面はヘラ削りの後ヘラナデ。胴部内面に輪積み痕がみられる。

6は甑である。一孔形態で、内面はヘラナデ。胴部外面に被熱した痕跡がみられる。

7は球状土錘である。1/3ほどが欠損する。表面は平滑で、色調は黒色である。径20㎜、遺存厚20㎜、孔径2～2.5㎜、重さ5.46ｇを計る。

竪穴住居040B（第38図、図版37）　［土器観察表Ｐ267］

杯4点、高杯1点、壺1点が図示できた。出土状況はほかの遺構に破壊されている部分が多く、全体的な様相は明らかでないが、竈の左側を中心に床面に密着しているものが多い。5の高杯は竈内から倒れた状態で出土している。竈内からは土製支脚が出土しているが、遺存状態が悪く図示することはできなかった。

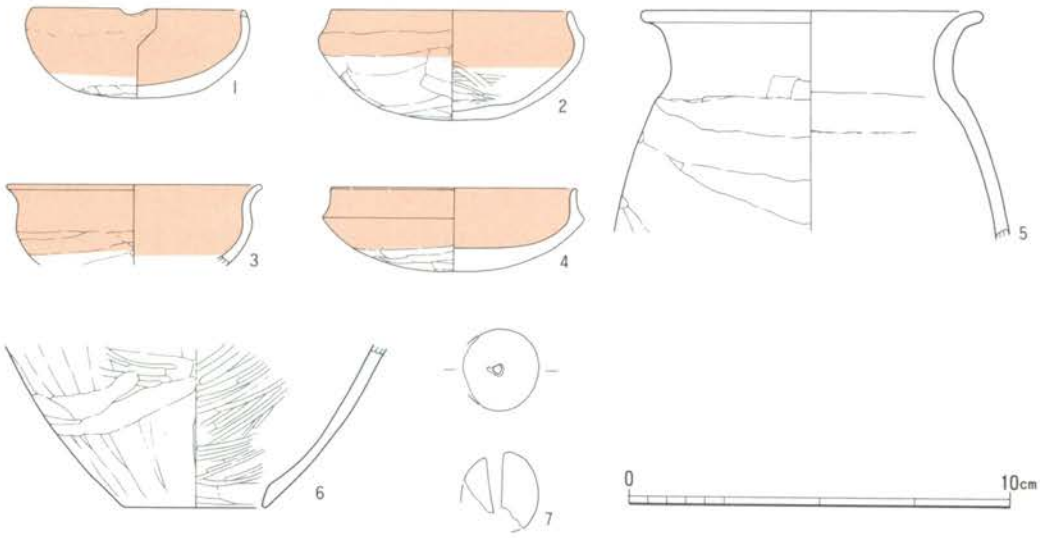
図示できなかった資料の総数は199点である。土師器甕が主体を占める。土師器杯は須恵器模倣杯で、赤彩を施すものが多く、若干黒色処理を施すものもみられる。

1～4は杯で、すべて須恵器杯蓋模倣杯である。1は体部外面に弱い稜を作り、口縁部はわずかに外反する。口縁部を除いてヘラ磨きするが、内外面の器面は若干荒れている。底部外面を除いて赤彩を施す。2は口縁部はやや外反する。口縁部を除いてヘラナデで、体部外面を除いて赤彩を施す。3は口縁部はほぼ直線的に外傾する。内外面ともにヘラ磨きし、黒色処理を施す。4は浅めの体部から外面に明瞭な稜を作り、口縁部は大きく外反する。口縁部から内面にかけてはナデ。口縁部内面の器面は荒れている。底部内外面を除いて赤彩を施す。

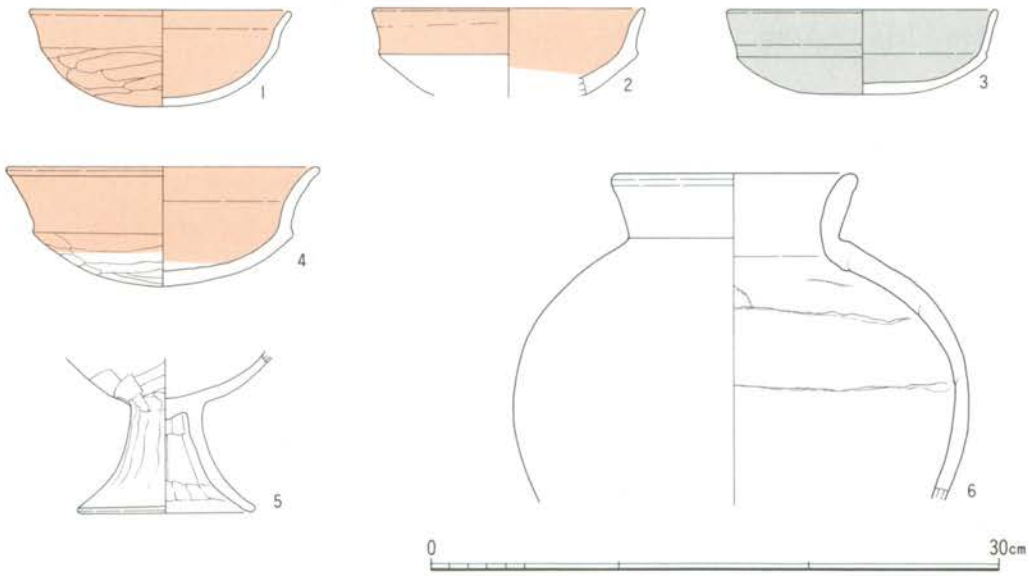
5は高杯である。杯部内面はヘラ磨きする。裾部から杯部にかけて、一側面に被熱した痕跡がみられるが、全体にみられるものではない。竈内において支脚として長期に亘って使用されたとは思われない。

6は壺である。球形の胴部をもち、口縁部は直立気味に立ち上がる。胴部外面はヘラナデによってヘラ削りの痕を丁寧に消している。内面に輪積み痕がみられる。

竪穴住居039



竪穴住居040B



第38図　竪穴住居039・040B出土遺物

竪穴住居042（第39図、図版37・71）　［土器観察表P267］［玉類観察表P265］

杯10点、甕2点、土製品1点、滑石製勾玉1点が図示できた。本竪穴住居は古墳時代のなかで、図示できた杯の数が最も多い。1・9の杯と11の甕は貯蔵穴内から出土しているが、1を除いて離れた位置の破片とも接合し、本竪穴住居の廃絶に伴って投棄されたものと思われる。

図示できなかった資料の総数は519点で、土師器甕の破片に中形のものがみられるほかはいずれも小破片である。土師器甕が量的には多いが、土師器杯の量もほかの住居に比べると多い。

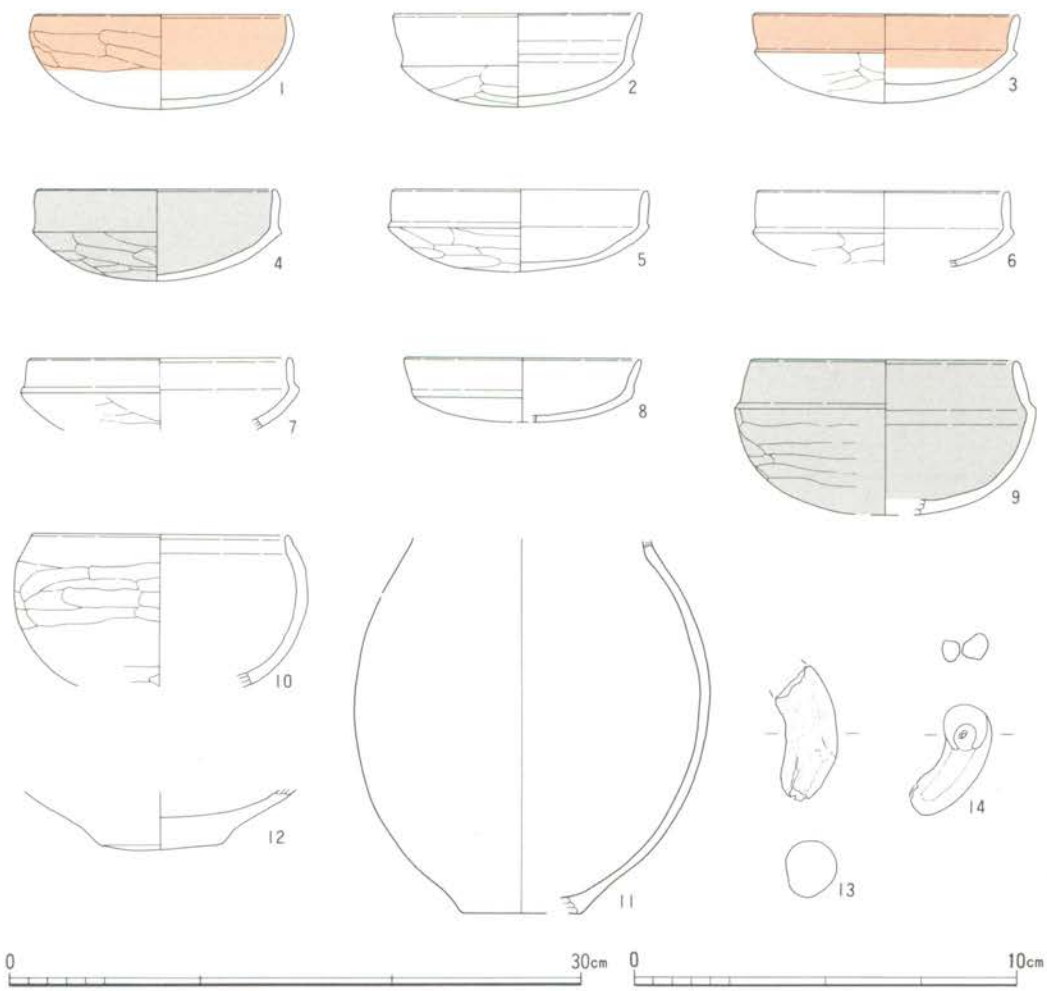
1～10は杯である。1は椀形の杯で、口縁部から内面はヘラ磨きで、底部を除いて赤彩が施

される。2・8は須恵器杯蓋模倣杯で、2は口縁部は体部に比べ長く、外傾する。体部外面を除きヘラ磨き。8は小振りで、口縁部が外傾する。3～7は須恵器杯身模倣杯で、3は口縁部がわずかに外傾し、口縁部内外面に赤彩を施す。4～7は口縁部は直立する。4は口唇部はやや内彎し、体部外面を除いてヘラ磨きで、内外面に黒色処理を施す。5・7は口縁部内外面はヘラ磨きする。6は体部外面はヘラナデで、ほかはナデ。9・10は深い椀形の杯で、9は口縁部は外面に稜を作り内傾する。器面の調整はナデあるいはヘラナデで、内外面に黒色処理を施す。10は口縁部は短くやや外反気味に立ち上がる。体部外面はヘラ削りのままで、ほかはナデ。

11・12は甕である。11は球形の胴部をもち、器面は全体に荒れており、特に内面は剝落が著しい。12は底部のみで、内面の器面は荒れている。

13は土製品で、把手とも思われるが、性格不明である。遺存長39㎜、径14～15㎜を計る。

14は勾玉である。頭部を欠損する。石材は滑石であるが、質は良くない。



第39図　竪穴住居042出土遺物

竪穴住居043（第40図、図版37）　［土器観察表P268］

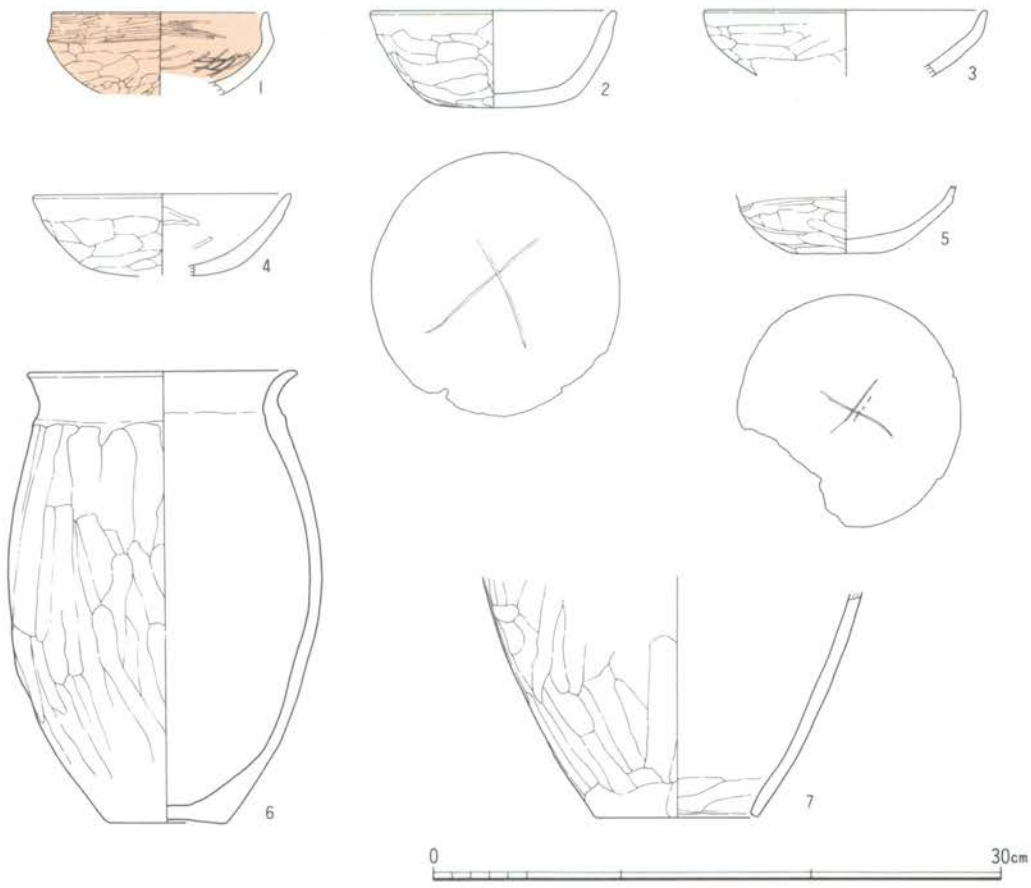
杯5点、甕・甑各1点が図示できた。出土状況は床面に近いものが多く、6・7は貯蔵穴内からの出土である。4の杯は埋土中からの出土である。

図示できなかった資料の総数は368点で、土師器甕が多いがすべて小破片である。須恵器のなかに、頸部に櫛描き波状文をもつ甕の小破片がみられる。土師器杯では黒色処理を施したものが多くみられる。

1～5は杯である。1は須恵器杯身模倣杯である。口縁部外面はヘラ磨きで、ほかは一部ヘラ磨き。底部内外面を除いて赤彩を施す。2～5は椀形で、平底気味になるものである。2は深く、底部の平底化の傾向も強い。内面は2・4がヘラ磨きで、ほかはナデ。2・4・5の底部に焼成前の「×」のヘラ記号がみられる。

6は甕で、長胴の胴部をもつ。胴部外面下半から底部は被熱し、器面が著しく荒れる。また、胴部内面も中位以下の器面が荒れている。

7は甑で、一孔形態である。内面はヘラ磨き。



第40図　竪穴住居043出土遺物

竪穴住居044（第41図、図版37・38・39）　［土器観察表P268］

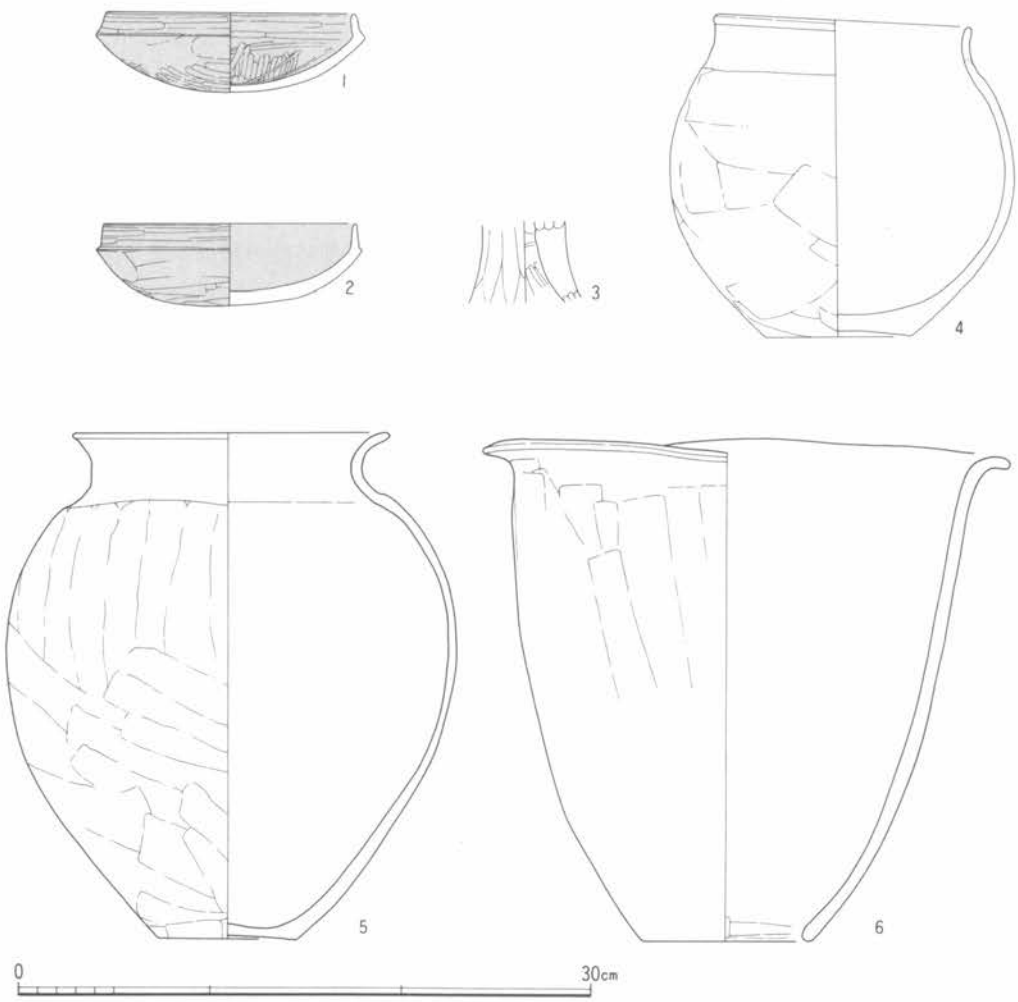
杯・甕各2点、高杯・甑各1点が図示できた。出土状況は竈周辺に集中する。1・2の杯は竈の左側、6の甑は竈の右側で、伏せた状態で出土し、甕はすべて竈の前から出土している。

図示できなかった資料の総数は104点で、須恵器は1点も出土していない。甕に中形がみられるほかはすべて小破片である。杯は赤彩を施したものがみられる。

1・2は須恵器杯身模倣杯である。いずれも体部は比較的浅い。1は口縁部は内傾し、体部の一部を除いてヘラ磨きする。2は口縁部はほぼ直立し、口縁部外面と体部内面はヘラ磨きで、口縁部内面はナデ。いずれも内外面に黒色処理を施す。

3は高杯である。脚柱部のみが遺存する。外面はヘラ削りの後、ヘラナデする。

4・5は甕である。4は小形で球形の胴部をもち、口縁部は短い。底部から胴部下半部の外面は被熱した痕跡がみられる。口縁部外面には輪積み痕がみられる。5は球形の胴部をもつが、



第41図　竪穴住居044出土遺物

胴部最大径は上半部にある。口縁部は強く外反する。

6は甑で、一孔形態である。口縁部には歪みがみられ、外面は被熱により器面が荒れている。

竪穴住居047（第42・43図、図版39～41）　［土器観察表P268］

須恵器蓋1点、杯6点、鉢2点、高杯1点、壷1点、甕13点、甑1点、土製支脚2点が図示できた。図示できた遺物の数は、古墳時代の竪穴住居のなかでは最も多い。しかし、甕は口縁部や底部だけで、全体を復元できたものは少ない。出土状況は床面から多少浮いているものがほとんどである。本竪穴住居を廃絶した後、あまり埋まらない時点に、集中的に投棄されたものと思われる。

図示できなかった資料の総数は1,075点で、破片数も最も多い。土師器がほとんどで、須恵器は本竪穴住居に伴うものではない。土師器甕のなかにやや大きいものがみられるほかは、すべて小破片である。そのほかに球状土錘と小型土器の小破片がみられる。

1は須恵器蓋である。古墳時代の遺構から出土したもので、唯一図示することができたものである。小破片で、復元によるところが多い。天井部はあまり高くなく、返りも短い。

2～7は杯である。2は椀形のもので、口縁部は短く内彎する。調整はナデで、体部外面は被熱により器面が荒れる。3は須恵器杯身模倣杯である。体部外面を除いてヘラ磨きで、内面に黒色処理を施す。4～6は須恵器杯蓋模倣杯である。4は体部外面の稜はあまり明瞭ではない。口縁部内外面はナデで、体部内面はヘラナデ。5は内外面ともに器面が荒れている。口縁部外面に輪積み痕がみられる。6は体部は浅く、口縁部は大きく外反する。内外面はヘラナデで、外面は赤彩、内面は黒色処理を施す。高杯の可能性もある。7は椀形で、大形のものである。深い体部から外面に稜を作り、口縁部は外反する。内外面共に器面は荒れる。

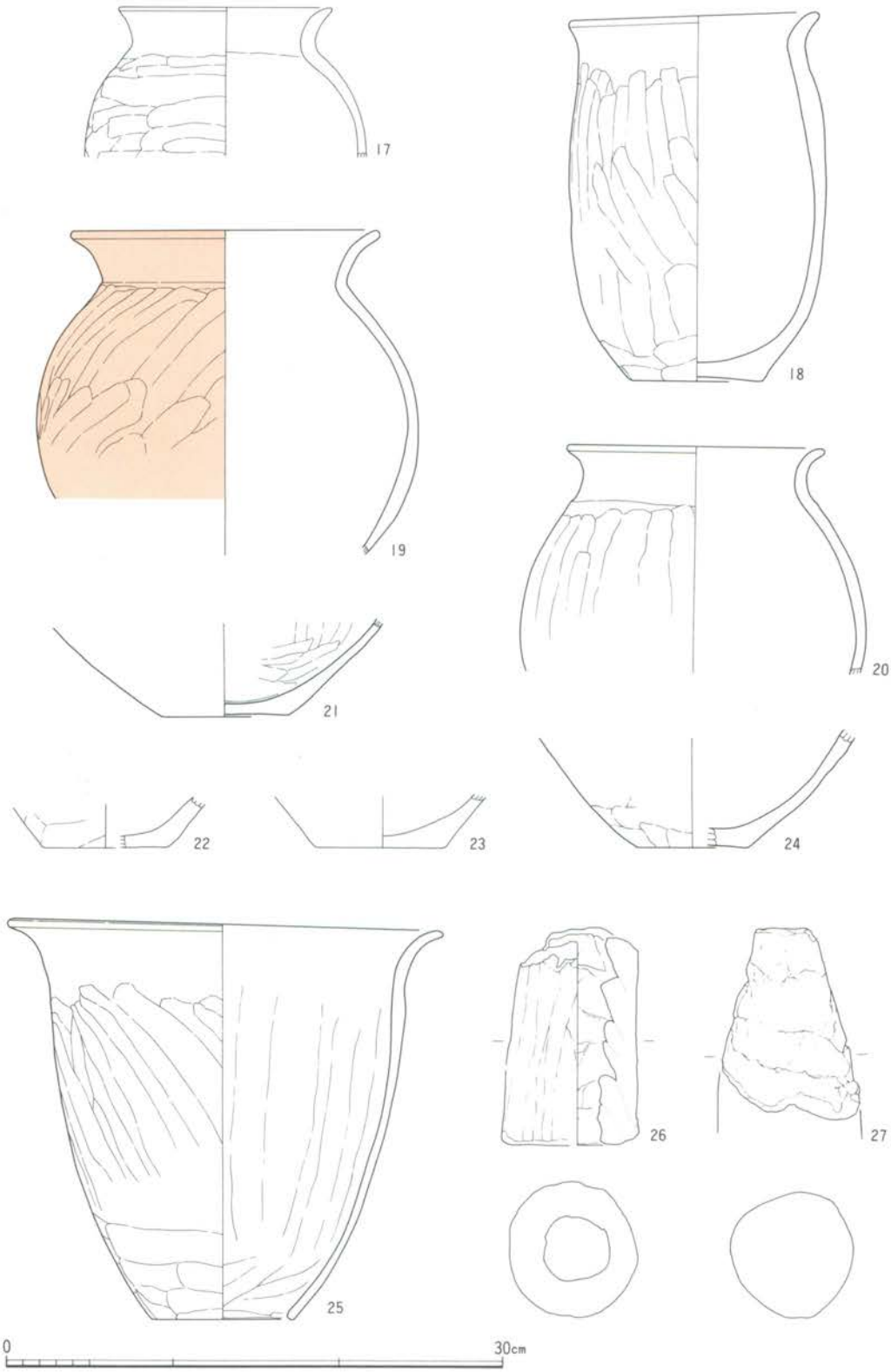
8・9は鉢である。8は浅く、口縁部はやや尖る。体部外面はヘラナデで、ほかはナデ。9は深いもので、底部が突出している。器面は全体的の荒れ、底部内面は摩耗している。

10は高杯である。杯部は浅い皿状で、口縁部は緩やかに外反する。脚柱部は太く、裾はあまり開かない。杯部内面はヘラナデで、口縁部外面と脚部内面から裾部外面はナデ。杯部内面は黒色処理を施す。

11は壷である。肩を強く張り、底部は丸底である。胴部内面はヘラナデで、外面は器面が荒れている。

12～24は甕である。12～18は長胴の甕である。12は外面全体が被熱により器面が荒れて、調整等が不明瞭であるが、ヘラ削りの後にヘラナデをしているものと思われる。13・14は胎土や色調などから同一個体と思われる。15・16は口縁部は短く外反する。いずれも外面の器面が荒れている。17は胴部外面の整形は縦の後に横のヘラ削りを行っており、ほかの甕と異なっている。器面は全体に荒れている。18は胴をほとんど張らず、口縁部は短く外反する。19・20は球

第42図　竪穴住居047出土遺物 (1)



第43図　竪穴住居047出土遺物 (2)

形の胴部をもつ甕である。19の胴部外面はヘラ削りの後にヘラナデ。被熱により器面が荒れているが、外面は赤彩の痕跡がみられる。20はやや長胴化傾向がみられるものである。器面は荒れている。21～24は底部で、いずれも器面は荒れている。

25は甑で、一孔形態である。内面はやや荒いヘラナデ。外面は被熱により器面が荒れている。

26・27は土製支脚である。26は中空で、内面に輪積み痕を明瞭に残す。被熱した痕跡はあまりみられず、実際に支脚として使用されたかは疑問である。遺存長12.9cm、径7.8cmを計る。27は三角錐状のもので、被熱し表面はやや脆くなっている。遺存長11.3cm、上部推定径3.5cmを計る。

竪穴住居050（第44図）　［土器観察表P268］

杯1点、土製品1点のみが図示できた。図示できなかった資料の総数は69点で、土師器甕が大部分を占めるが、すべて小破片である。須恵器は本竪穴住居に伴うものではない。

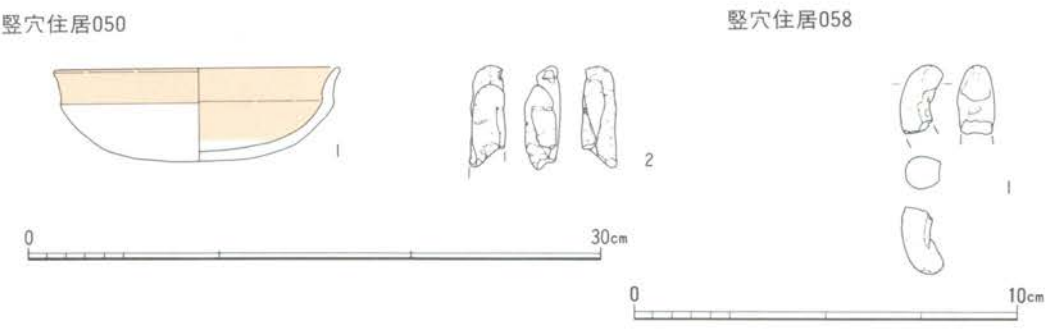
1は杯である。須恵器杯蓋模倣杯で、口縁部は外反する。口縁部内面は器面が荒れている。体部外面と底部内面を除いて赤彩を施す。

2は紐状の土製品である。竪穴住居037D出土のものと同じ性格のものと思われる。形状は粘土紐を折り曲げて束ねたような状態である。粘土紐が何本であるかは不明。色調は褐色で、雲母粒を混入する。遺存長52㎜、径19㎜を計る。

竪穴住居058（第44図）

土製品1点のみが図示できた。図示できなかった資料の総数は86点である。土師器甕が多く、胴部を除いてすべて小破片である。須恵器は出土していない。

1は土製品で、用途・性格は明らかではない。器面は被熱により著しく荒れている。色調は褐色である。遺存長35㎜、径15～19㎜を計る。竪穴住居042出土のものと同様、把手の可能性もある。



第44図　竪穴住居050・058出土遺物

2．土坑

遺構

土坑055（第45図）

位置　カ８グリッド。調査区中央、台地斜面に位置する。

形状・規模　２基の細長い遺構が接している。遺構の深さは浅い。性格は不明である。

埋土　黒褐色土層とローム土混じりの暗黄褐色土層が堆積している。

遺物出土状態　少数の遺物が流れ込んだ状態で出土している。

土坑078（第45図）

位置　カ９グリッド。調査区中央、台地斜面に位置する。

形状・規模　長さ５m、幅1.5mの細長い形状で、遺構の深さは浅く、性格は不明である。

埋土　主に黒褐色土層と暗褐色土層が堆積している。

遺物出土状態　遺構底面よりかなり高い位置から遺物が出土している。

土坑111（第45図）

位置　ヨ７グリッド。調査区中央北側、近世遺構群019に混じって検出された。

形状・規模　径約0.8mの円形の土坑である。深さは0.4mである。

遺物出土状態　若干の遺物が出土している。

遺物（第11表）

土坑055（第46図、図版41）　［土器観察表Ｐ268］

杯・甕各１点が図示できた。図示できなかった資料の総数は21点で、土師器のみが出土している。すべて小破片である。

１は椀形の杯で、口縁部は外面に稜を作り、緩やかに外反する。底部内外面を除いて赤彩を施す。体部外面の赤彩される範囲についてヘラナデを行う。

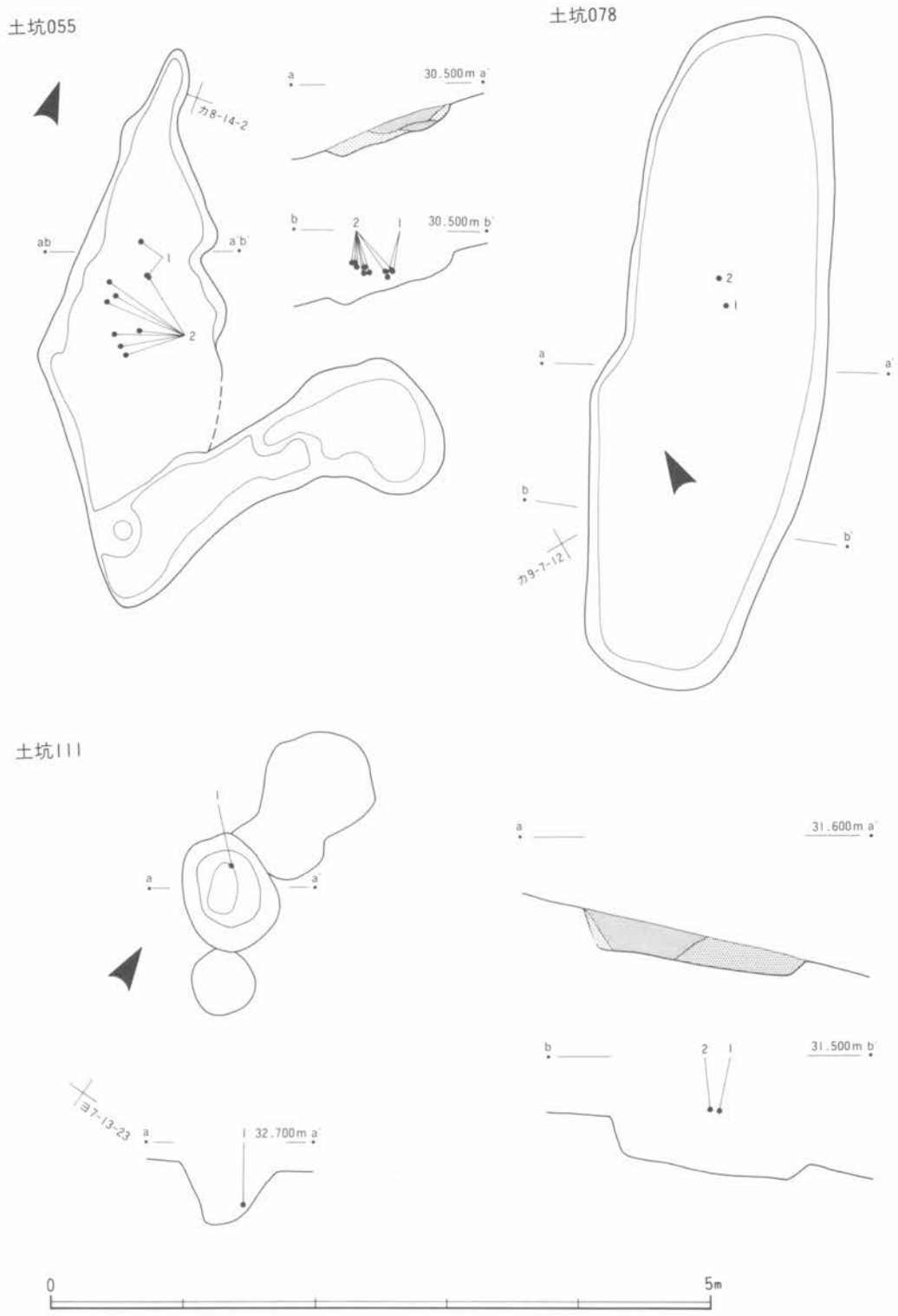
２は長胴の甕で、最大径を胴部中位にもつ。胴部内面に輪積み痕がみられる。

土坑078（第46図、図版41）　［土器観察表Ｐ268］

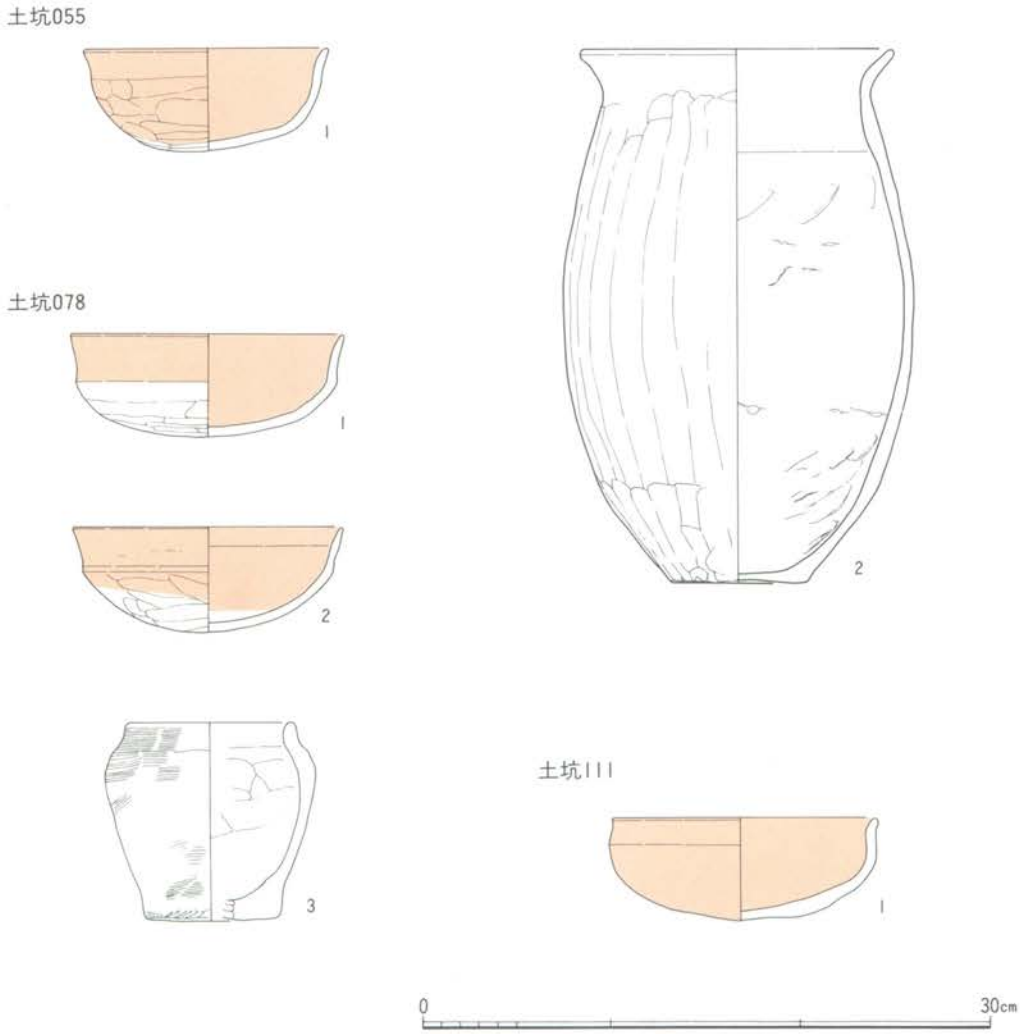
杯２点、鉢１点が図示できた。出土状況は、いずれも底面から浮いた状態である。３の鉢は埋土中からの出土である。図示できなかった資料の総数は13点で、すべて小破片である。

１・２は須恵器杯蓋模倣杯で、口縁部はいずれも外反し、口縁部内外面と体部内面に赤彩を施す。１は外面の稜がやや弱い。２はやや体部がやや深く、口縁部外面に輪積み痕がみられる。

３は小形の鉢である。口縁部は外反気味に内傾する。外面に刷毛目痕が残る。



第45図　土坑055・078・111



第46図　土坑055・078・111出土遺物

土坑111（第46図）　［土器観察表P268］

杯1点のみが図示できた。このほかに出土している遺物はない。

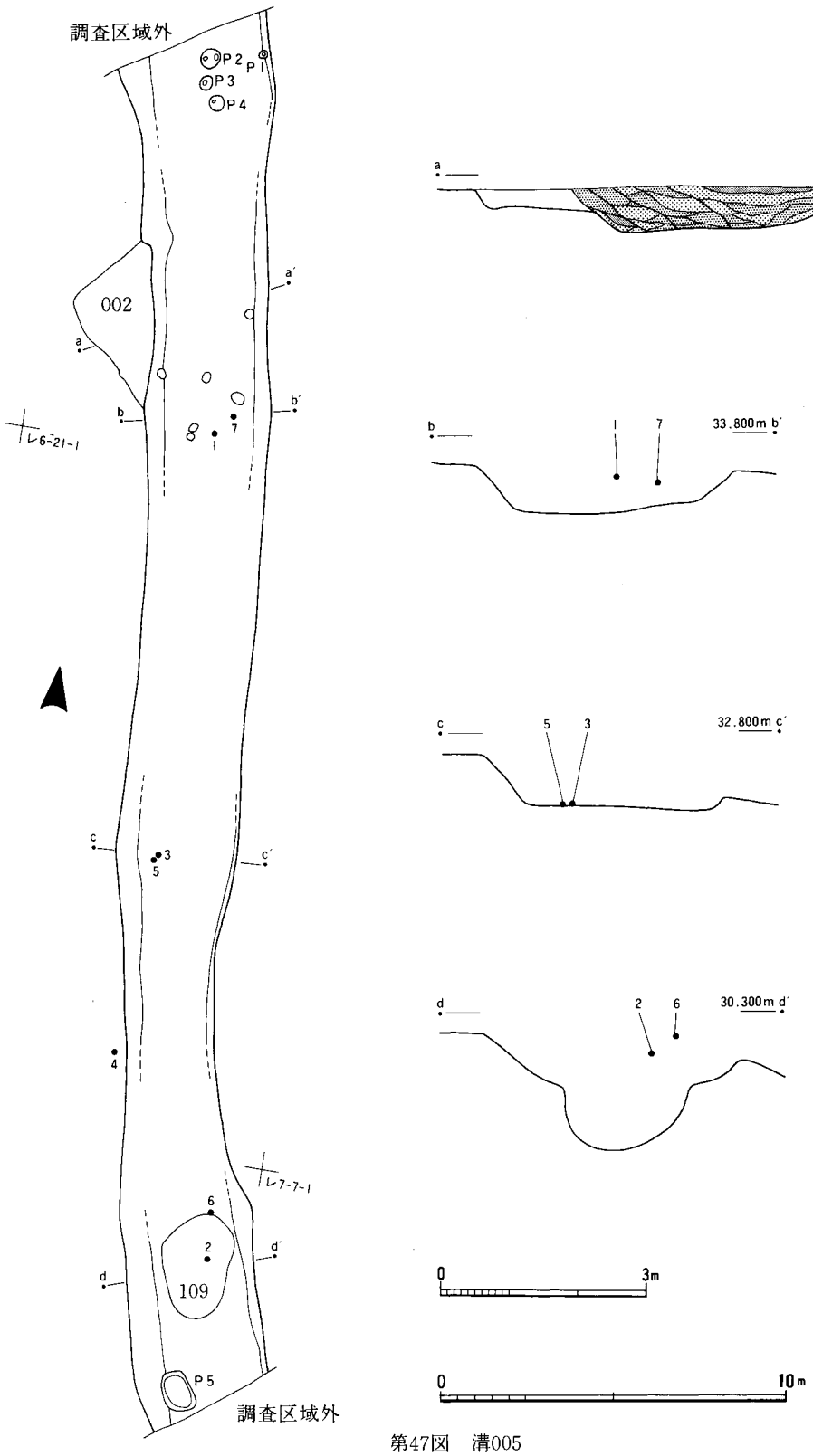
1は椀形の杯である。口縁部は直立気味に立ち上がり、口唇部は外反する。器面は全体的に荒れ、特に口唇部の遺存状態はきわめて悪い。内外面に赤彩が施される。

3．溝005

遺構（第47図）

位置　レ6・7グリッド。調査区東側、台地縁辺から斜面にむかってほぼ南北にはしる。竪穴住居002を破壊する。溝の南部に土坑109がある。

形状・規模　溝の底面はほぼ平坦で、溝の断面は台形を示す。上辺の幅は約3.5m、下辺の幅


調査区域外
P2
P1
P3
P4
002
a
a′
b
b′
7
1
L6-21-1
c
c′
3
5
4
L7-7-1
6
2
d
d′
109
P5
調査区域外
a
33.800m a′
b
1
7
33.800m b′
c
5
3
32.800m c′
d
2
6
30.300m d′
0
3m
0
10m

第47図　溝005

は約2.5mである。長さは40m検出した。ところどころに、性格不明な大小の土坑がある。

埋土　上層・中層に黒褐色土層とローム土混じりの暗黄褐色土層が堆積し、その下層に暗褐色土層が堆積している。土層の堆積状態から、この溝は徐々に幅が狭められたと考えられる。

遺物出土状態　埋土中から少量の土器片が出土している。これらの土器片は流れ込んだ可能性が強い。

遺物（第48図、図版41、第11表）　［土器観察表P268］

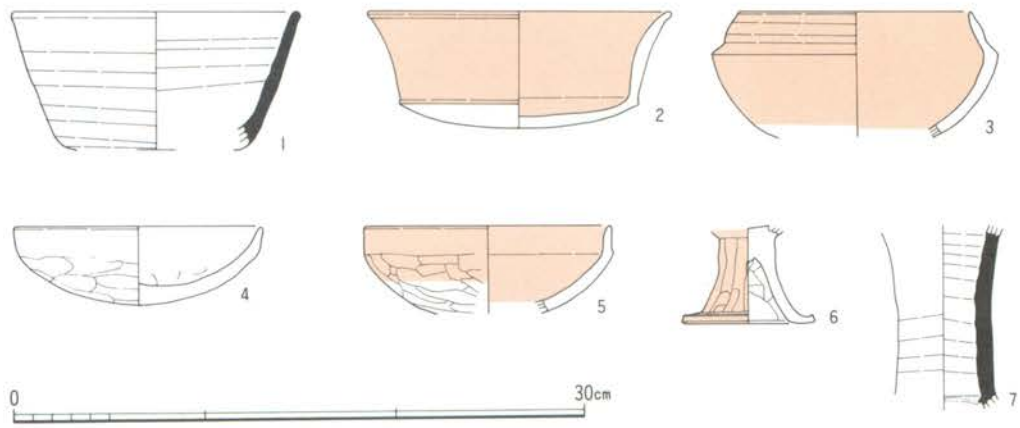
須恵器杯1点、杯4点、高杯1点、須恵器長頸壷1点が図示できた。出土状況は3・5の杯は底面からの出土で、それ以外は浮いた状態である。図示できなかった資料の総数は200点で、土師器甕が多い。土師器甕のなかに多少大きい破片がみられるが、大部分が小破片である。土師器杯や須恵器のなかに歴史時代の遺物がみられるが、古墳時代の遺物が主体を占めている。

1は須恵器杯である。箱形のもので、体部は直線的に開き、口唇部はわずかに外反する。

2～5は杯で、2は須恵器杯蓋模倣杯である。体部は浅く、口縁部は大きく外反する。内面の口縁部下半から体部はヘラ磨きで、体部外面はヘラナデ。体部外面と内面の底部を除いて赤彩を施す。3は須恵器杯身模倣杯である。体部は深く、口縁部はやや厚みをもちながら内傾する。体部内外面はヘラナデ。底部外面を除き赤彩を施す。4は椀形のもので、体部は浅く、口縁部はナデによって作り出される。体部内面はヘラナデ。5は須恵器杯蓋模倣杯で、口縁部は短く直立する。体部内面はヘラナデ。

6は高杯で、脚部のみが遺存する。裾端部はわずかに窪んでいる。脚柱部外面はヘラナデ。外面は赤彩を施し、内面にも一部付着する。

7は須恵器長頸壷で、頸部のみが遺存する。外面の一部に自然釉がみられる。



第48図　溝005出土遺物

第2節　歴史時代

1．竪穴住居

遺構

歴史時代の遺構として、竪穴住居45軒、掘立柱建物6棟、柵列2基、土坑3基が検出された。これらの遺構は、調査区全体の台地先端から台地斜面にかけて分布していた。重複している遺構が若干見受けられた。掘立柱建物は、古墳時代と歴史時代の竪穴住居に隣接して設けられている例が多いので、竪穴住居とほぼ同じ年代に属すると思われる。掘立柱建物の詳細な時期決定は不可能であるが、一応、歴史時代の遺構としてあつかう。

竪穴住居003（第49図、図版7）

位置　タ6グリッド。調査区東側、台地縁辺に位置する。

形状・規模　一辺3.6mのほぼ正方形を示す。主軸は西を向く。

埋土　最上層に黒褐色土層が堆積し、その下層に暗褐色土層が堆積している。壁ぎわおよび最下層にローム土混じりの暗黄褐色土層が堆積している。

床面　緩やかな凹凸を示し、さほど良好な床面ではない。

柱穴・貯蔵穴　出入口用ピットが1本検出された。

竈　西壁中央に位置する。遺存状態は良好である。煙道部と袖部に竈構築材が残っていた。

遺物出土状態　住居内全体の埋土中からかなり多くの遺物が出土している。

竪穴住居004（第50図）

位置　タ6グリッド。調査区東側、台地縁辺に位置する。調査区境界域にあり、北半分が調査区外に広がる。

形状・規模　南壁の長さが5m弱ある。おそらく一辺5mの正方形を示すであろう。

埋土　ローム土混じりの暗黄褐色土層が上層と中層に堆積し、暗黄褐色土層の堆積にはさまれて、黒褐色土層と暗褐色土層が堆積している。自然な流入堆積というよりも、埋め戻された感じを受ける。

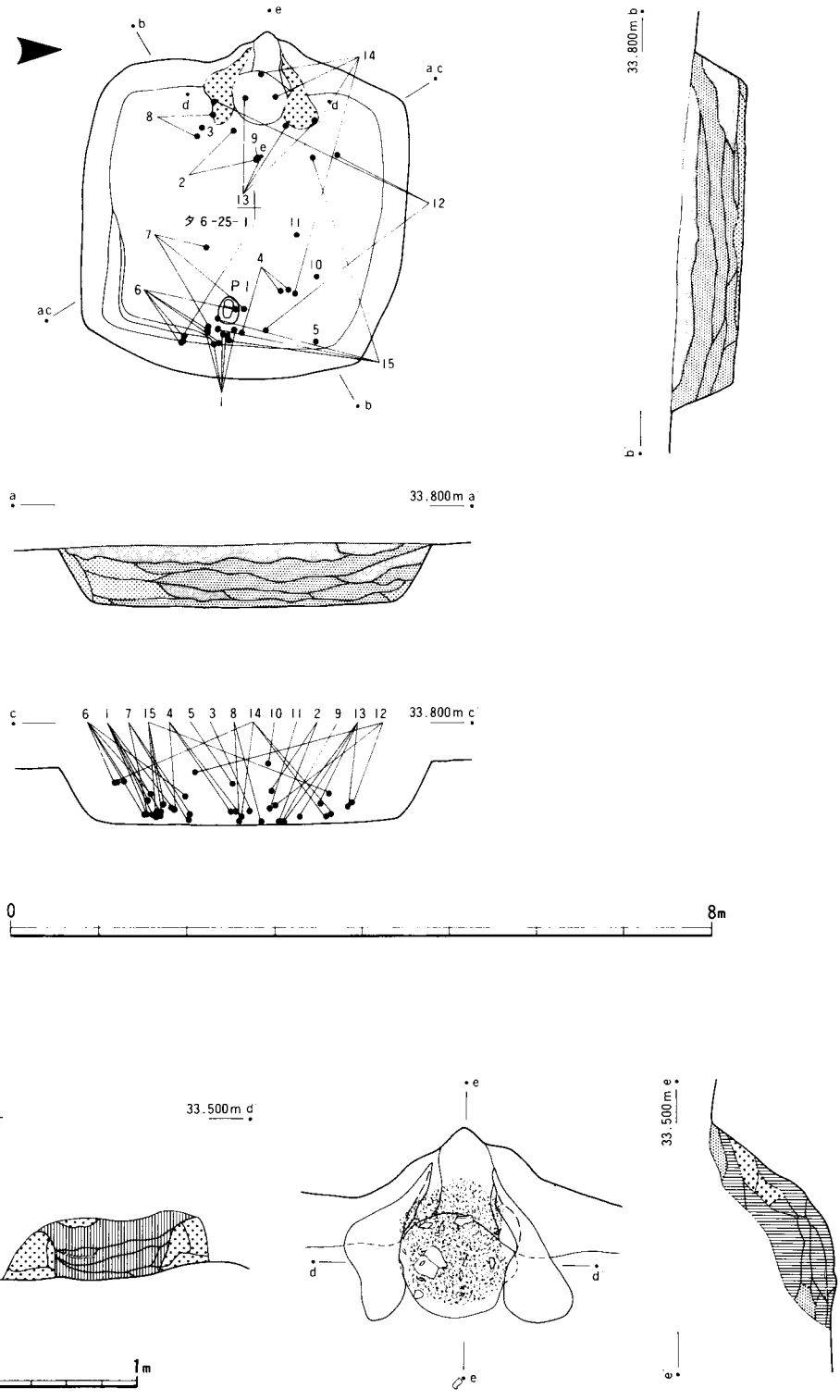
床面　貼り床である。

柱穴・貯蔵穴　主柱穴2本、出入口用の支柱穴2本が検出された。

竈　調査区外に存在すると思われる。

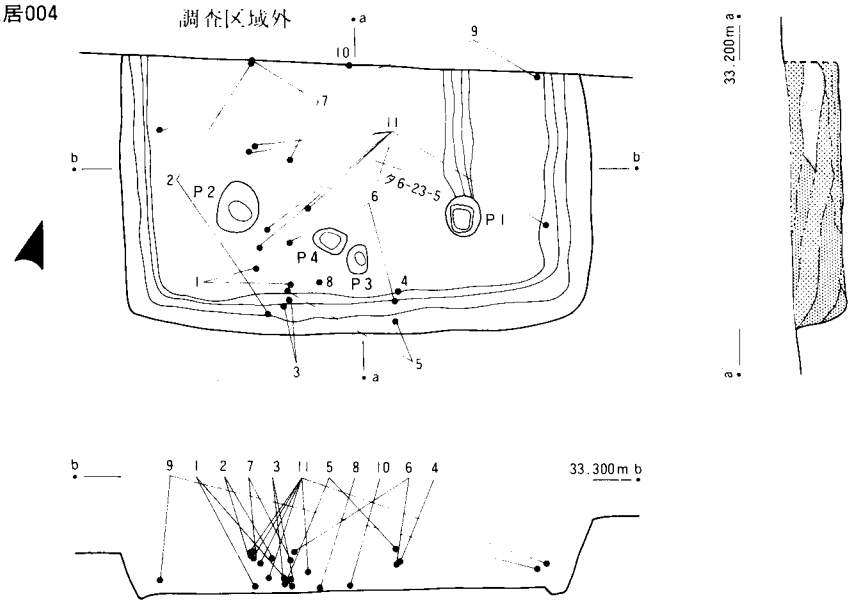
壁溝　調査できた範囲内では全周している。住居内東側、P1から北へ間仕切の溝が1本はしる。

遺物出土状態　床面からやや浮いた状態で比較的多くの遺物が出土している。

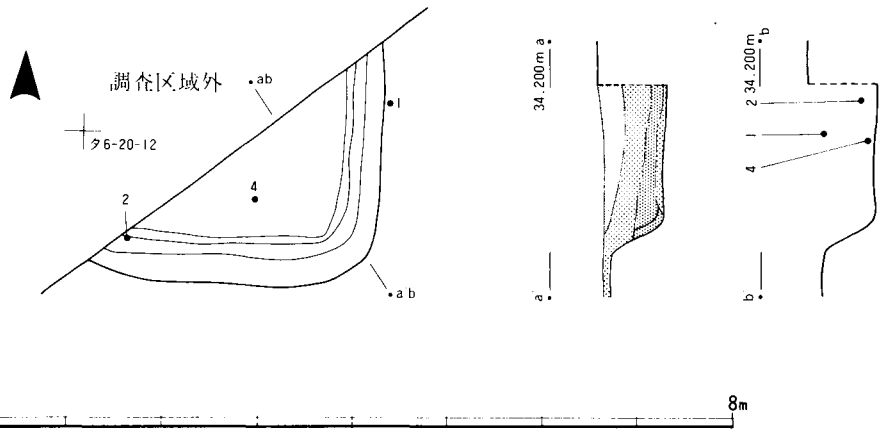


第49図　竪穴住居003

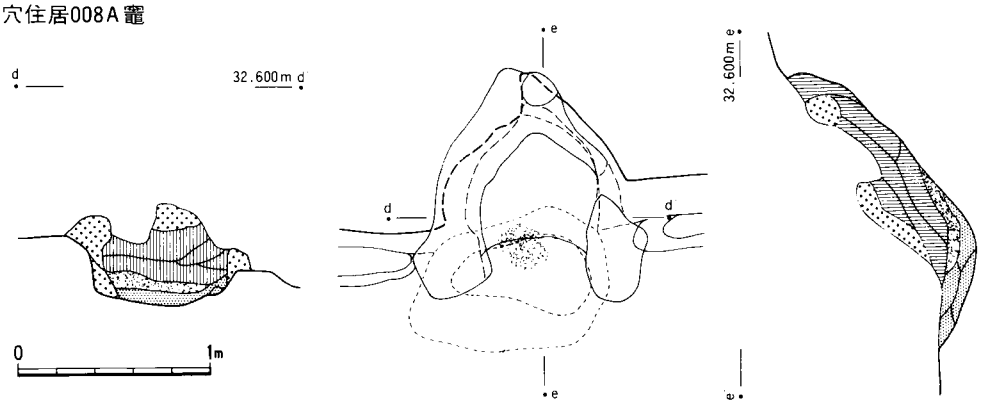
竪穴住居004



竪穴住居006



竪穴住居008A竈



第50図　竪穴住居004・006・008A竈

竪穴住居006（第50図）

位置　タ６グリッド。調査区東側、台地縁辺に位置する。調査区境界域にあり、南東コーナーのみ調査できた。残りの大部分は調査区外にある。

形状・規模　全体の形状・規模は不明である。

埋土　最上層に黒褐色土層が堆積し、中層にローム粒子混じりの暗黄褐色土層と暗褐色土層が堆積している。

床面　比較的硬い。

壁溝　調査できた範囲内では全周している。

遺物出土状態　埋土中から若干の遺物が出土している。

竪穴住居008A（第50・51図、図版３）

位置　タ７グリッド。調査区東側、台地斜面に位置する。竪穴住居008Bと重複する。

形状・規模　一辺約４ｍのほぼ正方形を示す。主軸は北東を向く。

埋土　上層に暗褐色土層とローム土混じりの暗黄褐色土層が堆積し、その下層に黒褐色土層が堆積している。壁ぎわの下部にローム土混じりの暗黄褐色土層が堆積している。住居内中央に焼土が分布していた。

床面　竈前面から住居中央まで、きわめて硬い。

竈　北東壁中央に位置する。遺存状態はさほど良好でない。焼けた火床を検出した。

壁溝　全周する。

遺物出土状態　住居全体にわたり、床面から浮いた状態で比較的多く出土している。

竪穴住居009（第51図、図版７）

位置　タ７グリッド。調査区東側、台地斜面に位置する。竈が検出されず、壁高もさほど高くない。また柱穴の配置も通常の竪穴住居と相違するため、この遺構が竪穴住居でない可能性もある。

形状・規模　横3.7m、縦３ｍの横長の長方形を示す。

埋土　暗褐色土層と黒褐色土層が堆積している。

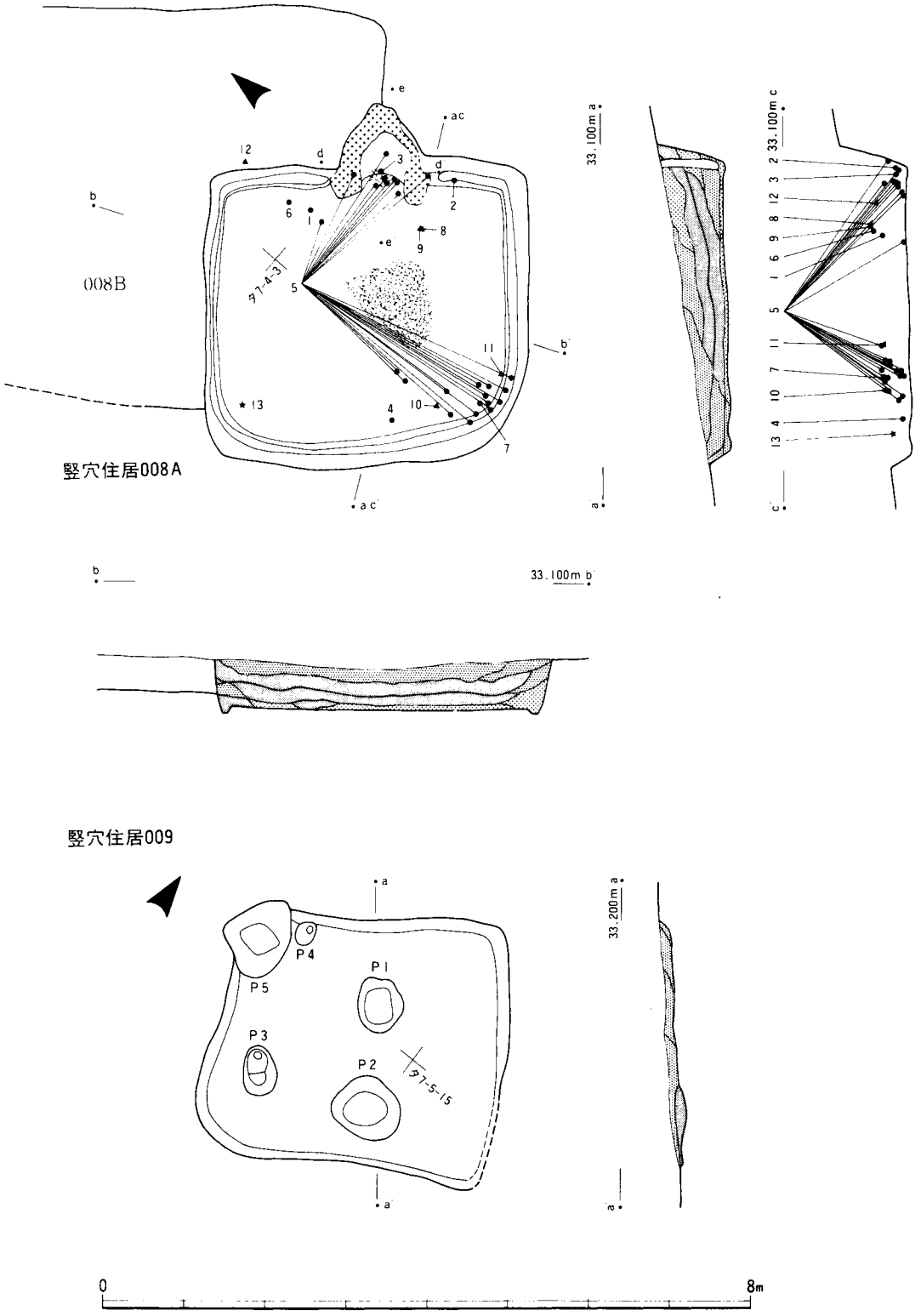
床面　軟らかく、さほど明瞭ではない。

柱穴・貯蔵穴　ピットが５本検出されたが、はたして真正な柱穴であるかどうか疑わしい。

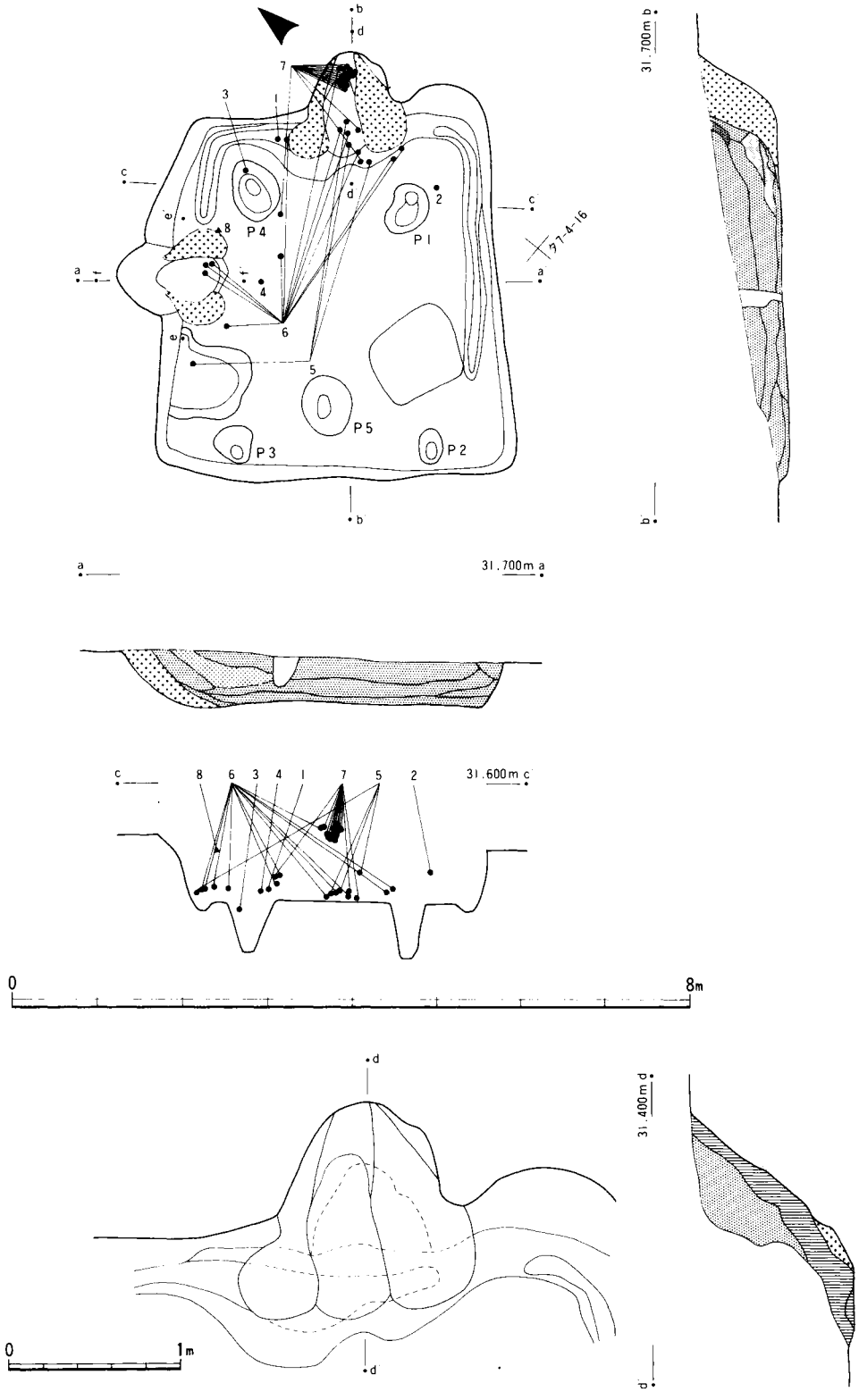
竪穴住居012（第52・53図、図版８）

位置　タ７グリッド。調査区東側、台地斜面に位置する。

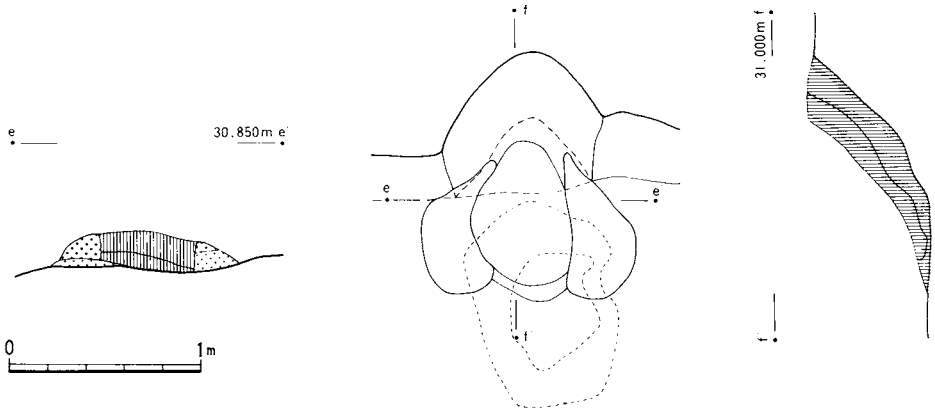
形状・規模　縦4.7m、横4.5mのやや縦長の長方形を示す。主軸は東を向く。竈が北西壁と



第51図　竪穴住居008A・009



第52図　竪穴住居012



第53図　竪穴住居012竈

北東壁から検出された。

埋土　主に暗褐色土層が堆積し、壁ぎわに黒褐色土層とローム土混じりの暗黄褐色土層が堆積している。

床面　ローム粒子、粘土粒子の混入した貼り床である。壁ぎわは軟弱で、はっきりしない。

柱穴・貯蔵穴　主柱穴4本、支柱穴1本が検出された。

竈　北西壁中央に旧竈が設けられ、その後北東壁中央に新竈が作り替えられた。新竈の遺存状態はさほどよくない。袖部に少し竈構築材が残っていた。

壁溝　東側半分に巡る。

遺物出土状態　床面から浮いた状態で少量出土している。

竪穴住居013（第54図、図版8）

位置　タ7グリッド。調査区東側、台地縁辺に位置する。

形状・規模　縦4.2m、横4.5mのややいびつな正方形を示す。

埋土　主に黒褐色土層が堆積している。壁ぎわおよび住居内下部にローム土混じりの暗黄褐色土層が堆積している。南西コーナー付近に焼土が狭い範囲で分布していた。

床面　黄褐色粘土、黄褐色ロームを使用した貼り床で、比較的堅緻である。

柱穴・貯蔵穴　ピット5本が検出された。

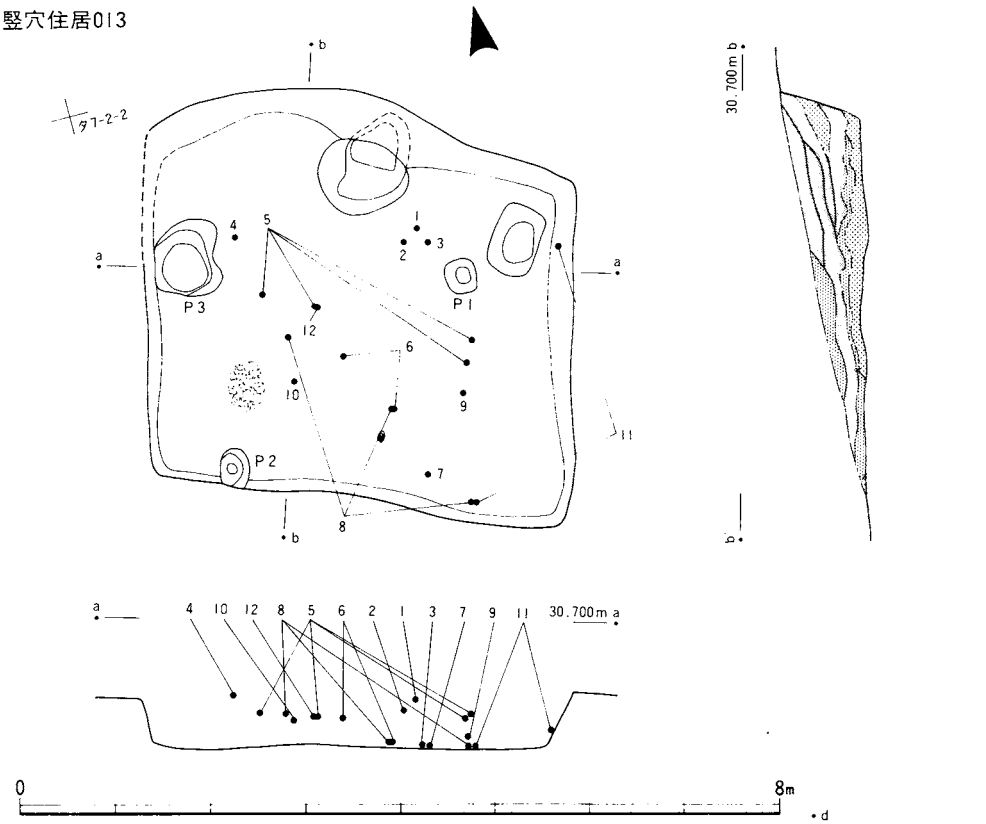
遺物出土状態　埋土中から散漫な状態で、少量出土している。

竪穴住居014（第54図、図版8）

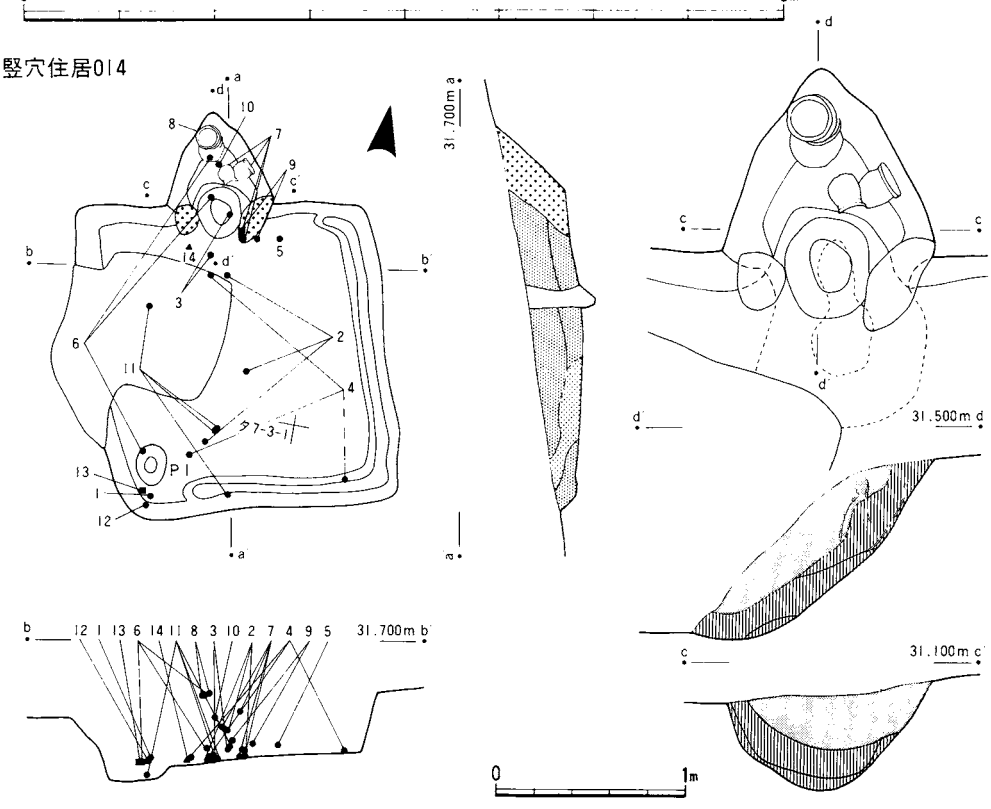
位置　タ6・7グリッド。調査区東側、台地縁辺に位置する。

形状・規模　一辺約3.5mのほぼ正方形を示す。主軸は北を向く。

竪穴住居013

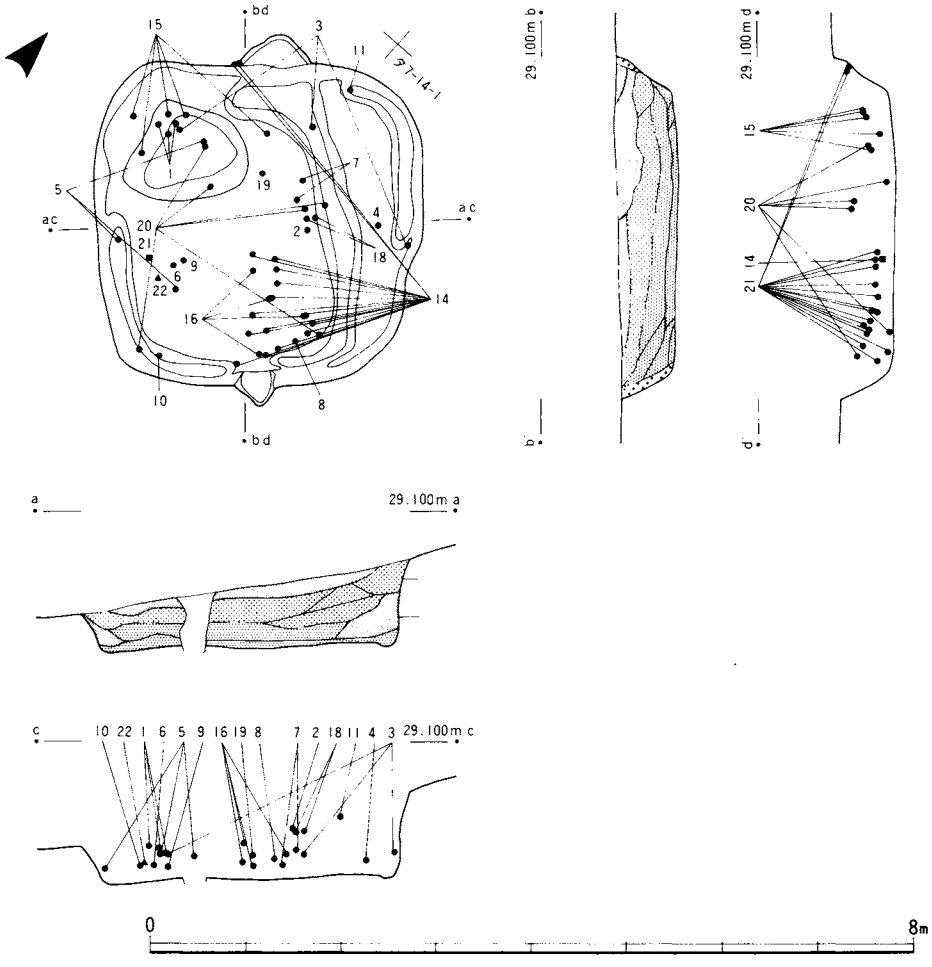


竪穴住居014

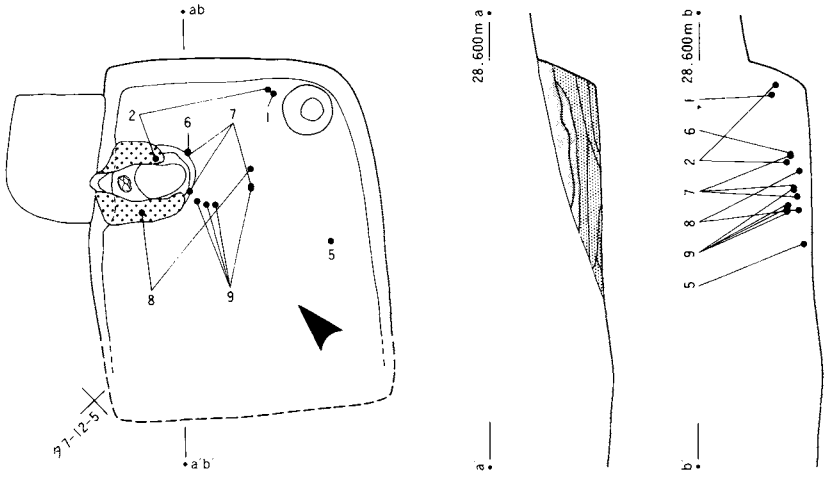


第54図　竪穴住居013・014

竪穴住居015



竪穴住居016



第55図　竪穴住居015・016

埋土　主に暗褐色土層が堆積している。

床面　竈前面が硬質である。

柱穴・貯蔵穴　ピットが１本検出された。

竈　北壁中央に位置する。遺存状態はさほど良好ではない。

壁溝　東壁と南壁に巡る。

遺物出土状態　埋土中から散漫な状態で、少量出土している。竈煙道部および掛け口付近から甕が出土している。

竪穴住居015（第55図、図版９）

位置　タ７グリッド。調査区東側、台地斜面に位置する。

形状・規模　一辺3.5mの隅丸正方形を示す。主軸は北西を向く。竈が２基検出された。

埋土　上層に黒褐色土層が堆積し、下層に暗褐色土層が堆積している。中間にローム土混じりの暗黄褐色土層が堆積している。

床面　黄色砂質層で、貼り床はない。

竈　南東壁中央に旧竈があった。北西壁中央に新竈があるが、遺存状態はきわめて悪い。

壁溝　北側および南側コーナーに巡る。遺構中央やや北よりに溝がはしる。

遺物出土状態　住居内全体にわたり、かなり浮いた状態で出土している。

竪穴住居016（第55図、図版９）

位置　タ７グリッド。調査区東側、台地斜面に位置する。南西部分が削平された。

形状・規模　残存する北東壁の長さは3.1mである。主軸は北西を向く。

埋土　上層に黒褐色土層が堆積し、その下層に暗褐色土層が堆積している。

床面　黄褐色粘土で硬い。

柱穴・貯蔵穴　ピットが東側コーナーから１本検出された。

竈　北西壁に存在する。遺存状態はよくない。

遺物出土状態　床面から浮いた状態で少量出土している。

竪穴住居017B（第56図、図版９）

位置　タ７グリッド。調査区東側、台地斜面に位置する。竪穴住居017Aと重複する。

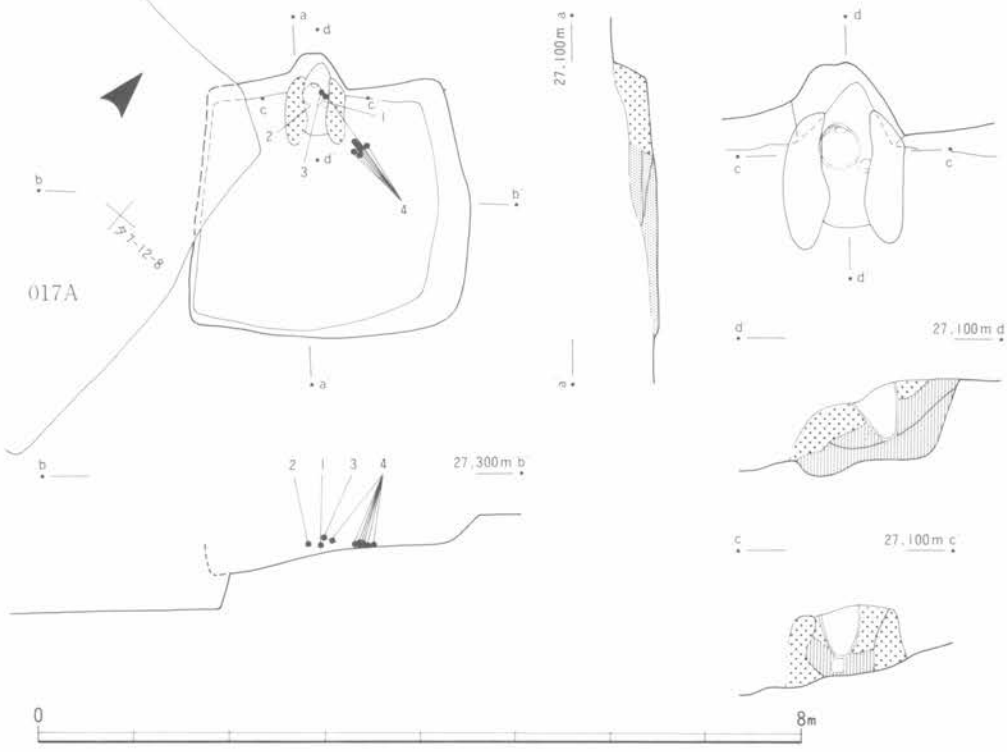
形状・規模　一辺2.6mの正方形を示す。主軸は北西を向く。

埋土　主に暗褐色土層が堆積している。

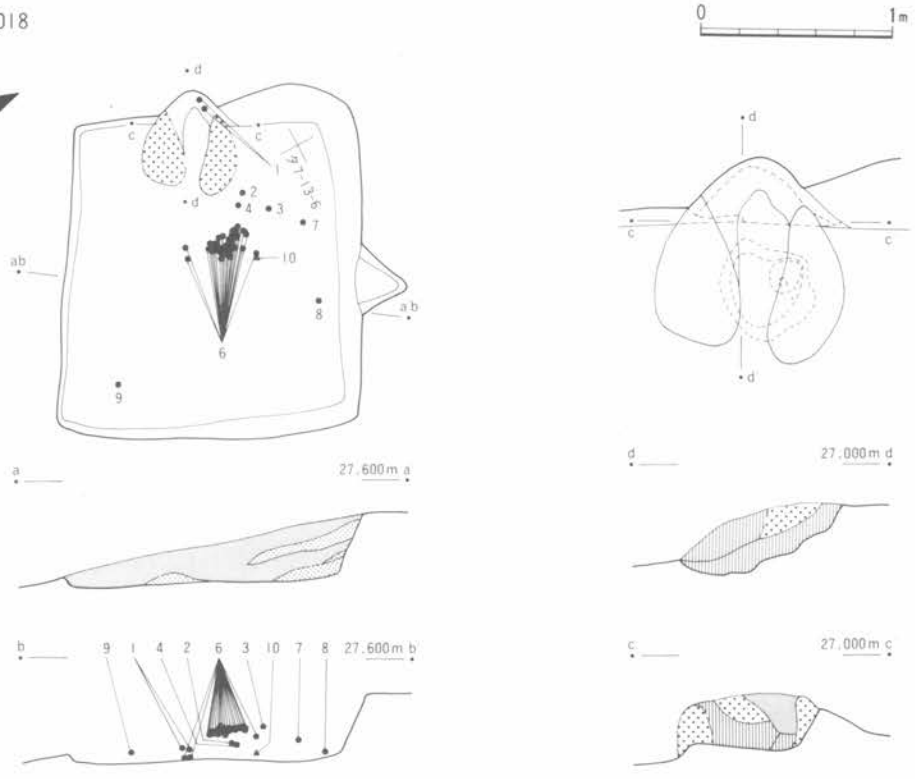
床面　竈前面に硬い面があった。

竈　北西壁の中央にある。遺存状態は良好である。天井部と袖部に竈構築材が残っていた。

竪穴住居017B



竪穴住居018



第56図　竪穴住居017B・018

掛け口から甕が出土している。

遺物出土状態　住居全体にわたり、床面近くから少量の遺物が出土している。

竪穴住居018（第56図、図版10）

位置　タ７グリッド。調査区東側、台地斜面に位置する。

形状・規模　一辺３m強の正方形を示す。主軸は北西を向く。竈が２基検出された。

埋土　主に黒褐色土層が堆積し、部分的にローム粒子混じりの暗黄褐色土層が堆積している。

床面　竈前面に硬い面があった。

竈　北東壁の中央に旧竈が、北西壁の中央に新竈が位置する。北西壁の竈遺存状態は良好である。天井部と袖部に竈構築材が残っていた。

遺物出土状態　床面からやや浮いた状態で遺物が出土している。

竪穴住居020A（第57図）

位置　カ７グリッド。調査区中央北側、調査区の境界付近から竪穴住居が４軒重複して見つかった。この竪穴住居はそのうちの１軒である。南西側コーナー以外の大部分は調査区外に広がる。竪穴住居020Bと重複する。

形状・規模　調査ができた西壁の長さは4.4mあった。全体の形状・規模は不明である。

埋土　上層に暗褐色土層が堆積し、その下に黒褐色土層が堆積している。住居下部にはローム土混じりの暗黄褐色土層が堆積している。

床面　ロームブロックと暗褐色土の混入した土で構築されている。それほど硬くない。

柱穴・貯蔵穴　主柱穴１本が検出された。

竈　調査区外に存在すると思われる。

壁溝　南壁の一部に巡る。

遺物出土状態　床面からやや浮いて散漫な状態で出土している。

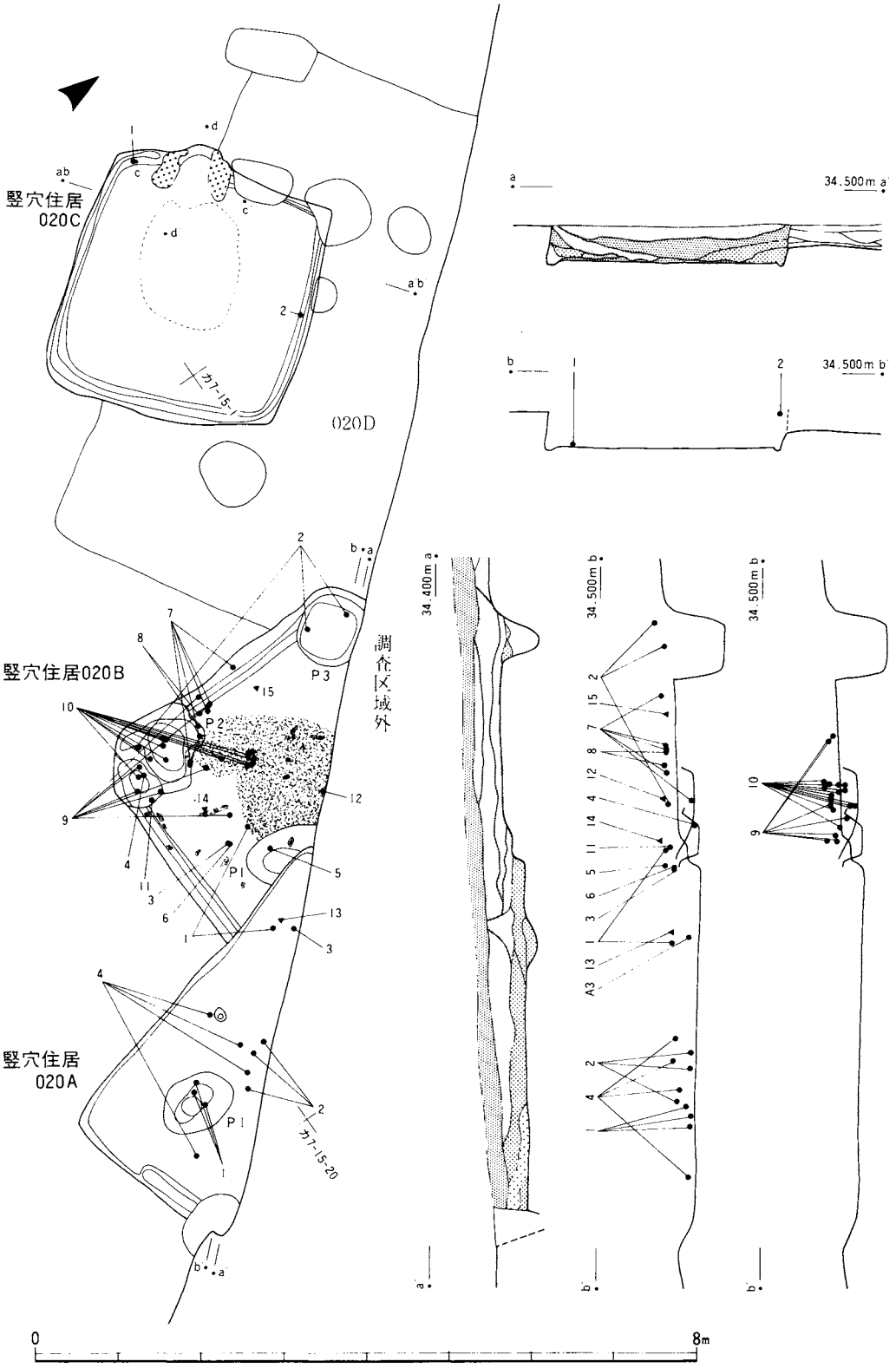
竪穴住居020B（第57図、図版10）

位置　カ７グリッド。調査区中央北側、調査区の境界付近から竪穴住居が４軒重複して見つかった。この竪穴住居はそのうちの１軒である。東半分は調査区外に広がる。竪穴住居020A、竪穴住居020Dと重複する。

形状・規模　調査ができた西壁の長さは4.4mあった。全体の形状・規模は不明である。

埋土　上層に暗褐色土層が堆積し、その下層に黒褐色土層が堆積している。住居中央に焼土が分布し、炭化材が散在する。

床面　比較的硬い。緩やかな凹凸が多い。



第57図　竪穴住居020A・020B・020C

柱穴・貯蔵穴　ピット３本検出されたが、主柱穴かどうかは不明である。

竈　調査区外に存在すると思われる。

壁溝　調査ができた範囲内では全周する。

遺物出土状態　住居全体にわたり、埋土中から出土している。

竪穴住居020C（第57・58図、図版10）

位置　カ７グリッド。調査区中央北側、調査区の境界付近から竪穴住居が４軒重複して見つかった。この竪穴住居はそのうちの１軒である。竪穴住居020Dと重複する。

形状・規模　一辺約３ｍのほぼ正方形を示す。主軸は北西を向く。

埋土　主に暗褐色土層と黒褐色土層が堆積している。壁ぎわの下部にローム土混じりの暗黄褐色土層が堆積している。

床面　細かい凹凸が著しい。住居中央は比較的堅緻だが、壁周辺はやや軟らかい。

竈　北西壁の中央やや西よりに位置する。遺存状態は良好である。天井部、袖部に竈構築材が残存している。

壁溝　全周する。

遺物出土状態　住居内の埋土中に散在して、少量の遺物が出土している。

竪穴住居021（第58図、図版11）

位置　カ７グリッド。調査区中央北側、台地縁辺に位置する。

形状・規模　一辺約3.6mの正方形を示す。主軸は北を向く。

埋土　主に暗褐色土層と黒褐色土層が堆積している。

床面　竈前面から住居中央にかけて、硬い面がある。

竈　北壁の中央に位置する。遺存状態は良好である。煙道付近と袖部に竈構築材が残っていた。

壁溝　全周する。

遺物出土状態　住居全体にわたり、主に埋土中から出土している。

竪穴住居022A（第59図、図版11）

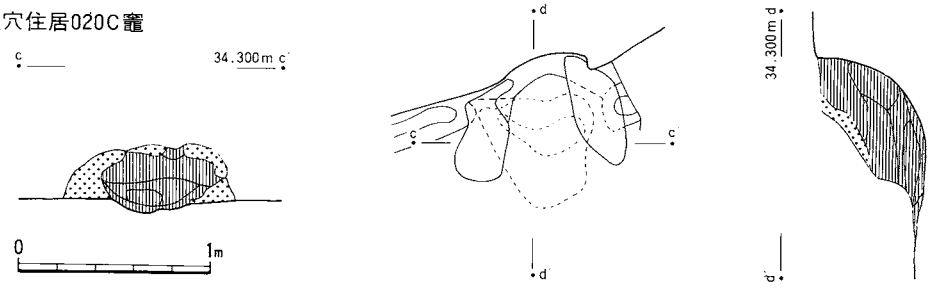
位置　カ７グリッド。調査区中央北側、台地縁辺に位置する。竪穴住居022Bと重複する。

形状・規模　一辺約3.2mの正方形を示す。主軸は北西を向く。

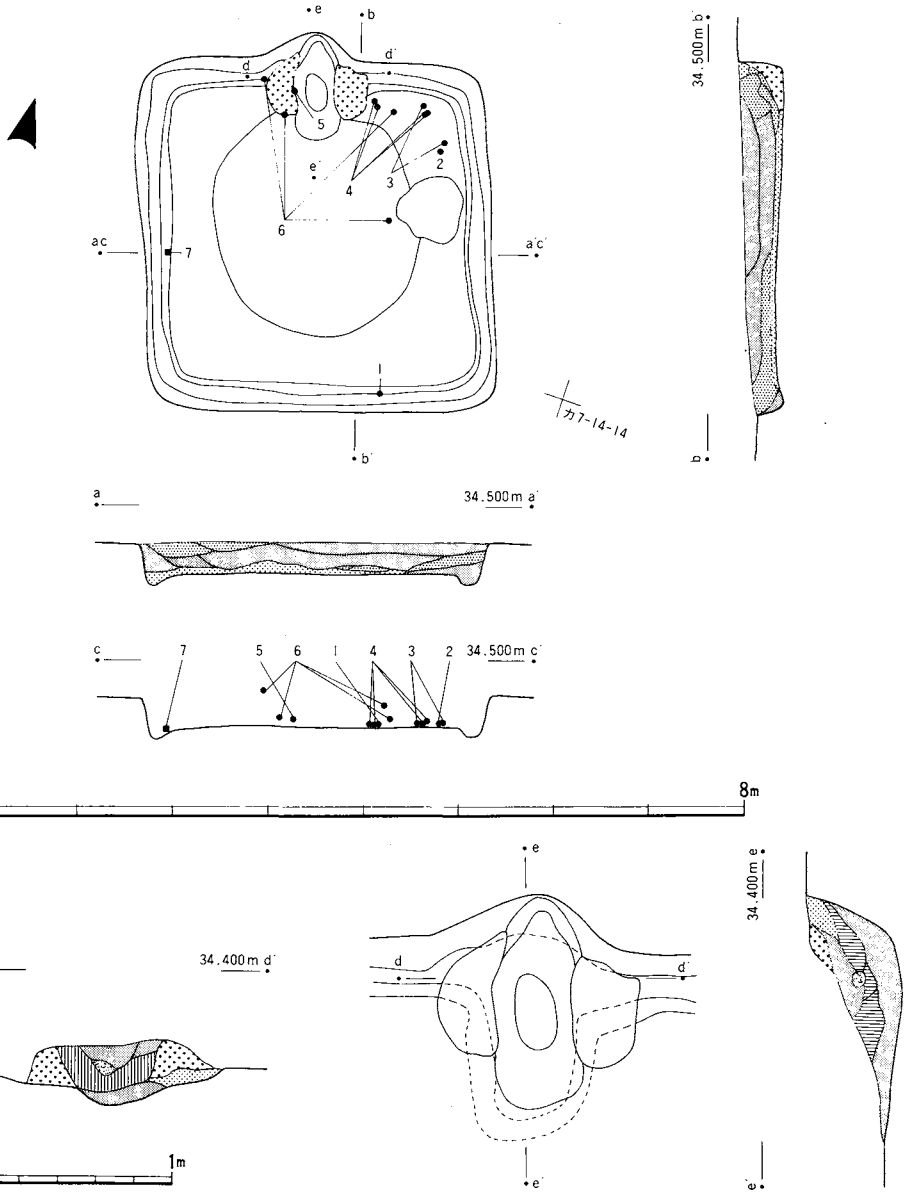
埋土　主に暗褐色土層と黒褐色土層が堆積し、最下層にローム土混じりの暗黄褐色土層が堆積している。

床面　竈前面に硬い面がある。

竪穴住居020C竈



竪穴住居021



第58図　竪穴住居020C竈・021

柱穴・貯蔵穴　北側コーナーからピットが1本検出された。

竈　北西壁の中央に位置する。遺存状態はさほどよくない。天井部と袖部に竈構築材が少量残っていた。

遺物出土状態　埋土中から、住居全体にわたって遺物が出土している。竈内の掛け口付近から甕、杯が出土している。

竪穴住居023（第60・61図、図版11）

位置　カ8グリッド。調査区中央、台地縁辺に位置する。

形状・規模　一辺6.1mの正方形を示す。主軸は北東を向く。

埋土　上層にローム土混じりの暗黄褐色土層が堆積し、その下層に暗褐色土層と黒褐色土層が堆積している。自然に流入して堆積したというよりも、埋め戻した感じを受ける。

床面　竈前面に硬い面がある。

柱穴・貯蔵穴　主柱穴4本、出入口用支柱穴1本が検出された。

竈　北東壁の中央に位置する。煙道部は破壊されていた。袖部には竈構築材が残っていた。火床部の残りがよかった。

壁溝　南東壁を除いて巡る。

遺物出土状態　住居内全体にわたり、埋土中から多数の遺物が出土している。特に鉄器の出土が目立つ。

竪穴住居024（第62図、図版12）

位置　カ8グリッド。調査区中央、台地縁辺に位置する。

形状・規模　一辺5.8mの正方形を示す。主軸は西を向く。竈は2基あった。

埋土　主に暗褐色土層と黒褐色土層が堆積している。

床面　竈前面に硬い面がある。

柱穴・貯蔵穴　主柱穴4本が検出された。

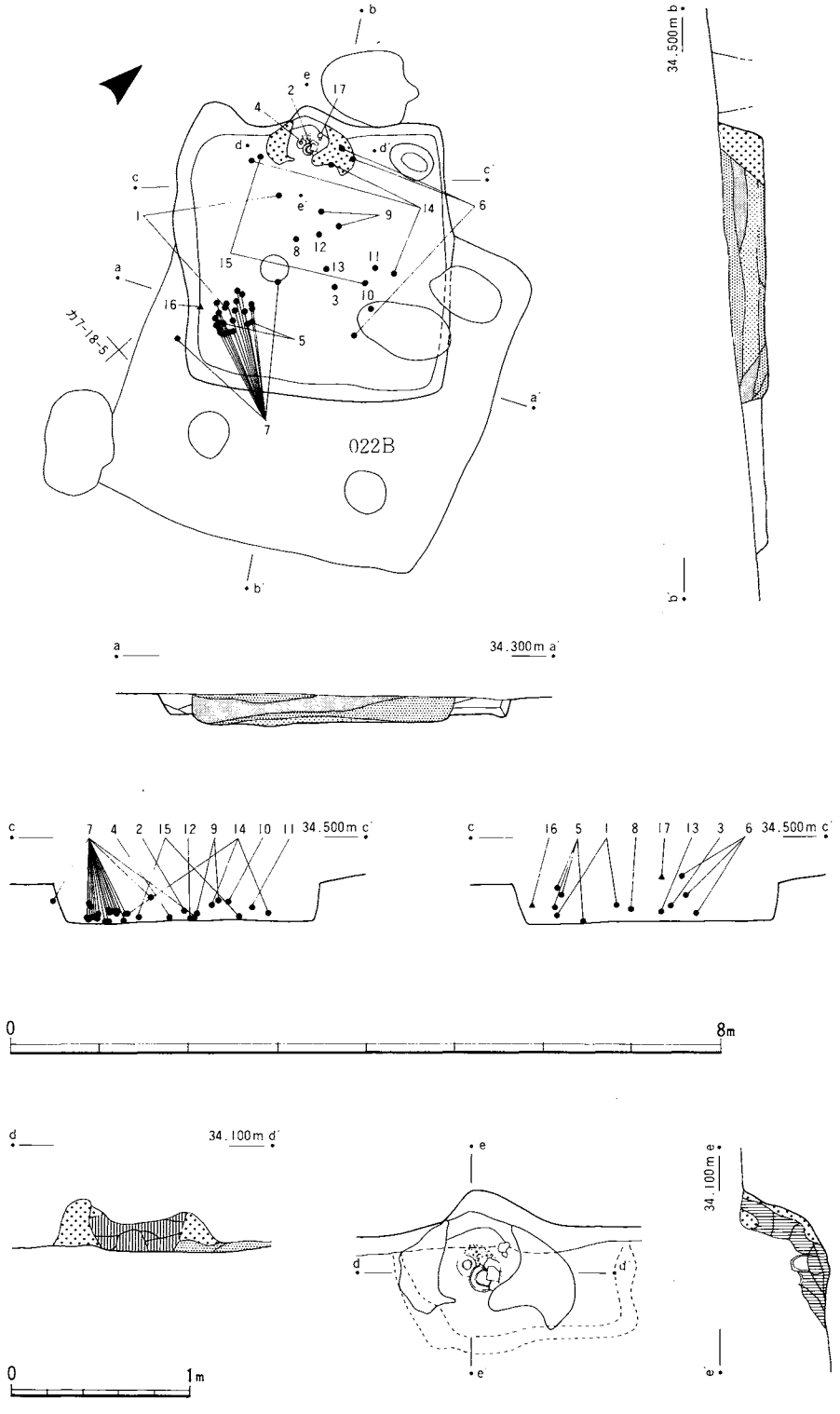
竈　旧竈は東壁の中央、新竈は西壁の中央に位置する。東壁の竈は煙道の一部が確認できただけである。新竈の遺存状態は良好である。煙道付近と袖部に竈構築材が少量残っていた。

壁溝　全周する。

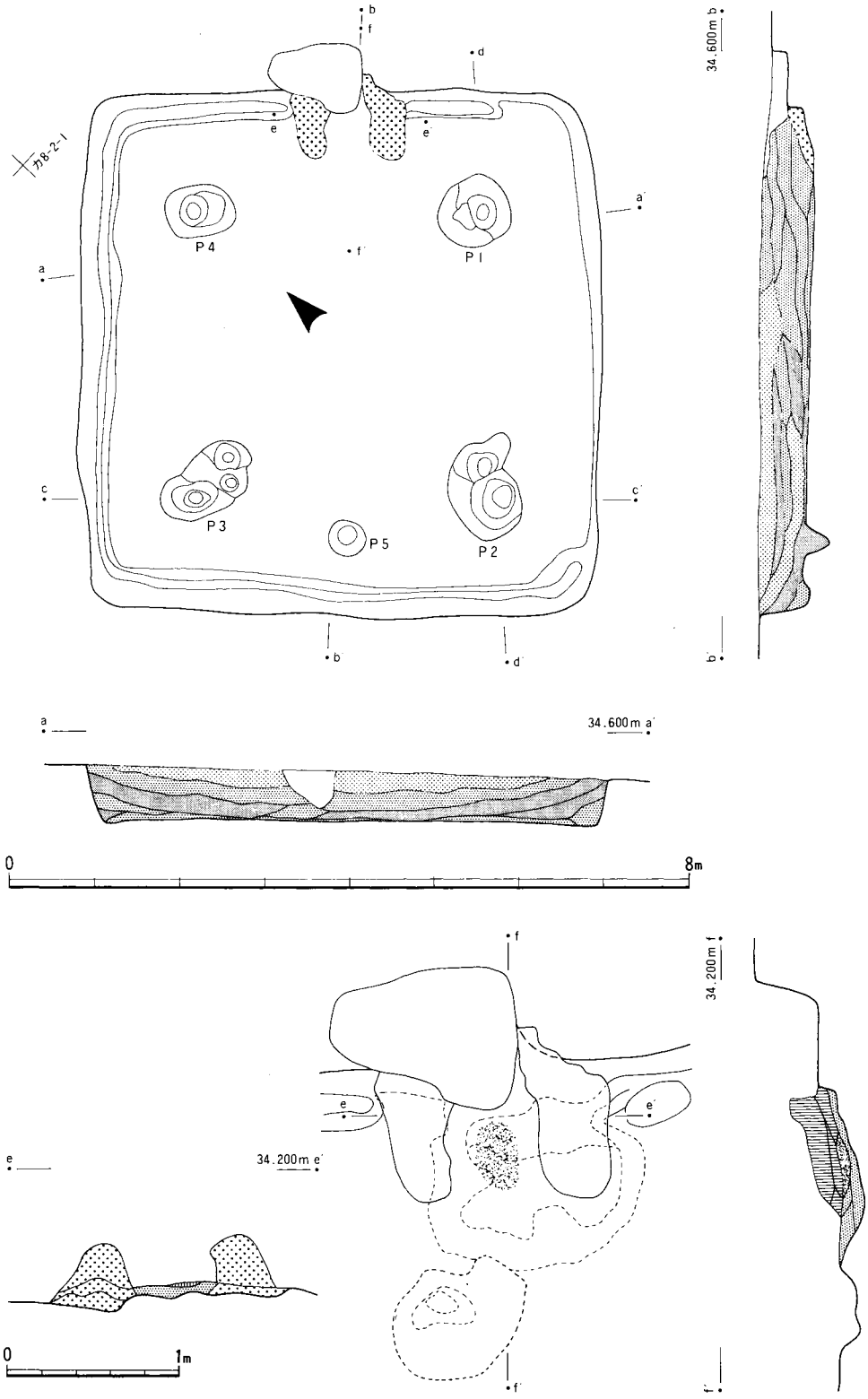
遺物出土状態　住居内全体にわたり、埋土中から多数の遺物が出土している。特に鉄器の出土が目立つ。

竪穴住居026（第63図、図版12）

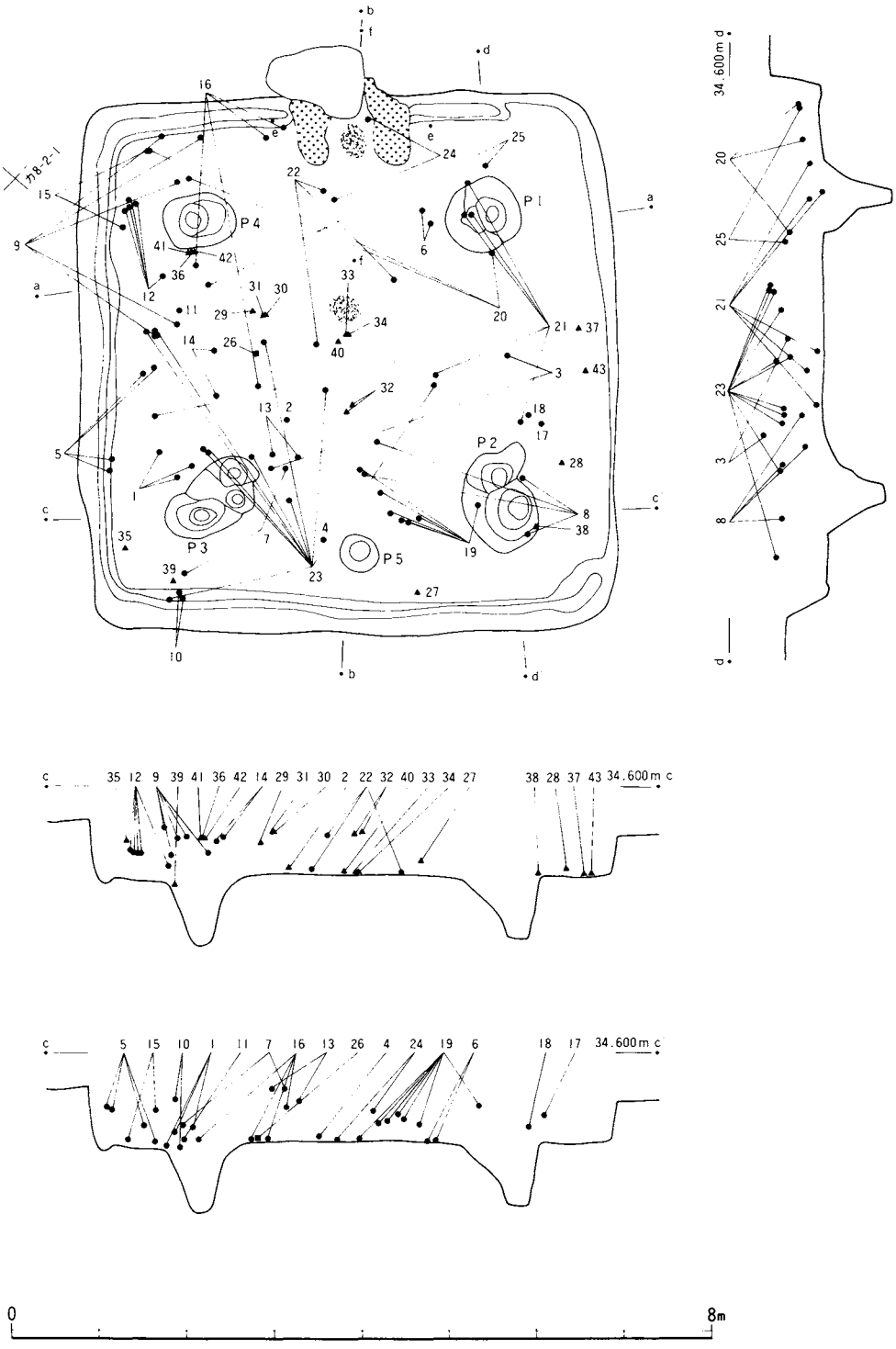
位置　ワ8グリッド。調査区中央、台地先端に位置する。



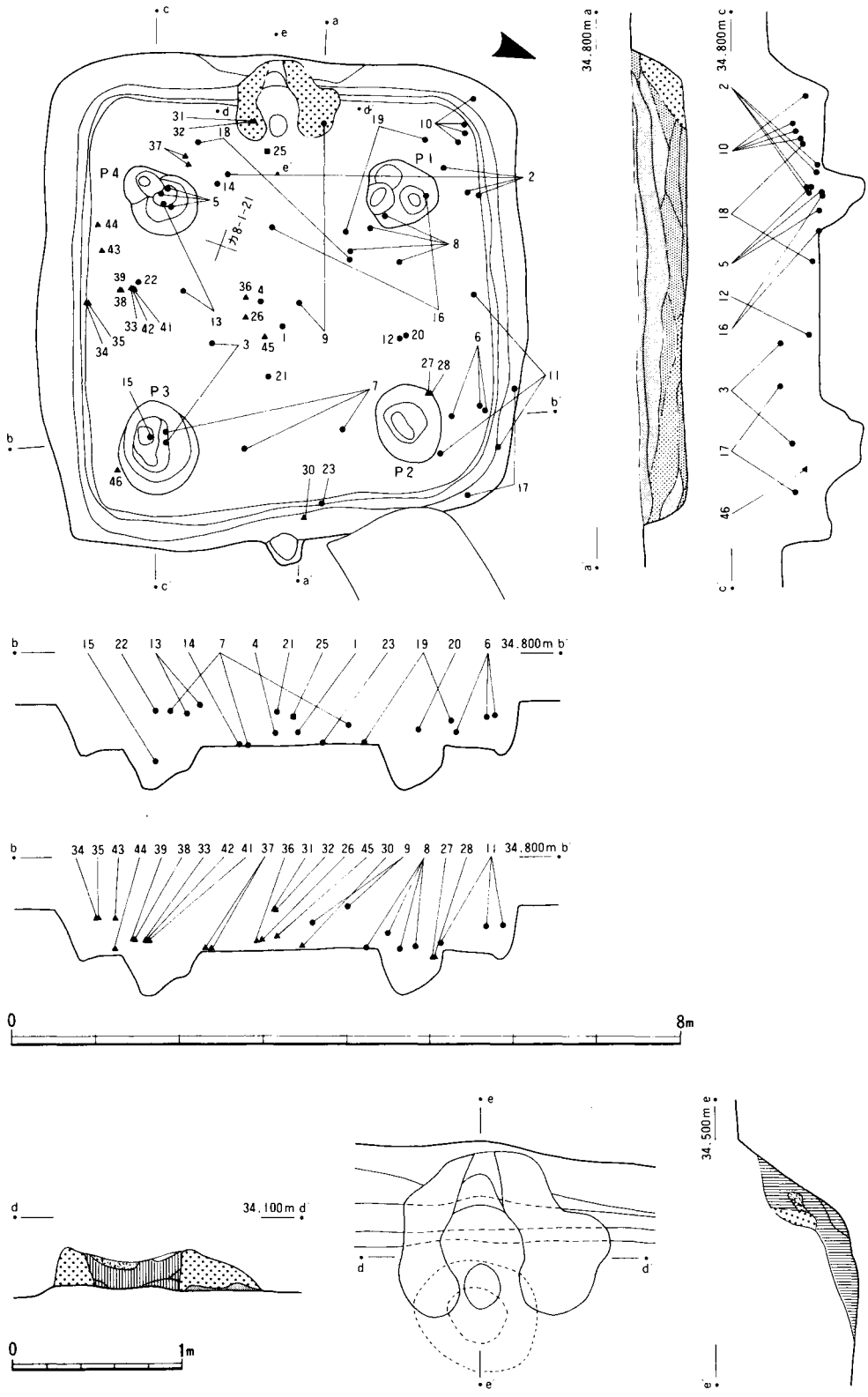
第59図　竪穴住居022A



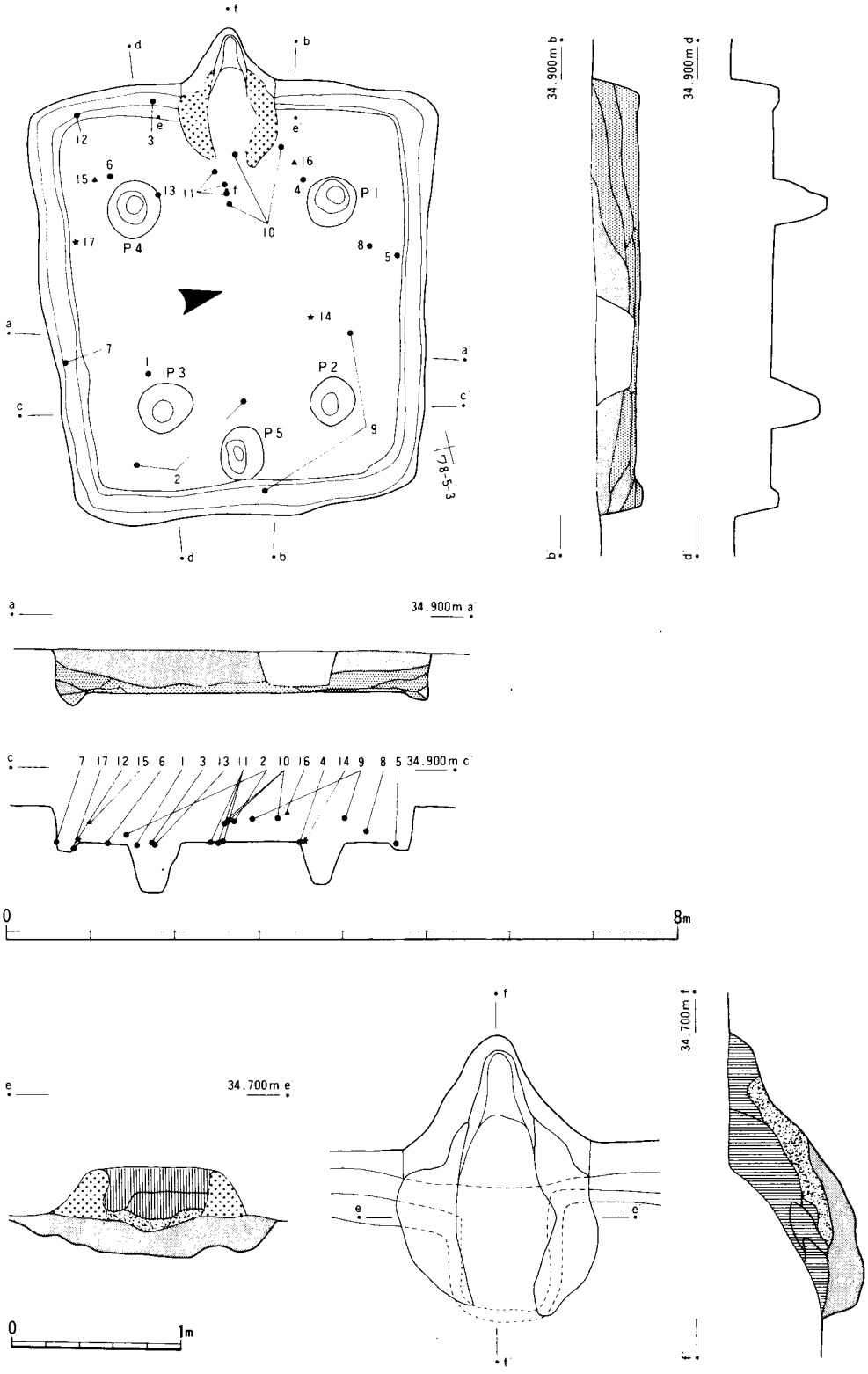
第60図　竪穴住居023



第61図　竪穴住居023遺物出土状態



第62図　竪穴住居024



第63図　竪穴住居026

形状・規模　縦5.1m、横4.6mの縦長の長方形を示す。主軸は西を向く。

埋土　主に暗褐色土層と黒褐色土層が堆積し、床面近くにローム土混じりの暗黄褐色土層が堆積している。

床面　竈前面から住居中央まで、きわめて硬い。

柱穴・貯蔵穴　主柱穴４本、出入口用支柱穴１本が検出された。

竈　西壁の中央に位置する。遺存状態は良好である。袖部に竈構築材が残っていた。比較的焼土の残りがよかった。

壁溝　全周する。

遺物出土状態　住居全体にわたり、少量の遺物が散在して出土している。

竪穴住居028（第64図、図版13）

位置　ワ７グリッド。調査区西側、台地先端の調査区境界域に位置する。竈煙道部の一部が調査区外に延びている。

形状・規模　一辺５mのほぼ正方形を示す。主軸は北を示す。

埋土　主に暗褐色土層と黒褐色土層が堆積し、壁ぎわ下部にローム土混じりの暗黄褐色土層が堆積している。

床面　ローム層のもので、比較的硬い。

柱穴・貯蔵穴　主柱穴４本、出入口用支柱穴１本、その他にピット１本が検出された。

竈　北壁の中央に位置する。遺存状態は良好である。天井部と袖部に竈構築材が残存していた。火床部の残りがよかった。

壁溝　全周する。

遺物出土状態　住居全体にわたり、埋土中から散在して遺物が出土している。

竪穴住居029（第65図、図版13）

位置　ワ７グリッド。調査区西側、台地先端に位置する。

形状・規模　縦3.7m、横4.2mの横長の長方形を示す。主軸は北を向く。

埋土　主に黒褐色土層が堆積し、壁ぎわに暗褐色土層とローム土混じりの暗黄褐色土層が堆積している。

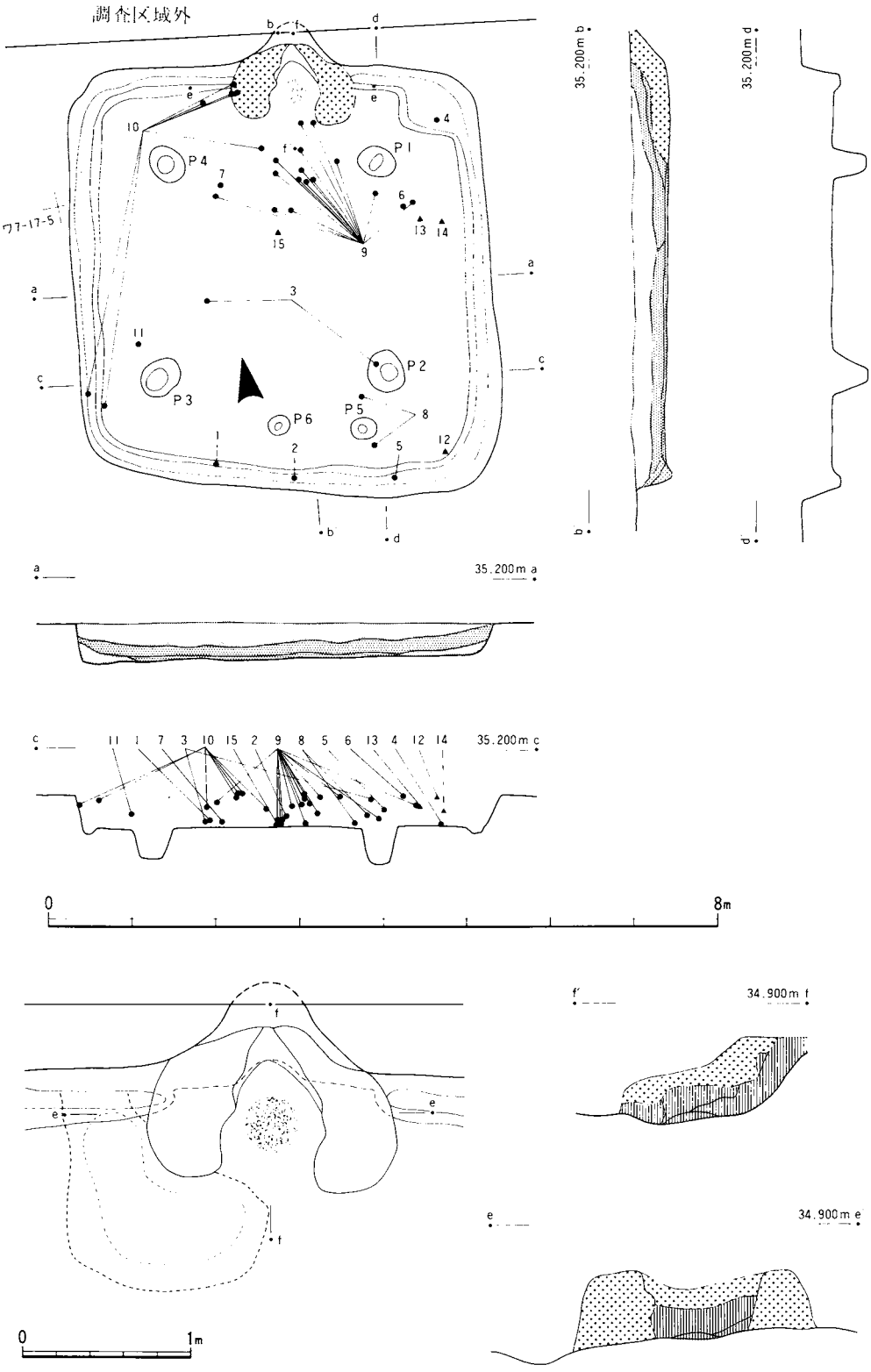
床面　竈前面に比較的硬い面があった。

柱穴・貯蔵穴　主柱穴４本が検出された。

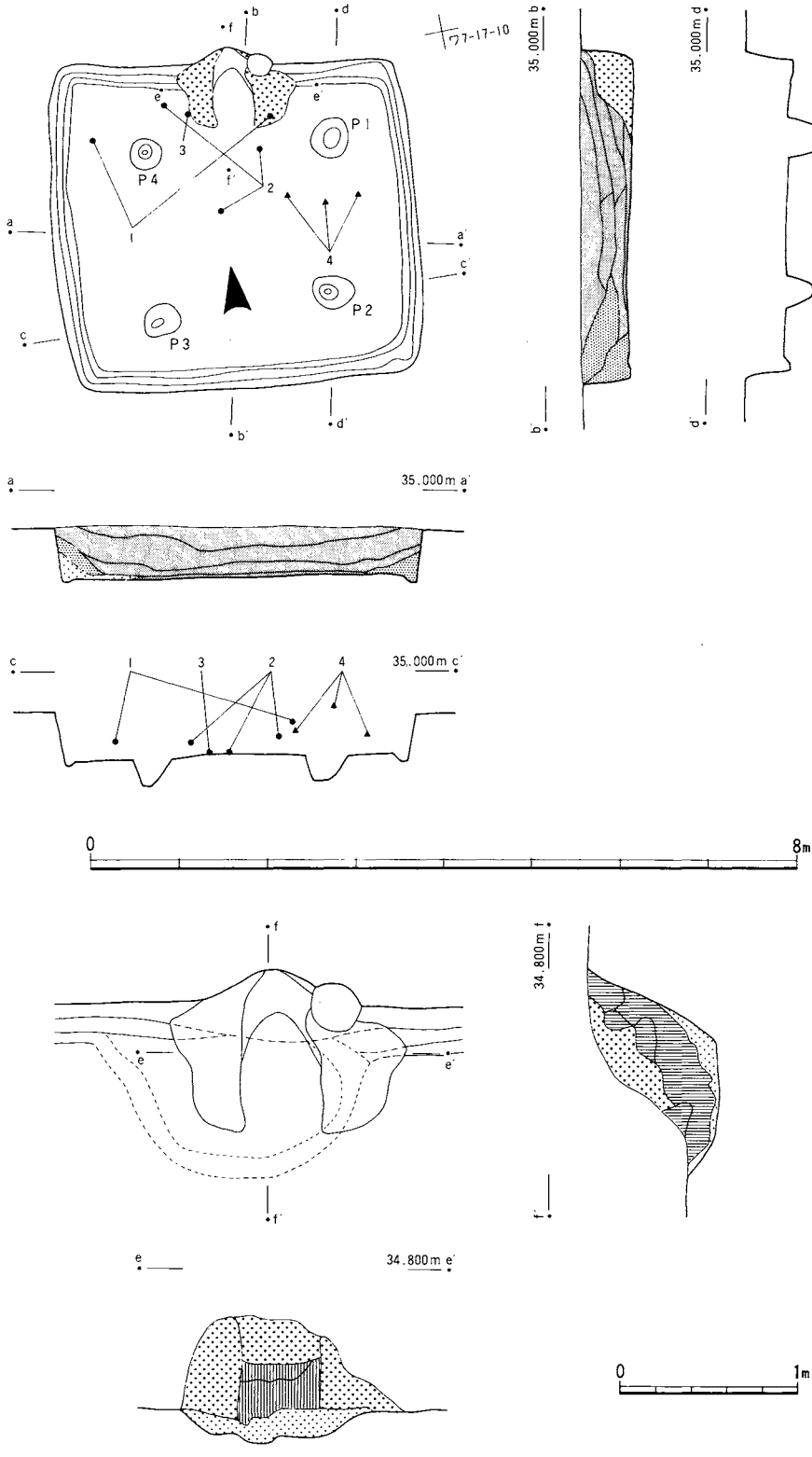
竈　北壁の中央に位置する。遺存状態は良好で、天井部と袖部に竈構築材が残存していた。

壁溝　全周する。

遺物出土状態　住居内北半分の埋土中から少量の遺物が出土している。

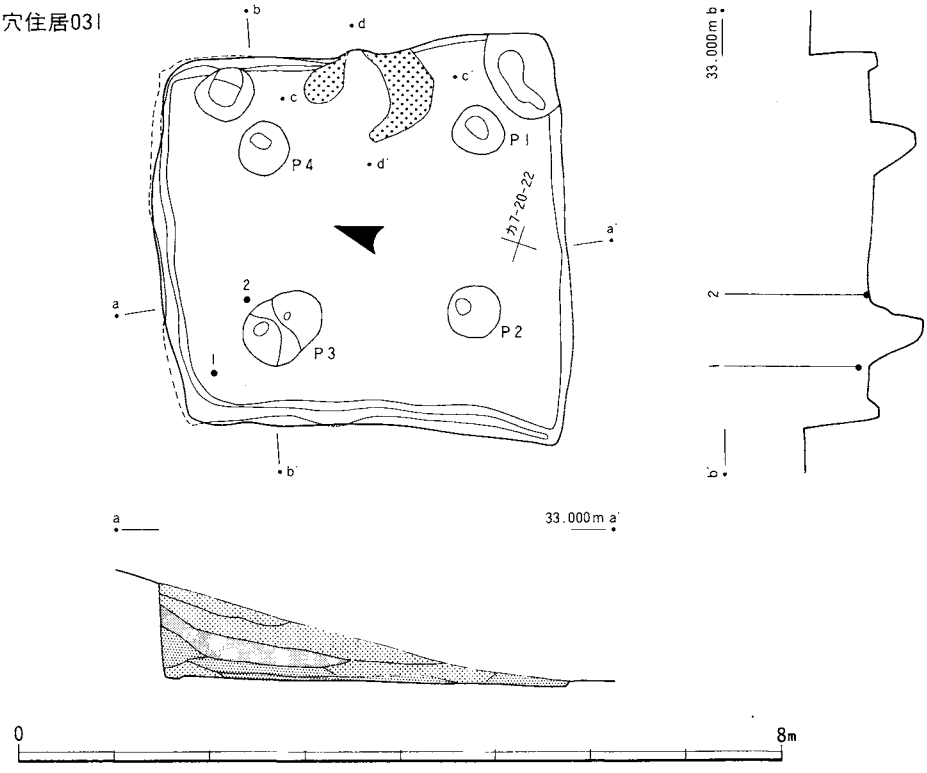


第64図　竪穴住居028

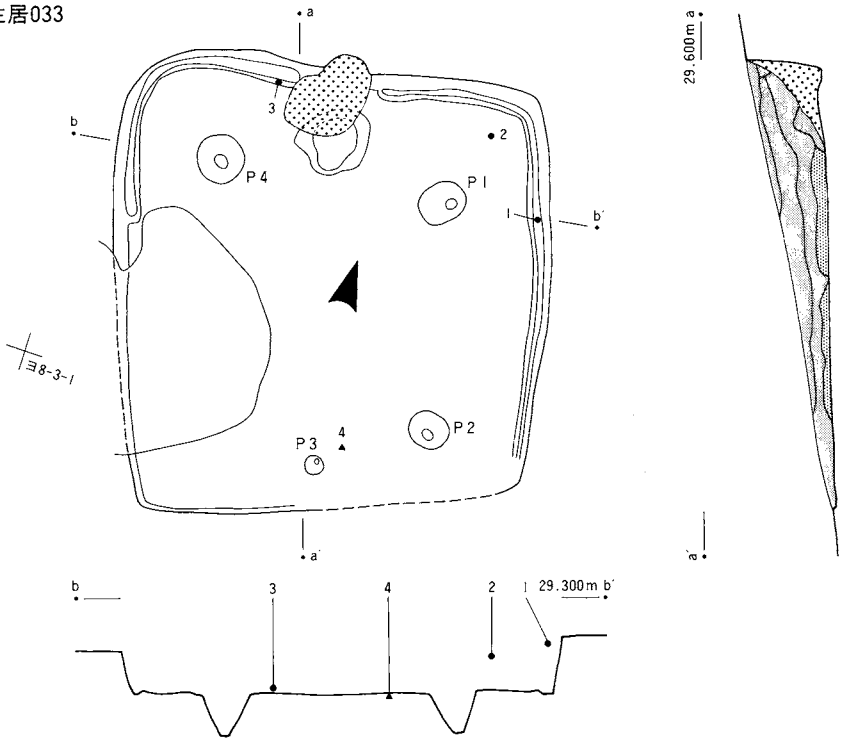


第65図　竪穴住居029

竪穴住居031



竪穴住居033



第66図　竪穴住居031・033

竪穴住居031（第66図、図版13）

位置　カ７グリッド。調査区中央、台地先端に位置する。

形状・規模　縦3.9m、横4.3mの横長の長方形を示す。主軸は東を向く。

埋土　上層にローム粒子混じりの暗黄褐色土層が堆積し、その下に暗褐色土層と黒褐色土層が堆積している。斜面上部からの流入土が多い。

床面　中央付近が堅緻である。

柱穴・貯蔵穴　主柱穴４本が検出された。北東コーナーにピットがある。

竈　東壁の中央に位置する。遺存状態はさほどよくない。

壁溝　南壁をのぞいた壁に巡る。

遺物出土状態　遺物が散漫な状態でわずかに出土している。

竪穴住居033（第66図、図版14）

位置　ヨ７グリッド。調査区中央、台地斜面に位置し、南側および西側の一部が削平される。

形状・規模　一辺４mのほぼ正方形を示す。主軸は北を向く。

埋土　主に黒褐色土層が堆積し、下層に暗褐色土層が堆積している。

床面　中央付近が比較的硬い。

柱穴・貯蔵穴　主柱穴３本、出入口用支柱穴１本が検出された。

竈　北壁の中央に位置する。遺存状態は悪かった。

壁溝　南西部をのぞいて巡る。

遺物出土状態　遺物がわずかに出土している。

竪穴住居034（第67図、図版14）

位置　ヨ８グリッド。調査区中央、台地斜面に位置する。南西コーナーが削平された。

形状・規模　縦2.8m、横3.4mの横長の長方形を示す。主軸は北を向く。

埋土　上層に暗褐色土層が堆積し、下層に黒褐色土層とローム土混じりの暗黄褐色土層が堆積している。

床面　ローム層の面をそのまま床面にしており、比較的軟らかい。

柱穴・貯蔵穴　北東コーナーからピットが１本検出された。

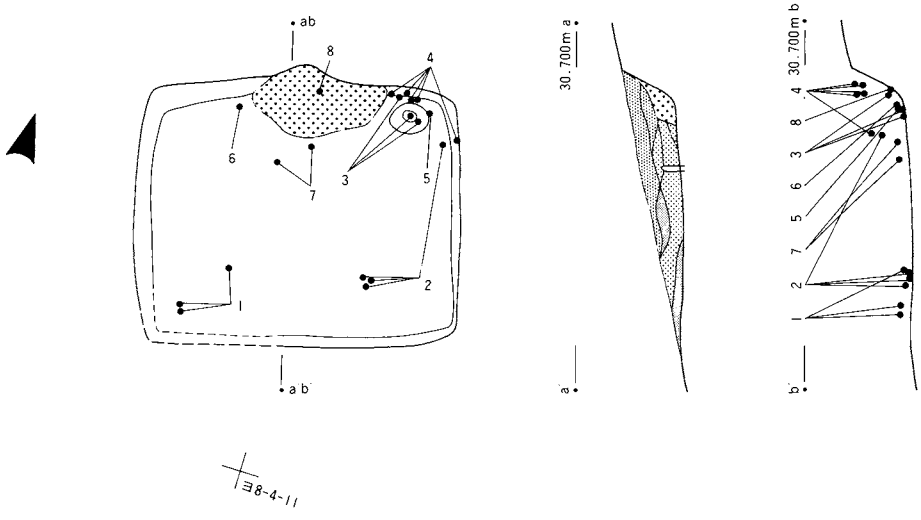
竈　北壁の中央に位置する。遺存状態は悪かった。

遺物出土状態　床面および埋土中から遺物が少量出土している。

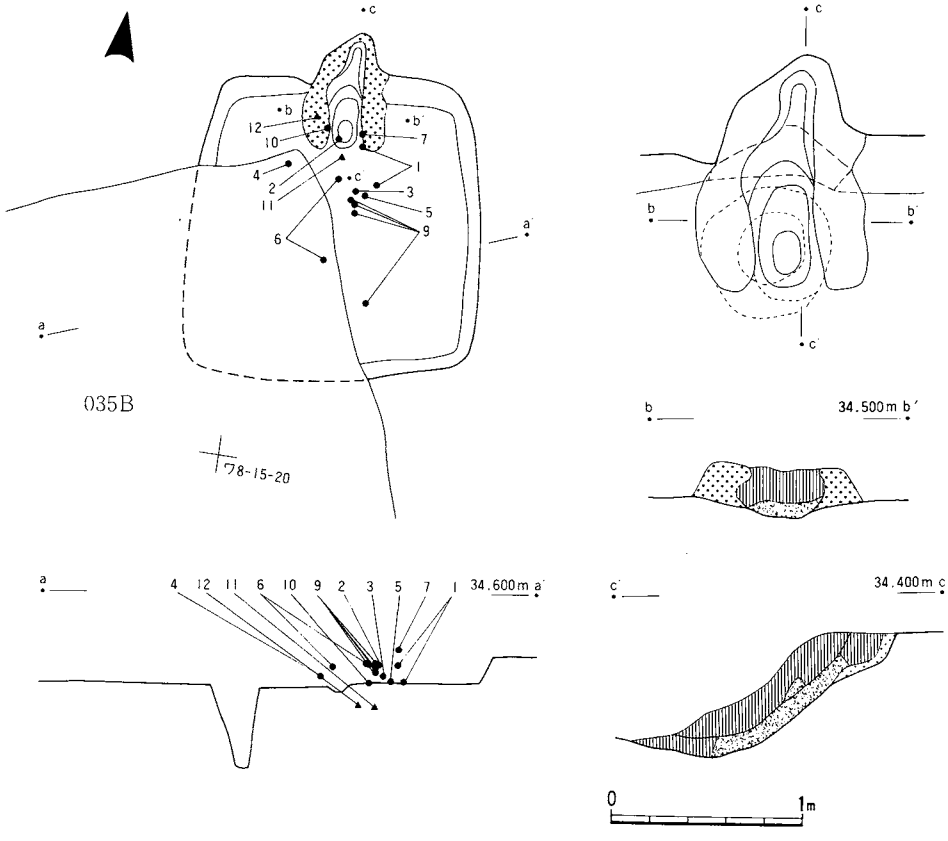
竪穴住居035A（第67図、図版14・15）

位置　ワ８グリッド。調査区中央、台地先端に位置する。竪穴住居035Bと重複する。

竪穴住居034



竪穴住居035A



第67図　竪穴住居034・035A

形状・規模　一辺３ｍのほぼ正方形を示す。主軸は北を向く。

埋土　主に暗褐色土層と黒褐色土層が堆積し、壁ぎわにローム土混じりの暗黄褐色土層が堆積している。

床面　暗褐色土とローム土の混合土で、それほど堅緻ではない。

竈　北壁中央に位置する。遺存状態は良好である。袖部に構築材が残っていた。火床から煙道部にかけて焼土層が残っていた。

遺物出土状態　床面からやや浮いた状態で少量出土している。

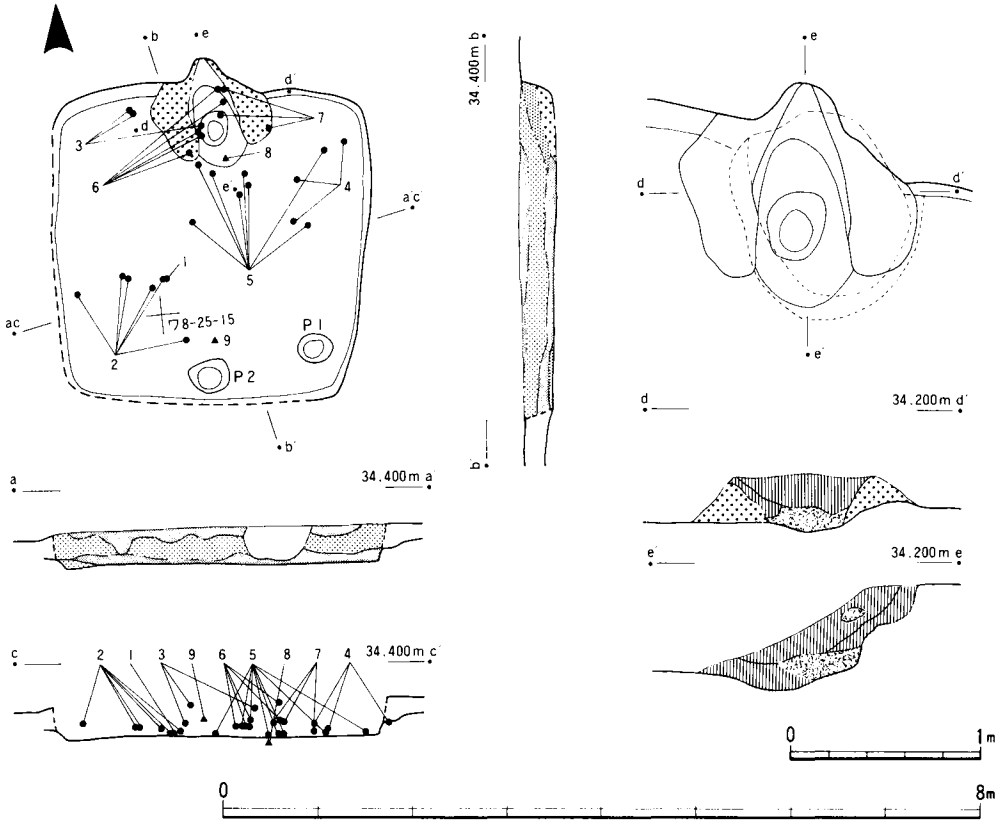
竪穴住居036（第68図）

位置　ワ８グリッド。調査区中央、台地先端に位置する。

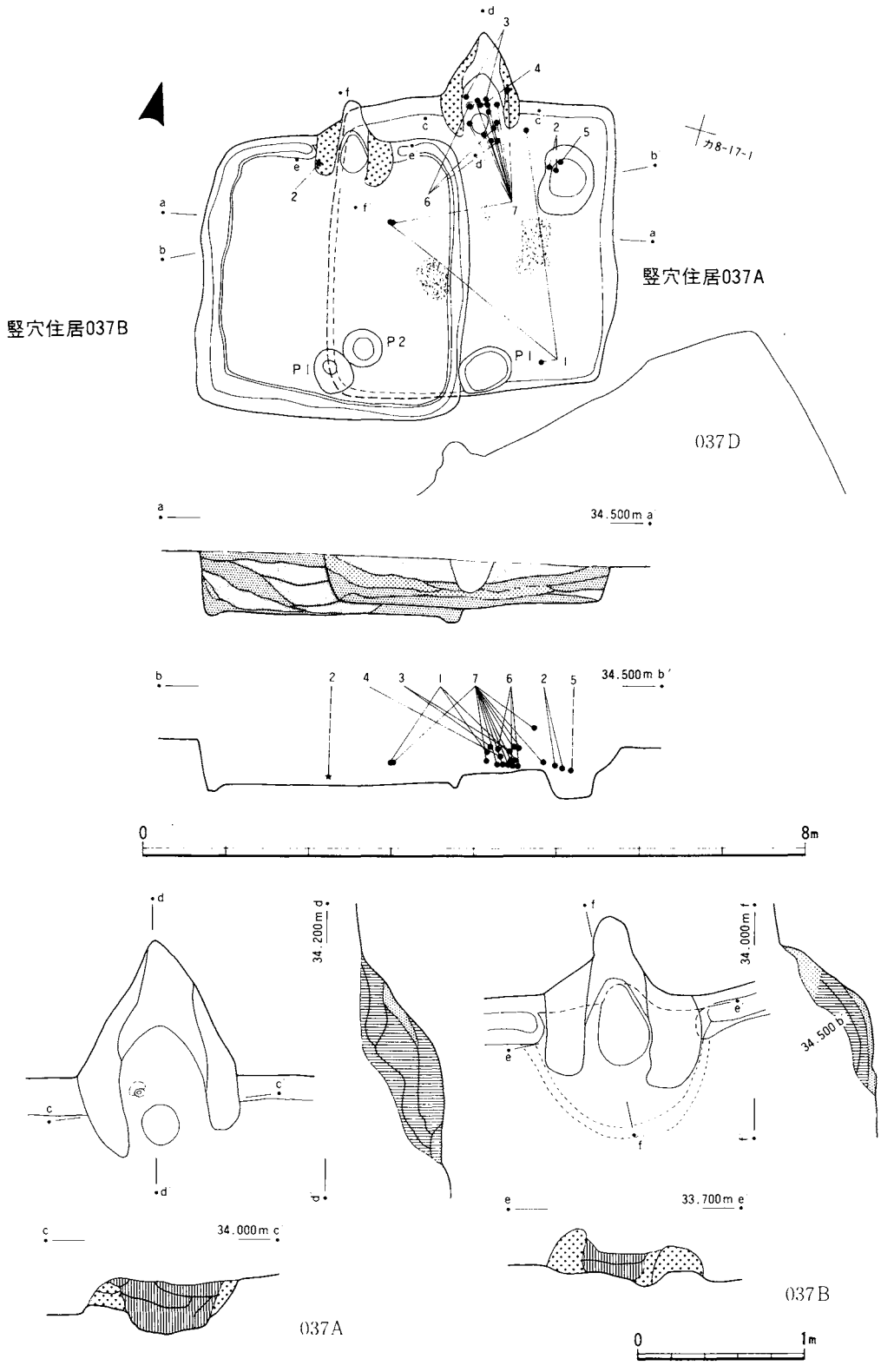
形状・規模　一辺3.3mのほぼ正方形を示す。主軸は北を向く。

埋土　上層と下層に黒褐色土層が堆積し、中間にローム粒子混じりの暗黄褐色土層が堆積している。

床面　中央部は硬く踏み固められているが、周辺部は軟弱である。



第68図　竪穴住居036



第69図　竪穴住居037A・037B

柱穴・貯蔵穴　ピットが２本検出された。Ｐ２は出入口用支柱穴と考えられる。

竈　北壁中央に位置する。遺存状態は良好である。袖部に竈構築材が残存していた。焼土が比較的多く堆積している。

遺物出土状態　住居内全体にわたり、床面からやや浮いた状態で出土している。

竪穴住居037A（第69図、図版４・15）

位置　カ８グリッド。調査区中央、台地先端に位置する。西半分は竪穴住居037Bと重複する。

形状・規模　一辺3.5mのほぼ正方形を示す。主軸は北を向く。

埋土　上層に黒褐色土層が堆積し、中層にローム土混じりの暗黄褐色土層が、下層に暗褐色土層が堆積している。住居内に少量の焼土が堆積している。

床面　暗褐色土とローム土の混合土で、それほど堅緻ではない。

柱穴・貯蔵穴　ピットが２本検出された。Ｐ１は出入口用支柱穴と思われる。

竈　北壁中央に位置する。遺存状態は良好である。袖部に竈構築材が少量残存していた。

遺物出土状態　床面からやや浮いた状態で、特に竈周辺から出土している。

竪穴住居037B（第69図、図版４・15）

位置　カ８グリッド。調査区中央、台地先端に位置する。竪穴住居037Aと重複する。

形状・規模　一辺3.3mのほぼ正方形を示す。主軸は北を向く。

埋土　主に暗褐色土層と黒褐色土層が堆積し、壁ぎわの一部にローム土混じりの暗黄褐色土層が堆積している。

床面　中央部がやや堅緻であるが、それ以外は軟弱である。

柱穴・貯蔵穴　ピットが２本検出された。出入口用支柱穴と思われる。

竈　北壁中央に位置する。遺存状態はさほど良好ではなく、袖部に構築材が一部残存する。

壁溝　全周する。

遺物出土状態　ほとんど遺物は出土しない。

竪穴住居037C（第70図、図版４・15）

位置　カ８グリッド。調査区中央、台地先端に位置する。竪穴住居037Dと重複する。

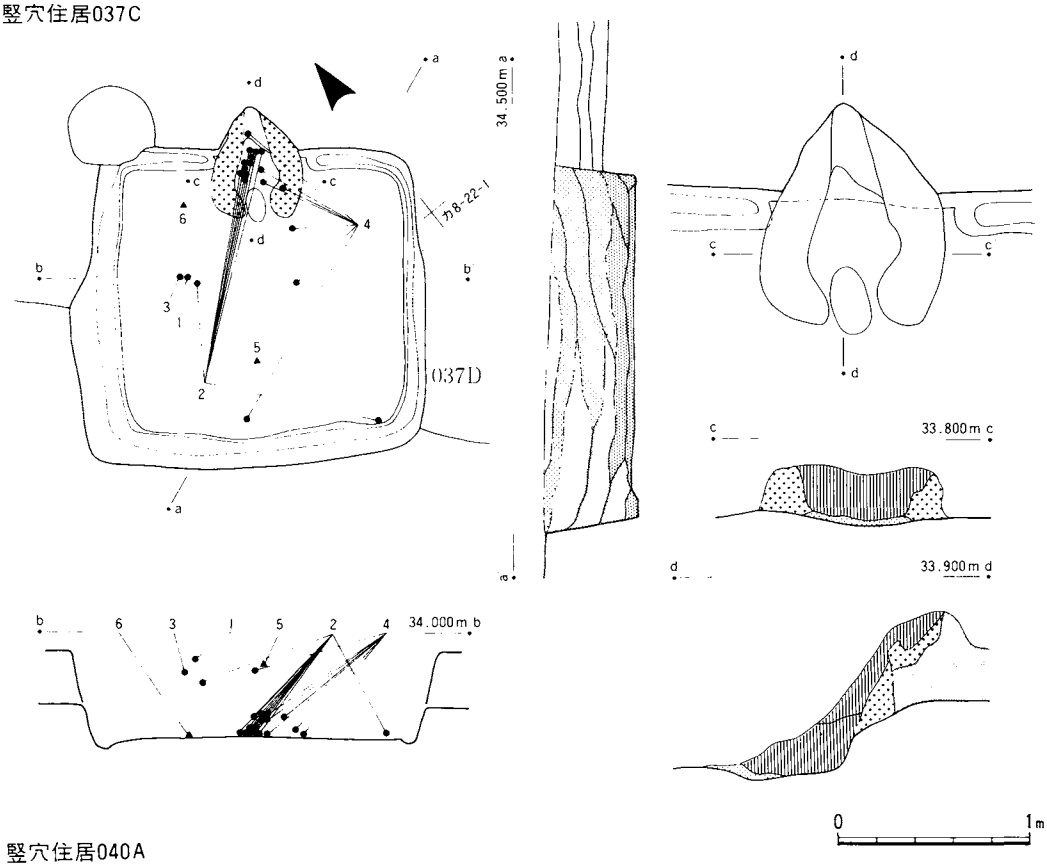
形状・規模　一辺3.5mのほぼ正方形を示す。主軸は北東を向く。

埋土　下層に暗褐色土層が堆積し、北西側から黒褐色土層、南東側からローム粒子混じりの暗黄褐色土層が堆積している。堆積状態から、埋め戻しの可能性も考えられる。

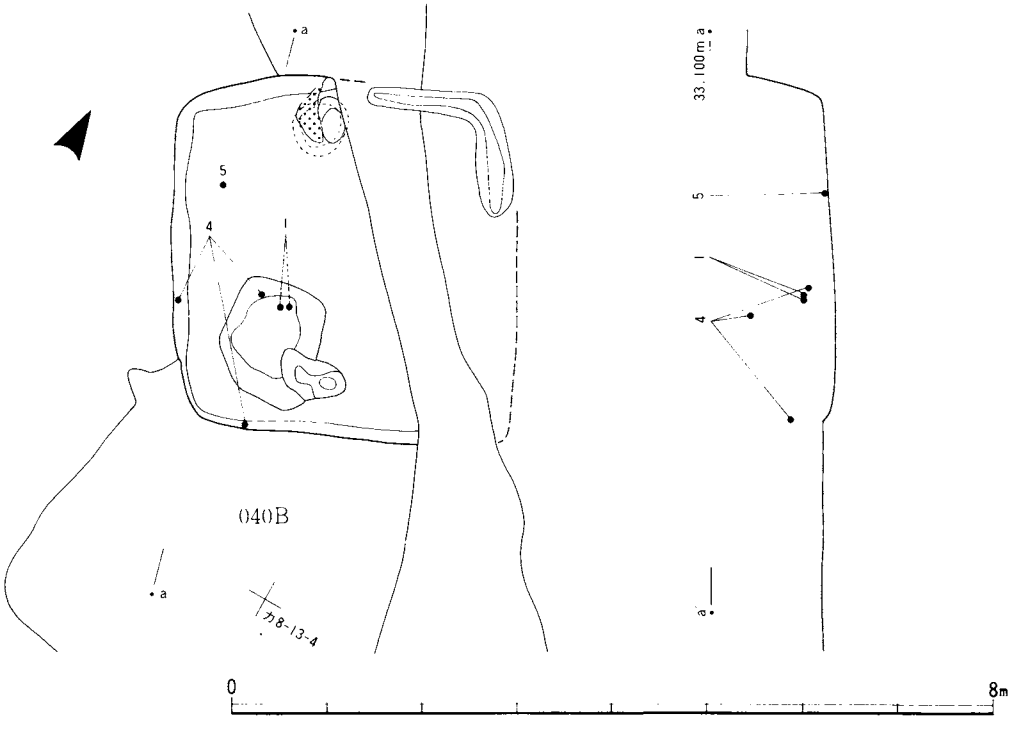
床面　暗褐色土とローム土の混合土で、それほど堅緻ではない。

竈　北東壁中央に位置する。遺存状態は良好で、袖部および煙道部に構築材が残っている。

竪穴住居037C



竪穴住居040A



第70図　竪穴住居037C・040A

壁溝　全周する。

遺物出土状態　銅製の丸鞆が埋土上面から出土し、そのほかは床面からやや浮いた状態で少量出土している。

竪穴住居040A（第70図、図版５）

位置　カ８グリッド。調査区中央、台地先端に位置する。竪穴住居040Bと重複する。住居中央を縦断する溝によって攪乱されている。また、東南部分を削平されている。

形状・規模　一辺3.6mのほぼ正方形を示す。主軸は北西を向く。

埋土　上層に暗褐色土層が堆積し、下層にローム土混じりの暗黄褐色土層が堆積している。堆積状態は自然堆積の状態を示していないので、埋め戻された可能性がうかがえる。

床面　ローム層で比較的堅い。

柱穴・貯蔵穴　ピット１本が検出されたが、本竪穴住居に伴うピットかどうか不明である。

竈　北西壁の中央に位置する。左袖しか残存していない。遺存状態はきわめて悪かった。

壁溝　東コーナーに巡る。

遺物出土状態　床面からやや浮いた状態でわずかに出土している。

竪穴住居041（第71図、図版16）

位置　ヨ８グリッド。調査区中央、台地斜面に位置する。

形状・規模　一辺４mのほぼ正方形を示す。主軸は北を向く。

埋土　主に黒褐色土層が堆積し、壁ぎわに暗褐色土層が堆積している。

床面　中央部がやや堅緻である。

柱穴・貯蔵穴　主柱穴４本が検出された。

竈　北壁中央に位置する。遺存状態は悪かった。

壁溝　南壁、西壁の南側をのぞいて巡る。

遺物出土状態　床面から浮いた状態で、住居全体から出土している。

竪穴住居046（第71図、図版16）

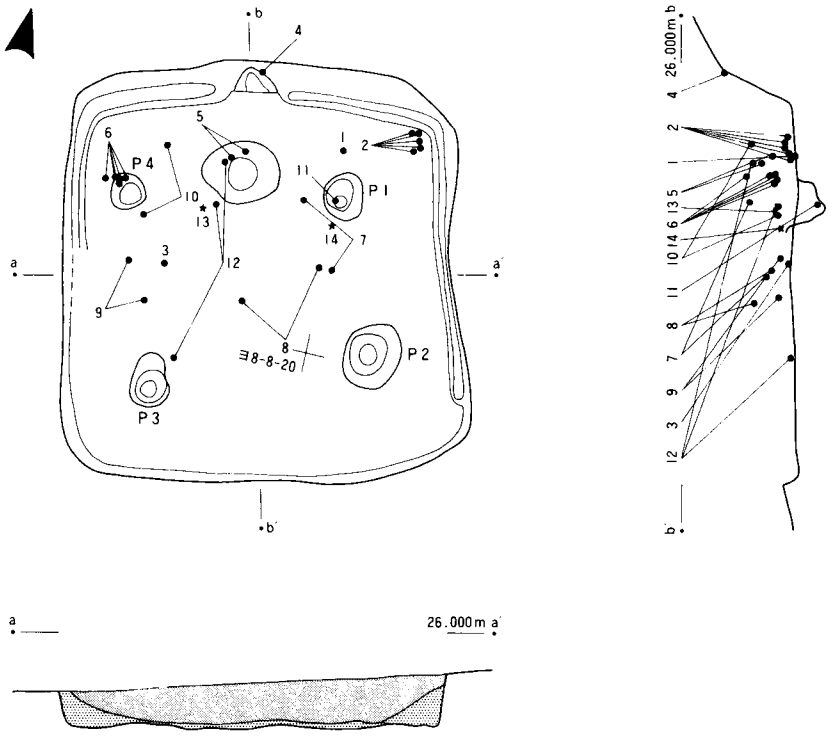
位置　カ９グリッド。調査区中央南側、台地斜面に位置する。

形状・規模　縦3.8m、横3.4mの縦長の長方形を示す。主軸は北西を向く。竈上端から壁の外側に、一段の掘り込みがあった。

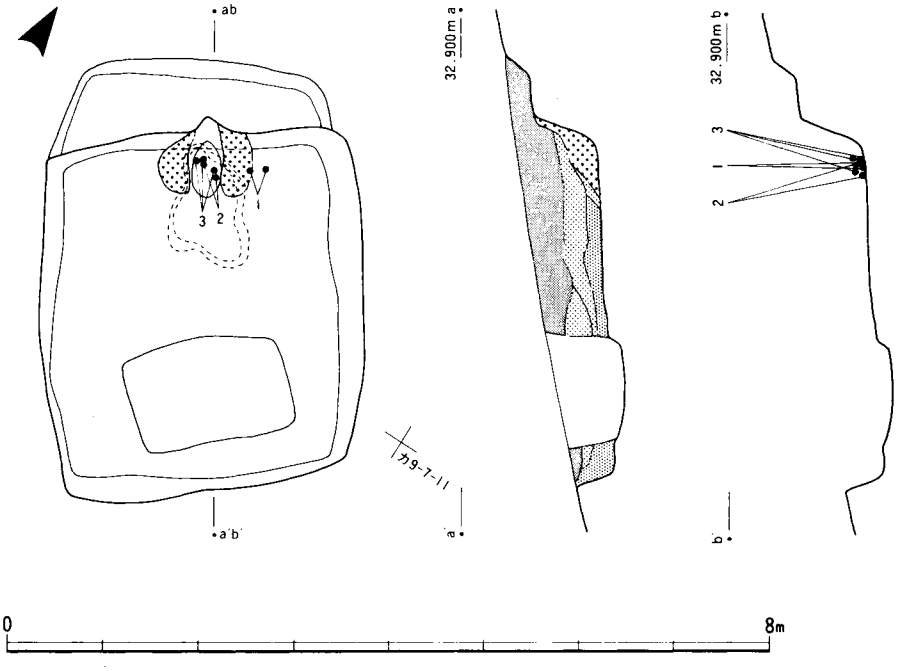
埋土　上層に黒褐色土層が堆積し、中層にローム粒子混じりの暗黄褐色土層が堆積し、下層に暗褐色土層が堆積している。

床面　竈前面がやや堅緻である。

竪穴住居041



竪穴住居046



第71図　竪穴住居041・046

竈　北西壁の中央に位置する。遺存状態は悪かった。

遺物出土状態　竈周辺から遺物が出土している。

竪穴住居054（第72図、図版17）

位置　ヨ８グリッド。調査区中央、台地斜面に位置する。竪穴住居047と重複する。南西コーナーを削平された。

形状・規模　一辺３m強の正方形を示す。主軸は北を向く。

埋土　主に暗褐色土層が堆積し、下層に黒褐色土層が堆積している。

床面　竈前面がやや堅緻である。

柱穴・貯蔵穴　主柱穴１本と出入口用支柱穴１本が検出された。

竈　北壁の中央に位置する。遺存状態は良好である。袖部と煙道部に竈構築材が残っていた。火床の残りがよかった。

壁溝　北壁、西壁に巡る。

遺物出土状態　床面からやや浮いた状態で、住居全体から出土している。

竪穴住居065（第72・73図、図版16）

位置　ワ８グリッド。調査区西側、台地先端に位置する。北西から南西に縦断してはしる溝によって中央部が攪乱されている。

形状・規模　一辺４m強の正方形を示す。主軸は北西を向く。

埋土　主に暗褐色土層と黒褐色土層が堆積し、壁ぎわにローム土混じりの暗黄褐色土層が堆積している。

床面　ローム粒子混入の暗褐色土の貼り床である。さほど堅緻ではない。

柱穴・貯蔵穴　主柱穴４本が検出された。北側コーナーからもピットが検出された。

竈　北西壁の中央に位置する。左袖が破壊されていた。天井部と袖部に竈構築材が残っていた。火床に焼土層が若干残っていた。

壁溝　北側コーナーをのぞいて全周する。

遺物出土状態　埋土中からわずかに出土している。

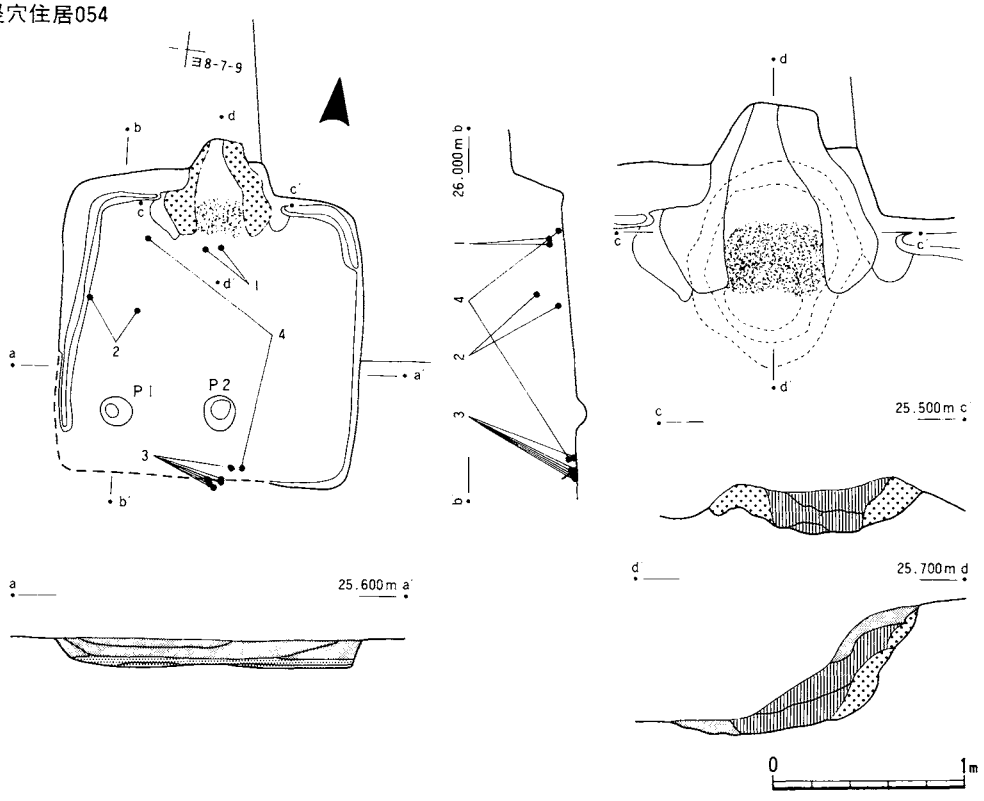
竪穴住居066（第73図、図版17）

位置　ワ８グリッド。調査区西側、台地先端の斜面に位置する。

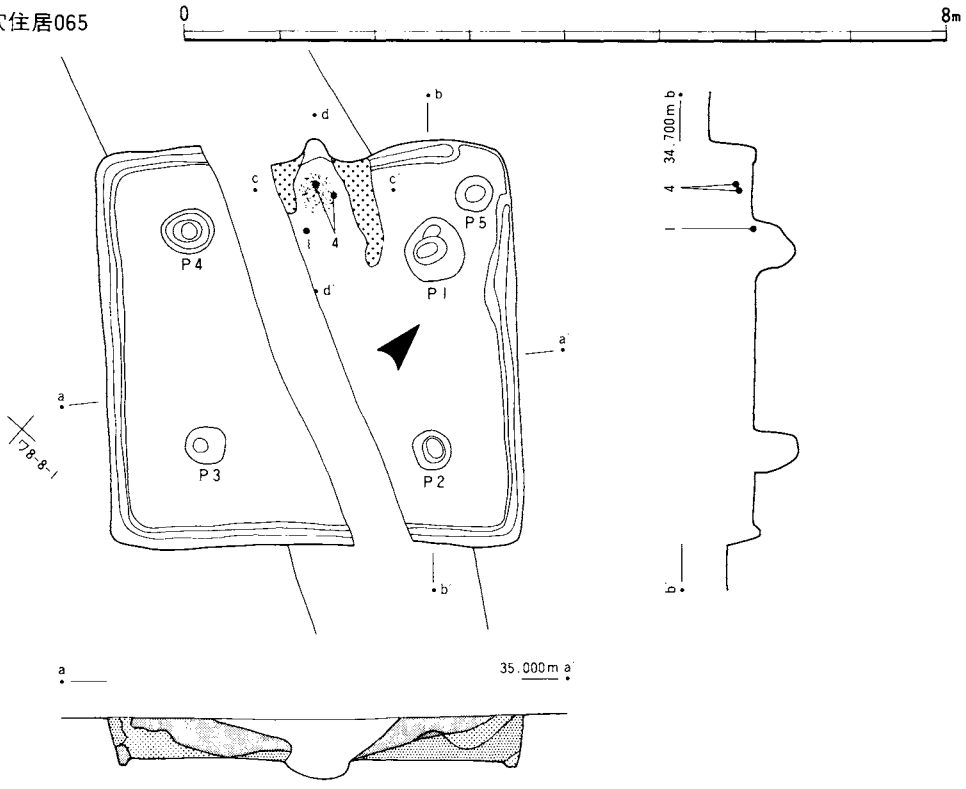
形状・規模　一辺約3.6mの正方形を示す。主軸は北西を向く。竈上端から壁の外側に、一段の掘り込みがあった。

埋土　主にローム粒子混じりの暗黄褐色土層が堆積している。

竪穴住居054

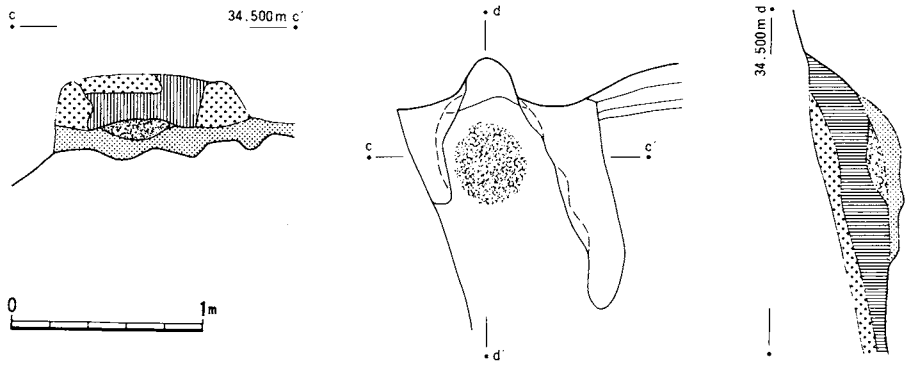


竪穴住居065

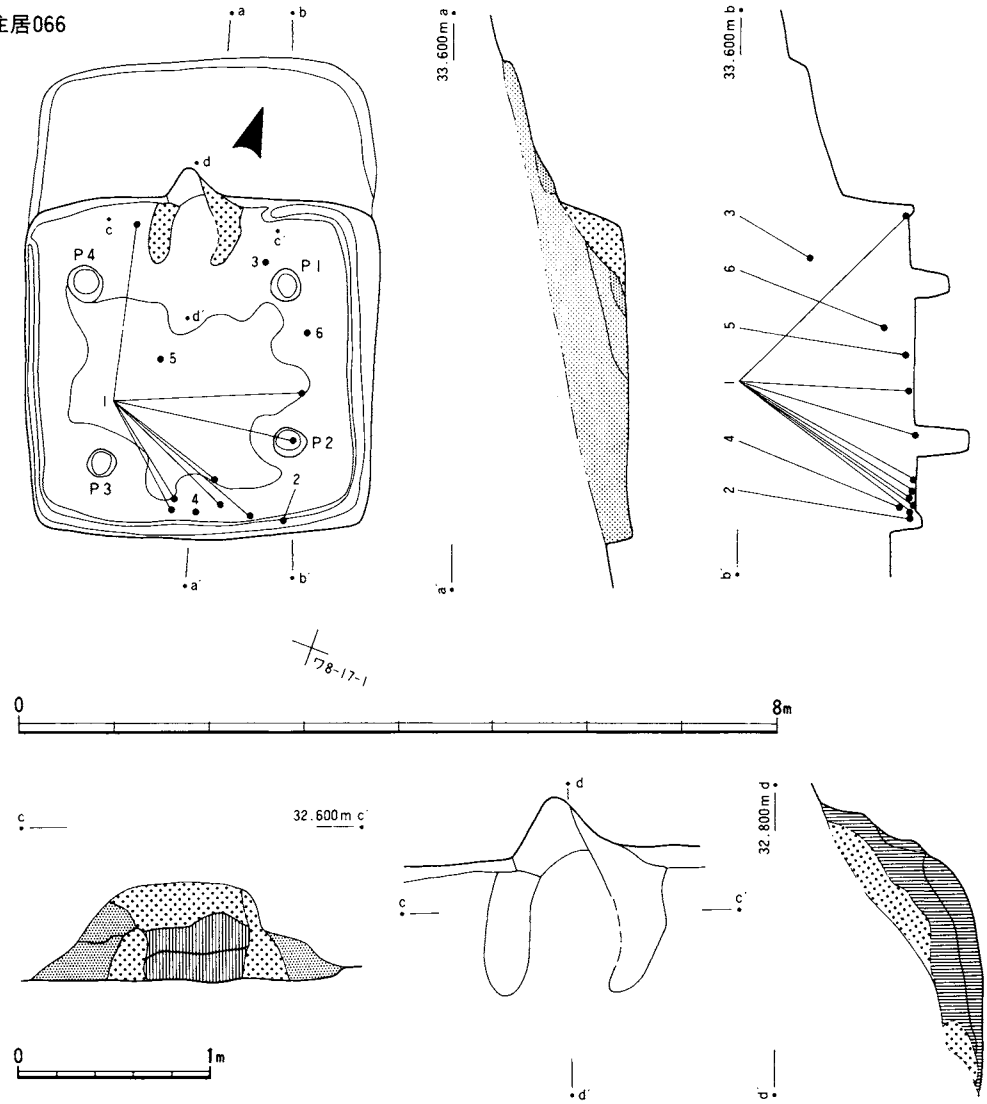


第72図　竪穴住居054・065

竪穴住居065竈

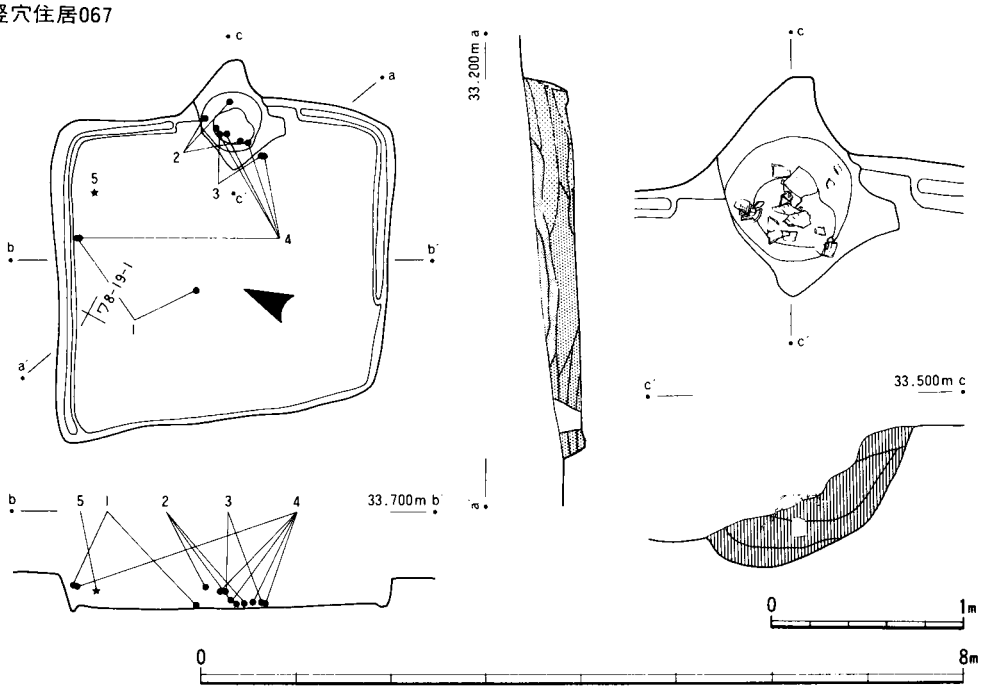


竪穴住居066

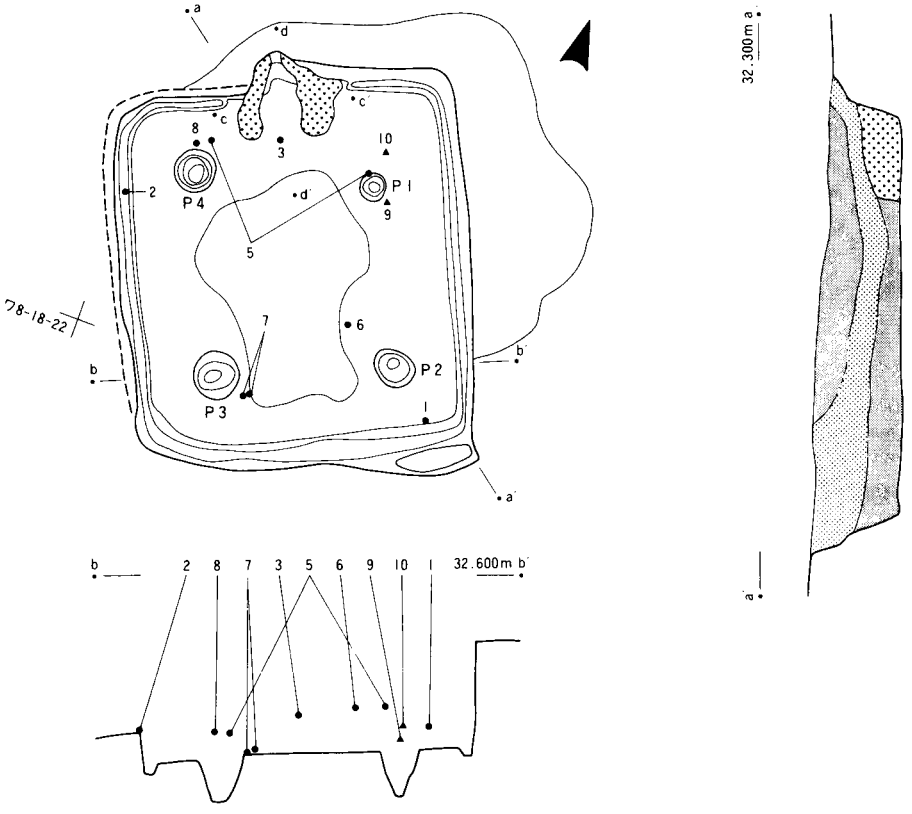


第73図　竪穴住居065竈・066

竪穴住居067



竪穴住居068



第74図　竪穴住居067・068

床面　暗褐色土とローム土の混合土で、それほど堅緻ではない。

柱穴・貯蔵穴　主柱穴4本が検出された。

竈　北西壁の中央に位置する。遺存状態はよかった。天井部と袖部に竈構築材が残っていた。

壁溝　北壁の西半分をのぞいて全周する。

遺物出土状態　床面近くから少数の遺物が出土している。

竪穴住居067（第74図、図版17）

位置　ワ8グリッド。調査区西側、台地先端の斜面に位置する。

形状・規模　一辺約3.4mのやや変形した正方形を示す。主軸は東を向く。

埋土　上層に黒褐色土層とローム粒子混じりの暗黄褐色土層が堆積し、下層に暗褐色土層が堆積している。

床面　ローム土、ローム粒子の混入した暗褐色土の貼り床である。竈前面と住居中央は比較的堅緻であるが、壁ぎわはやや軟弱である。

竈　東壁の中央に位置する。遺存状態は悪かった。

壁溝　西壁と南壁の西側をのぞいて巡る。

遺物出土状態　竈周辺に集中して出土している。

竪穴住居068（第74・75図、図版18）

位置　ワ8グリッド。調査区西側、台地先端の斜面に位置する。

形状・規模　縦4.2m、横3.7mの縦長の長方形を示す。主軸は北西を向く。

埋土　上層と下層に黒褐色土層が中間にローム土混じりの暗黄褐色土層が堆積している。

床面　竈前面から住居中央にかけて堅緻である。

柱穴・貯蔵穴　主柱穴が4本検出された。

竈　北西壁の中央に位置する。遺存状態は良好で、天井部と袖部に構築材が残っている。

壁溝　全周する。

遺物出土状態　床面から浮いた状態で少量出土している。

竪穴住居069（第75図、図版18）

位置　ワ8グリッド。調査区西側、台地先端の斜面に位置する。南壁を削平されてしまった。

形状・規模　一辺4m弱の正方形を示す。主軸は東を向く。

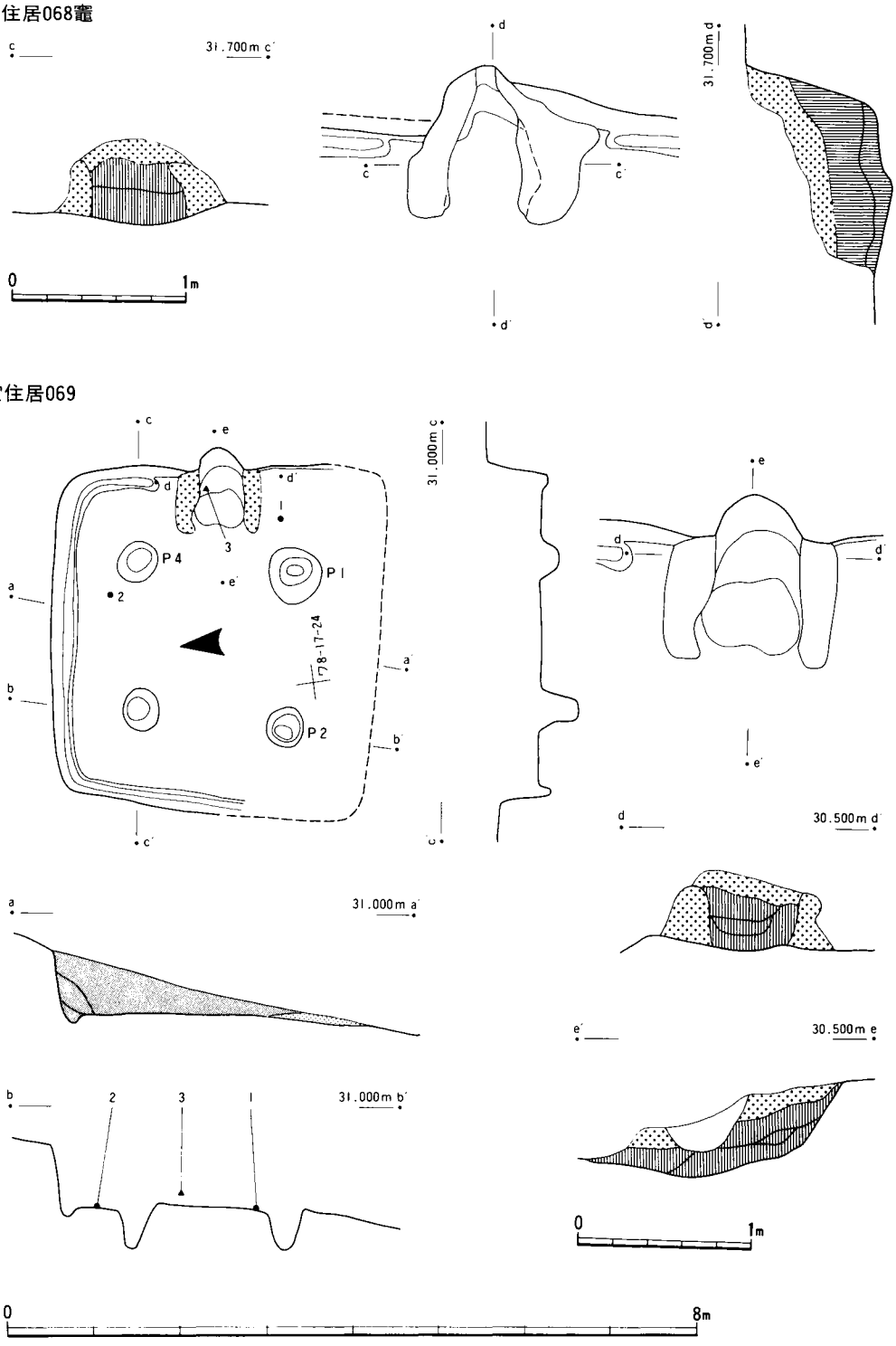
埋土　主に黒褐色土層が堆積している。

床面　ローム粒子、小ロームブロック、黒色土、焼土粒子の混合土による貼り床である。

柱穴・貯蔵穴　主柱穴が4本検出された。

竪穴住居068竈

竪穴住居069



第75図　竪穴住居068竈・069

竈　東壁中央に位置する。遺存状態は良好である。天井部や袖部に竈構築材が残っていた。

壁溝　残存する壁に巡る。

遺物出土状態　床面および床面近くからわずかな遺物が出土している。

竪穴住居070（第76図、図版18）

位置　オ・ワ８グリッド。調査区西側、台地先端の斜面に位置する。

形状・規模　縦3.9m、横4.1mの横長の長方形を示す。主軸は北西を向く。竈が２基検出された。北西壁の竈上端から壁の外側に、一段の掘り込みがあった。

埋土　主に暗褐色土層と黒褐色土層が堆積している。

床面　全体的に、それほど堅緻ではない。

柱穴・貯蔵穴　主柱穴４本、支柱穴１が検出された。Ｐ５は旧竈に伴う出入口用の支柱穴と考えられる。

竈　旧竈は北東壁中央にあり、煙道の痕跡のみ残す。新竈は北西壁の中央やや北側に位置する。新竈の構築材はさほど明確に残っていない。

壁溝　南東壁をのぞいて巡る。

遺物出土状態　床面からやや浮いた状態でわずかに出土している。

竪穴住居071（第77図、図版19）

位置　オ８グリッド。調査区西側、台地先端の斜面に位置する。

形状・規模　縦４m、横3.8mの縦長の長方形を示す。主軸は東を向く。北壁の外側に、一段の掘り込みがあった。

埋土　主に黒褐色土層とローム粒子混じりの暗黄褐色土層が堆積している。

床面　暗褐色土とローム土の混合土で、それほど堅緻ではない。

竈　東壁の中央やや南よりに位置する。遺存状態はさほどよくない。袖の一部に竈構築材が残っていた。

壁溝　壁の一部に巡る。

遺物出土状態　竈周辺および床面近くから少量の遺物が出土している。

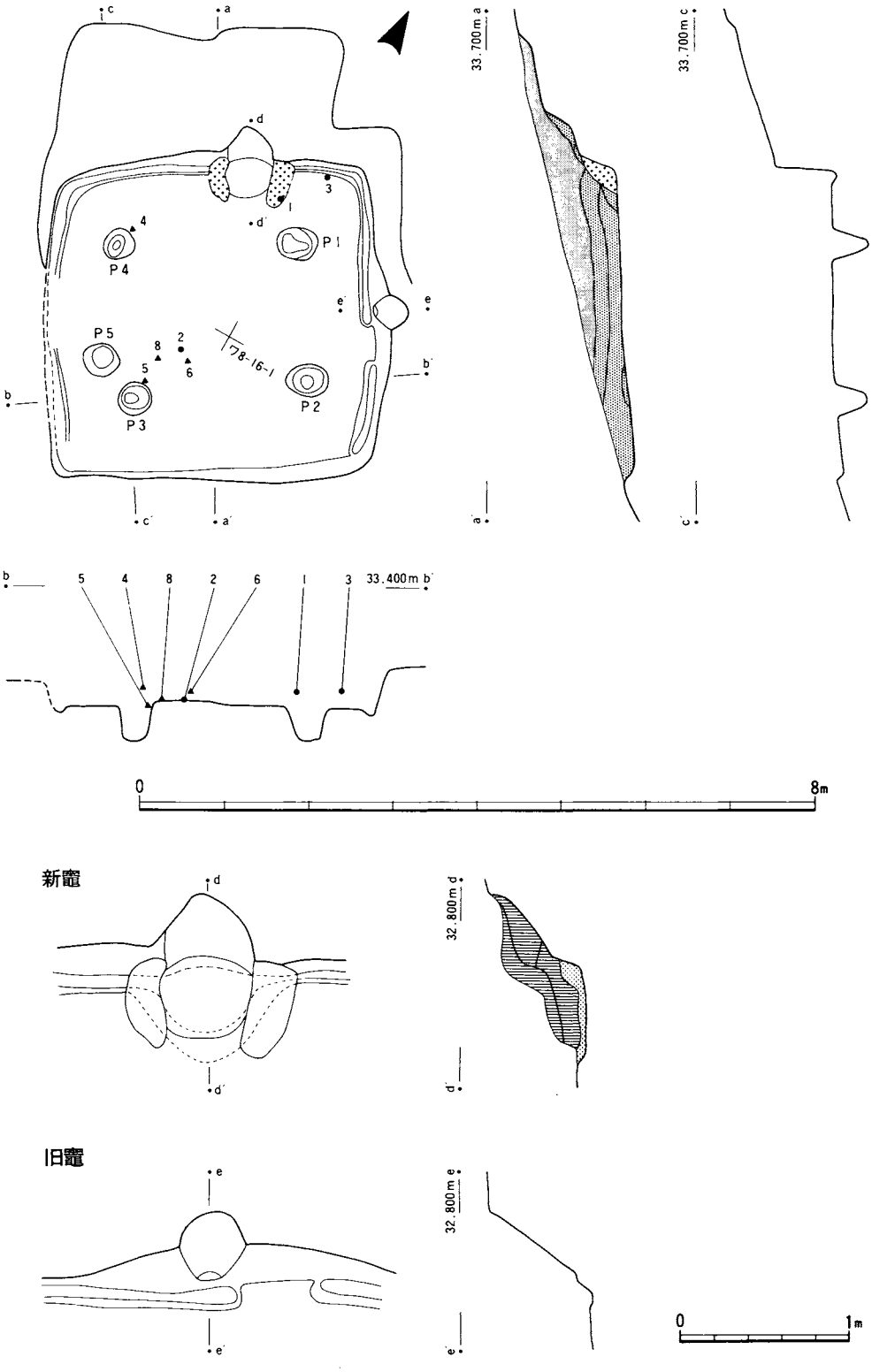
竪穴住居073（第78図、図版19）

位置　ワ８グリッド。調査区西側、台地先端の斜面に位置する。南壁は削平されている。

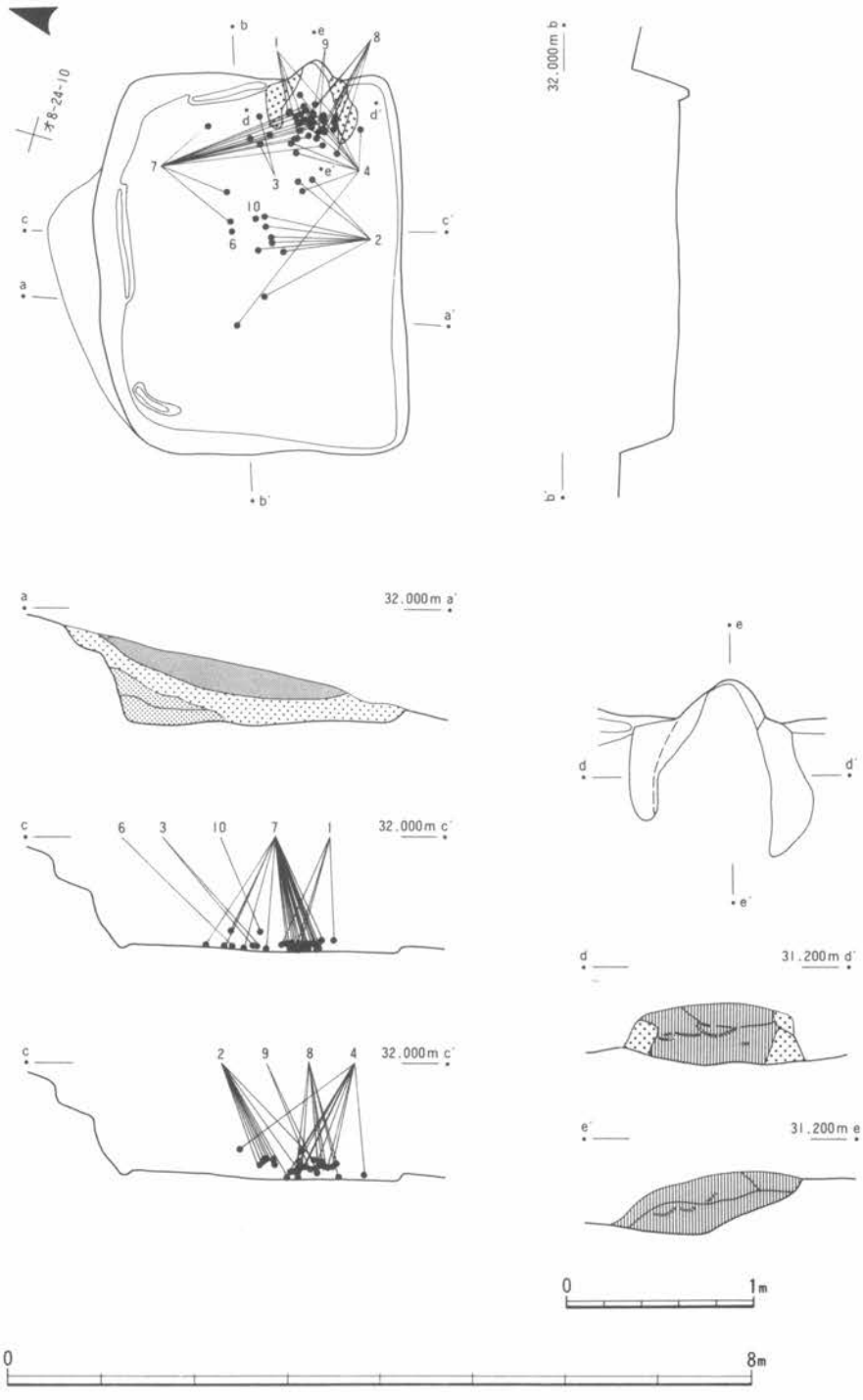
形状・規模　一辺３mの正方形を示す。主軸は北を向く。

埋土　主に黒褐色土層が堆積している。

床面　それほど堅緻ではない。

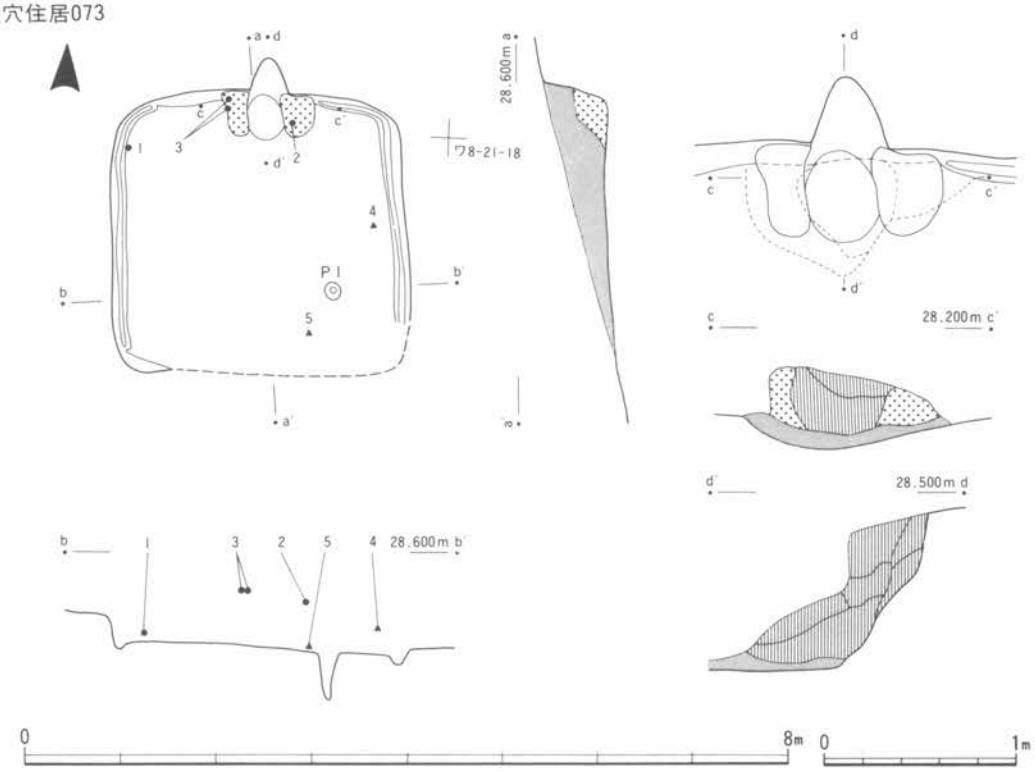


第76図　竪穴住居070

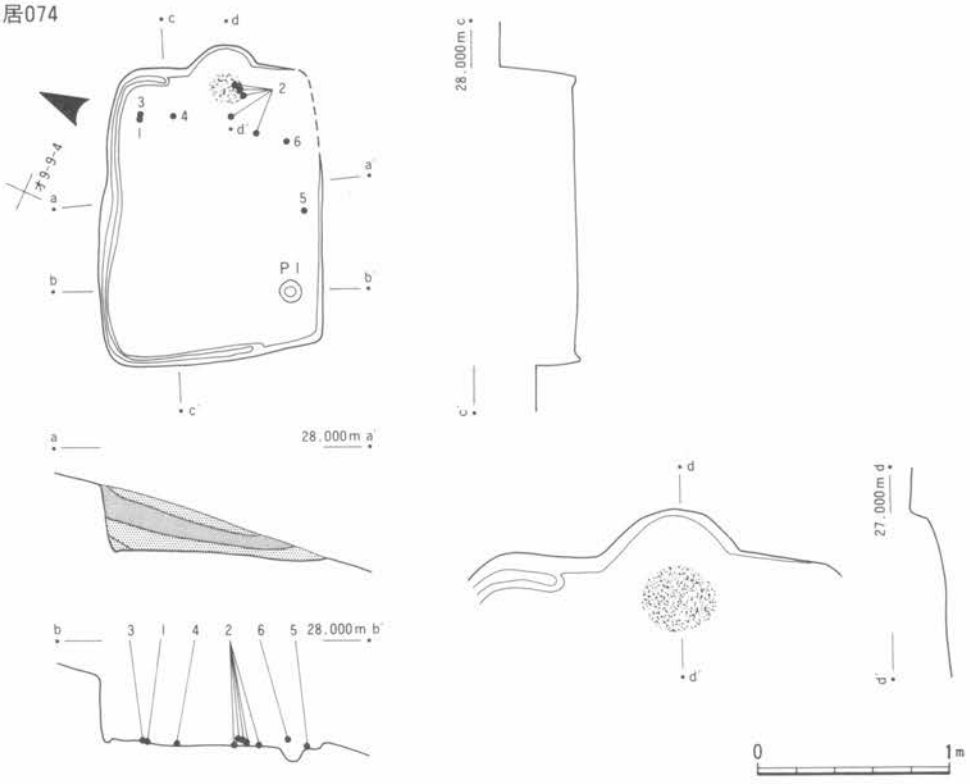


第77図　竪穴住居071

竪穴住居073



竪穴住居074



第78図　竪穴住居073・074

柱穴・貯蔵穴　住居内東南部から主柱穴が１本検出された。

竈　北壁の中央に位置する。遺存状態はよかった。袖部に竈構築材が少し残っていた。

壁溝　検出された壁のほとんどに巡る。

遺物出土状態　埋土中から遺物がわずかに出土している。

竪穴住居074（第78図、図版19）

位置　オ９グリッド。調査区西側、台地斜面に位置し、南東コーナーは削平されている。

形状・規模　縦3.4m、横2.3mの縦長の長方形を示す。主軸は北を向く。

埋土　上層と下層に暗褐色土層が堆積し、中間に黒褐色土層が堆積している。

床面　竈前面がやや堅緻である。

柱穴・貯蔵穴　南西側コーナー付近から主柱穴が１本検出された。

竈　遺存状態がきわめて悪く、竈堀方と火床が確認されただけである。

壁溝　北半分に巡る。

遺物出土状態　床面からわずかに遺物が出土している。

竪穴住居075（第79図、図版20）

位置　オ８グリッド。調査区西側、台地斜面に位置する。

形状・規模　一辺約2.5mの正方形を示す。主軸は北東を向く。竈が２基検出された。

埋土　上層と下層に黒褐色土層が堆積し、中間に暗褐色土層が堆積している。

床面　それほど堅緻ではない。

柱穴・貯蔵穴　出入口用の支柱穴が１本検出された。

竈　旧竈の煙道の痕跡が北西壁中央から検出された。新竈は北東壁の北側に位置する。遺存状態は悪かった。

遺物出土状態　埋土中から遺物がわずかに出土している。

竪穴住居076（第79図、図版20）

位置　オ８グリッド。調査区西側、台地先端に位置する。南東壁は削平されている。

形状・規模　一辺３m弱の正方形を示す。主軸は北西を向く。

埋土　主に暗褐色土層とローム粒子混じりの暗黄褐色土層が堆積している。

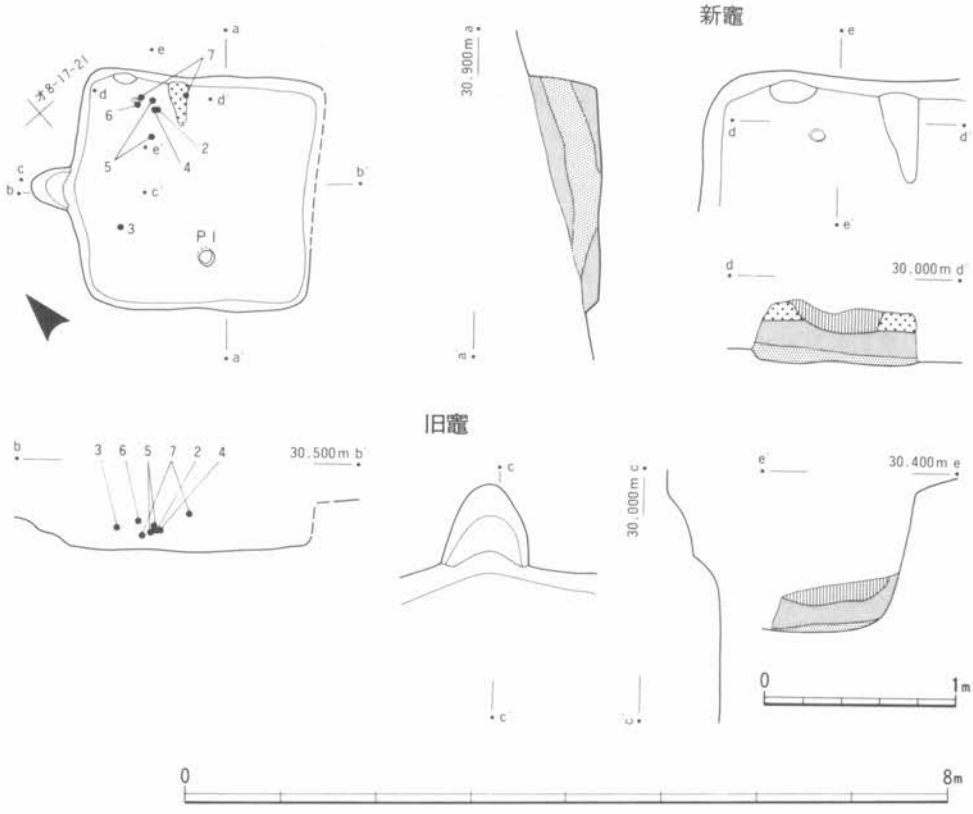
床面　竈前面がやや堅緻である。

柱穴・貯蔵穴　主柱穴２本と竈右袖脇に貯蔵穴が検出された。

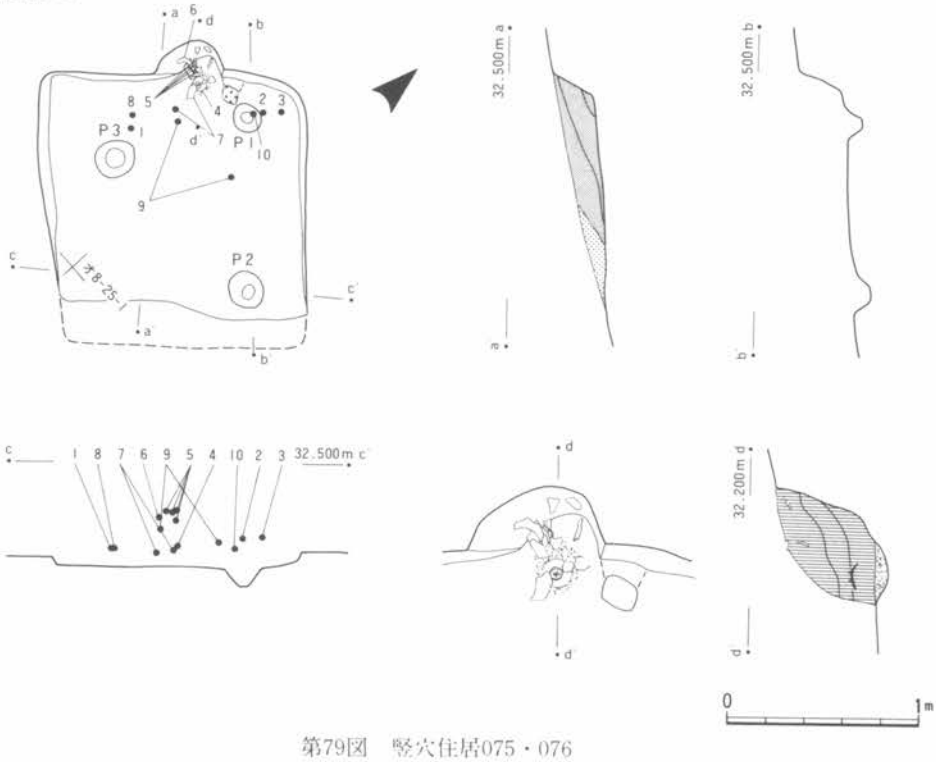
竈　北西壁の中央に位置する。遺存状態は悪かった。火床を確認できた。

遺物出土状態　床面からかなり浮いた状態で、また、竈周辺から少量の遺物が出土している。

竪穴住居075



竪穴住居076



第79図　竪穴住居075・076

遺物

歴史時代の竪穴住居から出土した遺物は、土器のほかに鉄製品・土製品などがある。土器のうち図示できた遺物は354点を数える。須恵器は全体の40%を占め、杯だけを比べると、土師器杯よりも須恵器杯のほうが多い。図示できなかった破片の総数は17,192点で、土師器が重量比で全体の80%を占めている。同様に、杯だけを比較すると、土師器杯と須恵器杯は6対4の割合になり、破片資料を含めても、須恵器杯の占める割合が高いといえる(第10表)。出土量が多く、器種もまとまって出土しているのは、竪穴住居023・024である。両竪穴住居とも須恵器杯が多く、鉄製品もほかの住居に比べ種類・数ともに多く出土している。

竪穴住居003(第80図、図版42・60)　[土器観察表P269]

須恵器杯5点、土師器杯7点、土師器甕3点が図示できた。出土状況は竈周辺とその対壁に多くみられる。多くは破片が広く飛び散り、床面から浮いた状態であることから、本竪穴住居廃絶後に投棄されたものと思われる。

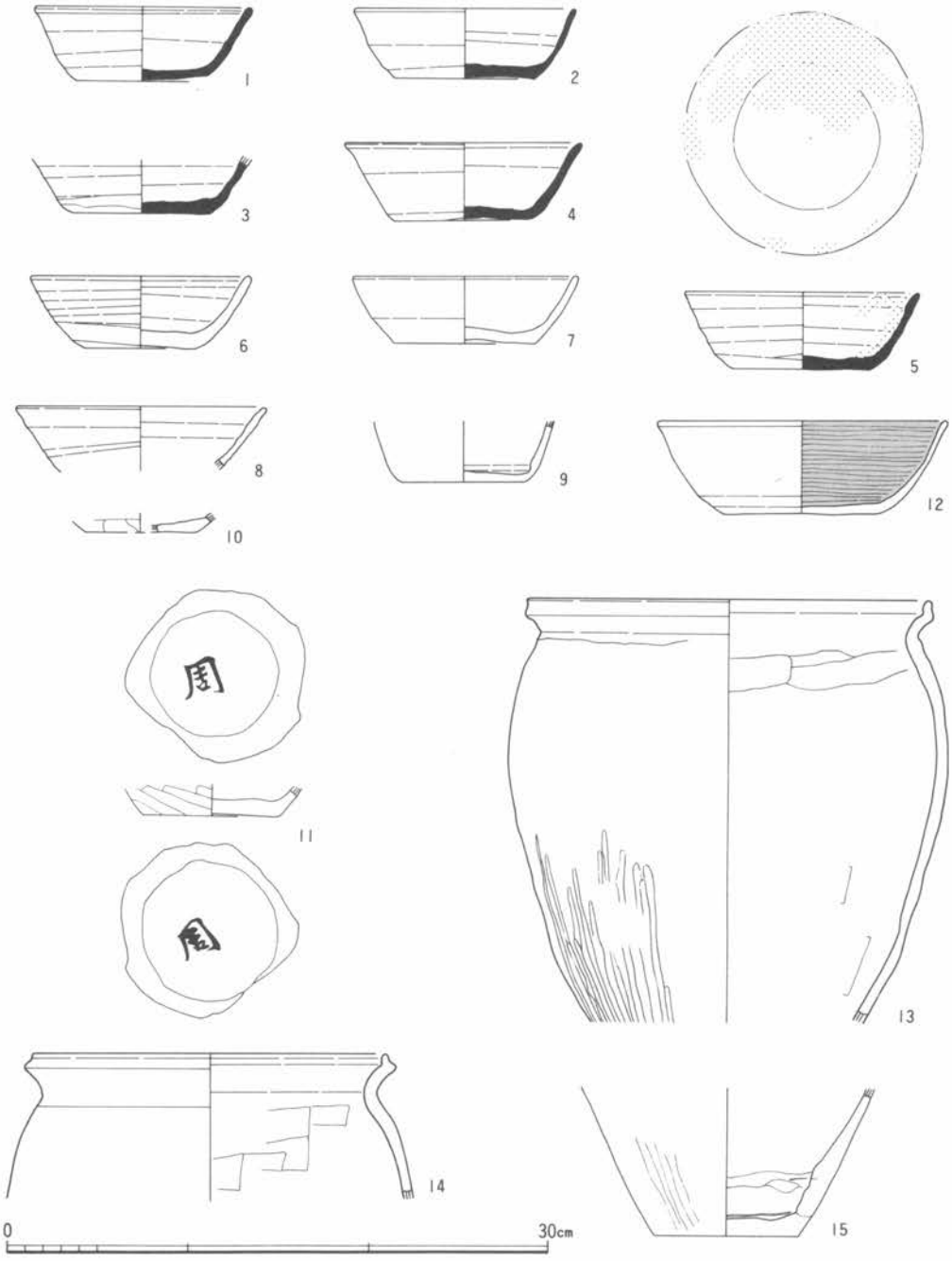
図示できなかった資料の総数は684点で、重量比で土師器甕と杯で90%以上を占めている。全体的に小破片である。須恵器は杯・甕ともに「くすべ焼成」の須恵器がみられる。土師器甕は「常総型」の割合が高い。土師器杯のなかに内面黒色処理を施したものがみられる。

1～5は須恵器杯である。1は体部外面にロクロ痕を残す。体部は直線的に開き、口唇部はやや肥厚し、端部を丸く収める。2は還元炎焼成になりきれない須恵器で、体部はやや内彎し、口唇部がわずかに外反する。体部から口縁部の器壁は薄く仕上げる。1・2とも底部は全面回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を回転ヘラ削り。3～5は「くすべ焼成」の須恵器である。3は底部ヘラ切り離しの後、回転ヘラ削り調整。体部外面の調整は下端部を回転ヘラ削り。4・5は体部は直線的に開き、口縁部の内側がやや肥厚する。4は底部ヘラ切り離しの後、手持ちヘラ削り調整。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。5は体部内外面にロクロ痕を残す。体部外面の下端部と底部の全面を回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。内外面に油煙の付着がみられる。

6～12は土師器杯である。6・7は体部は内彎気味に開き、底部は回転糸切り離しの後、周縁部を回転ヘラ削り調整。体部外面の調整は下半部を回転ヘラ削り。6は外面にロクロ痕を明瞭に残し、底部は厚い。7は体部内外面の一部に煤が付着する。8は体部内外面にロクロ痕を残す。9は体部の立ち上がり角度がきつく、外面の器面は荒れる。10は底部は回転糸切り離しで、無調整。体部外面の調整は手持ちヘラ削り。11は底部は厚く、回転糸切り離しの後、全面手持ちヘラ削り調整。体部外面の調整は手持ちヘラ削り。底部内外面に異なった筆跡で「周」と墨書してある。12は大振りの杯で、体部は内彎し、口唇部はわずかに外反する。内面は体部は横方向、底部は放射状のヘラ磨きで、内面に黒色処理を施す。底部は全面回転ヘラ削り調整

で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下半部を回転ヘラ削りで、それ以外はヘラ磨き。

13～15は「常総型」の土師器甕である。13は口唇部をほぼ垂直につまみ上げる。最大径は胴部上半にあり、胴部中位まで縦のヘラ磨きを施す。口縁部の内外面に煤が付着する。14は口唇部を内側につまみ上げる。15は底部で、外面に縦のヘラ磨きを施すが、器面が荒れて不明瞭である。内面には輪積み痕が明瞭に残る。底部に木葉痕がみられる。



第80図　竪穴住居003出土遺物

竪穴住居004（第81図、図版42）　［土器観察表P269］

須恵器杯2点、土師器杯7点、土師器甕1点、土師器甑1点が図示できた。出土状況は破片が広く飛び散り、床面から浮いた状態である。このことから、多くの遺物は本竪穴住居廃絶後に投棄されたものと思われる。

図示できなかった資料の総数は875点で、全体的に小破片である。調査ができた範囲は本来の遺構の半分位であり、実際の点数は更に多くなると考えられる。土師器甕のなかには「常総型」の甕はごく少量しかみられない。

1・2は須恵器杯で、胎土中に石英粒と雲母粒を含み、常陸産と考えられる。いずれも体部内外面にロクロ痕を残す。1は器高が低く、器壁はやや厚く仕上げる。底部は全面回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部は無調整。底部外面に焼成前の「干」か「キ」のヘラ記号がみられる。2は体部は直線的に開き、口縁部は外反する。体部は無調整。

3～9は土師器杯である。3～6は非ロクロの土師器である。3は口縁部がわずかに内彎する。内面の調整はヘラ磨き。4は口唇部を尖頭形に仕上げる。内面の調整はヘラナデ。5は口縁部と体部、体部と底部の境にヘラ削りによって稜を作りだす。内面の調整はヘラ磨き。6は口縁部をナデによって小さく内彎させる。外面の調整はヘラナデで、内面はヘラ磨き。体部外面に輪積み痕がみられる。7～9はロクロ使用の土師器で、内外面に赤彩を施す。7は体部は直線的に開き、口縁部はわずかに外反する。器壁は薄く仕上げる。8は体部内外面と底部内面をやや荒いヘラ磨き調整。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。7・9とも底部は回転糸切り離しの後、周縁部を手持ちヘラ削り調整。体部外面の調整は下半部を手持ちヘラ削り。

10は土師器甕で、口唇部はやや肥厚してつまみ上がる。

11は土師器甑で、口唇部をほぼ垂直につまみ上げ、最大径は口縁部にある。外面の口縁部直下と胴部内面に輪積み痕がみられる。

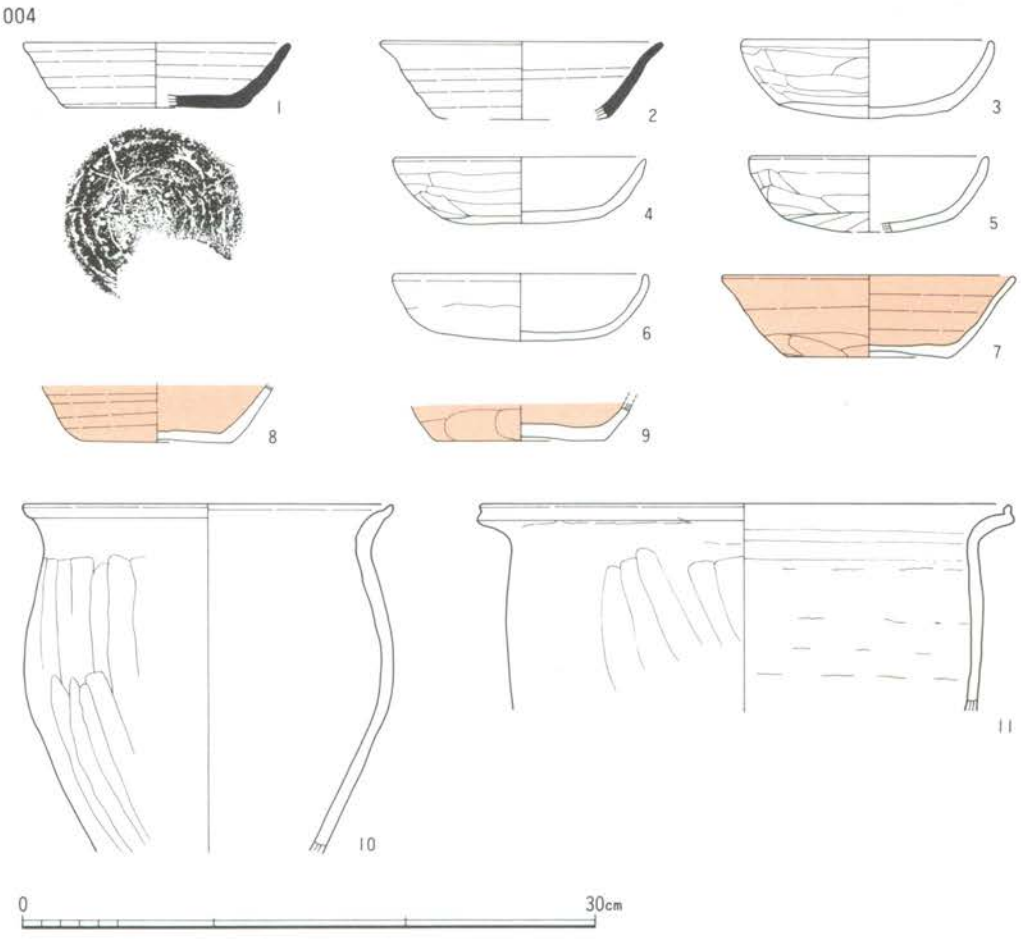
竪穴住居006（第81図、図版42）　［土器観察表P269］

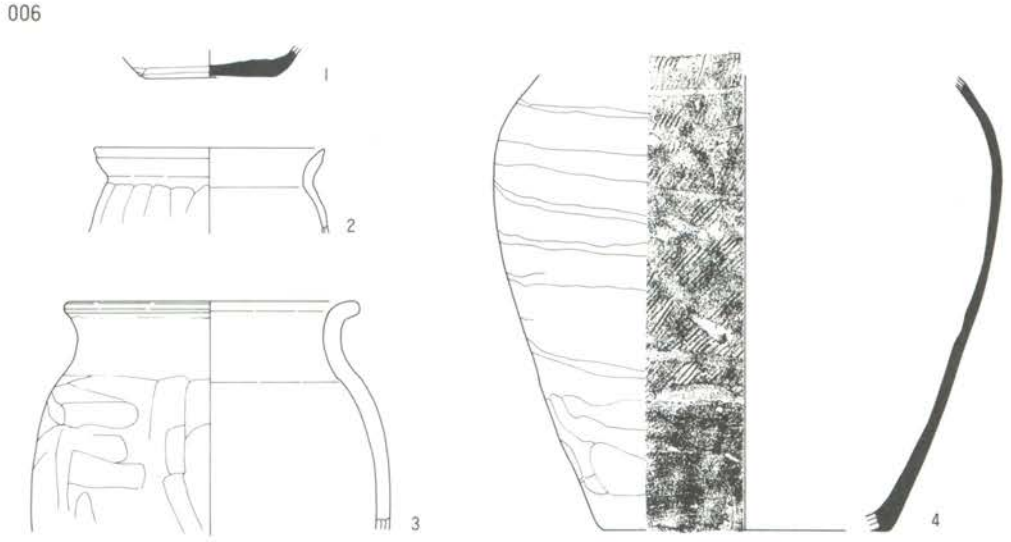
須恵器杯1点、土師器甕2点、須恵器甕1点が図示できた。図示できなかった資料はわずか4点で、すべて小破片である。3の土師器甕は埋土中からの出土である。

1は須恵器杯である。底部はヘラ切り離しの後、全面手持ちヘラ削り調整。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。

2・3は土師器甕である。2は小形の甕で、胴部の器壁を薄く仕上げ、口唇部はつまみ上げ、尖頭形にする。3は器壁が厚く、口唇部は強く外反し、端部を丸く収める。

4は須恵器甕で、胴部外面は叩きの後、帯状にヘラナデをして叩き目を消している。胴部下半部はヘラ削り。内面は指頭によるオサエの後、ナデを行う。





第81図　竪穴住居004・006出土遺物

竪穴住居008A（第82図、図版42・43・60）　［土器観察表P269］

須恵器杯1点、須恵器高台付き杯1点、土師器杯2点、土師器甕3点、鉄製品5点、砥石1点が図示できた。出土状況は竈のある壁とその対壁に多くみられるが、完形品やそれに近いものは少ない。5の甕は竈内と竈対壁のコーナー部に破片がみられることから、意図的に投棄した可能性が考えられる。3の土師器杯は竈内からの出土であるが、被熱した状況はみられない。

図示できなかった資料の総数は306点である。重量比で土師器が全体の80%以上を占め、土師器甕に中形のものがみられるほかはすべて小破片である。土師器杯のなかにロクロ使用の土師器で、赤彩を施したものがみられる。須恵器甕では「くすべ焼成」のものが半数を占める。

1は須恵器杯で、体部は直線的に開く。体部外面と底部内面にロクロ痕を残す。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下半部を手持ちヘラ削り。

2は須恵器高台付き杯で、体部下半部がわずかに内彎し、口縁部は緩やかに外反する。底部は回転ヘラ削りで、高台の周囲はナデ調整する。切り離し技法は不明。

3・4は土師器杯である。3は体部は内彎気味に開く。底部は回転糸切り離しの後、周縁部を手持ちヘラ削り調整。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。内面はやや荒いヘラ磨きで、黒色処理を施す。底部外面に焼成前の「－」状のヘラ記号がみられる。4は底部は手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。底部外面に墨書がみられ、2文字以上と思われるが、判読できない。

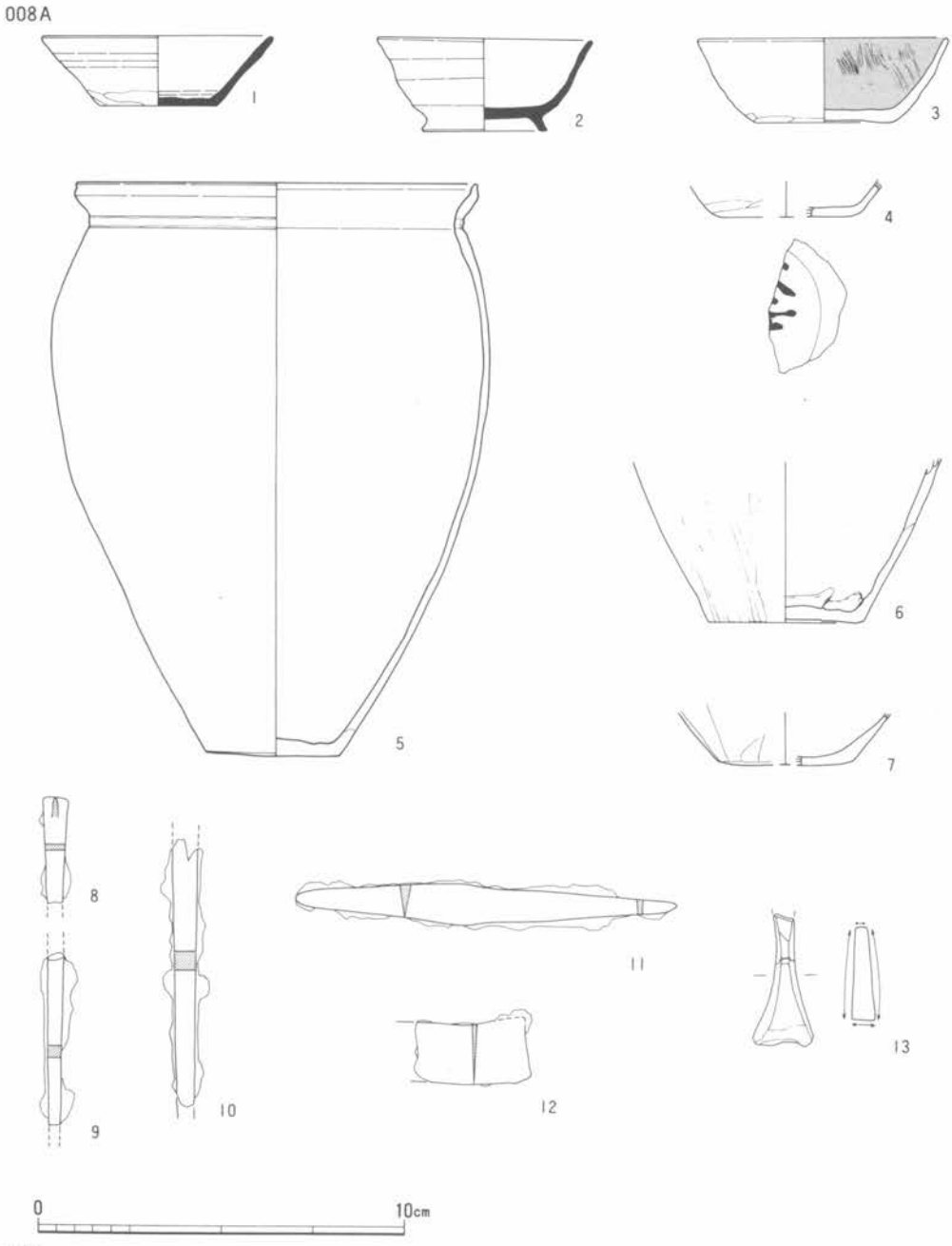
5～7は土師器甕で、5・6は「常総型」の甕である。5は口唇部をほぼ垂直につまみ上げ、卵形の胴部をもつ。頸部に補強のためと思われる粘土紐を貼り付ける。底部に木葉痕がみられる。6の胴部内面の調整は雑なナデ。7は底部の器壁をやや薄く仕上げる。

8・9は鉄鏃で、出土位置などから同一個体と考えられる。8は刃部で、遺存長28.5㎜、幅5.5㎜、厚さ2.0㎜、重さ1.62ｇを計る。9は頸部で、遺存長47.0㎜、幅3.5㎜、厚さ3.0㎜、重さ3.46ｇを計る。10は不明棒状品で、遺存長70.0㎜、幅6.0㎜、厚さ5.0㎜、重さ9.53ｇを計る。11は刀子である。完形品で、関が緩やかな両関式である。全長105.0㎜、重さ8.64ｇを計る。刃部は長さ91.0㎜、幅9.0㎜、厚さ3.0㎜、頸部は長さ59.0㎜、幅45.0㎜、背厚1.9㎜、厚さ1.6㎜を計る。12は不明板状品である。刃部と思われる部分がみられ、穂摘具の可能性もある。遺存長30.0㎜、幅16.5㎜、厚さ1.8㎜、重さ3.29ｇを計る。

13は砥石で、両面ともよく使い込まれる。石材は凝灰岩質で、遺存長7㎝、幅4.9㎝、厚さ1.9～3.1㎝を計る。

竪穴住居009（第82図、図版42・60）　［土器観察表P269］

土師器杯2点のみが図示できた。両者とも埋土中からの出土である。図示できなかった資料の総数は43点で、土師器杯と甕の小破片がほとんどである。



第82図　竪穴住居008A・009出土遺物

1は口縁部の小破片で、内面はヘラ磨きで、黒色処理を施す。外面に横位で「飯」と墨書してある。2は底部で、底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部は無調整。

竪穴住居012（第83図、図版43・65）　［土器観察表P269］

須恵器杯1点、土師器杯4点、土師器甕・須恵器甕・鉄製品各1点が図示できた。出土状況は竈周辺に集中するが、床面から若干浮いた状態のものが多い。3の土師器杯はP4のなかに落ち込むような状態で出土している。

図示できなかった資料の総数は523点で、重量比で土師器が90%以上を占める。土師器甕は「常総型」の胴部が多く、須恵器杯は「くすべ焼成」や常陸産と考えられるものがみられる。

1は須恵器杯である。体部下半部は内彎し、中位以降は外反気味に開く。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下半部を手持ちヘラ削り。

2～5は土師器杯である。2は1に類似した器形をもつ。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は中位以下を手持ちヘラ削り。3は浅いもので、体部は内彎気味に開く。底部は全面回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は中位以下を回転ヘラ削り。2・3とも体部外面にロクロ痕を残す。4は非ロクロの土師器で、箱形のものである。体部外面はヘラ削りで、口縁部は短く、体部とはナデによって区別する。5は大振りで、体部は内彎気味に開き、口唇部は外反する。体部外面にわずかにロクロ痕を残す。体部内面はヘラ磨き。

6は小形の土師器甕である。器壁は全体に薄く仕上げ、口唇部はやや外側につまみ上げる。

7は須恵器甕で、還元炎焼成になりきれない須恵器である。胴部外面は叩きの後、帯状にヘラナデで叩き痕を消す。下半部はヘラ削り。内面は指頭によるオサエの後、ナデを行う。

8は穂摘具で、二つに破損しているが同一個体である。錆が著しく、一部はX線写真により推定した。両端に孔がみられ、中央部は使い減りする。左側は遺存長64.0㎜、幅11.0㎜、厚さ1.2㎜、重さ4.33g。右側は遺存長26.0㎜、幅12.0㎜、厚さ1.2㎜、重さ2.32gを計る。

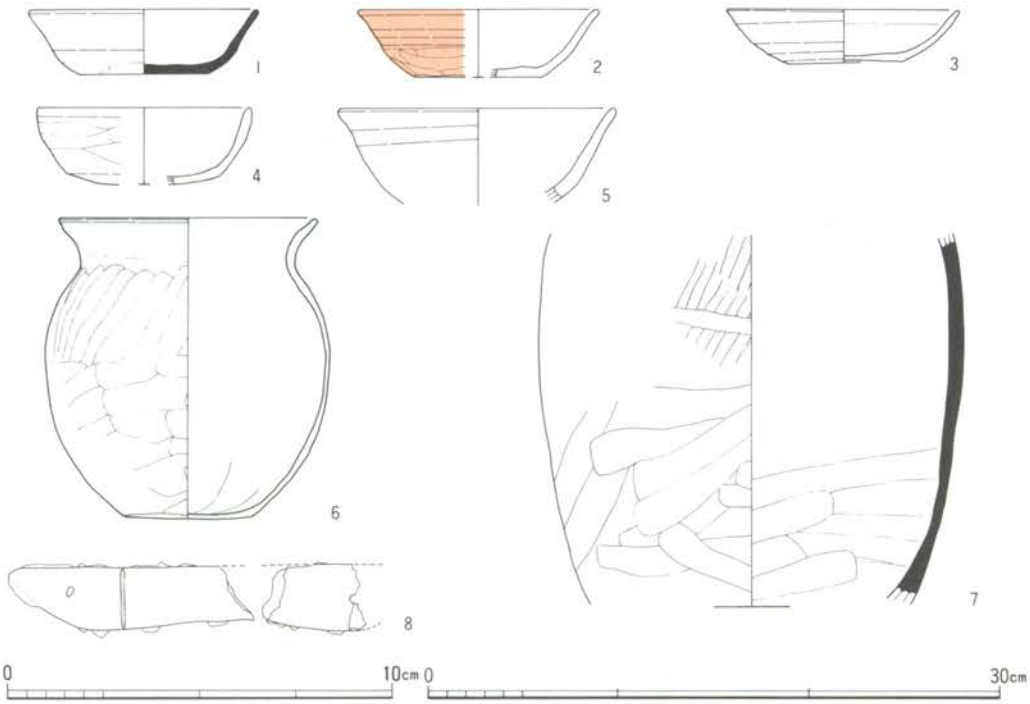
竪穴住居013（第83図、図版43）　［土器観察表P269］

須恵器杯1点、土師器杯1点、小型土器2点、土師器甕7点、須恵器甕1点が図示できた。出土状況は比較的大形の破片が散っているが、床面から浮いた状態のものが多く、全体的に遺存状態は悪い。本竪穴住居廃絶後に投棄されたものが主体と思われる。

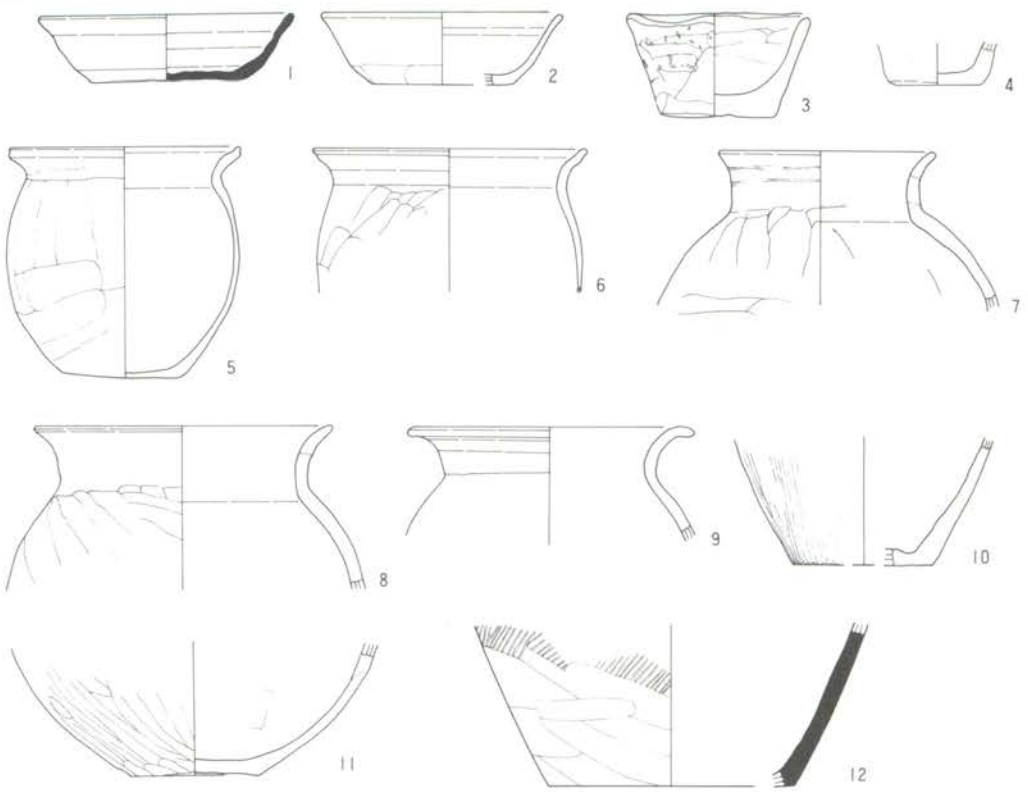
図示できなかった資料の総数は361点で、重量比で土師器が全体の95%を占めるが、ほとんどが小破片である。土師器甕では「常総型」のものは少量しかみられない。

1は須恵器杯で、器形にやや歪みをもつ。口唇部はわずかに肥厚し外反する。底部は全面回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は回転ヘラ削り。

012



013



第83図　竪穴住居012・013出土遺物

2は土師器杯である。口唇部はわずかに外反し、端部を丸く収める。底部は回転糸切り離しの後、周縁部を手持ちヘラ削り調整。体部外面の調整は下半部を手持ちヘラ削り。

3・4は小型土器である。3は逆台形の器形で、器壁は全体に厚い。口唇部はナデで、そのほかはヘラナデ。底部外面に籾圧痕がみられる。4は底部で、体部外面はヘラ磨きで、全体に3より丁寧な調整を施す。

5～11は土師器甕である。5・6は小形の甕で、器壁を薄く仕上げる。口唇部は5がほぼ垂直に、6は外側につまみ上げる。7は球形の胴部をもち、口縁部は「コ」の字状に外反する。口縁部外面に輪積み痕がみられる。8・9は長胴の甕で、口縁部は8は緩やかに外反し、9は口唇部が反り返るくらいに強く外反する。9の器面は内外面共に荒れている。10は「常総型」の甕の底部である。底部外面に木葉痕がみられる。11は球形の胴部をもつ甕の底部である。胴部外面はヘラ磨きを施す。

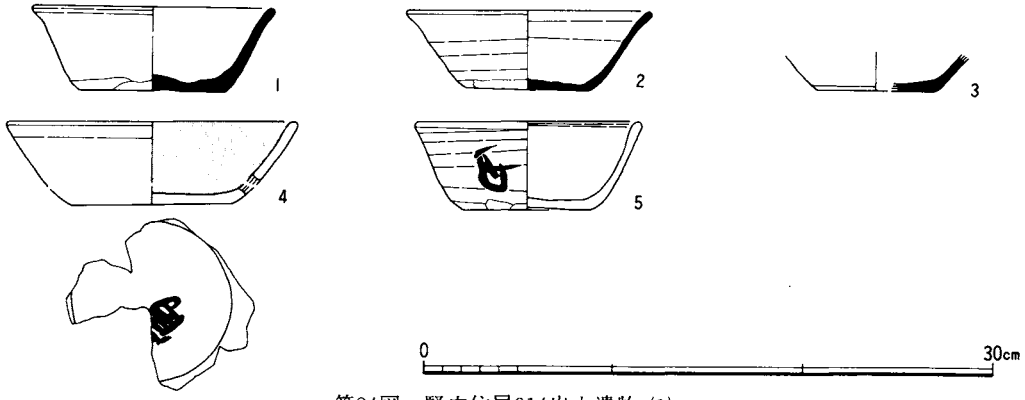
12は須恵器甕で、還元炎焼成になりきれない須恵器である。胴部外面は叩きの後、ヘラ削りを行う。内面は指頭によるオサエの後ナデ。

竪穴住居014（第84・85図、図版44・45・60・65・68）　［土器観察表P270］

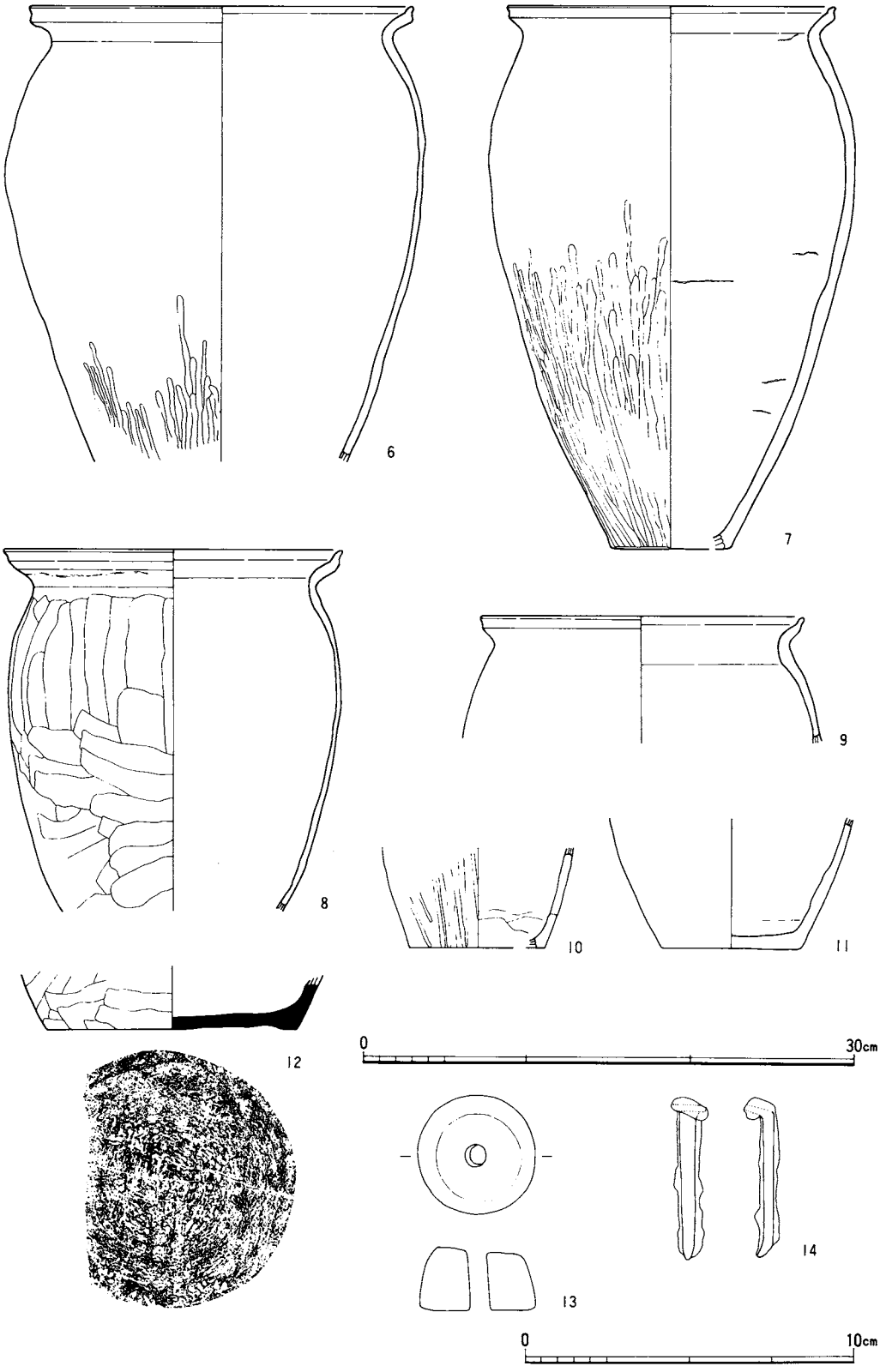
須恵器杯3点、土師器杯2点、土師器甕6点、須恵器甕・土製紡錘車・鉄釘各1点が図示できた。出土状況は、比較的床面に近いものが多いが、遺存状態はあまりよくない。土師器甕は竈内からの出土が多く、6・8は煙道部の補強材として使われていたものである。

図示できなかった資料の総数は507点で、重量比で土師器が70%を占める。甕の破片のなかに比較的大形のものがみられるほかは小破片である。土師器甕は「常総型」のものが主体で、器壁の薄い甕もみられる。須恵器甕は「くすべ焼成」と還元炎焼成になりきれない須恵器が多い。須恵器杯は図示したもののほかに常陸産のものがみられる。

1～3は須恵器杯である。1は「くすべ焼成」で、口唇部はわずかに外反する。底部はヘラ切り離しの後、全面手持ちヘラ削り調整。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。2は器



第84図　竪穴住居014出土遺物 (1)



第85図　竪穴住居014出土遺物 (2)

壁を薄く仕上げ、口唇部はわずかに外反する。体部外面にロクロ痕を残す。底部はヘラ切り離しの後、全面手持ちヘラ削り調整。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。3は還元炎焼成になりきれない須恵器である。底部は全面回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を回転ヘラ削り。

4・5は土師器杯である。4は同一個体と考えられ、体部は内彎気味に開く。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面は無調整。内面はヘラ磨きで、黒色処理を施す。底部外面に「富」と墨書してある。5は体部外面にロクロ痕を残す。口唇部は肥厚し丸く収める。底部は回転糸切り離しの後、周縁部を手持ちヘラ削り調整。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。体部外面に横位で、口縁部を左側にして「由」と墨書してある。

6～11は土師器甕で、6・7・9～11は「常総型」の甕である。6・7は口唇部をほぼ垂直につまみ上げる。胴部は卵形で、最大径を胴部上半にもつ。7の胴部内面には輪積み痕がみられる。8は器壁を薄く仕上げ、口縁部はやや肥厚し、口唇部を外側につまみ上げる。口縁部外面に輪積み痕がみられる。9は口唇部を外側につまみ上げる。11の胴部外面に縦方向の細かいヘラ磨きを施すが、不明瞭である。底部外面に細かな圧痕がみられるが性格は不明。

12は「くすべ焼成」の須恵器甕の底部である。胴部外面はヘラ削り。底部内面の中央部は摩耗し、若干光沢をもつ。底部外面は全面に細かな圧痕がみられ、焼成前の「キ」の字状のヘラ記号がみられる。

13は土製紡錘車で、完形品である。色調は茶褐色。径は最大36㎜、最小26㎜、厚さ19㎜、孔径6.0㎜、重さ28.95ｇを計る。

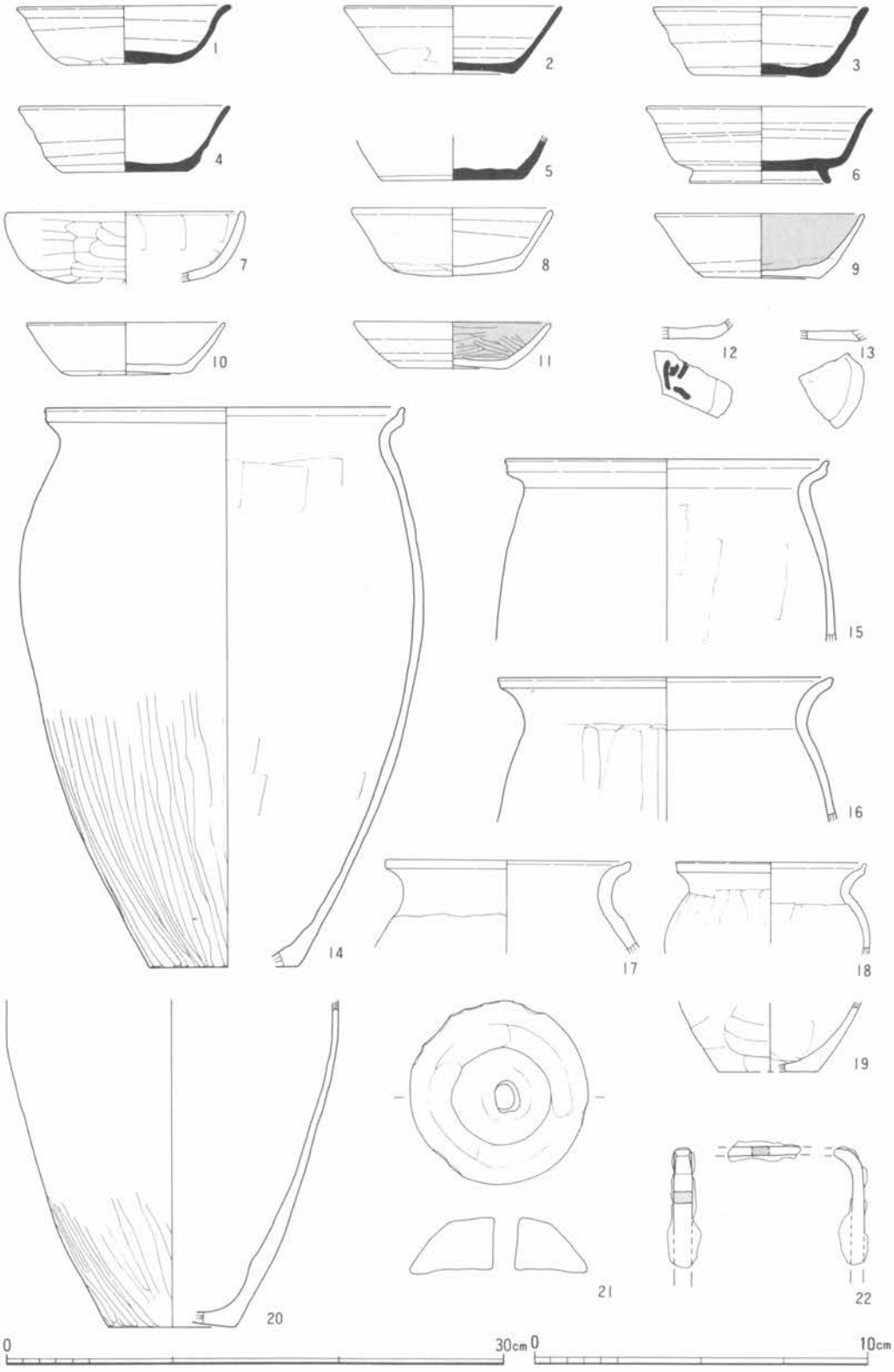
14は鉄釘で、頭部はＬ字形である。頭部は錆が著しくＸ線写真により推定した。推定長47.0㎜、幅5.0㎜、厚さ3.5㎜、重さ3.08ｇを計る。

竪穴住居015（第86図、図版45・46・61・65・68）　［土器観察表Ｐ270］

須恵器杯5点、須恵器高台付き杯1点、土師器杯7点、土師器甕7点、土製紡錘車・鎹各1点が図示できた。出土状況は住居内の全体に広がり、床面から浮いた状態である。本竪穴住居廃絶に伴って投棄されたものと思われる。

図示できなかった資料の総数は649点で、重量比で土師器が90％近くを占める。須恵器杯は「くすべ焼成」と常陸産のものがみられる。土師器甕では器壁の薄い甕がみられ、「常総型」の甕は40％位の割合でみられる。

1～5は須恵器杯で、1～4は「くすべ焼成」のものである。1は体部の器壁を薄く仕上げる。体部は内彎し、口唇部は大きく外反する。底部はヘラ切り離しの後、全面手持ちヘラ削り調整。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。2も器壁を薄く仕上げ、口縁部は直線的に開く。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下半部を手



第86図　竪穴住居015出土遺物

持ちヘラ削り。3・4は体部内外面にロクロ痕を残し、口唇部は外反する。3は底部中央部の器壁が厚い。底部はヘラ切り離しの後、全面手持ちヘラ削り調整。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。4は体部の器壁を薄く仕上げ、口唇部は若干肥厚する。底部は全面回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を回転ヘラ削り。5は常陸産と思われる。底部は全面手持ちヘラ削りで、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。

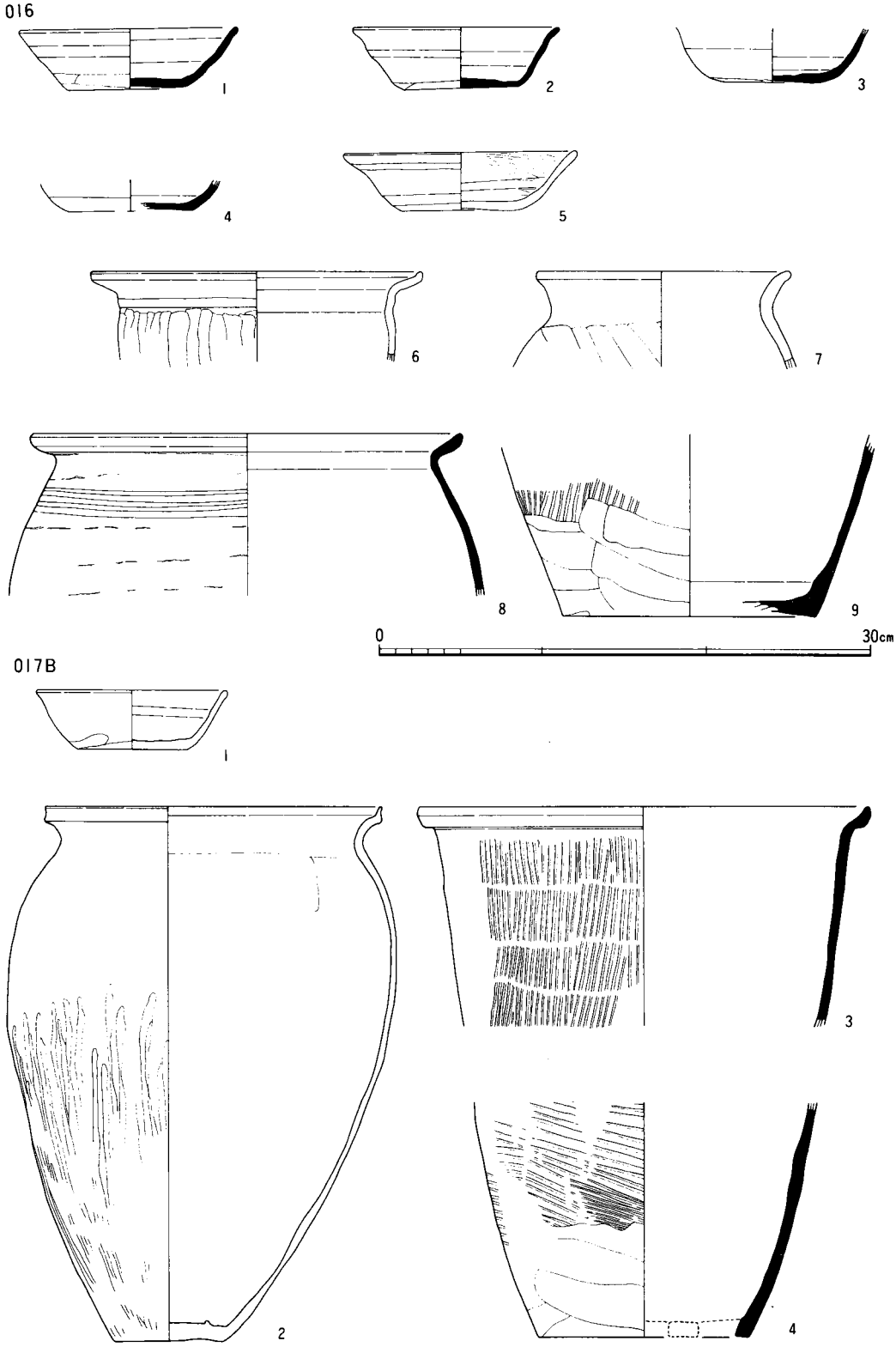
6は須恵器高台付き杯で、杯部は箱形である。体部は直線的に開き、口縁部は外反する。高台の内側はナデで、外側は回転ヘラ削り調整。切り離し技法は不明。体部外面は無調整。

7～13は土師器杯である。7は非ロクロの土師器である。口縁部は短く、ナデによって体部と区別する。内面はヘラナデの後ナデを行うが、ヘラの当たり痕が残る。8～10は体部は直線的に開く。8は底部がわずかにに丸く突出する。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。9は内面は細かなヘラ磨きで、黒色処理を施す。内面の底部と体部の境に輪積み痕がみられる。底部中央部の器壁は薄い。底部は全面回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を回転ヘラ削り。10は器高が低く、口唇部を小さく収め、端部は尖頭形である。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。11は器高が低く、体部はわずかに内彎気味に立ち上がり、口唇部端部は尖頭形である。底部は全面回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下半部を回転ヘラ削り。内面はやや荒いヘラ磨きで、黒色処理を施す。12・13は底部の小破片で、底部外面に墨書される。12は判読不能。底部と体部外面は手持ちヘラ削り調整。13は不鮮明で赤外線写真によっても図化することはできなかった。底部と体部外面は回転ヘラ削り調整。内面はヘラ磨きで、黒色処理を施す。

14～20は土師器甕である。14・15・20は「常総型」の甕である。14は口唇部を垂直につまみ上げ、卵形の胴部で、最大径を胴部上半にもつ。胴部内面はヘラナデ。15は口唇部を外側につまみ上げ、胴部はあまり張らない。16は口縁部の器壁がやや厚く、口唇部を短く外側につまみ上げる。胴部外面はヘラ削り。17は口縁部が強く外反し、口唇部をわずかにつまみ上げる。18・19は器壁の薄いものである。18は口唇部をほぼ垂直につまみ上げる。胴部外面はヘラ削り、内面はヘラナデ。19は底部で、外面はヘラ削り、内面はヘラナデ。20は胴部下半から底部で、底部に木葉痕がみられる。

21は土製紡錘車で、ほぼ完形である。側面の上部をヘラ削りによる面取りを行う。色調は赤褐色。径は最大54㎜、最小30㎜、厚さ16㎜、孔径7.0㎜、重さ40.84ｇを計る。

22は鏃である。胴部と脚部は接合しないが同一個体と考えられる。遺存する脚部下半は錆が著しい。肩は緩やかに曲がる。脚部は遺存長36.0㎜、幅5.5㎜、厚さ3.5㎜、重さ2.83ｇ、胴部は遺存長22.0㎜、幅5.0㎜、厚さ2.1㎜、重さ0.83ｇをそれぞれ計る。



第87図　竪穴住居016・017B出土遺物

竪穴住居016（第87図、図版46）　［土器観察表P270］

須恵器杯4点、土師器杯1点、土師器甕・須恵器甕各2点が図示できた。出土状況は床面よりやや浮いた状態である。本竪穴住居廃絶に伴って投棄されたものと思われる。竈内から土製支脚が出土したが、遺存状態が悪く図示できなかった。3・4の須恵器杯は埋土中から出土。

図示できなかった資料の総数は792点で、重量比で土師器が約80％を占める。遺構の遺存状態から考えると遺物の数量は多い。土師器甕に中形品がみられるほかはすべて小破片である。土師器甕は「常総型」の甕が多く、器壁の薄い一群もみられる。土師器杯ではロクロ使用で、内外面に赤彩を施す杯が少量みられる。須恵器は杯・甕ともに「くすべ焼成」と還元炎焼成になりきれない須恵器が多くみられる。

1～4は須恵器杯である。1は「くすべ焼成」の須恵器で、体部は直線的に開き、口唇部はわずかに外反する。底部はヘラ切り離しの後、全面回転ヘラ削り調整。体部外面の調整は下半部を回転ヘラ削り。2・4は還元炎焼成になりきれない須恵器である。2は体部から口縁部の器壁は薄く仕上げる。体部は直線的に開き、口縁部は外反する。3は底部と体部の境に丸みをもつ。2・3とも底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。4は底部は全面回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下半部を回転ヘラ削り。

5は土師器杯で、やや大振りの杯である。体部から口縁部は外反気味に開き、口唇部は肥厚し、端部を丸く収める。底部は回転糸切り離しの後、周縁部を回転ヘラ削り調整。体部外面の調整は下端部を回転ヘラ削り。内面は荒いヘラ磨きで、黒色処理を施した可能性がある。

6・7は土師器甕である。6は口縁部は大きく外反し、口唇部を垂直につまみ上げる。長胴になるものと思われる。7は口縁部は緩やかに開き、口唇部は外反し、端部を丸く収める。

8・9は須恵器甕で、還元炎焼成になりきれない須恵器である。8は口縁部は短いが、強く「く」の字状に外反する。口唇部は肥厚し、端部は尖頭形である。肩部にヘラ描きの浅い沈線が6条みられる。胴部外面の調整はナデで、輪積み痕がみられる。9は胴部外面は叩きの後、下端部をヘラ削り調整。内面は指頭によるオサエの後ナデ。

竪穴住居017B（第87図、図版46）　［土器観察表P271］

土師器杯・土師器甕各1点、須恵器甑2点が図示できた。出土状況は1の土師器杯は竈内からの出土で、被熱しているが著しいものではない。2の土師器甕は竈に架けられた状態で出土している。甕の下に土製支脚が置かれていたが、遺存状態が悪く図示できなかった。

図示できなかった資料の総数は109点で、土師器がほとんどで、甕の破片に中形品がみられる。土師器杯では内面黒色処理を施した杯がみられる。

1は土師器杯で、口唇部は肥厚し、端部を丸く収める。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、

切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。内外面は被熱する。

2は「常総型」の土師器甕である。口唇部を細く、垂直につまみ上げる。胴部は上半部に最大径をもつ卵形である。底部内面は指頭による荒いナデで、凹凸が著しい。

3・4は須恵器甑である。3は口縁部は短いが水平になるくらい外反し、口唇部をつまみ上げ外側に面を作る。外面は叩きで、内面は指頭によるオサエの後ナデ。4は還元炎焼成になりきれない須恵器で、遺存部分の状態から五孔形態のものと思われる。外面は叩きの後、下端部をヘラ削り調整。内面は指頭によるオサエの後ナデ。

竪穴住居018（第88図、図版47・61・65）　［土器観察表P271］

須恵器杯1点、土師器杯4点、土師器甕3点、須恵器甕1点、鉄釘1点が図示できた。出土状況は床面から浮いた状態のものが多い。1の土師器杯は竈内から出土したが、被熱した状態はみられない。本竪穴住居廃絶後に投棄されたと考えられる。5の土師器杯は埋土中から出土。

図示できなかった資料の総数は512点で、重量比で土師器が60%弱で、須恵器の量は比較的多い。土師器甕では「常総型」の甕が多く、器壁の薄い一群もみられる。須恵器甕では「くすべ焼成」と還元炎焼成になりきれない須恵器が多い。土師器杯では内面黒色処理を施した杯がみられる。須恵器杯では「くすべ焼成」の須恵器が多く、常陸産と思われる杯も少量みられる。

1は還元炎焼成になりきれない須恵器杯である。体部は直線的に開く。底部は手持ちヘラ削り調整で、若干丸みをもつ。切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。

2～5は土師器杯である。2・3は体部外面にロクロ痕を残す。2は体部から口縁部にかけて直線的に開く。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。3は箱形で、口唇部はわずかに外反する。底部は回転糸切り離しの後、周縁部を部分的に手持ちヘラ削り調整。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。体部と底部の外面に「子井」と墨書してある。体部外面は口縁部を左側にした横位で墨書してある。内外面に赤彩を施す。4は口縁部の器壁は薄く、わずかに外反する。底部は回転糸切り離しの後、周縁部を回転ヘラ削り調整。体部外面の調整は下端部を回転ヘラ削り。体部外面の底部寄りに正位で「五」と墨書してある。5は底部外面に墨書してあるが、判読できない。底部は回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下半部を回転ヘラ削り。

6～8は土師器甕で、6・7は「常総型」の甕である。ともに口縁部は外反し、口唇部をほぼ垂直につまみ上げる。6は胴部の器壁を薄く仕上げる。8は台付き甕で、胴部と底部の器壁は薄く仕上げる。外面はヘラ削りで、内面はヘラナデ。

9は還元炎焼成になりきれない須恵器甕である。外面は叩きの後、下端部をヘラ削り調整。内面は指頭によるオサエの後ナデ。

10は鉄釘で、上半分は折れ曲がる。全長42.0㎜、幅4.5㎜、厚さ3.5㎜、重さ3.06ｇを計る。

竪穴住居020A（第88図、図版47）　［土器観察表P271］

須恵器杯2点、土師器杯・鉢各1点、須恵器甕小破片3点が図示できた。5～7は埋土中からの出土である。図示できなかった資料の総数は68点で、土師器甕が多く、すべて小破片である。土師器甕は「常総型」は少ない。須恵器甕は還元炎焼成になりきれない須恵器である。

1・2は須恵器杯である。1は体部は直線的に開き、口唇部端部を丸く収める。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。口縁部は全体的に摩滅する。2は常陸産と思われる杯である。底部は回転糸切り離しの後、全面手持ちヘラ削り調整。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。

3は土師器杯で、底部は全面回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を回転ヘラ削り。

4は鉢である。器壁は厚く、口縁部は短く、外反する。底部は輪積みの部分で剝がれている。胴部下半部はヘラ削りで、そのほかはナデ。

5～7は須恵器甕の破片で、外面に同心円叩きを施すものである。内面はいずれも指頭によるオサエの後ナデ。外面は胴部下端部をヘラ削り。

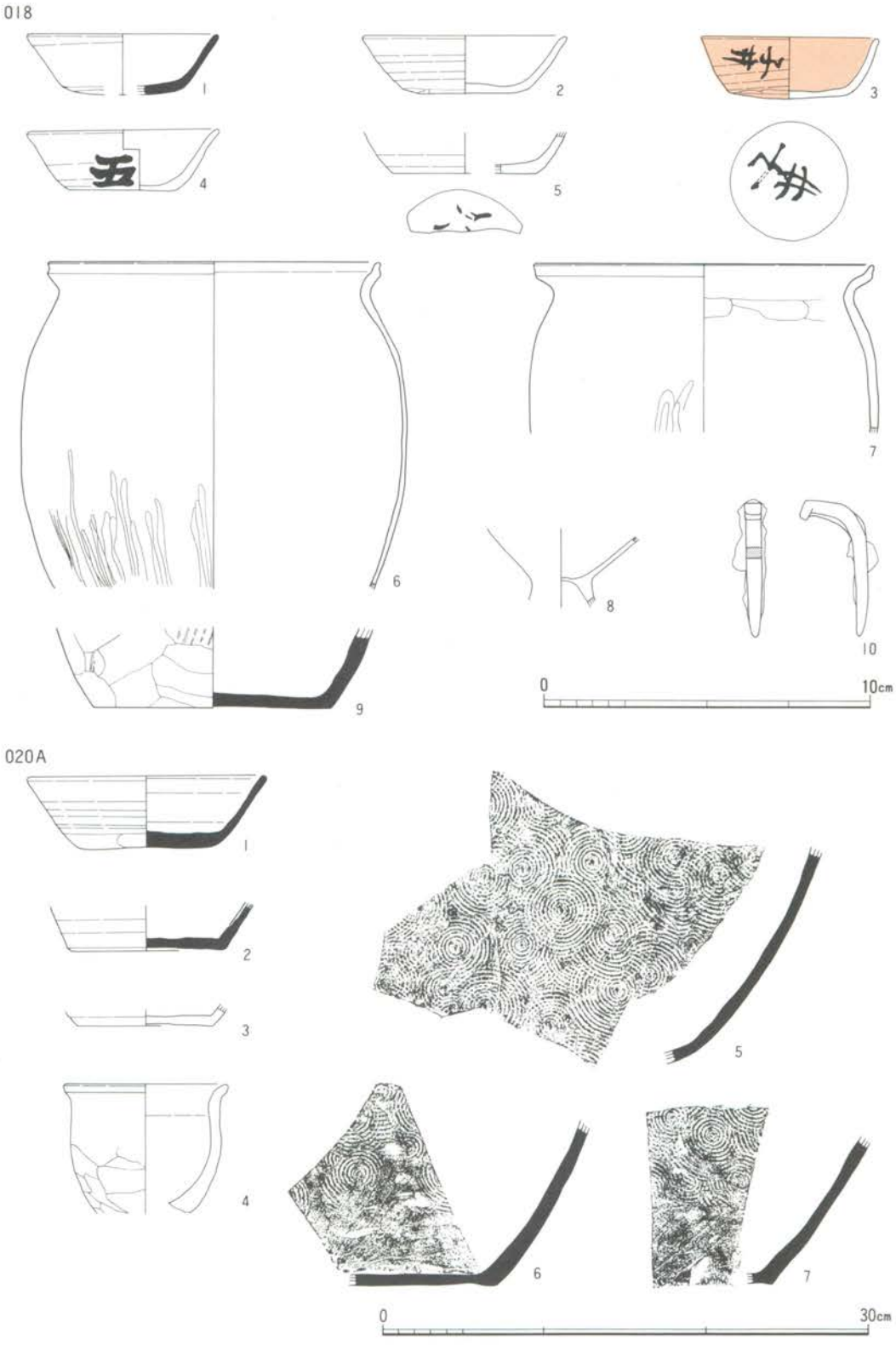
竪穴住居020B（第89図、図版47・48・65）　［土器観察表P271］

須恵器杯1点、土師器杯4点、土師器皿1点、土師器甕2点、須恵器甑1点、須恵器壺2点、鉄製品4点が図示できた。出土状況はピットのなかから出土しているものもあるが、大部分が床面から浮いた状態である。本竪穴住居廃絶に伴って投棄されたものと思われる。

図示できなかった資料の総数は208点で、重量比で土師器が70%以上を占める。土師器杯に中形品がみられるほかは、すべて小破片である。土師器杯は内面をヘラ磨きする椀形のものが多く、黒色処理を施すものもみられる。土師器甕は「常総型」の甕は少ない。須恵器甕は「くすべ焼成」と還元炎焼成になりきれない須恵器だけである。

1は須恵器杯で、還元炎焼成になりきれない須恵器である。口縁部はわずかに外反し、口唇部端部を丸く収める。体部内外面にロクロ痕を明瞭に残す。底部は全面回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を回転ヘラ削り。

2～5は土師器杯で、いずれも内面をヘラ磨きする椀形の杯である。2・3は小振りで、体部は内彎気味に開く。2はやや浅く、底部は全面回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を回転ヘラ削り。3はやや深く、口唇部は肥厚し、端部を丸く収める。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下半部を手持ちヘラ削り。内外面に炭素吸着による黒色処理を施すが、内面に一部炭素の吸着がみられない部分がある。4は体部は内彎気味に開き、口唇部はわずかに外反する。底部は全面回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を回転ヘラ削り。体部外面に焼成後の正



第88図　竪穴住居018・020A出土遺物

位で「ヘ/」のヘラ記号がみられる。内面に黒色処理を施す。5は体部は内彎気味に開き、口唇部は外反する。底部は全面回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を回転ヘラ削り。4・5とも体部外面の下半部にロクロ痕を明瞭に残す。

6は土師器皿で、体部は外反して大きく開く。口唇部はさらに外反し、端部は尖頭形になる。底部は全面回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下半部を回転ヘラ削り。内面はヘラ磨きをせずに、黒色処理を施すが、全体的にくすんだ状態である。

7・8は土師器甕で、器壁の薄い小形の甕である。7は口縁部から胴部の一部で、口唇部をつまみ上げるが、端部は丸く仕上げる。胴部外面はヘラ削りで、内面はヘラナデ。8は底部で、7と同一個体と思われる。内面に煤が付着する。

9は還元炎焼成になりきれない須恵器の甑である。五孔形態で、把手は断面三角形の小さいものを二つ付ける。口縁部は外反し、口唇部は肥厚して外側に面を作る。胴部はバケツ形である。胴部外面は叩きの後ナデで、下端部はヘラ削り。内面は指頭によるオサエの後ヘラナデ。

10・11は須恵器長頸壷の胴部である。10は底部を欠損し、胴部外面の下半部は回転ヘラ削り調整。外面の肩の部分には緑色の釉がかかる。11は底部内面の器面に、雨垂れ状の細かい剝落がみられる。胴部外面は下端部を回転ヘラ削り調整。高台は貼付けで、ナデ調整する。高台の端部に藁の圧痕や小粘土塊などが付着している。

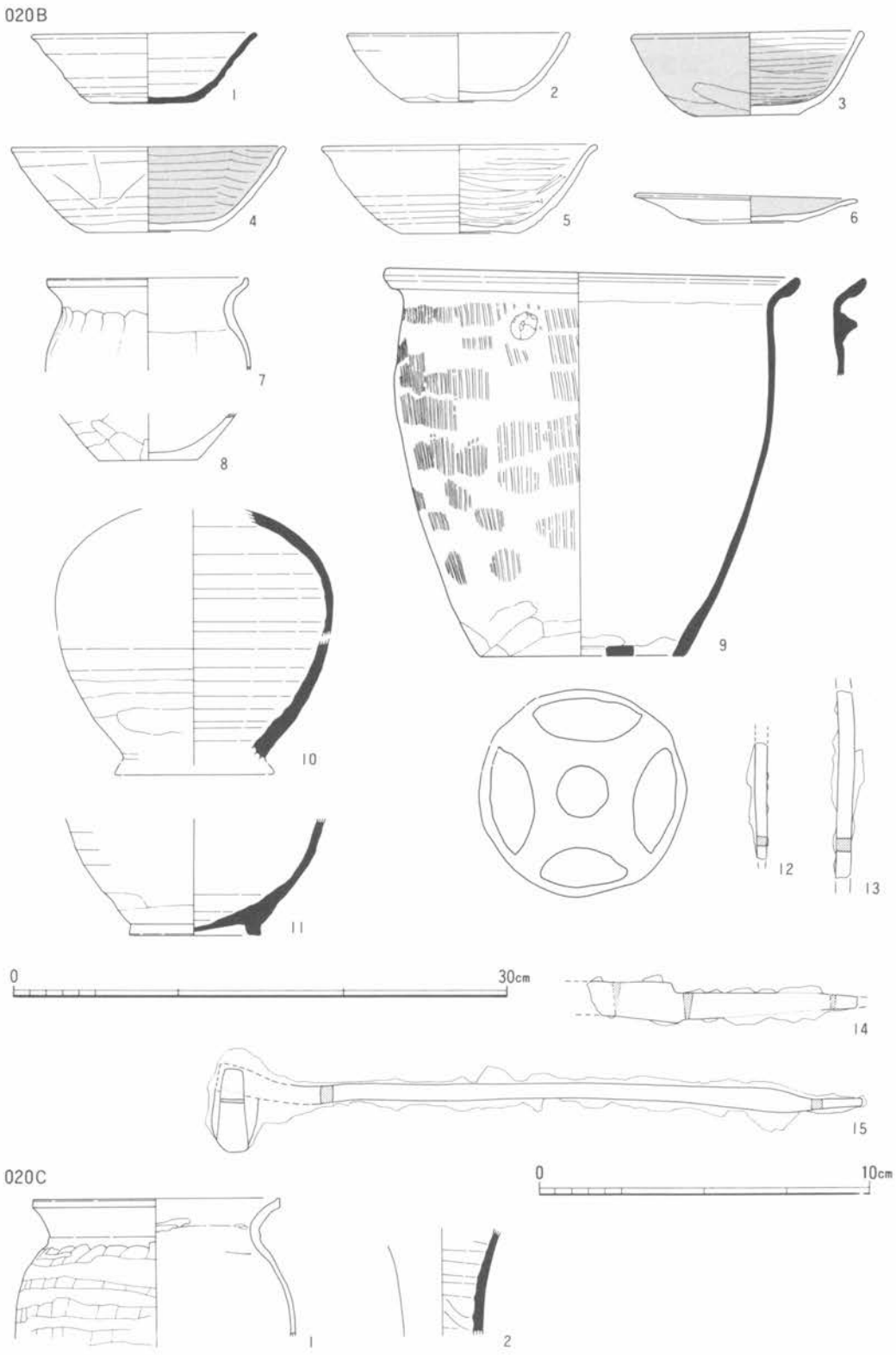
12～15は鉄製品である。12・13は棒状品で、両端とも欠損する。12は鉄鏃の茎部か紡錘車の軸部とも考えられる。遺存長35.0㎜、幅3.0㎜、厚さ2.3㎜、重さ1.19ｇを計る。13は遺存長56.0㎜、幅4.3㎜、厚さ4.0㎜、重さ3.72ｇを計る。14は両関の刀子である。茎部は錆が著しく、X線写真により推定した。また、刃部は片側が錆で表面が剝離している。遺存長82.0㎜で、刃部の遺存長28.0㎜、幅12.0㎜、背厚は推定で2.5㎜、重さ2.63ｇ、茎部の遺存長54.0㎜、幅8.0㎜、背厚2.6㎜、重さ2.98ｇを計る。15は不明棒状品である。図の左側は錆膨れが著しく不明瞭である。棒状品の先端に板状品を巻き付けたようにも思える。全長198.0㎜、幅5.5㎜、厚さ5.0㎜、重さ29.95ｇを計る。

竪穴住居020C（第89図、図版48）　［土器観察表P271］

土師器甕・須恵器長頸壷各1点だけが図示できた。図示できなかった資料の総数は70点と少なく、遺構の遺存状態に比べて、出土遺物量が最も少ない。重量比で土師器が97％を占める。土師器甕は図示した器壁の薄い甕のほかに「常総型」と在地産の甕が多くを占める。須恵器甕のなかに、外面に同心円叩きを施す小破片が1片みられる。

1は土師器甕で、胴部の器壁を薄く仕上げて、口唇部を垂直につまみ上げる。胴部外面はヘラ削りの後、横方向に帯状のヘラナデ調整。

2は須恵器長頸壷の頸部で、内外面の一部に釉がみられる。



第89図　竪穴住居020B・020C出土遺物

竪穴住居021（第90図、図版48・68）　［土器観察表P271］

須恵器杯2点、土師器杯3点、須恵器甑1点、石製紡錘車1点が図示できた。出土状況は6の須恵器甑を除いて床面からで、2～4は竈右側からまとまって出土した。竈内から出土した5の土師器杯は被熱し、多少器面が荒れている。しかし、遺存度は1/4程度であり、意図的に竈内に置かれたものかは判然としない。

図示できなかった資料の総数は608点で、重量比で土師器が73%を占めるが、ほとんどが小破片である。土師器甕では「常総型」の甕が約半数を占め、残りは在地産と器壁の薄い一群である。土師器杯はロクロ使用と非ロクロの杯が半数ずつみられる。須恵器甕は還元炎焼成になりきれない須恵器がみられる。須恵器の甑の底部小破片が若干存在することから、これらの須恵器甕の胴部破片のなかに甑が含まれていると思われる。須恵器杯は常陸産のものは少量で、「くすべ焼成」の杯が多くみられる。

1・2は須恵器杯である。1は還元炎焼成になりきれない須恵器で、体部は直線的に開き、口唇部は外反する。体部外面にロクロ痕が明瞭に残る。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削りで、面取りをする。2は体部は深く、直線的に開き、口唇部は肥厚して、わずかに外反する。底部は全面回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を回転ヘラ削りで、面取りをする。

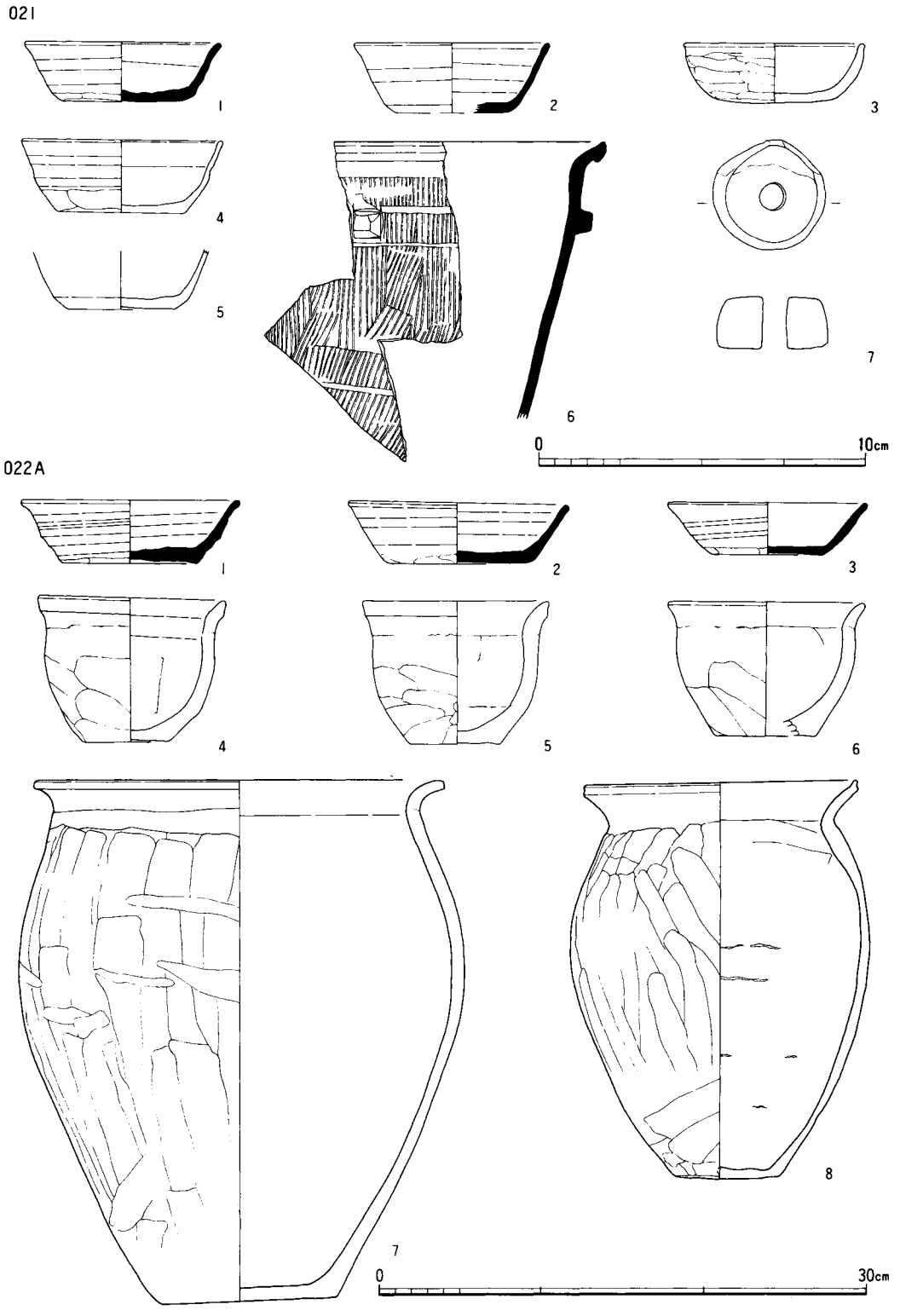
3～5は土師器杯である。3は非ロクロの土師器杯である。体部の器壁は厚く、口唇部は強いナデによって短く外反させ、端部を丸く収める。内面はヘラ磨き調整。4は体部の内外面に弱い稜をもち、直線的に開く。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下半部を手持ちヘラ削り。5は底部は全面回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を回転ヘラ削りで、面取りをする。

6は還元炎焼成になりきれない須恵器の甑で、口縁部から胴部の一部のみが遺存する。口縁部は二重口縁で、口唇部は尖頭形になる。把手は正方形で、ヘラによる面取りで、断面を台形に仕上げる。胴部外面は縦の叩きの後、数条のヘラナデがみられる。

7は石製紡錘車である。図の上部を欠損しているが、その部分を再度磨いて使用している。上・下面に放射状の浅く短い擦痕がみられる。石材は滑石である。長径34.0㎜、短径28.0㎜、厚さ16.0㎜、孔径8.0㎜、重さ29.8gを計る。

竪穴住居022A（第90・91図、図版48～50・65）　［土器観察表P271］

須恵器杯3点、鉢3点、土師器甕6点、土師器甑3点、鉄製刀子2点が図示できた。出土状況は遺構のなか全体に広がり、特に集中している所はみられない。2の須恵器杯と4の鉢は竈内から出土している。4は倒立した状態である。両者とも下底面からは浮いているが、被熱した状況がみられることから、竈の廃絶に伴って置かれたものと思われる。



第90図　竪穴住居021・022A出土遺物 (1)

図示できなかった資料の総数は160点で、重量比で土師器が83%を占める。土師器甕に中形品がみられるほかは、すべて小破片である。土師器甕は「常総型」の甕は少ない。須恵器杯は常陸産と思われる杯と還元炎焼成になりきれない須恵器がみられる。

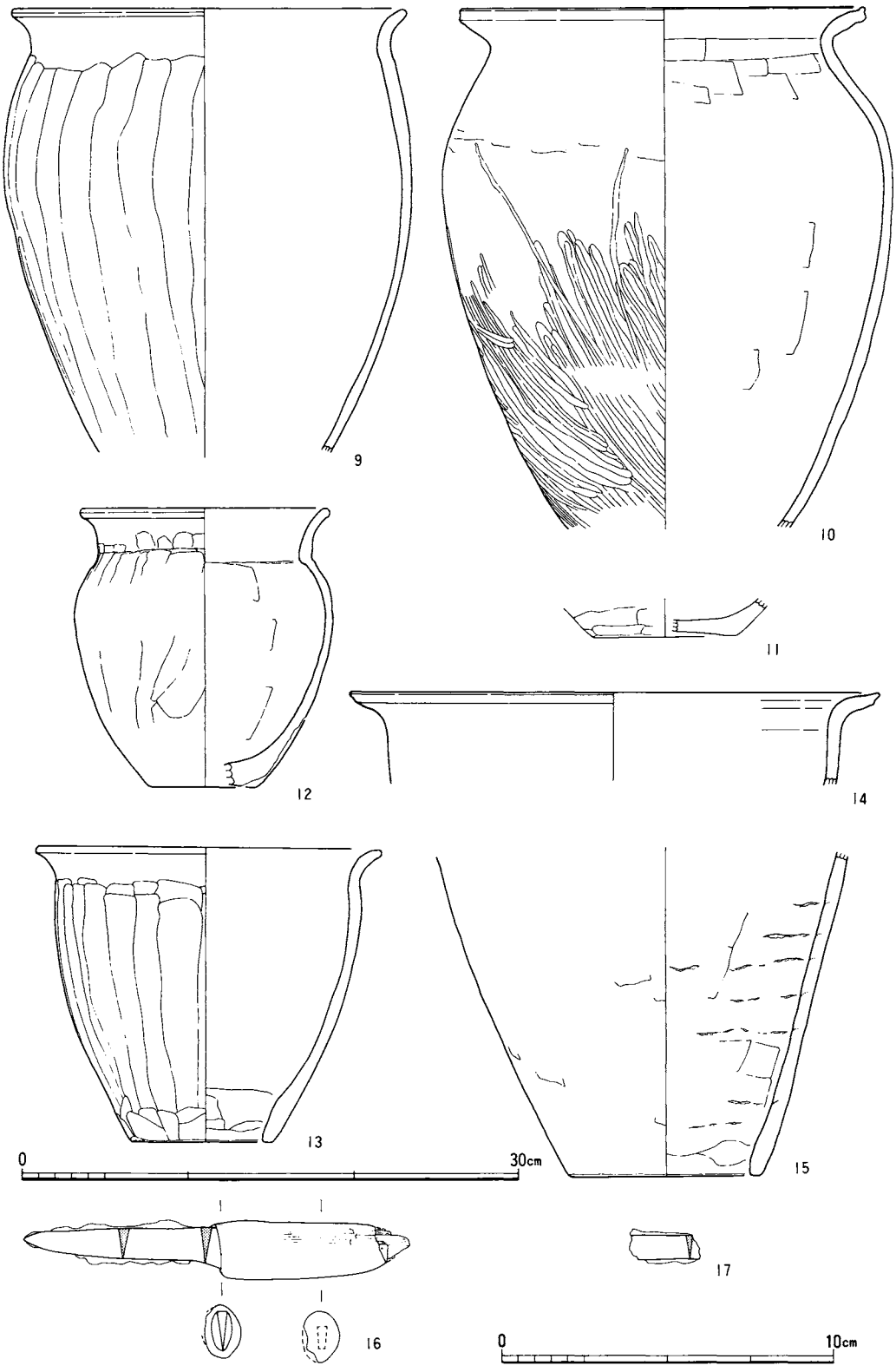
1～3は須恵器杯で、常陸産と思われる。1は底部から体部の器壁が厚く、体部外面にロクロ痕を明瞭に残す。体部は直線的に開き、口唇部は肥厚して外反し、端部を丸く収める。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。2は体部は直線的に開き、口唇部端部を丸く収める。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。3は器高がやや低く、体部は直線的に開き、口唇部は外反し、端部を丸く収める。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。

4～6は鉢である。4・5は類似した器形をもつ。口縁部は緩やかに外反し、口唇部は外面に面を作り、端部は尖頭形になる。頸部外面に輪積み痕がみられる。6は4・5に比べ器高は低く、口唇部は外反したまま終わる。頸部外面に輪積み痕がみられる。

7～12は土師器甕で、7～9は長胴の甕である。7は最大径を胴部のややうえにもつ。口縁部は短いが強く外反し、口唇部端部は面を作る。頸部外面に輪積み痕がみられる。胴部外面はヘラ削りの後、部分的にヘラナデ。内面は口縁部を除いてヘラナデ。8は卵形の胴部をもち、口縁部は外反し、口唇部を垂直につまみ上げる。胴部内面に輪積み痕がみられ、器面の剝落がみられる。9は最大径を胴部上半にもち、口縁部は緩やかに外反し、口唇部端部を丸く収める。10は「常総型」の甕で、最大径を胴部上半にもち、肩を張る。口縁部は強く外反し、口唇部を垂直につまみ上げる。胴部外面の肩部にヘラの当り痕がみられる。11は底部で、外面はヘラ削り。底部に木葉痕がみられる。12は小形の甕で、最大径を胴部上半にもつ。口縁部は内面に明瞭な稜を作って外反し、口唇部端部を丸く収める。外面のヘラ削りは一部口縁部までおよぶ。胴部外面下半部の器面は荒れ、剝落が著しい。

13～15は土師器甑である。13は一孔形態の甑で、胴部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。胴部下半の器壁は厚く、孔の面取りは幅広く行う。14・15は同一個体と思われる。口縁部は水平になるくらい外反し、口唇部を外側につまみ上げ、端部は尖頭形である。胴部外面はヘラナデで、ヘラの当り痕がわずかにみられる。胴部内面には輪積み痕が多くみられる。

16・17は刀子である。16は柄の木質部の遺存状態が良好である。茎の状態は、X線写真による観察でも、推定することはできなかった。把の厚さは尻部にいくにしたがって薄くなっている。刃先の1/4程度がわずかに手前に曲っており、使用によって生じたものと思われる。把の着装状態は不明。遺存長116.5㎜、刃部の幅10.0㎜、背厚3.0㎜、把部の幅18.0㎜、厚さ10.7㎜、重さ13.67ｇを計る。17は刃部の一部が遺存する。遺存長21.0㎜、幅7.0㎜、背厚1.9㎜、重さ1.52ｇを計る。



第91図　竪穴住居022A出土遺物 (2)

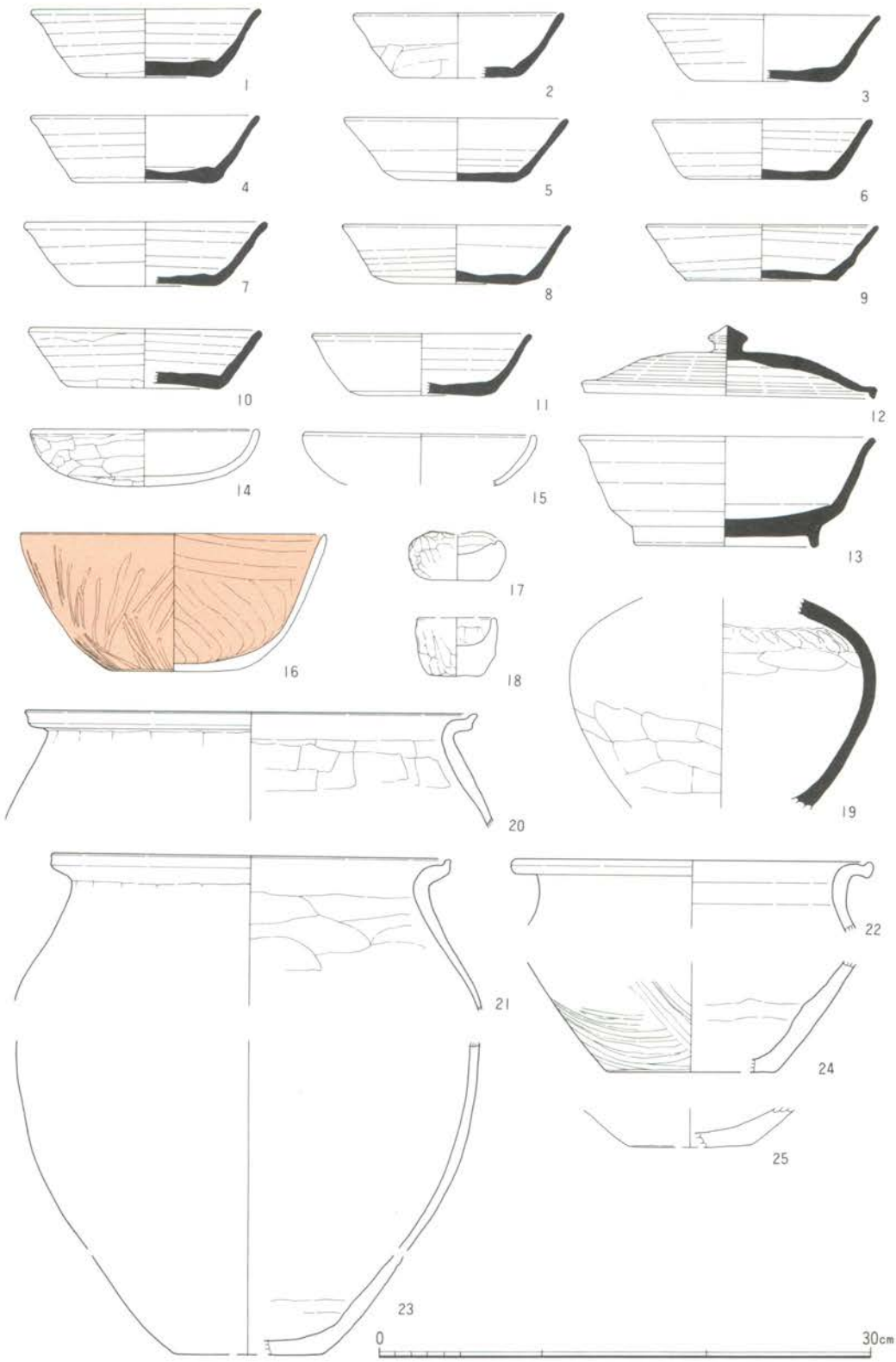
竪穴住居023（第92・93図、図版51・65・66・68）　［土器観察表P272］

須恵器杯11点、須恵器杯蓋・須恵器高台付き杯・須恵器長頸壺・鉢各1点、土師器杯・小型土器各2点、土師器甕6点、土製紡錘車1点、鉄製品17点が図示できた。出土状況は竪穴住居全体に広がり、3・6の須恵器杯や26の土製紡錘車、28・37・38などの鉄製品は床面上の出土であるが、大部分は床面から浮き、本竪穴住居廃絶に伴って投棄されたものと思われる。

図示できなかった資料の総数は2,957点で、重量比で土師器が83%を占める。須恵器は杯が多く、常陸産と思われる杯で、胎土中に石英粒・雲母粒が少量しか含まれないものである。須恵器甕は還元炎焼成になりきれない須恵器が多い。土師器甕は「常総型」の甕が多い。土師器杯は非ロクロの杯が多く、ロクロ使用の杯のなかには内外面に赤彩を施した杯がみられる。

1～11は須恵器杯で、1～9は常陸産と思われる。体部は3が外反気味に、7・11が内彎気味に、それ以外はほぼ直線的に開く。また、2・11を除いて体部にロクロ痕を残す。1は底部の器壁は厚く、口唇部はわずかに外反し、端部を丸く収める。底部は回転糸切り離しの後、全面手持ちヘラ削り調整。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。2は口唇部は肥厚する。底部は手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下半部を手持ちヘラ削り。3は口唇部はわずかに外反し、端部を丸く収める。4は口唇部は肥厚して外反し、端部を丸く収める。3・4とも底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は、下半部が摩滅しているので不明。5は体部はやや外反気味に開き、口唇部は若干肥厚する。底部は全面回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を回転ヘラ削りで、強く面取りをする。6は口唇部端部を丸く収める。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。7は口唇部は肥厚して外反し、端部を丸く収める。底部は回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は、下半部が摩滅しているので不明。8は口唇部はわずかに外反する。体部外面のロクロ痕は比較的明瞭に残る。底部は全面回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を回転ヘラ削りで、強く面取りをする。9は体部外面下端部のロクロ痕が明瞭である。底部外面に焼成前の「＋」のヘラ記号がみられる。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面は無調整。胎土中の雲母粒・石英粒は少ない。10は器壁を全体的に厚く仕上げ、底部は上げ底。口縁部外面に輪積み痕がみられる。口唇部はわずかに外反し、端部を丸く仕上げる。底部は手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。11は口唇部は外反し、端部を丸く収める。底部は回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を回転ヘラ削りで、強く面取りをする。

12は須恵器杯蓋で、整った宝珠形つまみが付けられる。端部は一旦水平に開いた後、強く内傾し、内側に面を作る。つまみ接合部内面はへこむ。天井部外面は回転ヘラ削り調整で、つまみと端部内外面はナデ調整し、それ以外はロクロ痕を明瞭に残す。



第92図　竪穴住居023出土遺物 (1)

13は須恵器高台付き杯で、常陸産と思われる。底部の器壁は厚く仕上げる。体部は下端部に面を作って直線的に開き、口縁部は外反し、口唇部端部を丸く収める。高台は貼り付ける前に、杯部の外面にヘラで2～3条の沈線を付ける。底部は回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。高台部とその周辺はナデ調整。

14・15は非ロクロの土師器杯である。器高は低く、体部は丸底から内彎気味に立ち上がり、口唇部は丸く収める。14は体部外面がヘラ削りで、内面はヘラナデ。底部と体部の境は意識的である。15は体部外面がヘラ削りの後、丁寧なヘラ磨きを行い、内面もヘラ磨きする。

16は鉢である。平底から内彎気味に開く。内面の体部から底部は丁寧なヘラ磨きで、そのほかはヘラ削りの後ヘラ磨きし、口唇部の一部にナデを行う。口唇部端部はヘラ削りで面取りをし、ヘラナデする。底部外面も含め全面に赤彩を施す。

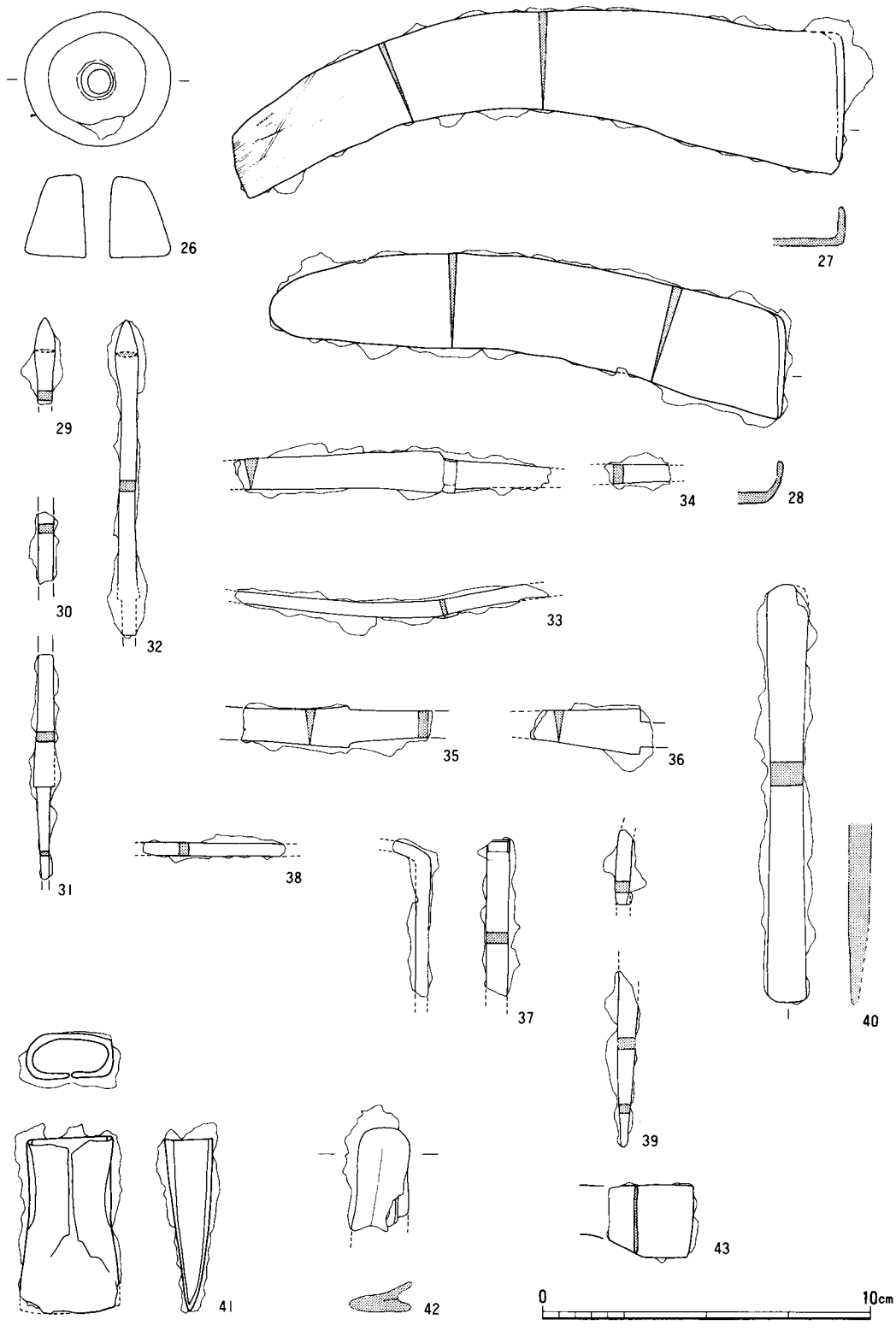
17・18は小型土器である。17は口径に比べ器高の低いものである。内外面は指頭によるオサエで、底部に木葉痕がみられる。18は口縁部の遺存度が低く、便宜的に口縁部を水平に図化した。底部に比べ口縁部は器壁をかなり薄く仕上げる。内外面は指頭によるオサエとナデ。

19は須恵器長頸壷の胴部で、常陸産と思われる。最大径を胴部上半にもち、肩を張る。胴部外面の下半部はヘラ削り、肩部の内面に指頭によるオサエ痕が残る。頸部との接合部分は摩滅しており、頸部以上が破損した後も、そのまま使用していた可能性がある。

20～25は「常総型」の土師器甕である。20～22は口縁部である。20は口縁部が水平になるほど外反し、口唇部を外側につまみ上げる。頸部内面にはヘラ削り痕を残す。21は口縁部が強く外反し、口唇部を垂直につまみ上げる。22は口縁部が水平になるほど外反し、口唇部をつまみ上げるが、器壁は厚く端部を丸く収める。23～25は底部で、底部に木葉痕がみられる。いずれも胴部外面に縦方向のヘラ磨きを施すが、23・25は器面が荒れて不明瞭である。

26は土製紡錘車で、ほぼ完形である。色調は暗赤褐色で、胎土中に微粒石を含む。長径45.0㎜、短径30.0㎜、厚さ25.0㎜、孔径7.0～10.0㎜、重さ46.57ｇを計る。

27～43は鉄製品である。27・28は鎌である。27は比較的大きなカーブをもつ曲刃鎌で、遺存状態はよい。先端部は角張り、繊維状のものが付着している。刃を下、基部を右側にして置いた場合、基部を手前に折り曲げる。全長180.2㎜、幅20.0～43.0㎜、背厚2.0～2.3㎜、重さ92.15ｇを計る。28は緩やかなカーブをもつ曲刃鎌で、背部と刃部の一部を欠損するが、遺存状態はよい。先端部は丸みをもつ。刃を下、基部を右側にして置いた場合、基部を手前に折り曲げる。全長159.0㎜、幅29.5㎜、背厚3.0㎜、重さ69.44ｇを計る。29～32は鏃である。29は両丸造りで、遺存長26.5㎜、重さ1.45ｇ、刃部幅7.0㎜、厚さ2.0㎜、頸部幅4.5㎜、厚さ3.0㎜を計る。30・31は同一個体と考えられる。30は遺存長21.8㎜、幅4.5㎜、厚さ2.8㎜、重さ1.47ｇを計る。31は頸部と茎部の境が緩やかに「ハ」の字状に広がる。遺存長68.0㎜、重さ4.14ｇ、頸部遺存長40.0㎜、幅5.5㎜、厚さ3.0㎜、茎部遺存長28.0㎜、幅2.5㎜、厚さ1.4㎜を計る。32は刃部は錆



第93図　竪穴住居023出土遺物 (2)

び膨れのため厚さは不明。頸部と茎部の境も錆のため判然としないが、緩やかに「ハ」の字状に広がるものと思われる。遺存長190.5㎜、重さ8.90ｇ、頸部幅5.0㎜、厚さ3.5㎜、茎部幅4.0㎜、厚さ4.2㎜を計る。33～36は刀子である。33･34は同一個体と思われる。33は両関で、背の方向からみて全体に彎曲する。遺存長97.0㎜、重さ14.58ｇ、刃部遺存長64.5㎜、幅9.0㎜、厚さ4.0㎜を計る。34は茎部で、遺存長26.5㎜、幅7.5㎜、厚さ2.5㎜、重さ1.88ｇを計る。35は両関で、刃部から関にかけて「ハ」の字状に広がる。遺存長58.0㎜、重さ6.53ｇ、刃部遺存長35.0㎜、幅10.5㎜、厚さ3.0㎜、茎部遺存長23.0㎜、幅9.0㎜、厚さ3.3㎜を計る。36は両関で、遺存長38.0㎜、重さ5.57ｇ、刃部遺存長34.0㎜、幅9.0㎜、厚さ1.5㎜、茎部遺存長4.0㎜、幅7.1㎜で、厚さは不明。37･38は閂金具で、同一個体と思われる。37は脚部で、遺存長47.2㎜、幅7.0㎜、厚さ3.3㎜、重さ5.99ｇを計る。38は胴部で、遺存長43.0㎜、幅3.0㎜、厚さ4.0㎜、重さ3.73ｇを計る。39は棒状品で同一個体と思われる。鉄鏃の茎部あるいは紡錘車軸と考えられる。上が遺存長23.0㎜、幅4.9㎜、厚さ3.9㎜、重さ1.48ｇ、下が遺存長53.5㎜、幅4.9㎜、厚さ3.7㎜、重さ3.59ｇを計る。40は鑿あるいは鉄素材と思われる。鑿とした場合片刃となるが、茎部がない。先端部は丸みをもつ。鉄素材の場合、切断の際に切断部分が薄くなることがある。全長127.0㎜、幅9.8㎜、厚さ7.1㎜、重さ57.42ｇを計る。41は斧である。片刃で、刃部の遺存はあまりよくない。袋部は刃を付けた方に折り曲げる。全長53.0㎜、厚さ2.0㎜、推定刃部幅31.0㎜、重さ46.15ｇを計る。42は鋤先の耳の部分で、遺存長32.0㎜、幅10.6㎜、厚さ3.0㎜、重さ10.18ｇを計る。43は穂摘具の右端の部分で、左下は使い減りする。遺存長12.0㎜、幅26.5㎜、厚さ1.8㎜、重さ3.26ｇを計る。

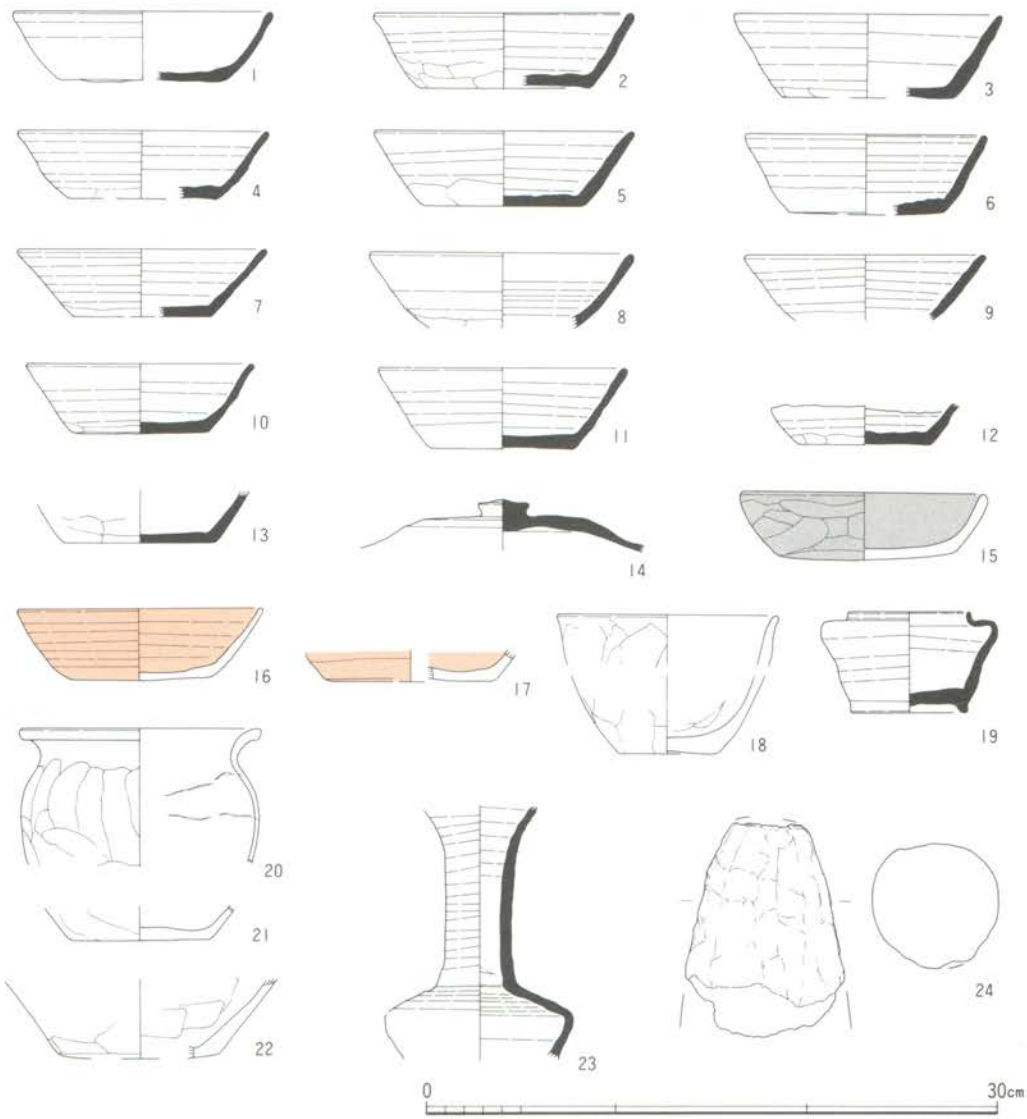
竪穴住居024（第94・95図、図版51・66）　［土器観察表Ｐ272］

須恵器杯13点、土師器杯・土師器甕各３点、須恵器杯蓋・須恵器短頸壷・須恵器長頸壷・鉢・土製支脚・土器転用紡錘車各１点、鉄製品20点が図示できた。出土状況は竪穴住居全体に広がり、多くの遺物が床面から浮いているなど、竪穴住居023ときわめて類似した状態を示している。24の土製支脚と40の鉄製品は埋土中からの出土である。

図示できなかった資料の総数は1,845点で、重量比で土師器が77％を占める。竪穴住居023と比べると破片資料の数はかなり少ない。土師器甕は「常総型」の甕が半数ほどみられる。土師器杯はロクロ使用の土師器で、内外面に赤彩が施された杯が目立つ。

１～13は須恵器杯である。１は体部は内彎気味に開き、口唇部はわずかに外反する。底部は手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面は無調整。２は体部は外反気味に開く。底部は手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面は下半部を手持ちヘラ削り。３～12は常陸産と思われる。８を除いて体部内外面にロクロ痕を残す。３は体部は下半部の器壁が厚く、直線的に開き、口唇部端部は尖頭形である。４は体部は内彎気味に開き、口縁部は外

反する。3・4とも底部は手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。5は体部は直線的に開き、口唇部はわずかに外反する。6は体部は外反気味に開く。5・6とも底部は手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。7～9は体部が大きく開くもので、7・9は直線的に開く。8は体部は内彎気味に開き、口唇部は肥厚し、端部を丸く収める。体部内面にロクロ痕を残す。7は底部は手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。8・9とも体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。10は体部は直線的に開き、口縁部はわずかに外反する。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。11は体部から口縁部にかけて直線的に開き、口唇部は肥厚し、端部を丸く収める。底部は全面回転ヘラ



第94図　竪穴住居024出土遺物（1）

削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下半部を回転ヘラ削り。12は口縁部から体部の一部を欠損しているが、破損面が全て摩耗しており、この状態で再利用したものと思われる。12・13とも底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。

14は須恵器杯蓋で、常陸産と思われる。宝珠形つまみが付けられる。つまみ接合部内面は膨らんでいる。天井部外面は回転ヘラ削り調整。

15～17は土師器杯である。15は非ロクロの土師器で、底部は平底である。体部から口縁部の器壁は厚く、内彎気味に立ち上がる。内外面に黒色処理を施す。16は体部がやや内彎気味に開く。内外面に赤彩を施すが、不明瞭な部分が多い。底部は全面回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を回転ヘラ削り。17も内外面に赤彩を施す。底部は静止糸切り離しの後、周縁部を手持ちヘラ削り調整。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。

18は鉢で、同一個体と思われる。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。体部外面はヘラ削りで、口縁部までおよぶ。底部内面はヘラナデ。

19は小形の須恵器短頸壷で、肩を強く張る。高台は貼り付けで、「ハ」の字状に開く。肩から口縁部にかけて器壁を薄く仕上げ、口唇部端部は丸く収める。全面ナデ調整で、丁寧に仕上げる。底部はヘラ切り離し。

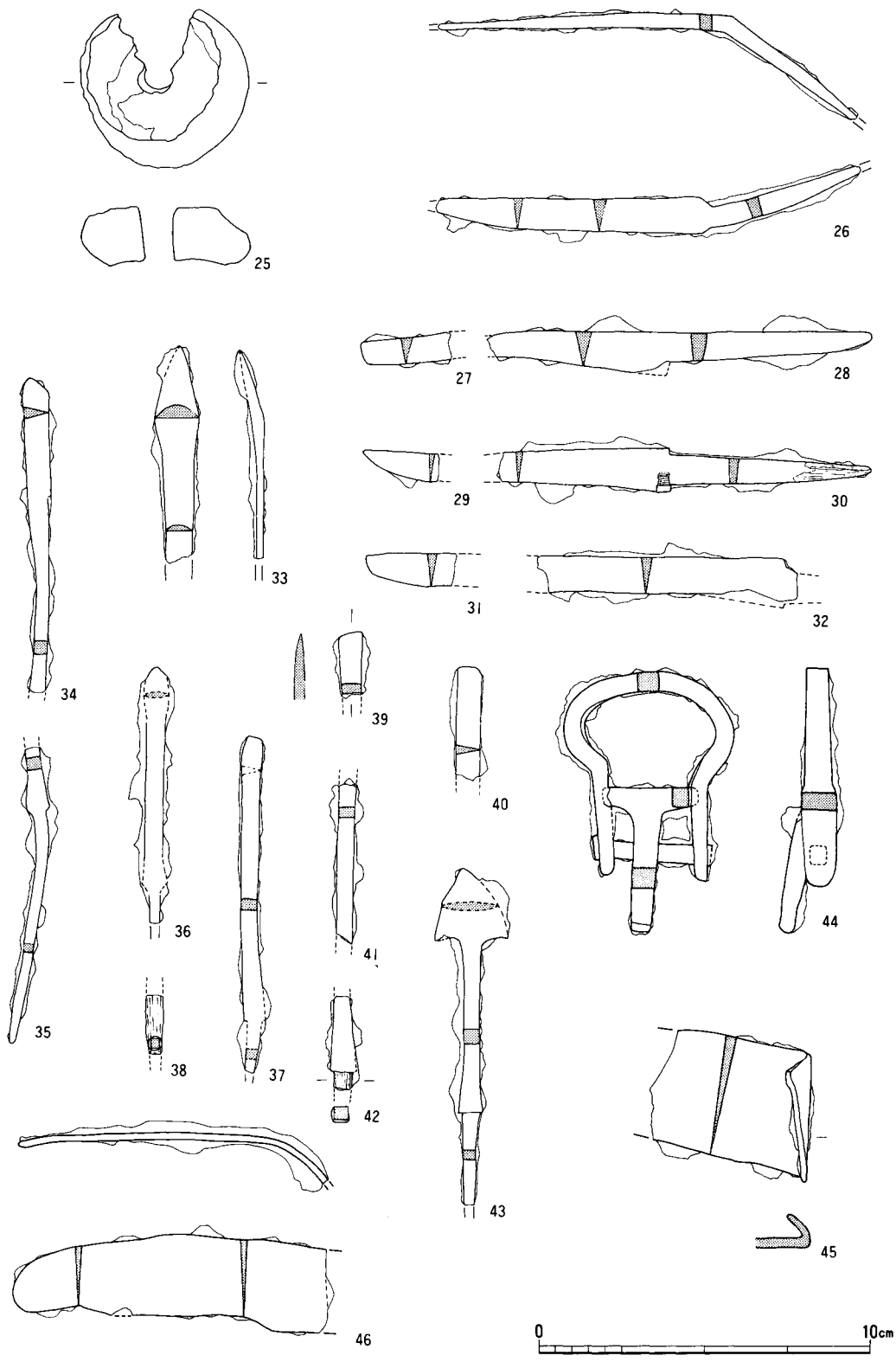
20～22は土師器甕である。20は胴部の器壁を薄く仕上げ、口縁部は外反し、口唇部は肥厚する。胴部内面に輪積み痕がみられる。21・22は底部で、器壁を薄く仕上げる。21は外面ヘラ削りで、内面はナデ。22は外面ヘラ削りで、内面はヘラナデ。

23は小形の須恵器長頸壷である。肩を強く張り、胴部に比べて頸部が長い。肩部外面と頸部内外面の一部に釉がみられる。

24は土製支脚である。表面はヘラ削りであるが、被熱が著しく表面は荒れる。遺存高11.1cm、径3.7cm～8.3cmを計る。

25は土器転用紡錘車である。図の下が内面になり、赤彩を施し、器壁が厚いことから、土師器鉢の底部を再利用したものと思われる。径51.0㎜、厚さ17.0㎜、孔径8.5～10.0㎜を計る。

26～46は鉄製品である。26～32は刀子である。26は両関で、関の部分から折れ曲がり、両端部を欠損する。遺存長130.4㎜、重さ12.47ｇ、刃部遺存長80.2㎜、幅9.0㎜、背厚4.0㎜、茎部遺存長50.2㎜、幅7.5㎜、背厚5.0㎜を計る。27・28は同一個体と思われる。27は遺存長27.0㎜、幅8.0㎜、背厚4.0㎜、重さ2.90ｇを計る。28は関の部分を欠損する。遺存長117.0㎜、重さ18.44ｇ、刃部遺存長55.0㎜、幅7.0～12.0㎜、背厚4.8㎜、茎部長62.0㎜、幅4.0～9.0㎜、背厚2.6～5.0㎜を計る。29は刃部先端部で、遺存長18.0㎜、幅9.0㎜、背厚1.7㎜、重さ1.09ｇを計る。30は両関で、刃部の部分に鎺の一部が遺存し、その下と茎部先端に木質が付着する。遺存長110.3㎜、重さ13.39ｇ、刃部遺存長50.2㎜、幅10.0㎜、背厚2.0㎜、茎部長60.1㎜、幅8.0㎜、背厚3.0㎜



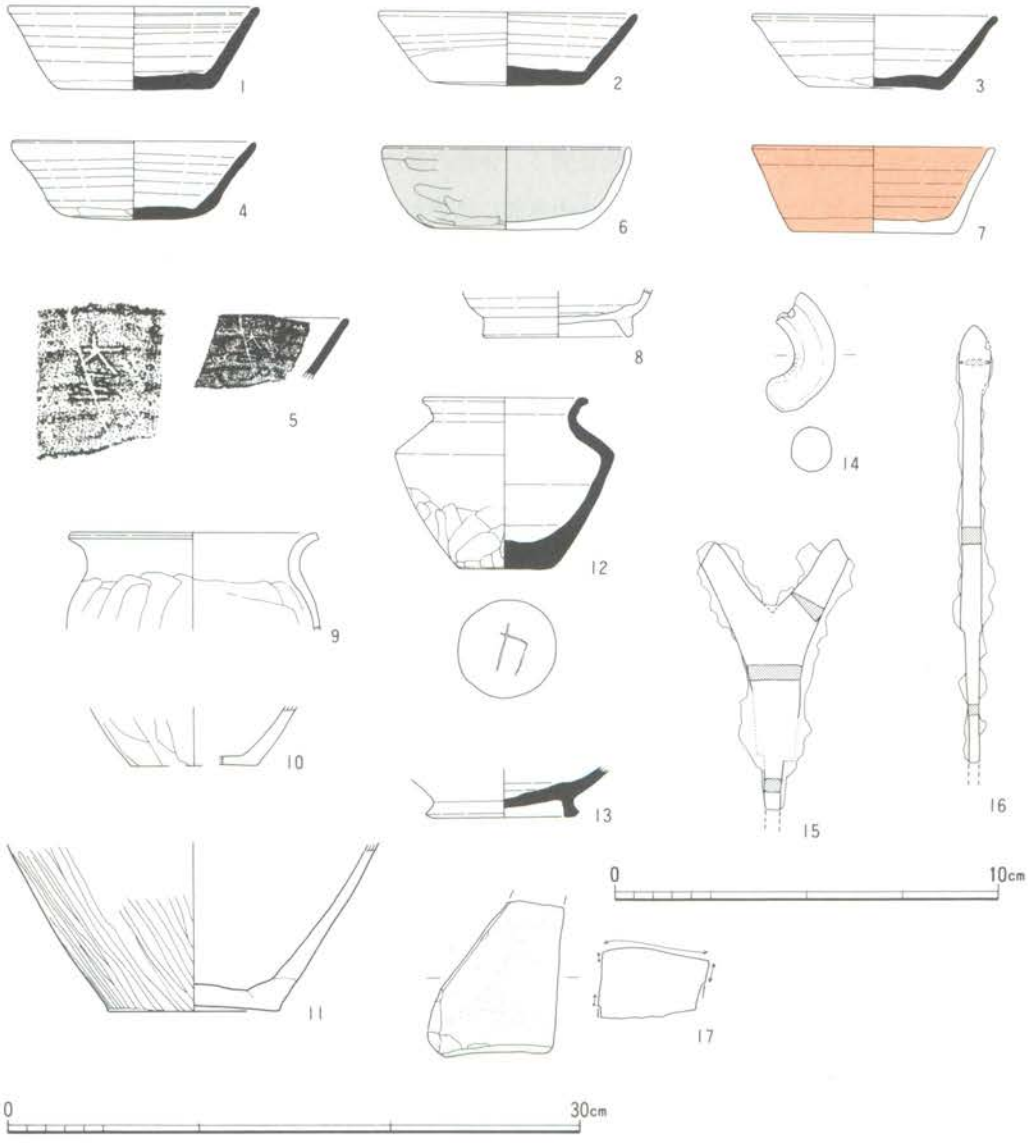
第95図　竪穴住居024出土遺物 (2)

を計る。31・32は同一個体と思われる。両関で、茎部を欠損する。31は遺存長27.5㎜、幅10.0㎜、背厚2.5㎜、重さ1.25ｇを計る。32は遺存長79.0㎜、幅11.0㎜、背厚2.5㎜、重さ9.40ｇを計る。33は鉇で、先端部は錆が著しく推定である。遺存長65.0㎜、刃部幅13.0㎜、厚さ4.0㎜、茎部幅8.0㎜、厚さ2.5㎜、重さ6.26ｇを計る。34～43は鏃である。34・35は同一個体と思われる。片関片刃箭式で、頸部と茎部の境は「ハ」の字状に広がる。関の部分は錆のため推定である。34は遺存長93.5㎜、重さ7.09ｇ、刃部長31.0㎜、幅8.0㎜、厚さ3.0㎜、頸部幅4.0㎜、厚さ4.0㎜を計る。35は遺存長89.0㎜、重さ4.81ｇ、茎部長69.0㎜、幅3.0㎜、厚さ3.0㎜を計る。36は錆が著しいが、両丸造りで、頸部と茎部の境は「ハ」の字状に広がるものと推定される。遺存長76.8㎜、幅6.2㎜、厚さ4.0㎜、重さ8.34ｇを計る。37は片刃で、刃部と頸部の境は判然としない。頸部と茎部の境が錆のため明確ではない。遺存長100.1㎜、重さ9.05ｇ、刃部から茎部は長さ85.5㎜、刃部幅6.0㎜、厚さ3.0㎜、頸部幅5.0㎜、厚さ3.5㎜、茎部遺存長14.6㎜、幅3.5㎜、厚さ3.0㎜を計る。38は茎部で、木質が遺存する。遺存長18.0㎜、幅4.0㎜、厚さ4.0㎜、重さ0.76ｇを計る。39・40は刃部で、39は先端部にのみ刃が付けられる。遺存長19.0㎜、幅6.0㎜、厚さ3.0㎜、重さ1.23ｇを計る。40は片刃で、遺存長35.0㎜、幅7.5㎜、厚さ3.0㎜、重さ3.34ｇを計る。41・42は頸部で、同一個体と思われる。41は遺存長48.0㎜、幅5.0㎜、厚さ3.0㎜、重さ3.88ｇを計る。42は茎部がわずかに遺存し、木質が付着する。遺存長28.0㎜、重さ3.26ｇ、頸部幅7.5㎜、厚さ5.0㎜、茎部幅5.0㎜、厚さ5.0㎜を計る。43は三角形式で、頸部と茎部の境は「ハ」の字状に広がる。刃部は錆が著しく、断面は推定であるが、両丸造りになると思われる。遺存長100.1㎜、重さ12.89ｇ、刃部長21.0㎜、幅23.0㎜、頸部長52.0㎜、幅5.0㎜、厚さ4.5㎜、茎部遺存長28.0㎜、幅4.0㎜、厚さ3.0㎜を計る。44は鉸具で、完形である。縁金と横棒や刺金との装着方法は、錆が著しく詳細は不明である。縁金の頭部は横長の楕円形で、基部は直線的で長く、幅は基部の方が広く、境は「ハ」の字状になる。縁金と横棒は別造りで、横棒は縁金を貫通し、両端を叩き留めているものと思われる。刺金は、刺金軸と一体構造でＴ字状に造られ、縁金の内側の抉りのなかに差し込まれたものと思われる。刺金は頭部側に取り付けられ、刺金軸と横棒は平行する。縁金長63.0㎜、重さ43.57ｇ、頭部長34.0㎜、横幅51.0㎜、幅6.5㎜、厚さ6.0㎜、基部長29.0㎜、横幅34.5㎜、幅5.5㎜、厚さ11.0㎜、刺金長43.0㎜、幅6.0～7.0㎜、厚さ5.0～6.0㎜を計る。45・46は鎌である。45は刃を下、基部を右側にして置いた場合、基部を手前に折り曲げる。遺存長49.0㎜、刃部幅36.0㎜、背厚3.0㎜、重さ22.70ｇを計る。46は基部を欠損し、基部の手前から折れ曲がる。刃部先端部に刃部幅が急に狭くなっている部分がみられ、使用当時の破損によるものか、あるいは局部的な使用による使い減りと思われる。遺存長95.0㎜、刃部幅15.0～25.6㎜、背厚1.9～2.0㎜、重さ21.75ｇを計る。

竪穴住居026（第96図、図版52・67）　［土器観察表P273］［玉類観察表P265］

須恵器杯5点、須恵器壷2点、土師器杯2点、土師器高台付き杯1点、土師器甕3点、土製勾玉1点、鉄鏃2点、砥石1点が図示できた。出土状況は比較的中央部に少なく、壁に寄っている。遺物は床面上から出土したものも多いが、遺存度から判断すると、本竪穴住居廃絶に伴って廃棄されたものと思われる。鉄鏃は2点とも床面からかなり浮いた状態であり、後から投棄されたものと思われる。

図示できなかった資料の総数は457点で、重量比で土師器が71%を占める。須恵器杯は常陸産と思われる杯が主体を占める。土師器甕は「常総型」と在地産の甕が半々くらいで、器壁の薄い甕も少量みられる。ロクロ使用の土師器杯のなかに内外面に赤彩を施す杯がみられる。



第96図　竪穴住居026出土遺物

1～5は須恵器杯である。1・2とも体部は直線的に開く。1は口縁部内面に沈線が2条巡る。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面は下端部を手持ちヘラ削り。2は内面にロクロ痕を明瞭に残す。底部はヘラ切り離しで、無調整。体部外面の調整は下半部を回転ヘラ削り。3～5は常陸産と思われる。3は体部は直線的に開き、口唇部はわずかに外反し、端部を丸く収める。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。底部外面に焼成前の浅い「×」のヘラ記号がみられる。4は体部は外反気味に開き、体部下半部と口縁部が肥厚する。口唇部は尖頭形である。体部内外面にロクロ痕を残す。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。5は口縁部から体部の小破片である。口縁部直下の体部外面に、焼成後に、正位で「大王」と線刻する。

6・7は土師器杯である。6は非ロクロの土師器で、内外面に黒色処理を施す。底部は平底で、体部から口縁部にかけて内彎気味に立ち上がる。体部外面はヘラ削りで、内面はヘラ磨き。7は箱形の杯で、体部はやや外反気味に開く。体部内面にロクロ痕を残す。底部は回転糸切り離しの後、周縁部を回転ヘラ削り調整。内外面に赤彩を施す。

8は土師器高台付き杯で、高台部から体部にかけて内彎して立ち上がる。底部は器壁を薄く仕上げる。底部は全面回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。高台周辺はナデ調整。

9～11は土師器甕で、9・10は小形の甕である。9は口唇部端部にナデで面を作る。10は底部で、9と同一個体であろう。11は「常総型」の甕で、底部に木葉痕がみられる。

12・13は須恵器壷で、12は小形の短頸壷である。最大径を胴部上半にもち、肩を強く張る。頸部に断面三角形の小さい突帯をもち、口縁部は短く、水平に開く。底部の器壁は厚い。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。胴部下半部は手持ちヘラ削り調整。底部外面に、焼成前の「カ」の字状のヘラ記号がみられる。13は長頸壷の高台部から底部である。高台は下端部がやや開き、「ハ」の字状に貼り付ける。底部は丸底である。底部は全面回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。高台周辺はナデ調整。底部内面には一部釉がみられる。

14は土製勾玉で、頭部を欠損する。表面は平滑で、光沢をもつ。表面の色調は黒色で、内面は茶褐色であることから、黒色処理を施したものと思われる。

15・16は鉄鏃である。15は雁股式で、刃部下半から茎部にかけての部分は、錆が著しく、X線写真により推定した。遺存長70.0㎜、重さ19.63ｇ、刃部長58.0㎜、幅39.0㎜、厚さ4.0㎜、茎部遺存長12.0㎜、幅4.5㎜、厚さ3.5㎜を計る。16は刃部の錆が著しく、断面は推定で、両丸造りになるものと思われる。遺存長114.0㎜、重さ8.59ｇ、刃部長20.0㎜、幅8.5㎜、頸部長60.0㎜、幅5.0㎜、厚さ4.4㎜、茎部遺存長34.0㎜、幅2.5㎜、厚さ2.5㎜を計る。

17は砥石で、石材は凝灰岩質である。図の左下の角の部分には、線刻状の研ぎ痕がみられる。遺存長80.0㎜、幅67.0～31.0㎜、厚さ36.0～27㎜を計る。

竪穴住居028（第97図、図版52・67）　［土器観察表P273］

須恵器杯6点、小型土器1点、土師器甕4点、鉄製品4点が図示できた。出土状況は床面から出土したものは少なく、本竪穴住居廃絶に伴って廃棄されたものが多い。また、9・10の土師器甕は破片が広く散り、床面からかなり浮いた状態であることから、本竪穴住居がある程度埋まった時点で投棄されたものと思われる。

図示できなかった資料の総数は729点で、重量比で土師器が88%を占める。土師器甕にやや大形品がみられるほかはすべて小破片である。須恵器甕には常陸産と思われる甕が多くみられる。須恵器杯も常陸産と思われるものがほとんどである。土師器杯は本竪穴住居に伴うと思われるものは少ない。

1～6は須恵器杯である。1は体部は直線的に開き、口縁部はつままれて、口唇部端部を丸く収める。内面の底部と体部の境は強く窪む。底部は回転糸切り離しの後、周縁部を回転ヘラ削り調整で、面を作る。体部外面は無調整。2～6は常陸産と思われる。2は底部の器壁は薄く、逆に体部の器壁の方が厚い。体部外面にロクロ痕を残す。口唇部は尖頭形である。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面は無調整。3も底部の器壁は薄く、体部下半部は厚い。体部内外面に弱いロクロ痕を残す。底部と体部の境は丸みをもつ。底部は手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面は無調整。4・5は類似した器形をもつ。器高は低く、口縁部は上げ底の底部から直線的に大きく開く。体部内外面に弱いロクロ痕を残す。4は底部は手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部内外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。5は器壁を薄く仕上げる。底部はヘラ切り離しの後、全面手持ちヘラ削り調整。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削りするが、摩耗しやや不明瞭である。6は底部から体部の小破片で、底部外面に焼成後の「×」のヘラ記号がみられる。

7は小型土器で、口縁部の遺存状態はきわめて悪い。内外面は指頭によるオサエ。

8～11は土師器甕である。8は「常総型」の甕で、最大径を胴部上位にもつ。口縁部は肥厚して強く外反し、口唇部を外側につまむ。頸部内面に輪積み痕がみられる。胴部外面はヘラナデで、ヘラの当り痕がみられる。9は長胴の甕である。器壁は全体に厚く、口縁部は緩やかに外反する。内面には煤状の付着物がみられる。10・11は底部で、10は9と同一個体になるものと思われる。

12～15は鉄製品である。12・13は鏃である。12は刃部先端部は錆膨れが著しく不明瞭である。茎部は接合しないが同一個体であろう。刃部遺存長65.5㎜、最大幅21.0㎜、厚さ3.0㎜、重さ17.58ｇ、茎部遺存長32.0㎜、幅3.2㎜、厚さ2.6㎜、重さ0.80ｇを計る。13は茎部先端部である。遺存長42.0㎜、幅4.5㎜、厚さ3.0㎜、重さ2.58ｇを計る。14は鎌で、基部と刃部の一部である。刃を下、基部を右側にして置いた場合、基部を手前に折り曲げる。遺存長65.0㎜、幅31.0㎜、背厚2.5㎜、重さ46.71ｇを計る。15は刀子で、両関である。茎部の先端部を欠損する。遺存全

長143.5㎜、重さ13.65ｇ、刃部長99.0㎜、幅1.0㎜、背厚2.2㎜、茎部遺存長44.0㎜、幅5.5㎜、厚さ2.5㎜を計る。

竪穴住居029（第97図）　［土器観察表Ｐ273］

須恵器杯１点、鉢２点、刀子１点が図示できた。出土状況は３の鉢を除いて床面から浮いた状態であり、本竪穴住居がある程度埋まった時点で投棄されたものと思われる。

図示できなかった資料の総数は225点で、重量比で土師器は66％とやや少ない。土師器甕は「常総型」と在地産の甕がみられるが、割合では在地産がやや多い。土師器杯はロクロ使用・非ロクロの両者がみられ、いずれにも赤彩を施す杯がみられる。須恵器甕は常陸産と還元炎焼成になりきれない須恵器がみられる。須恵器杯は常陸産のみがみられる。

１は須恵器杯で、常陸産と思われる。体部は直線的に開き、口唇部はわずかに外反する。体部内外面に弱いロクロ痕を残す。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。

２・３は鉢である。２はやや小形で、内彎気味に立ち上がる胴部から、口縁部は緩やかに外反する。胴部外面の上半部に指頭によるオサエがみられる。３は口唇部が外反し、端部を丸く収める。いずれも胴部内面に輪積み痕がみられる。

４は刀子で、両関である。刃部と茎部の先端部を欠損する。遺存長103.0㎜、重さ7.85ｇ、刃部遺存長46.0㎜、幅8.0㎜、背厚2.0㎜、茎部遺存長57.0㎜、幅6.5㎜、厚さ2.5㎜を計る。

竪穴住居031（第97図、図版52・62）　［土器観察表Ｐ273］

須恵器杯・土師器杯各１点が図示できた。出土状況はいずれも床面からの出土で、壁際である。図示できなかった資料の総数は303点で、重量比で土師器が88％を占める。土師器甕は「常総型」と在地産の甕で、割合では在地産が多い。須恵器杯は常陸産と思われる杯が多い。

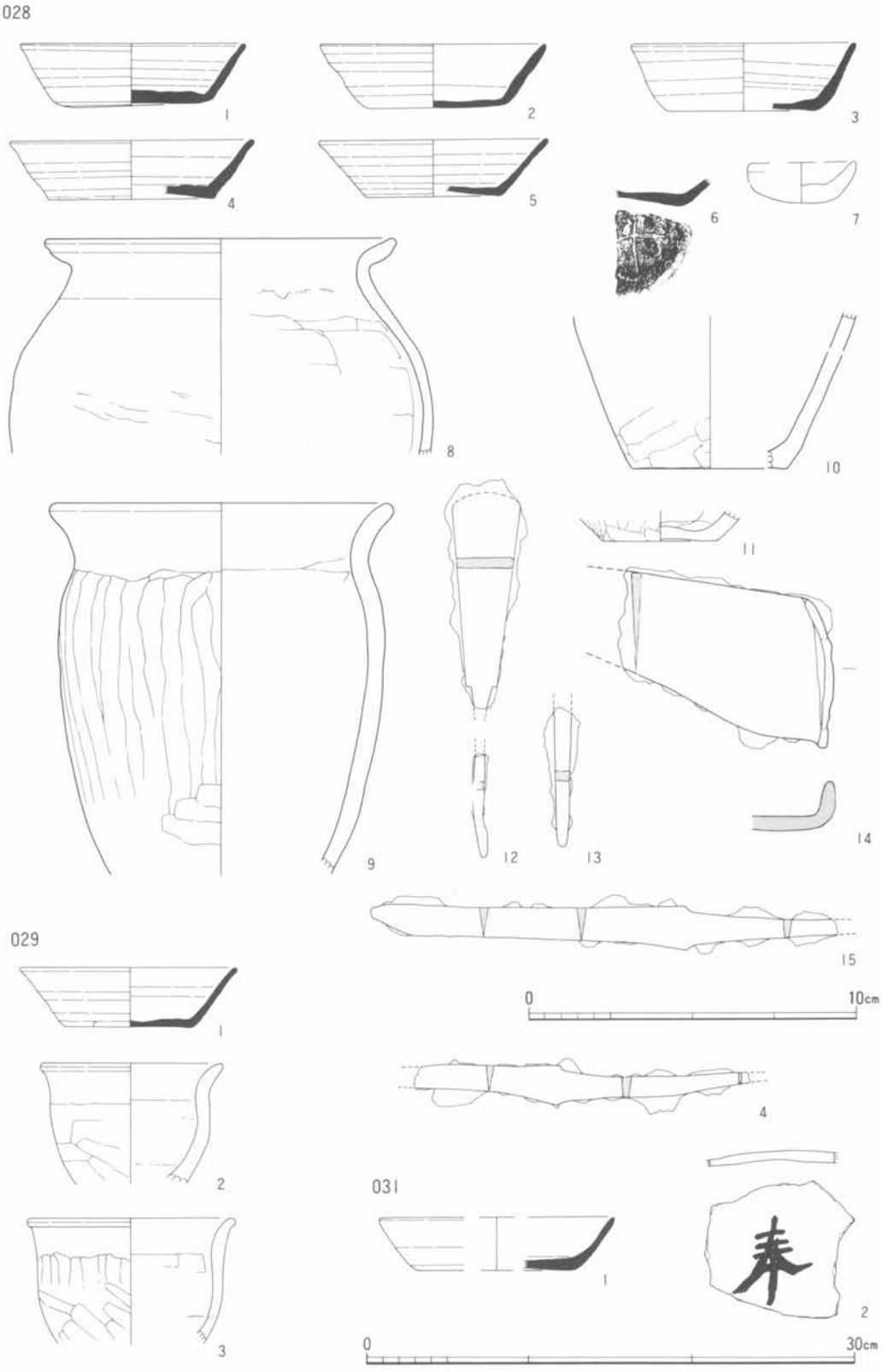
１は須恵器杯で、常陸産と思われる。器高は低く、体部は直線的に開き、口縁部は若干肥厚し、口唇部端部は尖頭形になる。底部は回転糸切り離しの後、周縁部を回転ヘラ削り調整。体部外面の調整は下端部を回転ヘラ削り。

２は土師器杯の底部破片である。底部は回転糸切り離しの後、周縁部を手持ちヘラ削り調整。底部外面に「奉」と墨書してある。

竪穴住居033（第98図、図版52・67）　［土器観察表Ｐ273］

須恵器杯２点、土師器杯１点、鉄製品２点が図示できた。出土状況は３の杯と４の刀子は床面上であるが、１・２は投棄によるものである。５の鉄鏃は埋土中からの出土である。

図示できなかった資料の総数は722点で、重量比で土師器が90％を占める。土師器甕は「常総



第97図　竪穴住居028・029・031出土遺物

型」の甕が3割程度みられ、そのほかは在地産である。須恵器甕は還元炎焼成になりきれない須恵器のみがみられ、須恵器杯は常陸産と思われるものである。

1・2は須恵器杯で、1は常陸産と思われる。体部は直線的に開き、内外面にロクロ痕を残し、器壁をやや厚く仕上げる。底部はヘラ切り離しの後、手持ちヘラ削り調整。体部外面は無調整。2は底部外面に焼成前の「｜」状のヘラ記号がみられる。底部はヘラ切り離しの後、全面手持ちヘラ削り調整。体部外面は無調整。

3は土師器杯で、体部は直線的に開き、口縁部は緩やかに外反する。底部内面を除いて全体的に被熱した状況がみられる。内外面に赤彩を施すが、遺存状態は悪い。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。

4・5は鉄製品である。4は刀子で、接合しないが同一個体と思われる。茎部は欠損する。遺存長は全体で87.0㎜、幅11.0㎜、背厚2.1～3.5㎜、重さは全体で7.00ｇを計る。5は鏃で、両丸造りで、三角形式である。刃部を頸部で挟み込む作り方をしている可能性がある。頸部と茎部の境の棘状突起は、錆のため推定である。遺存長95.0㎜、重さ15.64ｇ、刃部遺存長34.0㎜、遺存幅37.0㎜、厚さ3.0㎜、茎部長39.0㎜、幅8.0㎜、厚さ4.0㎜、茎部遺存長22.0㎜、幅4.0㎜、厚さ4.0㎜を計る。

竪穴住居034（第98図、図版52・53）　［土器観察表Ｐ273］

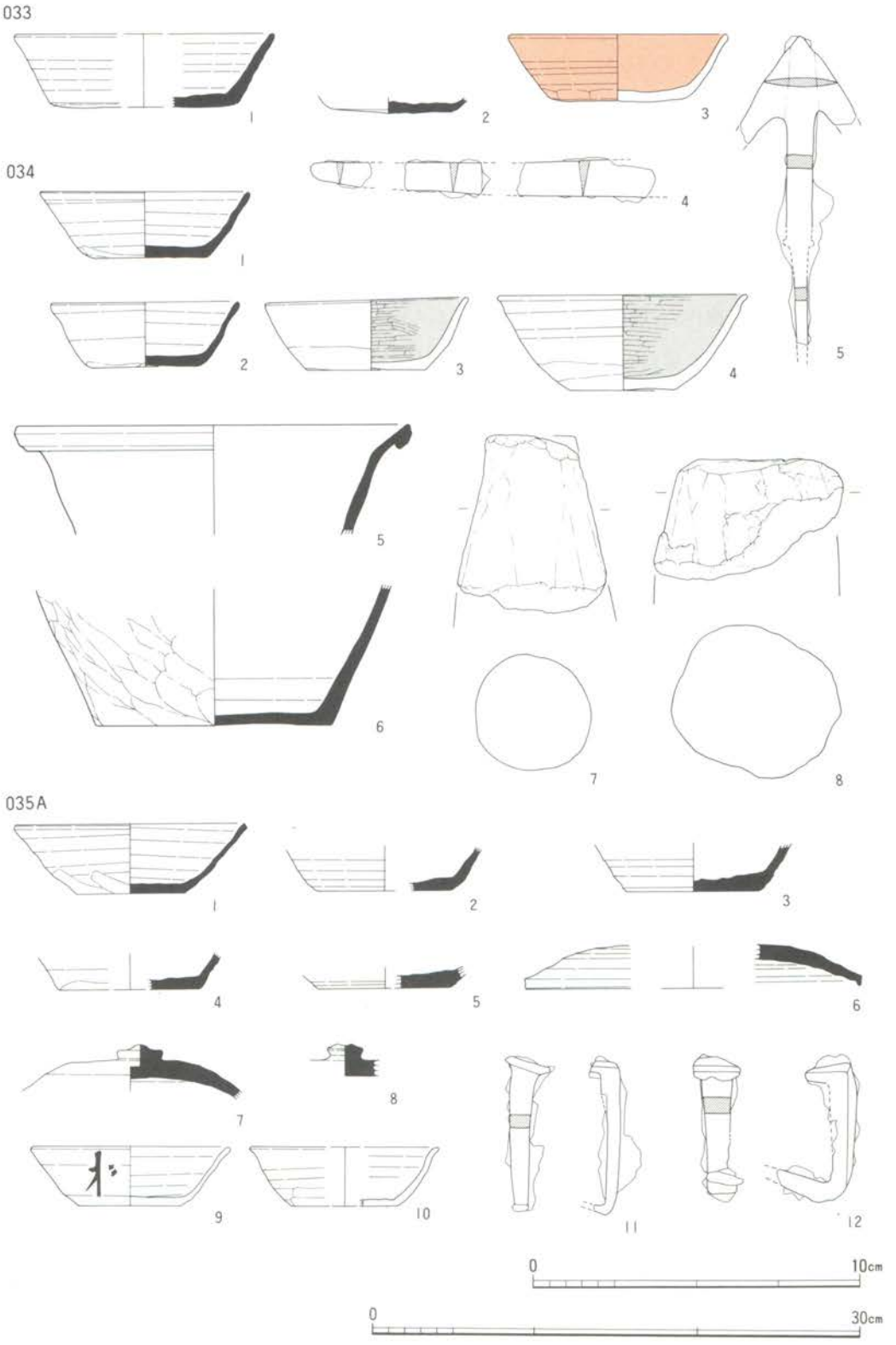
須恵器杯・土師器杯・須恵器甕・土製支脚各2点が図示できた。遺物の遺存状態は全体にあまりよくなく、床面上から出土しているものもあるが、本竪穴住居廃絶に伴って廃棄されたものと思われる。8の土製支脚は竈のなかから出土している。

図示できなかった資料の総数は151点で、重量比で土師器が88％を占める。土師器甕は「常総型」が多い。須恵器甕は還元炎焼成になりきれない須恵器のみで、須恵器杯は常陸産が多い。

1・2は須恵器杯である。1は体部は直線的に開き、体部内外面にロクロ痕を明瞭に残す。底部はヘラ切り離しの後、全面手持ちヘラ削り調整。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。2は口縁部が外反し、口唇部は肥厚する。断面内部の色調は赤褐色である。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。

3・4は土師器杯で、体部はいずれも内彎気味に開き、内面はヘラ磨きで、黒色処理を施す。3の内外面の器面は荒れる。底部は静止糸切り離しの後、周縁部を回転ヘラ削り調整。体部外面の調整は下半部を回転ヘラ削り。4は大振りで、口唇部は外反する。底部は全面回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下半部を回転ヘラ削り。

5・6は須恵器甕で、同一個体と思われる。5は口縁部である。頸部はラッパ状に開き、口縁部は外反して、折り返し口縁になる。口唇部端部は尖頭形である。6は底部から胴部下半部で、胴部外面は叩きの後、ヘラ削り調整。内面は指頭によるオサエの後、ナデ調整。



第98図　竪穴住居033・034・035A出土遺物

7・8は土製支脚で、頭部が遺存する。7は遺存高10.8cm、頭部径5.3cmを計る。8は図の右側に土の塊が付着しているが、これも被熱し、支脚本体との識別が困難である。遺存高7.2cm、頭部径9.6cmを計る。

竪穴住居035A（第98図、図版53・62・67）　［土器観察表P273］

須恵器杯5点、須恵器杯蓋3点、土師器杯2点、鉄釘2点が図示できた。遺存状態はあまりよくなく、竪穴住居中央の遺物ほど床面近くから出土しており、投棄されたものと思われる。8の土製支脚は竈内、鉄釘は竈の堀方のなかから出土した。

図示できなかった資料の総数は246点で、重量比で土師器が83%を占める。土師器甕は在地産が多く、「常総型」も少量みられる。須恵器甕・杯は常陸産と思われるものがみられる。

1～5は須恵器杯である。1は「くすべ焼成」の須恵器である。体部は直線的に大きく開く。体部の器壁を薄く仕上げ、体部内外面にロクロ痕を明瞭に残す。口唇部端部はわずかに窪む。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削りで、体部下半部から削りはじめる。2～5は底部で、体部内外面にロクロ痕を残す。2は底部は手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面は無調整。3は底部は全面回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を回転ヘラ削り。4は底部は手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は手持ちヘラ削り。5は底部は回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面は無調整。

6～8は須恵器杯蓋で、常陸産と思われる。6は端部は垂直に折れ、天井部外面は回転ヘラ削り調整。7は端部を欠損し、宝珠形のつまみが付けられる。やや小形で天井部が深くなるものと思われる。内外面とも器面の摩耗が著しく、調整は不明。8は宝珠形のつまみが付けられ、頂部は欠損する。

9・10は土師器杯である。9は体部は直線的に開き、口唇部はわずかに外反する。体部外面に、正位で、「椙」と思われる文字を墨書してある。底部は全面回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を回転ヘラ削り。10は体部は内彎気味に開き、口縁部は緩やかに外反する。底部は手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下半部を手持ちヘラ削り。

11・12は鉄釘で、頭部はL字形に折り曲げている。端部は曲がり、欠損する。11は遺存長47.0㎜、幅5.5㎜、厚さ4.0㎜、重さ8.37gを、12は遺存長44.0㎜、幅8.0㎜、厚さ5.0㎜、重さ7.31gを計る。

竪穴住居036（第99図、図版53・67）　［土器観察表P274］

土師器杯5点、土師器甕2点、鉄製品2点が図示できた。全体に遺存状態はあまりよくなく、

飛び散った破片が複数接合する。床面上のものと比較的床面に近いものがみられ、本竪穴住居廃絶後、早い時期に投棄されたものと思われる。

図示できなかった資料の総数は306点で、重量比で須恵器が52%を占め、多量の須恵器が投棄されたことがうかがえる。土師器甕は器壁の薄い甕が多く、「常総型」や在地産は少ない。須恵器甕は「くすべ焼成」や常陸産と思われる還元炎焼成になりきれない須恵器が多い。

1～5は土師器杯である。1・2とも体部は直線的に開く。1は底部は全面回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を回転ヘラ削り。2は底部は若干上げ底で、口唇部は外反する。器壁は全体的にやや厚い。底部は回転糸切り離しの後、周縁部を手持ちヘラ削り調整。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。3～5は体部内外面にロクロ痕を残す。3は口縁部が大きく開く。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。4は体部が内彎気味に開き、口唇部は肥厚して、緩やかに外反し、端部を丸く収める。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下半部を手持ちヘラ削り。5は大振りの杯で、体部は内彎気味に開き、口縁部は外反する。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。

6・7は土師器甕で、器壁を薄く仕上げる。胴部外面はヘラ削りで、内面はヘラナデ。6は球形の胴部をもち、口縁部は肥厚して外反し、口唇部を外側につまみ上げる。

8・9は鉄製品である。8は紡錘車の棒軸で、断面は四角である。遺存長56.7㎜、幅3.0㎜、厚さ3.2㎜、重さ2.97ｇを計る。9は紡輪である。直径49.0㎜、厚さ2.7㎜、孔径4.0㎜、重さ16.21ｇを計る。

竪穴住居037A（第99図、図版53）　［土器観察表P274］

土師器杯3点、土師器皿1点、土師器高台付き皿2点、須恵器甕1点が図示できた。竈内から3・4・6の土師器杯類と7の須恵器甕が出土している。しかし、土師器杯類は被熱した状況はみられず、竈底面からは浮いているので、竈廃絶に関係するようなものではない。そのほかの遺物の出土状況から、本竪穴住居廃絶後の、比較的早い時期に投棄されたものと思われる。埋土中から出土した土師器甕の破片は、竪穴住居037Cの3の甕と接合関係がみられる。

図示できなかった資料の総数は202点で、重量比で土師器が91%を占める。土師器甕は器壁の薄い甕が主体的で、「常総型」や在地産は少ない。須恵器杯は常陸産のものがみられる。

1～3は土師器杯である。1・3は体部内外面に弱いロクロ痕を残し、体部は内彎気味に開く。1は口縁部がわずかに外反する。底部は全面回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を回転ヘラ削り。2は器壁がやや厚く、体部は直線的に開き、口唇部はわずかに外反する。口縁部内面は器面が荒れる。底部は回転糸切り離しの後、周縁部を回転ヘラ削り調整。体部外面の調整は下半部を回転ヘラ削り。内外面に赤彩を施す。3は口唇部内

面に稜を作る。底部外面にヘラによる線状のナデ痕がみられる。底部は全面回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を回転ヘラ削り。

4は土師器皿で、体部は外反気味に大きく開く。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部をわずかに手持ちヘラ削り。

5・6は土師器高台付き皿である。5は低い高台で、底部の若干内側に付ける。全体的に丁寧に仕上げる。体部は下半部で強く屈曲して、外反気味に大きく開き、口唇部は肥厚する。底部内面に摩耗した部分がみられ、硯に転用された可能性がある。底部は全面回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下半部を回転ヘラ削りで、面取りをする。6は足高の高台を付け、「ハ」の字状に開く。体部は直線的に大きく開くが、口縁部は肥厚し、二重口縁のようになる。底部外面の中央は器壁が厚く、突出する。底部と体部下半部はナデ調整で、切り離し技法は不明。

7は須恵器甕で、還元炎焼成になりきれない須恵器である。胴部はあまり張らず、口縁部は外反する。口唇部は折り返しで、端部を平坦に仕上げる。胴部外面は叩きの後、下半部はヘラ削り調整。内面は指頭によるオサエの後、なでる。

竪穴住居037B（第99図、図版68）　［土器観察表P274］

土師器杯・石製紡錘車各1点のみが図示できただけである。2の石製紡錘車は竈袖の崩壊土中から出土している。

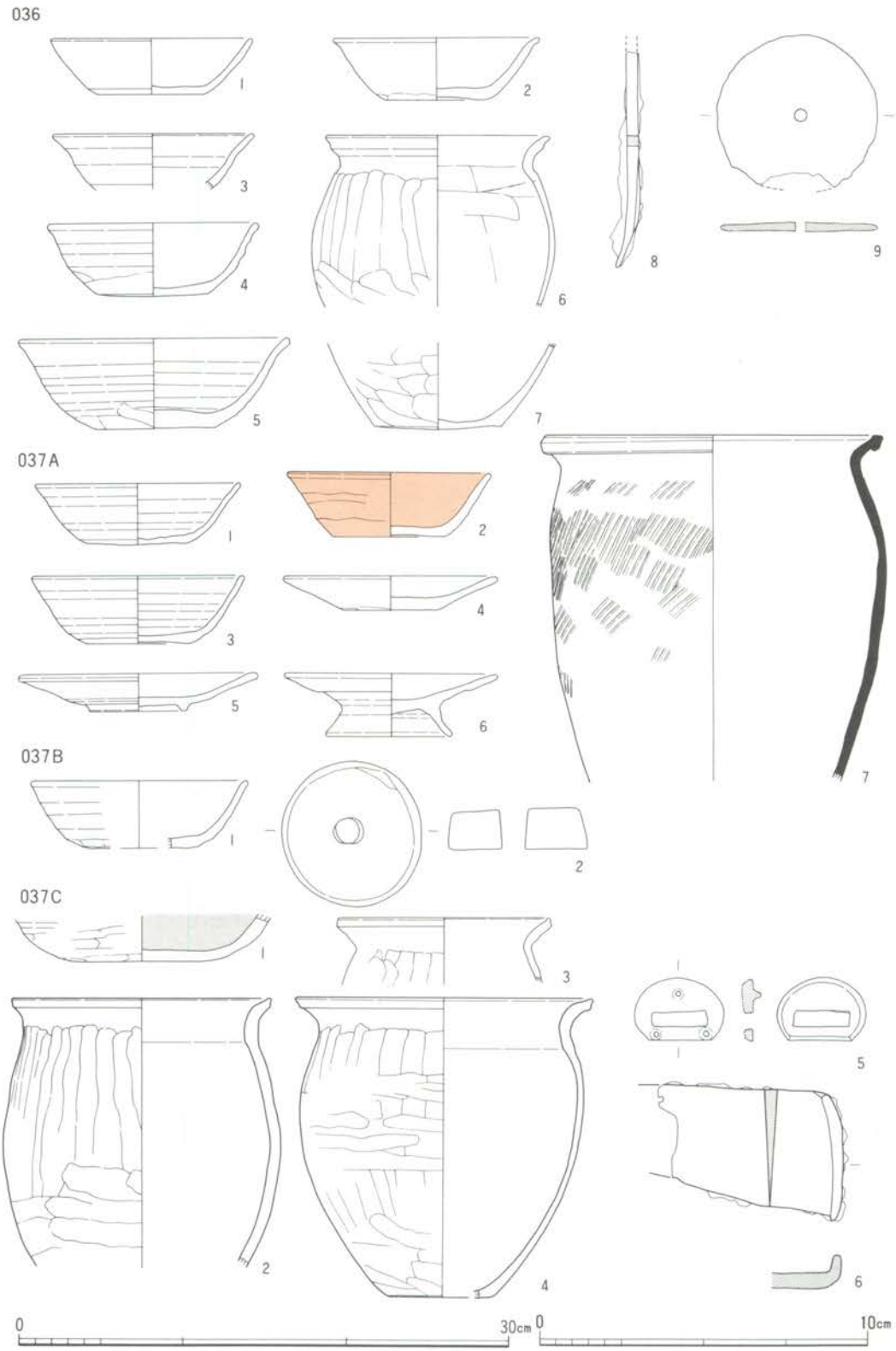
図示できなかった資料の総数は226点で、重量比で土師器が91％を占める。すべて小破片で、土師器甕は在地産が主体で、「常総型」の甕がわずかにみられる。そのほかは詳細不明。

1は土師器杯で、体部外面にロクロ痕を残す。体部は内彎気味に開き、口唇部はわずかに外反する。底部は回転糸切り離しの後、周縁部を手持ちヘラ削り調整。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削りで、強く面取りをする。

2は石製紡錘車で、石材は滑石である。一部欠損するが、断面も摩耗していることから、欠損後も使用していたと考えられる。長径43.0㎜、短径39.0㎜、厚さ12.0㎜、孔径7.0～9.0㎜、重さ42.66ｇを計る。

竪穴住居037C（第99図、図版53・67・71）　［土器観察表P274］

土師器杯1点、土師器甕3点、青銅製帯金具・鉄製鎌各1点が図示できた。2・4の土師器甕は竈内の底面に破片の状態で出土し、本竪穴住居廃絶と同時期くらいに廃棄されたものと思われる。しかし、いずれも離れた地点の、床面からかなり浮いた破片とも接合しており、本竪穴住居が人為的に埋め戻されたことを、遺物出土状況からも裏付けているかと思われる。3の土師器甕は竪穴住居037Aの埋土中から出土した遺物と接合している。



第99図　竪穴住居036・037A・037B・037C出土遺物

図示できなかった資料の総数は240点で、重量比で土師器が79%を占める。土師器甕は在地産の甕が多く、「常総型」の甕は少ない。ロクロ使用の土師器杯のなかに、内外面に赤彩を施すものがみられる。須恵器は全体的に焼成のよいものが多くみられる。

1は土師器杯である。内面はヘラ磨きで、黒色処理を施す。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下半部を手持ちヘラ削りで、丸く仕上げる。

2～4は土師器甕である。2は長胴の甕で、頸部が一旦垂直に立ち上がり、口縁部は短く外反し、口唇部をほぼ垂直につまみ上げる。胴部外面はヘラ削りで、内面はヘラナデ。3は口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部を垂直につまみ上げる。胴部外面はヘラ削りで、内面はナデ。4は最大径を口縁部にもち、器壁を薄く仕上げる。口縁部は強く外反し、口唇部を外側につまみ上げる。胴部外面はヘラ削りで、内面はヘラナデ。

5は青銅製帯金具である。蒲鉾形で、上部に長方形の透しがはいる。帯留めの突起は上に2か所、下に1か所みられる。断面は台形である。長さ27.0㎜、幅19.0㎜、厚さ2.5～3.0㎜、重さ2.86ｇを計る。

6は鉄製鎌である。刃部の破損は古く、破断面の状態から、もともとの鉄素材のなかに不純物が多く含まれていたことによるものと思われる。刃を下、基部を右側にして置いた場合、基部を手前に折り曲げる。遺存長56.0㎜、幅35.0㎜、厚さ4.0㎜、重さ18.14ｇを計る。

竪穴住居040A（第100図、図版54）　［土器観察表P274］

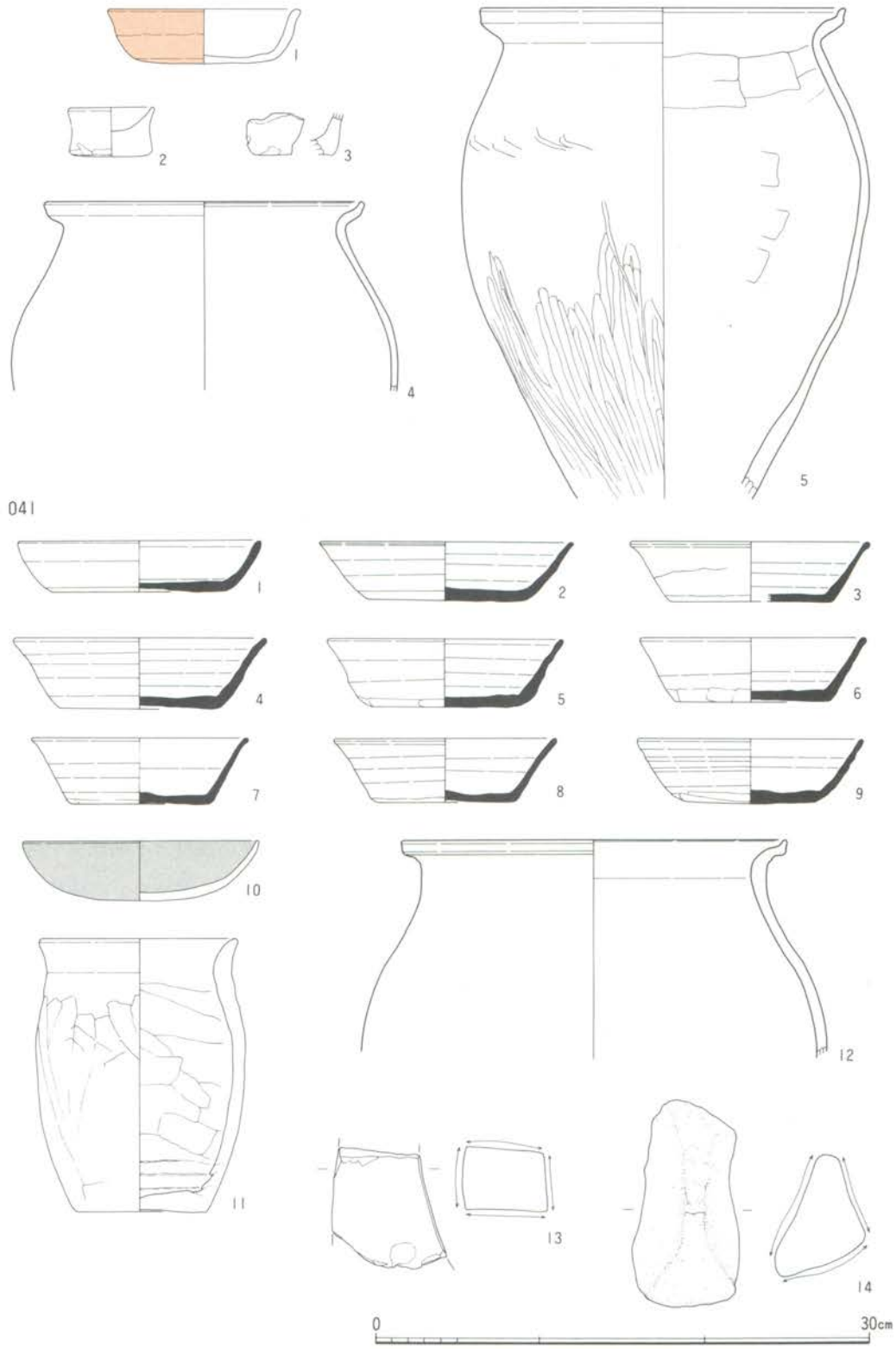
土師器杯1点、小型土器・土師器甕各2点が図示できた。5の土師器甕は床面から若干浮いた状態で出土しており、本竪穴住居廃絶後、あまり埋まらない時期に投棄されたと思われる。

図示できなかった資料の総数は87点と少ないが、溝状の撹乱を受けていることにもよると思われる。重量比で土師器が86%を占める。いずれも小破片のみで、詳細は不明。

1は非ロクロの土師器杯である。箱形の杯で、体部は内彎気味に立ち上がり、外面に弱い稜を作って、口縁部は外反する。底部はヘラ削りするが、体部外面は指頭によるオサエの後、軽くなでる。外面は赤彩を施す。

2・3は小型土器である。2は口縁部の遺存度が低く、口縁部は便宜的に水平に図化した。底部は器壁が厚く、体部から口縁部にかけて急激に薄くなり、口唇部端部は尖頭形である。全体に丁寧に仕上げる。底部と体部外面の下端部はヘラ削りで、内面はヘラナデ。3は底部と体部の一部で、内外面ともナデ調整。

4・5は土師器甕で、「常総型」の甕である。いずれも卵形の胴部をもち、口縁部は強く外反する。また、内外面に煤の付着がみられる。4は口唇部を外側につまみ上げ、端部を丸く収める。口縁部内外面を除いてヘラナデ。5は口唇部をほぼ垂直につまみ上げる。胴部下半部は急激に細くなる。胴部外面の上半にヘラの当り痕がみられ、内面はヘラナデ。



第100図　竪穴住居040A・041出土遺物

竪穴住居041（第100図、図版53・54）　［土器観察表P274］

須恵器杯9点、土師器杯1点、土師器甕2点、砥石2点が図示できた。出土状況は北西壁よりのものは床面から浮き、竪穴住居中央のものは床面に密着したものがみられる。これらのなかには互いに接合するものがあり、本竪穴住居廃絶の後、早い時期に投棄されたものと思われる。11の土師器甕はP1の底面近くから、倒立した状態で出土している。

図示できなかった資料の総数は364点で、重量比で土師器が87％を占める。杯は須恵器が多く、図示したものも含め、多量の須恵器杯が投棄されていたことがうかがえる。土師器杯は非ロクロの土師器が主体である。土師器甕は「常総型」と在地産の甕が半々くらいで、器壁の薄い甕も少量みられる。

1～9は須恵器杯で、すべて常陸産と思われる。器面の色調は灰色を基調としているが、部分的に黒色に変色しているものが多い。1は器高が低く、盤状に近い器形をもつ。体部は内彎気味に開く。底部中央の器壁は薄い。口縁部外面の色調は黒色である。底部は全面回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を回転ヘラ削り。2は体部内外面にロクロ痕を残す。体部は内彎気味に開き、口縁部はわずかに外反する。底部は全面回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面は無調整。3は体部内面にロクロ痕を残す。体部は直線的に開き、口唇部は肥厚してわずかに外反し、端部を丸く収める。底部は手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削りするが、摩滅が著しく不明瞭である。体部外面に輪積み痕がみられる。4は体部内外面にロクロ痕を明瞭に残す。体部は直線的に開き、口縁部は緩やかに外反する。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面は無調整。5は内外面にロクロ痕を残す。体部はやや外反気味に開く。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削りで、面取りをする。6は体部は直線的に開き、口唇部端部を丸く収める。口縁部内外面の色調は黒色である。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下半部を手持ちヘラ削り。7は体部の器壁を薄く仕上げる。体部は直線的に開き、口唇部は外反する。色調は底部から体部下半部は黒色である。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。8は体部内外面にロクロ痕を残す。体部は直線的に開き、口縁部は外傾し、口唇部端部を丸く収める。色調は口縁部内外面が黒色である。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は、下端部が摩耗しているため不明。9は内外面にロクロ痕を明瞭に残す。体部は直線的に開く。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削りで面取りをし、底部との境をやや丸く仕上げる。

10は土師器杯である。非ロクロの土師器で、浅い椀形のものである。内外面ともヘラ磨きで、黒色処理を施す。器面は内外面ともに荒れ、外面には煤が付着する。

11・12は土師器甕である。11は小形で、筒状の器形をもつ。口縁部は緩やかに外反する。胴部外面はヘラ削りするが、器面が摩耗し明瞭でない。胴部内面はヘラナデで、底部付近には輪積み痕が明瞭に残る。12は「常総型」の甕である。口縁部は強く外反し、口唇部を垂直につまみ上げ、端部は尖頭形である。

13・14は砥石である。13は断面が四角形で、四面とも使用する。石材は凝灰岩質である。遺存長7.2cm、幅5.1～6.6cm、厚さ3.8cmを計る。14は断面が三角形で、三面とも使用する。石材はきめの粗い凝灰岩質である。全長12.3cm、厚さ7.5cm、幅8.1cmを計る。

竪穴住居046（第101図、図版54）　［土器観察表P274］

須恵器杯1点、土師器杯2点、須恵器甕1点が図示できた。1は竈の右袖脇の床面上から、2・3は竈内から出土している。2・3は被熱した状況はみられず、細片が接合したものであり、竈の廃絶と同時に、なかに廃棄したものと考えられる。4は埋土中からの出土である。

図示できなかった資料の総数は201点で、重量比で土師器が78%を占める。すべて小破片で、土師器甕は在地産の甕が主体である。図示した1～3の杯が本竪穴住居廃絶時に廃棄されたものと考えられることから、それ以降あまり遺物の投棄がされなかったことがうかがえる。

1は須恵器杯で、外面に火襷痕がみられ、体部内外面にロクロ痕を残す。体部の器壁を薄く仕上げる。体部は内彎気味に開き、口縁部は外反し、口唇部はやや肥厚する。底部は全面回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を回転ヘラ削り調整。

2・3は土師器杯である。2は体部内外面にロクロ痕を残す。体部は直線的に開き、口唇部は若干外反する。底部は全面回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を回転ヘラ削り。3は大振りの杯で、体部は直線的に開き、口唇部は若干肥厚して外反する。内面はヘラ磨きで、内面に黒色処理を施した可能性がある。底部は全面回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を回転ヘラ削り。

4は須恵器甕で、還元炎焼成になりきれない須恵器である。口縁部は一旦外反して、内彎気味に立ち上がり、口唇部を折り返す。胴部外面は叩きの後、帯状に数条のヘラナデをする。胴部内面は指頭によるオサエの後ナデ。胴部内面に煤が付着する。

竪穴住居054（第101図、図版54）　［土器観察表P274］

須恵器杯・土師器杯・須恵器甕・土師器甕各1点が図示できた。3の土師器甕を除いて床面から浮いた状態で出土していることから、これらは本竪穴住居廃絶の後、比較的早い時期に投棄されたものと思われる。

図示できなかった資料の総数は392点で、重量比で土師器が86%を占める。土師器甕は「常総型」の甕が主体で、ごくわずかに器壁の薄いものがみられる。須恵器は「くすべ焼成」のもの

が多く、杯のなかには常陸産のものがみられる。

1は須恵器杯で、「くすべ焼成」の須恵器である。体部内外面に弱いロクロ痕を残す。体部は直線的に開き、口唇部は外反し、端部を丸く収める。底部は回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は端部を回転ヘラ削り。

2は非ロクロの土師器杯で、底部は平底である。体部は内彎気味に開き、口縁部はさらに内彎する。体部外面はヘラ削りで、内面はヘラナデ。

3は土師器甕で、「常総型」の甕である。胴部外面の器面は荒れる。胴部内面はヘラナデで、外面は縦のヘラ磨き。底部に木葉痕がみられる。

4は須恵器甕で、還元炎焼成になりきれない須恵器である。胴部外面は叩きの後、下端部をヘラ削り調整する。内面は指頭によるオサエの後、ヘラナデ。

竪穴住居065（第101図）　［土器観察表P274］

須恵器杯1点、土製品2点、土師器甕1点が図示できた。4の土師器甕は竈内から出土している。2・3の土製品は埋土中からの出土である。

図示できなかった資料の総数は104点で、重量比で土師器が96%を占める。土師器甕は「常総型」と在地産の甕がみられ、後者の割合がやや高い。ロクロ使用の土師器杯のなかに、内外面に赤彩を施すものがみられる。須恵器杯は常陸産のものが多い。

1は須恵器杯で、常陸産と思われる。体部内外面に弱いロクロ痕を残す。底部は上げ底で、体部は直線的に開き、口縁部は器壁が薄く、わずかに外反し、口唇部端部を丸く収める。底部は回転ヘラ切り離しの後、一部手持ちヘラ削り調整。体部外面は無調整。

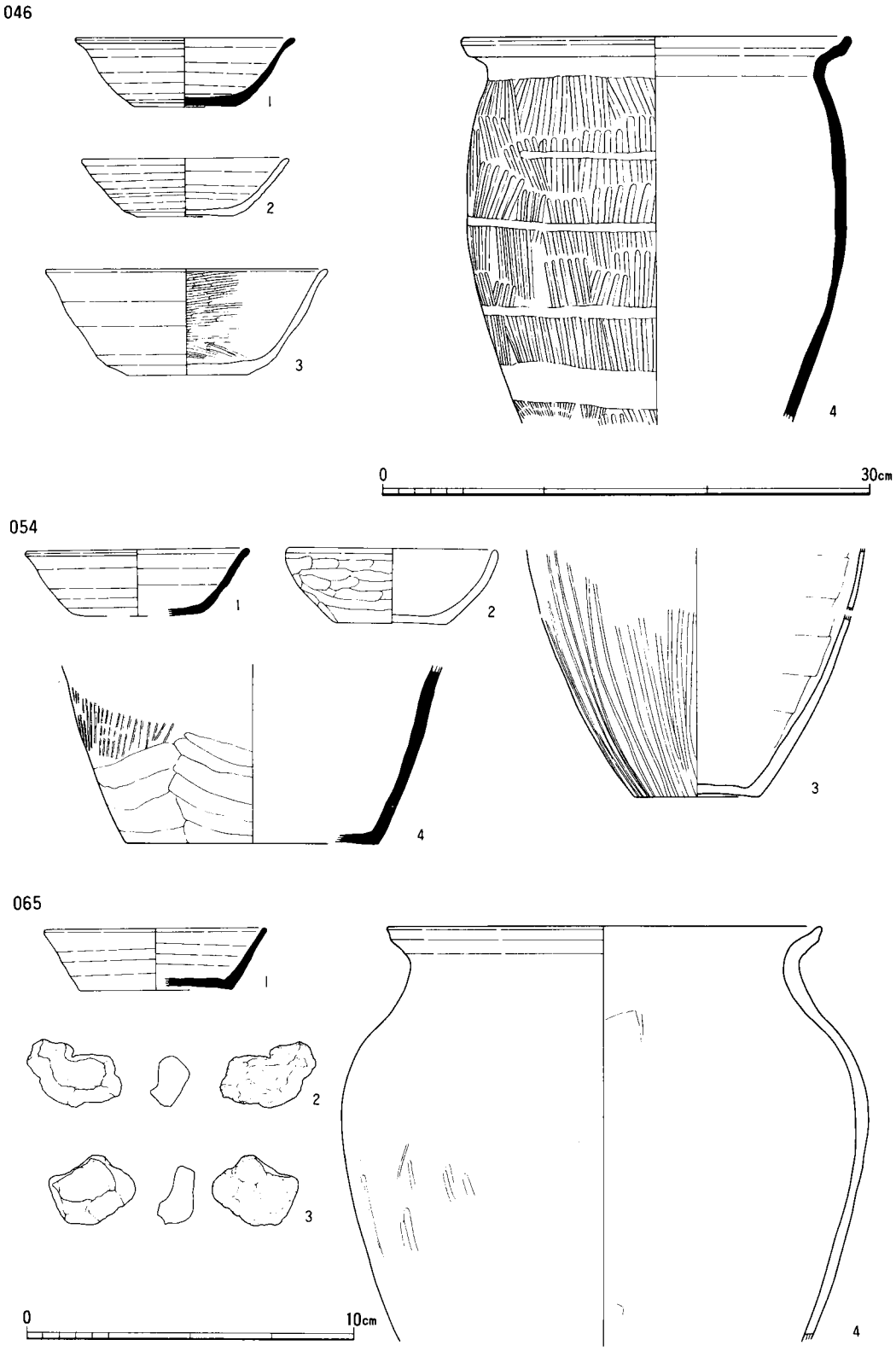
2・3は土製品で、用途・性格は不明である。器壁は厚く、彎曲する部分がみられることから、小型土器の破片とも考えられる。色調は暗褐色で、胎土中に雲母粒を含む。

4は土師器甕で、「常総型」の甕である。口縁部は外反し、口唇部を外側につまみ上げる。最大径は胴部上半にあり、肩を張る。胴部外面は縦のヘラ磨きがされるが、器面が荒れて、明瞭でない。内面はヘラナデ。

竪穴住居066（第102図、図版54）　［土器観察表P274］

須恵器杯5点、土師器杯1点が図示できた。出土状況は3の須恵器杯を除いて床面上かそれに近い位置から出土している。1は破片が広く散り、そのほかの遺物も遺存度が低いことから、本竪穴住居廃絶と同時に廃棄されたものと思われる。

図示できなかった資料の総数は134点で、重量比で土師器が84%を占める。小破片のものが多く、土師器甕は「常総型」の甕が主体で、在地産と器壁の薄い甕がみられる。須恵器杯は常陸産と思われるものが多い。



第101図　竪穴住居046・054・065出土遺物

1～5は須恵器杯である。1～3は常陸産と思われ、体部内外面にロクロ痕を残す。1・2は体部は直線的に開き、口唇部は肥厚する。1は端部を丸く収め、2は尖頭形である。1の色調は黒色で、一部灰色である。2の色調は口縁部内外面は灰色で、そのほかは黒色である。底部はいずれも回転ヘラ切り離しの後、全面回転ヘラ削り調整。体部外面の調整は下端部を回転ヘラ削り。3は1・2に比べ体部の開きが大きい。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。4は体部内面に弱いロクロ痕を残す。体部は外反気味に開く。底部は上げ底である。底部は回転ヘラ切り離しの後、全面回転ヘラ削り調整。体部外面の調整は下端部を回転ヘラ削り。5は体部は直線的に開く。体部外面の調整は下端部を回転ヘラ削り。

6は土師器杯である。体部内外面にロクロ痕を残す。体部はやや内彎気味に開き、口唇部は外反する。底部は全面回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下半部を回転ヘラ削りで、面取りをする。

竪穴住居067（第102図、図版54・62）　［土器観察表P275］

土師器杯・土師器甕・須恵器甕・須恵器甑各1点、砥石2点が図示できた。2～4の甕・甑は竈内から破片の状態で出土し、4の須恵器甑は壁際の床面から浮いて出土した破片と接合している。これらは、本竪穴住居廃絶に伴って、意図的に竈内に廃棄されたものと思われる。竈内から土製支脚が出土したが、遺存状態が悪く図示することはできなかった。

図示できなかった資料の総数は119点で、重量比で須恵器が61％を占める。須恵器甕に大形の破片がみられる。土師器甕は「常総型」の甕が主体である。須恵器は常陸産と思われるものと、還元炎焼成になりきれない須恵器がみられ、後者は甑の胴部破片と思われる。

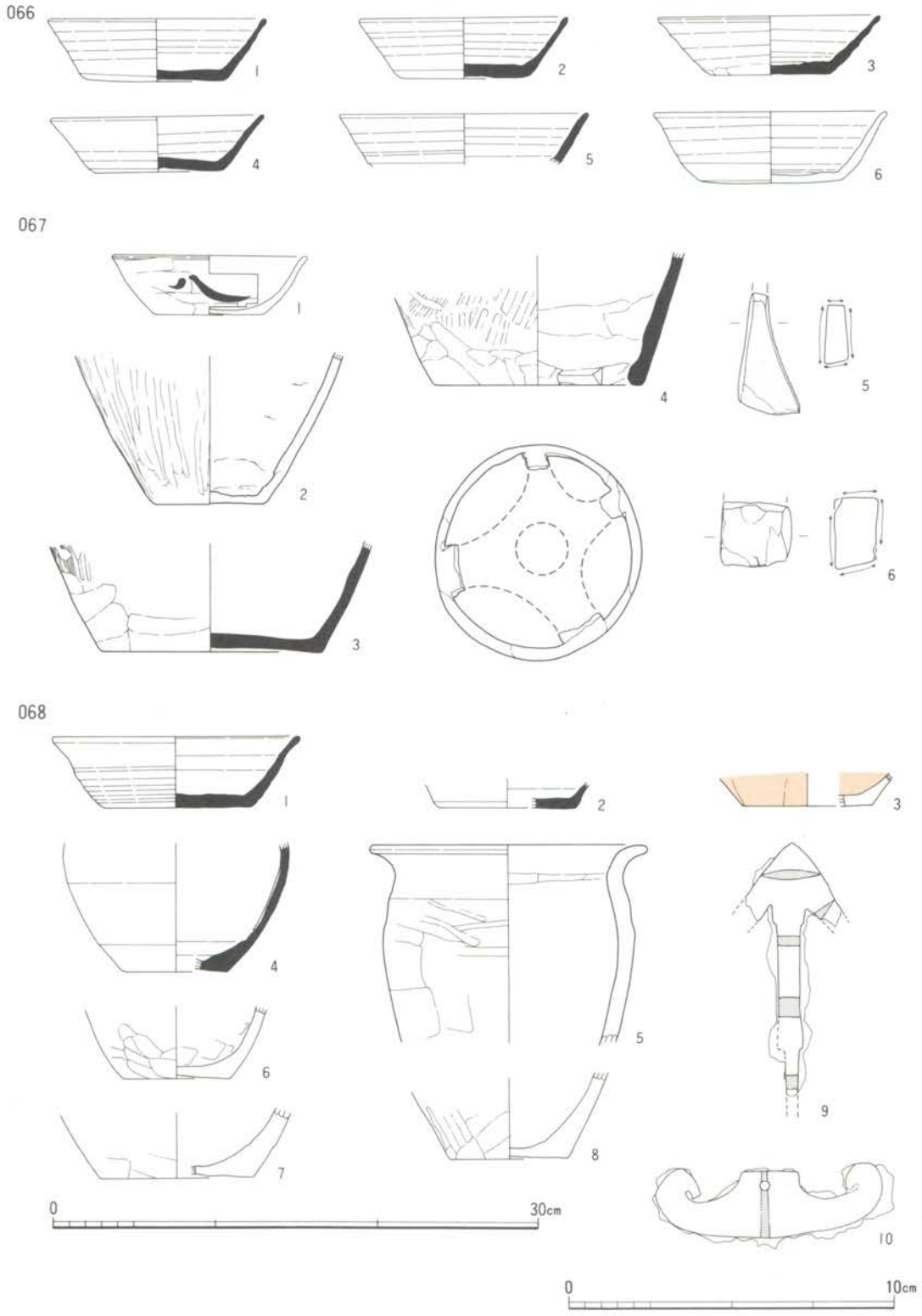
1は土師器杯で、体部外面に正位で「八」と墨書してある。体部は内彎気味に開き、口縁部は緩やかに外反する。底部は回転糸切り離しの後、周辺部を手持ちヘラ削り調整。体部外面の調整は下半部を手持ちヘラ削りで、一部口縁部までおよぶ。

2は土師器甕で、「常総型」の甕である。胴部外面は縦のヘラ磨きをするが、器面は著しく荒れる。胴部内面はナデで、輪積み痕がみられる。

3は須恵器甕で、還元炎焼成になりきれない須恵器である。胴部外面は叩きの後、下端部をヘラ削り調整。内面はナデ。

4は須恵器甑で、還元炎焼成になりきれない須恵器である。五孔形態をもつと思われる。胴部外面は叩きの後、一部ヘラナデで、下端部はヘラ削り。内面はヘラナデで、下端部はナデ。

5・6は砥石である。5は断面は長方形で、中央部はよく使い込まれ、使い減りが著しい。石材は凝灰岩質である。遺存長7.4cm、幅4.9～3.4cm、厚さ3.6～1.2cmを計る。6は断面は長方形で、石材は硬質砂岩質である。遺存長4cm、幅4.3cm、厚さ2.6cmを計る。



第102図　竪穴住居066・067・068出土遺物

竪穴住居068（第102図、図版67）　［土器観察表P275］

須恵器杯2点、土師器杯1点、須恵器壷1点、土師器甕4点、鉄製品2点が図示できた。出土状況は7の土師器甕を除いて、床面から浮いているが、あまり高低差がみられない。本竪穴住居廃絶の後、ある程度埋まった時点で投棄されたものと思われる。

図示できなかった資料の総数は179点で、重量比で土師器が約90％を占める。全体に小破片のものが多い。土師器甕は在地産が多く、「常総型」の甕はやや少ない。

1・2は須恵器杯で、1は常陸産と思われる。体部外面にロクロ痕を残す。体部はやや内彎気味に開き、口縁部は外反する。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削りするが、器面の摩耗が著しく不明瞭。2は底部を回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を回転ヘラ削り。

3は土師器杯で、内外面に赤彩を施す。底部・体部外面ともに手持ちヘラ削り調整。

4は須恵器壷である。長頸壷の胴部と思われる。底部と胴部下半部を回転ヘラ削り調整。胴部内面は器表面が剝落する。

5～8は土師器甕である。5は長胴の甕で、最大径を口縁部にもつ。器壁は厚く、口縁部は強く外反する。胴部外面はヘラ削りの後、一部ヘラナデ。6～8は底部で、胴部外面はヘラ削りで、内面はヘラナデ。

9・10は鉄製品である。9は鏃で、両丸造りで、三角形式である。頸部は刃部との境付近は直角に幅を広げる。頸部と茎部の境は錆のため推定である。遺存長77.0㎜、重さ16.28ｇ、刃部長25.0㎜、幅29.0㎜、厚さ3.0㎜、頸部長44.0㎜、幅6.5㎜、厚さ6.0㎜、茎部遺存長1.4㎜、幅4.0㎜、厚さ4.0㎜を計る。10は燧鉄である。中央部に孔がみられる。図の右側の渦巻きの部分は、錆び膨れが著しく推定である。遺存長20.0㎜、幅70.0㎜、厚さ3.0㎜、孔径3.0㎜、重さ17.75ｇを計る。

竪穴住居069（第103図、図版67）　［土器観察表P275］

土師器甕2点、刀子1点のみが図示できた。出土状況は土師器甕はいずれも床面に密着し、刀子は竈内から出土している。

図示できなかった資料の総数は20点と非常に少ない。すべて小破片で、詳細は不明である。

1・2は土師器甕で、「常総型」の甕である。1は口縁部で、強く外反し、口唇部をほぼ垂直につまみ上げる。2は底部で、胴部外面はヘラ削り。外面の一部に煤が付着する。

3は刀子で、両関であるが、背部の頸部との境は錆のため推定である。遺存長75.0㎜、重さ12.32ｇ、刃部長71.5㎜、幅32.5㎜、厚さ3.5㎜、頸部遺存長3.5㎜、幅9.0㎜、厚さ2.0㎜を計る。

竪穴住居070（第103図、図版55・67）　［土器観察表P275］

須恵器杯3点、鉄製品3点、砥石1点が図示できた。このほかに鉄滓（8）が床面上から出土しているが、第2章第4節2．小鍛冶関連の項で、ほかの鉄滓とともに記述することにしたい。出土状況は床面上か床面に近接している。しかし、遺存度は3を除いて低い。

図示できなかった資料の総数は167点で、重量比で土師器が71%を占める。土師器甕は「常総型」と在地産の甕が半々くらいの割合でみられる。ロクロ使用の土師器杯のなかに、内外面に赤彩を施す杯がみられる。

1～3は須恵器杯で、1・2は常陸産と思われる。1は体部内面にロクロ痕を残す。底部と体部の境に丸みをもち、体部は直線的に開く。底部は回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を回転ヘラ削り。2は体部は直線的に開き、口縁部はわずかに外反する。底部中央の器壁を薄く仕上げる。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。3は体部外面にロクロ痕を残し、内外面に白色に変色した火襷痕がみられる。体部は内彎気味に開く。底部は全面回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を回転ヘラ削り。

4～6は鉄製品である。4は鏃で、全体に錆膨れが著しい。関の部分のカーブがアンバランスである。幅広の刀子の可能性もある。遺存長82.0㎜、重さ20.88ｇ、刃部長58.0㎜、幅25.0㎜、茎部遺存長24.0㎜、幅6.5㎜を計る。5は釘で、頭部は錆のため推定である。遺存長36.5㎜、幅3.5㎜、厚さ3.0㎜、重さ2.18ｇを計る。6は閂金具で、脚部は途中から折れて欠損する。遺存長49.5㎜、幅6.5㎜、厚さ5.0㎜、重さ11.00ｇを計る。

7は砥石で、断面は長方形である。石材は凝灰岩質である。遺存長5.1cm、幅3.2～2.6cm、厚さ1.9cm～1.2cmを計る。

竪穴住居071（第103図、図版55）　［土器観察表P275］

須恵器杯2点、土師器杯4点、土師器甕2点、須恵器転用硯・紡錘車各1点が図示できた。出土状況は破片の状態のものが多く、特に竈内から杯や甕の破片が集中して出土している。しかし、これらは竈の底面からは浮いており、接合する破片も、床面から浮いた位置から出土している。このような状況から、本竪穴住居廃絶の後、比較的早い時期に、意識的に竈内あるいはその周辺に廃棄したものと思われる。5の墨書土器は埋土中からの出土である。

図示できなかった資料の総数は138点で、重量比で須恵器が55%を占める。須恵器甕は還元炎焼成になりきれない須恵器で、胴部破片に比較的大形のものがみられる。土師器甕は「常総型」の甕が主体である。

1・2は須恵器杯である。1は体部は直線的に開き、口唇部は肥厚する。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削りで、強く面

取りをする。2は体部は内彎気味に開き、口縁部は外反する。底部は回転ヘラ切り離しの後、周縁部を手持ちヘラ削り調整。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。

3～6は土師器杯である。3は体部は内彎気味に開き、口縁部は外反する。口唇部は肥厚し、端部を丸く収める。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。4は大振りの杯である。底部と体部の境に丸みをもち、体部は内彎気味に開き、口唇部はわずかに外反する。体部の器面は内外面ともに荒れ、剝落している。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。5・6は底部外面に墨痕がみられるが、判読不能である。5は底部は回転糸切り離しの後、無調整。体部外面の調整は回転ヘラ削り。6は底部は回転糸切り離しの後、周縁部を手持ちヘラ削り調整。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。

7・8は土師器甕である。7は長胴で、口縁部は外反し、口唇部を外側につまみ上げる。胴部外面はヘラ削りの後、下半部に縦のヘラ磨きをするが、「常総型」の甕のヘラ磨きとは異なる。器壁を全体的に薄く仕上げる。8は「常総型」の甕である。長胴で、肩を張らない。口縁部は強く外反し、口唇部を垂直につまみ上げる。胴部外面はヘラナデの後、下半部に縦のヘラ磨きで、内面はヘラナデ。

9は須恵器甕の胴部破片で、硯に転用したものと思われる。内面は同心円叩きがみられるが、中央の広い範囲にわたって、器面が著しく摩滅する。墨の痕跡はみられない。

10は須恵器杯の底部を転用した紡錘車である。底部は回転ヘラ削り調整で、体部外面は回転ヘラ削り調整。推定径9.0cm、孔径0.8cmを計る。

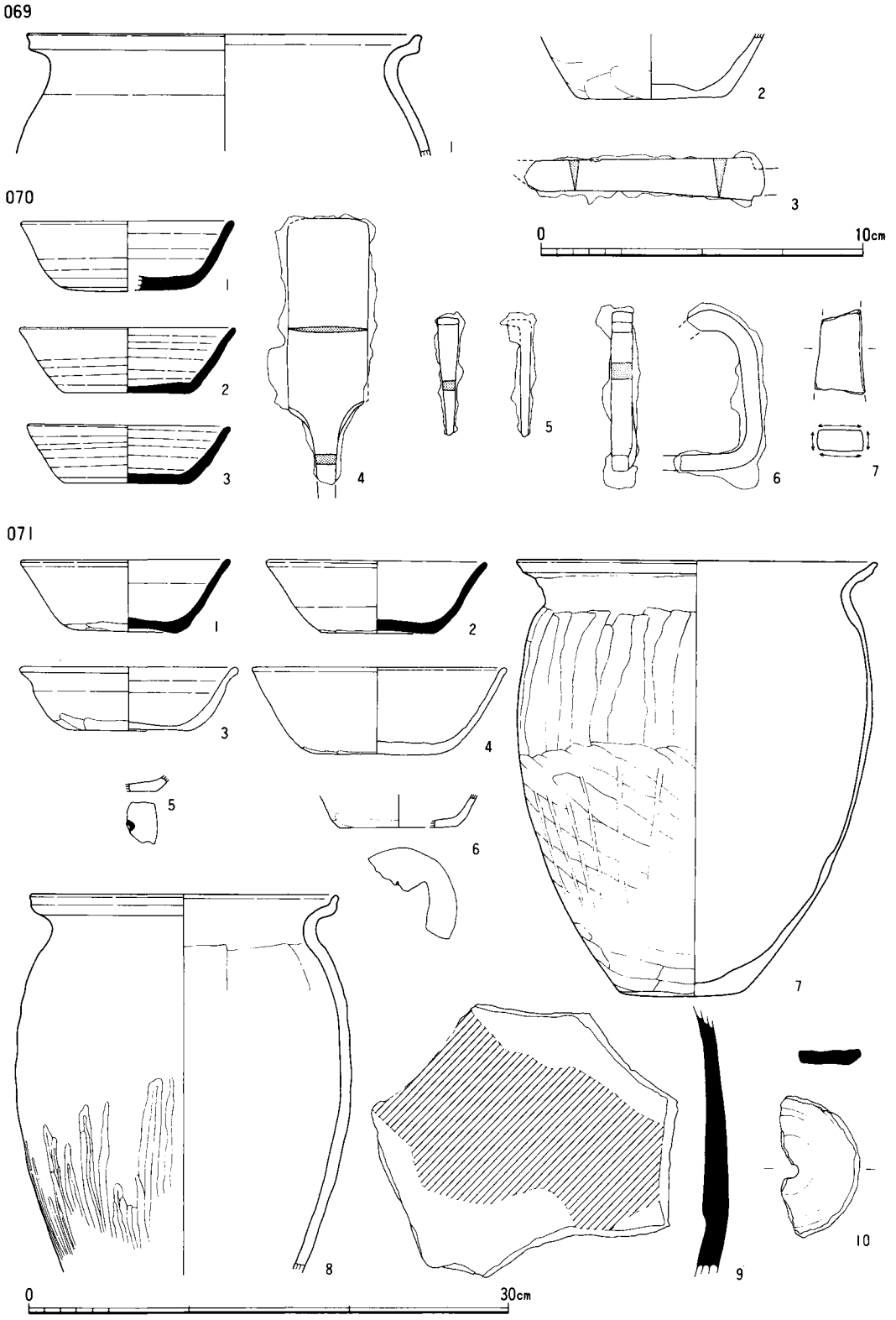
竪穴住居073（第104図、図版55・67）　［土器観察表P275］

須恵器杯2点、土師器甕1点、鉄製品2点が図示できた。出土状況は床面より浮いた状態のものが多く、後から投棄されたものと思われる。

図示できなかった資料の総数は29点と非常に少ない。土師器甕は在地産の甕のみがみられる。そのほかは小破片のため詳細は不明。本竪穴住居が南下がりの斜面に造られていることもあるが、竪穴住居廃絶後に、ほとんど遺物が投棄されなかったことがうかがえる。

1・2は須恵器杯である。1は体部内面にロクロ痕を残す。底部と体部の境はやや丸みをもち、体部はやや外反気味に開く。底部は回転ヘラ切り離しの後、全面手持ちヘラ削り調整。体部外面の調整は下端部の器面が摩滅しているので不明。2は常陸産と思われ、体部内外面にロクロ痕を残す。体部は直線的に開き、口唇部はわずかに外反する。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を回転ヘラ削り。

3は長胴の土師器甕で、最大径を口縁部にもつ。頸部外面に弱い稜を作り、口縁部は強く外傾する。胴部外面はヘラ削りで、内面はヘラナデ。



第103図　竪穴住居069・070・071出土遺物

4・5は鉄製品で、4は穂摘具である。刃部を下にして、左側の孔に鉄釘が残る。使用による摩耗がほとんどみられない。全長100.1㎜、幅22.0㎜、厚さ1.7㎜、重さ20.38ｇを計る。5は刀子で、頸部に禾科植物の繊維がみられ、これを巻き付けていたものと思われる。遺存長30.0㎜、幅8.0㎜、背厚3.0㎜、重さ3.49ｇを計る。

竪穴住居074（第104図、図版56）　［土器観察表Ｐ275］

須恵器杯2点、土師器杯3点、土師器甕1点が図示できた。出土状況は床面上のものが多く、竈のある壁に寄った位置にまとまっている。2の須恵器杯と6の土師器甕を除いて、比較的遺存度がよく、本竪穴住居廃絶に伴って廃棄されたものと思われる。

図示できなかった資料の総数は21点と非常に少ない。竪穴住居073同様、本竪穴住居も廃絶の後、ほとんど遺物が投棄されなかったことがうかがえる。土師器甕は「常総型」の甕、須恵器甕は還元炎焼成になりきれない須恵器のみがみられる。

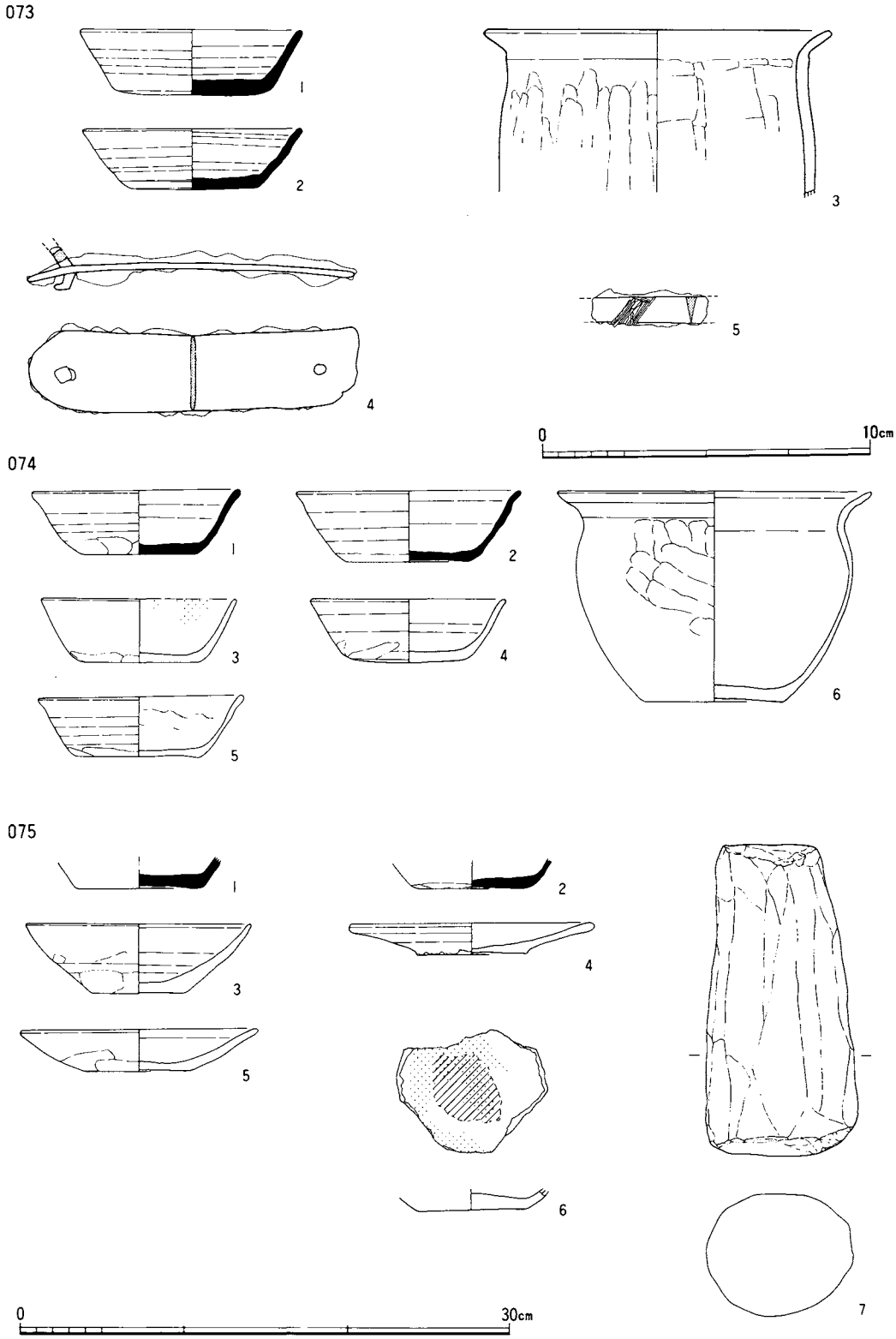
1・2は須恵器杯である。1は体部内外面に弱いロクロ痕を残す。体部は直線的に開き、口唇部はわずかに外反する。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削りで、強く面取りをする。2は還元炎焼成になりきれない須恵器である。体部内外面にロクロ痕を残す。体部はやや内彎気味に開き、口唇部は外反する。底部は全面回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部をヘラ削りするが、器面が摩耗しているため詳細は不明。

3～5は土師器杯で、体部はいずれも直線的に開く。3・5は被熱し、著しく器面が荒れている。3は口縁部内面にタール状の付着物がみられる。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削りで、強く面取りをする。4は底部と体部の境に丸みをもち、底部も若干丸みをもつ。口唇部はわずかに外反する。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削りで、一部体部下半部におよぶ。5は口唇部はわずかに肥厚して、外反する。体部内面に輪積み痕がみられる。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。

6は小形の土師器甕で、口縁部に最大径をもつ。頸部外面に弱い稜を作り、口縁部は強く外反し、口唇部をつまみ上げるようにして、さらに外側に開く。口縁部外面は被熱し、器壁が著しく荒れる。胴部外面はヘラ削り。

竪穴住居075（第104図、図版56）　［土器観察表Ｐ275］

須恵器杯・土師器皿各2点、土師器杯・土器転用硯・土製支脚各1点が図示できた。出土状況は竈内を中心に出土している。土製支脚は立った状態であり、使用時の位置をほぼたもって



第104図　竪穴住居073・074・075出土遺物

いるものと思われる。それ以外のものは竈の底面から若干浮いており、また、4の土師器皿を除いて被熱した状況はみられない。これらのことから、竈内の遺物は、本竪穴住居廃絶に伴って意図的に廃棄したものと思われる。1の須恵器杯は埋土中からの出土である。

図示できなかった資料の総数は44点と非常に少ない。本竪穴住居も廃絶後の遺物の投棄が少なかったことがうかがわれる。土師器甕は在地産の甕のみがみられる。

1・2は須恵器杯で、いずれも口縁部を欠損する。1は底部は手持ちヘラ削りの後、ナデ調整を行う。体部外面の調整も下端部をナデ。底部外面に焼成前の「｜」状のヘラ記号がみられる。2は「くすべ焼成」の須恵器で、底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。

3はロクロ使用の土師器杯で、体部は内彎気味に大きく開く、鉢形の器形をもつ。口唇部端部は尖頭形になる。体部内外面に部分的に煤が付着する。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下半部を手持ちヘラ削りで、一部体部の上部におよぶ。

4・5は土師器皿である。4はやや突出した底部をもつ。体部は直線的に大きく開き、口唇部は肥厚し、端部を丸く収める。底部中央の器壁を薄く仕上げる。器面は若干被熱し、一部煤が付着する。底部は全面回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面は無調整。5は体部は内彎気味に大きく開き、口縁部は外反する。底部内面の器面は、雨垂れ痕状に剝落している。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下半部を手持ちヘラ削り。内面はヘラ磨き。

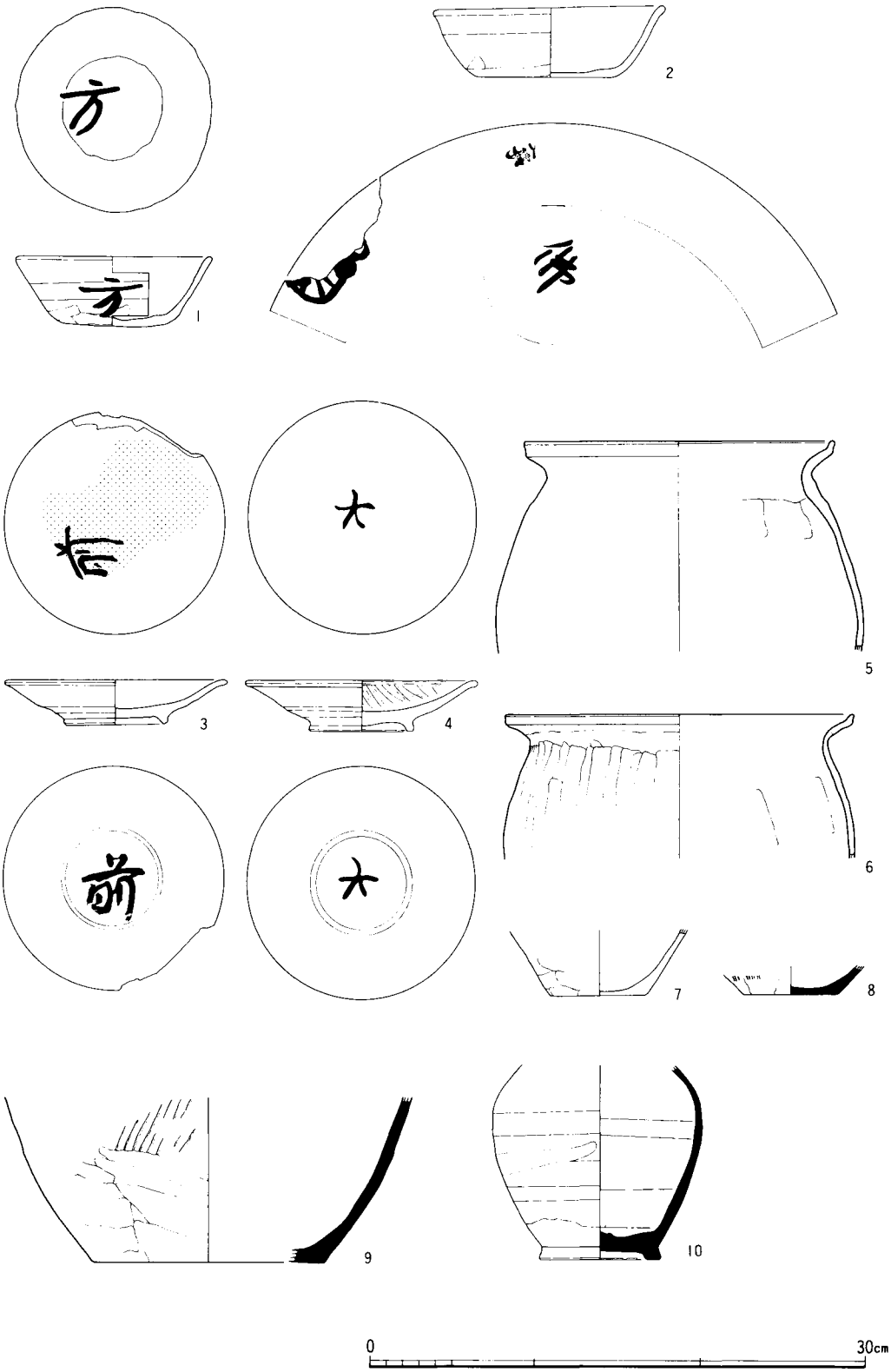
6は土師器杯の底部を転用した硯である。底部内面の中央部は器面が摩耗し、その周辺に墨の付着が著しい。底部は回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。

7は土製支脚である。ほぼ完形で、全体に著しく被熱し、器面は荒れている。断面は楕円形である。外面はヘラ削り。高さ18.6cm、上部径5.7cm、下部径8.7cmを計る。

竪穴住居076（第105図、図版56～58・62・63）　［土器観察表P275］

土師器杯・土師器高台付き皿各2点、土師器甕3点、須恵器甕2点、須恵器長頸壷1点が図示できた。出土状況は竈内とその周辺に分かれる。竈内から出土した4の土師器皿は、底面からは多少浮いているものの、伏せた状態であることから、竈廃絶時に、意図的に竈内に置かれたものと思われる。そのほかの遺物は、本竪穴住居廃絶の後、比較的早い時期に投棄されたものと思われる。

図示できなかった資料の総数は119点と少なく、重量比で土師器が81％を占める。土師器甕は器壁が薄く口唇部をつまみ上げるものと、「常総型」の甕がみられる。これらは、色調や胎土などから、それぞれ図示した5や6の甕と同一個体と思われる。須恵器甕は「くすべ焼成」と還



第105図　竪穴住居076出土遺物

元炎焼成になりきれない須恵器のみがみられる。本竪穴住居も、廃絶の後あまり遺物が投棄されなかったことがうかがえる。

1・2は土師器杯で、いずれも墨書される。1は体部は直線的に開き、体部外面に弱いロクロ痕を残す。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削りで、強く面取りをする。底部内面と体部外面に正位で「方」と墨書される。2は体部は内彎気味に開き、口縁部は緩やかに外反し、口唇部端部を丸く収める。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。底部外面と体部外面に倒位で「佛」と墨書される。体部外面の文字はやや不鮮明である。また、同じく口縁部から体部外面にかけて倒位で、絵と思われるものが描かれているが、欠損部分が多く内容は不明である。

3・4は土師器高台付き皿で、いずれも墨書される。類似した器形をもち、体部は外面に稜を作って、外反気味に大きく開き、口唇部は外反する。3の高台底部はヘラナデ痕が明瞭に残り、面を作る。底部は全面回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下半部を回転ヘラ削り。高台周辺はナデ。内面は全面ヘラ磨き。底部内外面に、角度を90度変えて「前」と墨書される。底部内面には、墨書の周辺に墨が残る。4は底部は回転糸切り離しの後、周縁部は高台とともにナデ調整。体部外面の調整は下半部を回転ヘラ削り。内面は、口唇部は横方向の、それ以下は斜め方向のヘラ磨き。口縁部内面には煤が付着する。底部内外面に、反転して同じ方向に「大」と墨書される。

5～7は土師器甕である。5は「常総型」の甕である。口縁部は強く外反し、口唇部をほぼ垂直につまみ上げる。胴部は内外面ともにヘラナデ。6・7は器壁の薄いもので、同一個体と思われる。長胴で、口縁部は強く外反し、口唇部を垂直につまみ上げる。口縁部外面に輪積み痕を残す。胴部外面はヘラ削りで、内面はヘラナデ。底部の器壁もかなり薄く仕上げる。

8・9は須恵器甕で、還元炎焼成になりきれない須恵器である。胴部外面はいずれも叩きで、底部付近はヘラ削り調整。内面はナデ。9の外面には一部煤が付着する。

10は須恵器長頸壷で、全体によく焼き締まっている。胴部最大径は上位にあるが、肩を張らない。高台は短いが太く、「ハ」の字状に開く。高台底部には、なんらかの繊維の圧痕が一部にみられる。底部は回転ヘラ削りの後ナデを行う。胴部外面は中位まで回転ヘラ削り調整。胴部外面上部と底部内面に緑色の自然釉がみられる。

2．掘立柱建物

遺構

掘立柱建物079（第106図）

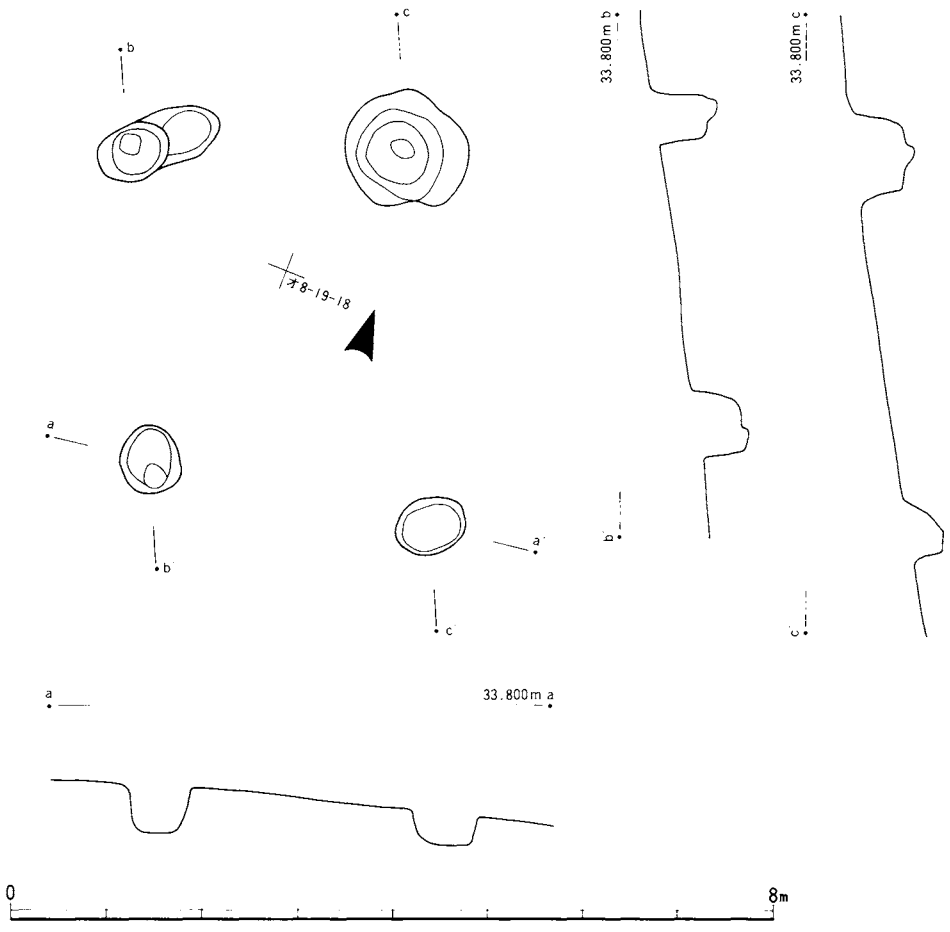
位置　オ８グリッド。調査区西側、台地先端に位置する。

形状・規模　ゆがんだ方形を示す。長軸は3.7m、短軸は2.9mである。長軸の方位は北西（N－24°－W）を向く。柱穴間面積は10.5m²を計る。

掘立柱建物100・101（第107図、図版20）

位置　カ７グリッド。調査区中央、台地縁辺に位置する。掘立柱建物102と東西に接して並んでいる。

形状・規模　２間×３間の長方形を示す。長軸は5.0m、短軸は3.7mである。長軸の方位は西（N－100°－W）を向く。西側の中間に１本柱が入る。柱穴間面積は17.96m²を計る。



第106図　掘立柱建物079

掘立柱建物102（第107図）

位置　ワ７グリッド。調査区中央、台地縁辺に位置する。掘立柱建物100・101と東西に接して並んでいる。竪穴住居025と重複する。

形状・規模　２間×３間の長方形を示す。長軸は4.8m、短軸は3.5mである。長軸の方位は西（N－102°－W）を向く。柱穴間面積は16.20㎡を計る。

掘立柱建物103・106（第108図）

位置　ワ８グリッド。調査区中央、台地縁辺に位置する。

形状・規模　２間×４間の長方形を示す。長軸は5.6m、短軸は3.7mである。長軸の方位は北（N－20°－W）を向く。西側に廂柱106が並ぶ。柱穴間面積は14.64㎡を計る。

掘立柱建物107（第109図、図版21）

位置　カ８グリッド。調査区中央、台地縁辺に位置する。

形状・規模　２間×３間の長方形を示す。長軸は5.2m、短軸は2.7mである。長軸の方位は北西（N－30°－W）を向く。柱穴間面積は16.35㎡を計る。

掘立柱建物108（第109図）

位置　ヨ７グリッド。調査区中央、台地斜面に位置する。

形状・規模　２辺の柱穴列のみ検出された。長軸は５m、短軸は3.3mである。長軸の方位は南西（N－154°－W）を向く。

３．柵列

遺構

柵列104（第108図）

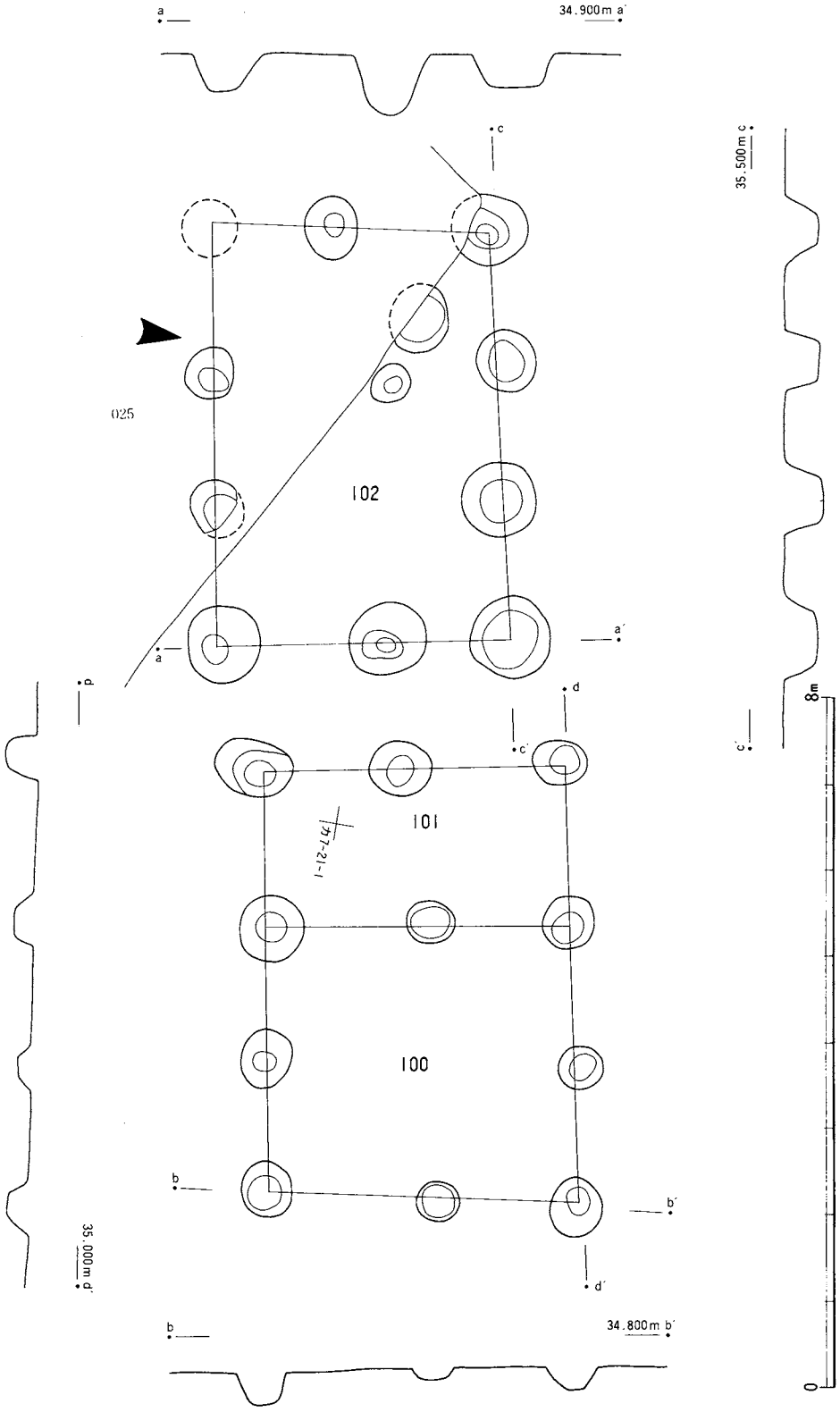
位置　ワ７グリッド。調査区中央、台地縁辺に位置する。掘立柱建物103の北側にある。

形状・規模　柱穴列の長さは4.7mである。方位はほぼ掘立柱建物103の短軸と平行している。

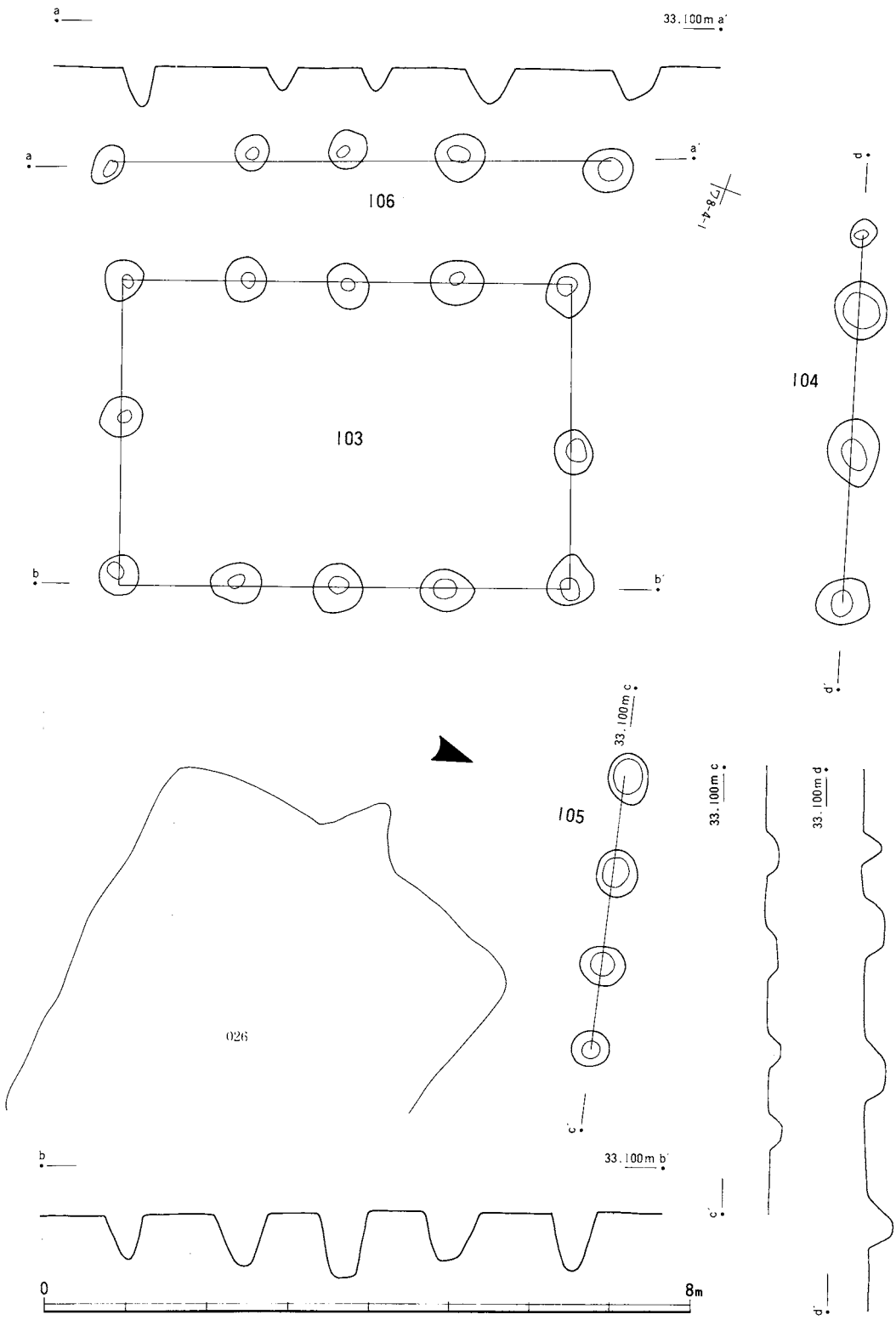
柵列105（第108図）

位置　ワ７グリッド。調査区中央、台地縁辺に位置する。掘立柱建物103の東側にある。

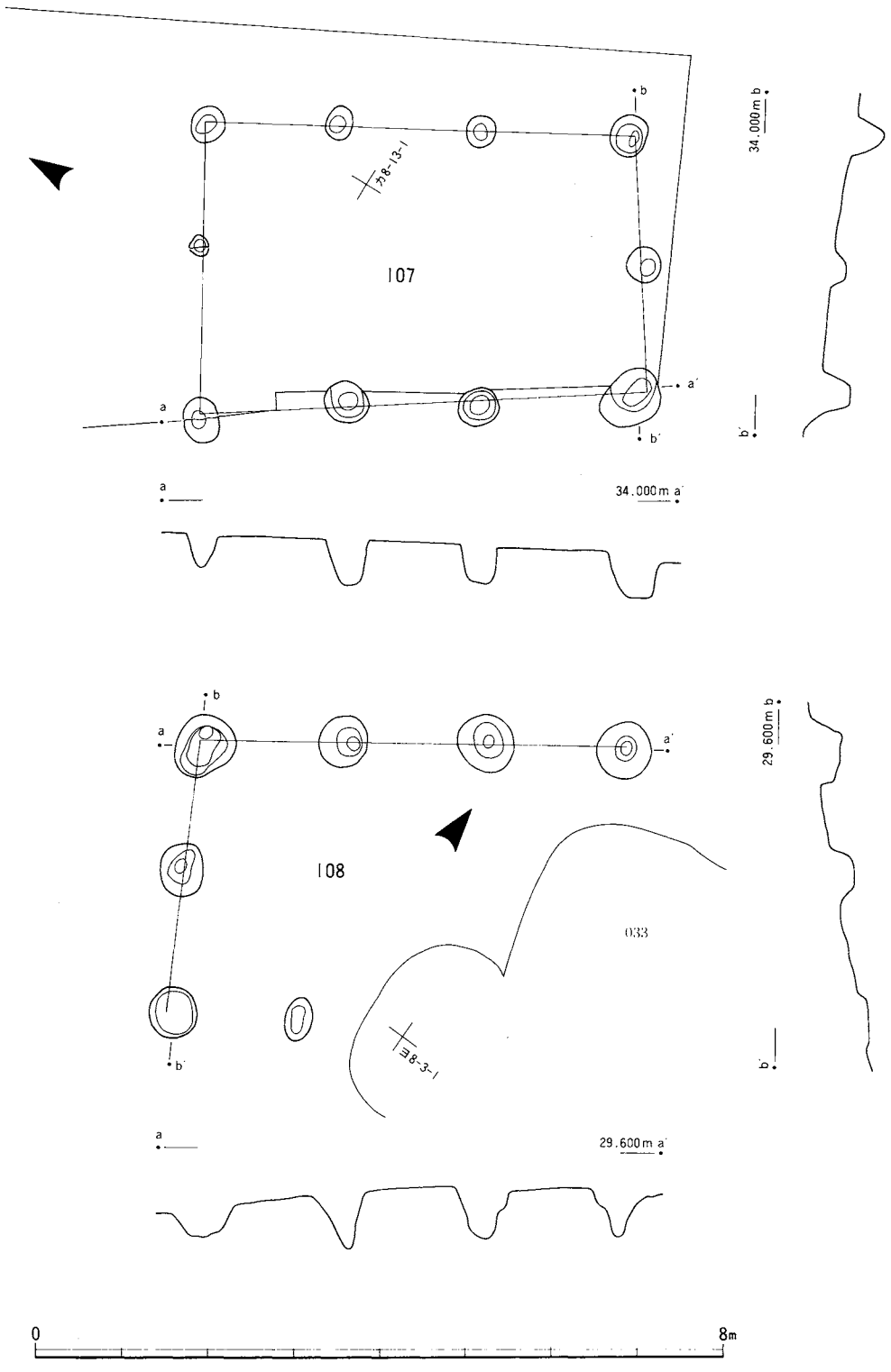
形状・規模　柱穴列の長さは3.4mである。方位はほぼ掘立柱建物103の短軸と平行している。



第107図　掘立柱建物100・101・102



第108図　掘立柱建物103・106、柵列104・105



第109図　掘立柱建物107・108

4．土坑

遺構

土坑048（第110図）

位置　タ6グリッド。調査区東側、台地縁辺に位置する。

形状・規模　長さ3.1m、幅1.3mの細長い遺構内に、複数の窪みが存在する。遺構の深さは浅い。性格は不明である。

遺物出土状態　少数の遺物が出土している。

土坑072（第110図）

位置　オ8グリッド。調査区西側、台地先端斜面に位置する。

形状・規模　一辺2.7mの方形の土坑と、長さ2.3m、幅1.5mの長方形の土坑が重複している。深さは0.6mである。性格は不明である。

遺物出土状態　流れ込んだ状態で少量の遺物が出土している。

土坑077（第110図）

位置　オ8グリッド。調査区西側、台地先端斜面に位置する。

形状・規模　径1m弱の円形の土坑である。遺構の深さは浅い。性格は不明である。

遺物出土状態　流れ込んだ状態で少量の遺物が出土している。

遺物（第11表）

土坑048（第111図、図版58）　［土器観察表P276］

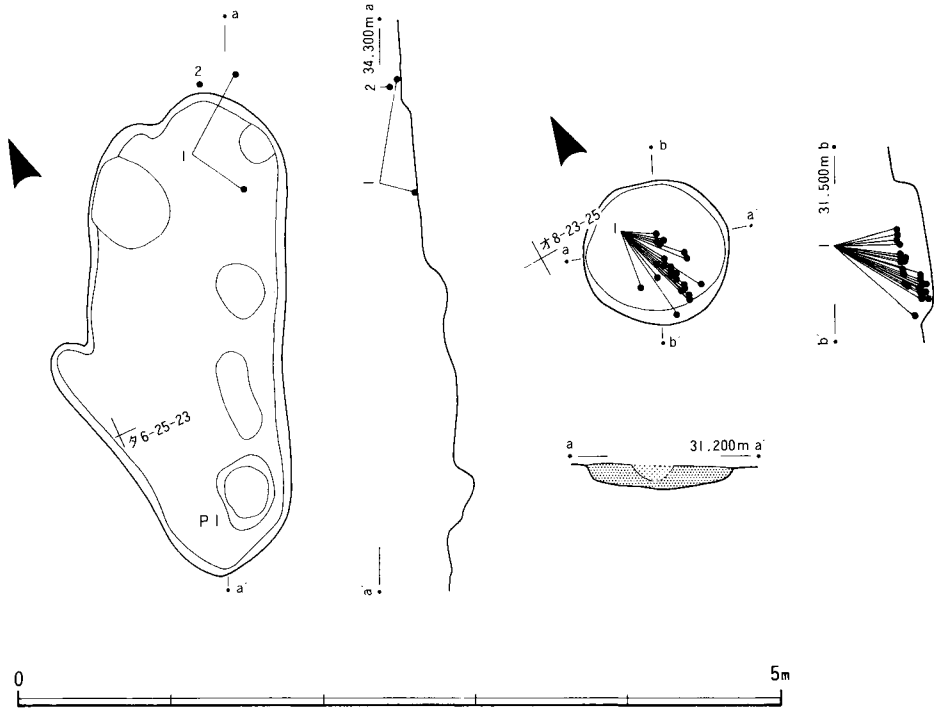
土師器杯・須恵器杯各1点が図示できた。2は遺構外からの出土であるが、1の破片も遺構外の、2に近接した位置にあることから、本土坑に伴う遺物とした。図示できなかった資料の総数は19点で、すべて小破片である。土師器甕は「常総型」の甕がみられる。須恵器甕は「くすべ焼成」の須恵器である。

1は須恵器杯である。体部内面に弱いロクロ痕を残す。体部は外反気味に開く。底部は全面手持ちヘラ削りで、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削りで、強く面取りをする。口縁部内面は器面が摩耗している。

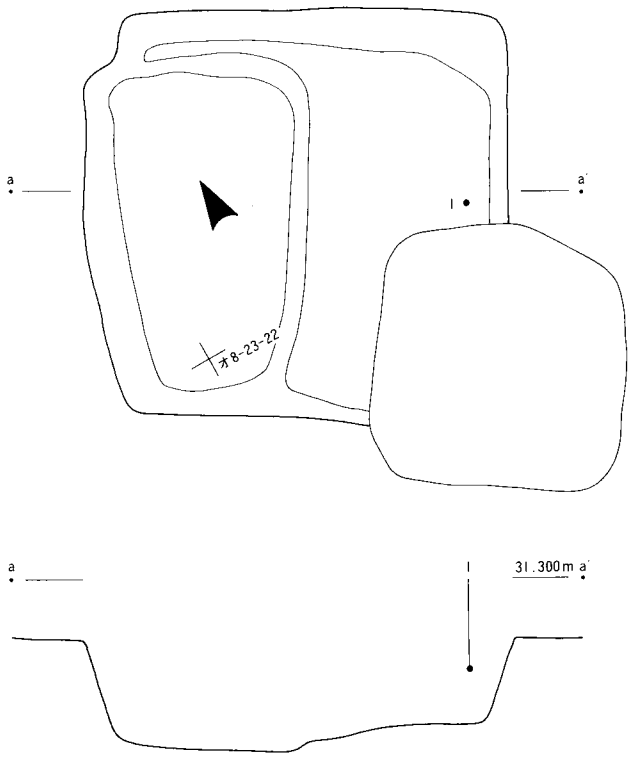
2は土師器杯である。体部内面に弱いロクロ痕を残す。体部は直線的に開き、口唇部はわずかに外反する。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。

土坑048

土坑077



土坑072



第110図　土坑048・072・077

土坑072（第111図）　［土器観察表P276］

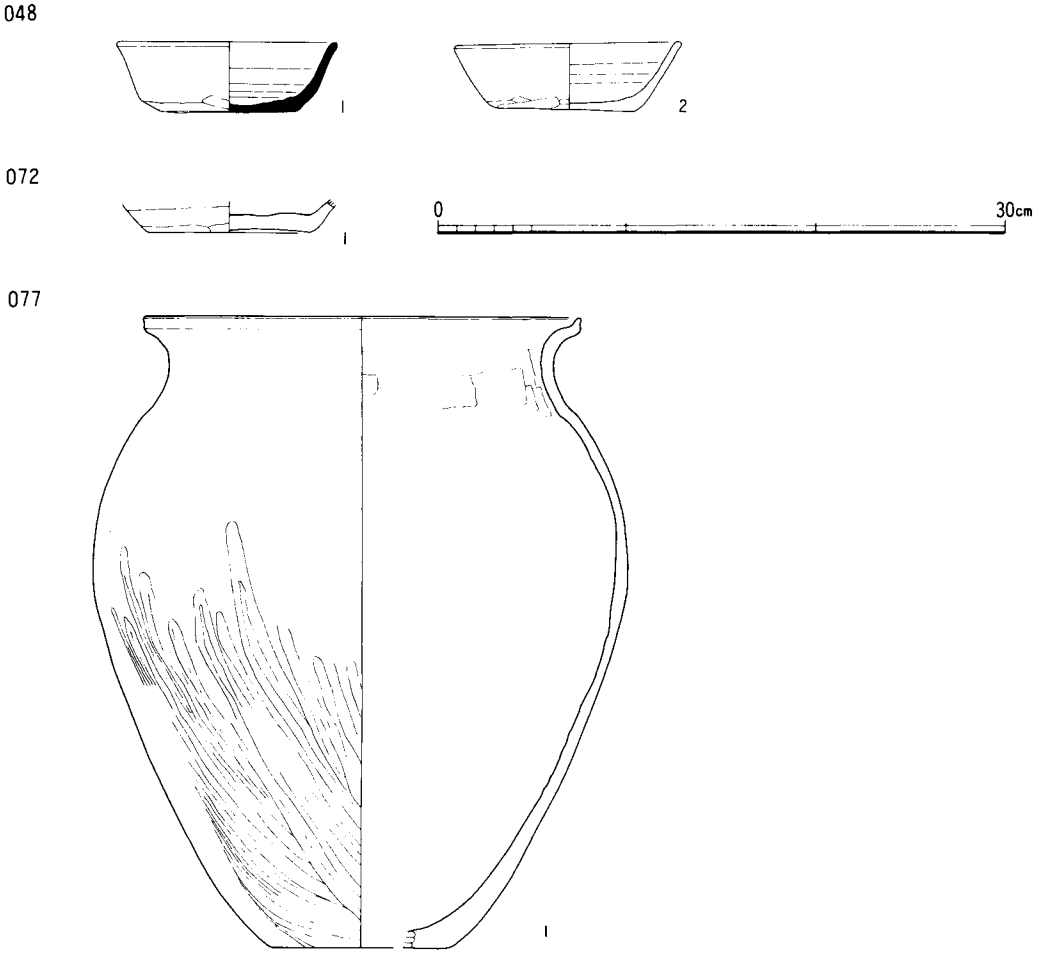
土師器杯1点のみが図示できた。図示できなかった資料の総数は38点で、すべて小破片である。土師器甕は在地産の甕のみがみられる。

1は土師器杯で、底部のみが遺存する。底部は回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を回転ヘラ削り。

土坑077（第111図、図版58）　［土器観察表P276］

土師器甕1点のみが図示できた。出土状況は底面から浮き、高低差がみられることから、本土坑がある程度埋まった段階で、一括して投棄されたものと思われる。図示できなかった資料の総数はわずか2点である。

1は「常総型」の土師器甕である。胴部は卵形であるが、底部がやや大きい。口縁部は強く外反し、口唇部を垂直につまみ上げる。胴部外面はヘラナデの後、中位以下に縦方向のヘラ磨き。内面はヘラナデ。底部に木葉痕がみられる。



第111図　土坑048・072・077出土遺物

第3節　近世遺構群（019）

1．遺　構（第112～114図、図版21）

当遺跡東北端、標高30～33mの緩斜面部において江戸時代の掘立柱建物跡、方形竪穴建物跡、柵列跡、土坑墓、火葬墓、溝状遺構、壇状遺構などが大量の遺物を伴ってまとまって検出された。これらの遺構群は北東－南西方向に長く、規模は約30×約10m、面積約300㎡である。北側は台地中央に、東側は小支谷に面し、それぞれ近世から続くと考えられる小道が存在したので、遺構群はこれでほぼ完結しているものと考えられる。

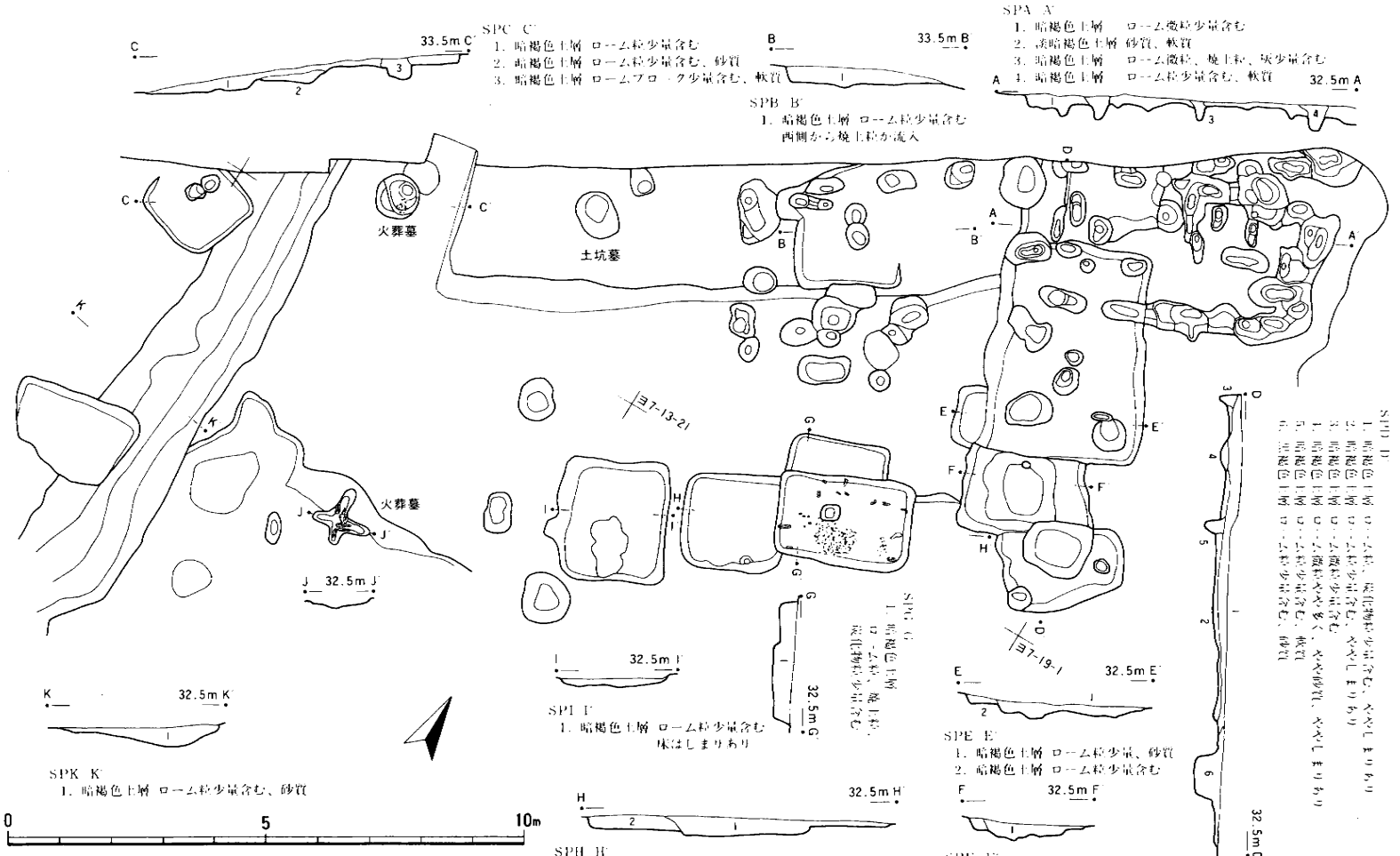
掘立柱建物跡　遺構群の北東隅に検出され、規模は約5×3m（3×2間）、柱間1.8m、柱穴の深さ50～60cmである。短辺には内外にピットが集中し、出入口の可能性があり、特に谷側は庇を有していた可能性がある。また、内部は北側に小ピットが並ぶことから間仕切りの可能性がある。なお、セクションから判断すると方形竪穴を切っている。

方形竪穴建物跡　約5×3.5mの大型のものが1棟と約3×2mの小型のものが9あるいは10棟ある。深さは確認面から30～40cmと浅いが、掘り込み面は現表土からそれほど下がらないレベルであったことが推測され、50cm以上の深さが考えられる。ほぼ中央に位置する小型の1棟の埋土から多量の炭化材・焼土が検出されたことから、上屋構造をもつ建物跡であることが推測される。柱については外側に浅い掘り込みで建てられたか、あるいは地面に角材を直接渡した上に柱が建てられたものの可能性がある。また、この竪穴の浅いピット中から焙烙（ほうろく）が検出されたことから他の竪穴4棟にもみられるピットは何らかの火処（囲炉裏など）の可能性があり、小規模な遺構ながら生活の跡がうかがえる。

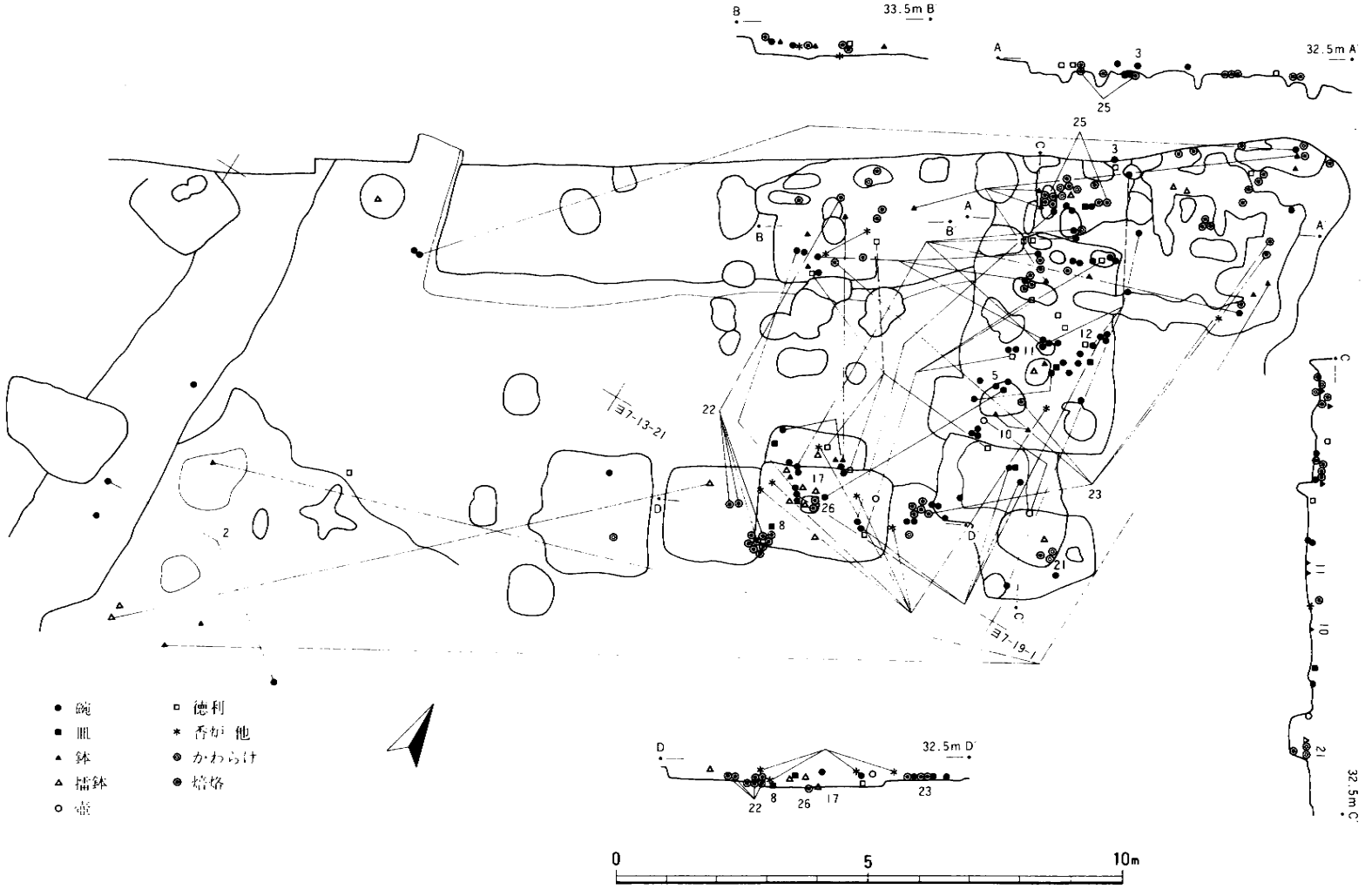
柵列跡　直線的につながるが、閉じないピット群が4群存在する。一つは調査区北側境にほぼ沿うような長さ約13m、柱間約1.6m、深さ20～60cmのピット群であり、調査区北西に接する小道に伴う柵列の可能性が考えられる。また、壇状遺構の直下に検出された柱間1.7～1.8m、および1.3～1.8m、長さ4mほど、深さ10～30cmの2間の柱穴列2条、および北西－南東方向に方形竪穴を切る大型の浅いピット群（柱間1.7m、長さ約6m）については不明である。

土坑墓　埋葬物を伴う確実な土坑墓は019の遺構群中で西側に1基（直径約1m、深さ約50cm）存在する。底部からは歯6本とともに寛永通寶6枚、土人形、石硯のミニチュア、キセル等が検出された。土人形は江戸時代の未婚女性とみられるが、現在も未婚男性が亡くなると女性の人形を副葬する民俗例があることから、この土坑の被葬者もその可能性がある。ほか南側に同様な遺構が数基存在するが、遺物は検出されておらず、攪乱の可能性もある。

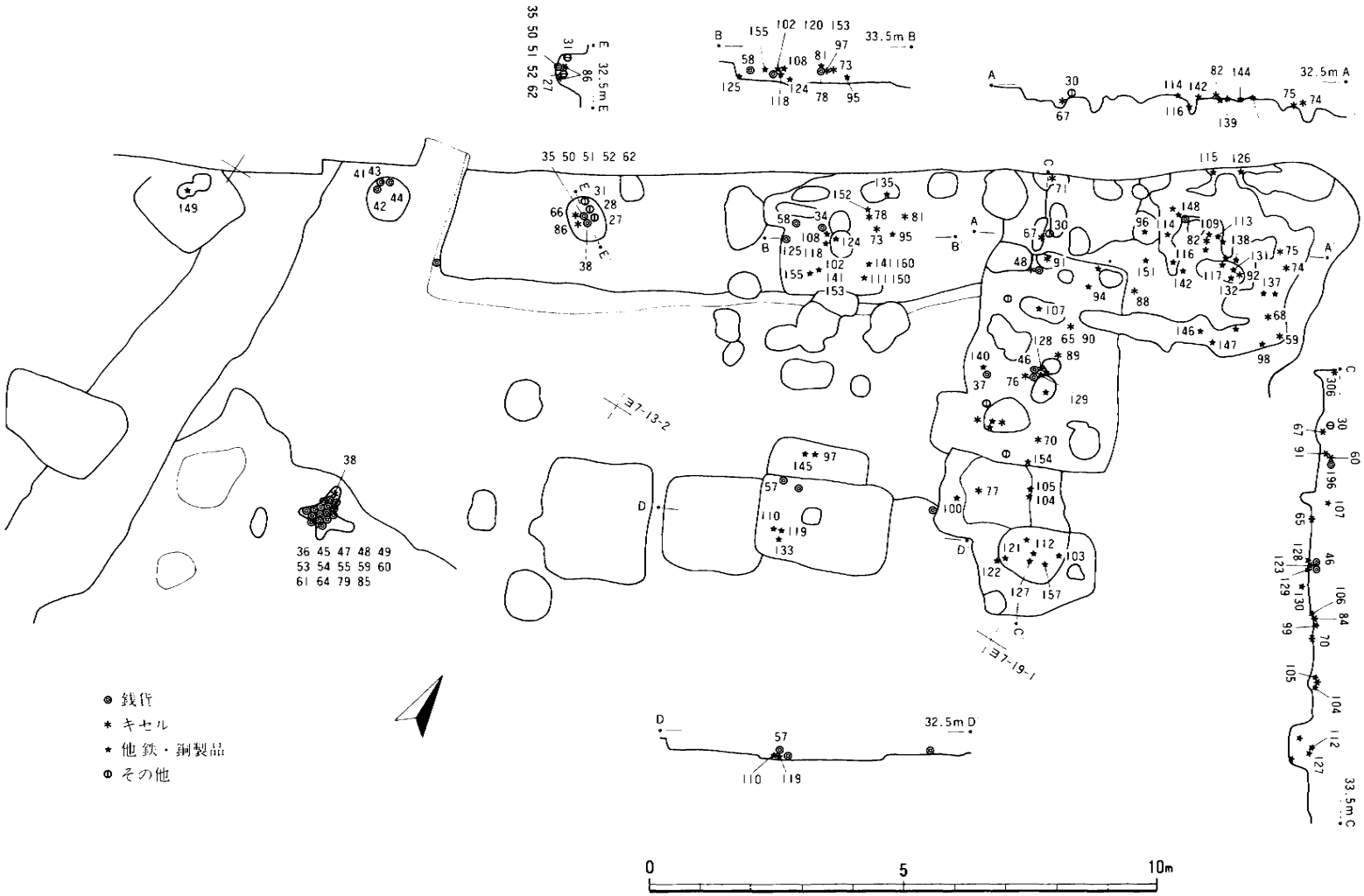
火葬墓　019の遺構群中南端近くと北西約6mの壇状遺構と溝状遺構の間に1基ずつ存在する。南側のものは長さ約1.3m、深さ約10cmの溝を十字に重ねた形状であり、中央部はそれより約10cm低く、全体に火葬骨と炭化材が検出されたが副葬品は出土しなかった。また、北側の直径約



第112図　近世遺構群019（S＝1/150）



第113図　近世遺構群019土器・陶磁器出土状態(S＝1/150)



第114図　近世遺構群019金属・石製品等出土状態(S＝1/150)

1mのものからは火葬骨とともに寛永通寶が4枚副葬されている。なお、両遺構の火葬骨は接合関係にあり、灰白色から灰色の細かく破砕された大量の粉から粒状の小片が多く、変形したものも多いので強く火を受けたものと考えられる。しかしながら、ほぼ全身の各部位が揃っており、逆に同一部位の重複がないことから、人骨一体分が埋葬された可能性が高い。欠損が多いのは顎骨で、左の下顎枝片がみられたのみで、歯の出土はない。残存のよい軸椎の歯突起尖から椎体の下端が成人個体の40㎜と比較して29㎜と小さいことから当人骨は小児骨とみられる。(1)

溝状遺構　南西端にほぼ南北に幅約2m、深さ約0.5mの浅い溝状遺構が検出された。埋土は砂質である。西側に方形竪穴状遺構が重複しているが、セクションからは溝状遺構が先行することが確認された。

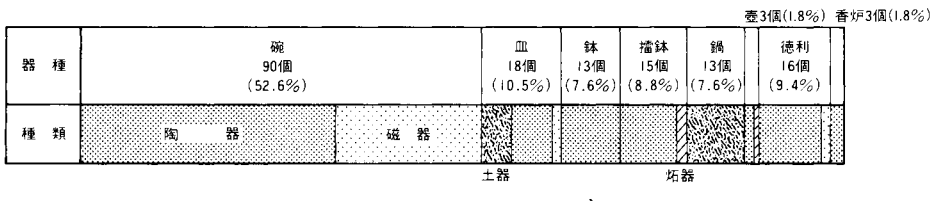
壇状遺構　調査区ぎわに沿って幅約3m、長さ約13mの低い壇状遺構が検出された。その長軸は壇上および東側の方形竪穴状遺構とほぼ同方向であり、時期的に伴う可能性がある。

2．遺　物

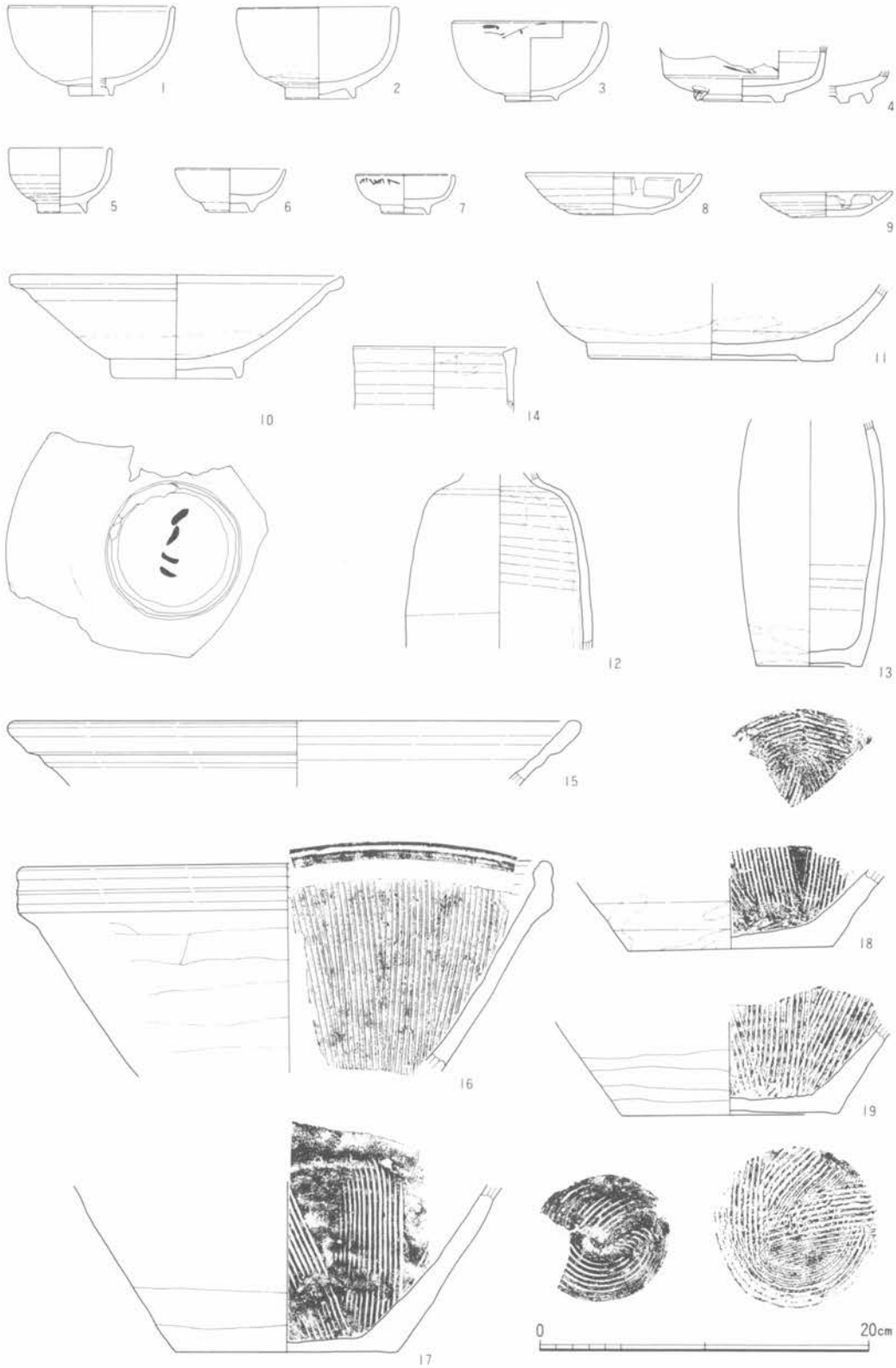
遺物は土器（かわらけ、焙烙）、陶磁器、土人形、石硯、銭貨（寛永通寶）、キセル、鉄釘等で、ほとんどが18世紀後半に比定され、019遺構群の北東半分と土坑墓内に集中がみられる。なお、異なる方形竪穴間だけでなく、方形竪穴を切って造られたと考えられる掘立柱建物の床下土から方形竪穴との同一個体が出土している状況があり、遺物は短期間に廃棄されたことが考えられる。このことから、掘立柱建物が使用を停止した段階でも方形竪穴が埋まっていなかったことが推測され、これらの遺構群の時期差はあまりないと考えられる。

器（うつわ）類

土器、陶器、炻器（せっき）、磁器などのいわゆる器類については、全破片を個体別に分類することができた（第115図・第1表）。全破片は527点、個体は171個で、土器20個（11.7%）、陶器111個（64.9%）、炻器3個（1.8%）、磁器37個（21.6%）で陶器の占める割合が多い。また、器種別では碗90個（52.6%）、皿（含灯明皿）18個（10.5%）、鉢13個（7.6%）、擂鉢15個（8.8%）、鍋（焙烙）13個（7.6%）、壺3個（1.8%）、徳利16個（9.4%）、香炉3個（1.7%）であり、陶器碗しかも灰釉碗の占める割合が多い。この他、鉄鍋や木製椀に塗ったとみられる漆片などが若干出土している。



第115図　近世遺構群019出土器類構成比（個体数）



第116図　近世遺構群019出土陶磁器(S=1/4)

陶磁器（第116図、第１表、図版64・72）

碗（１～５）　図示したものはすべて瀬戸・美濃系陶器である。１～４は器高15～16cmだが、５は3.9cmと小振りな小碗であり、ちょこであろう。１・４は淡黄色の灰釉、２・３は灰色の釉が掛かる。４は見込み部から急激に立ち上がるが、他は内外面緩やかな曲線を描く。３は口縁部外面にわずかに薄黒い線が描かれている。

皿（６・７）　６が瀬戸・美濃、７が磁器でそれぞれ器高2.6cm、2.3cm、口径6.8cm、6.1cmの小皿である。６は透明、７は青灰色の釉が掛かり、７の口縁部外面に笹とみられる呉須絵が染付けされる。

灯明皿（８・９）　ともに桟付きの受け皿で薄く鉄釉（錆釉）が施され、底部付近は拭われていおり、外面と桟端部に同器形の溶着痕が残る。８は器高3.0cm、口径9.7cm、９は器高1.5cm口径7.8cmである。

鉢（10・11）　10は口縁部がやや外反する平鉢状の器形で、器高6.2cm、口径20.2cmで淡黄色の灰釉が掛かる。底部に墨書があるが内容は不明である。11は底径15.0cmで外に膨らむ形状を呈し、淡黄色の灰釉が掛かる。

擂鉢（15～19）　16は無釉焼締陶器で、いわゆる備前系擂鉢である。他は暗赤褐色の鉄釉（錆釉）が掛かる瀬戸・美濃系陶器とみられる。一個体復元できたものはないが、16の口径は31.4cm、櫛目は16・19が内面ほぼ全面に密に施され、17・18は密度が粗である。17・18は17世紀後半から18世紀前半、16は18世紀後半の所産とみられる。(2)

壺　小壺の小破片が３個体（鉄釉２、無釉焼締１）出土しているが、いずれも小片で実測できたものはない。

徳利（12・13）　12・13ともに陶器である。12は緑色の灰釉が垂れ、13は灰色の灰釉が掛かる。実測できなかったものには他に陶器12個体、磁器２個体あり、後者には赤絵のものと蛸唐草文の呉須絵が染付けされる18世紀後半の肥前産と考えられるものがある。(3)

香炉（14）　口径10cm、緑色の灰釉が外面全面に掛かる陶器である。

土器（第117図、第１表、図版73）

かわらけ（20・21）　20は口径9.7cm、器高2.0cmで、21は口径7.4cm、器高1.4cmとやや小型である。他は小破片であり、口縁部の形態から少なくとも全７個体以上と考えられるが、近世遺構としては少ない数である。

焙烙（22～26）　小破片が多く、一個体復元するできたものはなく、耳部を含めて図示できたのは２個体のみである。22は推定口径約35cm、23は同約33cmである。なお、口縁部の形態の違いから13個体と推定し、実測図の他に口縁部破片の断面のみ図示（ａ～ｉ）した。

土人形（第118図、図版73－27～29）

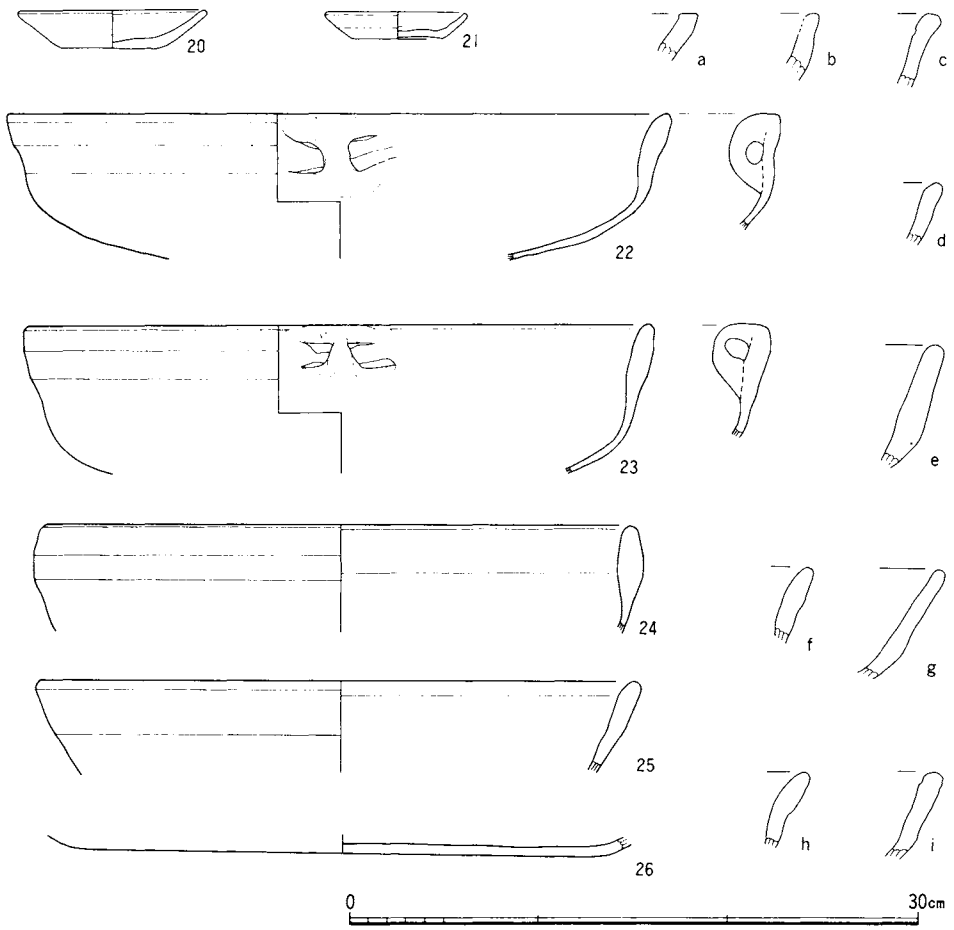
27・28は土坑墓出土で、振り袖姿の女性像とみられるが、28に首から上がない理由は不明で

ある。完形品の27の高さは7.3cmである。29は方形竪穴状遺構出土で、烏帽子を被る男性の首部分である。いずれも表裏を型押しして接合しており、内部は空洞である。

石硯（第118図、図版73－30・31）　30は掘立柱建物の区画内で出土した長さ10.0cmの長方硯で、硯面は摩滅が激しく、裏面も若干のくぼみがあり、砥石として使用された痕跡がある。31は土坑墓出土の長さ4.5cmのミニチュアで使用痕はみられない。

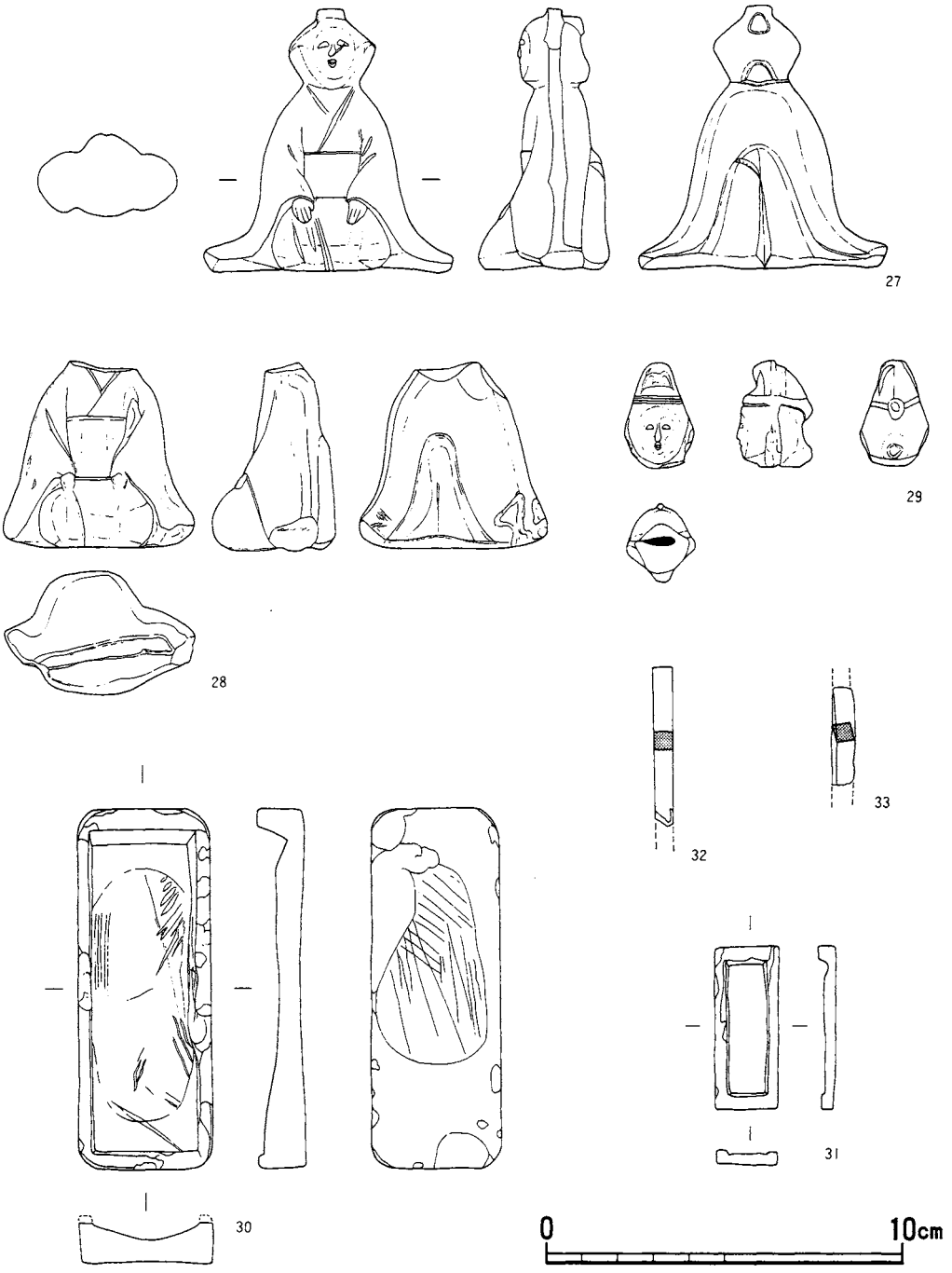
かんざし（第118図、図版73－32・33）　断面方形でべっこう質の棒状製品の破片であり、かんざしの可能性がある。

銭貨（第119・120図、第2表、図版84－34～62）　そのほとんどが墓に伴うものであり、019以外の表採品39・40及び鉄銭1枚を含めて寛永通寶（古寛永5枚、新寛永25枚、不明2枚、鉄銭8枚）が全部で40枚が出土した。緑青・鉄錆により10枚が不明であるが、判別できたものも合わせて波銭などの幕末のものはまったくなく、初鋳年の下限は18世紀前半までである。(4)火葬墓からの出土は36（初鋳年1637年）、45（1708年）、47（1726年）、48・49（1728年）、53～55（1738年）、59・60（1739年）、61（1740年）及び鉄銭1枚の計12枚であり、1枚を除いては18世紀前

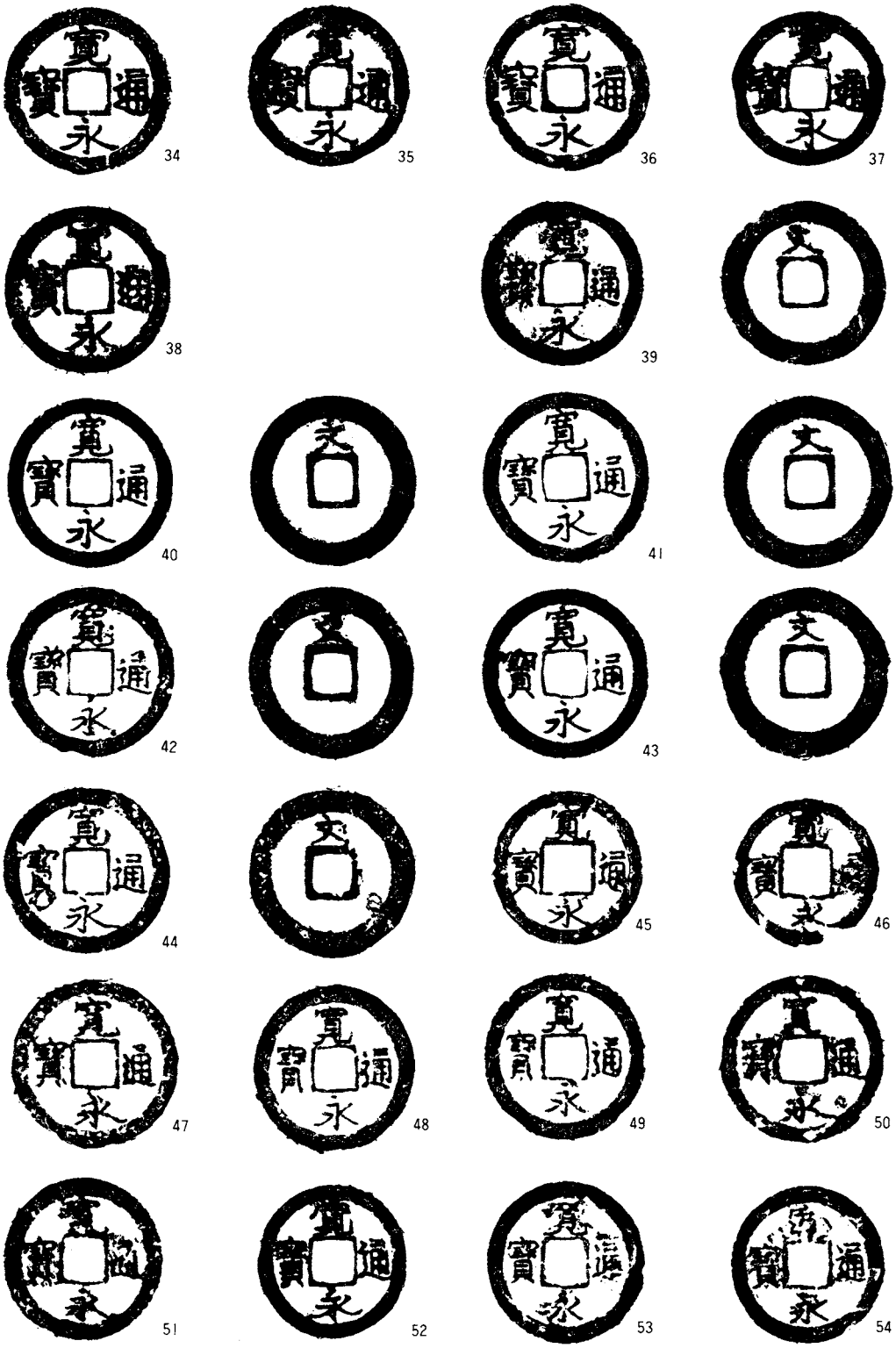


第117図　近世遺構群019出土土器(S＝1/4)

半のものであることから、この火葬墓が18世紀後半に造られたことが推測される。しかし、この火葬墓の被葬者と同一人物の骨が埋葬される土坑墓から出土した41～44の4枚の初鋳年が1668年と隔たりがあることの理由については不明である。また、土坑墓からの出土は35（1636年）、50・51（1736年）、62（1740年）であり、これも18世紀後半の墓と考えられる。



第118図　近世遺構群019出土土人形・硯ほか(S＝½)



第119図　近世遺構群019出土銭貨 (1) (S=1/1)

銅製品（キセル他）（第121図、図版74－78・75－63～77・79～94）

キセルは火皿から雁首部18点、吸い口部10点が出土し、少なくとも18個体が数えられる。なお、接合品および明らかにセットと考えられるものは３点である。雁首は69以外は脂返しの彎曲が小さく、首部が火皿から比較的急にとりつく形式であり、江戸時代中～後期に比定されるものである。(5)一方69は脂返しの彎曲が大きいが、火皿と首部の接合部に補強帯が付かないもので、江戸時代中期に比定される。また、91～92は羅宇である。

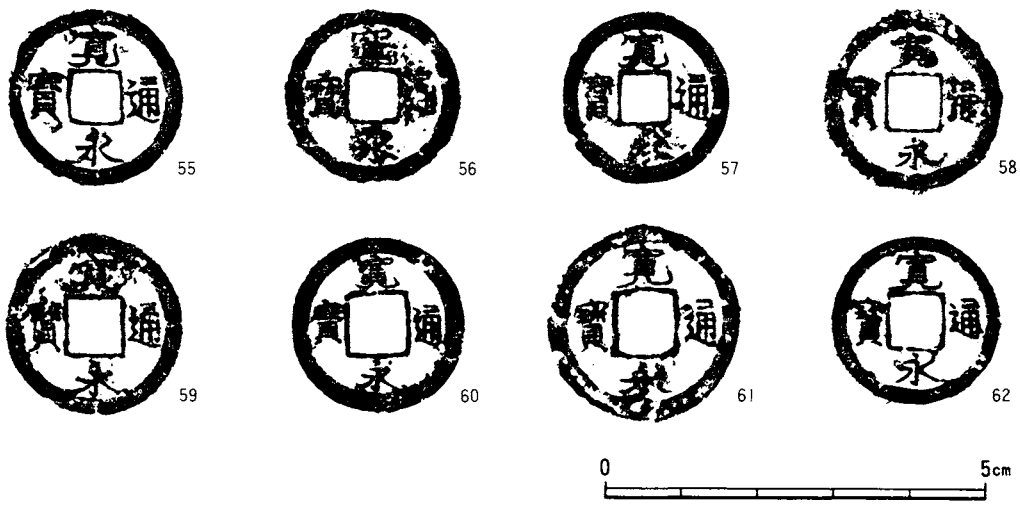
そのほかは、78が火皿がつぶされたものであり雁首銭とみられる。また、93は結び目がある針金状製品で、94は釣り針状を呈する用途不明品である。

鉄製品（釘他）（第122・123図、図版75－95～161）

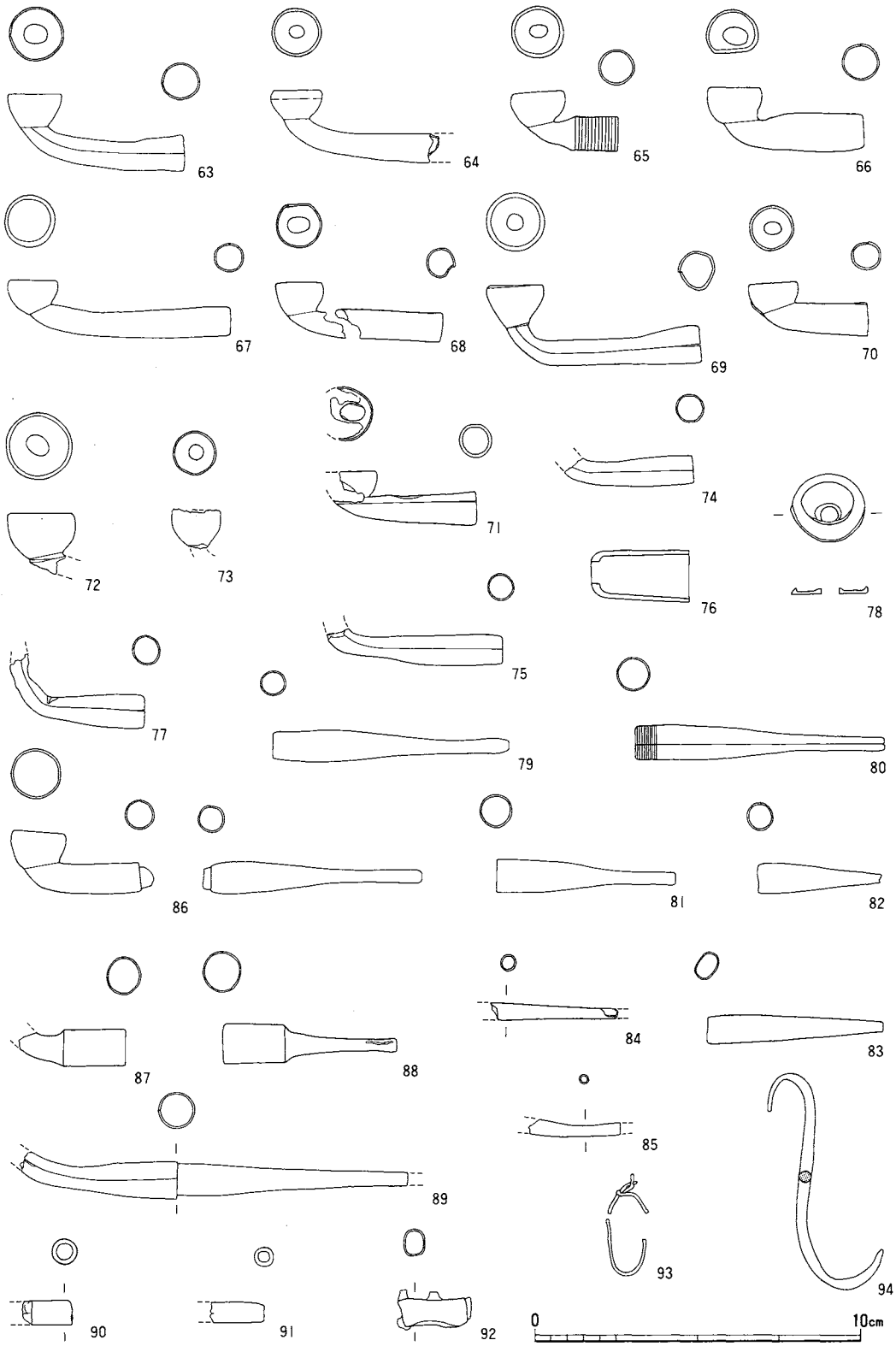
95～99が刀子で、97は柄の刃部側に付く鎺とみられる。100～148は釘で、100～132は断面がほぼ正方形でそのほとんどが折釘と考えられる。133～143は断面が長方形の平釘である。144はおそらく合釘と考えられる。145・146は断面が円の丸釘である。(6)その他は、147は用途不明帯状製品、148は用途不明棒状製品、149は針金、150は帯状の板を輪状にしたもの、151～154は薄い板状であるが不明、155～159は鉄鍋、160・161は棒状製品である。

3．まとめ

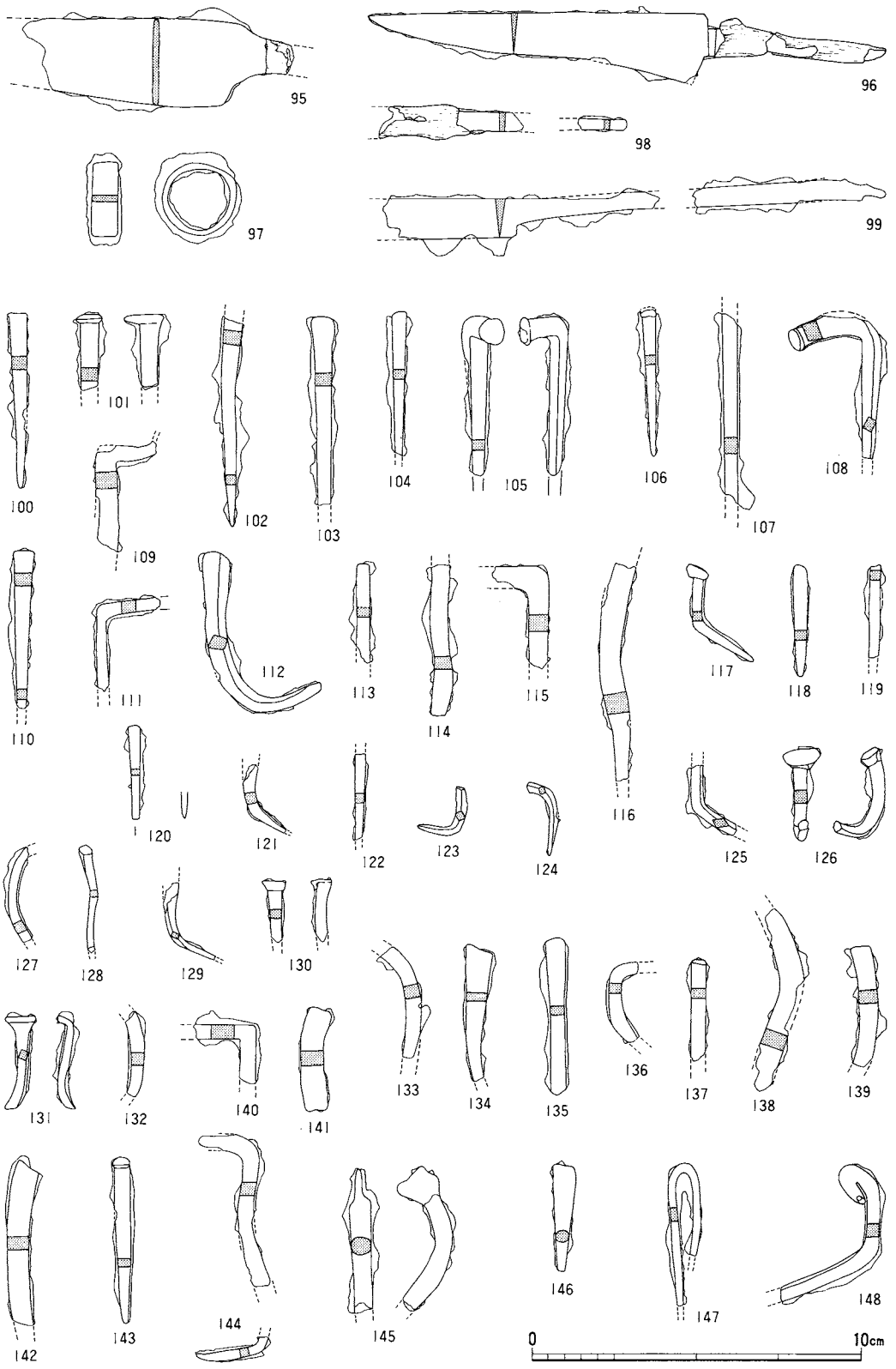
南広遺跡の近世遺構群019は、掘立柱・方形竪穴等の建物を中心に、柵列、溝、壇等を伴うばかりでなく、土葬および火葬墓も検出された。出土遺物からすべて18世紀後半に位置付けられ、建て替えもその期間内に行われていることが推定される。つまり、この近世遺構群全体は若干の時期差をもちながらも、一つの何らかの生活空間を構成していることは明らかである。ところが、一般の農家の屋敷としては母屋に対応すると思われる掘立柱建物あるいは方形竪穴建物が５×３ｍほどと小規模であり、配置も異なる。なお、遺物については陶磁器類に染付などの



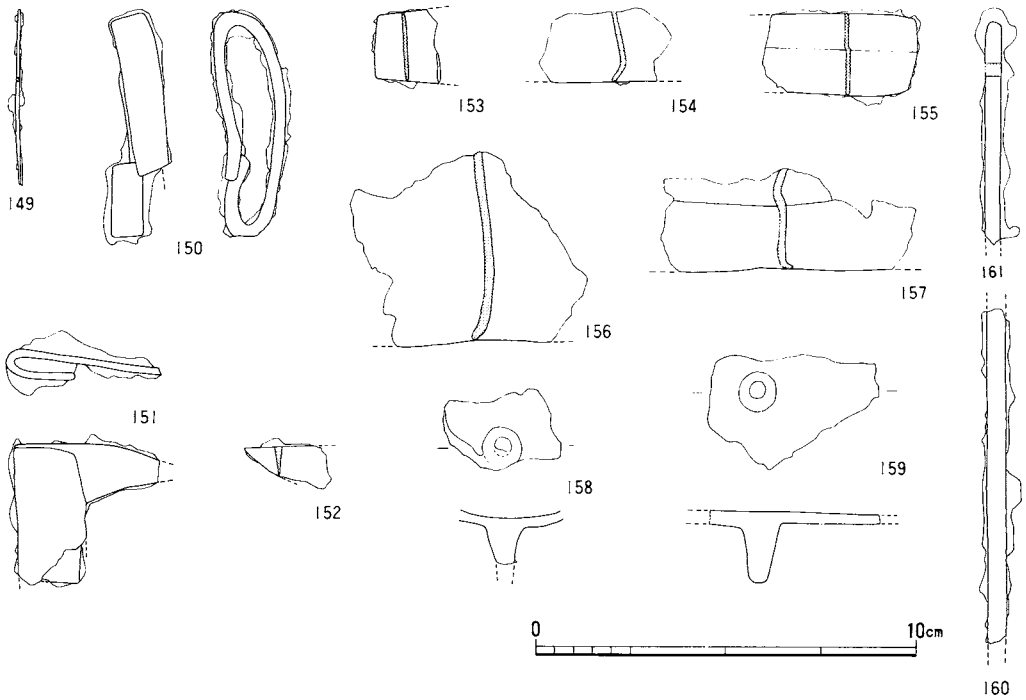
第120図　近世遺構群019出土銭貨（2）（S＝1/1）



第121図　近世遺構群019出土キセルほか(S=½)



第122図　近世遺構群019出土鉄製品 (1) (S=½)



第123図　近世遺構群019出土鉄製品 (2) (S=½)

肥前系磁器が極端に少ないこと、キセルの量が多いこと等の特徴がある。これらが、一般の稲作農家と異る生業（畑作または林業）によるものか、あるいは階級的なものを意味するのかは不明である。しかし、東京都をはじめ近世遺跡は大名屋敷や陣屋などの武士層の生活跡の調査が注目されているが、庶民の生活の痕跡としては千葉県内でも調査例が少なく、今後、遺構とともに比較・検討していく必要がある貴重な例と考えられる。

註

(1)　人骨の分析および観察所見は、技師西野雅人による。

(2)　江戸遺跡研究会第３回大会資料『江戸の陶磁器』江戸遺跡研究会(1990年)を参考とした。

(3)　大橋康二「肥前陶磁の変遷と出土分布－発掘資料を中心として－」『国内出土の肥前陶磁』佐賀県立九州陶磁文化館(1984年)を参考とした。

(4)　小川浩編『寛永通寶銭譜』(1960年)を主な鑑定資料とした。

(5)　『江戸－都立一橋高校地点発掘調査報告－』都立一橋高校内遺跡調査団(1985年)記載の、小泉　弘氏のキセルの編年を参考とした。

(6)　金箱文夫「近世の釘」『物質文化』43　物質文化研究会(1984年)を参考とした。

第1表　近世遺構群019出土器類個体分類表

機種	種類	釉　ほか	破片数（%）	個体数（%）	種類別数（%）	器種別数（%）
碗	陶器	灰　釉	78（14.8）	51（29.9）	57（33.3）	90（52.6）
		灰釉鉄釉掛分	24（ 4.6）	4（ 2.3）		
		鉄　釉	5（ 0.9）	2（ 1.2）		
	磁器	染　付	51（ 9.7）	33（19.2）	33（19.3）	
皿	土器	（かわらけ）	58（11.8）	7（ 4.1）	7（ 4.1）	18（10.5）
	陶器	灰　釉	1（ 0.2）	1（ 0.6）	9（ 5.3）	
		鉄釉（灯明）	9（ 1.7）	8（ 4.7）		
	磁器	白　釉	2（ 0.4）	2（ 1.2）	2（ 1.2）	
鉢	陶器	灰釉平鉢	15（ 2.8）	3（ 1.8）	13（ 7.6）	13（ 7.6）
		灰　釉	16（ 3.0）	9（ 5.3）		
		鉄　釉	1（ 0.2）	1（ 0.6）		
擂鉢	陶器	鉄　釉	32（ 3.1）	13（ 7.6）	13（ 7.6）	15（8.8）
	炻器	焼　締	3（ 0.6）	2（ 1.2）	2（ 1.2）	
鍋	土器	（焙　烙）	177（36.0）	13（ 7.6）	13（ 7.6）	13（7.6）
壺	陶器	鉄　釉	5（ 0.9）	2（ 1.2）	2（ 1.2）	3（1.8）
	炻器	焼　締	3（ 0.6）	1（ 0.6）	1（ 0.6）	
徳利	陶器	灰　釉	23（ 4.3）	13（ 7.6）	14（ 8.2）	16（ 9.4）
		鉄　釉	11（ 2.1）	1（ 0.6）		
	磁器	染　付	1（ 0.2）	1（ 0.6）	2（ 1.2）	
		赤　絵	1（ 0.2）	1（ 0.6）		
香炉	陶器	灰　釉	11（ 2.1）	3（ 1.8）	3（ 1.8）	3（ 1.8）
合　計			527(100.0)	171(100.0)	171(100.0)	171(100.0)

第２表　近世遺構群019出土銭貨計測値一覧

番号	銭種	鋳造地等	初鋳年	西暦	外縁外径	外縁内径	内郭外径	内郭内径	外縁厚	文字面厚	重量
34	寛永通寶	水戸銭	寛永12	1635	24.90	19.10	6.45	5.75	1.15	0.18	3.29
35	寛永通寶	芝銭	寛永13	1636	24.40	19.40	7.20	5.80	1.05	0.50	2.70
36	寛永通寶	岡山銭	寛永14	1637	25.05	20.50	6.80	5.85	0.99	0.49	2.34
37	寛永通寶	高田銭	寛永14	1637	23.50	17.80	6.55	5.95	1.00	0.61	2.44
38	寛永通寶	長門銭	寛永14	1637	25.00	19.90	7.75	6.50	1.03	0.55	2.62
39	寛永通寶	亀戸銭	寛永14	1668	24.80	19.70	6.60	6.15	1.20	0.64	3.08
40	寛永通寶	亀戸銭	寛永14	1668	24.90	19.35	6.65	5.95	1.25	0.50	3.13
41	寛永通寶	亀戸銭	寛永14	1668	25.20	19.80	6.70	6.15	1.15	0.43	3.09
42	寛永通寶	亀戸銭	寛永14	1668	25.10	19.80	6.60	6.10	1.21	0.63	2.88
43	寛永通寶	亀戸銭	寛永14	1668	25.00	19.70	6.90	6.10	1.26	1.54	3.27
44	寛永通寶	亀戸銭	寛永14	1668	25.15	19.50	7.05	6.15	1.20	0.54	3.03
45	寛永通寶	亀戸銭	宝永５	1708	22.75	18.10	8.20	6.80	0.95	0.69	2.17
46	寛永通寶	亀戸銭	宝永５	1708	21.55	17.00	8.25	6.75	1.02	0.78	1.93
47	寛永通寶	京都七條銭	享保11	1726	24.80	19.50	7.80	6.20	1.25	0.73	2.57
48	寛永通寶	石巻銭	享保13	1728	24.25	19.00	7.10	6.00	1.40	0.80	3.51
49	寛永通寶	石巻銭	享保13	1728	24.40	19.15	7.00	5.95	1.33	0.73	3.25
50	寛永通寶	鳥羽銭	元文元	1736	24.75	19.80	7.35	6.50	1.03	0.79	2.90
51	寛永通寶	鳥羽銭	元文元	1736	23.75	18.70	6.80	6.35	1.00	0.55	2.54
52	寛永通寶	元文日光銭	元文２	1737	22.55	17.50	7.10	6.25	1.14	0.88	2.92
53	寛永通寶	中の島銭	元文３	1738	27.65	18.40	7.20	6.20	1.08	0.98	2.32
54	寛永通寶	中の島銭	元文３	1738	23.00	17.85	7.30	6.15	1.20	0.93	2.92
55	寛永通寶	深川十万坪銭	元文４	1739	22.70	18.40	6.50	6.30	1.05	0.65	2.12
56	寛永通寶	深川十万坪銭	元文４	1739	22.93	18.40	6.90	6.20	0.97	0.75	2.38
57	寛永通寶	元文十万坪銭	元文４	1739	22.50	16.90	6.90	6.00	1.21	0.95	2.01
58	寛永通寶	元文十万坪銭	元文４	1739	23.10	18.50	7.20	6.60	1.15	0.80	1.98
59	寛永通寶	元文十万坪銭	元文４	1739	23.25	18.60	7.50	6.45	1.23	0.91	2.62
60	寛永通寶	元文藤沢銭	元文４	1739	22.80	17.80	8.40	7.30	1.00	0.62	2.14
61	寛永通寶	小梅銭	元文５	1740	25.65		9.90	7.25		0.98	2.78
62	寛永通寶	小梅銭	元文５	1740	21.60	18.20	7.80	6.85			1.84
	寛永通寶	未勘銭か	元文５	1740	23.55	18.30	7.00	6.50	1.00	0.80	2.38
	寛永通寶	緑青により不明									2.02
	寛永通寶	緑青により不明									2.52
	寛永通寶	鉄錆により不明									2.60
	寛永通寶	鉄錆により不明									2.28
	寛永通寶	鉄錆により不明									3.04
	寛永通寶	鉄錆により不明									1.17
	寛永通寶	鉄錆により不明									3.06
	寛永通寶	鉄錆により不明									3.62
	寛永通寶	鉄錆により不明									2.89
	寛永通寶	鉄錆により不明									3.72

第4節　そのほかの遺構

1．時期不明の土坑

年代不詳の遺構として土坑4基が検出された。いずれの遺構からも遺物が出土せず、年代を想定することができなかった。土坑の性格は不明である。

土坑007（第124図）

位置　タ6グリッド。調査区東側、台地縁辺の調査区境界域に位置する。

形状・規模　径1.4mのほぼ円形を示す。

土坑049（第124図）

位置　ワ9グリッド。調査区中央、台地斜面に位置する。

形状・規模　縄文時代の陥し穴の形状に類似している。しかし、その規模は通例の陥し穴と比較して小さい。上辺の長軸は2.7m、短軸は1.1mである。深さは約0.6mである。

土坑052（第124図）

位置　ヨ8グリッド。調査区中央東寄り、台地斜面に位置する。

形状・規模　楕円形に近い小さい円形状のピットである。径は約1mである。深さは0.3mである。

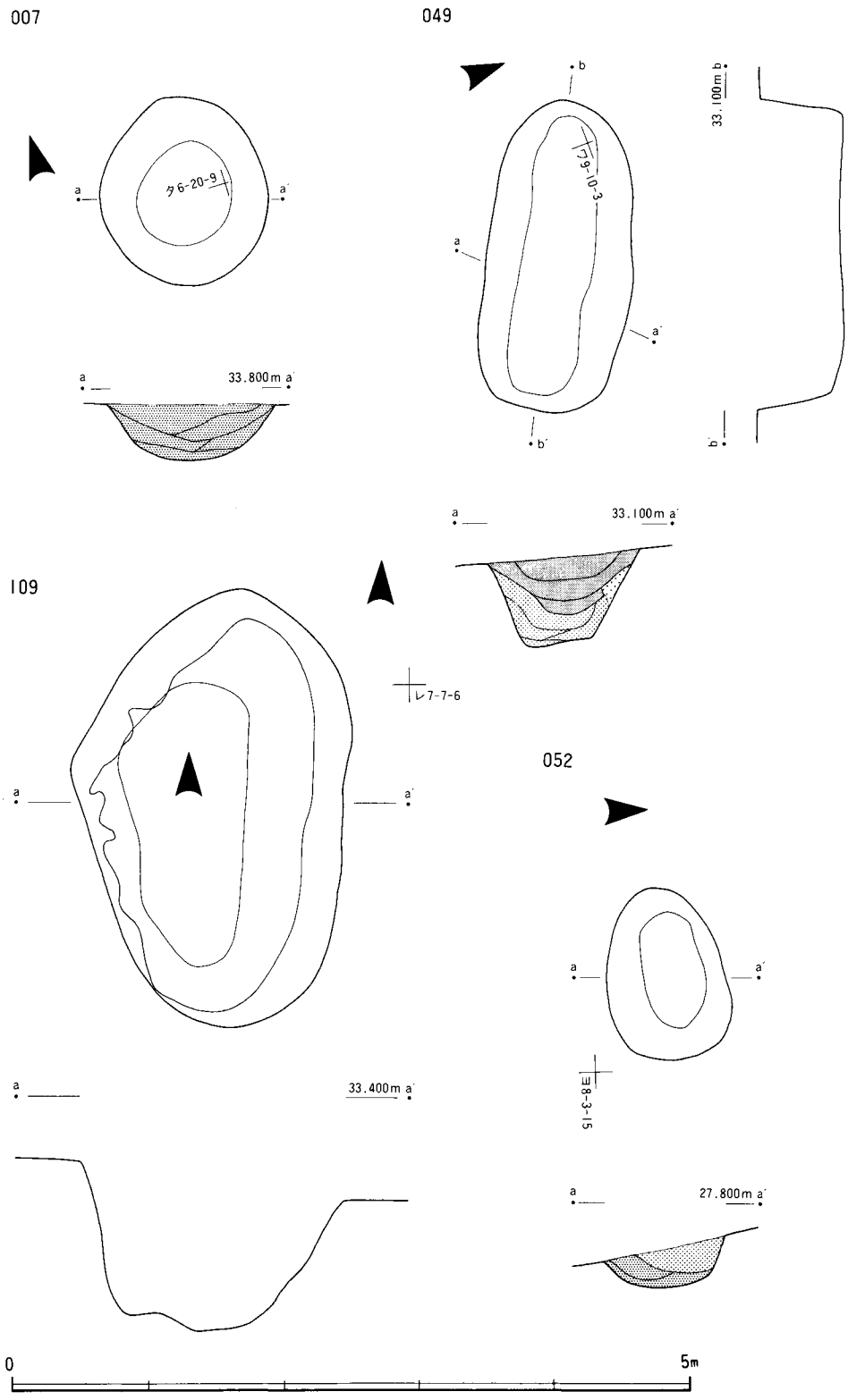
土坑109（第124図）

位置　レ7グリッド。調査区東側、台地斜面に位置する。溝005の南部から検出された。

形状・規模　南北に長い楕円形を示す。上辺の長軸は3.2m、短軸は2.0mである。深さは1mである。土坑墓の可能性も考えられる。

2．小鍛冶関連

本遺跡内では小鍛冶に関連する遺構を検出することはできなかった。また、竪穴住居内においても、それに付随するような施設の検出もなかった。羽口や炉壁体の破片なども含めて317点が出土し、鉄滓の総重量は3,981.776gを計る。出土状況は竪穴住居などの埋土中から出土するものがほとんどで、特に竪穴住居032の埋土上層中から全体の70%以上の遺物が出土している。そのほかも竪穴住居033・020、近世遺構群019の埋土中からで、限られた範囲内に集中している。これらの遺物はすべて小鍛冶の作業に伴うもので、製錬作業に伴うと考えられる遺物はまったく出土していない。このことから、本遺跡ではその製錬作業に続く鍛冶作業が行われていたも



第124図　土坑007・049・052・109

のと考えられる。

鍛冶作業は、その作業内容から、1．精錬鍛冶→2．鍛錬鍛冶A（一次鍛造）→3．鍛錬鍛冶B（二次鍛造）の工程に分けることができる。ここで確認の意味も含め、各工程の内容とそれに伴う鉄滓などの特徴の概略を記しておきたい。

1．精錬鍛冶　製錬作業により得られた鉄塊や、破損した製品などを鋳潰して、原材料を作り出す作業工程。この段階での椀形滓は、滓の目が細かく、比重が重く、ずっしりした感じが特徴である。また、作業中に素材が滓のなかに落ち込んでしまった含鉄椀形滓が存在する。

2．鍛錬鍛冶A（一次鍛造）　1の作業で作り出された材料をもとに、鉄鋌等の棒状の素材を作り出す作業工程。この段階での椀形滓は、若干粘土質が含まれ、比較的細かい凹凸がみられる。発泡は細かい。1の段階のものと比べ、比重は低く、重量感も軽く感じられる。また、この段階でも含鉄椀形滓が存在する。鍛造剝片や粒状滓はこの段階以降の作業中に生じる。なお、この段階の鍛造剝片は、次の段階のものと比べて厚い。

3．鍛錬鍛冶B（二次鍛造）　2の作業で作り出された鉄鋌等の棒状品を製品に作り上げる作業工程。椀形滓は粘土質が多く、凹凸は小さいが、流動状態は顕著で、非常に軽い。鍛造剝片は2のものと比べより薄い。

先に述べたように、鍛冶に関係する遺構や施設は検出できなかったので、本遺跡内での具体的な作業内容について復元することは困難であり、また、遺構と遺物とを関連づけて検討することはできない。そのため出土したすべての鉄滓を、それぞれの工程別に、正確に分類することは非常に難しい作業であるが、上に記した特徴をもとに分類したのが第3表に示したものである。この表とおもだった遺物の様相から、本遺跡の特徴として挙げられる点を述べていきたい。

作業工程的には、3段階すべての作業工程が行われていたことは確実であり、そのなかで、2番目の鍛造鍛冶Aによって生じた椀形滓が多くみられる。鍛造剝片の点数が非常に少ないが、これらは遺構の発掘作業中に検出したものであり、検出エラーの確率が高いことを考慮する必要がある。これらの遺物の大部分は、竪穴住居032の埋土上層から出土したものであるが、竪穴住居内には鍛錬鍛冶に関係するような施設はなく、竪穴住居に直接伴うものではない。遺物が竪穴住居032を中心とした範囲に集中していることから、その北側の調査区域外に、関連する遺構が存在しているものと考えられる。そして、竪穴住居032が完全に埋まり切らない時点に、その窪みの中に、これらの遺物を投棄したものと思われる。この投棄された遺物のなかに鍛造剝片などが含まれていることから、鍛錬鍛冶の作業によって生じた滓を、床面上のものまで含めて、比較的きれいにまとめて捨てたことがうかがえる。椀形滓の大きさから、鍛冶炉は比較的小形であり、炉壁が融着するような高温による作業も行われていたとみることができる。

遺物（第125図、図版69・70、第３表）

精錬鍛冶滓（図版69－１、２）

１は長軸6.65cm、短軸4.4cm、重さ73.54ｇを計る。断面は椀形で、一側面を除いて破面がみられ、青銅色の滓が厚い。気孔の密度はあまり高くない。表面は右側に赤黒い錆がみられ、磁力も比較的強く、鉄塊の様相を示す。裏面は滴下状で、暗灰色の炉材粘土が融着する。

２は長軸5.47cm、短軸4.23cm、重さ51.51ｇを計る。断面は椀形で、一側面を除いて破面がみられ、比較的大きい不定形な気孔がみられる。表面の色調は青黒く、右側に錆色の粘土粒が付着する。左側はやや赤黒く、破面は光沢をもち、磁力が強い。凹凸はさほど大きくなく、木炭痕がみられる。裏面は滴下状で、青灰色の炉壁体が融着する。

含鉄椀形滓（図版69－３）

長軸9.73cm、短軸8.55cm、重さ294.42ｇを計る。断面は椀形で、破面は４辺ともみられるが、下部を除いて比較的小さい。表面の色調は青黒く、凹凸はあまり大きくなく、気孔もほとんどみられない。気孔は破面でみる限りでは、比較的小さく、不定形である。木炭痕がみられる。下部の破面に接した部分は錆で赤黒く変色しており、磁力も強く、鉄塊の様相を示す。破面はおそらく、この部分の鉄塊を取り出そうとしたさいのものと思われる。裏面は、灰色の炉底壁材の粘土が融着する。

鍛錬鍛冶滓Ａ（図版69－４～７）

すべて椀形滓である。４は長軸6.75cm、短軸6.34cm、重さ107.24ｇを計る。表面の色調は青みがかった黒色であるが、褐色の粘土粒が融着し、一部に茶褐色の錆色を発している。凹凸はあまり大きくなく、ややザラつく感じである。４辺とも破面がみられるが、上部と右側は破面が小さく、原形に近いものと思われる。下部の破面には大きな木炭痕がみられる。気孔はやや大きく、不定形である。裏面は、灰色の炉底壁材の粘土が融着する。

５は長軸7.0cm、短軸6.2cm、重さ115.22ｇを計る。表面の色調は錆色である。４辺すべてに破面がみられ、気孔は大小あり、全体に長方形である。炉壁材の粘土が一部に融着する。裏面の色調は青みがかった黒色で、滴下状である。木炭痕は表裏ともみられ、裏面は著しい。

６は長軸6.65cm、短軸5.35cm、重さ94.24ｇを計る。表面の色調は青黒く、凹凸は少なく、ツルッとした感じである。下部に大きな破面があり、比較的丸に近い、大小の気孔がみられる。一部に錆がみられる。裏面の色調は青銅色で、凹凸が大きく、1.5cm以上の木炭痕がみられる。

７は長軸6.7cm、短軸4.95cm、重さ32.25ｇを計る。平面は台形で、厚さの薄い滓である。４辺すべてに破面がみられる。表裏面とも色調は茶褐色で、木炭痕がみられ、裏面には1.5cm以上のものがみられる。表面の下部には赤黒い錆があり、磁力が比較的強く、鉄塊の様相を示す。気孔は小さく、あまり多くみられない。裏面は滴下状で、炉底壁材の粘土が融着する。

鍛錬鍛冶滓B（図版70－８）

椀形滓で、長軸7.5cm、短軸6.8cm、重さ64.37ｇを計る。上部と左側の一部に破面がみられるが、ほぼ原形をとどめていると思われる。表面の色調は上部がやや青みがかった黒色で、下部の一部に茶褐色の錆がみられる。表面は凹凸が著しく、木炭痕がみられ、裏面まで貫通しているものもある。気孔は小さく、不定形である。裏面は暗灰色の炉底壁材の粘土が融着する。

二段形椀形滓（図版70－９・10）

９は含鉄椀形滓で、長軸9.38cm、短軸7.5cm、重さ224.18ｇを計る。断面は椀形で、一部にわずかに破面がみられるが、ほぼ原形をとどめていると思われる。色調は表裏面とも青黒く、全体に錆色の粘土粒が融着する。表面は細かな凹凸が多く、左側に大きな滓の塊がみられ、中央部とやや左側に錆と赤黒く変色した部分がみられる。木炭痕は裏面に多くみられ、1.5cm以上のものもある。裏面は滴下状で、左側には表面と同様に錆と赤黒い部分がみられ、磁力も強く、鉄塊の様相を示す。精錬あるいは鍛錬中に、滓のなかに鉄塊が落ち込んだものと思われる。

10は長軸5.2cm、短軸4.86cm、重さ47.73ｇを計る。右側を除いて破面がみられる。色調は青黒く、錆色の粘土粒が融着する。表面はいずれも凹凸がみられるが、下部の滓は凹凸が少ない。木炭痕は表裏面に残る。気孔は小さいが、破面には大きいものもみられる。裏面は凹凸があまりなく、ツルッとした感じである。

鍛冶鉄塊（図版70－11～13）

11は長軸2.25cm、短軸2.09cm、重さ11.28ｇを計る。形状は表裏面がやや平坦な粒状である。色調は赤黒く、錆色の粘土粒が融着する。錆膨れによる亀裂が一条はしる。

12は長軸3.24cm、短軸2.12cm、重さ12.42ｇを計る。形状はやや棒状である。色調は全体的に錆色の粘土粒が融着するが、中央部に赤黒い部分があり、そこを中心に大きな亀裂がはしる。

13は長軸2.62cm、短軸2.05cm、重さ7.42ｇを計る。形状は粒状で、上部に錆膨れがみられる。色調は赤黒く、部分的に錆色の粘土粒が融着する。

一次鍛造未製品（図版70－14）

長軸2.0cm、短軸1.48cm、厚さ0.65cm、重さ2.24ｇを計る。形状は比較的厚さの均一な板状である。色調は赤黒く、錆色の粘土粒が融着する。下部に錆による膨張がみられる。

鍛冶炉壁体（図版70－15～17）

いずれも色調は灰色で、滓と融着してはぎ取られたものである。

15は長軸6.85cm、短軸5.35cm、重さ41.22ｇを計る。滓の色調は青黒く、あまり光沢はない。４辺に破面があり、気孔は小さいが多い。1.5cm以上の木炭痕がみられる。裏面は滴下状。

16は長軸4.15cm、短軸3.7cm、重さ11.25ｇを計る。厚さは薄く、滓の色調は青みの強い黒色で、凹凸はあまりない。４辺に破面があり、0.4cm前後の気孔がみられる。裏面は滴下状。

17は長軸4.63cm、短軸3.55cm、重さ12.58ｇを計る。厚さは薄く、滓の色調は青黒く、光沢

はない。下部と右側の2辺に破面がみられ、小さな気孔が多い。

羽口（図版70－18～21、第125図22）

いずれも先端部の一部のみが遺存し、全体の大きさなどの分かるものはない。

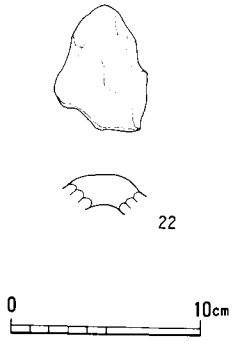
18は遺存長2.25cm、遺存幅2.89cmを計る。表面に青黒い滓が厚く融着する。内面は黒色に変色している。

19は遺存長2.52cm、遺存幅2.6cmを計る。表面に青黒い滓が融着する。小破片であるが、小形の羽口と思われる。

20は遺存長1.78cm、遺存幅1.97cmを計る。表面に黒色の滓が融着する。

21は遺存長1.88cm、遺存幅2.75cmを計る。表面に黒色の滓が融着する。

22は遺存長6.6cm、遺存幅4.9cm、厚さ1.6cmを計る。器面の色調は赤褐色であるが、表面は暗灰色に変色した部分がみられ、炉と接する部分と思われる。



第125図　小鍛冶関連遺物（羽口）

鍛造剝片

鍛造剝片は4点出土し、1点は鍛造品の角の部分から剝がれ落ちたもので、その角の部分が残っている。これは厚さ0.6㎜前後、重さ0.063ｇを計り、表面の色調は青黒く光沢をもつ。そのほかのものはいずれも色調は青黒いが、光沢をもたない。厚さ・重さはそれぞれ、1.2㎜・0.072ｇ、1.2㎜・0.11ｇ、1.6㎜・0.394ｇを計る。

粒状滓

粒状滓は1点のみで、径3.2㎜、重さ0.047ｇを計る。

第3表　出土鉄滓一覧

段　階	種　類	点　数	重　量(g)
精錬鍛冶	鍛冶滓	14	417.590
	椀形滓	4	391.570
	含鉄椀形滓	7	807.670
鍛錬鍛冶	鍛冶滓A	261	1,698.430
	鍛冶滓B	4	144.300
	椀形滓	4	348.950
	鍛冶鉄塊	4	40.930
	一次鍛造未製品	1	2.240
	鍛造剝片	4	0.639
	粒状滓	1	0.047
	残滓		129.410
小　計		304	3,981.776
	羽口	5	
	鍛冶壁体	8	116.920
総　計		317	4,098.696

第5節　遺構外出土の遺物

1．縄文時代以降

ここでは、グリッド・トレンチ出土や表面採集された遺物と竪穴住居から出土したもののうち、明らかに混入と判断した遺物について記述する。本遺跡で検出された遺構の時期に代表される古墳時代後期と歴史時代の遺物がほとんどである。

土師器（第126図1～30、図版59・64）　［土器観察表P277］

1～6は古墳時代後期に属する杯である。1～5は内外面に赤彩を施す。1は口縁部を欠損するが、椀形の杯になるものと思われる。内面はヘラナデするが、底部付近は器面が荒れる。体部内面は赤彩されない。2も椀形の杯で、口縁部は外面に稜を作り外反気味に直立する。体部外面はヘラ削りの後ヘラナデで、内面はナデ。底部内外面は赤彩されない。3は須恵器杯身模倣杯である。口縁部は直立し、器壁はいったん肥厚し、口唇部端部は尖頭形である。内外面ともにナデ。4・5は須恵器杯蓋模倣杯である。4は全体に器面が荒れ、剝落が著しい。体部と口縁部の境の稜は曖昧で、口縁部は緩やかに外反する。底部内外面は赤彩されない。5は体部が浅く、口縁部との境に稜を作り、口縁部が外反し、口唇部は若干内彎気味になる。体部外面はヘラ削りで、内面はヘラナデ。底部内外面は赤彩されない。6は須恵器杯身模倣杯である。体部と口縁部の境に明瞭な稜を作り、口縁部は内傾する。内外面を黒色処理するが、遺存状態は悪い。体部外面はヘラ削りで、その他はナデ。

7・8は無頸壺である。7は全体に器面が荒れ、剝落が著しい。口縁部は外反気味に内傾する。内外面に赤彩を施す。8は小形で、胴部を強く張り、口縁部は直立する。内外面ともにヘラ磨きで、胴部内面を除いて赤彩を施す。

9～19は歴史時代に属する杯である。9は体部はやや内彎気味に開き、口唇部は外反する。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。10は体部は内彎気味に開き、口縁部は外反する。底部は回転糸切り離しの後、周縁部を一部手持ちヘラ削り調整。体部外面の調整は下半部を手持ちヘラ削り。11は体部は直線的に開き、口縁部はわずかに外反する。内面の体部下半から底部の器壁は剝落している。底部は手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削りで、強く面取りをする。12は底部と体部の境をやや丸く仕上げる。底部は回転糸切り離しの後、周縁部を手持ちヘラ削り調整。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削りで、面取りをする。13～17は墨書がみられる杯である。13は体部内外面にロクロ痕を残す。体部は内彎気味に開き、口縁部は外反する。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。底部外面に「子」？と墨書する。14は体部は内彎気味に開き、口唇部はわずかに外反する。底部は回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は中位

まで回転ヘラ削り。底部外面に墨書するが、判読できない。15は底部と体部の境をやや丸く仕上げる。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。底部外面に「日」の字と思われる「⊙」を組み合わせて「⊛」と墨書する。16は底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。体部外面に墨書するが、判読できない。17は小破片で、外面は手持ちヘラ削り調整。底部外面に墨書するが、判読できない。18・19は内面に黒色処理が施されている杯である。内面はいずれもヘラ磨き調整される。18は体部は内彎気味に開き、口縁部は外反する。底部は全面回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を回転ヘラ削り。19は底部は全面回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を回転ヘラ削りで、強く面取りをする。

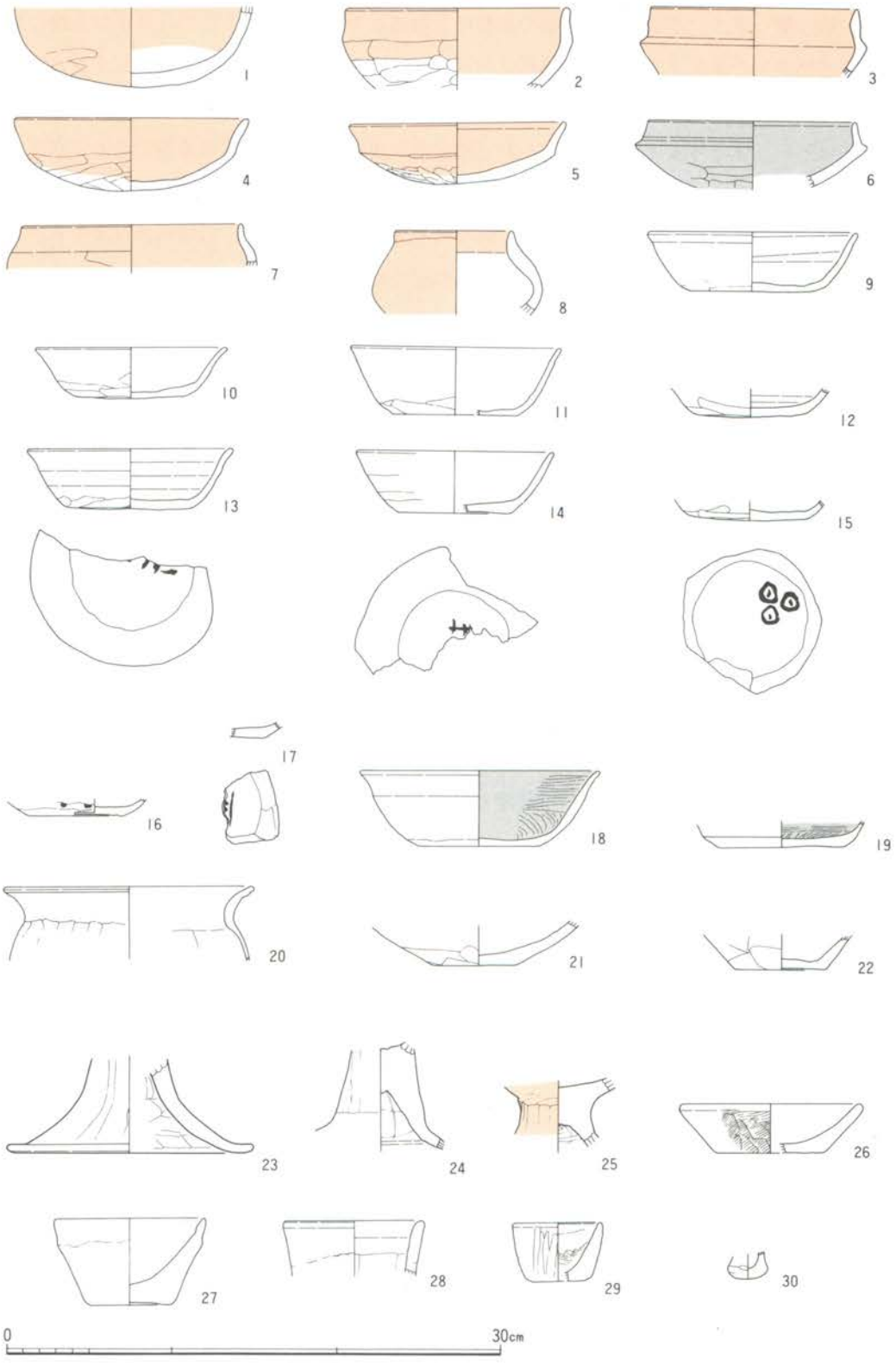
20～22は甕である。器面の調整は、いずれも胴部外面はヘラ削りで、内面はヘラナデする。20は胴部の器壁を薄く仕上げる。口縁部は外反し、口唇部を外側につまみ上げ、端部を丸く収める。21は球形の胴部をもつものと思われる。

23～25は高杯で、いずれも脚部のみが遺存する。23は脚柱部から裾部を「八」の字状に開き、裾端部は水平に開く。内外面はヘラ削りで、裾端部内外面はナデ。24の脚柱部は「ハ」の字状で、裾部は大きく開く。内外面はヘラ削りで、裾部内外面はナデ。25は外面はヘラ削りの後ヘラナデし、赤彩を施す。杯部内面に一部赤彩がみられることから、底部中央部を除いて赤彩されていたものと思われる。

26～30は小型土器である。26は皿形のもので、全体に丁寧に仕上げる。体部外面と底部は刷毛目がみられ、内面はヘラナデ。27は鉢形のものである。体部は直線的に開き、口縁部は体部外面に稜を作り、外反気味に立ち上がる。体部外面はヘラ削りで、全面ナデ調整する。28は外傾気味に立ち上がり、口唇部はわずかに外反する。体部外面に輪積み痕が残る。内外面ともナデ。29は箱形の器形で、体部下半の器壁は厚い。体部外面はヘラナデで、内面は刷毛目がみられる。底部に焼成前の「⋊」と思われるヘラ記号がみられる。30は壷を模したものと思われる。全体に丁寧に仕上げる。体部から底部の外面はヘラ磨きで、内面はナデ。底部外面には藁状の繊維の圧痕が3条みられる。

須恵器（第127図31～47、図版59）　［土器観察表P277］

すべて歴史時代に属するもので、31～42は杯である。31・32は体部は直線的に開く。底部は手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。32は体部内外面にロクロ痕を残し、常陸産と思われる。33は体部は内彎気味に開き、口縁部はわずかに外反する。口唇部は肥厚し、端部を丸く収める。体部内外面に弱いロクロ痕を残す。底部は回転ヘラ切り離しの後、全面ヘラ削り調整。体部外面は無調整。34・35は「くすべ焼成」の須恵器で、体部内外面に一部弱いロクロ痕を残す。底部はいずれも全面手持ちヘラ削り調整



第126図　遺構外出土遺物（土師器）

で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。34は体部は直線的に開く。底部中央の器壁は厚い。35は体部は内彎気味に開き、口縁部はわずかに外反する。36は体部は直線的に開く。体部内面にロクロ痕を残す。底部は全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面は無調整。37～41は還元炎焼成になりきれない須恵器である。底部は39を除いて全面手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を手持ちヘラ削り。37はやや大振りの杯である。体部は直線的に大きく開き、口縁部は外反する。口唇部は肥厚し、端部を丸く収める。38は体部内外面にロクロ痕を残す。体部は直線的に開き、口唇部は肥厚し、外反する。39は体部は直線的に開き、口唇部はわずかに外反する。体部内外面に弱いロクロ痕を残す。底部は全面回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面の調整は下端部を回転ヘラ削り。40は体部は直線的に開き、体部外面の下端部は、強く面取りをする。41は体部内外面にロクロ痕を残す。底部は手持ちヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。体部外面は無調整。底部外面に焼成前の「×」のヘラ記号がみられる。

43は高台付き杯である。高台径は推定で9.7cm、高さ1cmを計る。高台の器壁は薄く、端部の内面に稜を作る。底部は全面回転ヘラ削り調整で、切り離し技法は不明。高台部はナデ調整。

44・45は蓋で、いずれも宝珠形のつまみを付ける。44は端部が強く内傾し、高さをもつ。短頸壷の蓋と思われる。天井部外面は回転ヘラ削り調整。45は常陸産と思われる。天井部外面の調整は回転ヘラ削り調整であるが、全体的に器面の摩耗が著しい。

46・47は甕の胴部破片で、外面に同心円叩きを施すものである。いずれも胎土中に含まれる雲母粒・石英粒は少量であるが、常陸産と思われる。

玉類（第127図48～51、図版71）　［玉類観察表P265］

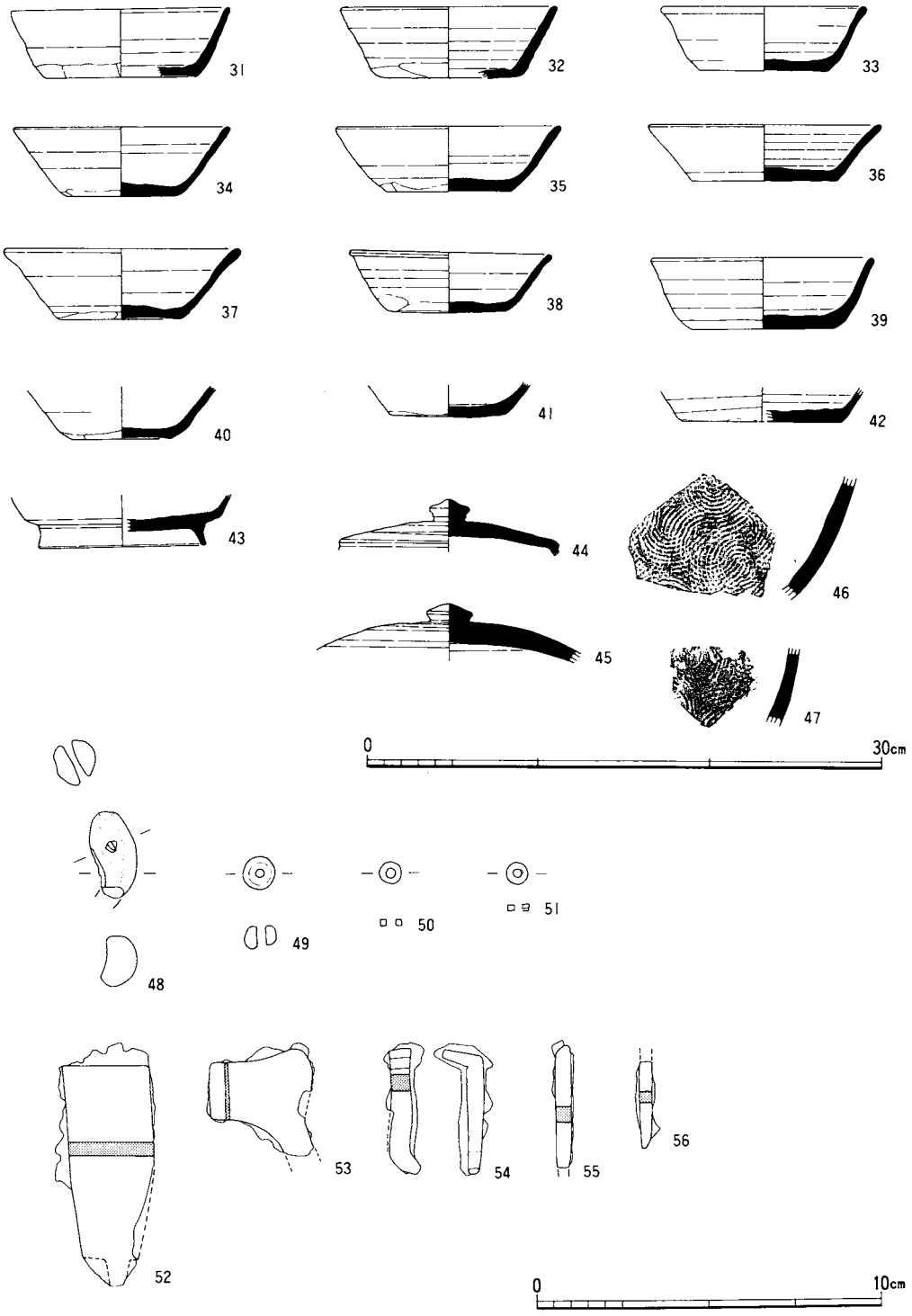
48は土製勾玉で、尾部を欠損する。色調は赤褐色で、表面を平滑に仕上げるが、光沢はみられない。竪穴住居001出土の勾玉と類似している。

49は滑石製の丸玉である。全面よく研磨し、丁寧に仕上げる。

50・51は滑石製の臼玉である。上下の面を平坦に仕上げているが、研磨痕は明確にはみられない。側面は研磨されず、弱い稜が残る。

鉄製品（第127図52～56）

52・53は不明鉄製品である。52は竪穴住居070出土の鉄鏃に類似しているが、刃が付いていない。下の部分は錆びのため推定である。遺存長63.5㎜、幅25.0㎜、厚さ4.0㎜、重さ34.52ｇを計る。53は遺存長31.0㎜、幅30.0㎜、厚さ1.5㎜、重さ4.67ｇを計る。54～56は釘である。54は頭部をＬ字形に折り曲げる。遺存長36.5㎜、幅5.5㎜、厚さ5.0㎜、重さ3.60ｇを計る。55は遺存長36.0㎜、幅4.5㎜、厚さ4.2㎜、重さ3.01ｇを計る。56は遺存長25.0㎜、幅3.5㎜、厚さ3.4㎜、重さ0.86ｇを計る。



第127図　遺構外出土遺物（須恵器・玉類・鉄器）

2．縄文時代

概要

縄文時代の遺構は検出されなかったが、調査区北東のタ6－25グリッドを中心とする縄文土器の分布がみられた。土器の分布範囲はタ6－25グリッドを中心に北に隣接するタ6－20グリッド、南に隣接するタ7－05グリッドにまたがり、広さ約100m²ほどであった。土器分布範囲内全体にわたって焼土の散布が見られたが、遺構らしい掘り込みは見つからなかった。出土遺物点数は263点で、ほとんどが土器であり、焼けた小さな礫をわずかに含んでいた。

そのほかに、竪穴住居および調査区全体から、縄文土器片、石鏃、石斧の破片、敲き石等が出土した。

ここでは特徴的な縄文土器破片の拓本と、実測可能な石器を図示した。実測できなかった石器として、石皿の破片が数点出土している。

土器（第128～134図、第12表）

土器包含層から、早期から晩期にわたる土器が出土した。早期、前期の土器が多く、中期、後期、晩期の土器は少なかった。この傾向は、池向遺跡を除いた佐倉第三工業団地内の縄文時代の遺跡に共通して見受けられる。縄文土器片を第Ⅰ群から第Ⅳ群までに大別し、さらに、可能な限り文様や胎土の相違から細別を行った。

第Ⅰ群土器　早期の土器
第Ⅱ群土器　前期の土器
第Ⅲ群土器　前期末葉から中期初頭の土器
第Ⅳ群土器　中期、後期、晩期の土器

第Ⅰ群土器　1～79

第1類（第128・129図1～48、図版23・24）

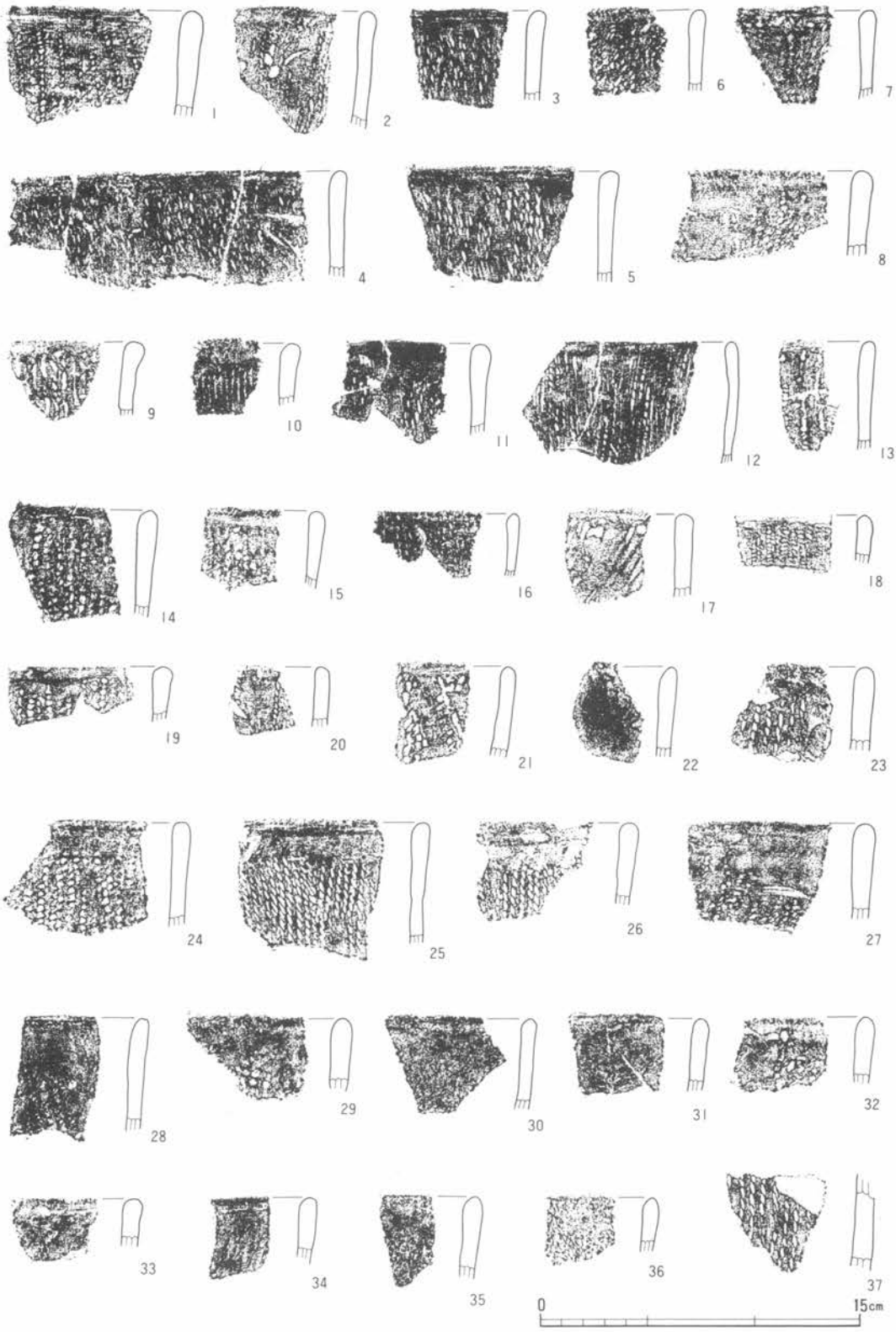
早期の撚糸文系土器である。胴部に単節縄文や撚糸を縦位に施す。撚糸は、ややまばらな密度で施されていた。48は胴部の撚糸のうえに沈線を描いている。1～48は夏島式である。

第2類（第129図49～69、図版24）

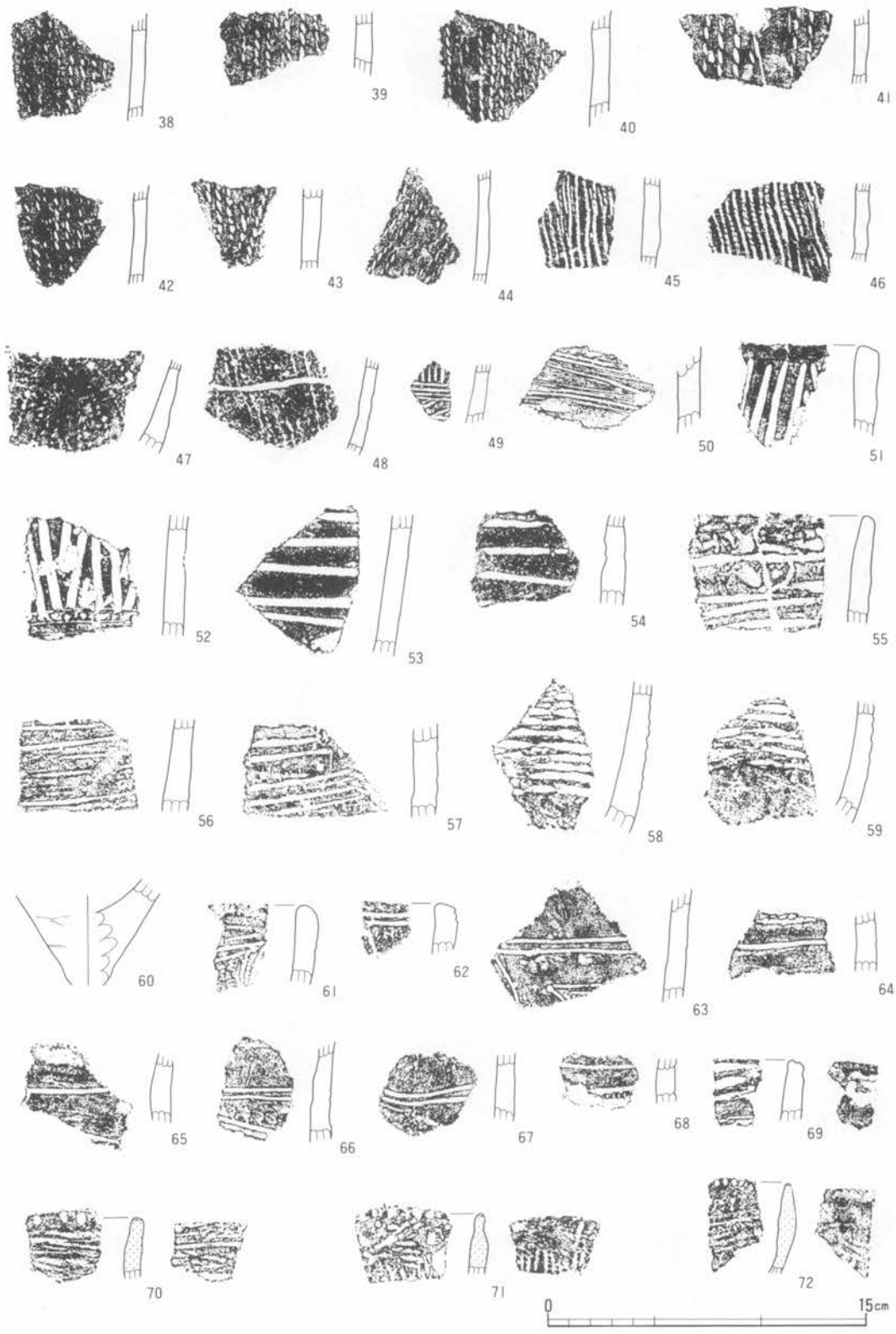
早期の沈線文系土器である。49は、細沈線による平行沈線と幾何学文からなる多段構成である。63は三角形を基本とした平行沈線で、62・65・66も同類の土器と思われる。49・50は三戸式、51～68は田戸下層式である。

第3類（第129・130図70～79、図版24・25）

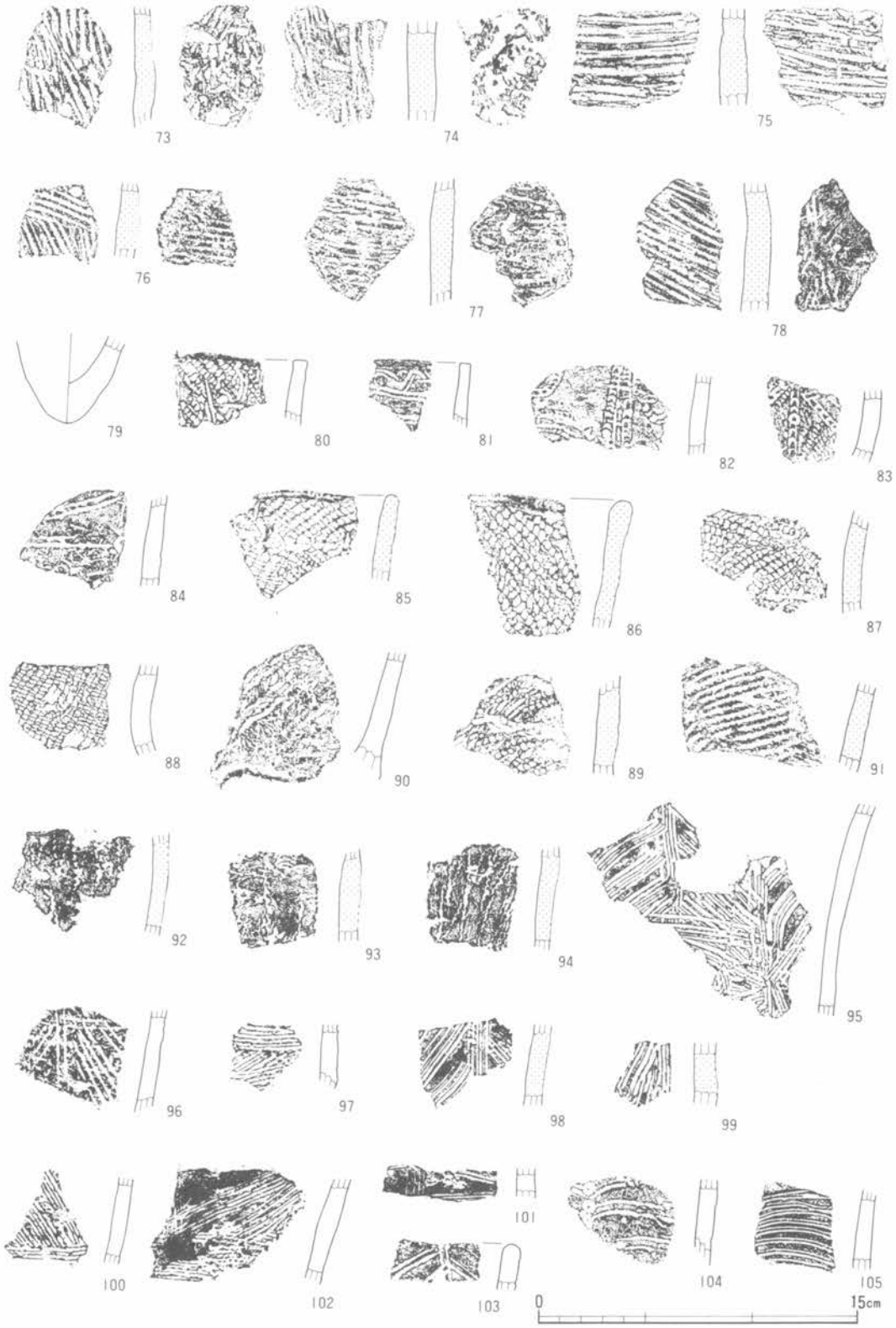
早期の条痕文系土器である。胎土に繊維を含み、茅山系の土器である。内外面ともに条痕文



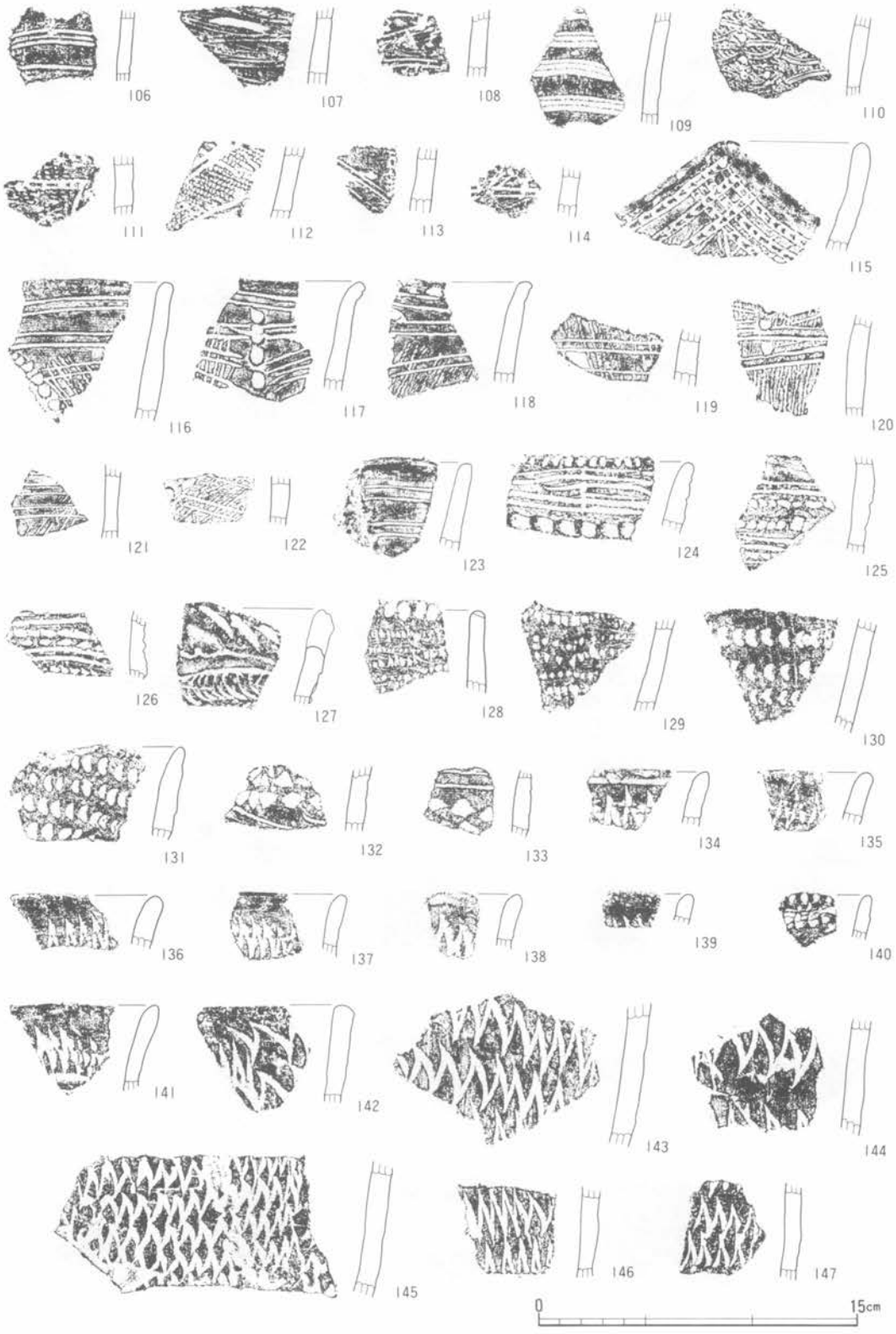
第128図　遺構外出土遺物（縄文土器１）



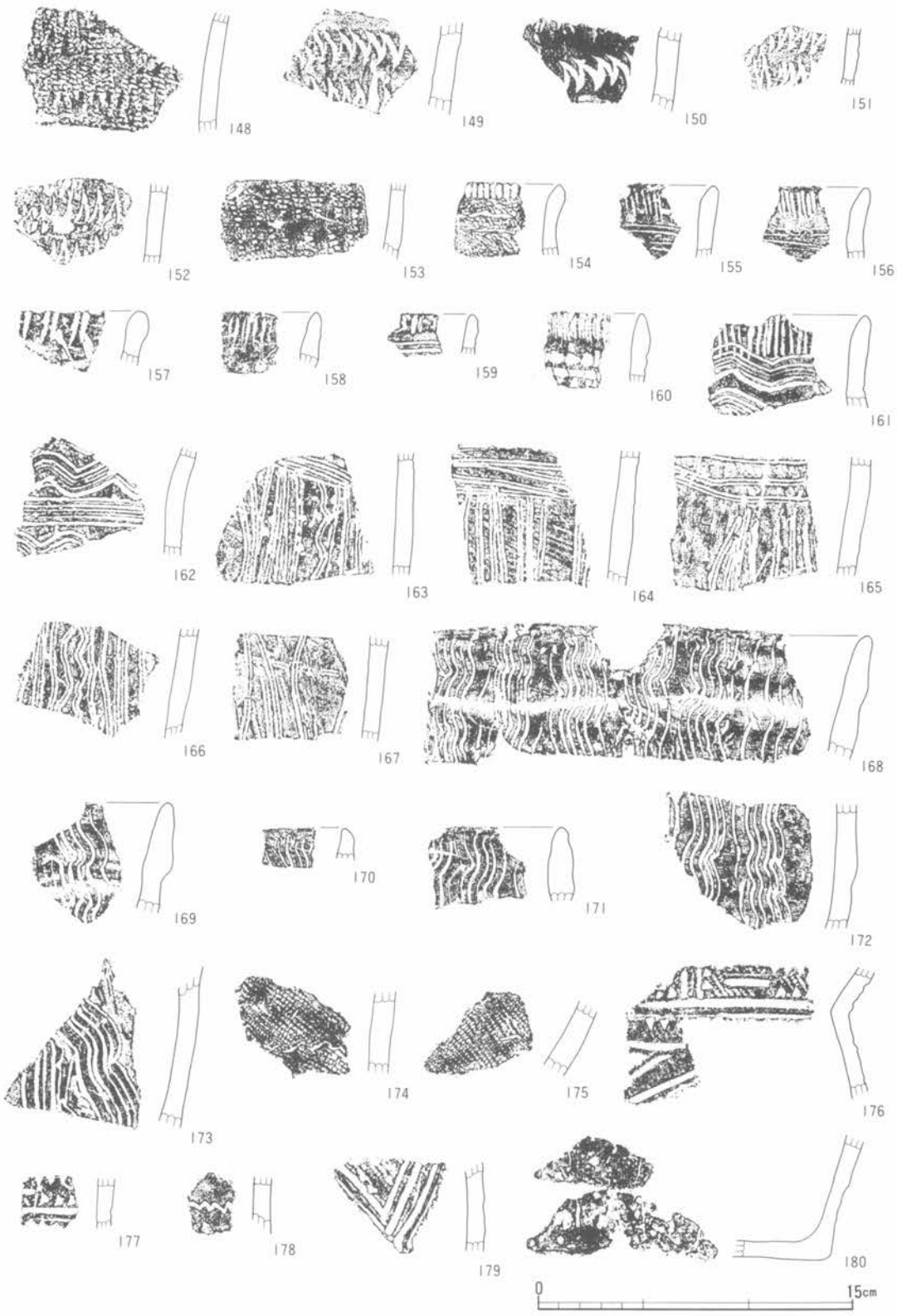
第129図　遺構外出土遺物（縄文土器２）



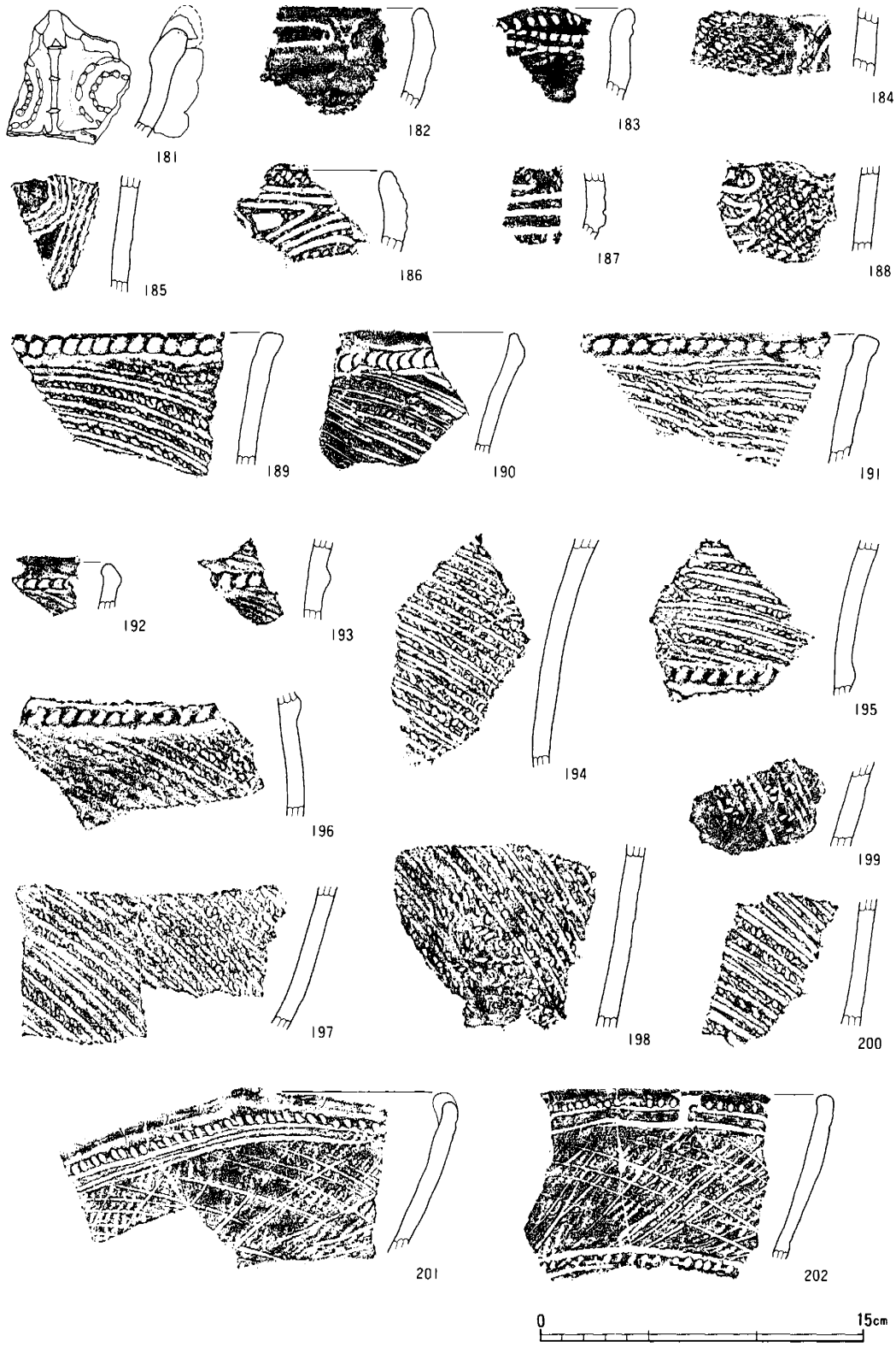
第130図　遺構外出土遺物（縄文土器３）



第131図　遺構外出土遺物（縄文土器４）



第132図　遺構外出土遺物（縄文土器５）



第133図　遺構外出土遺物（縄文土器６）

を施している。79は無文で繊維を含んでいない。田戸系の尖底部である。

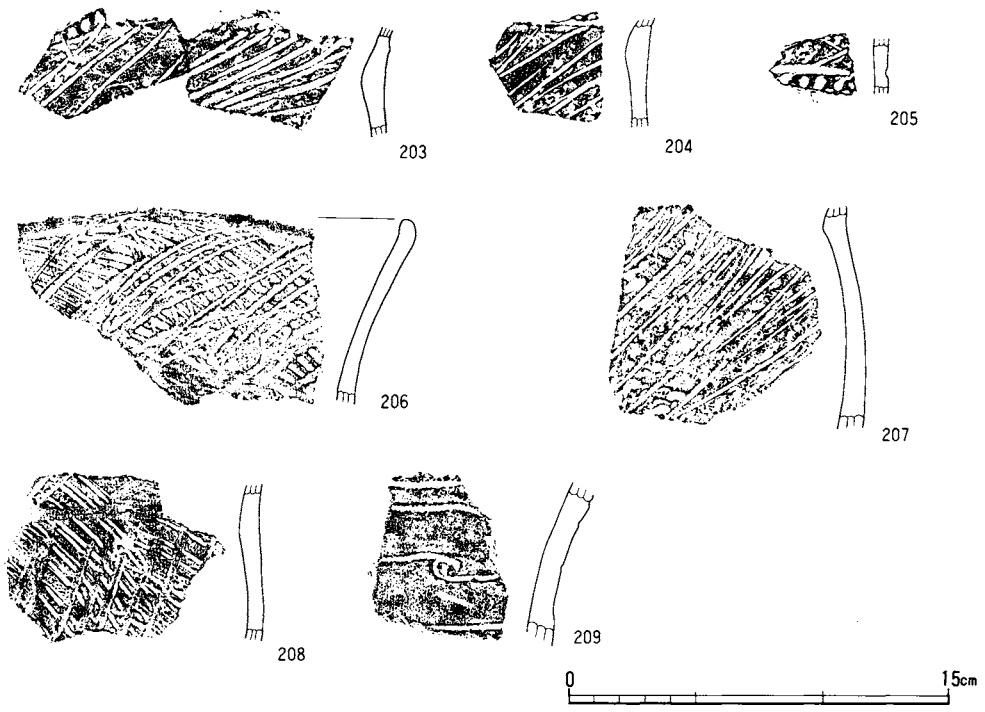
第II群土器　80～175

第1類（第130図80～91・95～102、図版25）

縄文と半截竹管文および櫛描文を基調とする土器である。80・83は、縄文の施文後に半截竹管文を描く。85・86・87・89は羽状縄文を施す。95～102は櫛描文を横位と斜位に組み合せて施文したものである。いずれも黒浜式の範疇に含まれる。

第2類（第130～132図92～94・103～173、図版25～27）

半截竹管文および貝殻腹縁文を基調とする土器である。101～109は半截竹管文を横位に、113・114は斜位に施している。110～112は縄文の施文後に、半截竹管文を施す。116は半截竹管文と刺突を組み合せた文様である。117～122は撚糸文施文後に、半截竹管文を施す。124の口縁には刺突があり、その下部に半截竹管文、指頭文が平行して施文されていた。137・138・141・142は波状貝殻文を施した口縁であり、143～153はその胴部である。154～161は口縁に縦位に半截竹管文もしくは櫛描文を描く。166～173は半截竹管文を縦位に波状、直線状に施している。92～94・115～153・163～173は浮島式、103～114は諸磯a式、154～162は興津式である。



第134図　遺構外出土遺物（縄文土器7）

第III群土器　（第132図171～180、図版27）

174・175は縄文とS字状結節文からなる下小野式土器の胴部である。176～179は沈線、三角状の刺突および縄文を組み合せた文様である。180は底部で撚糸が施文されていた。176～180は五領ヶ台式である。

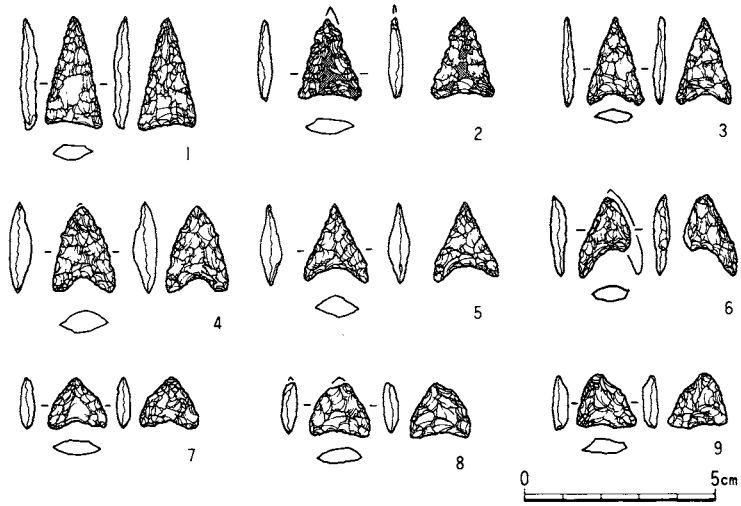
第IV群土器　（第133・134図181～209、図版28・29）

189～200は粗製深鉢で、縄文を地文にして、口縁部と頸部にひも線文を施す。斜沈線を充填する。181～185が阿玉台式、186～188が堀之内Ⅰ式、189～200が加曾利B式、201～208が加曾利B２式、209が安行３a式である。

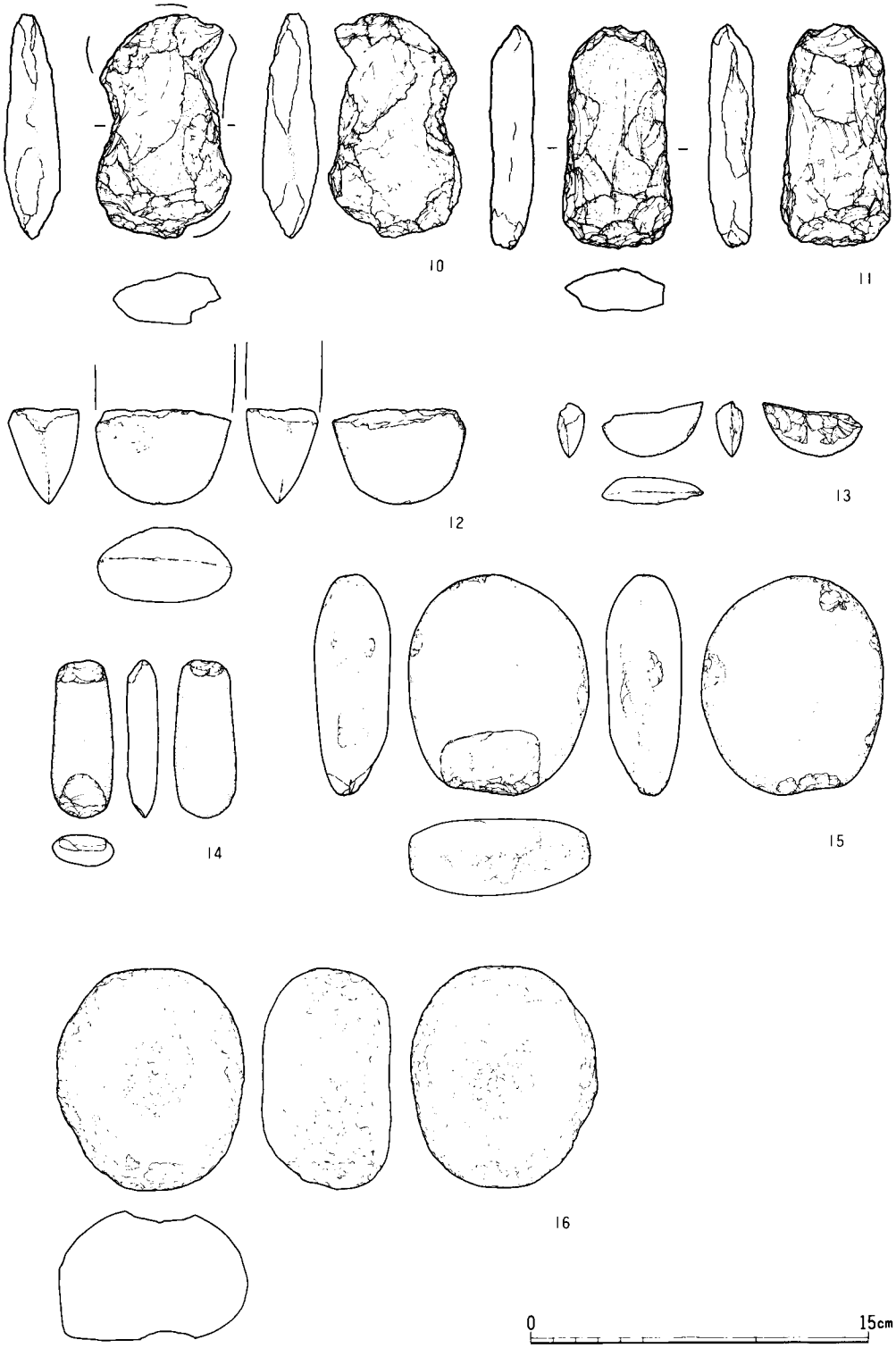
石器（第135・136図、図版29・30、第13表）

石鏃（第135図１～９）

基部に若干の抉入を有する縦長のもの（Ⅰ類・１～３）と、基部に大きく抉入を有するもの（II類・４～６）、基部に若干の抉入を有する横長のもの（III類・７～８）に分けられる。Ⅰ・III類の石鏃はともに石材が黒曜石とチャートであるのに対して、II類の石材は頁岩・安山岩・石英であり両者の間に石材の違いが認められる。９は、横長であることと、石材が黒曜石であ



第135図　遺構外出土遺物（縄文石器１）



第136図　遺構外出土遺物（縄文石器２）

ることからIII類の未成品と考えられる。また2の石鏃は先端部を欠損するが、両面ともほぼ中央に着箭による擦痕が認めらることから、この欠損は、使用によるものと考えられる。

打製石斧（第136図10・11）

10は欠損しているが分銅型を、11は短冊型を呈している。両者とも側縁部に着装による「つぶれ」が認められる。

磨製石斧（第136図12・13）

刃部だけが出土した欠損品である。12・13とも、残存する刃部形態は円刃を呈しており断面形も円身を帯びていることから、乳棒状石斧と考えられる。

礫器（第136図14）

細長い自然礫の両端に調整を施している。刃部は片面だけに剝離が施されている。

敲石・凹石（第136図15・16）

15は偏平な礫の縁辺部ほぼ全周に敲打痕を有し、一部に剝離痕が認められる。平坦な両面は磨かれており滑らかであり、敲石の他に磨石としても用いられている。

16も15とほぼ同様に縁辺部ほぼ全周に敲打痕を有し、平坦部が磨かれており滑らかであり、磨石として用いられている。平坦部のほぼ中央に敲打による窪みを有する。

磨製石斧は、早期に多い乳棒状石斧であり、本遺跡内で出土量の多い早期の縄文土器に対応できよう。しかし打製石斧は、中•後期に多い形状であり、出土した土器にあまり対応しない。縄文時代の石器については、一時期のものではなく数時期に分かれるものと考えるべきであろう。

まとめ

縄文時代の遺物群の広がりは北へ、調査区外側の台地の中央部へ延びる可能性がある。この遺物群にともなう焼土は、縄文人の生活痕跡を伝えている。同じような縄文時代の遺物群の出土は、谷をはさんだ周辺の隣接台地からも検出された。南広遺跡の東にある栗野遺跡、南にある腰巻遺跡、タルカ作遺跡、大作遺跡から出土している。タルカ作遺跡、大作遺跡、向原遺跡からは遺物群にともなう竪穴住居、炉穴、陥し穴等の遺構が検出された。しかし、栗野遺跡、腰巻遺跡では南広遺跡と同様に遺構が検出されず、遺物包含層のみ確認されただけであった。これら一連の縄文時代の遺構・遺物群は、ほぼ同じような縄文土器の構成要素をみせており、縄文人の行動パターンを広域的にとらえる際に良好な資料となるであろう。

第6節　先土器時代

1．概要

南広遺跡の先土器時代確認調査では、石器の確認されたグリッドが4か所あった（第5図）。グリッドを広げて本調査を行った結果、各々2～18点の石器を伴うブロックが確認された。

佐倉第三工業団地内の主な先土器時代遺跡として、星谷津遺跡、大作遺跡、栗野遺跡等が挙げられる。いずれも台地の中央付近に遺跡が形成されていた。南広遺跡から谷を一つ隔てた東側の栗野遺跡では、先土器時代のブロックがかなり多く存在していたが、南広遺跡では少ししかブロックは検出されなかった。南広遺跡の調査範囲は主に台地の南側、台地縁辺から斜面にかけての範囲である。地形からすると、この範囲内に先土器時代のブロックはさほど形成されなかったことも理解できる。調査区外北側の台地中央付近で、より多くのブロックが発見される可能性がある。なお、Dブロックとした地点は土層断面図のみ作成し、遺物の出土はない。

2．石器群の出土グリッド（第137～140図）

Aブロック（第137図、図版2）

南側に張り出した台地先端部の斜面に位置する。出土層位は黄褐色ローム層で、いわゆるVI層にあたる。石器の分布は、南北約1.4m、東西約3.5mの範囲に散漫に広がる。ナイフ形石器1点、使用痕を有する剥片1点、礫器1点、剥片1点の計4点が出土している。ブロック内での剥片剥離は行われていない。

Bブロック（第138図、図版2）

Aブロックの東約5mに位置する。出土層位は、VI～VII層にかけてである。石器の分布は、南北約6.7m、東西約8.3mの範囲に散漫に広がる。石核2点と剥片・砕片6点が出土している。このうち、石核と剥片1点の間に接合関係が認められておりブロック内で、剥片剥離を行っていたと考えられる。

Cブロック（第139図、図版3）

調査区中央、台地斜面に位置する。出土層位はIII～VI層にかけてである。石器の分布は、南北約2.8m、東西約4mの範囲に接近して広がる。使用痕を有する剥片2点と剥片・砕片15点が出土している。このうち剥片2点の間と、使用痕を有する剥片2点と剥片1点の間に接合関係が認められた。また、ブロックの北西に近接して、南北約4.2m、東西約4mの範囲に広がる炭化物集中地点が認められた。ブロックとその周辺で、剥片剥離を含む何等かの生活が営まれていたと考えられる。

Eブロック（第140図）

台地平坦面上に位置する。出土層位はⅦ層である。削器１点と剥片１点が出土している。

3．出土石器（第141～143図、図版22、第14表）

ナイフ形石器（第141図１）

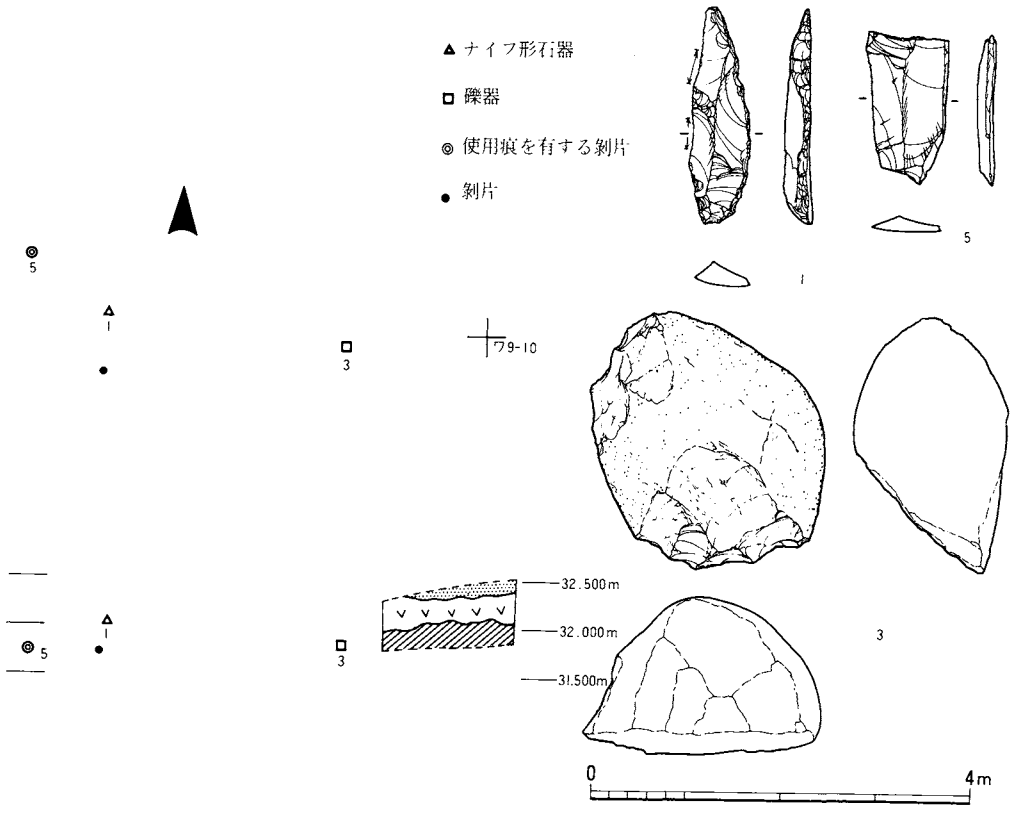
縦長剥片を素材にして、打面部周辺の両縁と一側縁全体にブランティングが施されている二側縁加工のナイフ形石器である。ブランティング面と反対側の側縁部の一部にも調整が施されているが、これは素材の背面に残る稜線を除去して刃部の形状を整えたものと考えられる。石材は頁岩であるが、Aブロックの使用痕を有する剥片とは異なり、Cブロックの接合資料各々と類似している。

削器（第141図２）

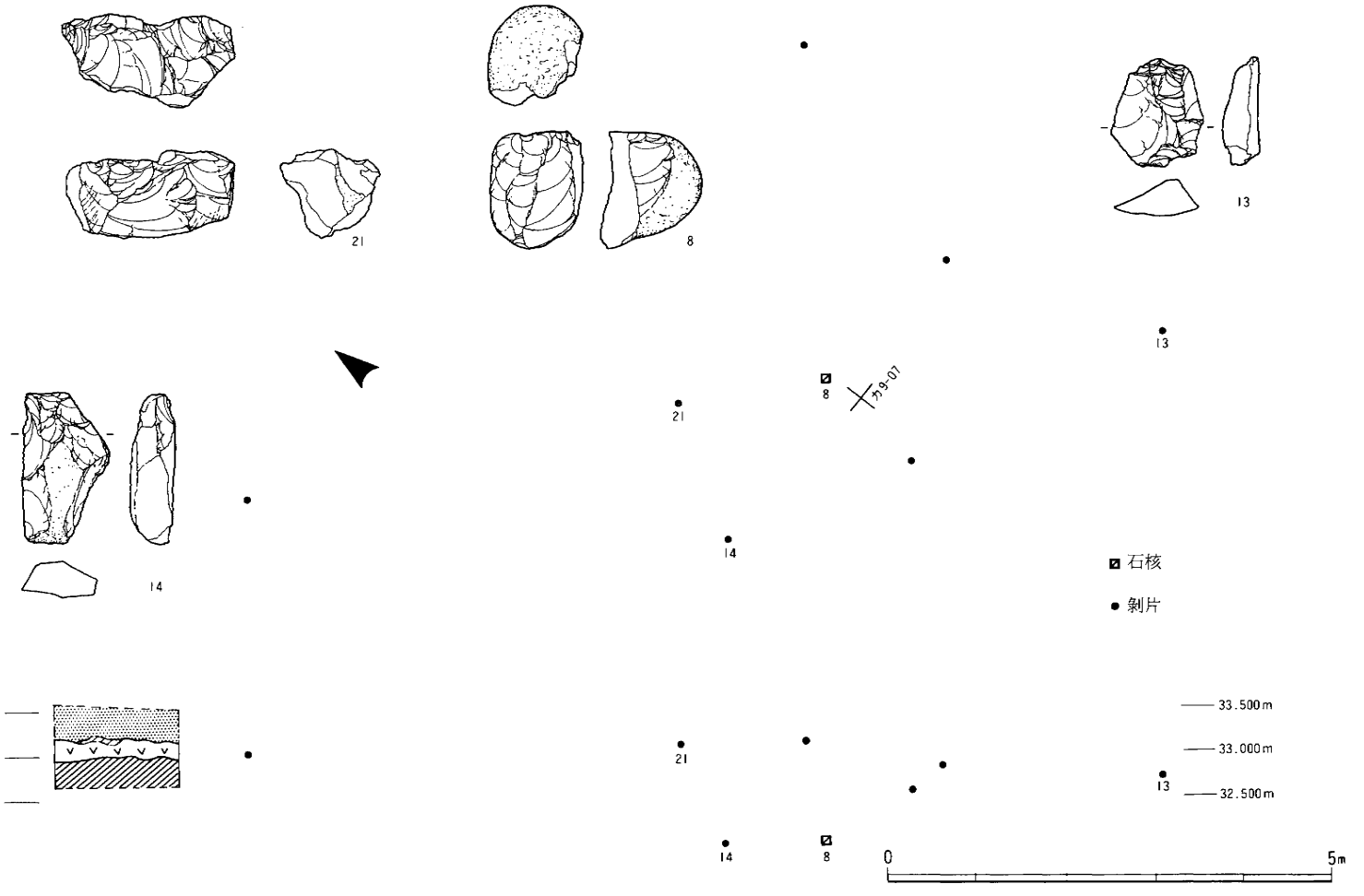
縦長剥片を素材にして側縁の一部に調整を施して刃部を作り出している。

礫器（第141図３）

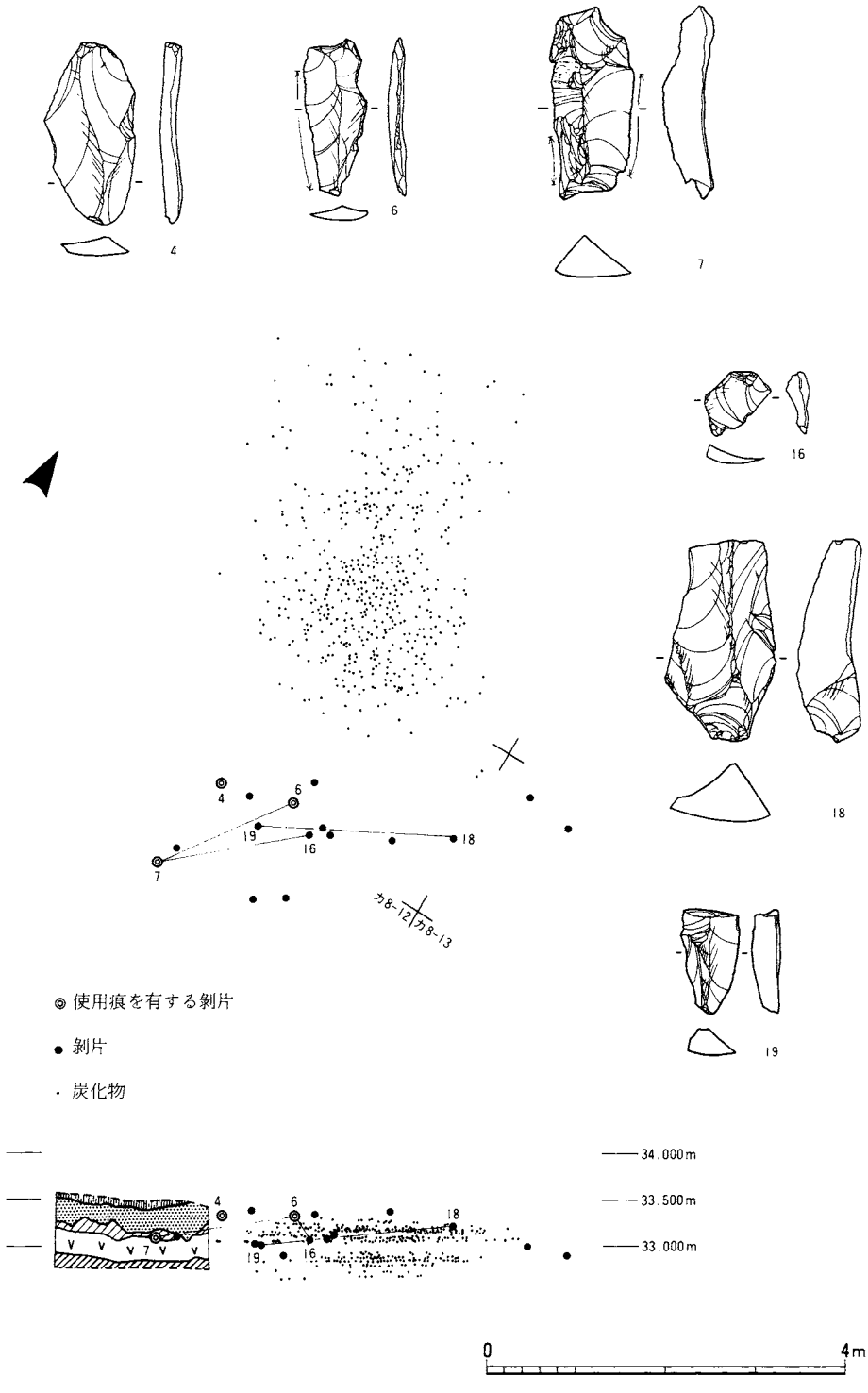
拳大の自然礫に剥離を加え、その面を打面にして刃部を作り出している。



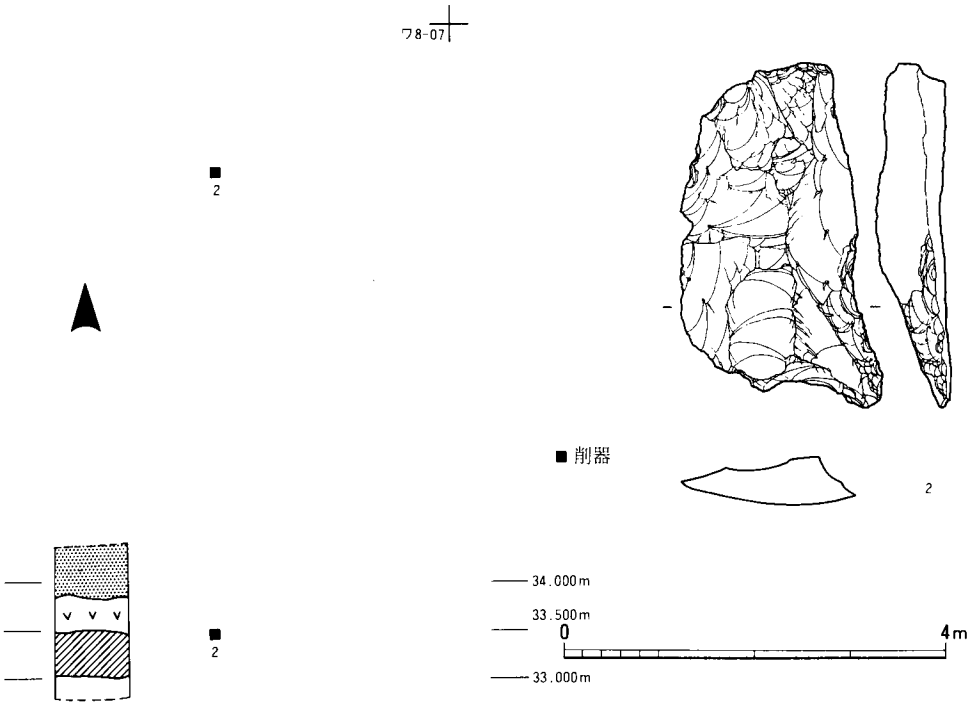
第137図　先土器時代Aブロック出土状況



第138図　先土器時代Ｂブロック出土状況



第139図　先土器時代Cブロック出土状況



第140図　先土器時代Eブロック出土状況

使用痕を有する剥片（第142図4～7）

すべて縦長剥片であり、石材は頁岩である。このうち5だけは他と明確に異なる黒色を呈する石材であるが、他の石材はナイフ形石器に類似して茶褐色を呈するものである。

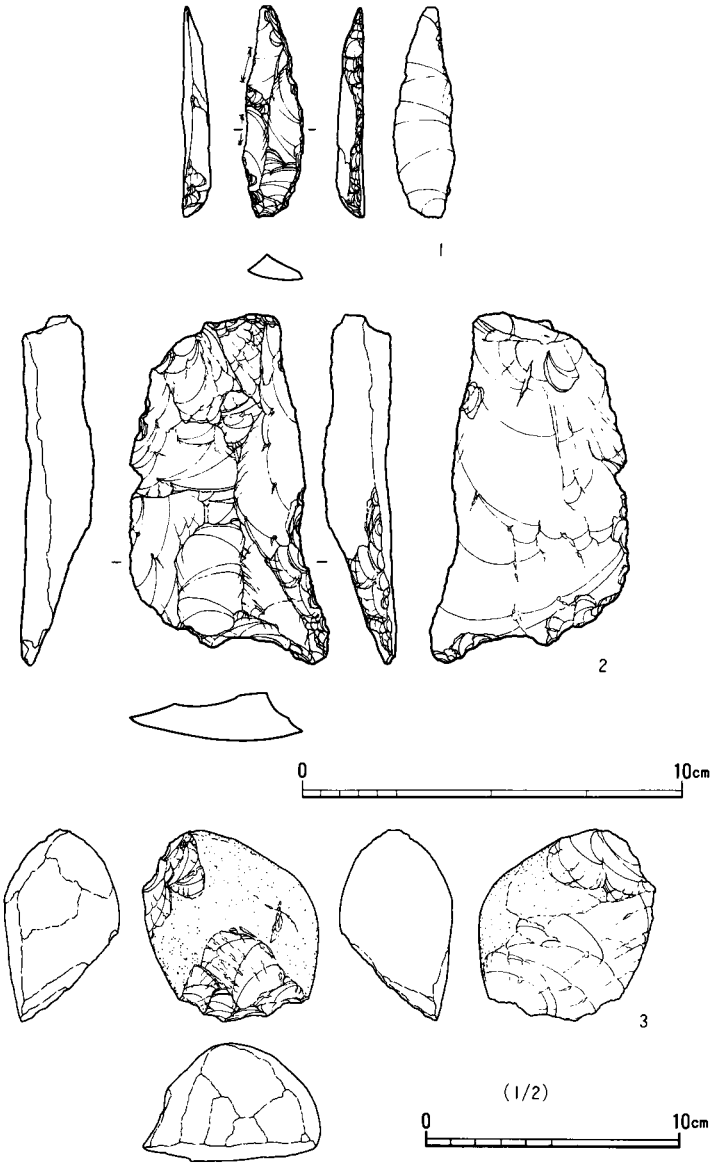
石核（第142図8・9）

ともにBブロックから出土しているが、8の石核は同じ石材の剥片が認められず、剥片剥離はブロック外で行われている。この石核は、自然面を打面とし、単一方向からの剥片剥離を行っている。石核調整は、わずかに、右側面に認められる剥離痕に、その可能性がうかがえるが、あまり顕著には認められない。これに対して9の石核は、出土位置についてはグリッド一括としか判明していないが、接合関係を有する剥片が存在することと、その他に類似する石材の剥片が数点認められることから、ブロック内で剥片剥離を行った後に廃棄されている。この石核は、打面転移を頻繁に行っており、剥離された剥片の長さは、かなり短いものが多かったといえよう。

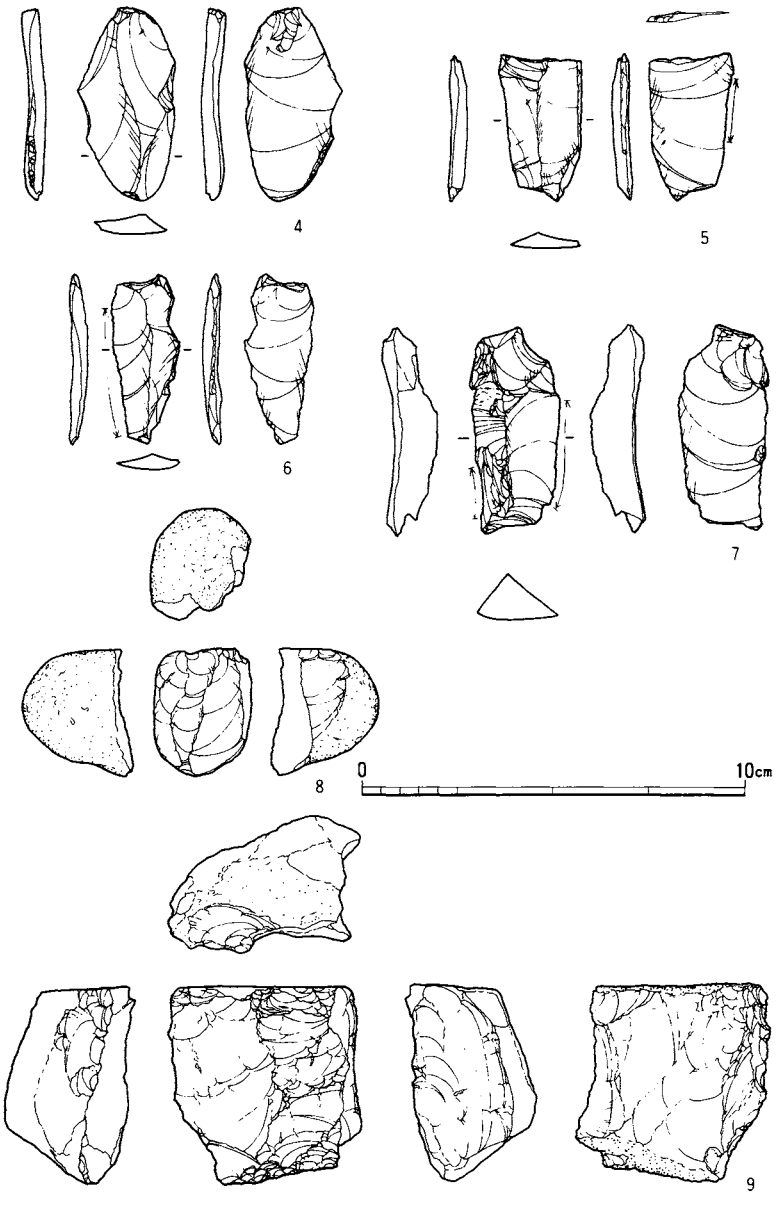
剥片（第143図10～14）

10～12は縦長剥片で、石材は頁岩である。10の剥片は、同一方向からの連続した剥離が行われているが、11・12は、打面が180°転移した剥離が行なわれている。

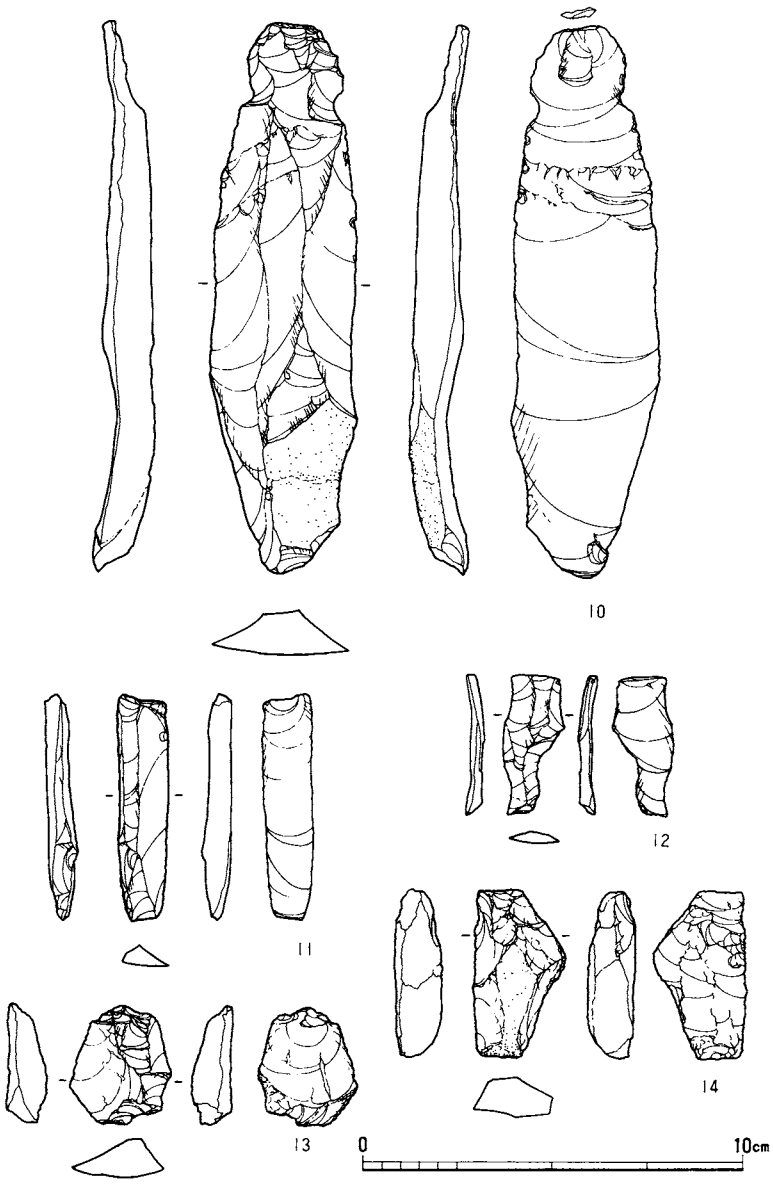
13・14は、石材が安山岩であり、長さも短い剥片である。ともに多方向からの剥離が行われており、特に14の剥片は石核の調整剥片と考えられる。



第141図　先土器時代出土石器 1



第142図　先土器時代出土石器 2



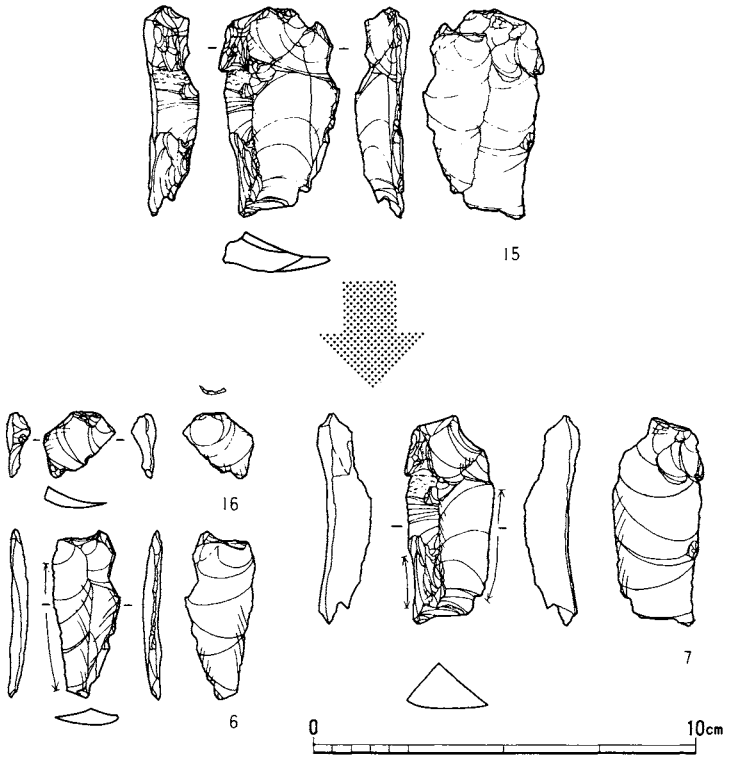
第143図　先土器時代出土石器３

4．接合資料（第144～146図、図版22）

15は、２点の使用痕を有する剥片と、１点の調整剥片の接合である。剥離は同一方向の打面から、16→７→６の順で行われているが、６・７の背面には逆方向からの剥離痕が認められることから、打面転移を行っていることがうかがえる。

17は、２点の剥片の接合である。ともに打点部を欠損しているが、剥離は同一方向から18→19の順で行われている。18の背面に逆方向からの剥離痕が認められることから、打面転移を行っていることがうかがえる。

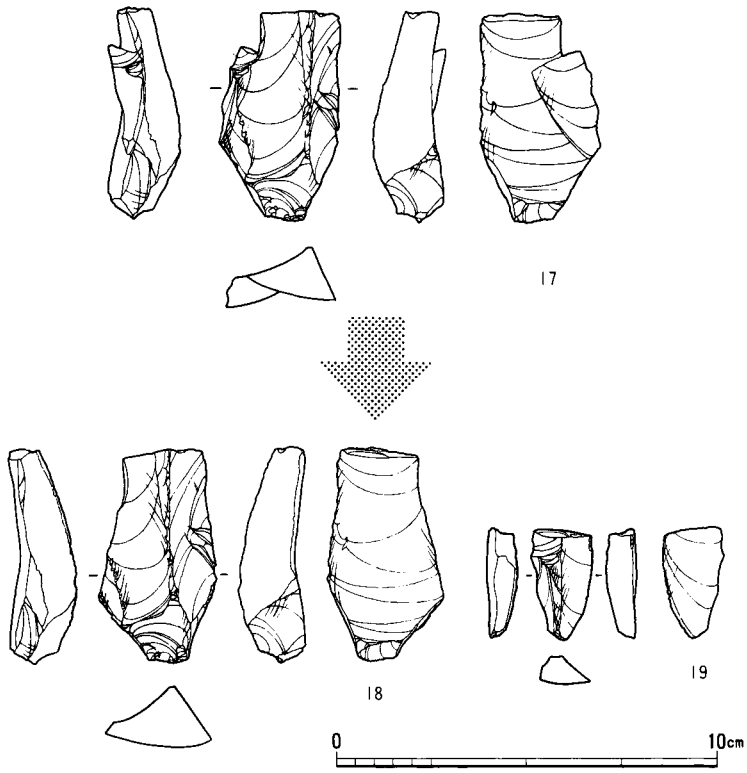
20は、石核と剥片の接合である。21は横長で厚みのある剥片であり、素材のための剥片とは考え難い。９の石核は、自然面を打面とした剥片剥離の後、その作業面を打面とした剥片剥離が行われている。21の剥片もこの剥片剥離作業において剥離されている。石核調整を意図した



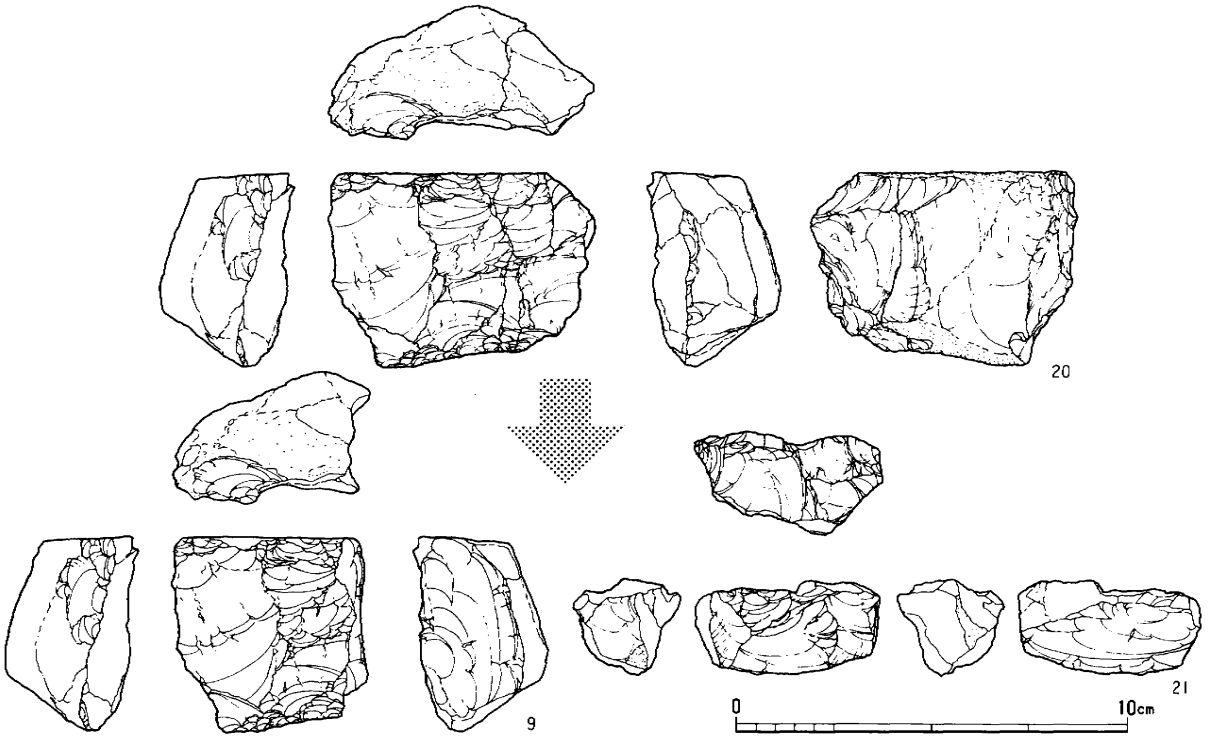
第144図　先土器時代接合資料１

ものと考えられよう。

15・17は、縦長剥片の剥片剥離であり、ともに石材は頁岩である。これに対して20は横長剥片の剥片剥離であり石材も安山岩である。しかしこれは、あまり長くはない剥片の剥離も行われていたと考えられる。また、両者ともに打面を180°転移した剥片剥離が行われていたと考えられる。



第145図　先土器時代接合資料2



第146図　先土器時代接合資料３

5．まとめ

今回の調査によって本遺跡から出土した先土器時代の石器群は、点数34、ブロック4である。これらの石器群は、出土層位の不明なものを除いて、すべてVI層周辺であり、同一文化層であると考えられる。但し、A・C・Eブロックの石器群については石材や剝片剝離技術に共通点が多く、同一文化層として問題ないが、Bブロックの石器群については、他の石器群と異なる石材を用いていることや剝片の長さが短い等から同一文化層とすることに若干の不安を覚える。

しかし、剝片の形状については、両者ともに180°の打面転移を行っており、剝片剝離技術そのものには共通性をうかがうことができることから、両者の違いは石材の違いによるものと考えられる。また、AブロックとBブロックが近接していることなどから考えても、両者の石器群は同一文化層と考えて良いであろう。

同一文化層内において、ブロック内の石器群をみると、A・Eブロックが剝片剝離を行わずに、利器だけで構成されているのに対して、Bブロックは剝片剝離を行いながら、利器が認められないことから、前者が消費型のブロック、後者が供給型のブロックと評価することができよう。またCブロックについては、剝片剝離を行い、利器も認められることから、供給・消費を自己完結で行っていたと考えられよう。

佐倉第三工業団地内において先土器時代の石器群が報告されている主なものは、星谷津遺跡の16ユニット、立山遺跡の9ユニット、大作遺跡の17ブロック、向原遺跡の23ブロック、栗野遺跡の17ブロック等多数のブロックが認められており、本遺跡のブロック数との間に著しい差が認められる。しかし、本遺跡において認められた石器群は、VI層周辺の単一文化層であることから、他の遺跡においてVI層周辺の文化層を挙げてみると、大作遺跡第3文化層（ブロック数8、石器数138点）と栗野遺跡第II文化層（ブロック数9、石器数1,047点）程度である。両遺跡を、本遺跡と比較した場合、もっとも大きい違いは、文化層が複数であるか単一であるかによるものであり、同一文化層内におけるブロック数についてはあまり大きな違いはないといえるのではないだろうか。ただし、石器点数についてはかなりの開きがあるといえるが、この点については、大作遺跡のブロックが供給型ブロック1、自己完結型ブロック2、石器の単独出土ブロック4、栗野遺跡のブロックが、消費型ブロック3、自己完結型ブロック6ととらえられることから、自己完結型ブロックが多く、消費型のブロックが少ないという結果によるものである。剝片剝離作業の回数の違いが、本遺跡と大作遺跡・栗野遺跡等との違いといえよう。

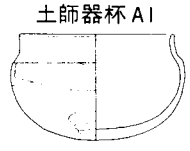
第３章　調査成果のまとめ

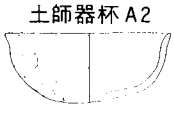
第１節　古墳時代から歴史時代の土器について

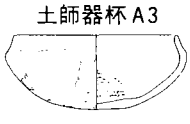
１．出土土器の分類

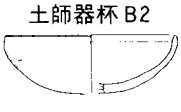
古墳時代の土器と歴史時代の土器とは別々に分類を行った。土師器については大文字のアルファベットで、須恵器については小文字のアルファベットでそれぞれ表記した。古墳時代の土器については、須恵器杯身や蓋の模倣と考えられる器形などについて大きく分類し、そのなかでの変化と考えられるものについては、A1、A2とし、必要に応じてさらにA1a、A1bのように細分を行った。

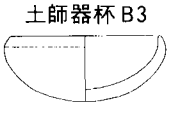
古墳時代　土師器杯と甕を中心に分類を行ったが、全体の器形を復元できないものについては、分類の対象から外したものもある。土師器杯は椀形の形態をもつものと須恵器杯身模倣のもの、須恵器杯蓋模倣のものなどに大きく分類し、さらに口縁部の形態などで細分を行った。

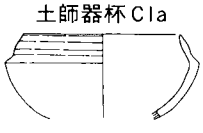












土師器杯

土師器杯A　椀形の体部をもつもので、口縁部に稜をもち、口縁部の形態で細分した。

土師器杯A1　肩をもち、口縁部が直立するもの。１点のみの出土。

土師器杯A2　緩やかに口縁部が外反するもの。A1に比べてやや体部が浅くなる。

土師器杯A3　口縁部が内傾するもの。

土師器杯B　椀形の体部をもつもので、そのまま口縁部になるもの。

土師器杯B1a　体部が深く、赤彩が施されるもの。

土師器杯B1b　黒色処理が施されるもの。体部内面や口縁部にヘラ磨きが施されるものがみられる。

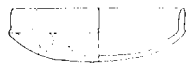
土師器杯B2　B1に比べ体部が浅くなるもの。赤彩の施されるものが多い。

土師器杯B3　体部は浅く、口唇部をつまみ上げるようにするもの。

土師器杯C　須恵器杯身模倣のもので、口縁部が内傾するもの（C1）と体部と口縁部の境に返りをもち、口縁

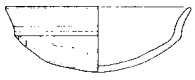
土師器杯C2a

土師器杯C2b

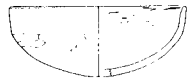


土師器杯D1

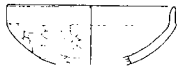
土師器杯D2a



土師器杯D2b



土師器杯D2c



土師器杯D3a

土師器杯D3b

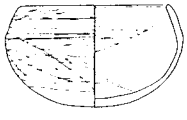
土師器杯D3c

土師器杯D3d

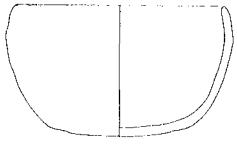
土師器杯D4

土師器杯E

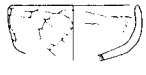
土師器杯F



土師器杯G



土師器杯H



部が直立するもの（C2）の二つに分け、さらに、口径や器高などによって細分した。

土師器杯C1a　体部の深いもの。

土師器杯C1b　口径12～14cmで、器高が低くなるもの。出土量が最も多いもので、赤彩されるものや黒色処理を施すものがある。

土師器杯C1c　口径12cm以下の小振りのもの。

土師器杯C2a　口径＜3×器高と、口径に比べて器高が高いもの。

土師器杯C2b　口径12～14cmで、口径≧3×器高と、器高が低いもの。

土師器杯D　須恵器杯蓋模倣のもので、口縁部の形態などにより分け、口径＜3×器高のもの（D2）と、口径14～15cmで、口径≧3×器高のもの（D3）についてはさらに細分を行った。

土師器杯D1　浅い底部から口縁部が大きく外反するもの。

土師器杯D2a　口径14cm前後で、口縁部が外反するもの。体部内外面に赤彩が施される。

土師器杯D2b　口径13～14cmとやや小振りのもの。口縁部が外反するものと外傾するものがある。内面をヘラ磨きし、黒色処理が施される。

土師器杯D2c　口径13cm前後で、口縁部に比べて体部の深いもの。1点のみの出土。

土師器杯D3a　口縁部高と体部高がほぼ等しく、口縁部が外傾するもの。赤彩されるものと黒色処理を施されるものがある。

土師器杯D3b　口縁部がやや短く、外反するもの。

土師器杯D3c　口縁部と体部の境が曖昧になるもの。

土師器杯D3d　口径12～14cmと小振りになるもの。

土師器杯D4　口径12cm以下の小形のもの。1点のみの出土。

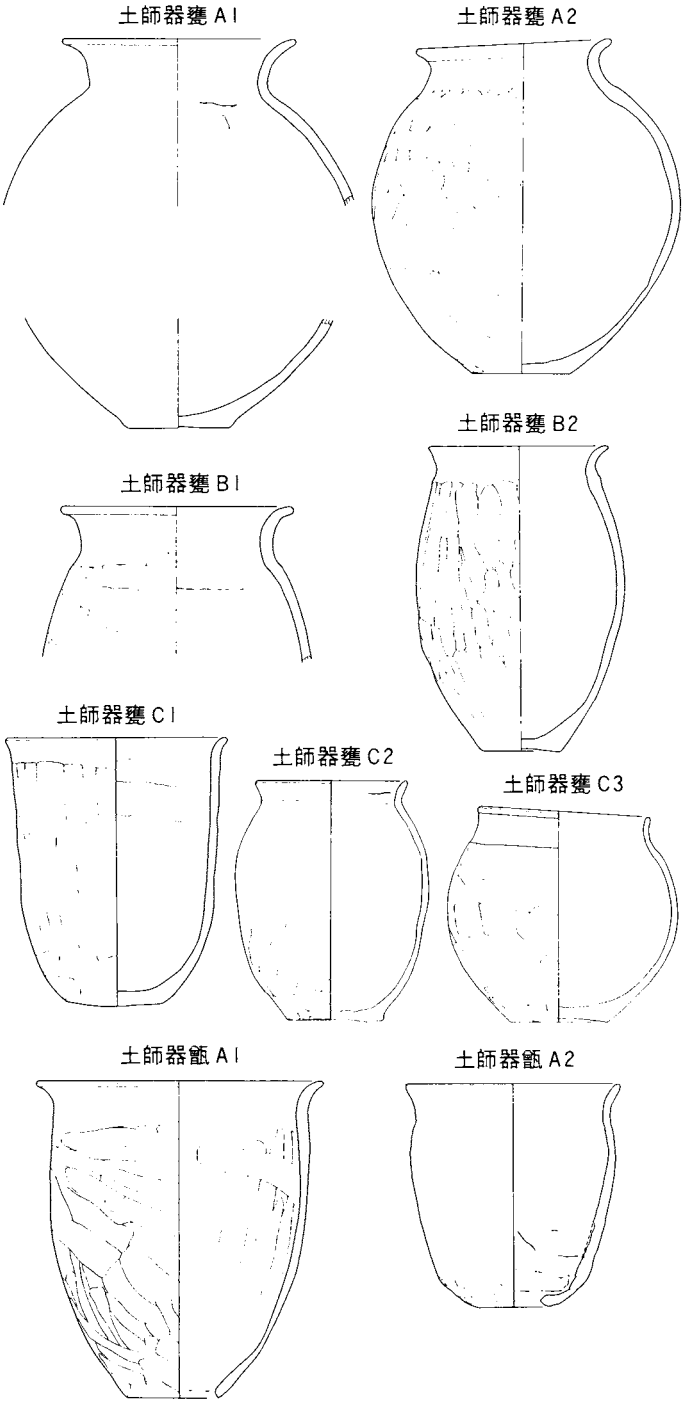
土師器杯E　底部は平底気味で、口縁部が外面に弱い稜を作って外反するもの。

土師器杯F　丸底の底部から体部は内彎し、そのまま口縁部になるもので、口縁部は調整によって作り出される。内外面はヘラ磨きし、黒色

処理が施される。１点のみの出土。

土師器杯G　大形のもので、底部はやや平底気味で、体部が急激に立ち上がり、口縁部がわずかに内彎するもの。１点のみの出土。

土師器杯H　口径10cm前後と小形のもので、箱形の器形をもつもの。１点のみの出土。



土師器甕　土師器甕は球形のもの(A)、長胴のもの(B)、小形のもの（C）の三つに分け、さらに口縁部の形態などで細分を行った。

土師器甕A1　口縁部が「く」の字状に強く外反するもの。

土師器甕A2　口縁部が大きく外反するもの。

土師器甕B1　口縁部が外反するもの。

土師器甕B2　口縁部が比較的短く、外傾するもの。

土師器甕C1　筒状の胴部をもち、口縁部が短く外反するもの。

土師器甕C2　B2の小形のもの。

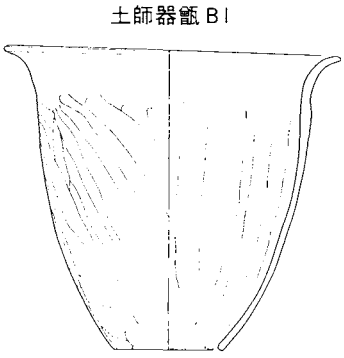
土師器甕C3　球形の胴部をもち、口縁部が緩やかに直立するもの。

土師器甑

土師器甑A1　胴部に膨らみをもち、口縁部が緩やかに外反するもの。

土師器甑A2　器高20cm以下のA1の小形のもの。

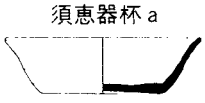
土師器甑B1　体部が内彎

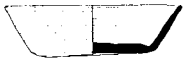


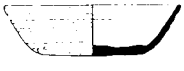
気味に開き、口縁部が外反するもの。出土量が最も多いものである。

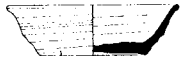
土師器甑B2　器高20cm以下のB1の小形のもの。

歴史時代　杯を除いて全体の器形を復元できる個体が少なく、これらを中心に分類を行った。土師器甕については口縁部の形態と調整技法などによって細分を行ったが、口縁部のみ復元できたものについては、分類の対象から外したものもある。また、これら以外の土器については、出土個体数が少ないので、分類をしなかった。









須恵器杯

須恵器杯a　口径14.5～15.5cm、底径9.5cm前後の大振りのもの。底部の全面と体部下端部を手持ちヘラ削り調整する。胎土中に石英粒・雲母粒を含み、常陸産のものと考えられる。

須恵器杯b　口径13.5～14cm、底径9cm前後で、底部は周縁部を面取りをし、丸みをもつもの。底部の調整は回転ヘラ削りするものが多い。色調は灰色と青灰色で、胎土中に石英粒を含まないものが多い。

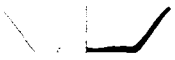
須恵器杯c　口径13.8cm、底径8cmで、体部下端部を面取りをし、底部との境に丸みをもつもの。体部外面にロクロ痕を残す。1個体のみの出土。

須恵器杯d　口径14.5～15.5cm、底径9.5～10.5cmで、器高が低く、体部がやや内彎気味のもの。底部は回転糸切り離しで、調整は回転ヘラ削りで、底部の周縁部と体部下端部にわずかに施す。胎土中に石英粒を含むが雲母粒は含まない。

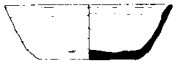
須恵器杯e　口径13.5～14.5cm、底径8～9cmで、体部が直線的に開くもの。口唇部がわずかに外反するものがある。底部はヘラ切り離しで、調整は回転ヘラ削りと手持ちヘラ削りの両者がみられ、体部下端部にごくわずかに施すものが多い。色調は灰色を基調とし、黒色あるいは暗灰色のものがわずかにみられる。常陸産と考えられるものが多い。

須恵器杯f　口径13～14cm、底径7～8cmで、全体に焼成が甘く、やや軟質な感じを受けるもの。体部は若干外反気味に開くものが多い。色調は

須恵器杯h

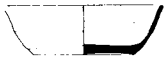


須恵器杯i

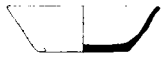


須恵器杯j

須恵器杯k

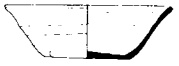


須恵器杯l



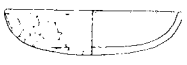
須恵器杯m

須恵器杯n

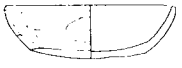


須恵器杯o

土師器杯A

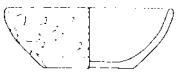


土師器杯B



土師器杯C

土師器杯D



eに類似し、常陸産と考えられるものが多い。

須恵器杯g　法量的にはeに類似するが、体部下半部に丸みをもち口縁部がわずかに外反するもの。

須恵器杯h　口径12.5～13.5cm、底径7.8～8cmで、体部が直線的に開くもの。常陸産と考えられるものは雲母粒を含まないものが多い。

須恵器杯i　法量的にはhに類似するが、体部下半部に丸みをもつもの。体部にロクロ痕を残すものや口縁部がわずかに外反するものがみられる。底部に特徴的な◐の重ね焼き痕のみられるものが存在し（観察表には重ね焼きBと略記）、県内産と考えられるものと「くすべ焼成」のものが多い。

須恵器杯j　口径13cm前後、底径6.5～7.5cmで、gの小形のもの。

須恵器杯k　口径12cm前後で、iの小形のもの。ロクロ痕はあまり明瞭ではなく、体部下端部を強く面取りをするものがある。

須恵器杯l　口径11.5～12.5cmで、体部が直線的に開くもの。hの小形のもの。

須恵器杯m　口径13cm、底径6cm前後で、体部が内彎し、口縁部が大きく外反するもの。体部下端部を手持ちヘラ削りし、底部との境を丸くする。

須恵器杯n　口径13～14cm、底径6.5～7cmで、体部が直線的に大きく開き、口縁部がわずかに外反するもの。手持ちヘラ削り調整を施す。

須恵器杯o　nよりも底径が小さくなるもので、体部は内彎気味に開き、口縁部が外反する。回転ヘラ削り調整を施す。

土師器杯　非ロクロの土師器とロクロ土師器に大きく分かれるが、分類可能な個体数が多くないことから、この両者による大分類は行わなかった。A～Dまでが非ロクロの土師器で、E以降がロクロ土師器である。

土師器杯A　浅い皿状のもの。内外面にヘラ磨きを施すものがある。

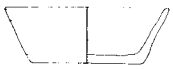
土師器杯B　底部がやや平底化し、体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部になるもの。

土師器杯C　小振りのもので、体部は内彎して立ち上がり、口唇部がわずかに外反するもの。1点のみの出土である。

土師器杯D　底部は平底で、器高がやや高く、体部が内彎気味に立ち上がるもの。1点のみの出土である。

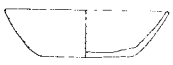
土師器杯E　口径12.6cm、底径8.6cmで、箱形のもの。回転糸切り離しで、底部周縁部と体部下端部に回転ヘラ削り調整を施す。1点のみの出土である。

土師器杯E

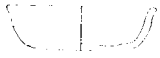


土師器杯F

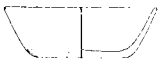
土師器杯G



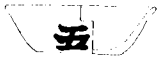
土師器杯H



土師器杯I



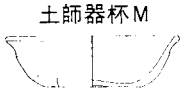
土師器杯J



土師器杯K

土師器杯L

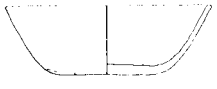
土師器杯M



土師器杯N

土師器杯O

土師器杯P



土師器杯F　口径14～15cm、底径８～8.5cmで、体部が直線的に開くもの。内外面に赤彩が施される。

土師器杯G　口径12.5cm前後、底径7.5～８cmで、Fの小形のもの。底部と体部下半部を回転ヘラ削り調整し、内外面に赤彩を施す。

土師器杯H　口径12cm前後、底径8.5cm前後で、体部が内彎気味に立ち上がり、口縁部が外反するもの。体部外面の調整は指頭による押えを施す。外面に赤彩が施される。１点のみの出土である。

土師器杯I　口径12cm前後、底径７cm前後で、体部が直線的に開くもの。そのまま口縁部になるものとわずかに外反するものがある。底部と体部下端部は手持ちヘラ削り調整を施す。本類の出土が最も多い。

土師器杯J　Iよりも底径が小さくなるもの。体部下半部に丸みをもつ。回転糸切り離しされるものが多く、調整は回転と手持ちヘラ削りの両者がみられる。墨書される土器が最も多い。

土師器杯K　体部下半部にヘラ削り調整によって稜を作るもの。内面に黒色処理が施されるものがある。

土師器杯L　口径11～12cm、底径７cm前後で、体部下端部は手持ちヘラ削り調整によって丸みをもたせるもの。体部外面にロクロ痕を残す。

土師器杯M　口径14cm前後、底径８～９cmで、口縁部が外反するもの。調整は手持ちヘラ削りを施す。

土師器杯N　口径12.5cm前後、底径6.2cm前後で、体部が内彎気味に開くもの。調整は回転ヘラ削りを施し、体部に細かいロクロ痕を残すものが多い。

土師器杯O　Nに類似した形態と調整が施され、器高は低く、体部がより内彎気味に開くもの。

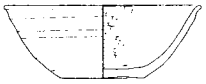
土師器杯P　体部下半部が若干内彎気味に開き、内面にヘラ磨き調整が施されるもの。内面に黒色処理が施されるものが多い。法量的には大小があり細分することもできる。

土師器杯Q　Pよりも大振りで、底径が小さいもの。体部下半部の丸みが増し、口縁部は外反するものとしないものがある。回転ヘラ削り調整を施すものが多い。P同様内面をヘラ磨きし、黒色処理を施すものが多い。

土師器杯R　Mに類似するが、底径が7.4cmと小さく、体部も外反気味に開き、口縁部が肥厚してさらに外反するもの。内面にヘラ磨き調整を

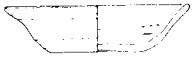
施す。1点のみの出土である。

土師器杯Q



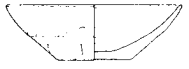
土師器杯S　口径13.5cm、底径5.8cmで、小さい底部から体部が直線的に大きく開くもの。1点のみの出土である。

土師器杯R



土師器皿　分類対象とした個体数が少なく、高台の有無に関係なく土師器皿として分類を行った。

土師器杯S



土師器皿A　体部が直線的に大きく開き、そのまま口縁部になるもの。底部と体部の調整は手持ちヘラ削り。

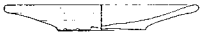
土師器皿A

土師器皿B　体部は直線的に大きく開き、口縁部が大きく外反するもの。底部と体部の調整は回転ヘラ削り。内面は黒色処理が施される。1点のみの出土である。

土師器皿B

土師器皿C　Aに類似するが、底部が突出するもの。底部は回転ヘラ削り調整で、体部は無調整。1点のみの出土である。

土師器皿C

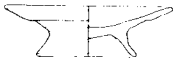


土師器皿D　低い高台の付くもので、皿部はBに類似するもの。

土師器皿D

土師器皿E　高い高台の付くもので、皿部はAに類似し、高台が「ハ」の字状に開くもの。1点のみの出土である。

土師器皿E



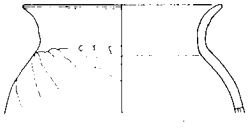
土師器甕

土師器甕A　長胴で、最大径が胴部中位にあり、口縁部が外反するもの。

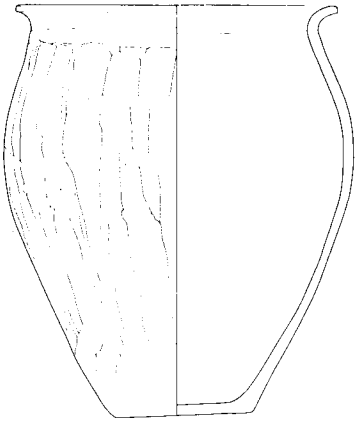
土師器甕B　長胴で、最大径が胴部上位にあり、頸部のくびれが比較的弱く、口径が大きいもの。

土師器甕C　口縁部は短く、直線的に開く。最大径が口縁部にあり、胴部の膨らみがほとんどないもの。

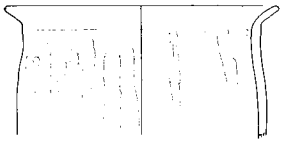
土師器甕A



土師器甕B

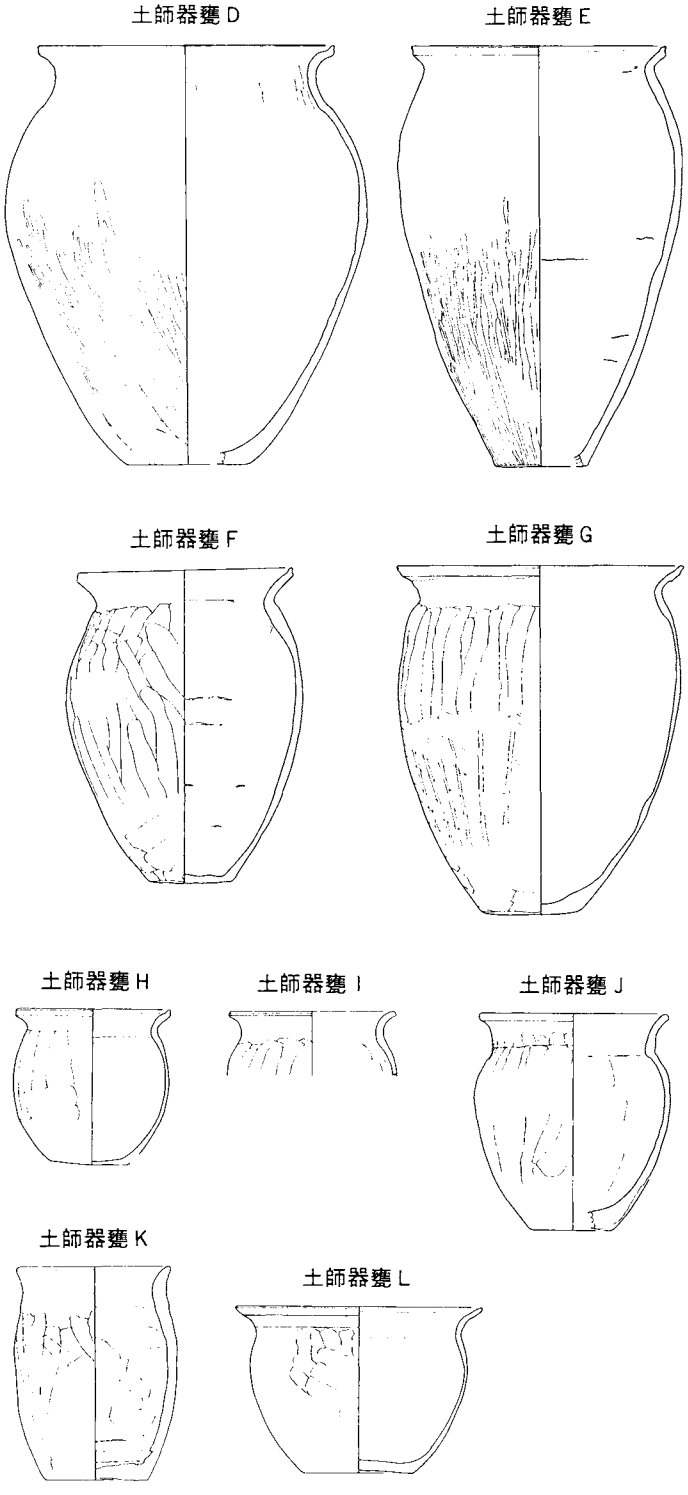


土師器甕C



土師器甕D　口唇部は受け口状になり、胴部外面は中位以下に縦方向のヘラ磨きを施し、胎土中に石英粒・雲母粒を多量に含む、「常総型」の甕と考えられるもので、肩を張るもの。

土師器甕E　Dと同じ「常総型」の甕であるが、肩をあまり張らず、卵形の胴部をも



つもの。

土師器甕 F　口唇部は受け口状になるが、胴部外面をヘラ削りするもの。「常総型」の甕とは明らかに異なる。

土師器甕 G　Fと類似する形態をもつが、器壁を薄く仕上げるもの。胴部外面の下半部には縦方向のヘラ磨きが施される。

土師器甕 H　Gの小形のもので、器壁はGと同じように薄く仕上げる。胴部は球形のものが多い。

土師器甕 I　Hに類似するが、口唇部端部に1条の沈線を巡らせるもの。

土師器甕 J　胴部最大径を上部にもち、口縁部は頸部内面に明瞭な稜を作って外反するもの。

土師器甕 K　口径・胴部径にあまり差がなく、頸部のくびれも弱く、全体として筒状の形態をもつもの。

土師器甕 L　口径に比べて器高の低いもので、口縁部がやや内彎気味に大きく外反するもの。器壁は薄く仕上げる。

2．時期区分（第147～152図）

土器の分類作業を通して、古墳時代を3期、歴史時代を5期に区分することができた。各時期の実年代の比定作業については、古墳時代に関しては須恵器などの遺物が乏しいことから、黒色処理や赤彩を施された杯の消長、杯の小型化などを目安とし、周辺遺跡[1]での成果を参考にして行った。

古墳時代Ⅰ期　土師器杯ではA類、B1a類などの前時期からの系譜と思われる杯と、須恵器杯蓋模倣のD1類、D2a類、D3a類がみられる。須恵器杯身模倣のC1b類もみられるが、D類に比べてその出土量は少ない。ほとんどの杯に赤彩が施される。D類の一部には黒色処理を施すものがみられる。土師器甕は球形の胴部をもつA類と長胴のB類がみられる。

本時期は須恵器杯蓋模倣杯が多く、ほとんどの杯に赤彩が施されることと、一部に黒色処理を施される杯がみられることから、6世紀の中葉を中心にして6世紀の後半までの時期と考えられる。

古墳時代Ⅱ期　本時期は土師器杯のなかに黒色処理を施すものが多くなる時期である。土師器杯は須恵器杯身模倣のC1・C2類が現われ、そのほかでは前時期と同様にB1a類や器高がやや低くなるB2類、須恵器杯蓋模倣のD1類、D2a類、D3a類などがあり、わずかではあるが、体部の深いF類・G類などもみられる。前時期に比べて杯類の器形変化が多くなる。黒色処理は前時期では須恵器杯蓋模倣杯のD類に早くからみられたが、本時期では須恵器杯身模倣杯のC類に多く施されるようになる。赤彩を施す杯もみられるが、その数は減少する。土師器甕では全体の器形を知ることのできる遺物が少ないが、前時期と同様に球形の胴部をもつA類と長胴のB類がみられる。また、印旛沼周辺地域では「常総型」甕が本時期においてはその存在がかなり一般的になっているが、本遺跡および周辺の遺跡においては6世紀・7世紀代にはみられず、少なくとも8世紀代に入ってからでないとみられない。このほかに鉢や小型土器がみられるが、小型土器は本時期以降は歴史時代Ⅰ期までみられなくなる。

本時期は前時期に比べて杯類の体部が浅くなり、黒色処理が主体的となり、赤彩を施す杯が減少することなどから、6世紀の後半から7世紀初頭にかけての時期と考えられる。

古墳時代Ⅲ期　本時期は土師器杯ではB3類・C1b類・C1c類・C2b類・D3c類・D3d類・D4類などがみられが、全体として杯の口径が10～12cmと小型化する時期である。杯ではこのほかにE類のように今までのものとは趣の異なる杯がみられる。黒色処理や赤彩を施すものが前時期に比べていずれも減少する。土師器甕は前時期と同様に球形の胴部をもつA類と長胴のB類が存在している。高杯は本時期にも存在し、脚部が太く裾部がわずかに開くもので、杯部内面

に黒色処理を施すものがみられる。

本時期は土師器杯は黒色処理や赤彩を施すものが減少し、杯の小型化がより進むことと、長胴の甕は胴部中位にまだ膨らみを残すことなどから7世紀の前半から中葉の時期と考えられる。

歴史時代Ⅰ期　本時期は土師器杯では非ロクロのA類のみがみられる。本時期には土師器杯に比べ須恵器杯が圧倒的に多く出土している。須恵器杯は口径が13～15cmのものを中心としており、種類としてはa類からg類までみられるが、e類の出土量が最も多い。b類・e類・f類の一部を除いていずれも胎土中に石英粒や雲母粒を含むことから、常陸産と考えられ、これらが大多数を占めている。また、底部に丸みをもつb類・c類がわずかではあるがみられる。須恵器蓋はかえりの消滅した、宝珠つまみをもつものがみられる。土師器甕は本時期から「常総型」甕の存在がはっきりとし、しかもかなり主体的なあり方を示している。「常総型」甕は肩を張るやや古い形態をもつD類のみがみられる。このほかには小型土器と、胴部外面に同心円叩きのみられる須恵器甕の破片がみられる。土師器甑については良好な資料がない。

本時期はロクロ土師器がまだ出現していないこと、常陸産と考えられる須恵器杯が多くみられること、「常総型」甕に古い形態を残していることなどから、8世紀の第2四半世紀から第3四半世紀にかけての時期と考えられる。

歴史時代Ⅱ期　本時期から土師器杯にロクロ使用の杯が現われる。非ロクロの土師器は底部がやや平底に近くなるB類がみられる。ロクロ使用の土師器杯はやや大振りのF類とG類がみられ、内外面に赤彩が施されるものが多い。須恵器杯はほとんどが完全な平底になり、口径も前時期に比べて12～14cmとひとまわりほど小さくなる。e類に加えて口径が13cm前後のh類が多くみられるようになる。前時期と同様に胎土中に雲母粒や石英粒を多く含む常陸産と考えられる杯が大部分を占めている。土師器甕は「常総型」甕と在地産の甕が主体を占め、本時期から器壁が薄い小形の甕H類が現われる。出土する竪穴住居がある程度片寄っているが、本時期に竪穴住居022Aなどにみられるような土師器鉢が存在する。土師器甑は口縁部が受け口状になるものと、砲弾型のものがみられ、本時期を最後に土師器甑はほとんどみられなくなり、これ以降は須恵器甑が主体的な存在になる。このほかには、須恵器の短頸壺・長頸壺がみられ、小型土器もみられる。

本時期はロクロ使用の土師器が出現すること、須恵器杯が前時期に比べて小型化することなどから8世紀の第3四半世紀を中心とする時期と考えられる。

歴史時代Ⅲ期　本時期は須恵器杯の口径が12～13cmのものが主体を占めるようになる。土師器杯は非ロクロの土師器B類～D類とロクロ使用のI類などで、器高が低く皿状のO類がみら

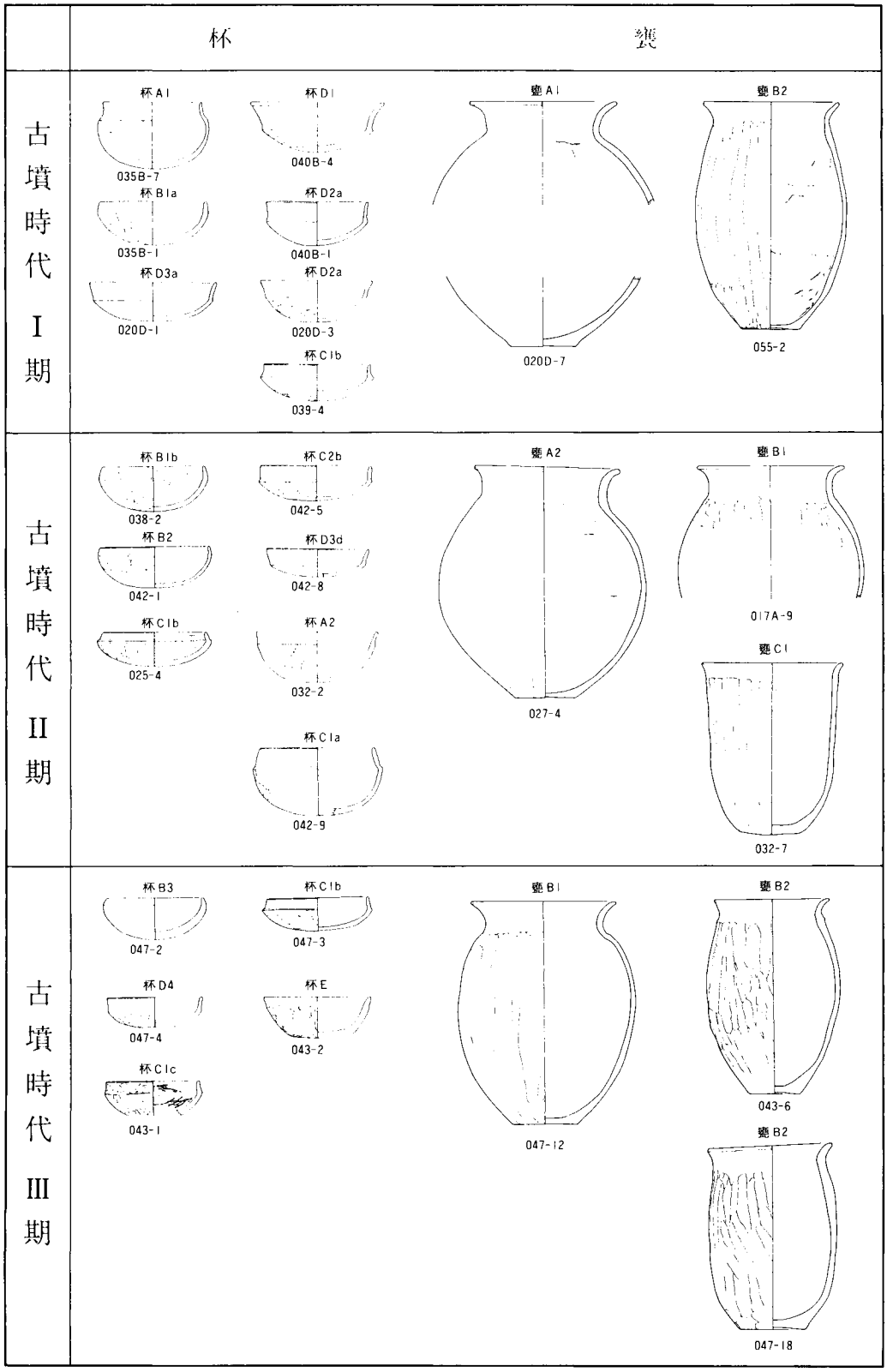
れる。赤彩は前時期と同様にE類にみられるが、その数はごくわずかになる。その一方、B類やI類、O類などに内面に黒色処理を施すものがみられる。須恵器杯では前時期までみられたe類に代わって、h類やi類が多くなる。また、前時期までの常陸産と考えられる須恵器に代わって、県内産の須恵器と考えられる「くすべ焼成」のものや還元炎焼成になりきれない須恵器などが多くなる。このなかには、わずかではあるが底部に特徴的な重ね焼き痕を残すものがあり、その特徴から千葉市の中原窯産[2]と考えられる。土師器甕は全体の器形を知ることのできるものが少ないが、「常総型」甕が主体を占め、前時期から存在する器壁の薄い小形の甕もみられる。このほかには須恵器の小壺や小型土器がみられ、小型土器は本時期で姿を消す。

本時期は須恵器杯がさらに小型化すること、県内産の須恵器がみられることなどから8世紀の第4四半世紀を中心とする時期と考えられる。

歴史時代Ⅳ期　本時期は土師器杯と須恵器杯の割合が逆転し、土師器杯が杯類の主体となる時期である。また、墨書土器が最も多くみられるのも本時期である。須恵器杯はi類が多く、口径は前時期とほぼ同じであるが、全体的にやや小振りになる。また、常陸産と考えられる須恵器杯はみられなくなり、1類の1点を除いてすべて県内産と考えられるもので占められる。そのなかには前時期でみられた中原窯産のものが多く含まれる。土師器杯は口径が12～13cmのI類とJ類が多く、口径が14～16cmで内面にヘラ磨き調整を施すP類が新たに加わる。赤彩されるものはまったくなく、K類・P類・Q類などに黒色処理が施される。土師器甕は前時期と同様に「常総型」のE類が主体を占め、器壁が薄いG類、小形のH類などがみられる。全体の器形を知ることのできるものが少ないが、須恵器甕や五孔形態の須恵器甑などがみられる。

本時期は須恵器杯に中原窯産の須恵器が多くみられるようになること、大振りの土師器杯P類がみられることなどから9世紀前半と考えられる。

歴史時代Ⅴ期　本時期は杯類では土師器杯が主体的となり、須恵器杯の割合がさらに少なくなり、土師器皿が現われる時期である。須恵器杯は底部が小さく、体部が内彎気味に開くN類・O類がみられ、器形の分からないものも含めて常陸産と考えられるものは存在しない。しかし、須恵器杯蓋には常陸産と考えられるものが存在する。土師器杯は非ロクロのものはみられず、すべてロクロ使用のものになる。口径は前時期と同様に12～13cmであるが、底径が小さいJ類・N類が主体となる。また、口径が14～17cmで体部が内彎気味に開き口縁部がわずかに外反し、内面にヘラ磨き調整を施すQ類が増加する。土師器皿は高台の付くものと付かないものがみられる。黒色処理は土師器杯Q類と土師器皿B類にみられるが、その量は前時期に比べて減少する。土師器甕は全体の器形が分かるものが少ないが、おおむね前時期と同様にE類・H類・G類などがみられる。須恵器甕は土師器甕G類に近似した器形をもつものや折り返し口縁をもつ

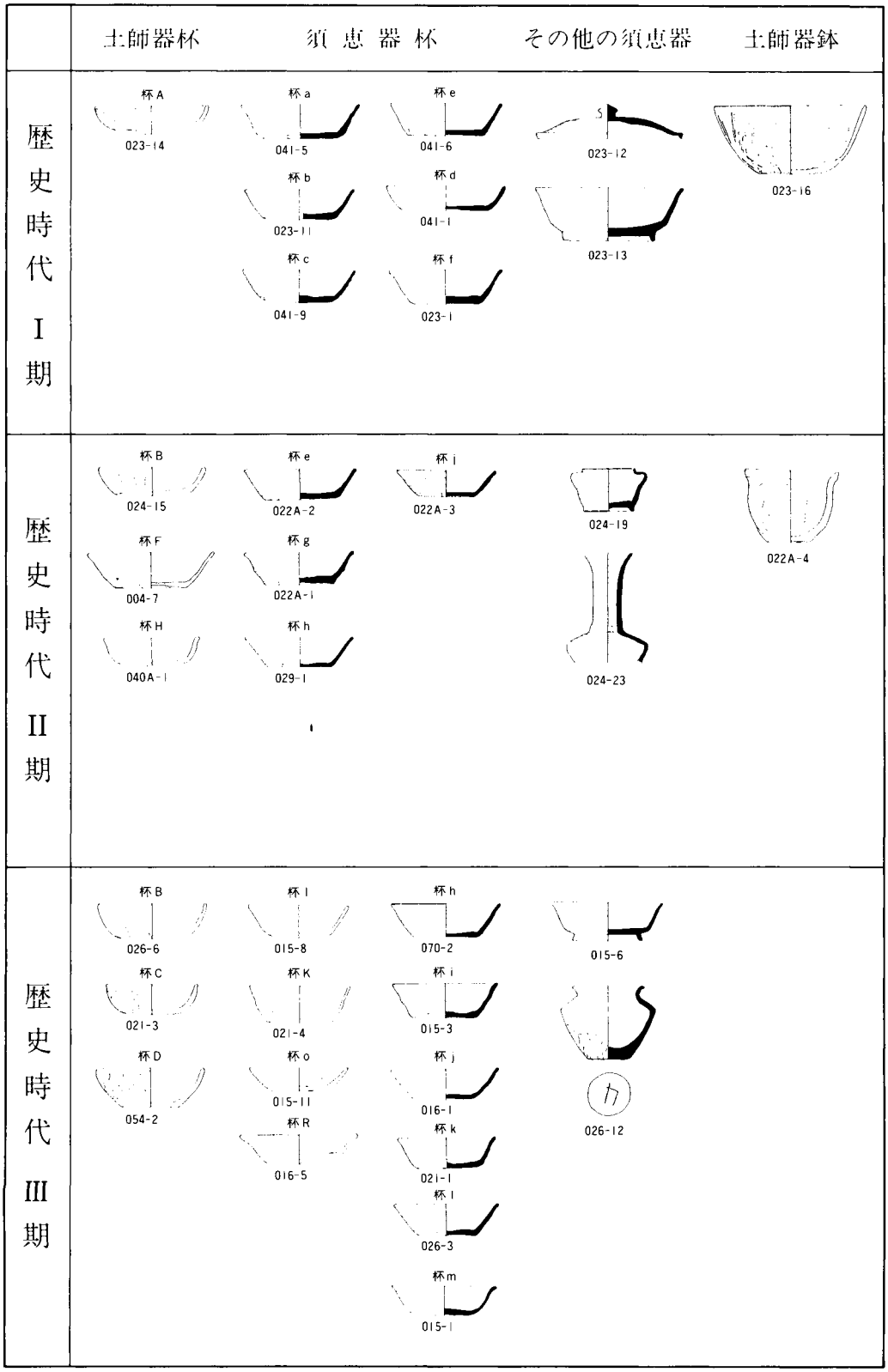


第147図　古墳時代主要土器変遷 (1)

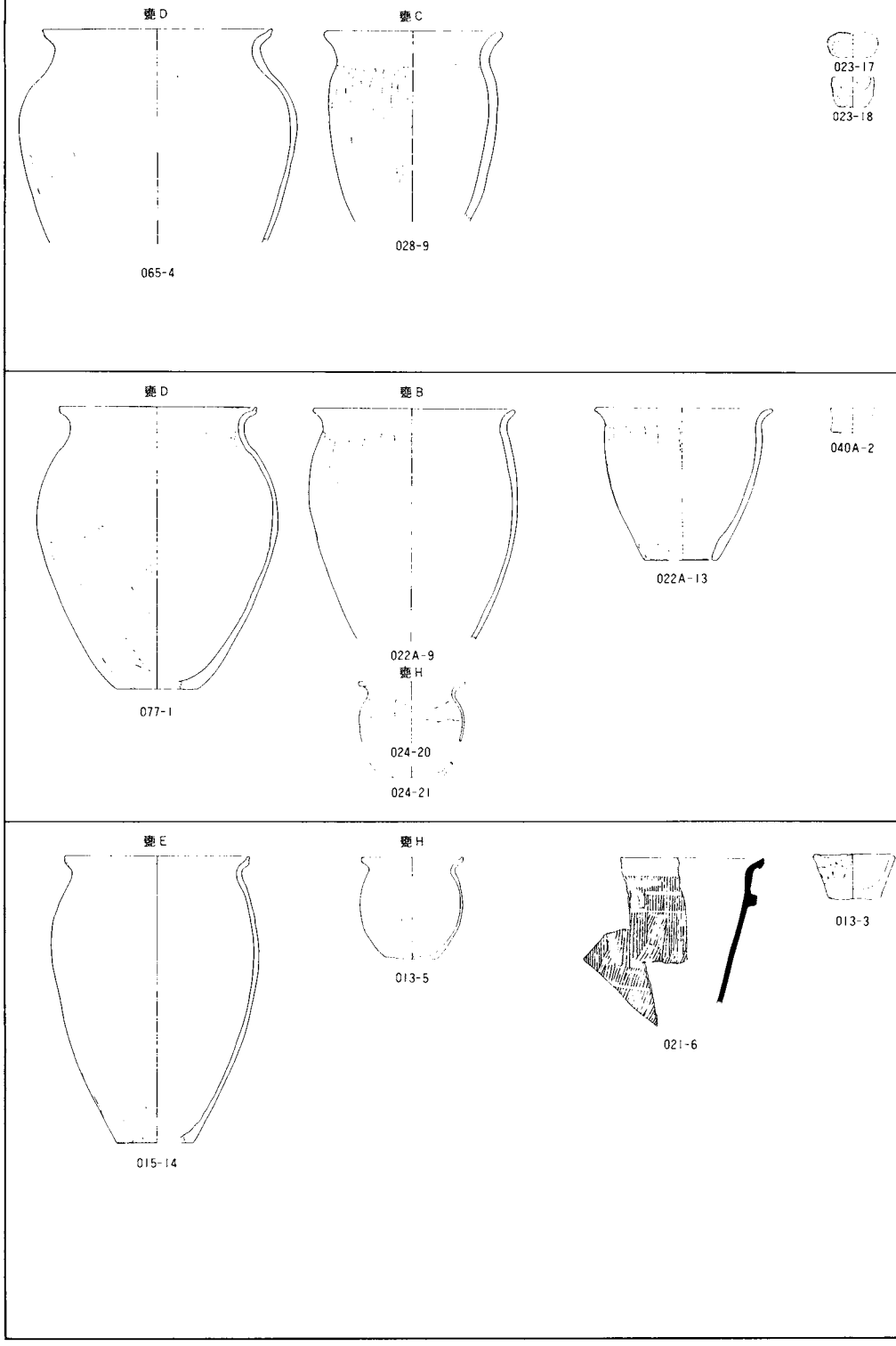
甑　　鉢　　高杯　　小型土器

甑A1
035B-13
甑B1
035B-14
甑A2
022B-2
040B-5
035-B
037D-2
甑B2
017A-14
032-5
027-8
008B-2
甑B1
025-7
甑B1
047-25
047-9
047-8
047-10

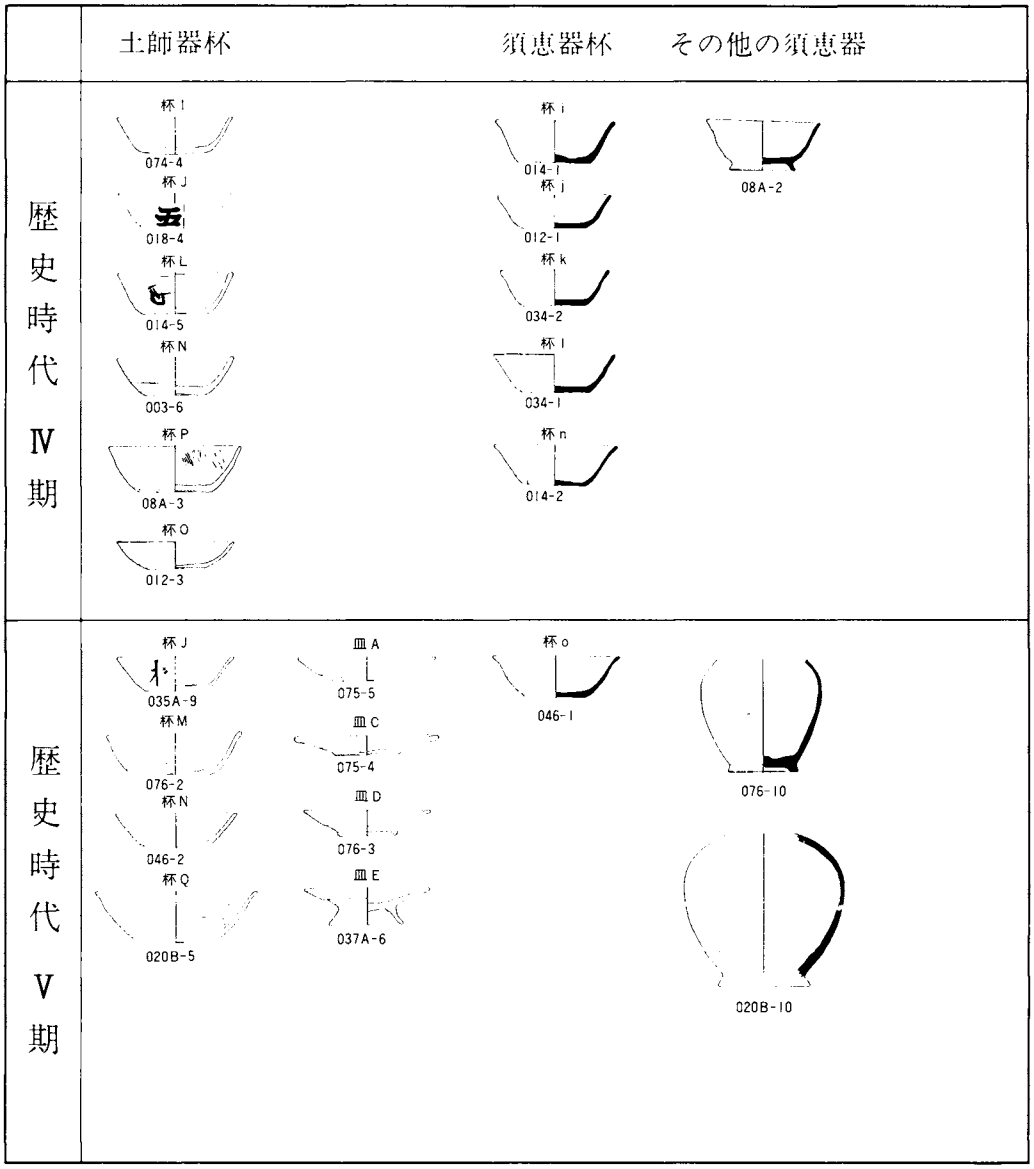
第148図　古墳時代主要土器変遷 (2)



第149図　歴史時代主要土器変遷 (1)



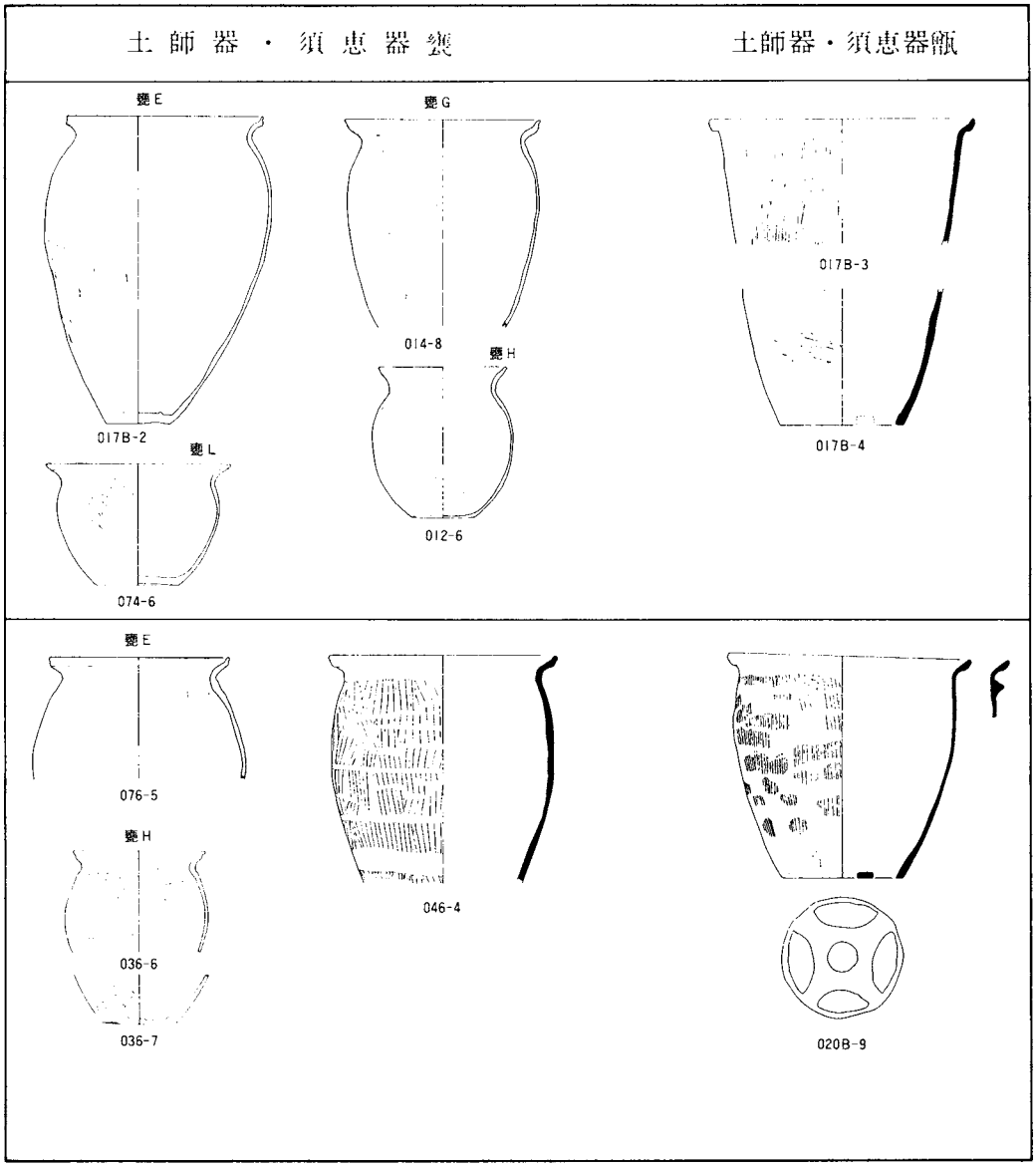
第150図　歴史時代主要土器変遷 (2)



第151図　歴史時代主要土器変遷 (3)

ものなどがみられる。このほかには須恵器長頸壺がみられるが、いずれも頸部以上が欠損しているために詳細は不明である。

本時期は土師器皿が出現すること、体部が深く大振りの土師器杯Q類が多くみられることなどから9世紀の後半と考えられる。



第152図　歴史時代主要土器変遷 (4)

第2節　集落の変遷

ここでは前節で行った時期区分に基づいて、本遺跡で検出された遺構や集落の変遷について各時期ごとにみていきたいと思う。遺構に伴う遺物が少なく、帰属する時期を決定することが難しい遺構もあるが、できる限り帰属する時期を決定することにした。しかし、古墳時代の竪穴住居058・110は出土遺物がすべて小破片であったため、帰属時期を決定することができなかったので、ここでは対象から除外した。

調査した範囲は台地の南側部分であり、今回確認できなかった時期の遺構が北側の台地上にに存在している可能性は充分に考えられる。本遺跡周辺の遺跡で、ここで古墳時代Ⅰ期とした時期に先行すると思われる遺構は、谷津を挟んだ対岸の台地上に所在するタルカ作遺跡[3]や、本遺跡の東南方向に所在する池向遺跡[4]などに存在している。また、古墳時代III期と歴史時代Ⅰ期との間の7世紀後半から8世紀前半の時期については、腰巻遺跡[5]や高崎新山遺跡[6]・六拾部遺跡[7]などに存在している。このようなことから本来的には、本遺跡を含めて、隣接する台地上に6世紀から9世紀後半までの間、継続的に集落が営まれていたものと考えられる。

古墳時代Ⅰ期（第153図）

本時期に帰属する遺構は、竪穴住居は001・002・020D・022B・035B・037D・039・040B・050の合計9軒と、土坑は055・078・111の合計3基である。これらの竪穴住居は台地に入り込んでいる小さな谷津によって、北東部・中央部・南西部の三つの群に分かれ、いずれも台地の平坦部に営まれている。

各竪穴住居の規模は022Bを除いて、床面積でいずれも25m²以上で、特に037Dが56.75m²と飛び抜けて大きい。しかし、出土遺物などをみる限りでは、ほかの竪穴住居と大差はない。主軸方向はおおむね北西方向を向いているが、001は南を035Bは西を向いている。竈は壁の中央部と竈に向かってやや左に寄った位置に造られ、貯蔵穴は022Bを除いて竈の左側に設けられている。

南西部の一群はその北側には同時期の竪穴住居が存在せず、一つの群の最小単位と考えることが可能かと思われる。しかし、037Dと039はその近接具合から同時に存在していたとは考えにくく、また、050を通常の竪穴住居と考えるかどうかによるが、それらを考慮して3、4軒程度が一つの群を構成していたと考えることができる。

古墳時代Ⅱ期（第154図）

本時期に帰属する遺構は竪穴住居だけで、008B・017A・025・027・030・032・038・042・044の合計9軒である。また、溝005は少なくとも本時期以降には存在していたものと思われる。各竪穴住居の群は前時期のまとまりのなかでの移動と考えることができる。北東部の一群の2軒

は中央部寄りに移り、溝005が集落の東の境界を示しているかのようである。中央部の一群は台地の中央から南に下がり、傾斜部分に竪穴住居を営むようになる。このように、台地の平坦地から傾斜地に竪穴住居の占地場所が移る傾向は、腰巻遺跡や松向作遺跡[8]などでもみられる傾向である。南西部の一群はそれとは逆に台地に中央に向かってやや拡散するように竪穴住居を営むようになる。

竪穴住居の規模は025の床面積53.48㎡を除いて、前時期より小型になり15～30㎡のなかに納まるようになる。そのなかで床面積が17㎡前後の017Aと044は主柱穴をもたない。また、025は出土遺物の面では鉄鏃や勾玉などの土製玉類が多く出土しており、また竪穴住居の構造上では貯蔵穴に張り出し部を伴うなど、ほかの竪穴住居とやや趣を異にしている。各竪穴住居の主軸方向をみると038は東、017Aと032は北、そのほかはおおむね北西を向いている。貯蔵穴の位置は前時期と異なり竈の右側と対壁に設けられるものが多くなり、張り出し部を伴うものも存在する。

古墳時代III期（第155図）

本時期に帰属する遺構は、竪穴住居043・047の2軒だけで、溝005は本時期にも存在していたと考えられる。2軒の竪穴住居はいずれも中央部の一群に属するもので、前時期と同様に傾斜地に営まれている。

竪穴住居の規模は床面積では前時期のものと大きな差は認められない。前時期と同じように床面積が17㎡前後の047には主柱穴がみられない。

本時期を境に、今回調査を行った範囲内には遺構が存在しないが、最初にも述べたように、おそらく台地の中央部に移動しているものと思われる。

歴史時代Ⅰ期（第156図）

本時期に帰属する遺構は竪穴住居だけで、020B・023・028・031・041・065の合計6軒である。遺構の占地状況は北東部分にはみられず、中央部と南西部に集落が営まれる。基本的には台地の平坦部分に竪穴住居が営まれるが、中央部の041だけは傾斜地に営まれている。この中央部の傾斜地に1軒だけ竪穴住居が営まれる傾向は、本時期から始まり歴史時代IV期まで続くものである。

竪穴住居の規模は床面積で16㎡前後のものが中心で、023が32.63㎡と最も大きく、古墳時代III期以降確実に竪穴住居の規模が縮小していることが分かる。竈はすべて壁の中央に造られ、貯蔵穴はないものが多く、あるものは竈のある壁のコーナー寄りに作られる。主軸方向は北東や北西と一定の方向性はみられない。

本時期で注目されることは、規模的にもほかより大きい023から鎌・鉄鏃・鉄斧などの鉄製品

が集中的にみられ、須恵器杯をはじめとして土器類の出土量が多いことである。これらのもののなかには投棄されたものが多いとしても、遺構の規模や遺物の内容などからほかの竪穴住居とは多少異なった性格をもっていたと考えられる。

歴史時代II期（第157図）

本時期に帰属する遺構は、竪穴住居は004・020C・022A・024・029・033・040A・066・068・073の合計10軒と土坑077の1基である。遺構の占地状況は、本時期になるとふたたび北東部にも竪穴住居が営まれるようになり、南西部は平坦地と傾斜地の二つに群が拡散するようである。

竪穴住居の規模は床面積で、多くが7～14m²の範囲のなかに納まり、前時期よりさらに縮小化が進む。このなかで前時期よりは規模が小さいが、やはりほかに比べて大きい竪穴住居024(25.65m²）が存在している。この竪穴住居024は刀子・鉄鏃・鎌・帯金具などの鉄製品が集中して出土しており、須恵器類を中心に多量の土器が出土している。遺物の内容や出土状況などが、前時期の023ときわめて類似しており、023と同じような性格の竪穴住居と考えることができる。また、そのほかの竪穴住居からも刀子・鏃・穂摘具などの鉄製品がわずかずつではあるが出土しており、本時期以降この傾向が続くようである。主軸方向は024が南西方向を向くほかはおおむね北西方向を向くなど、ある程度の方向性がみられる。竈は検出できたものはすべて壁の中央に造られ、貯蔵穴は022Aと040Aを除いてみられず、本時期から貯蔵穴を作らないのが一般的になるようである。

歴史時代III期（第158図）

本時期に帰属する遺構は竪穴住居だけで、013・015・016・021・026・054・069・070の合計8軒である。竪穴住居の占地状況は、北東部の一群は3軒とも傾斜地に、中央部と南西部は平坦地と傾斜地に分かれて竪穴住居を営むようになる。

竪穴住居の規模は床面積で、前時期とほぼ同じ8～15m²の範囲内に納まる。本時期の竪穴住居のなかで最も規模の大きいものは026の20.90m²で、前時期の024の25.65m²より若干小さくなる。この026からは雁股式の鉄鏃や土製勾玉などが出土しているが、前時期の024などにみられたほどには同時期のほかの竪穴住居との大きな差異はみられない。主軸方向は北、北西、南東などと一定の方向性はみられない。竈は壁の中央に造られるものが多く、やや右に寄ったものが2軒あり、013のように竈を造らないものもある。貯蔵穴は016にのみみられ、前時期と同様に貯蔵穴を作らないのが一般的であるように思われる。また、主柱穴が全く存在しない竪穴住居が4軒もあり、1本しかないものも含めると半数以上になり、本時期の頃から上屋を支える構造に変化が生じてきたものと考えられる。

歴史時代Ⅳ期（第159図）

本時期に帰属する遺構は、竪穴住居は003・006・008A・009・012・014・017B・018・034・037B・037C・067・071・074の合計14軒、土坑は048の１基と、掘立柱建物６棟と柵列２基のうちのいくつかが帰属すると考えられる。掘立柱建物は本時期に帰属させる明確な根拠が存在しないが、前時期の竪穴住居026とは主軸方向が異なることと、南西部の平坦地に竪穴住居に代わって営まれるようになったものと推定し、本時期以降に帰属させることにした。前時期などと比べると竪穴住居も含めて遺構の数がかなり増えているが、これは本時期の時間幅がそれ以前とは異なり、50年間の幅をもっていることによるのであって、そのことを考慮しなくてはならない。

竪穴住居の占地状況は北東部と南西部に多くみられ、中央部は傾斜地に１軒のみが営まれる。北東部と南西部は前時期と同様に平坦地と傾斜地の二つに分けることができ、特に、南西部は掘立柱建物を中心とするようになるものと思われる。

竪穴住居の規模は床面積で、10㎡以下のものが中心で、最大の012でも14.88㎡しかなく、前時期に比べてもかなり竪穴住居の規模の縮小化が進んでいる。掘立柱建物の規模は柱内面積で10.50～17.96㎡で、竪穴住居と比較して飛び抜けて大きいとはいえない。竪穴住居の主軸方向は前時期と同様に特に一定の方向性はみられない。竈は009を除いてすべての竪穴住居に造られ、壁の中央部に造られるものが多い。主柱穴は前時期以上に１本もみられないものの割合が高く、主柱穴がみられるのは012と074だけである。貯蔵穴は034のみにみられ、貯蔵穴を作らないのが一般的である。

歴史時代Ⅴ期（第160図）

本時期に帰属する遺構は、竪穴住居は020B・035A・036・037A・046・075・076の７軒で、掘立柱建物と柵列は前時期と同様にいくつかが帰属すると考えられる。竪穴住居の占地状況は南東部が中心で、中央部は平坦地に１軒みられるのみで、北西部にはまったくみられない。南東部の竪穴住居の配置は、基本的に前時期の配置と類似した状況をみせている。

竪穴住居の規模は床面積で、すべて10㎡以下となっている。竈は大部分が壁の中央に造られているが、主柱穴や貯蔵穴は前時期と同様に、作られないものが一般的である。本時期を最後に、今回発掘調査を行った範囲内では、集落を営んだ痕跡はなくなり、これ以降は近世の遺構群の出現を待たなくてはならない。

以上各時期ごとに集落の変遷を概観してきたが、おおむね各時期ともに３軒前後の竪穴住居が最小単位となり、それらが複数集まって集落を形成していたことが分かる。出入口が明らかになった竪穴住居が少なく、仮に従来の竈の対壁をそれと考えると、必ずしも一つの最小単位

の竪穴住居に共通した方向性がみられるわけではない。これはたぶんに地形的な制約が考えられるが、それとともに集落内に存在していた「道」を想定する手がかりとなると考えられる。今回は充分な検討を行うことができなかったが、古墳時代II期以降竪穴住居が台地平坦面から谷津に向かった傾斜地に造られるようになり、集落から外へ向かう「道」の存在を示唆するものと考えられる。この谷津に向かった傾斜地に竪穴住居を造る傾向は、先にも述べたように腰巻遺跡や松向作遺跡にも共通したものである。

本事業地内のほぼ中央部を南北に古墳群が多数築かれており、墓域としての性格を強く示しているが、集落はそれらによって本遺跡を含む西側の集落群と池向遺跡や松向作遺跡などの東側の集落群に二分される。両者とも6世紀初頭から集落が営まれ、近隣の台地に広がるといった様相を示している。しかし、大きく異なる点は、東側の集落群は古墳群に隣接し、台地の縁辺部に営まれているのに対して、西側の集落群は古墳群とは明らかに分離されていることである。本遺跡の属する西側の集落群をみると、6世紀初頭にはタルカ作遺跡に集落が営まれ、若干遅れて本遺跡に集落が営まれるようになる。[9]その後6世紀後半から7世紀初頭には腰巻遺跡にも谷津に向かった傾斜地に集落が営まれる。8世紀以降にはタルカ作遺跡では基本的には集落はみられなくなるが、それに代わって六拾部遺跡に集落が営まれるようになる。六拾部遺跡は9世紀代には村落内寺院の存在が想定される集落であり、この集落の出現は大きな画期となるものと思われる。それに呼応するかのように、本遺跡でも竪穴住居に代わって集落の中心となるような掘立柱建物が建てられるようになる。

東側の集落群の中心となる池向遺跡とその古墳群は六拾部遺跡とともに現在整理中であるが、今後整理作業の進行とともに、本地域の集落の変遷と画期、集落と古墳群との関わりについてより明らかになっていくものと思われる。

註

1．『東金市久我台遺跡』「2節古墳時代から平安時代にかけての土器について」
（財）千葉県文化財センター　1988
『千葉市榎作遺跡』「IV調査のまとめ」　（財）千葉県文化財センター　1992

2．主任技師萩原恭一より教示を得た。

3．『佐倉市タルカ作遺跡』　（財）千葉県文化財センター　1985

4．現在整理中。佐倉第三工業団地内の最も東の台地上に所在し、立山遺跡の南、大作遺跡の南東に位置する。古墳時代以降の遺構は古墳63基、古墳時代後期の竪穴住居49軒のほか土坑墓が検出されている。集落は東側の台地縁辺部から斜面にかけて占地しており、平坦部は墓域となっている。竪穴住居から出土している土器のなかには、内外面に赤彩を施した体部の

深い椀形の杯類を中心として、須恵器杯蓋模倣杯を伴うなど、明らかにここでいう古墳時代Ⅰ期に先行する土器群をもつものが存在している。

5．『佐倉市腰巻遺跡』　（財）千葉県文化財センター　1987

6．『千葉県佐倉市　高崎新山遺跡発掘調査報告書』　（財）印旛郡市文化財センター　1987

7．現在整理中。南広遺跡の谷津を挟んで西に位置する。8世紀から9世紀を中心とする集落で、歴史時代の遺構は竪穴住居52軒、掘立柱建物11棟等が検出されている。1軒の竪穴住居からは瓦塔の一部、香炉の蓋、黒色処理を施された小壺などが多量の杯類とともに出土している。また、「白井寺」や「富」等の墨書土器が出土している。

8．『佐倉市松向作遺跡』　（財）千葉県文化財センター　1992

9．今回調査の及ばなかった北側の台地上にも6世紀初頭の竪穴住居が存在している可能性が充分考えられるので、そう仮定するとほぼ同時期に本遺跡でも集落が営まれたことになる。

参考文献

『日本考古学研究所紀要』Ⅳ「房総における鬼高期の研究（研究編）」村山好文ほか　1982

『岩富漆谷津・太田宿』　佐倉市教育委員会　1983

『論集日本原始』「鬼高式の細分をめぐって」　上野純司　1985

『平賀』平賀遺跡群発掘調査報告書　平賀遺跡群発掘調査会　1986

『六拾部遺跡発掘調査報告書』　佐倉市教育委員会　1986

『土器様式の成立とその背景』　西　弘海　1986

『房総における歴史時代土器の研究』　房総歴史考古学研究会　1987

『日本考古学研究所紀要』Ⅹ　「平賀遺跡群における古墳時代後期土器の再検討」　村山好文　1988

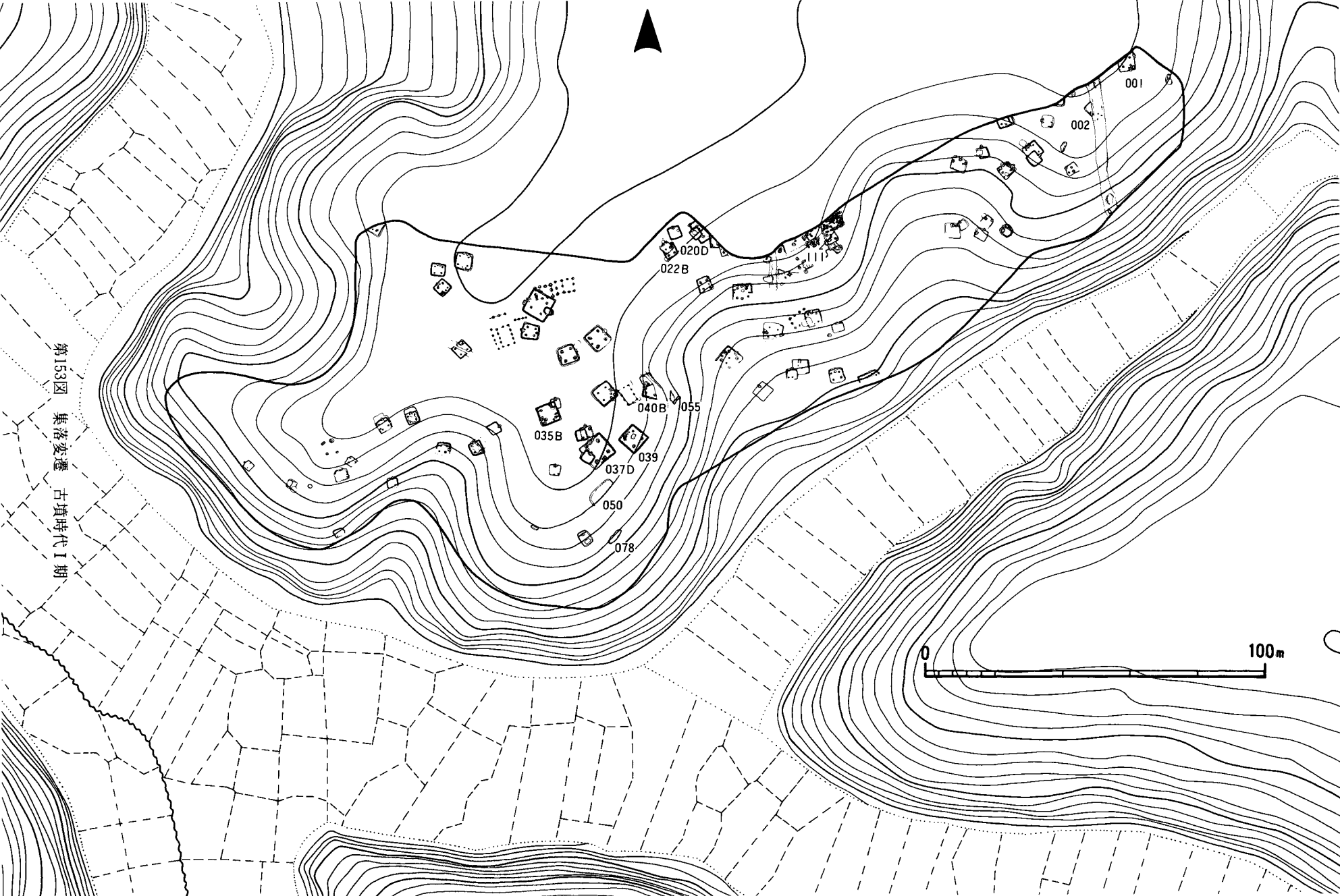
『東国土器研究』第2号　「神奈川・千葉県地域の赤彩土器・黒色土器について」　長谷川　厚　東国土器研究会　1989

『佐原市吉原三王遺跡』　（財）千葉県文化財センター　1990

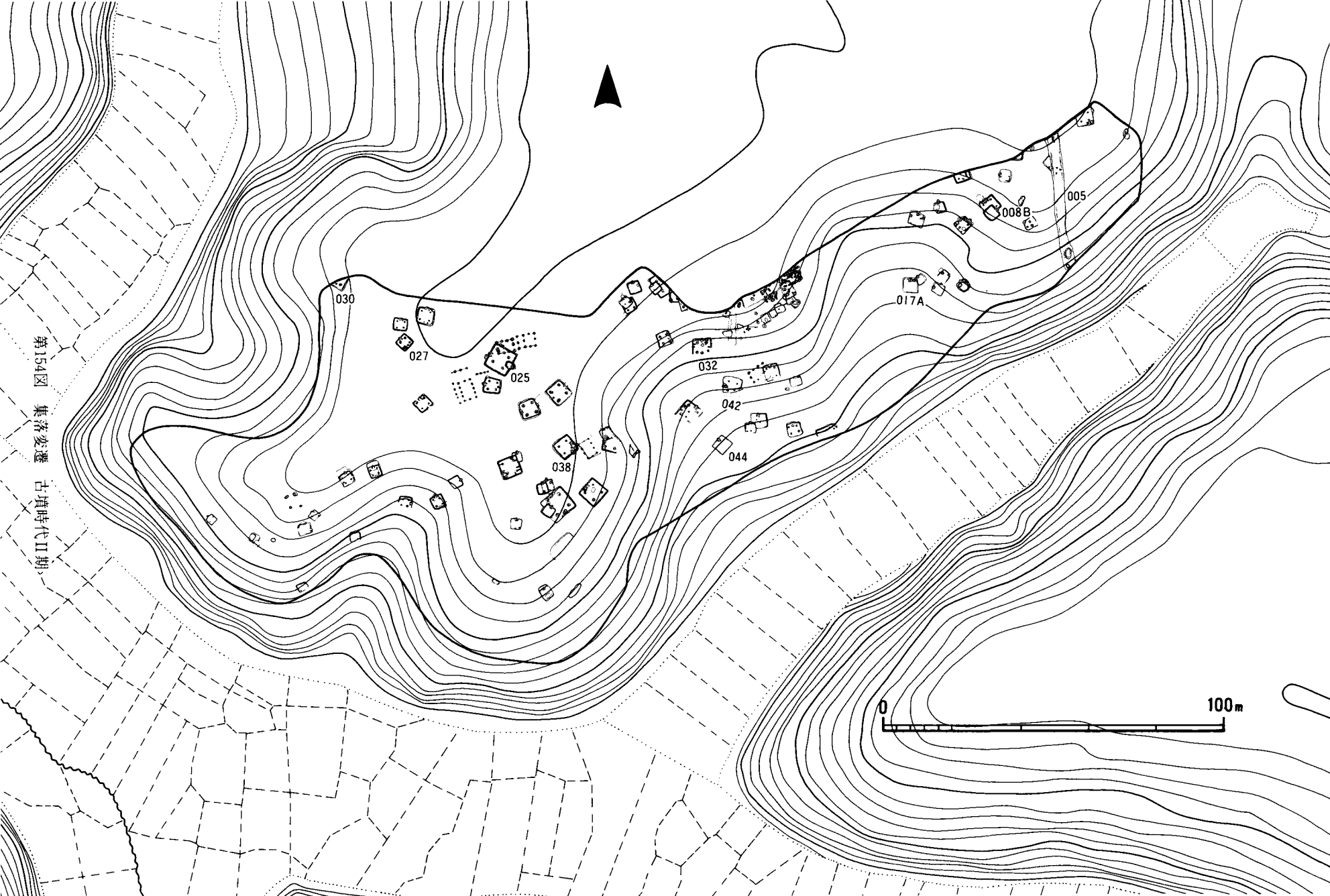
『千原台ニュータウン　Ⅳ　中永谷遺跡』　（財）千葉県文化財センター　1991

『古墳時代の研究　6土師器と須恵器』　「2土師器の編年　7関東」　長谷川　厚　雄山閣　1991

『古墳時代の研究　6土師器と須恵器』　「3須恵器の編年　5東海」　後藤建一　雄山閣　1991

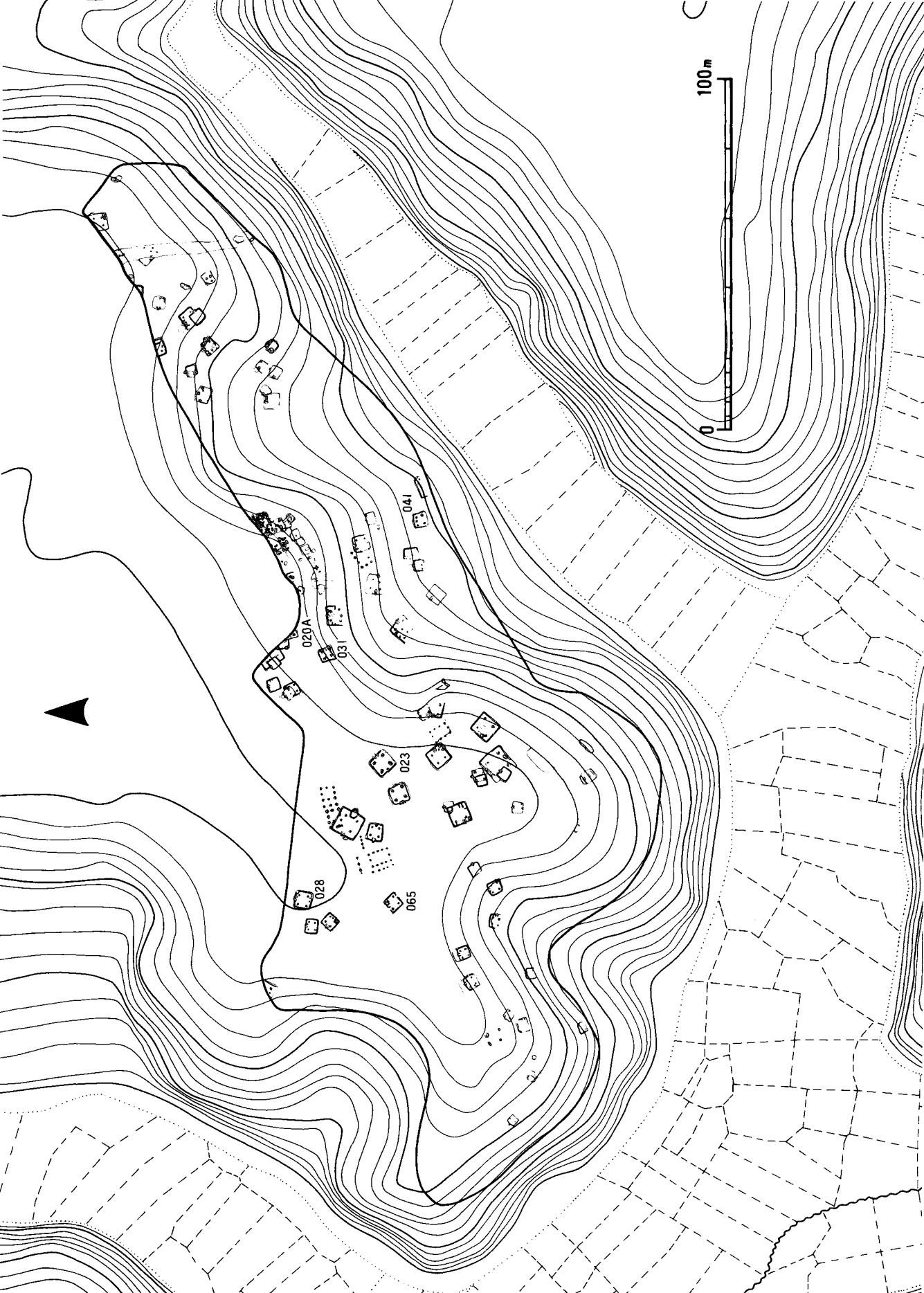


第153図　集落変遷　古墳時代Ⅰ期

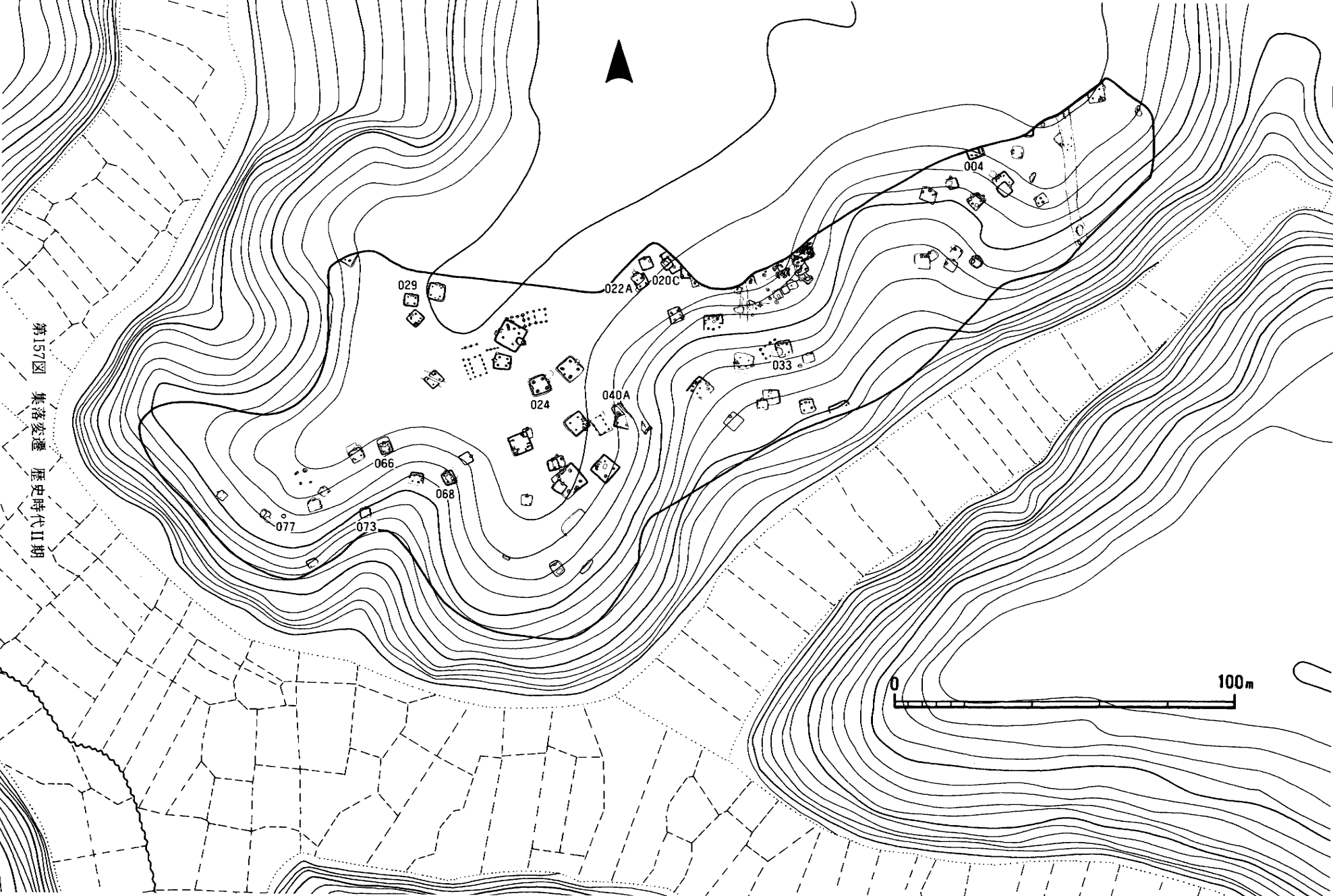


第154図　集落変遷　古墳時代Ⅱ期

第155図　集落変遷　古墳時代Ⅲ期

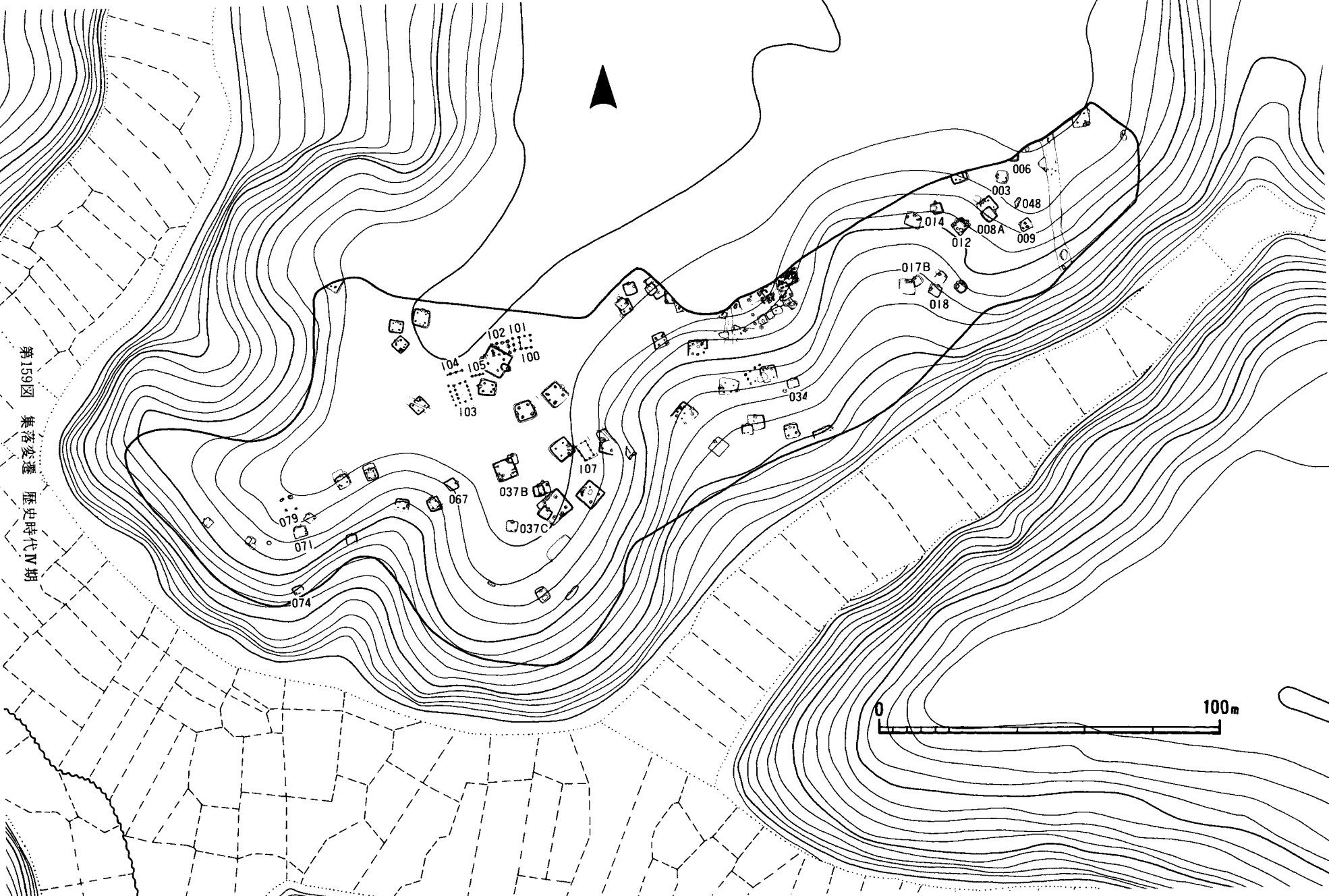


第156図　集落変遷　歴史時代Ⅰ期

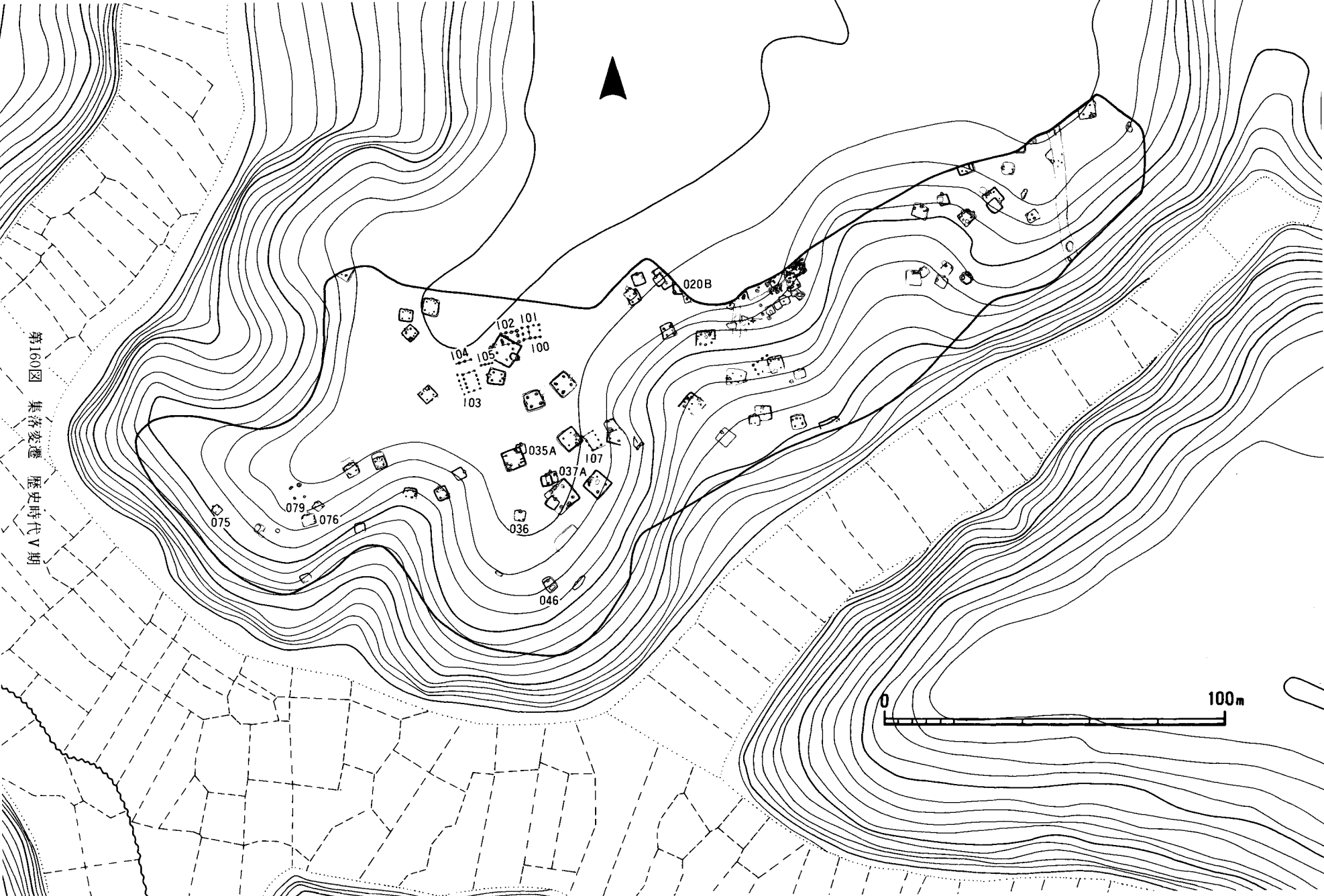


第157図　集落変遷　歴史時代II期

第158図　集落変遷　歴史時代III期



第159図　集落変遷　歴史時代Ⅳ期



第160図　集落変遷　歴史時代Ⅴ期

第4表　竪穴住居計測表

数値＝復元：（　）遺存：［　］長さ・深さ：m　面積：㎡　方位：N－W　間仕切溝：本数

遺構番号	主軸長×横軸長	方位	竈位置	床面積	柱内面積	壁　高 最大～最小	数	主柱穴 最深～最浅	出入口
001	5.16 × 5.12	198°	4	(25.22)	5.56	0.56～0.52	4	0.56～0.39	無
002	[3.10]×[3.75]					0.26～0.23	0	～	
003	3.56 × 3.70	84°	1	8.63		0.71～0.51	0	～	有
004	[2.81]× 4.95	20°				0.72～0.32	2	0.73～0.73	有
006	[2.03]×[2.50]					0.52～0.47		～	
008A	3.75 × 4.00	306°	1	12.17		0.82～0.17	0	～	無
008B	4.68 × 4.90	37°	1	(20.34)	7.08	0.78～0.30	4	0.53～0.36	無
009	3.00 × 3.71	37°	7	(9.30)		0.23～0.05	0	～	無
012	4.70 × 4.50	320°	1	14.88	6.38	0.89～0.14	4	0.76～0.28	有
013	4.22 × 4.50	343°	7	15.03		0.90～0.20	0	～	無
014	3.15 × 3.50	14°	1	7.85		0.71～0.29	0	～	無
015	3.54 × 3.42	40°	1	8.96		0.85～0.30	0	～	無
016	3.10 ×(3.70)	49°	2	(8.94)		0.57～0.00	0	～	無
017A	4.45 × 4.53	0°	1	(16.19)		0.48～0.41	0	～	無
017B	2.54 × 2.56	42°	1	(5.58)		0.35～0.05	0	～	無
018	3.21 × 3.10	64°	4	8.48		0.69～0.50	0	～	無
020A	[4.38]×[2.28]					0.39～0.14	1	0.50～	
020B	[3.80]×[2.72]					0.20～0.11		～	
020C	3.12 × 2.95	37°	4	8.07		0.50～0.22	0	～	無
020D	6.66 ×[3.82]	33°				0.43～0.11	2	0.96～0.80	
021	3.67 × 3.66	16°	1	11.86		0.44～0.20	0	～	無
022A	3.20 × 3.17	48°	1	7.62		0.46～0.30	0	～	無
022B	3.76 × 3.92	24°	6	(13.70)	3.75	0.15～0.10	4	0.65～0.43	無
023	6.10 × 6.17	317°	1	32.63	11.83	0.58～0.37	4	0.77～0.66	有
024	5.78 × 5.85	110°	1	25.65	8.36	0.76～0.50	4	0.60～0.41	無
025	7.30 × 7.54	58°	1	53.48	12.07	0.51～0.41	4	0.63～0.36	無
026	5.10 × 4.65	78°	1	20.90	5.42	0.55～0.40	4	0.55～0.50	有
027	4.10 × 4.09	46°	1	14.60	3.91	0.61～0.51	4	0.66～0.60	有
028	5.10 × 5.00	353°	1	22.56	6.70	0.51～0.35	4	0.44～0.29	有
029	3.68 × 4.15	352°	1	13.46	3.72	0.56～0.45	4	0.43～0.29	無
030	[4.27]×[4.00]					0.73～0.24	1	0.73～	有
031	3.90 × 4.33	283°	1	15.82	4.27	1.01～0.03	4	0.63～0.29	無
032	[4.90]× 5.57	0°	1		8.07	0.73～0.00	4	0.54～0.36	有
033	4.60 × 4.61	15°	1	(18.69)	(5.82)	0.60～0.00	3	0.44～0.31	有
034	2.80 × 3.43	18°	1	(7.74)		0.36～0.02	0	～	無
035A	3.09 × 2.95	7°	1	(7.20)		0.52～0.26	0	～	無
035B	6.04 × 6.05	117°	4	31.17	10.83	0.69～0.37	4	0.86～0.74	無
036	(3.25)×(3.30)	353°	1	9.43		0.34～0.05	1	0.28～	有
037A	3.55 ×(3.46)	13°	1	(10.43)		0.42～0.23	0	～	
037B	3.40 × 3.28	13°	1	9.22		0.63～0.35	0	～	有
037C	3.30 × 3.72	322°	1	9.85		0.86～0.74	0	～	無
037D	7.55 × 8.33	42°	1	56.75	16.58	0.93～0.60	4	0.88～0.32	有
038	6.02 × 6.00	308°	1	29.14	7.37	0.80～0.46	4	0.82～0.65	無
039	6.36 × 6.48	49°	1	37.38	11.66	0.89～0.13	4	0.72～0.60	無
040A	3.72 ×(3.66)	32°	1	(11.09)		0.78～	0	～	有
040B	[3.50]×[4.25]	74°	1			0.63～	2	～	
041	4.00 × 4.08	12°	1	15.54	4.14	0.74～0.60	4	0.46～0.26	無
042	5.50 ×(5.84)	83°	1	(26.79)	5.23	0.93～0.28	4	0.67～0.54	無

凡　例　竈位置　1：中央　2：右寄り　3：右角　4：左寄り　5：左寄り　6：破壊　7：無し
壁　溝　1：全周　2：半分以上　3：半分位　4：半分以下　5：無し
貯蔵穴　1：竈右脇　2：竈右上角　3：竈右下角　4：竈左下角　5：竈左上角　6：竈左脇　7：竈対壁　8：その他　9：無し

壁溝	間仕切溝	位置	貯蔵穴 長軸×短軸×深さ	時期	備　　考
5	0	5	0.85×0.73×0.48	古Ⅰ	南東コーナー部は調査区域外。
	0		× ×	古Ⅰ	大部分を溝005に破壊される。
4	0	9	× ×	歴Ⅳ	
2	1		× ×	歴Ⅱ	北側半分は調査区域外。
3			× ×	歴Ⅳ	北側半分以上は調査区域外。
1	0	9	× ×	歴Ⅳ	
2	0	6	0.74×0.58×0.51	古Ⅱ	南側コーナー部を008Aにより破壊。竈煙道部に攪乱。
5	0	9	× ×	歴Ⅳ	住居跡内に他にピット５。
3	0	9	× ×	歴Ⅳ	竈造り替え。旧竈は北壁中央。
5	0	9	× ×	歴Ⅲ	住居跡内に他にピット５。
3	0	9	× ×	歴Ⅳ	南東コーナー部に小ピット１。
2	0	9	× ×	歴Ⅲ	竈造り替え。旧竈は南東壁中央。新竈も破壊。
5	0	3	0.51×0.50×0.37	歴Ⅲ	南西側は斜面により消失。
5	0	1	0.82×0.58×0.33	古Ⅱ	
5	0	9	× ×	歴Ⅳ	
5	0	9	× ×	歴Ⅳ	竈造り替え。旧竈は北東壁中央。
4			× ×	歴Ⅰ	東側の大部分は調査区域外。
2			× ×	歴Ⅴ	東側は調査区域外。住居跡内に他にピット３。
1	0	9	× ×	歴Ⅱ？	
2		8	0.70×0.50×0.15	古Ⅰ	東側半分は調査区域外。
1	0	9	× ×	歴Ⅲ	
5	0	2	0.50×0.40×0.45	歴Ⅱ	
2	0	2	0.88×0.58×0.33	古Ⅰ	北西側を022Aにより破壊される。
2	0	9	× ×	歴Ⅰ	
1	0	9	× ×	歴Ⅱ	竈造り替え。旧竈は新竈の対壁中央。
1	0	7	0.88×0.80×0.58	古Ⅱ	貯蔵穴は張り出し部にあり、溝が伴う。
1	0	9	× ×	歴Ⅲ	
1	0	4	0.74×0.60×0.45	古Ⅱ	貯蔵穴に土手を伴う。
1	0	9	× ×	歴Ⅰ	住居内に他に小ピット１。
1	0	9	× ×	歴Ⅱ	
3			× ×	古Ⅱ	大部分が調査区域外。
2	0	5	0.60×0.54×0.15	歴Ⅰ	竈右コーナー部にもピット（貯蔵穴か）。
2	3	1	0.93×0.65×0.31	古Ⅱ	南側は斜面で消失。
2	0	9	× ×	歴Ⅱ	南側の一部は斜面により消失。
5	0	2	0.37×0.31×	歴Ⅳ	
5	0	9	× ×	歴Ⅴ	
1	5	5	1.00×0.68×0.63	古Ⅰ	北側コーナー部にも貯蔵穴。
5	0	9	× ×	歴Ⅴ	
5	0	2	0.87×0.60×0.30	歴Ⅴ	性格不明ピット２。
1	0	9	× ×	歴Ⅳ	
1	0	9	× ×	歴Ⅳ	
3	0	6	0.94×0.90×0.31	古Ⅰ	竈袖の右側にも貯蔵穴。
1	0	2	0.85×0.78×0.73	古Ⅱ	竈造り替え。旧竈は南東壁。
1	0	6	1.10×0.70×0.84	古Ⅰ	貯蔵穴は土手を伴う。
4	0	4	1.20×1.02×	歴Ⅱ	
3	0		× ×	古Ⅰ	東側半分を040Aに破壊される。
3	0	9	× ×	歴Ⅰ	
5	0	7	0.78×0.72×0.57	古Ⅱ	貯蔵穴は張り出し部を伴う。

数値＝復元：（ ）遺存：[ ] 長さ・深さ：m 面積：㎡ 方位：N－W 間仕切溝：本数

遺構番号	主軸長×横軸長	方位	竈位置	床面積	柱内面積	壁高 最大～最小	数	主柱穴 最深～最浅	出入口
043	(6.52)× 6.03	317°	2	(34.29)	12.06	1.11～0.00	4	0.91～0.58	無
044	4.23 × 4.50	52°	2	17.69		0.39～0.10	0	～	無
046	3.80 × 3.42	35°	1	9.56		0.77～0.38	0	～	無
047	4.34 × 4.70	0°	1	(17.18)		0.77～0.36	0	～	無
050	[3.52]× 8.56					0.41～0.00	0	～	
054	3.58 × 3.16	5°	1	(8.44)		0.43～0.16	1	0.10～	有
058	[1.42]× 5.74					0.25～0.00	0	～	無
065	4.80 × 4.26	52°	1	(16.52)	5.34	0.50～0.37	4	0.75～0.43	無
066	3.53 × 3.70	19°	1	11.47	3.55	0.85～0.20	4	0.61～0.42	無
067	3.30 × 3.48	298°	1	10.12		0.45～0.09	0	～	無
068	4.20 × 3.70	38°	1	12.89	3.66	0.85～0.72	4	0.53～0.41	無
069	3.98 ×(3.82)	259°	1	(13.15)	3.15	0.82～0.00	4	1.19～0.36	無
070	3.86 × 4.12	29°	2	13.15	3.55	0.65～0.09	4	0.49～0.39	有
071	4.03 × 3.82	289°	2	10.64		0.87～0.03	0	～	無
073	(2.96)× 3.10	0°	1	(8.00)		0.64～0.00	1	0.56 ～	無
074	3.40 × 2.34	295°	1	(6.26)		0.54～0.00	1	0.15～	無
075	2.47 × 2.64	315°	4	5.30		0.72～0.09	0	～	有
076	[2.56]× 2.80	48°	1	(6.95)		0.42～0.00	2	0.24～0.17	無
110	[2.22]×[2.80]					0.36～0.18		～	

凡 例 竈位置 1：中央 2：右寄り 3：右角 4：左寄り 5：左寄り 6：破壊 7：無し
壁 溝 1：全周 2：半分以上 3：半分位 4：半分以下 5：無し
貯蔵穴 1：竈右脇 2：竈右上角 3：竈右下角 4：竈左下角 5：竈左上角 6：竈左脇 7：竈対壁 8：その他 9：無し

第5表 玉類観察表

数値＝復元：（ ） 遺存：[ ] 単位＝長さ・径：mm 重さ：g

遺構番号	挿図番号	実測番号	遺物番号	種 類	長 さ	断面径	最大孔径	最小孔径	重 さ	色 調	材 質	備 考
001	3	6	13	勾玉	30.0	13.0	3.4	2.1	4.27	赤褐色	土製	尾部一部欠損。
001	4	5	12	管玉	[16.0]	7.0	1.5	1.0	[0.86]	黒色	土製	一部欠損。
017A	21	20	11	管玉	27.0	9.0	1.5	1.0	2.07	赤褐色	土製	完形。
017A	22	22	114	臼玉	4.0	4.5	2.0	1.0	[0.08]	黒色	土製	一部欠損。
017A	23	21	113	琥珀玉	[4.0]	[10.2]	4.0	1.0	[0.19]		琥珀	30%遺存。
025	9	24	165a	勾玉	35.0	11.0	2.5	1.5	6.09	黒色	土製	完形。
025	10	25	165b	勾玉	30.0	10.0	2.5	1.5	4.33	茶褐色	土製	完形。
025	11	26	165c	勾玉	28.0	9.5	2.5	1.0	3.76	茶褐色	土製	一部欠損。
025	12	27	165d	勾玉	28.0	9.0	3.0	2.0	3.23	黒色	土製	完形。
025	13	28	165e	勾玉	26.0	10.0	2.0	1.5	3.08	茶褐色	土製	完形。
025	14	18	138	勾玉	[12.0]	11.0	(2.0)		[1.72]	黒色	土製	頭部50%遺存。
025	15	29	165f	勾玉	[27.0]	11.5	3.0	2.0	[3.84]	暗茶褐色	土製	尾部欠損。
025	16	21	157	勾玉	[26.0]	9.0	3.0	2.5	[2.07]	黒色	土製	頭部50%欠損。
025	17	22	154	棗玉	[27.0]	[12.8]	(3.0)	(2.))	[3.49]	黒色	土製	25%遺存。
025	18	43	75	棗玉	26.5	13.0	3.0	2.5	3.95	黒色	土製	完形。
025	19	17	131	臼玉	7.0	10.0	2.5	1.5	0.75	暗赤褐色	土製	完形。
025	20	32	168	臼玉	10.0	10.0	2.5	1.0	0.73	黒色	土製	一部欠損。
025	21	39	188	丸玉	7.5	7.5	2.0	1.5	0.37	赤褐色	土製	完形。
025	22	34	170	丸玉	6.5	8.5	2.5	2.0	0.41	黒色	土製	完形。
025	23	23	156	丸玉	7.0	9.0	2.0	1.5	0.43	暗茶褐色	土製	一部欠損。
025	24	20	144	丸玉	8.0	8.5	2.0	1.0	0.42	赤褐色	土製	完形。
025	25	40	190	丸玉	7.0	9.0	2.0		0.57	赤褐色	土製	完形。
025	26	38	177	丸玉	6.0	9.0	2.5	1.0	0.38	赤褐色	土製	完形。
025	29	19	142	勾玉	[17.0]	[10.0]	3.0		[0.48]	明褐色	土製	実測図なし。
025	30	30	165g	勾玉	[20.0]	9.0			[1.65]	黒色	土製	実測図なし。

壁溝	間仕切溝	位置	貯蔵穴 長軸×短軸×深さ	時期	備考
3	0	8	1.18×0.80×0.60	古III	南側は斜面により消失。
5	0	9	× ×	古II	竈前に土手を伴う。
5	0	9	× ×	歴V	竈壁上面にテラス状の浅い掘り込み。
4	0	9	× ×	古III	住居跡中央部に小ピット2。
5	0		× ×	古I	南東側は斜面により消失。
3	0	9	× ×	歴III	
4	0		× ×	不明	南東側は斜面により消失。
2	0	2	0.40×0.38×0.11	歴I	北コーナー部のみ壁溝が切れる。
2	0	9	× ×	歴II	竈壁上面にテラス状の浅い掘り込み。
2	0	9	× ×	歴IV	
1	0	9	× ×	歴II	
3	0	9	× ×	歴III？	南側は斜面により消失。
2	0	9	× ×	歴III	竈造り替え。旧竈は北東壁中央。
4	0	9	× ×	歴IV	
2	0	9	× ×	歴II	南側は斜面により消失。
3	0	9	× ×	歴IV	南東側は斜面により消失。
5	0	9	× ×	歴V	竈造り替え。旧竈は北西壁中央。
5	0	1	0.30×0.30×0.16	歴V	南東側は斜面により消失。
4		2	0.82×0.70×0.61	不明	大部分が019により破壊され、北側は調査区域外。

025	31	31	166	臼玉	[17.0]		(3.0)			黒色	土製	実測図なし。
025	32	33	169	勾玉	[20.0]	10.0			[1.52]	黒色	土製	実測図なし。
025	33	35	174	勾玉	[19.0]	11.0			[2.18]	褐色	土製	実測図なし。
025	34	36	175	丸玉						暗赤褐色	土製	小破片。実測図なし。
025	35	37	176	臼玉	6.0		(1.5)			暗赤褐色	土製	実測図なし。
026	14	20	80	勾玉	[26.0]	11.0	(2.0)		[4.51]	黒色	土製	頭部欠損。
027	9	18	123	管玉	18.5	8.0	2.0	1.5	1.34	赤褐色	土製	完形。
027	10	13	58	丸玉	9.0	11.5	1.5	1.0	1.07	黒色	土製	完形。
027	11	15	60	丸玉	10.5	11.5	2.0	1.5	1.27	黒色	土製	一部欠損。
027	12	16	61	丸玉	10.0	12.0	2.0	1.5	[1.39]	黒色	土製	一部欠損。
027	13	17	62	丸玉	10.5	11.5	2.0	1.5	[1.26]	黒色	土製	一部欠損。
027	14	14	59	丸玉	12.0	12.5	2.0	1.5	[1.28]	黒色	土製	20%欠損。
035B	15	19	43	丸玉	9.0	13.0	2.5	1.5	1.33	黒色	土製	完形。
037D	7	6	5	臼玉	21.0	15.0	3.0	2.0	[3.60]	黒褐色	土製	一部欠損。
037D	8	11	56	管玉	[13.5]	7.0	2.0		[0.49]	赤褐色	土製	一部欠損。
037D	9	10	54	丸玉	8.0	8.0	2.5	1.5	0.38	赤褐色	土製	完形。
037D	10	12	60	丸玉	9.0	10.5	2.5	2.0	0.73	赤褐色	土製	完形。
037D	11	14	62	丸玉	8.5	10.0	0.8		0.70	赤褐色	土製	完形。
037D		15	63	丸玉	[8.0]	[8.0]	1.0		[0.24]	淡褐色	土製	30%遺存。実測図なし。
038	8	8	42	勾玉	[19.0]	6.0	1.0		[0.71]	黒色	土製	尾部欠損。
042	14	20	11	勾玉	[32.0]	13.0	1.5	1.0	[4.21]	白色	滑石	頭部一部欠損。
タ6-25	48	7	175	勾玉	[25.0]	12.0	2.0	1.5	[3.56]	赤褐色	土製	尾部欠損。
ワ9-10	49	3	3	丸玉	6.5	9.5	2.5		0.85	灰白色	滑石	完形。
ワ9-10	50	1	1	臼玉	2.0	6.5	3.0		0.09	灰白色	滑石	完形。
ワ9-10	51	2	2	臼玉	2.0	6.0	2.0		0.08	灰白色	滑石	一部欠損。

第6表　土器観察表（古墳時代）

数値＝復元：（　）　現存：［　］　遺存度：％　口径・底径・器高：cm　容量：cm³

遺構番号	挿図番号	実測番号	器種名	分類	遺存度	口径	底径	器高	容量	色調	備考
001	1	1	土師器杯	B1a	50	(13.2)		5.1	(425.0)	明褐色	内外面上部赤彩。
001	2	3	土師器杯	C2b	35	(12.3)		[3.3]		明褐色	全面赤彩。
002	1	2	土師器杯	B2	35	(13.4)		[4.5]		明褐色	内外面上部赤彩。
002	2	1	土師器壺		35	(10.4)		[7.1]		明褐色	
002	3	4	土師器高杯		10			[3.2]		淡黄色	外面赤彩。
002	4	3	土師器甕		10		(5.0)	[2.0]		明褐色	
008B	1	1	土師器杯	D2b	45	13.8		[6.4]	(430.9)	暗褐色	内外面黒色処理。
008B	2	2	土師器小型土器		100	3.3		2.8		褐色	
017A	1	12	土師器杯	D2b	80	13.5		4.5	380.9	褐色	内外面黒色処理。
017A	2	14	土師器杯	D3c	25	(16.2)		[3.9]	(479.4)	暗褐色	
017A	3	13	土師器杯	B2	20	(13.6)		[4.4]		明赤色	底部を除き内外面赤彩。
017A	4	11	土師器杯	C1b	80	12.8		3.7	354.4	明褐色	内外面黒色処理。
017A	5	10	土師器杯	C1b	100	12.2		3.0	239.8	暗黄色	
017A	6	9	土師器杯	F	70	11.3		7.9	714.0	褐色	内外面黒色処理。
017A	7	8	土師器鉢		45		8.8	[9.7]	(1167.1)	赤色	
017A	8	2	土師器甕	A2	25	(21.5)		[15.0]		褐色	
017A	9	3	土師器甕	B1	40	(17.5)		[16.0]		明褐色	
017A	10	4	土師器甕	B1	25	18.0		[10.4]		暗褐色	
017A	11	7	土師器甕	A2	95	14.8	7.8	25.3	6678.8	暗褐色	
017A	12	5	土師器甕		15	(18.0)		[6.0]		褐色	
017A	13	6	土師器甕		25	15.1		[5.3]		暗褐色	
017A	14	1	土師器甑	B2	65	20.4	(6.9)	16.8	(2810.3)	褐色	
020D	1	5	土師器杯	D3a	80	(15.2)		4.6	(507.5)	淡黄色	底部外面を除き赤彩。
020D	2	3	土師器杯	D2a	98	14.4		5.0	406.5	淡黄色	内外面上部赤彩。
020D	3	4	土師器杯	C2a	98	12.2		5.5	386.6	淡黄色	内外面上部赤彩。
020D	4	6	土師器杯	D1	30	(16.6)		[5.3]		淡黄色	底部外面を除き赤彩。
020D	5	2	土師器杯	D2b	90	13.4		4.8	365.1	明褐色	内外面黒色処理。
020D	6	8	土師器甕		20	(12.8)		[6.1]		暗赤色	外面赤彩。
020D	7	1	土師器甕	A1	50	17.8	(8.0)	(30.0)		暗黄色	
022B	1	1	土師器杯	B2	80	13.6		4.6	424.4	暗黄色	内外面赤彩。内面①状。
022B	2	2	土師器甑	A2	30	(16.4)	(5.2)	17.1	(2348.3)	明褐色	一孔形態。
025	1	10	土師器杯	D3b	50	(13.9)		4.4		暗赤色	外面と口縁部内面の一部赤彩。
025	2	11	土師器杯	D3d	40	(14.0)		4.4		暗黄色	
025	3	8	土師器杯	C1b	45	(12.2)		4.3		褐色	内外面黒色処理。
025	4	6	土師器杯	C1b	65	(12.5)		[4.0]		褐色	内外面黒色処理。
025	5	5	土師器杯	C1b	98	12.3		3.8		褐色	内面黒色処理。
025	6	7	土師器杯	C1c	98	10.5		3.9		暗褐色	内外面黒色処理。
025	7	1	土師器甑	B1	30	(21.3)	7.0	20.1		褐色	一孔形態。
027	1	6	土師器杯	C1a	30	(13.8)		[7.0]	(736.4)	褐色	内外面赤彩。
027	2	8	土師器杯	D2b	35	(14.2)		[5.2]	(484.3)	暗褐色	内外面黒色処理。
027	3	5	土師器杯	H	55	(10.2)		[4.3]	(232.0)	褐色	
027	4	1	土師器甕	A2	95	17.9	7.4	27.7	7348.9	暗褐色	
027	5	3	土師器甕		20	(19.4)		[3.6]		淡黄色	
027	6	2	土師器甕		20	(13.6)		[7.2]		褐色	
027	7	4	土師器甕		10		6.1	[1.7]		明褐色	
027	8	11	土師器小型土器		40	(7.4)	4.5	6.0	(101.0)	褐色	
030	1	2	土師器杯	C1b	20	(12.0)		[3.4]		褐色	内外面黒色処理。
032	1	7	土師器杯	B1b	25	(12.3)		4.9	(324.7)	褐色	内外面黒色処理。
032	2	5	土師器杯	A2	85	14.9		6.2	579.6	暗褐色	

数値＝復元：（ ） 現存：[ ] 遺存度：% 口径・底径・器高：cm 容量：㎤

遺構番号	挿図番号	実測番号	器種名	分類	遺存度	口径	底径	器高	容量	色調	備考
032	3	4	土師器杯	G	45	(16.4)	(10.8)	10.2	(1598.8)	明褐色	
032	4	6	土師器鉢		80	12.6	5.3	6.9	(449.8)	明褐色	
032	5	3	土師器鉢		98	20.5	6.8	12.2	2157.1	赤色	
032	6	1	土師器甕	A2	90	19.3	8.1	25.4	6946.8	暗褐色	
032	7	2	土師器甕	C1	98	17.2	7.4	21.6	2828.6	赤色	
035B	1	8	土師器杯	B1a	100	13.3		5.4	413.9	暗黄色	内外面上部面赤彩。
035B	2	10	土師器杯	B1a	70	12.8		5.0	376.8	明褐色	底部内外面を除き赤彩。
035B	3	12	土師器杯	C1b	25	(13.1)		[4.6]	(400.9)	明褐色	底部外面を除き赤彩。
035B	4	11	土師器杯	D1	50	14.2		4.8	371.8	褐色	全面赤彩。
035B	5	9	土師器杯	D3a	60	(15.0)		(4.6)	(457.3)	明赤色	内面と口縁部外面赤彩。
035B	6	13	土師器杯	D3a	20	(16.2)		[4.0]		淡黄色	内外面黒色処理。
035B	7	7	土師器杯	A1	65	12.2		8.1	773.1	明褐色	底部内外面を除き赤彩。
035B	8	18	土師器小型土器		85	4.4	3.8	1.3		褐色	
035B	9	1	土師器甕	A2	90	20.7	7.5	28.7	7253.1	暗赤色	
035B	10	5	土師器甕	C2	75	(11.8)	6.3	18.5	(2157.4)	淡黄色	
035B	11	6	土師器甕		65		6.3	[12.2]		暗赤色	
035B	12	4	土師器甑	B1	100	24.8	6.6	19.7	4270.7	明赤色	一孔形態。
035B	13	3	土師器甑	A1	100	22.0	7.2	24.2	4666.6	明褐色	一孔形態。
035B	14	2	土師器甑	B1	100	23.4	7.4	21.8	4740.5	明褐色	一孔形態。
037D	1	1	土師器杯	D3b	50	14.6		4.5	383.9	褐色	内外面上部赤彩。
037D	2	5	土師器小型土器		30	(5.4)	(3.8)	3.2	(27.7)	淡黄色	
037D	3	3	土師器甕		20		6.7	[2.2]		明褐色	
037D	4	4	土師器甕		20		5.8	[1.7]		明褐色	
038	1	6	土師器杯	B3	40	(13.6)		4.3	(326.0)	褐色	底部外面を除き赤彩。
038	2	7	土師器杯	B1b	55	(12.4)		5.4	(414.4)	暗褐色	内面黒色処理。
038	3	5	土師器甕	B1	10	(13.8)		[6.5]		褐色	
038	4	2	土師器甕	A2	25	(15.2)		[9.9]		暗褐色	
038	5	4	土師器甕		20	(16.0)		[9.8]		明褐色	
038	6	1	土師器甕		50		7.2	[14.4]		明褐色	
038	7	3	土師器甑		15	(30.8)		[8.1]		明褐色	
039	1	5	土師器杯	B1a	100	11.0		4.7	(167.3)	明褐色	底部外面を除き赤彩。
039	2	4	土師器杯	A3	100	12.8		5.8	506.9	明褐色	内外面上部赤彩。
039	3	7	土師器杯	A2	20	(13.4)		[4.3]		明褐色	底部外面を除き赤彩。
039	4	6	土師器杯	C1b	30	(13.0)		4.4	(333.8)	褐色	底部外面を除き赤彩。
039	5	1	土師器甕	B1	20	(18.2)		[11.8]		暗赤色	
039	6	3	土師器甑		25		(7.4)	[8.2]		明褐色	一孔形態。
040B	1	3	土師器杯	D2a	85	13.7		5.0	354.4	明褐色	底部外面を除いて赤彩。
040B	2	4	土師器杯	D2a	25	(14.6)		[4.4]		明褐色	内面と口縁部外面赤彩。
040B	3	7	土師器杯	D3a	35	(14.4)		4.3	(420.4)	暗褐色	内外面黒色処理。
040B	4	2	土師器杯	D1	100	16.4		6.1	578.5	暗黄色	底部内外面を除き赤彩。
040B	5	10	土師器高杯		45			[8.1]		明褐色	
040B	6	1	土師器壺		50	(13.0)		[16.9]		褐色	
042	1	5	土師器杯	B2	60	(13.4)		4.9	(436.6)	褐色	口縁部内外面赤彩。
042	2	4	土師器杯	D2b	70	13.2		4.8	380.9	暗黄色	
042	3	8	土師器杯	C2b	30	(14.1)		4.6	(395.3)	暗褐色	口縁部内外面赤彩。
042	4	6	土師器杯	C2a	60	12.6		4.8	378.9	褐色	内外面黒色処理。
042	5	2	土師器杯	C2b	100	13.6		4.3	374.8	明褐色	
042	6	10	土師器杯	C2b	20	(13.2)		[3.9]	(393.4)	褐色	
042	7	14	土師器杯	C2b	20	(13.8)		[3.7]		淡黄色	
042	8	7	土師器杯	D3d	45	(12.6)		[3.2]	(239.3)	褐色	

数値＝復元：（ ） 現存：[ ] 遺存度：% 口径・底径・器高：cm 容量：cm³

遺構番号	挿図番号	実測番号	器種名	分類	遺存度	口径	底径	器高	容量	色調	備考
042	9	3	土師器杯	C1a	35	(14.0)		[8.0]	(960.5)	暗褐色	内外面黒色処理。
042	10	9	土師器杯		20	(13.6)		[7.8]	(946.9)	褐色	
042	11	1	土師器甕		70		6.2	[19.3]		暗赤色	
042	12	17	土師器甕		20		6.4	[3.1]		暗褐色	
043	1	9	土師器杯	C1c	60	11.4		[4.3]	(258.0)	暗褐色	内外面赤彩。
043	2	7	土師器杯	E	85	13.0		5.0	330.3	明褐色	底部外面に「＋」のヘラ記号。
043	3	11	土師器杯	D3c	20	(14.8)		[3.3]		暗褐色	
043	4	10	土師器杯	E	40	(13.6)		[4.2]	(279.2)	褐色	底部外面に「＋」のヘラ記号。
043	5	8	土師器杯	E	70			[3.2]		暗褐色	底部外面に「＋」のヘラ記号。
043	6	1	土師器甕	B2	90	14.1	6.4	23.3	2847.3	褐色	
043	7	2	土師器甑		40		8.6	[11.7]		暗褐色	一孔形態。
044	1	5	土師器杯	C1b	98	12.9		4.1	331.5	暗褐色	内外面黒色処理。
044	2	6	土師器杯	C2b	98	13.4		4.3	332.6	暗褐色	内外面黒色処理。
044	3	7	土師器高杯		30			[3.9]		褐色	
044	4	3	土師器甕	C3	85	13.5	7.6	16.7	2474.8	暗褐色	
044	5	2	土師器甕	A2	95	16.5	7.5	26.1	6871.2	暗褐色	
044	6	1	土師器甑	B1	95	27.7	8.7	25.8	8165.7	明褐色	一孔形態。
047	1	35	須恵器蓋		20	12.2		3.8		青灰	
047	2	27	土師器杯	B3	60	(11.6)		5.1	(282.1)	褐色	
047	3	26	土師器杯	C1b	85	12.4		4.1	327.1	明褐色	内面黒色処理。
047	4	28	土師器杯	D4	25	(11.6)		3.6	(213.5)	明褐色	
047	5	25	土師器杯	D3d	100	13.4		4.6	299.0	褐色	
047	6	37	土師器杯		25	17.3		3.5		明褐色	外面赤彩。内面黒色処理。
047	7	36	土師器杯		25	20.2		7.6		赤褐色	
047	8	30	土師器鉢		25	(12.8)	(8.8)	[4.9]		褐色	
047	9	23	土師器鉢		90	10.7	6.2	6.2	261.1	明褐色	
047	10	24	土師器高杯		90	11.9		9.5	233.4	暗褐色	杯部内面黒色処理。
047	11	22	土師器壺		70		4.9	[9.1]		明褐色	
047	12	3	土師器甕	B1	90	17.7	7.9	26.6	6054.9	暗褐色	
047	13	7	土師器甕	B1	35	15.2		[5.2]		暗褐色	14と同一個体。
047	14	12	土師器甕	B1	20		6.2	[6.4]		暗褐色	13と同一個体。
047	15	8	土師器甕		30	15.6		[4.2]		明褐色	
047	16	13	土師器甕	B1	25	(15.0)		[6.2]		褐色	
047	17	6	土師器甕		40	13.0		[9.1]		暗褐色	
047	18	4	土師器甕	B2	90	15.1	7.8	22.3	2847.6	暗褐色	
047	19	2	土師器甕	A1	60	18.6		[19.8]		明褐色	外面赤彩。
047	20	5	土師器甕	A2	30	(15.6)		[13.3]		暗褐色	
047	21	10	土師器甕		30		7.4	[5.4]		暗褐色	
047	22	19	土師器甕		25		7.4	[2.6]		暗褐色	
047	23	17	土師器甕		25		7.8	[3.1]		明褐色	
047	24	33	土師器甕		20		6.8	[6.5]		褐色	
047	25	1	土師器甑	B1	95	26.2	8.6	23.6	5528.9	明褐色	
050	1	1	土師器杯	D3b	70	15.0		4.8	444.8	淡黄色	底部除く内面と口縁部外面赤彩。
055	1	2	土師器杯	A2	85	12.8		5.4	362.0	淡黄色	底部外面を除いて赤彩。
055	2	1	土師器甕	B2	45	(16.4)	(7.2)	27.7	(4962.3)	明褐色	
078	1	2	土師器杯	D2a	95	14.2		5.2	497.1	暗褐色	口縁部外面と内面上部赤彩。
078	2	3	土師器杯	D2a	98	14.2		5.4	466.1	暗褐色	底部内外面を除き赤彩。
078	3	1	土師器鉢		25	(9.0)	(6.8)	10.2	(465.8)	暗黄色	体部外面ハケ目痕。
111	1	6	土師器杯	A2	70	13.8		5.3	492.1	褐色	内外面赤彩。
005	1	2	須恵器杯		30	(15.2)	(9.6)	[7.0]	(690.7)	灰色	
005	2	1	土師器杯	D1	60	16.2		[6.0]	637.4	淡黄色	底部内外面を除き赤彩。
005	3	7	土師器杯	C1a	25	12.4		[6.5]		淡黄色	底部外面を除き赤彩。
005	4	6	土師器杯	B3	25	(13.0)		[4.0]	(248.4)	明褐色	
005	5	8	土師器杯	D2c	25	(13.1)		[4.6]	(347.3)	明赤色	
005	6	4	土師器高杯		30			[5.1]		明褐色	外面赤彩。
005	7	3	須恵器長頸壺		30			[9.6]		灰色	外面の一部に釉。

第７表　土器観察表（歴史時代）

数値＝復元：（　）　現存：［　］　遺存度：％　口径・底径・器高：cm　容量：cm³

遺構番号	挿図番号	実測番号	器種名	分類	遺存度	口径	底径	器高	容量	色調	備考
003	1	5	須恵器杯	i	100	12.1	7.1	4.0	237.1	青灰色	
003	2	9	須恵器杯	k	30	(12.4)	(7.8)	3.8	(275.0)	黄褐色	
003	3	12	須恵器杯	i	35		7.6	[3.3]		黒色	
003	4	6	須恵器杯	i	90	13.3	7.8	4.0	304.6	黒色	重ね焼きB。
003	5	4	須恵器杯	i	100	13.1	7.6	4.2	308.1	黒色	内外面に油煙付着。重ね焼きB。
003	6	10	土師器杯	N	60	12.2	6.2	4.0	223.2	暗褐色	
003	7	8	土師器杯	I	55	12.5	7.8	3.7	251.7	褐色	
003	8	16	土師器杯		20	(13.8)		[3.5]		暗黄色	
003	9	13	土師器杯		40		[7.0]	3.4		明褐色	
003	10	14	土師器杯		25		6.2	[1.1]		暗褐色	
003	11	11	土師器杯		35		7.5	[1.7]		黄色	底部内外面「周」墨書。
003	12	7	土師器杯	P	35	(15.9)	8.4	5.1	(607.5)	暗黄色	内面黒色処理。
003	13	1	土師器甕		25	(22.6)		[23.0]		暗褐色	
003	14	2	土師器甕		30	20.4		[8.0]		明褐色	
003	15	3	土師器甕		75		8.0	[8.2]		暗褐色	底部木葉痕。
004	1	4	須恵器杯	e	65	14.0	9.2	3.4	(272.3)	灰色	底部に焼成前「キ」？ ヘラ記号。
004	2	11	須恵器杯		25	(15.0)	(7.8)	[4.0]		灰色	
004	3	5	土師器杯	B	70	13.2	8.8	4.1	292.4	暗黄色	
004	4	7	土師器杯	B	65	(13.3)	(8.3)	3.5	(250.3)	淡黄色	
004	5	9	土師器杯	B	45	(12.6)	(8.7)	[4.1]	(270.0)	黄褐色	
004	6	3	土師器杯	B	90	13.5	10.5	3.5	297.6	褐色	
004	7	8	土師器杯	F	50	(15.3)	8.4	4.2	(405.5)	明褐色	内外面赤彩。
004	8	6	土師器杯	G	55		7.5	[3.0]		暗黄色	全面赤彩。
004	9	10	土師器杯		25		(8.8)	[1.9]		明褐色	全面赤彩。
004	10	2	土師器甕		25	(19.3)		[18.0]		暗黄色	
004	11	1	土師器甑		30	(28.2)		[10.7]		褐色	2mm前後の石英。
006	1	3	須恵器杯		30		6.8	[1.4]		灰色	重ね焼きB。
006	2	2	土師器甕		40	(12.0)		[4.4]		赤色	
006	3	4	土師器甕	A	45	15.4		[11.8]		明褐色	2mm前後の石英。
006	4	1	須恵器甕		40		(15.0)	[23.4]		灰色	
008A	1	6	須恵器杯		45	12.8	6.4	3.9	239.4	褐色	
008A	2	4	須恵器高台付杯		90	11.9	6.7	5.2	263.3	灰色	口縁部内面油煙。重ね焼きA
008A	3	5	土師器杯	P	40	(13.8)	7.6	4.7	(368.2)	暗黄色	底部に焼成前「－」ヘラ記号。内面黒色処理。
008A	4	10	土師器杯		20		(7.0)	[1.9]		褐色	底部外面「二」墨書。
008A	5	1	土師器甕	E	75	(22.1)	7.2	31.2	(7963.9)	明褐色	2mm前後の石英。底部木葉痕。
008A	6	13	土師器甕		25		10.4	[8.7]		暗黄色	2mm前後の石英。
008A	7	8	土師器甕		20		(7.6)	[2.8]		暗赤色	
009	1	5	土師器杯		5					淡黄色	内面黒色処理。体部外面横位「飯」墨書。
009	2	3	土師器杯		20		(7.8)	[1.0]		黒色	
012	1	5	須恵器杯	j	60	(12.1)	6.6	3.5	(215.0)	青灰色	白色微細粒多。
012	2	4	土師器杯	J	40	(12.8)	(6.6)	3.6	(234.6)	暗黄色	外面赤彩。
012	3	7	土師器杯	O	95	12.2	5.8	2.8	170.8	淡黄色	3mm前後の赤色粒子。
012	4	8	土師器杯	B	35	(11.2)	(8.0)	[4.0]	(235.8)	淡黄色	
012	5	3	土師器杯		50	(14.7)		[5.0]		淡黄色	
012	6	2	土師器甕	H	60	(13.6)	6.6	15.4	(1604.6)	褐色	
012	7	1	須恵器甕		30		(16.8)	[19.1]		暗赤色	
013	1	15	須恵器杯	i	40	(13.4)	(8.0)	3.3	(258.0)	灰褐色	全体に歪む。
013	2	16	土師器杯		30	(12.8)	(7.4)	3.6	(251.3)	明褐色	
013	3	8	土師器小型土器		98	9.6	5.9	5.1	159.5	明褐色	

数値＝復元：（　）　現存：［　］　遺存度：％　口径・底径・器高：cm　容量：cm³

遺構番号	挿図番号	実測番号	器種名	分類	遺存度	口径	底径	器高	容量	色調	備考
013	4	7	土師器小型土器		50		(4.5)	[2.2]		暗褐色	
013	5	3	土師器甕	H	90	12.0	6.0	11.9	835.4	暗褐色	
013	6	4	土師器甕	A	33	(14.4)		[7.4]		暗褐色	
013	7	1	土師器甕	A	33	11.4		[8.0]		暗黄色	
013	8	2	土師器甕	A	20	(15.7)		[8.4]		暗黄色	
013	9	5	土師器甕		17	(16.8)		[6.0]		明褐色	
013	10	12	土師器甕		30		(7.4)	[6.6]		暗褐色	底部木葉痕。
013	11	11	土師器甕		20		(6.6)	[7.1]		暗黄色	
013	12	10	須恵器甕		20		(12.9)	[8.4]		暗黄色	
014	1	8	須恵器杯	i	50	(12.6)	(7.5)	4.4	(280.1)	黒色	
014	2	7	須恵器杯	n	85	13.1	6.6	4.1	287.3	灰色	重ね焼きB。
014	3	15	須恵器杯		30		(6.2)	[2.0]		灰褐色	
014	4	11	土師器杯	P	30	(15.2)	(8.2)			明褐色	底部外面「宮」墨書。内面黒色処理。
014	5	10	土師器杯	L	90	12.0	7.0	4.5	277.8	明褐色	体部外面横位「由」墨書。
014	6	1	土師器甕	E	75	23.4		[27.7]		褐色	2～3mmの石英。
014	7	2	土師器甕	E	60	(19.8)	(7.3)	32.9	(7574.9)	褐色	
014	8	3	土師器甕	G	75	20.5		[21.7]		明褐色	
014	9	12	土師器甕		20	(19.8)		[7.6]		褐色	2mm前後の石英。
014	10	14	土師器甕		25		(8.2)	[7.0]		暗褐色	
014	11	6	土師器甕		30		(8.6)	[7.8]		明褐色	
014	12	5	須恵器甕		30		(15.4)	[3.3]		淡黄色	底部外面に焼成前「キ」？ ヘラ記号。
015	1	17	須恵器杯	m	65	12.9	6.5	3.5	230.8	黒色	
015	2	15	須恵器杯	h	60	13.2	7.4	4.1	296.5	黒色	
015	3	16	須恵器杯	i	85	13.0	7.9	4.0	287.1	明褐色	
015	4	14	須恵器杯	i	85	12.7	7.6	4.0	273.9	暗黄色	
015	5	9	須恵器杯		45		8.6	[2.7]		灰色	
015	6	11	須恵器高台付杯		90	13.7	8.6	4.6	307.0	青灰色	重ね焼きA。
015	7	19	土師器杯	B	25	(14.4)		[4.2]		明褐色	
015	8	10	土師器杯	I	100	12.2	7.5	4.0	219.0	暗褐色	
015	9	12	土師器杯	I	100	12.6	7.0	3.9	238.9	明褐色	内面黒色処理。
015	10	13	土師器杯	I	95	12.0	6.8	3.2	183.0	暗褐色	
015	11	18	土師器杯	O	40	(12.0)	(6.6)	2.7		明褐色	内面黒色処理。
015	12	24	土師器杯							明褐色	底部外面「□」墨書。
015	13	23	土師器杯							明褐色	内面黒色処理。底部外面「□」墨書。
015	14	1	土師器甕	E	70	21.7	(9.2)	33.2	(9874.4)	褐色	3mm前後の石英。
015	15	3	土師器甕		60	19.6		[10.6]		褐色	4mm前後の石英。
015	16	5	土師器甕	G	40	(20.1)		[8.5]		暗褐色	
015	17	6	土師器甕		20	(14.8)		[5.5]		褐色	
015	18	4	土師器甕		50	11.6		[5.4]		暗褐色	
015	19	21	土師器甕		20		(6.0)	[4.1]		明褐色	
015	20	2	土師器甕		40		7.8	[19.3]		暗褐色	底部木葉痕。
016	1	10	須恵器杯	j	75	13.4	7.3	3.7	255.4	黒色	白色微粒砂多。
016	2	11	須恵器杯	i	75	12.8	7.0	3.7	227.8	暗赤色	
016	3	15	須恵器杯	m	45		(5.8)	[2.8]		灰色	
016	4	14	須恵器杯		20		(7.5)	[2.0]		暗黄色	
016	5	9	土師器杯	R	70	14.5	7.4	3.6	285.8	暗黄色	内面黒色処理か。
016	6	4	土師器甕		25	(20.1)		[5.4]		暗赤色	
016	7	2	土師器甕		40	15.4		[5.8]		明褐色	
016	8	3	須恵器甕		15	(26.4)		[9.7]		暗赤色	
016	9	1	須恵器甕		30		(15.2)	[10.9]		暗灰色	

数値＝復元：（ ） 現存：[ ] 遺存度：% 口径・底径・器高：cm 容量：cm³

遺構番号	挿図番号	実測番号	器種名	分類	遺存度	口径	底径	器高	容量	色調	備考
017B	1	5	土師器杯	I	90	11.7	6.8	3.6	210.2	黄色	
017B	2	1	土師器甕	E	60	(20.5)	6.6	32.1	(11)88.0)	暗褐色	
017B	3	2	須恵器甑		20	(27.6)		[13.2]		灰色	
017B	4	3	須恵器甑		20		12.8	[14.1]		暗赤色	多孔形態。
018	1	7	須恵器杯		30	(11.6)	(6.4)	[3.8]	(209.1)	赤褐色	
018	2	6	土師器杯	J	40	(12.4)	5.6	3.6	(233.6)	明赤色	
018	3	5	土師器杯	L	70	(10.7)	7.2	3.8	(209.8)	明赤色	体部外面横位と底部外面「子井」墨書。内外面赤彩。
018	4	4	土師器杯	J	80	(11.5)	6.4	3.7	(199.3)	淡黄色	体部外面正位「五」墨書。
018	5	8	土師器杯		15		(8.8)	[3.5]		暗黄色	底部外面に「□」墨書。
018	6	1	土師器甕		40	20.5		[19.8]		暗黄色	1～3mmの石英。
018	7	3	土師器甕		20	(21.0)		[10.0]		淡黄色	1～2mmの石英。
018	8	9	土師器台付甕		30			[4.8]		黄色	
018	9	2	須恵器甕		30		14.4	[4.9]		暗灰色	
020A	1	2	須恵器杯	f	65	(14.4)	8.3	4.3	(385.5)	灰色	重ね焼きA。
020A	2	3	須恵器杯		30		9.0	[2.8]		黒色	重ね焼きA。
020A	3	4	土師器杯		30		8.3	[1.0]		明褐色	
020A	4	1	土師器鉢		40	(10.4)		[7.0]	(296.5)	明褐色	
020A	5	6	須恵器甕							灰色	外面同心円叩き。
020A	6	6	須恵器甕							灰色	外面同心円叩き。
020A	7	6	須恵器甕							灰色	外面同心円叩き。
020B	1	9	須恵器杯	o	95	13.7	6.3	4.3	274.1	褐色	1～2mmの赤色砂粒。
020B	2	11	土師器杯	P	45	(13.6)	6.3	4.2	(330.0)	淡黄色	
020B	3	5	土師器杯	Q	100	14.1	6.4	5.1	409.8	暗黄色	内外面黒色処理。
020B	4	7	土師器杯	Q	70	16.8	7.5	5.2	608.9	暗黄色	体部外面焼成後「レ」ヘラ記号。内面黒色処理。
020B	5	8	土師器杯	Q	45	(17.0)	(7.2)	5.4	(611.1)	明褐色	
020B	6	6	土師器皿	B	100	13.6	5.9	1.7	83.8	淡黄色	内面黒色処理。
020B	7	10	土師器甕		30	(12.2)		[5.6]		明赤色	8と同一個体。
020B	8	12	土師器甕		20		(6.0)	[2.8]		暗黄色	7と同一個体。
020B	9	1	須恵器甑		85	25.2	12.3	23.2	7417.9	明褐色	五孔形態。把手一対。
020B	10	2	須恵器長頸壺		30		(8.6)	[15.0]		灰色	肩部に緑色の釉。
020B	11	3	須恵器長頸壺		40		8.0	[7.0]		灰色	高台底部に藁痕等の圧痕。
020C	1	1	土師器甕		40	14.9		[9.0]		暗赤色	
020C	2	2	須恵器長頸壺					[6.4]		灰色	外面の一部に釉。
021	1	1	須恵器杯	k	85	12.0	7.3	3.7	229.8	暗褐色	重ね焼きB。
021	2	4	須恵器杯	i	30	(12.2)	(7.0)	4.3	(280.4)	褐色	2mm前後の赤色粒。
021	3	3	土師器杯	C	55	(11.0)	7.2	3.7	(190.7)	暗黄色	
021	4	2	土師器杯	K	65	(12.2)	7.8	4.6	(319.8)	褐色	
021	5	5	土師器杯		30		(6.6)	[3.5]		赤色	
021	6	7	須恵器甑							褐色	
022A	1	13	須恵器杯	g	30	(13.6)	8.4	3.9	(265.5)	灰色	
022A	2	12	須恵器杯	e	75	13.6	8.2	3.8	293.7	灰色	
022A	3	14	須恵器杯	j	40	(12.2)	6.8	3.2	(193.6)	灰色	
022A	4	7	土師器鉢		100	11.5	5.4	8.7	414.9	淡黄色	
022A	5	8	土師器鉢		65	(11.6)	5.5	9.6	(375.2)	淡黄色	
022A	6	16	土師器鉢		50	(12.2)	(6.2)	8.1	(414.1)	暗黄色	
022A	7	2	土師器甕	B	90	25.2	10.8	31.5	11362.3	暗褐色	
022A	8	4	土師器甕	F	85	16.7	6.3	24.0	4112.8	明褐色	
022A	9	3	土師器甕	B	55	23.8		[26.6]		暗褐色	
022A	10	1	土師器甕	D	55	24.5		[31.2]		明褐色	
022A	11	11	土師器甕		25		(8.6)	[2.8]		明褐色	底部木葉痕。

数値＝復元：（　）　現存：［　］　遺存度：％　口径・底径・器高：cm　容量：cm³

遺構番号	挿図番号	実測番号	器種名	分類	遺存度	口径	底径	器高	容量	色調	備考
022A	12	9	土師器甕	J	55	15.0	(6.3)	16.5	(1842.8)	暗褐色	
022A	13	6	土師器甑		95	20.8	8.4	17.5	2698.6	明褐色	一孔形態。2～5mmの赤色粒。
022A	14	10	土師器甑		20	(32.0)		[5.4]		明褐色	15と同一個体。
022A	15	5	土師器甑		50		10.4	[19.0]		明褐色	14と同一個体。一孔形態。
023	1	21	須恵器杯	f	90	14.0	7.6	4.2	320.8	灰色	
023	2	31	須恵器杯		25	(13.0)	(7.4)	3.9	(272.9)	灰色	
023	3	30	須恵器杯		25	(14.2)	(8.0)	4.0	(328.5)	灰色	
023	4	24	須恵器杯	e	55	(13.8)	8.2	4.1	(322.9)	灰色	重ね焼きA。
023	5	22	須恵器杯	f	95	13.7	7.2	3.8	295.3	青灰色	重ね焼きA。
023	6	23	須恵器杯	e	95	13.4	9.0	3.7	288.0	灰色	
023	7	26	須恵器杯	g	25	(14.8)	(8.4)	3.8	(341.4)	灰色	
023	8	25	須恵器杯	b	40	(14.0)	(7.6)	3.5	(300.7)	灰色	
023	9	32	須恵器杯	e	55	(14.2)	9.2	3.3	(286.0)	青灰色	底部外面「＋」ヘラ記号。
023	10	20	須恵器杯	e	35	(14.6)	(9.3)	3.6	(286.8)	青灰色	重ね焼きA。
023	11	28	須恵器杯	b	35	(13.4)	(7.1)	3.7	(282.0)	青灰色	
023	12	19	須恵器杯蓋		95	17.6		4.2		青灰色	
023	13	17	須恵器高台付杯		35	(18.0)	11.3	6.5	(812.6)	灰色	1～2mmの石英多。
023	14	13	土師器杯	A	60	14.0	9.8	3.4	288.6	明赤色	赤色砂粒少量。
023	15	14	土師器杯	A	30	(14.4)		[3.1]		明褐色	
023	16	3	土師器鉢		55	(18.7)	7.7	8.2	(1256.1)	褐色	全面赤彩。
023	17	15	土師器小型土器		60	(5.3)	(3.8)	2.9		明褐色	底部木葉痕。
023	18	16	土師器小型土器		40	(4.9)	3.9	3.5		明褐色	
023	19	18	須恵器長頸壺		40			[12.6]		灰色	
023	20	5	土師器甕		25	(27.5)		[6.5]		褐色	1～2mmの石英多。
023	21	1	土師器甕		30	24.2		[9.0]		褐色	1～2mmの石英。
023	22	8	土師器甕		25	(22.2)		[4.0]		褐色	1～2mmの石英多。
023	23	2	土師器甕		25		(9.0)	[18.7]		暗褐色	1～2mmの石英多。底部木葉痕。
023	24	6	土師器甕		25		(10.2)	[6.5]		明褐色	1～2mmの石英多。底部木葉痕。
023	25	7	土師器甕		20		(7.4)	[2.3]		暗褐色	1～2mmの石英多。底部木葉痕。
024	1	34	須恵器杯		25	(13.6)	(8.6)	3.6	(308.2)	青灰色	重ね焼きA。
024	2	25	須恵器杯	e	35	(13.4)	(9.0)	3.9	(325.6)	灰色	重ね焼きA。体部内外面に火襷痕。
024	3	18	須恵器杯	e	25	(13.8)	(8.8)	4.3	(359.9)	灰色	1～3mmの石英多。
024	4	19	須恵器杯	j	20	(13.0)	(7.8)	3.5	(261.6)	灰色	1～2mmの石英。
024	5	16	須恵器杯	e	55	13.6	8.3	3.9	300.3	灰色	
024	6	35	須恵器杯	h	25	(12.6)	(8.0)	4.1	(275.9)	灰色	1～2mmの石英多。
024	7	17	須恵器杯	h	45	12.8	(7.2)	3.5	(231.8)	灰色	
024	8	24	須恵器杯		40	(13.6)		[3.9]		暗灰色	重ね焼きA。
024	9	37	須恵器杯		30	(12.6)		[3.4]		青灰色	1～2mmの石英多。
024	10	23	須恵器杯	l	80	11.6	7.2	3.5	207.5	灰色	雲母微量。
024	11	33	須恵器杯	h	60	(13.2)	7.6	4.1	(293.9)	青灰色	
024	12	27	須恵器杯		40		6.9	[2.2]		暗灰色	破損後再利用。
024	13	32	須恵器杯		40		7.7	[3.7]		灰白色	底部と体部外面に火襷痕。
024	14	20	須恵器蓋		20					灰色	
024	15	2	土師器杯	B	98	12.1	9.2	3.5	245.0	褐色	内外面黒色処理
024	16	1	土師器杯	G	95	12.7	7.4	3.7	257.7	暗褐色	内外面赤彩。
024	17	5	土師器杯		30		(8.9)	[1.7]		暗赤色	内外面赤彩。
024	18	11	土師器鉢		35	(11.6)	(5.0)	[7.2]		暗黄色	
024	19	21	須恵器短頸壺		30	(6.5)	(6.0)	5.2	(161.5)	青灰色	
024	20	12	土師器甕		40	(12.6)		[8.0]		暗黄色	
024	21	4	土師器甕		25		(7.4)	[2.8]		暗黄色	

数値＝復元：（ ） 現存：[ ] 遺存度：% 口径・底径・器高：cm 容量：cm³

遺構番号	挿図番号	実測番号	器種名	分類	遺存度	口径	底径	器高	容量	色調	備考
024	22	14	土師器甕		20		(8.6)	[4.0]		暗褐色	
024	23	38	須恵器長頸壺		40			[13.2]		青灰色	肩部から頸部の一部に自然釉。
026	1	16	須恵器杯	h	25	(13.0)	(8.0)	4.3	(287.1)	灰白色	1～2mmの石英。重ね焼きA。
026	2	15	須恵器杯	h	60	(13.4)	(8.0)	3.8	(267.2)	青灰色	
026	3	13	須恵器杯	l	60	(12.8)	6.9	3.3	(237.7)	暗灰色	底部外面「＋」ヘラ記号。
026	4	14	須恵器杯	f	60	12.6	(7.2)	4.1	(253.9)	灰色	
026	5	20	須恵器杯							青灰色	小破片。口縁部外面に「大王」線刻。
026	6	7	土師器杯	B	25	(13.0)	(7.7)	4.2	(346.1)	明褐色	内外面黒色処理。
026	7	6	土師器杯	E	60	(12.6)	8.6	4.4	(299.8)	淡黄色	内外面赤彩。
026	8	5	土師器高台付杯		25		7.8	[2.4]		褐色	
026	9	2	土師器甕	I	25	(12.8)		[5.0]		明褐色	
026	10	19	土師器甕		20		6.6	[3.1]		暗褐色	
026	11	1	土師器甕		25		9.0	[8.7]		明褐色	1～2mmの石英多。底部木葉痕。
026	12	12	須恵器壺		75	(8.2)	5.0	8.8	(376.8)	暗灰色	
026	13	18	須恵器長頸壺		30		7.4	[2.6]		暗灰色	底部内面に釉。
028	1	9	須恵器杯	b	100	13.9	9.6	3.8	306.2	灰色	
028	2	10	須恵器杯	f	80	14.0	8.0	4.0	325.6	灰色	2～3mmの石英。
028	3	13	須恵器杯		35	(13.8)	(9.0)	4.2	(360.0)	灰色	
028	4	12	須恵器杯	e	40	(15.0)	(10.1)	3.2	(322.0)	灰色	1～2mmの石英多。
028	5	11	須恵器杯	e	40	(14.2)	(8.4)	3.4	(283.1)	灰色	1～2mmの石英多。
028	6	19	須恵器杯							灰色	底部外面に焼成後「＋」ヘラ記号。
028	7	20	土師器小型土器		30	(6.8)		2.4	(24.9)	暗赤色	
028	8	2	土師器甕	D	25	(21.8)		[12.8]		暗褐色	1～2mmの石英。
028	9	1	土師器甕	C	60	(21.2)		[22.4]		暗褐色	
028	10	3	土師器甕		25		9.6	[9.2]		暗褐色	
028	11	7	土師器甕		20		7.0	[1.4]		明赤色	
029	1	5	須恵器杯	h	60	13.3	7.8	3.6	254.6	灰色	重ね焼きA。
029	2	3	土師器鉢		60	(11.2)		[7.3]		褐色	
029	3	4	土師器鉢		30	(12.8)		[7.6]		赤褐色	
031	1	4	須恵器杯	d	20	(14.6)	(9.6)	3.2	(298.3)	灰色	
031	2	3	土師器杯							明赤色	底部外面「奉」墨書。
033	1	7	須恵器杯		30	(16.0)	(11.6)	4.5	(500.6)	灰色	
033	2	6	須恵器杯		25		7.8	[1.0]		暗灰色	底部外面「｜」ヘラ記号。
033	3	5	土師器杯	F	90	13.7	8.0	4.1	322.9	暗褐色	内外面赤彩。二次焼成を受ける。
034	1	7	須恵器杯	l	85	12.8	6.5	4.1	282.5	灰白色	
034	2	8	須恵器杯	k	60	(11.6)	6.6	3.8	(221.9)	青灰色	
034	3	6	土師器杯	K	70	12.6	7.3	4.4	262.0	暗褐色	内面黒色処理。
034	4	5	土師器杯	Q	75	(15.4)	6.4	5.8	(502.4)	明褐色	内面黒色処理。
034	5	1	須恵器甕		30	(24.0)		[6.5]		黒色	6と同一個体か。
034	6	2	須恵器甕		25		(14.2)	[8.4]		黒色	5と同一個体か。
035A	1	6	須恵器杯	n	90	14.2	6.6	4.7	343.2	黒色	白色微細粒多。
035A	2	14	須恵器杯		25		(8.0)	[2.7]		灰白色	
035A	3	12	須恵器杯		40		(8.0)	[2.8]		灰白色	
035A	4	13	須恵器杯		40		(8.6)	[2.2]		灰白色	
035A	5	15	須恵器杯		25		(8.2)	[1.2]		灰白色	
035A	6	10	須恵器杯蓋		20	(26.0)		[2.5]		青灰色	
035A	7	9	須恵器杯蓋							灰色	
035A	8	11	須恵器杯蓋							灰色	
035A	9	7	土師器杯	J	85	12.3	6.2	3.6	214.4	明褐色	体部外面正位「椅」? 墨書。
035A	10	8	土師器杯		20	(11.6)	(6.6)	[3.5]	(199.3)	明褐色	

数値＝復元：（　）　現存：［　］　遺存度：％　口径・底径・器高：cm　容量：cm³

遺構番号	挿図番号	実測番号	器種名	分類	遺存度	口径	底径	器高	容量	色調	備考
036	1	6	土師器杯	N	30	12.4	(6.4)	3.4	(211.0)	淡黄色	
036	2	3	土師器杯	J	55	(12.7)	6.4	3.8	(213.2)	明褐色	
036	3	7	土師器杯		30	(12.3)		[3.4]		暗赤色	
036	4	4	土師器杯	P	45	(13.0)	(6.8)	4.4	(293.6)	暗黄色	
036	5	2	土師器杯	Q	65	16.7	7.3	5.5	572.6	褐色	
036	6	1	土師器甕	H	40	(13.7)		[10.5]		褐色	
036	7	5	土師器甕	H	35		7.8	[5.3]		明褐色	
037A	1	8	土師器杯	N	60	(12.6)	6.0	3.7	(233.6)	明褐色	赤色粒。
037A	2	3	土師器杯	G	80	12.4	7.0	3.9	230.1	明褐色	内外面赤彩。
037A	3	4	土師器杯	N	35	(13.0)	(6.2)	4.1	(285.5)	褐色	底部外面「｜」ヘラ記号。
037A	4	7	土師器皿	A	30	(13.2)	(5.6)	2.0	(93.6)	褐色	
037A	5	5	土師器高台付皿	D	40	(14.6)	6.8	3.3	(133.5)	暗黄色	転用硯。
037A	6	2	土師器高台付皿	E	85	12.9	6.1	3.8	96.2	暗黄色	
037A	7	1	須恵器甕		70	20.7		[20.8]		褐色	
037B	1	1	土師器杯		20	(13.4)	(7.1)	[4.0]	(296.7)	淡黄色	
037C	1	3	土師器杯		30		8.4	[2.3]		淡黄色	内面黒色処理。
037C	2	1	土師器甕		30	(15.8)		[16.2]		褐色	
037C	3	11	土師器甕		30	(13.1)		[4.0]		褐色	
037C	4	2	土師器甕	G	55	18.3	(6.6)	[18.0]	(2690.8)	明褐色	
040A	1	3	土師器杯	H	25	(11.7)	(8.8)	3.3	(203.5)	褐色	体部外面指頭による押え。外面赤彩。
040A	2	4	土師器小型土器		35	(5.2)	(4.6)	3.0	(15.4)	褐色	
040A	3	5	土師器小型土器					[2.5]		褐色	
040A	4	2	土師器甕	D	25	(19.2)		[11.2]		褐色	1～3mmの石英多。
040A	5	1	土師器甕	E	60	22.2		[29.4]		褐色	1～3mmの石英多。
041	1	11	須恵器杯	d	25	(14.8)	(10.5)	3.0	(316.0)	青灰色	重ね焼きA。火襷痕。
041	2	6	須恵器杯	d	65	15.5	9.5	3.5	358.8	青灰色	重ね焼きA。
041	3	13	須恵器杯	e	35	(14.6)	(9.8)	3.5	(332.7)	灰色	
041	4	9	須恵器杯	a	25	(15.4)	(9.8)	4.2	(411.5)	暗灰色	
041	5	5	須恵器杯	a	55	(14.5)	9.3	4.1	(366.8)	灰色	
041	6	4	須恵器杯	e	75	13.8	9.4	3.8	323.7	暗灰色	
041	7	14	須恵器杯	e	35	(13.2)	(8.4)	4.0	(292.5)	暗灰色	
041	8	10	須恵器杯	e	45	(13.2)	(8.6)	3.8	(302.9)	暗灰色	重ね焼きA。
041	9	8	須恵器杯	c	50	13.8	(8.0)	3.9	(317.7)	青灰色	
041	10	7	土師器杯	A	65	(14.4)		3.5	(316.0)	褐色	内外面黒色処理。
041	11	1	土師器甕	K	70	(12.0)	7.8	16.3	(1230.2)	暗赤色	
041	12	2	土師器甕	D	25	(23.5)		[13.0]		褐色	1～3mmの石英多量。
046	1	3	須恵器杯	o	85	13.6	6.2	4.3	297.0	青灰色	重ね焼きB。火襷痕。白色微細粒多量。
046	2	4	土師器杯	N	50	(12.6)	6.0	3.6	(226.1)	明褐色	
046	3	2	土師器杯	Q	50	(17.2)	3.7	6.4	(776.0)	明褐色	内面黒色処理か？
046	4	1	須恵器甕		20	(24.0)		[23.5]		明褐色	
054	1	5	須恵器杯	i	30	(13.7)	(8.0)	[4.1]	(312.2)	黒色	
054	2	4	土師器杯	D	45	(13.2)	(7.0)	4.5	(339.0)	暗黄色	
054	3	2	土師器甕		30		(7.8)	[15.1]		暗褐色	2～3mmの石英多量。底部木葉痕。
054	4	1	須恵器甕		25		(15.5)	[10.8]		暗褐色	
065	1	3	須恵器杯	e	50	(13.6)	9.2	3.7	(300.4)	灰色	内面ろくろ痕明瞭。
065	4	1	土師器甕	D	25	(26.8)		[24.8]		明褐色	1～2mmの石英多量。
066	1	1	須恵器杯	e	75	13.4	8.8	4.0	303.9	黒色	重ね焼きA。
066	2	2	須恵器杯	f	55	(13.2)	7.4	3.8	(263.9)	黒色	重ね焼きA。
066	3	4	須恵器杯	h	50	(13.4)	7.2	3.7	(257.4)	灰色	重ね焼きA。
066	4	5	須恵器杯	h	45	(13.2)	7.8	3.4	(233.3)	青灰色	重ね焼きA。

数値＝復元：（ ） 現存：[ ] 遺存度：% 口径・底径・器高：cm 容量：cm³

遺構番号	挿図番号	実測番号	器種名	分類	遺存度	口径	底径	器高	容量	色調	備考
066	5	7	須恵器杯		25	(15.6)		[3.2]		青灰色	
066	6	3	土師器杯		35	(14.4)	8.8	4.4	(385.5)	暗黄色	
067	1	6	土師器杯	J	60	12.0	6.6	3.6	212.0	褐色	体部外面正位「八」墨書。
067	2	4	土師器甕		30		7.1	[9.0]		明褐色	
067	3	2	須恵器甕		30		13.5	[6.6]		褐色	
067	4	1	須恵器甑		40		12.7	[8.1]		褐色	多孔形態。
068	1	10	須恵器杯	g	40	(15.3)	9.0	4.3	(399.9)	灰色	
068	2	12	須恵器杯		20		(8.4)	[1.8]		灰白色	
068	3	8	土師器杯		20		(7.9)	[2.0]		褐色	内外面赤彩。
068	4	9	須恵器壺		25		(6.4)	[7.9]		灰色	
068	5	1	土師器甕		25	(17.2)		[12.2]		淡黄色	
068	6	6	土師器甕		20		(6.4)	[4.5]		褐色	底部木葉痕。
068	7	5	土師器甕		30		(9.4)	[4.0]		暗褐色	赤色粒。
068	8	4	土師器甕		25		7.2	[5.2]		淡黄色	
069	1	1	土師器甕	D	20	(24.6)		[7.5]		淡黄色	石英多量。
069	2	3	土師器甕		20		9.5	[4.0]		明褐色	
070	1	3	須恵器杯		30	(13.2)	(8.0)	4.3	(299.7)	灰色	
070	2	2	須恵器杯	h	35	(13.6)	7.8	4.0	(306.7)	灰色	重ね焼きA。
070	3	1	須恵器杯	h	95	12.7	7.7	3.6	239.6	灰色	火襷痕。重ね焼きA。
071	1	7	須恵器杯	i	80	13.1	6.3	4.4	279.0	灰色	重ね焼きB。
071	2	9	須恵器杯	n	80	13.9	6.9	4.5	333.7	灰色	重ね焼きB。
071	3	6	土師器杯	M	98	13.7	7.7	3.9	304.8	暗褐色	
071	4	5	土師器杯	P	85	16.0	7.5	5.4	608.8	明褐色	
071	5	14	土師器杯							褐色	底部外面墨痕。
071	6	13	土師器杯		30		7.4	2.0		褐色	底部外面墨痕。
071	7	12	土師器甕	G	90	22.4	7.7	26.4	6662.4	淡黄色	
071	8	1	土師器甕	E	35	(19.2)		[23.2]		淡黄色	
071	9	10	須恵器甕							暗灰色	転用硯。
071	10	11	須恵器杯							灰色	転用紡錘車。
073	1	1	須恵器杯	b	90	13.6	9.3	4.0	283.3	青灰色	重ね焼きA。
073	2	2	須恵器杯	h	80	13.6	7.8	3.8	262.8	灰色	重ね焼きA。
073	3	4	土師器甕	C	20	(11.4)		[10.1]		褐色	
074	1	5	須恵器杯	i	100	12.9	6.9	3.9	249.3	青灰色	白色微細粒多。重ね焼きB。
074	2	9	須恵器杯	i	45	(14.0)	7.6	4.3	(354.6)	灰褐色	
074	3	7	土師器杯	I	100	12.1	7.2	3.9	248.0	明褐色	
074	4	8	土師器杯	I	65	(12.0)	7.1	3.8	(225.6)	淡黄色	
074	5	6	土師器杯	I	100	12.5	7.4	3.8	259.8	褐色	
074	6	1	土師器甕	L	40	(19.2)	8.6	12.6	(1937.2)	褐色	
075	1	2	須恵器杯		25		7.6	[1.6]		灰色	底部外面「丨」ヘラ記号。黒色微細粒。
075	2	3	須恵器杯		35		6.8	[1.5]		褐色	
075	3	6	土師器杯	S	55	(13.7)	5.8	4.2	(259.9)	淡黄色	
075	4	5	土師器皿	C	65	15.1	6.8	1.9	113.0	褐色	
075	5	4	土師器皿	A	75	14.5	6.3	2.5	163.1	明褐色	
075	6	8	土師器杯		30		6.8	[1.3]		明褐色	内面墨痕。転用硯。
076	1	15	土師器杯	J	100	11.9	6.2	4.3	238.7	淡黄色	底部と体部外面正位「方」墨書。
076	2	14	土師器杯	M	90	14.2	8.8	4.3	358.3	明褐色	底部外面「佛」、体部外面横位「佛」墨書と墨絵。
076	3	17	土師器高台付皿	D	95	13.2	6.2	2.7	116.5	淡黄色	底部内外面「前」墨書。
076	4	16	土師器高台付皿	D	100	14.0	6.1	3.0	140.2	褐色	底部内外面「大」墨書。
076	5	2	土師器甕		25	(18.8)		[12.5]		淡黄色	1～2mmの石英多。
076	6	3	土師器甕		25	21.2		[8.5]		明褐色	

数値＝復元：（　）　現存：［　］　遺存度：％　口径・底径・器高：cm　容量：cm³

遺構番号	挿図番号	実測番号	器種名	分類	遺存度	口径	底径	器高	容量	色調	備考
076	7	10	土師器甕		20		5.8	［3.9］		暗褐色	
076	8	11	須恵器甕		20		5.8	［1.7］		淡黄色	
076	9	6	須恵器甕		25		(14.0)	［9.8］		褐色	
076	10	13	須恵器長頸壺		50		8.3	［11.6］		暗灰色	高台部糞状圧痕。胴部外面と底部に釉。
048	1	2	須恵器杯	k	65	(11.6)	7.2	3.6	（201.1）	灰色	口縁部内面摩耗。
048	2	1	土師器杯	I	100	12.2	7.3	3.6	196.6	暗赤色	内外面の一部にすす付着。
072	1	1	土師器杯		20		（8.4）	［1.4］		明褐色	
077	1	1	土師器甕	D	40	23.1	（9.5）	32.6	(13264.6)	淡黄色	底部木葉痕。1～2mmの石英多。

第8表　土器観察表（遺構外）

数値＝復元：（　）　現存：［　］　遺存度：％　口径・底径・器高：cm　容量：cm³

遺構番号	挿図番号	実測番号	器種名	分類	遺存度	口径	底径	器高	容量	色調	備考
013	1	14	土師器杯		45			［5.0］		暗赤色	底部内面を除いて赤彩。
タ-6	2	5	土師器杯		30	(13.8)		［4.9］		褐色	内外面上部赤彩。
013	3	17	土師器杯	C2a	20	(12.7)		［4.2］		暗赤色	全面赤彩。
1T	4	1	土師器杯	D3a	65	13.9		4.4	367.1	暗褐色	底部内外面を除き赤彩。
073	5	3	土師器杯	D3d	60	13.2		3.8	234.6	明褐色	底部内外面を除き赤彩。
026	6	9	土師器杯		25	(12.4)		［3.9］		褐色	内外面黒色処理。
レ-6	7	3	土師器壺		20	(13.4)		［2.5］		褐色	口縁部内外面赤彩。
016	8	7	土師器壺		40	7.3		［5.0］		暗赤色	体部内面を除き赤彩。
019	9	7	土師器杯		65	12.8	7.4	3.5	264.8	暗褐色	
43T	10	1	土師器杯	I	40	(11.7)	6.6	3.1	(163.0)	明褐色	
タ7-17	11	5	土師器杯		20	(12.8)	(7.6)	4.1	(315.3)	暗褐色	
ワ7-21	12	1	土師器杯		40		6.6	［1.5］		褐色	
タ7-16	13	2	土師器杯	I	45	(12.5)	7.6	3.6	(237.3)	褐色	底部外面「匚」墨書。
タ7-16	14	3	土師器杯	J	30	(12.0)	(6.9)	3.7	(223.5)	褐色	底部外面「匚」墨書。
NEV	15	2	土師器杯		30		7.0	［1.3］		褐色	底部外面「⊙」墨書3つ。
29T	16	3	土師器杯		20		5.6	［1.0］		褐色	体部外面「二」墨書。
タ7-17	17	11	土師器杯							淡黄色	底部外面「二」墨書。
タ7-16	18	4	土師器杯	P	40	(14.7)	7.2	4.6	(416.2)	褐色	内面黒色処理。
10T	19	1	土師器杯		35		7.5	［1.6］		淡黄色	内面黒色処理。
レ6-16	20	1	土師器甕		20	(15.1)		［4.3］		明褐色	
タ6	21	3	土師器甕		30		5.0	［2.4］		暗褐色	
14T	22	1	土師器甕		20		5.6	［2.1］		褐色	
カ8-15	23	2	土師器高杯		30			［5.8］		明褐色	
013	24	6	土師器高杯		30			［6.2］		淡黄色	
009	25	2	土師器高杯		20			［4.5］		明褐色	外面赤彩。
29T	26	4	土師器小型土器		20	(11.1)	(6.6)	3.0	(122.1)	褐色	体部外面と底部にハケ目痕。
表採	27	1	土師器小型土器		20	(9.0)	(4.8)	5.2	(114.7)	褐色	
7T	28	1	土師器小型土器		30	(8.5)		［3.3］		明褐色	
レ6	29	7	土師器小型土器		40	(5.5)	(3.4)	3.5	(28.4)	明褐色	底部外面焼成前「✕」ヘラ記号。
表採	30	4	土師器小型土器		60			［1.7］		褐色	底部籾状圧痕。
レ6-16	31	6	須恵器杯		30	(12.7)	(8.9)	3.9	(296.7)	灰白色	火襷痕。
27T	32	1	須恵器杯		30	(12.7)	(8.3)	4.1	(289.8)	灰色	
レ6-16	33	5	須恵器杯		40	(11.9)	7.5	3.7	(225.6)	灰色	
20T	34	1	須恵器杯		35	(12.6)	6.4	4.2	(263.1)	黒色	白色微細粒多。
13T	35	1	須恵器杯		35	(13.2)	7.2	3.9	(273.8)	黒色	白色砂粒多。
カ8-7	36	3	須恵器杯		45	(13.6)	(9.5)	3.2	(235.4)	灰白色	
タ7-17	37	1	須恵器杯	n	85	13.7	7.0	4.1	285.9	灰白色	重ね焼きB。
表採	38	3	須恵器杯	j	60	11.8	6.8	3.5	194.6	褐色	
019	39	8	須恵器杯		20	(12.8)	(8.0)	4.1	(300.4)	淡黄色	
タ7-16	40	6	須恵器杯		30		5.8	［3.0］		暗褐色	
32T	41	1	須恵器杯		30		6.8	［1.9］		暗褐色	
025	42	14	須恵器杯		25		(9.2)	［2.0］		灰色	底部外面「＋」ヘラ記号。
レ6-25	43	8	須恵器高台付杯		20		(9.6)	［2.9］		青灰色	高台端部に浅い沈線。
表採	44	2	須恵器蓋		55			［3.0］		灰褐色	
042	45	19	須恵器蓋		30			［3.3］		灰色	
カ7-20	46	2	須恵器甕							青灰色	胴部外面同心円叩き。
カ7-20	47	3	須恵器甕							灰色	胴部外面同心円叩き。

第９表　出土土器破片数一覧（古墳時代竪穴住居）

破片資料：上段点数、下段重量

		遺構番号 器種	001	002	008B	017A	020D	022B	025	027	030	032
破片資料	須恵器	杯	1 6	0 0	1 2	0 0	2 8	0 0	22 138	0 0	6 55	1 9
		甕	1 6	0 0	1 10	2 75	0 0	0 0	17 350	1 92	3 10	11 75
		不明	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	1 25	0 0	0 0	1 8
		合計A 点 B g B/B+D %	2 12 0.8%	0 0 0.0%	2 12 0.6%	2 75 1.7%	2 8 1.3%	0 0 0.0%	40 513 18.6%	1 92 2.3%	9 65 13.5%	13 92 4.0%
	土師器	杯	35 280	0 0	38 150	35 280	23 250	0 0	32 280	62 350	5 35	33 214
		甕 鉢含む	63 824	7 192	188 1628	304 3950	66 370	6 80	255 1798	197 3150	29 380	272 1860
		甑	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	2 25	0 0	0 0
		高杯	0 0	0 0	1 30	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0
		小型土器	1 4	0 0	2 27	9 40	0 0	0 0	26 115	0 0	0 0	0 0
		壺	0 0	0 0	4 35	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0
		支脚	1 390	0 0	4 112	0 0	0 0	0 0	2 48	10 410	0 0	2 80
		不明	1 3	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	1 38
		合計C 点 D g D/B+D %	101 1501 99.2%	7 192 100.0%	237 1982 99.4%	348 4270 98.3%	89 620 98.7%	6 80 100.0%	315 2241 81.4%	271 3935 97.7%	34 415 86.5%	308 2192 96.0%
実測遺物	須恵器	杯	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		甕	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		合計E 点 E/E+F %	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
	土師器	杯	2	1	1	6	5	1	6	3	1	3
		甕	0	1	0	6	2	0	0	4	0	2
		鉢	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2
		甑	0	0	0	1	0	1	1	0	0	0
		高杯	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
		小型土器	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0
		壺	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
		支脚	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		合計F 点 F/E+F %	2 100.0%	4 100.0%	2 100.0%	14 100.0%	7 100.0%	2 100.0%	7 100.0%	8 100.0%	1 100.0%	7 100.0%
		その他の出土遺物	土製勾玉1・土製管玉1 鉄鎌1			土製鐸形品3・不明土製品3 土製管玉1・土製臼玉1 コハク玉1			砥石1 鉄鎌1 土製勾玉8・土製臼玉8 土製棗玉2・不明土製品1		土製管玉1・土製丸玉5	

035B	037D	038	039	040B	042	043	044	047	050	058	110	合計
76	9	11	2	22	9	0	0	5	0	0	0	167
380	42	82	80	170	65	0	0	35	0	0	0	1072
30	3	9	0	15	25	3	0	5	2	0	0	128
280	30	160	0	78	157	100	0	110	32	0	0	1565
5	2	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	12
90	12	40	0	23	0	0	0	0	0	0	0	198
111	14	21	2	39	34	3	0	10	2	0	0	307
750	84	282	80	271	222	100	0	145	32	0	0	2835
13.3%	2.9%	7.1%	3.9%	10.9%	4.2%	2.5%	0.0%	1.4%	2.9%	0.0%	0.0%	4.8%
76	107	112	20	44	99	31	21	107	17	9	0	906
560	680	790	240	295	346	180	132	850	143	45	0	6100
416	230	316	66	114	381	331	76	937	50	77	0	4381
4000	2120	2850	1730	1890	4600	3600	1430	9100	910	740	0	47202
3	1	0	0	0	0	3	0	1	0	0	0	10
290	30	0	0	0	0	65	0	20	0	0	0	430
0	0	0	0	1	1	0	0	1	0	0	0	4
0	0	0	0	20	15	0	0	40	0	0	0	105
1	3	2	0	1	3	0	1	5	0	0	0	54
10	10	33	0	8	10	0	5	82	0	0	0	344
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	35
0	0	2	0	0	1	0	6	10	0	0	0	38
0	0	40	0	0	70	0	262	245	0	0	0	1657
2	4	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	12
40	12	0	0	0	0	0	0	22	0	0	0	115
498	345	432	86	160	485	365	104	1065	67	86	0	5409
4900	2852	3713	1970	2213	5041	3845	1829	10359	1053	785	0	55988
86.7%	97.1%	92.9%	96.1%	89.1%	95.8%	97.5%	100.0%	98.6%	97.1%	100.0%	0.0%	95.2%
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	3.7%	0.0%	0.0%	0.0%	3.7%
7	1	2	4	4	10	5	2	6	1	0	0	71
3	2	4	1	1	2	1	2	13	0	0	0	44
0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	5
3	0	1	1	0	0	1	1	1	0	0	0	11
0	0	0	0	1	0	0	1	1	0	0	0	4
1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2
0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2
14	4	7	6	6	12	7	6	26	1	0	0	144
100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	96.3%	100.0%	0.0%	0.0%	99.3%
土製丸玉1	土製管玉1・紐状土製品2 土製棗玉1・土製丸玉3	土製勾玉1	球状土錘1		勾玉1・不明土製品1				紐状土製品1	不明土製品1		

第10表　出土土器破片数一覧（歴史時代竪穴住居）

破片資料：上段点数、下段重量

		遺構番号 器種	003	004	006	008A	009	012	013	014	015	016
破片資料	須恵器	杯	11 47	14 118	0 0	2 5	2 25	20 120	3 38	34 190	22 165	57 335
		甕	4 161	2 120	0 0	20 445	0 0	15 170	5 135	42 1250	23 650	47 820
		甑	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0
		蓋	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	1 12	0 0	1 5	0 0
		壺	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	1 12	0 0	0 0	1 15
		不明	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0
		合計A 点 B g B/B+D %	15 208 6.7%	16 238 8.7%	0 0 0.0%	22 450 15.2%	2 25 5.6%	35 290 8.2%	10 197 5.1%	76 1440 29.6%	46 820 12.7%	105 1170 20.3%
	土師器	杯 皿含む	412 750	72 408	1 9	65 360	14 150	88 450	85 500	75 360	80 480	80 580
		甕 鉢含む	257 2150	781 1950	3 35	218 2150	25 250	399 2800	261 2575	350 2975	523 5175	605 4000
		甑	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	1 8	1 22	0 0	0 0
		小型土器	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	1 10	3 20	0 0	0 0	0 0
		支脚	0 0	6 142	0 0	1 10	0 0	0 0	1 580	5 75	0 0	2 25
		不明	0 0	0 0	0 0	0 0	2 20	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0
		合計C 点 D g D/B+D %	669 2900 93.3%	859 2500 91.3%	4 44 100.0%	284 2520 84.8%	41 420 94.4%	488 3260 91.8%	351 3683 94.9%	431 3432 70.4%	603 5655 87.3%	687 4605 79.7%
実測遺物	須恵器	杯	5	2	1	2	0	1	1	3	6	4
		甕	0	0	1	0	0	1	1	1	0	2
		甑	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		蓋	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		壺	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		合計E 点 E/E+F %	5 33.3%	2 18.2%	2 50.0%	2 28.6%	0 0.0%	2 28.6%	2 16.7%	4 33.3%	6 30.0%	6 66.7%
	土師器	杯	7	7	0	2	2	4	1	2	7	1
		甕	3	1	2	3	0	1	7	6	7	2
		甑	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
		鉢	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0
		小型土器	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		支脚	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		合計F 点 F/E+F %	10 66.7%	9 81.8%	2 50.0%	5 71.4%	2 100.0%	5 71.4%	10 83.3%	8 66.7%	14 70.0%	3 33.3%
		その他の出土遺物				刀子1 鉄鏃2 板状品1 棒状品1		穂摘具1		鉄製品1 紡錘車1	鉄製品1 紡錘車1	

017B	018	020A	020B	020C	021	022A	023	024	026	028	029	031
1 5	28 235	1 5	6 22	0 0	37 222	8 210	375 2310	374 1870	80 545	7 420	29 330	28 230
3 35	75 2230	1 55	25 378	3 30	72 910	1 195	108 2380	50 1400	24 548	52 445	22 610	2 58
0 0	5 450	0 0	2 20	0 0	1 40	0 0	0 0	2 85	1 18	0 0	0 0	0 0
0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	5 130	12 210	4 18	0 0	0 0	0 0
0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	22 230	4 35	0 0	0 0	1 8	0 0
0 0	0 0	0 0	1 2	0 0	0 0	1 20	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0
4 40 2.6%	108 2915 44.0%	2 60 14.6%	34 422 27.6%	3 30 2.6%	110 1172 26.4%	10 425 17.1%	510 5050 16.5%	442 3600 22.9%	109 1129 28.8%	59 865 11.6%	52 948 33.8%	30 288 11.5%
18 100	46 300	10 40	47 360	15 158	55 405	23 105	428 2630	166 1150	85 755	93 550	22 165	50 370
86 1400	357 3400	56 310	125 690	51 888	440 2840	126 1885	1997 22480	1218 10610	261 1990	576 6000	150 1690	223 1845
0 0	1 10	0 0	2 55	0 0	0 0	1 65	9 188	2 120	0 0	1 10	0 0	0 0
0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	5 70	10 150	2 42	0 0	0 0	0 0
0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	3 22	0 0	7 98	7 70	0 0	0 0	1 4	0 0
1 15	0 0	0 0	0 0	1 65	0 0	0 0	1 25	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0
105 1515 97.4%	404 3710 56.0%	66 350 85.4%	174 1105 72.4%	67 1111 97.4%	498 3267 73.6%	150 2055 82.9%	2447 25491 83.5%	1403 12100 77.1%	348 2787 71.2%	670 6560 88.4%	173 1859 66.2%	273 2215 88.5%
0	1	2	1	0	2	3	12	13	5	6	1	1
0	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0
0	0	0	2	1	0	0	1	2	2	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2 50.0%	2 22.2%	5 71.4%	4 36.4%	1 50.0%	3 50.0%	3 20.0%	14 56.0%	16 66.7%	7 53.8%	6 54.5%	1 33.3%	1 50.0%
1	4	1	5	0	3	0	2	4	3	0	0	1
1	3	0	2	1	0	6	6	2	3	4	0	0
0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2	0
0	0	0	0	0	0	0	2	1	0	1	0	0
0	0	1	0	0	0	3	0	1	0	0	0	0
2 50.0%	7 77.8%	2 28.6%	7 63.6%	1 50.0%	3 50.0%	12 80.0%	11 44.0%	8 33.3%	6 46.2%	5 45.5%	2 66.7%	1 50.0%
	鉄釘1		不明鉄製品1 棒状品2・刀子1		石製紡錘車1	鉄製刀子2	鋤先・鉄斧各1 鉄鑿・穂摘具・棒状品・ 鉄鏃4・刀子4・鉄鎌2 土製紡錘車1・門金具2	鉄鎌2・鉇1 刀子7・鉄鏃9・鉸具1 土器転用紡錘車1	砥石1 土製勾玉1・鉄鏃2	鉄鏃2・鉄鎌1・刀子1	刀子1	

033	034	035A	036	037A	037B	037C	040A	041	046	054	065	066
12	6	15	5	7	7	16	7	42	1	13	8	12
90	20	220	30	52	62	122	48	288	3	88	45	150
47	6	3	64	8	5	11	4	4	14	29	0	4
573	210	138	1770	70	48	285	65	250	317	370	0	80
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	20	0	0	0	0	0	0	0
1	0	0	4	1	1	0	0	0	0	0	0	2
10	0	0	15	35	28	0	0	0	0	0	0	21
2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
62	12	18	73	16	14	27	11	46	15	42	8	18
683	230	358	1815	157	158	407	113	538	320	458	45	251
9.5%	11.6%	16.4%	52.6%	9.0%	9.3%	20.6%	14.3%	12.9%	21.5%	13.6%	4.2%	15.9%
64	10	53	31	40	49	83	14	38	42	22	13	7
430	62	260	210	210	270	430	80	275	192	92	81	50
582	126	168	201	146	162	129	61	279	143	327	82	109
5850	1428	1470	1410	1370	1265	1120	590	3350	972	2800	945	1275
7	0	2	1	0	0	0	0	1	1	1	0	0
182	0	53	18	0	0	0	0	10	4	21	0	0
7	0	2	0	0	1	1	1	0	0	0	1	0
68	0	12	0	0	8	15	8	0	0	0	11	0
0	3	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	270	30	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
660	139	228	233	186	212	213	76	318	186	350	96	116
6530	1760	1825	1638	1580	1543	1565	678	3635	1168	2913	1037	1325
90.5%	88.4%	83.6%	47.4%	91.0%	90.7%	79.4%	85.7%	87.1%	78.5%	86.4%	95.8%	84.1%
2	2	5	0	0	0	0	0	9	1	1	1	5
0	2	0	0	1	0	0	0	0	1	1	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2	4	8	0	1	0	0	0	9	2	2	1	5
66.7%	50.0%	80.0%	0.0%	12.5%	0.0%	0.0%	0.0%	75.0%	50.0%	50.0%	50.0%	83.3%
1	2	2	5	6	1	1	1	1	2	1	0	1
0	0	0	2	1	0	3	2	2	0	1	1	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0
0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1	4	2	7	7	1	3	5	3	2	2	1	1
33.3%	50.0%	20.0%	100.0%	87.5%	100.0%	100.0%	100.0%	25.0%	50.0%	50.0%	50.0%	16.7%
刀子1・鉄鏃1		鉄釘2	鉄製棒軸1・鉄製紡輪1		石製紡錘車1	銅製丸鞆1・鉄鎌1		砥石2			不明土製品2	

067	068	069	070	071	073	074	075	076	合計
1	16	6	8	6	5	0	1	3	1336
2	114	45	19	55	70	0	8	10	8988
29	11	1	25	21	1	5	3	17	908
1270	260	18	650	910	42	455	110	465	21381
1	0	0	0	0	0	0	0	0	12
8	0	0	0	0	0	0	0	0	621
0	1	0	0	1	0	0	0	0	26
0	5	0	0	3	0	0	0	0	403
0	1	0	0	0	1	0	0	0	40
0	4	0	0	0	90	0	0	0	503
0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
0	0	0	0	0	0	0	0	0	32
31	29	7	33	28	7	5	4	20	2326
1280	383	63	669	968	202	455	118	475	31928
61.7%	11.2%	20.1%	29.0%	55.6%	29.3%	70.5%	13.4%	18.4%	19.7%
10	26	7	8	18	3	0	2	3	2573
55	238	93	58	78	12	0	10	20	14341
76	114	3	122	92	19	16	38	93	12176
410	2700	58	1160	694	475	190	750	1954	112324
0	2	2	0	0	0	0	0	0	35
0	10	78	0	0	0	0	0	0	854
0	0	0	0	0	0	0	0	0	34
0	0	0	0	0	0	0	0	0	414
2	8	1	2	0	0	0	0	3	55
330	100	22	390	0	0	0	0	130	2298
0	0	0	2	0	0	0	0	0	7
0	0	0	30	0	0	0	0	0	155
88	150	13	134	110	22	16	40	99	14880
795	3048	251	1638	772	487	190	760	2104	130386
38.3%	88.8%	79.9%	71.0%	44.4%	70.7%	29.5%	86.6%	81.6%	80.3%
0	2	0	3	2	2	2	2	0	111
1	0	0	0	0	0	0	0	2	18
1	0	0	0	0	0	0	0	0	5
0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
0	1	0	0	0	0	0	0	1	10
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2	3	0	3	6	2	2	2	3	149
50.0%	37.5%	0.0%	100.0%	75.0%	66.7%	33.3%	33.3%	30.0%	43.2%
1	1	0	0	4	0	3	3	4	97
1	4	2	0	2	1	1	0	3	86
0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
0	0	0	0	0	0	0	1	0	8
2	5	2	0	6	1	4	4	7	205
50.0%	62.5%	100.0%	0.0%	25.0%	33.3%	66.7%	66.7%	70.0%	56.8%
砥石2	鉄鏃1・鎌鉄1	刀子1	門金具1 鉄鏃1・鉄釘1・砥石1	土器転用硯1 土器転用紡錘車1	穂摘具1・刀子1		土器転用硯1		

第11表　出土土器破片数一覧（その他の遺構）

破片資料：上段点数、下段重量

		遺構番号 器種	005 溝	055 土坑	078 土坑	111 土坑	合計	048 土坑	072 土坑	077 土坑	079 掘立柱
破片資料	須恵器	杯	4	0	2	0	6	0	3	1	0
			62	0	15	0	77	0	10	10	0
		甕	8	0	0	0	8	1	1	0	2
			300	0	0	0	300	54	20	0	25
		甑	0	0	0	0	0	0	0	0	0
			0	0	0	0	0	0	0	0	0
		蓋	0	0	0	0	0	0	0	0	0
			0	0	0	0	0	0	0	0	0
		壺	1	0	0	0	1	0	0	0	0
			15	0	0	0	15	0	0	0	0
		その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0
			0	0	0	0	0	0	0	0	0
		合計A 点	13	0	2	0	15	1	4	1	2
		B g	377	0	15	0	392	54	30	10	25
		B/B+D %	15.7%	0.0%	3.1%	0.0%	12.8%	20.8%	6.9%	83.3%	61.0%
	土師器	杯 皿含む	62 550	8 51	0 0	0 0	70 601	1 2	2 18	0 0	0 0
		甕 鉢含む	125 1470	10 91	10 445	0 0	145 2006	17 203	32 385	1 2	1 16
		甑	0	1	1	0	2	0	0	0	0
			0	20	30	0	50	0	0	0	0
		小型土器	0	0	0	0	0	0	0	0	0
			0	0	0	0	0	0	0	0	0
		支脚	0	0	0	0	0	0	0	0	0
			0	0	0	0	0	0	0	0	0
		その他	0	2	0	0	2	0	0	0	0
			0	5	0	0	5	0	0	0	0
		合計C 点	187	21	11	0	219	18	34	1	1
		D g	2020	167	475	0	2662	205	403	2	16
		D/B+D %	84.3%	100.0%	96.9%	0.0%	87.2%	79.2%	93.1%	16.7%	39.0%
実測遺物	須恵器	杯	1	0	0	0	1	1	0	0	0
		甕	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		甑	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		蓋	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		壺	1	0	0	0	1	0	0	0	0
		その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		合計E 点	2	0	0	0	2	1	0	0	0
		E/E+F %	33.3%	0.0%	0.0%	0.0%	16.7%	50.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	土師器	杯	4	1	2	1	8	1	1	0	0
		甕	0	1	0	0	1	0	0	1	0
		甑	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		鉢	0	0	1	0	1	0	0	0	0
		小型土器	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		支脚	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		合計F 点	4	2	3	1	10	1	1	1	0
		F/E+F %	66.7%	100.0%	100.0%	100.0%	83.3%	50.0%	100.0%	100.0%	0.0%
		その他の出土遺物	高杯 1								

107 掘立柱	108 掘立柱	合計
1	3	8
15	12	47
0	4	8
0	60	159
0	0	0
0	0	0
0	0	0
0	0	0
0	0	0
0	0	0
0	0	0
0	0	0
1	7	16
15	72	206
20.3%	17.9%	16.9%
1	21	25
9	100	129
6	42	99
50	230	886
0	0	0
0	0	0
0	0	0
0	0	0
0	0	0
0	0	0
0	0	0
0	0	0
7	63	124
59	330	1015
79.7%	82.1%	83.1%
0	0	1
0	0	0
0	0	0
0	0	0
0	0	0
0	0	0
0	0	1
0.0%	0.0%	25.0%
0	0	2
0	0	1
0	0	0
0	0	0
0	0	0
0	0	0
0	0	3
0.0%	0.0%	75.0%

第12表　縄文土器一覧

挿図番号	グリッド	遺物番号	色調	胎　土	調整	焼成	施　文
1	カ7-16	1	赤褐色	微砂粒・雲母粒	ナデ	○	Y-R
2	023	911	茶褐色	微砂粒	ナデ	○	Y-L
3	33T	1	黒褐色	微砂粒	ナデ	○	Y-R
4	025	118 120 185	褐　色	微砂粒	ナデ	○	Y-R
5	025	104	褐　色	微砂粒	ナデ	○	Y-R
6	27T	1	褐　色	微砂粒		○	Y-L
7	34T	1	褐　色	微砂粒	ナデ	○	J-L
8	ワ7-25	1	褐　色	微砂粒	ナデ	○	Y-L
9	ワ7-18	1	明褐色	微砂粒		○	Y-R
10	024	317	明褐色	微砂粒		△	Y-L
11	カ8-16	1	明褐色	砂粒	ナデ	○	Y-R
12	26T	1	明褐色	微砂粒	ナデ	○	Y-R
13	カ8-7	11	赤褐色	微砂粒		△	Y-L
14	カ8-12	6	暗褐色	微砂粒	ナデ	△	Y-L
15	カ9-2	1	赤褐色	微砂粒	ナデ	○	Y-L
16	26T	1	明褐色	微砂粒	ナデ	○	Y-R
17	ワ7-24	1	明褐色	微砂粒		○	Y-R
18	37T	1	黒褐色	微砂粒		○	LR
19	カ8-19	1	黒褐色	微砂粒	ナデ	○	LR
20	30T	1	明褐色	微砂粒		○	Y-R
21	カ8-1	1	明褐色	微砂粒		○	RL
22	カ7-16	1	明褐色	微砂粒	ナデ	○	Y-L（不明瞭）
23	カ8-19	1	褐　色	微砂粒	ナデ	○	Y-R
24	カ7-16	1	褐　色	微砂粒		○	RL
25	34T	1	暗褐色	微砂粒		△	LR
26	023	25	赤褐色	微砂粒		△	LR
27	カ7-21	1	赤褐色	微砂粒・雲母粒		○	LR（不明瞭）
28	カ8-1	1	茶褐色	微砂粒	ナデ	○	RL（不明瞭）
29	カ8-12	6	明褐色	微砂粒		○	LR
30	カ7-21	1	明褐色	微砂粒・石英砂粒		○	LR（不明瞭）
31	26T	1	明褐色	微砂粒・石英砂粒		○	LR（不明瞭）
32	カ8-7	11	明褐色	微砂粒		○	Y-R（不明瞭）
33	カ7-16	1	明褐色	微砂粒		○	Y-L（不明瞭）
34	ワ7-20	1	明褐色	微砂粒		○	Y-L（不明瞭）
35	ワ8-5	1	明褐色	微砂粒	ナデ	○	Y-R（不明瞭）
36	カ8-3	1	茶褐色	微砂粒		△	Y-R（不明瞭）
37	31T	2	茶褐色	微砂粒		△	Y-R
38	025	93	明褐色	微砂粒		○	Y-R
39	24T	1	明褐色	微砂粒		○	Y-R
40	023	70	明褐色	微砂粒		○	Y-R
41	26T	1	明褐色	微砂粒		△	Y-R
42	カ8-3	1	明褐色	微砂粒		○	Y-R
43	32T	1	明褐色	微砂粒		○	Y-R
44	カ9-13	1	明褐色	微砂粒		○	Y-R
45	ワ7-17	1	明褐色	微砂粒		○	Y-R
46	ワ7-17	1	明褐色	微砂粒	ナデ	○	Y-R
47	31T	2	明褐色	微砂粒		○	Y-R
48	024	359	明褐色	微砂粒		△	Y-R,沈線
49	28T	1	明褐色	微砂粒		○	沈線
50	ワ7-16	1	黒褐色	微砂粒		○	沈線
51	30T	2	暗褐色	微砂粒		○	沈線
52	37T	1	明褐色	微砂粒		○	沈線

挿図番号	グリッド	遺物番号	色調	胎　土	調整	焼成	施　文
53	カ9-1	3	明褐色	微砂粒		△	沈線
54	カ9-2	1	明褐色	微砂粒・岩石粒		○	沈線
55	カ8-6	1	明褐色	微砂粒		○	沈線
56	27T	1	明褐色	微砂粒・石英粒		○	沈線
57	カ8-19	1	明褐色	微砂粒		○	沈線
58	28T	1	明褐色	微砂粒・石英粒		○	沈線
59	ワ8-5	1	明褐色	微砂粒・石英粒		○	沈線
60	カ8-6	1	明褐色	微砂粒		○	沈線
61	タ6-24	1	明褐色	微砂粒		△	沈線
62	カ6-24	1	明褐色	微砂粒		○	沈線
63	タ6-24	1	茶褐色	微砂粒・石英粒		○	沈線
64	カ6-24	1	明褐色	微砂粒		○	沈線
65	カ6-24	1	明褐色	微砂粒		○	沈線
66	タ6-24	1	明褐色	微砂粒		○	沈線
67	タ6-24	1	明褐色	微砂粒		○	沈線
68	カ6-24	1	明褐色	微砂粒・石英粒		○	沈線
69	タ6-25	175	明褐色	微砂粒		○	沈線
70	015	103	暗褐色	微砂粒・繊維		○	条痕
71	カ7-14		明褐色	微砂粒・繊維		○	条痕
72	カ7-14	1	明褐色	微砂粒・繊維		○	条痕
73	タ6-25	175	明褐色	微砂粒・繊維		○	条痕
74	004	83	暗褐色	微砂粒・繊維		○	条痕
75	カ7-15	1	明褐色	微砂粒・繊維	条痕	○	条痕
76	016	37	明褐色	微砂粒・繊維	条痕	○	条痕
77	カ7-17	1	明褐色	微砂粒・繊維		△	条痕
78	31T	1	明褐色	微砂粒・繊維	ナデ	○	条痕
79	ワ8-3	1	明褐色	微砂粒		○	無文
80	17A	11	明褐色	微砂粒	ナデ	○	縄文(LR),半截竹管
81	カ7-16	2	明褐色	微砂粒	ナデ	○	半截竹管
82	カ7-16	2	黒褐色	微砂粒	ナデ	△	半截竹管
83	NEV	1	暗褐色	微砂粒	ナデ	○	縄文(LR),半截竹管
84	カ7-11	1	明褐色	微砂粒	ナデ	○	半截竹管
85	カ7-16	2	暗褐色	微砂粒・繊維	ナデ	○	羽状縄文(RL)
86	カ7-16	2	明褐色	微砂粒・繊維	ナデ	△	羽状縄文(RL)
87	017A	128	明褐色	微砂粒・繊維	ナデ	○	羽状縄文(RL)
88	017A	128	明褐色	微砂粒	ナデ	○	LR
89	012	34	明褐色	微砂粒・繊維	ナデ	△	羽状縄文(RL)
90	カ7-16	2	明褐色	微砂粒	ナデ	○	RL
91	NEV	1	明褐色	微砂粒・繊維	ナデ	△	LR
92	017A	128	明褐色	微砂粒・繊維		△	貝殻腹縁文
93	017A	105	明褐色	微砂粒・繊維	ナデ	○	貝殻腹縁文
94	017A	128	明褐色	微砂粒・繊維	ナデ	○	貝殻腹縁文
95	017A	38 46 128	明褐色	微砂粒	ナデ	○	櫛描文
96	カ7-16	2	明褐色	微砂粒	ナデ	○	櫛描文
97	017A	128	明褐色	微砂粒	ナデ	○	櫛描文
98	カ7-16	2	明褐色	微砂粒・繊維	ナデ	△	櫛描文
99	017A	128	明褐色	微砂粒・繊維		△	櫛描文
100	カ7-16	2	明褐色	微砂粒	ナデ	○	櫛描文
101	017A	128	暗褐色	微砂粒		△	櫛描文
102	017A	128	明褐色	微砂粒		○	櫛描文
103	タ6-25	175	明褐色	微砂粒・雲母粒	ナデ	○	半截竹管
104	017A	88	暗褐色	微砂粒		○	半截竹管
105	タ7-17	1	暗褐色	微砂粒	ナデ	△	半截竹管

挿図番号	グリッド	遺物番号	色調	胎　土	調整	焼成	施　文
106	017A	128	明褐色	微砂粒	ナデ	○	半截竹管
107	ヨ7-22	1	明褐色	微砂粒	ナデ	○	半截竹管
108	017A	91	明褐色	微砂粒	ナデ	○	半截竹管
109	017A	128	明褐色	微砂粒		○	半截竹管
110	カ7-16	2	黒褐色	微砂粒	ナデ	○	縄文(RL) 半截竹管
111	017A	128	明褐色	微砂粒	ナデ	○	縄文(RL) 半截竹管
112	017A	128	黒褐色	微砂粒		○	縄文(LR) 半截竹管
113	タ7-17	1	暗褐色	微砂粒		○	半截竹管
114	017A	128	明褐色	微砂粒	ナデ	○	半截竹管
115	017A	72	暗褐色	微砂粒	ナデ	○	半截竹管
116	カ7-16	2	明褐色	微砂粒		○	半截竹管
117	カ7-16 2.017A	128	明褐色	微砂粒	ナデ	○	Y-L 半截竹管
118	017A	84	暗褐色	微砂粒	ナデ	○	Y-L 半截竹管
119	カ7-16	2	暗褐色	微砂粒	ナデ	○	Y-L 半截竹管
120	017A	50	暗褐色	微砂粒	ナデ	○	Y-L 半截竹管
121	カ7-16	2	明褐色	微砂粒	ナデ	○	Y-L 半截竹管
122	カ7-16	2	明褐色	微砂粒	ナデ	○	Y-L 半截竹管
123	017A	128	暗褐色	微砂粒	ナデ	○	半截竹管
124	ヨ7-19	1	明褐色	微砂粒		○	半截竹管指頭痕
125	カ9-11	1	明褐色	微砂粒		○	半截竹管指頭痕
126	カ9-6	2	明褐色	微砂粒		○	半截竹管刺突文
127	31T	1	明褐色	微砂粒・雲母粒	ナデ	○	半截竹管
128	028	138	明褐色	微砂粒	ナデ	○	指頭・縁縄文(LR)
129	028	138	明褐色	微砂粒	ナデ	○	縄文(RL)
130	047	105	暗褐色	微砂粒	ナデ	○	半截竹管
131	056	19	明褐色	微砂粒		○	半截竹管
132	017A	128	明褐色	微砂粒		○	刺突文
133	カ7-16	2	明褐色	微砂粒		○	刺突文半截竹管
134	001	14	明褐色	微砂粒	ナデ	○	貝殻腹縁文
135	001	14	明褐色	微砂粒		○	貝殻腹縁文
136	レ6-12	1	明褐色	微砂粒	ナデ	○	貝殻腹縁文
137	レ6-12	1	明褐色	微砂粒	ナデ	△	貝殻腹縁文
138	レ6-12	1	明褐色	微砂粒	ナデ	○	貝殻腹縁文
139	レ6-12	1	明褐色	微砂粒	ナデ	○	貝殻腹縁文
140	カ7-11	1	明褐色	微砂粒		○	貝殻腹縁文
141	001	14	明褐色	微砂粒		○	貝殻腹縁文
142	ワ7-16	1	明褐色	微砂粒		○	貝殻腹縁文
143	ワ7-11	1	明褐色	微砂粒	ナデ	○	貝殻腹縁文
144	40T	1	明褐色	微砂粒	ナデ	○	貝殻腹縁文
145	ワ8-4	1	明褐色	微砂粒・雲母粒		○	貝殻腹縁文
146	40T	1	明褐色	微砂粒		○	貝殻腹縁文
147	レ6-12	1	明褐色	微砂粒		○	貝殻腹縁文
148	039	1	暗褐色	微砂粒	ナデ	○	貝殻腹縁文
149	レ6-17	1	明褐色	微砂粒	ナデ	○	貝殻腹縁文
150	レ6-17	1	明褐色	微砂粒	ナデ	○	貝殻腹縁文
151	レ6-12	1	明褐色	微砂粒	ナデ	○	貝殻腹縁文
152	レ6-12	1	明褐色	微砂粒	ナデ	○	貝殻腹縁文
153	43T	1	明褐色	微砂粒	ナデ	○	貝殻腹縁文
154	ヨ7-19	1	明褐色	微砂粒	ナデ	○	縄文(LR)・貝殻腹縁・半截竹管
155	047	465	明褐色	微砂粒	ナデ	○	半截竹管
156	047	399	茶褐色	微砂粒	ナデ	○	半截竹管
157	057	1	明褐色	微砂粒	ナデ	○	半截竹管
158	019	616	明褐色	微砂粒		○	半截竹管

挿図番号	グリッド	遺物番号	色調	胎　土	調整	焼成	施　文
159	10T	1	明褐色	微砂粒	ナデ	○	半截竹管
160	21T	1	明褐色	微砂粒	ナデ	○	半截竹管
161	ワ7-16	1	明褐色	微砂粒	ナデ	◎	櫛描文
162	060	1	明褐色	微砂粒	ナデ	○	櫛描文
163	ワ7-21	1	明褐色	微砂粒	ナデ	○	半截竹管
164	44T	1	明褐色	微砂粒		◎	半截竹管
165	44T	1	明褐色	微砂粒	ナデ	◎	半截竹管
166	ワ7-11	1	明褐色	微砂粒		◎	半截竹管
167	44T	1	明褐色	微砂粒		○	半截竹管
168	30T 1,カ9-12	1	暗褐色	微砂粒		◎	半截竹管
169	カ9-12	1	明褐色	微砂粒	ナデ	○	半截竹管
170	カ9-12	1	明褐色	微砂粒	ナデ	○	半截竹管
171	カ9-12	1	明褐色	微砂粒	ナデ	○	半截竹管
172	カ9-12	1	暗褐色	微砂粒		◎	半截竹管
173	カ9-12	1	明褐色	微砂粒	ナデ	◎	半截竹管
174	カ7-11	1	明褐色	微砂粒	ナデ	◎	縄文(LR)・S字状結節文
175	カ7-6	1	明褐色	微砂粒	ナデ	◎	縄文(LR)・S字状結節文
176	30T	2	明褐色	微砂粒	ナデ	○	縄文(RL)・刺突文
177	30T	2	明褐色	微砂粒	ナデ	△	縄文(RL)・刺突文
178	タ6-24	1	明褐色	微砂粒	ナデ	△	刺突文
179	31T	2	黒褐色	微砂粒・雲母粒	ナデ	◎	刺突文
180	ワ7-16	1	明褐色	石英粒・雲母粒	ナデ	△	Y-L
181	タ7-17	1	明褐色	微砂粒・雲母粒	ナデ	◎	刺突文
182	028	94	茶褐色	微砂粒	ナデ	◎	指頭・刺突文
183	カ7-11	1	暗褐色	微砂粒・雲母粒	ナデ	◎	刺突文
184	019	182	明褐色	微砂粒		◎	縄文(LR)
185	レ6-13	1	明褐色	微砂粒	ナデ	◎	刺突文
186	048	8	明褐色	微砂粒		△	半截竹管・縄文(LR)
187	レ6-16	1	明褐色	微砂粒		△	縄文(LR)・半截竹管
188	065	12	明褐色	微砂粒・雲母粒		△	縄文(RL)・刺突文
189	カ7-16	2	明褐色	微砂粒・雲母粒	ナデ	◎	縄文(RL)・半截竹管
190	28T	1	茶褐色	微砂粒	ナデ	◎	縄文(RL)・半截竹管・指頭
191	カ7-16	2	明褐色	微砂粒	ナデ	○	縄文(RL)・半截竹管・指頭
192	カ8-17	1	茶褐色	微砂粒	ナデ	◎	縄文(RL)・半截竹管・指頭
193	カ7-16	2	茶褐色	微砂粒	ナデ	○	縄文(RL)・半截竹管・指頭
194	カ7-16	2	茶褐色	微砂粒・雲母粒	ナデ	○	縄文(RL)・半截竹管
195	カ7-16	2	茶褐色	微砂粒・雲母粒	ナデ	◎	縄文(RL)・半截竹管・指頭
196	カ7-16	2	茶褐色	微砂粒・雲母粒	ナデ	○	縄文(RL)・半截竹管
197	カ7-16	2	明褐色	微砂粒・雲母粒	ナデ	○	縄文(RL)・半截竹管
198	カ7-16	2	茶褐色	微砂粒	ナデ	◎	縄文(RL)・半截竹管
199	カ7-16	2	茶褐色	微砂粒	ナデ	○	縄文(RL)・半截竹管
200	カ7-16	2	茶褐色	微砂粒	ナデ	○	縄文(RL)・半截竹管
201	カ8-19	1	茶褐色	微砂粒	ナデ	◎	縄文(LR)・半截竹管
202	カ8-19	1	暗褐色	微砂粒	ナデ	○	縄文(LR)・半截竹管
203	カ8-19	1	暗褐色	微砂粒	ナデ	◎	半截竹管
204	カ8-19	1	暗褐色	微砂粒	ナデ	◎	半截竹管
205	カ8-19	1	明褐色	微砂粒	ナデ	◎	半截竹管
206	13T	1	明褐色	微砂粒	ナデ	○	半截竹管
207	カ8-19	1	暗褐色	微砂粒	ナデ	○	半截竹管
208	13T	1	明褐色	微砂粒	ナデ	◎	半截竹管
209	タ6-24	1	明褐色	微砂粒	ナデ	△	半截竹管

凡例　焼成：◎＝良好　△＝普通

第13表　縄文時代の石器一覧

遺物番号	挿図番号	器種	石質	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考
013-42	1	石鏃	珪質頁岩	27.3	14.9	4.1	1.3	
026-69	2	石鏃	黒曜石	19.7	16.2	3.8	0.8	
043-59	3	石鏃	チャート	22.0	14.9	3.0	0.7	
038-24	4	石鏃	珪質頁岩	[22.1]	15.1	5.9	1.7	
027-63	5	石鏃	石英	20.8	16.7	4.5	1.0	
029-4	6	石鏃	安山岩	[20.2]	[13.6]	4.2	0.8	
031-25	7	石鏃	黒曜石	12.8	15.1	3.9	0.5	
9T-1	8	石鏃	チャート	[13.5]	15.6	4.3	0.8	
26T-1	9	石鏃未製品	黒曜石	13.4	15.1	3.9	0.7	
036-41	10	打製石斧	安山岩	98.3	58.8	24.3	160.3	
019-616	11	打製石斧	変成岩	97.2	47.8	18.2	135.2	
026-46	12	磨製石斧	閃緑岩	……	[58.8]	31.2	93.1	乳棒状石斧
013-42	13	磨製石斧	安山岩	……	[44.0]	11.6	11.2	
040B-26	14	礫器	砂岩	68.2	26.6	13.1	38.7	
一括	15	敲き石	砂岩	95.1	79.8	33.0	390.8	
025-81	16	凹石	安山岩	95.4	82.1	56.8	694.8	

第14表　先土器時代の石器一覧

ブロック	遺物番号	挿図番号	器種	石質	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考
A	ワ09-04-01	1	ナイフ形石器	頁岩	54.9	15.3	7.2	5.4	
	ワ09-04-02	5	剥片(使用痕有り)	頁岩	37.2	21.8	3.4	3.2	
	ワ09-09-01		剥片	頁岩	20.4	9.5	5.4	1.1	
	ワ09-09-02	3	礫器	硬砂岩	69.5	58.5	39.5	162.9	
B	ワ09-05-01	8	石核	ホルンフェルス	32.4	26.7	24.9	28.9	
	ワ09-05-02		剥片	チャート	11.4	10.8	5.8	1.0	
	ワ09-05-03	21	剥片	砂岩	23.5	42.5	22.8	31.0	接合資料20
	一括	9	石核	砂岩	51.8	51.0	32.4	93.0	接合資料20
	ワ09-05-04		剥片	泥岩	46.5	19.0	8.2	6.4	
	ワ09-10-01		剥片	凝灰岩	35.3	35.8	8.8	8.9	
	カ09-01-01	14	剥片	砂岩	42.8	23.8	12.0	13.9	
	カ09-01-02		剥片	安山岩	26.7	12.5	3.3	1.0	
	カ06-06-01	13	剥片	安山岩	30.9	25.9	9.7	7.5	
C	カ08-07-01		剥片	頁岩	18.6	19.0	6.0	2.0	
	カ08-07-02		剥片	頁岩	13.5	17.7	3.6	0.7	
	カ08-07-03		剥片	頁岩	12.9	20.0	3.7	1.0	
	カ08-07-04	16	剥片	頁岩	23.0	22.0	6.2	2.9	接合資料15
	カ08-07-05	18	剥片	頁岩	53.4	30.5	15.2	22.5	接合資料17
	カ08-07-06		剥片	頁岩	17.1	22.2	5.4	1.6	
	カ08-07-07		剥片	頁岩	11.5	17.9	2.3	0.5	
	カ08-07-08	6	剥片(使用痕有り)	頁岩	41.6	17.6	3.6	2.5	接合資料15
	カ08-07-09		剥片	頁岩	18.6	13.2	2.6	0.5	
	カ08-07-10	4	剥片(使用痕有り)	頁岩	49.3	25.3	4.9	6.0	
	カ08-08-01		剥片	頁岩	39.9	48.1	8.3	15.6	
	カ08-08-02		剥片	頁岩	23.7	27.1	8.7	6.2	
	カ08-12-01		剥片	頁岩	88.2	24.8	8.8	22.8	
	カ08-12-02		剥片	頁岩	35.6	28.1	4.9	4.3	
	カ08-12-03	19	剥片	頁岩	27.3	16.0	7.1	2.9	接合資料17
	カ08-12-04		剥片	頁岩	70.8	38.4	8.3	12.0	
	カ08-12-05	7	剥片(使用痕有り)	頁岩	51.0	23.3	11.2	11.8	接合資料15
E	ワ08-07-01		剥片	チャート	23.8	20.4	4.0	1.8	
	ワ08-07-02	2	削器	安山岩	91.8	45.2	16.7	64.4	
その他	ヨ08-03-01	10	縦長剥片	頁岩	142.6	37.5	12.9	59.9	
	ヨ08-15-01	11	縦長剥片	頁岩	58.5	13.0	6.5	5.4	
	070-2	12	剥片	頁岩	36.1	16.2	3.8	1.6	

報告書抄録

フリガナ	サクラシミナミヒロイセキ
書名	佐倉市南広遺跡
副書名	佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	X
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第236集
著者名	森本和男　金丸誠　井上哲朗　豊田秀治
編集機関	財団法人千葉県文化財センター
所在地	〒284　千葉県四街道市鹿渡809－2
発行年	1993年3月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
南広遺跡（ミナミヒロイセキ）	佐倉市大作2丁目（サクラシオオサクニチョウメ）	12212	025	35.40.40.	140.14.50.	19841001- 19850331 19851121- 19860131 19890401- 19920331	17,700	工業団地建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
南広遺跡	包蔵地	先土器	遺物集中地点	4	ナイフ形石器　削器	古墳時代後期から平安時代にかけての集落の変遷を追うことができる。 近世の遺構群は当時の民衆レベルの考古資料として貴重。
		古墳	竪穴住居	22	土師器　須恵器　鉄製品	
			土坑	3	土製品　鉄滓	
			溝	1		
		奈良・平安	竪穴住居	45	土師器　須恵器　鉄製品	
			掘立柱建物	6	帯金具	
			柵列	2		
			土坑	2		
		近世	掘立柱建物	1	陶磁器　土器　銭貨　煙管	
			方形竪穴建物	10		
			柵列	3		
			土坑墓	1		
			火葬墓	2		
			溝状遺構	1		
			壇状遺構	1		

写　真　図　版

南広遺跡（航空写真・西から）

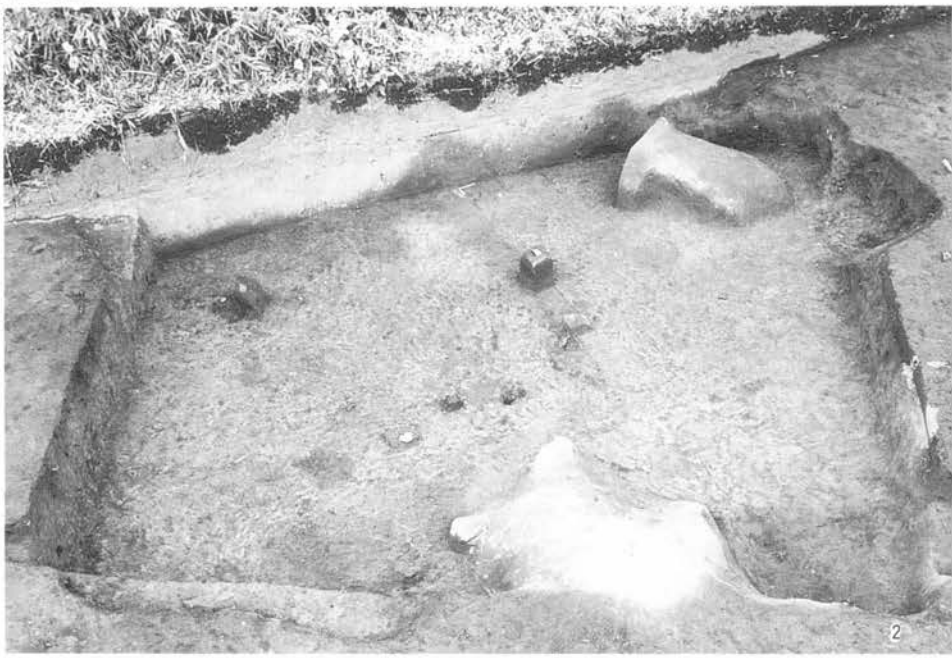
近景（調査区西側
台地先端部）

先土器時代Aブロック

先土器時代Bブロック

1

先土器時代Cブロック



2

竪穴住居001

3

竪穴住居008A・B

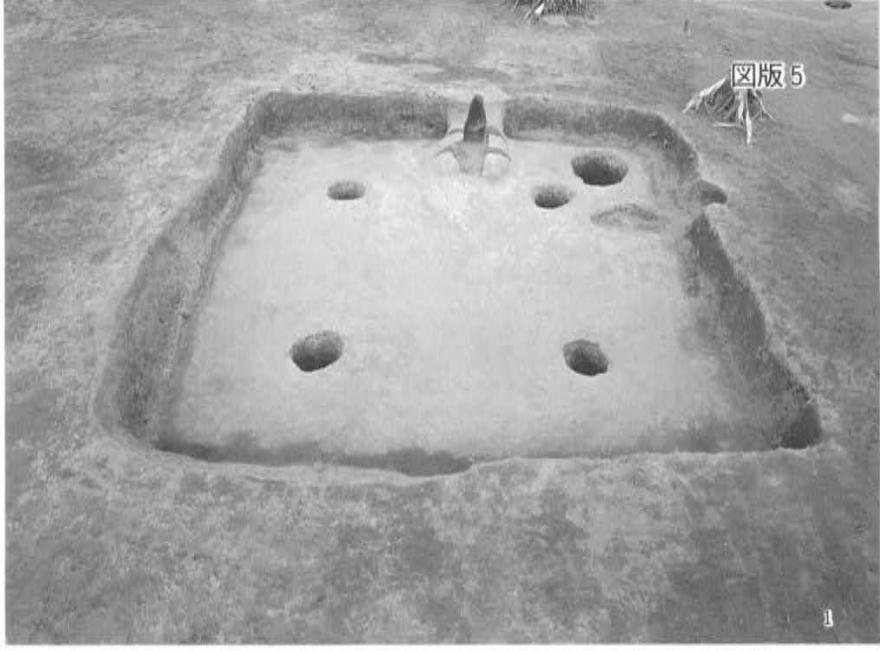
図版4

竪穴住居025

竪穴住居032

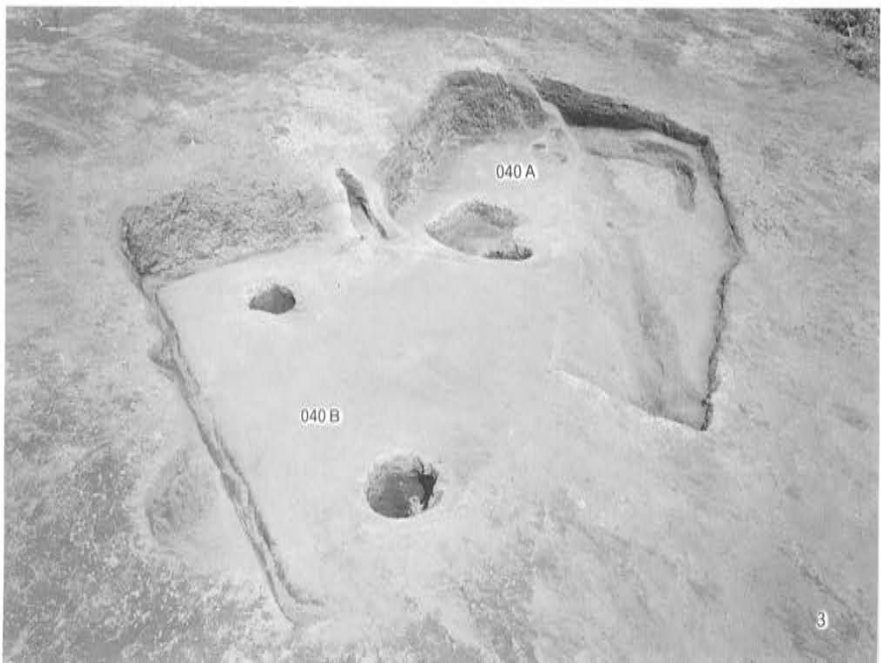
竪穴住居037A・B・C・D

竪穴住居038



竪穴住居039

竪穴住居040A・B



図版6

竪穴住居042

竪穴住居044

竪穴住居047

竪穴住居003遺物出土状態

竪穴住居003

竪穴住居009

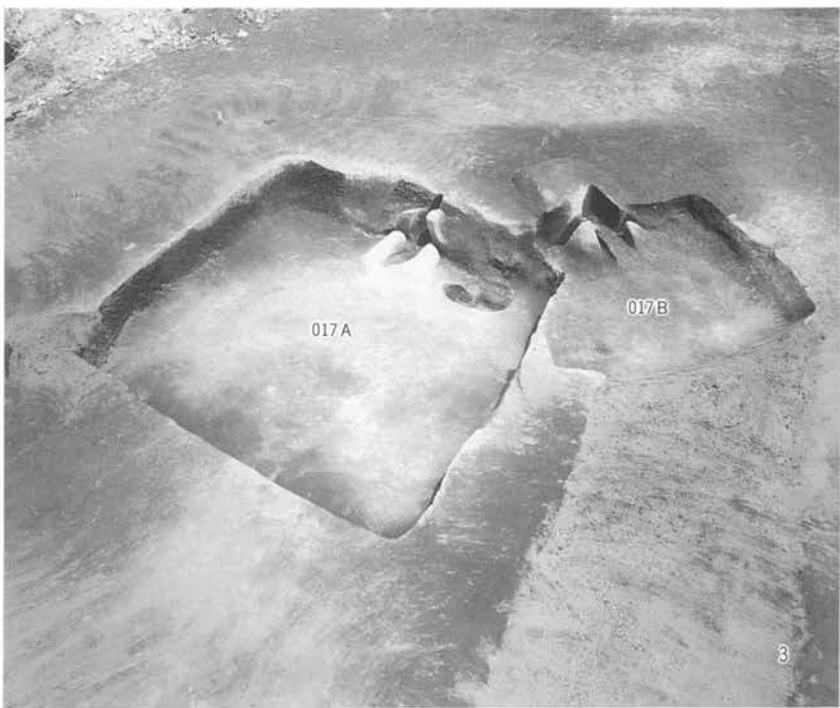
竪穴住居012

竪穴住居013

竪穴住居014

竪穴住居015

竪穴住居016



竪穴住居017A・B

図版10

竪穴住居018

竪穴住居020B

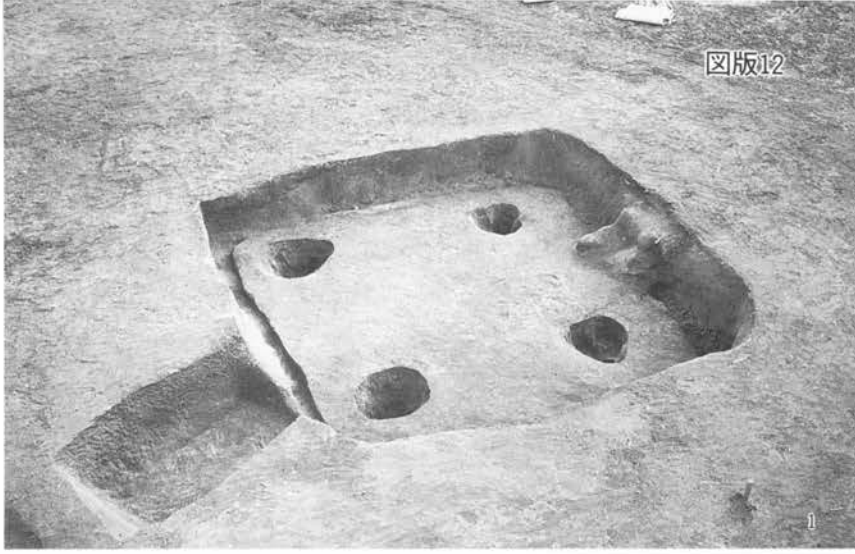
竪穴住居020C・D

竪穴住居021

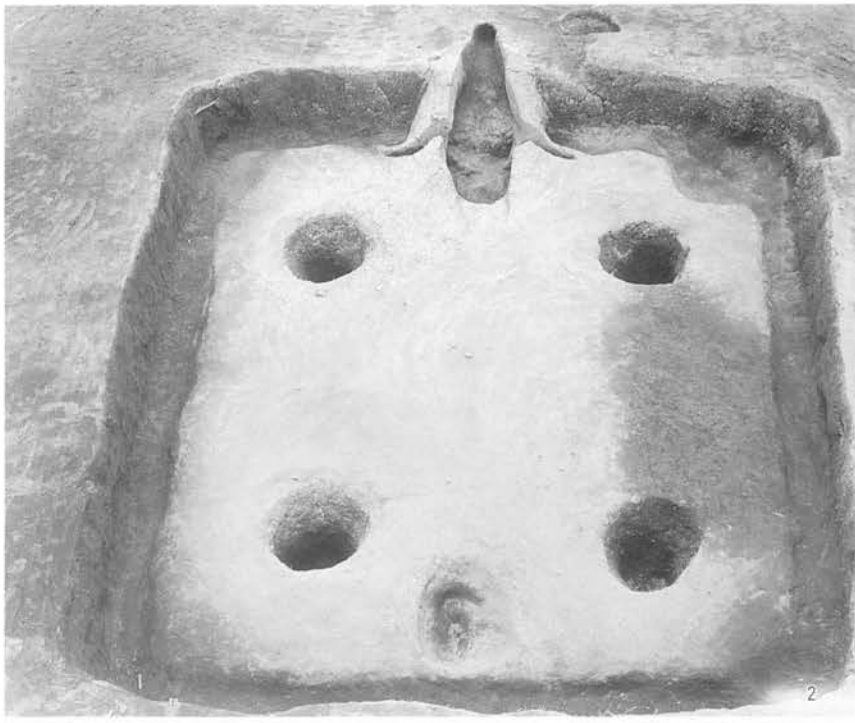
竪穴住居022A・B

竪穴住居023

竪穴住居024



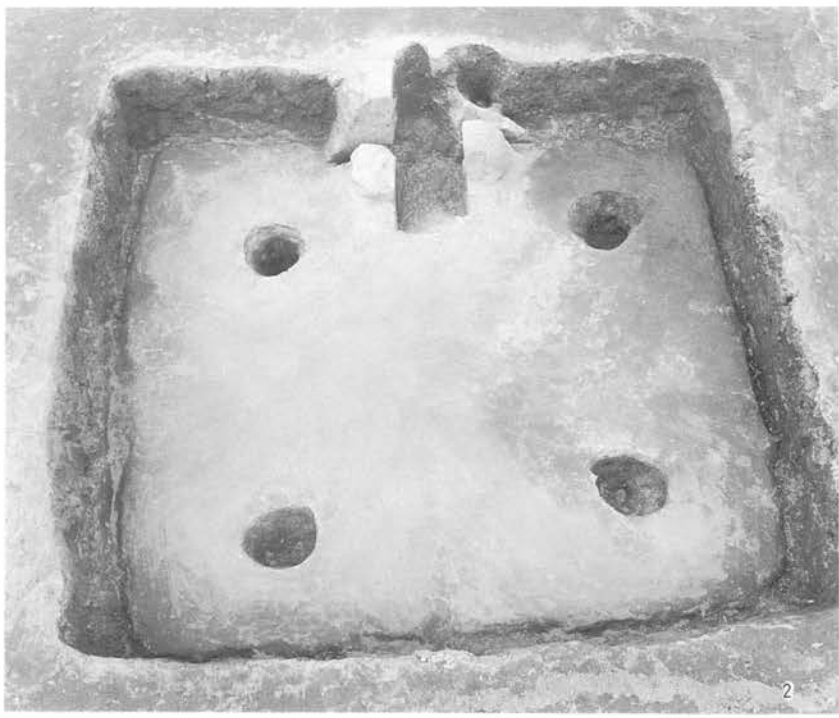
竪穴住居026



竪穴住居027

竪穴住居028

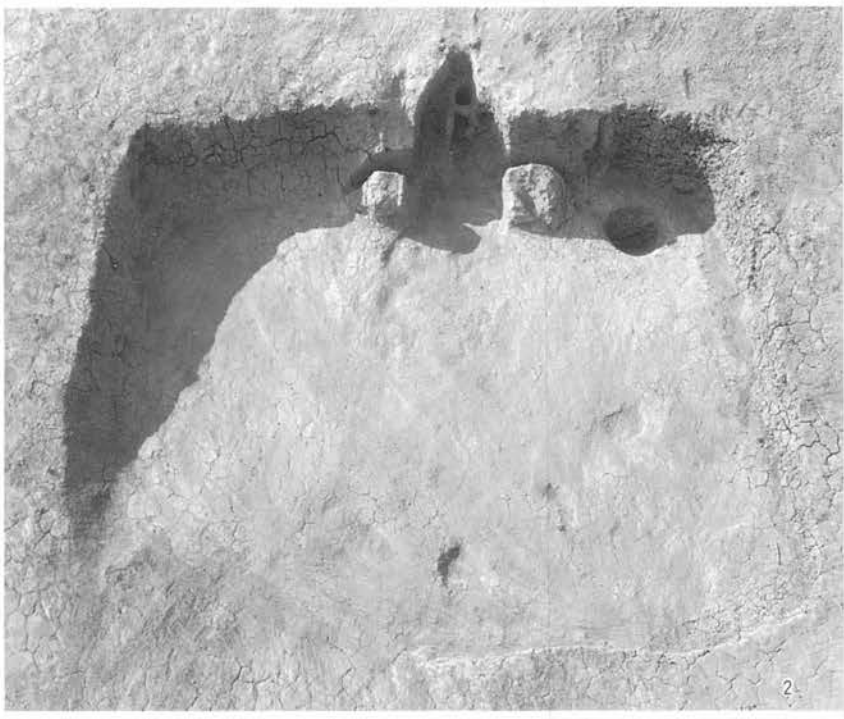
竪穴住居029



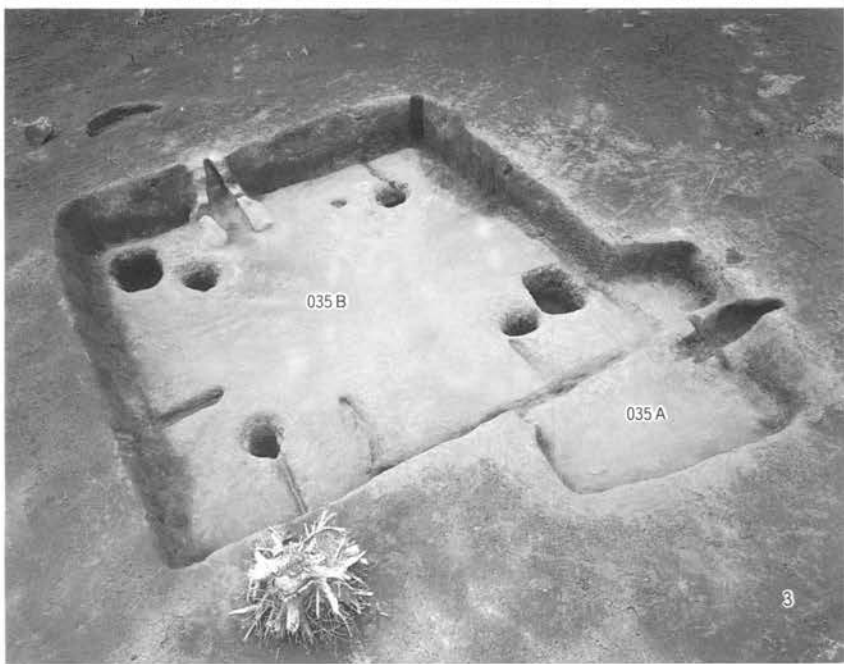
竪穴住居031

竪穴住居033

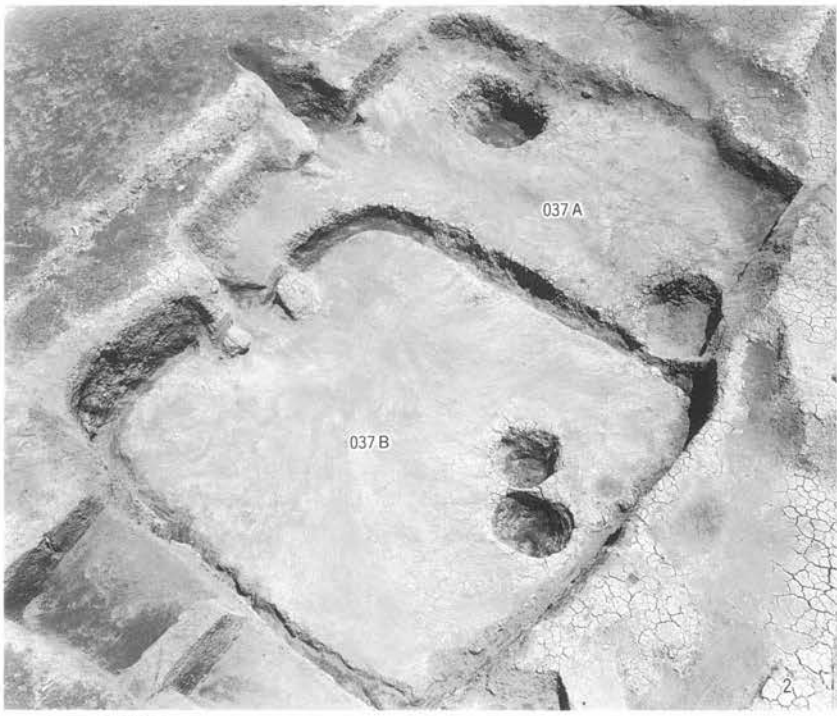
竪穴住居034



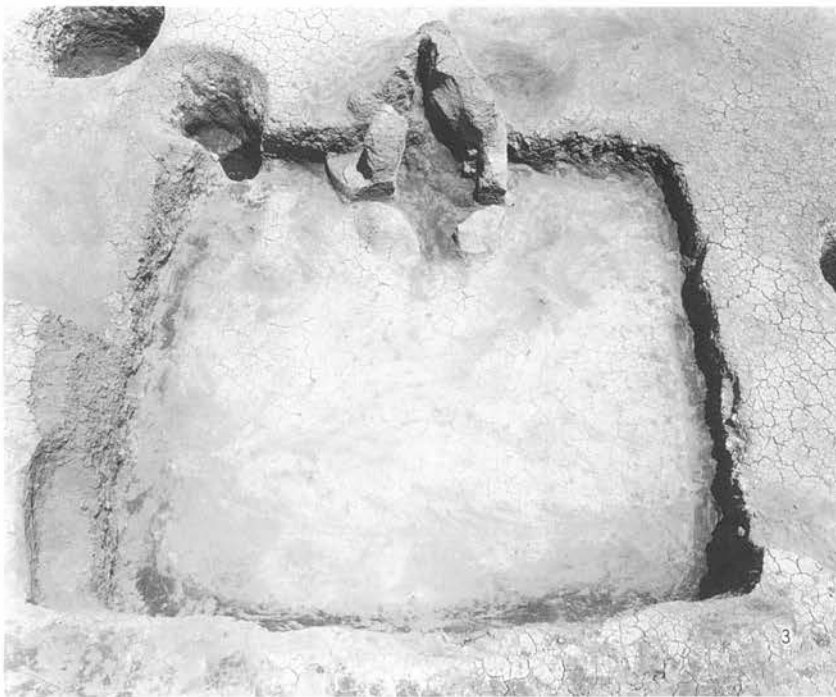
竪穴住居035A・B



竪穴住居035A・B遺物出土状態

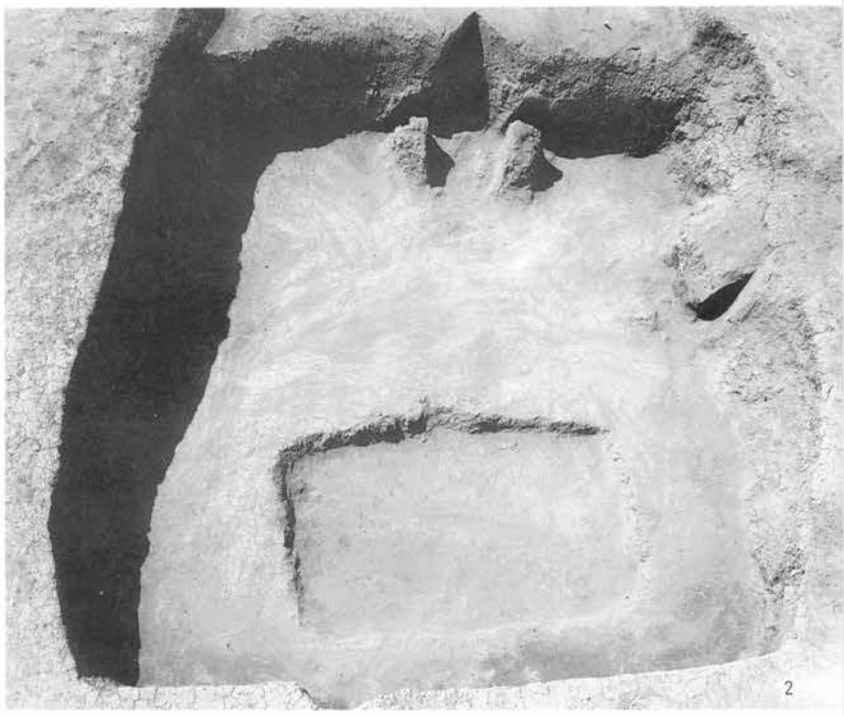


竪穴住居037A・B



竪穴住居037C

竪穴住居041



竪穴住居046

竪穴住居065

竪穴住居054

竪穴住居066

竪穴住居067

竪穴住居068

竪穴住居069

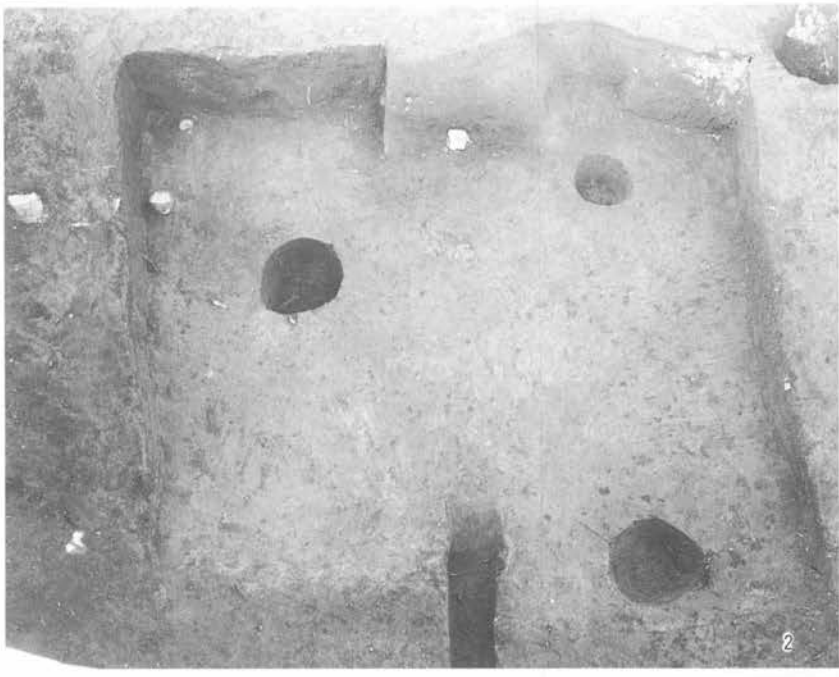
竪穴住居070

竪穴住居071

竪穴住居073

竪穴住居074

竪穴住居075



竪穴住居076

掘立柱建物100・101

掘立柱建物107

近世遺構群019（南から）

近世遺構群019（西から）

10

11

カ08-12-04

4

カ08-12-01

15

17

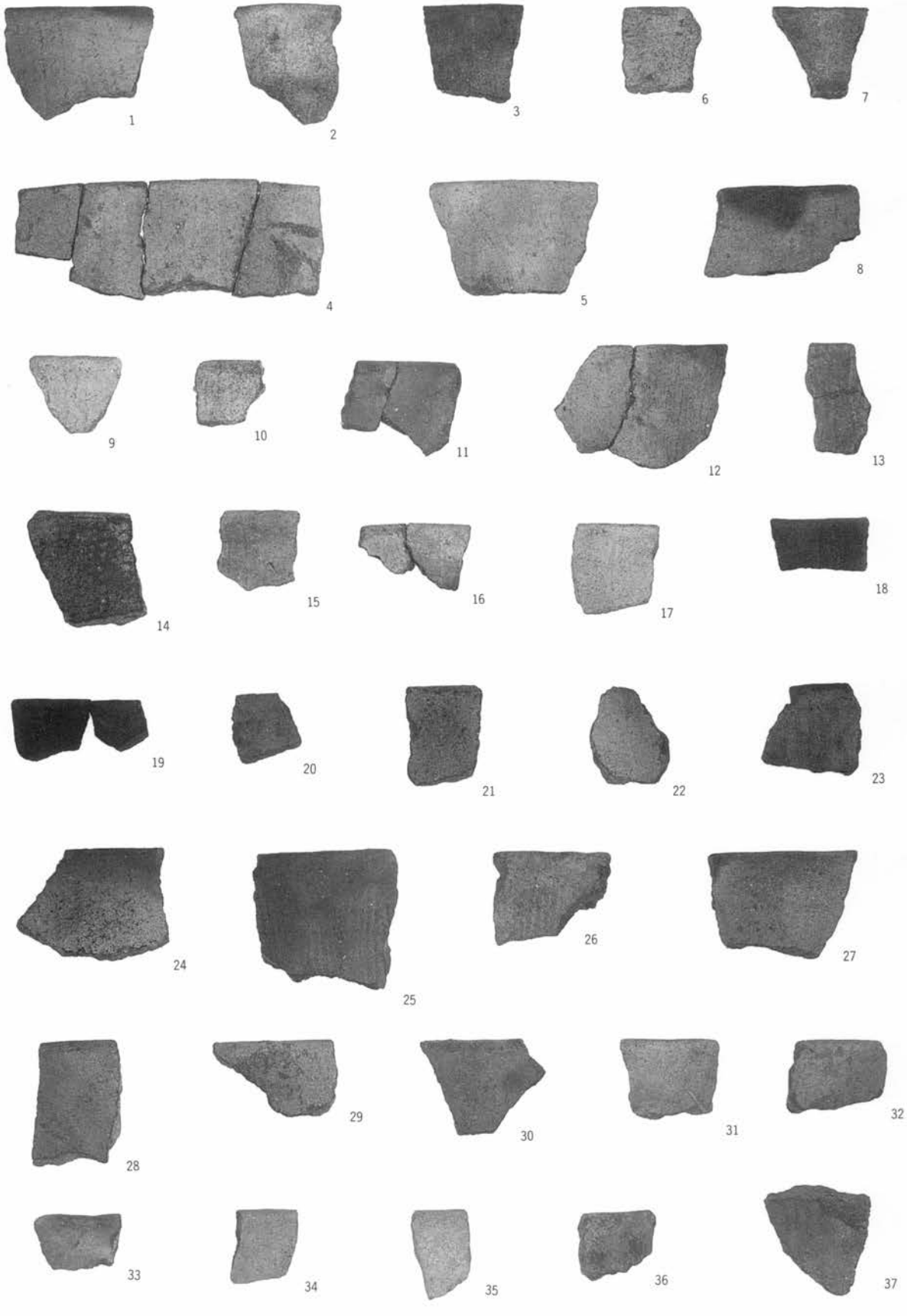
3

1

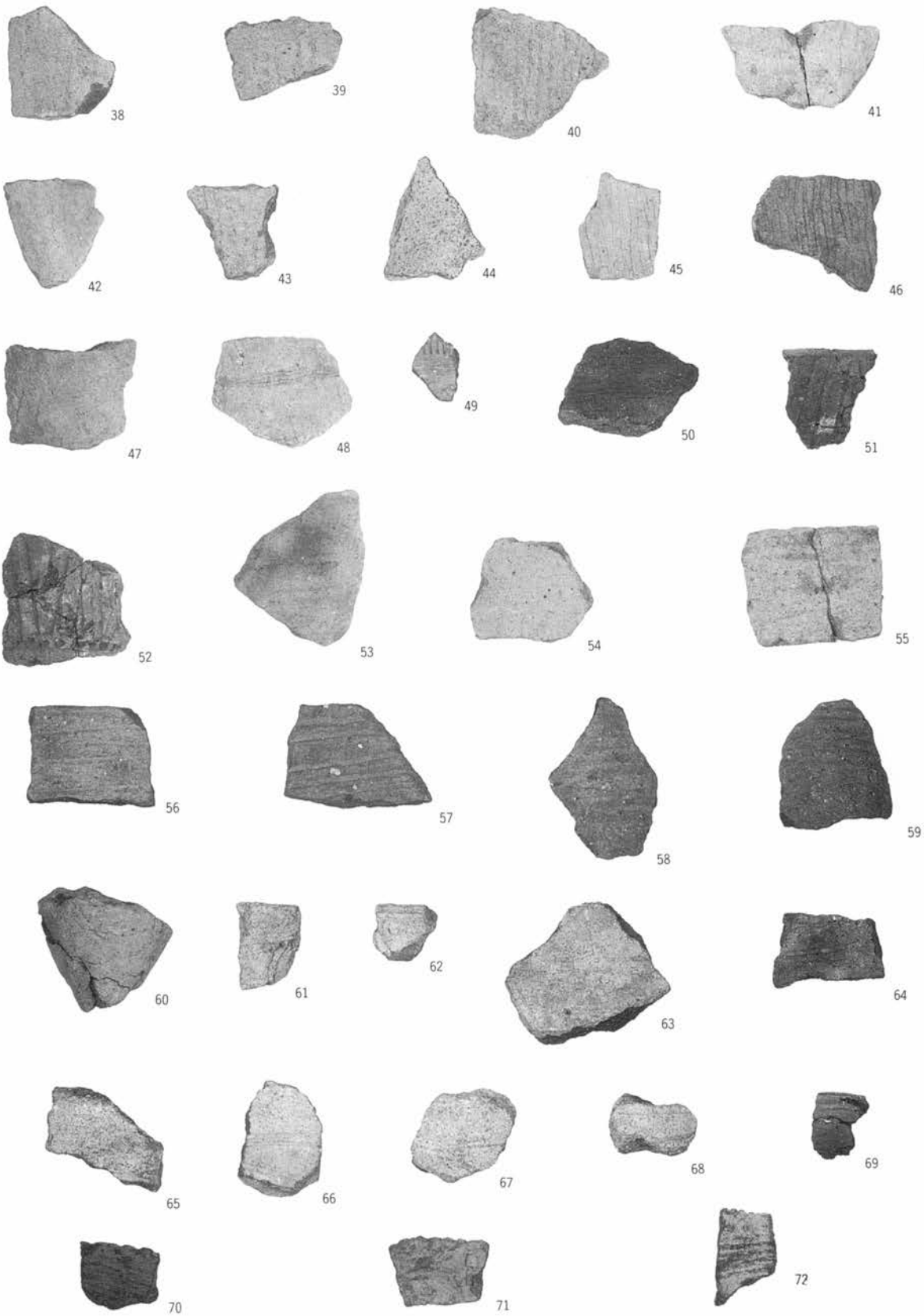
5

ワ09-09-01

20


1
2
3
6
7
4
5
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37

縄文時代の土器 (1)


38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72

縄文時代の土器 (2)

73

74

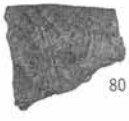
75

76

79

77

78


80

81

82

83

84

85

86

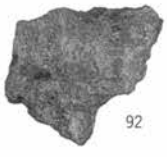
87

88

90

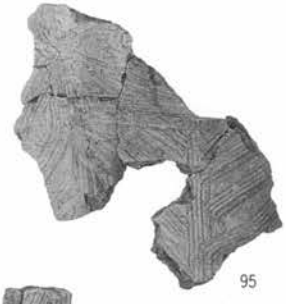
89

91


92

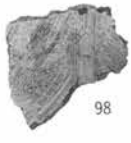
93

94


95

96

97


98

99

100

102

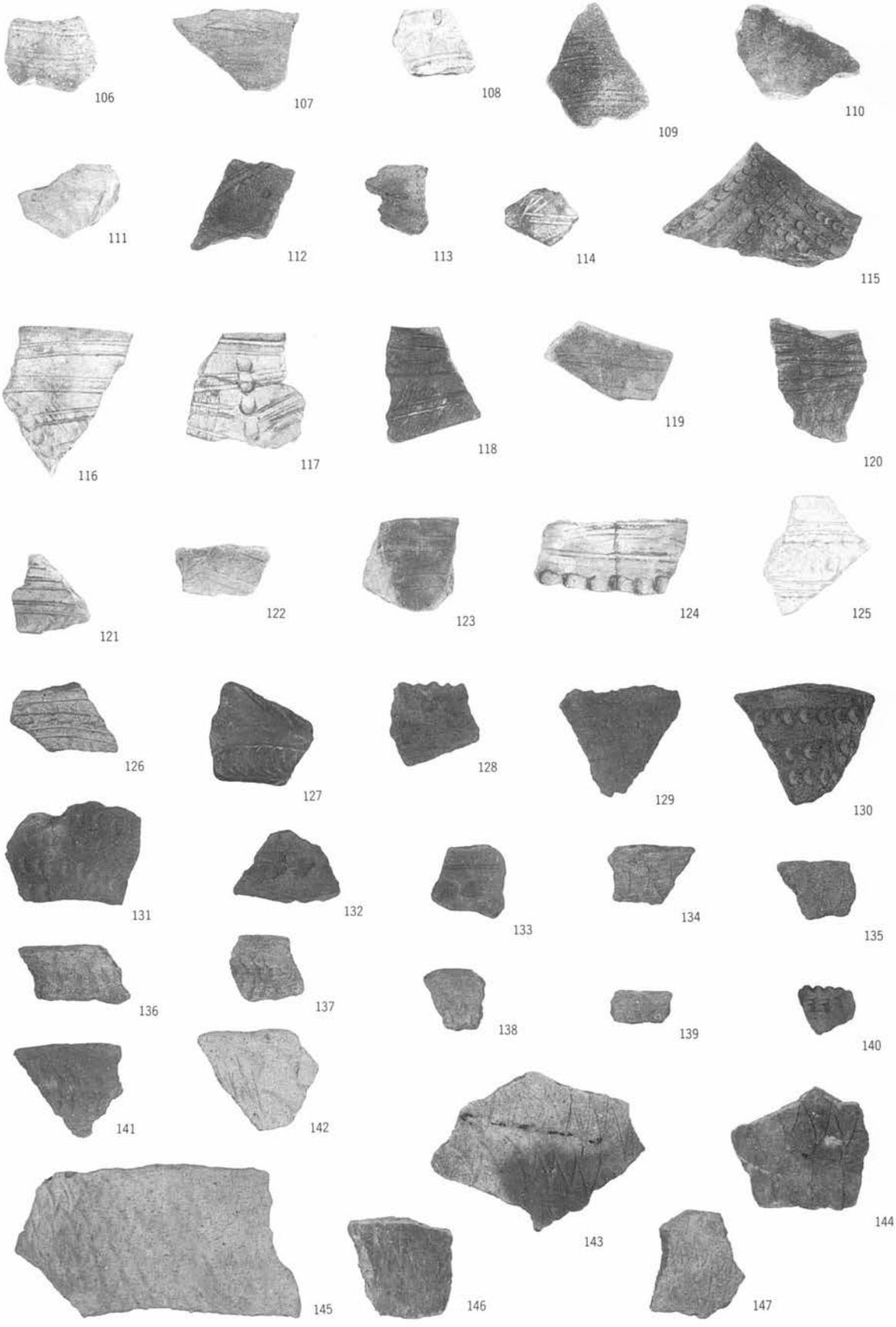
101

103

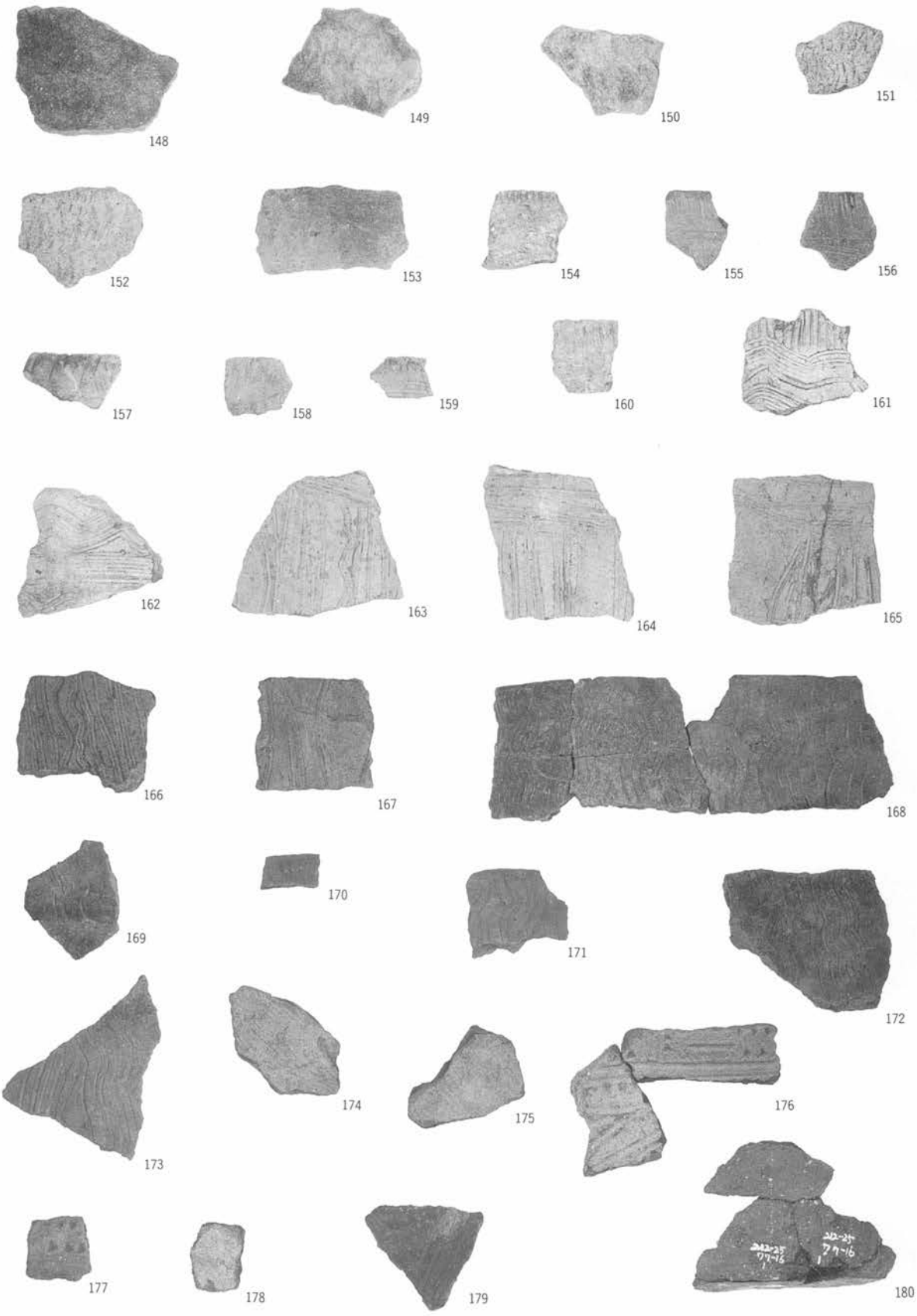
104

105

縄文時代の土器 (3)


106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147

縄文時代の土器（4）


148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180

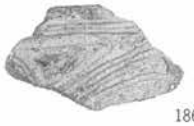
181

182

183

184

185


186

187

188

190

191

189

192

193

196

194

195

199

197

198

200

201

202

203

204

205

206

207

208

209

1

3

4

8

9

7

2

5

6

10

12

14

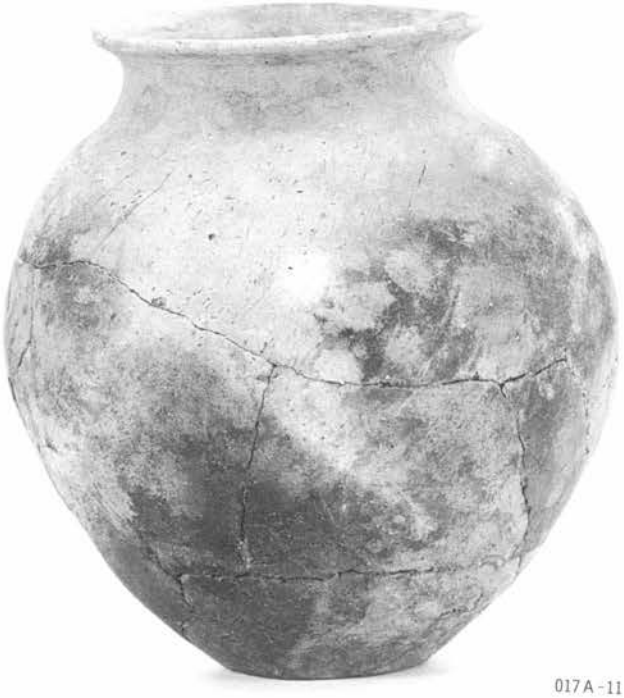
16

15

008B-1

008B-2

017A-14



017A-11

001-1

017A-5

017A-4

017A-1

017A-6

竪穴住居001・008B・017A出土土器

017A-20

017A-15

017A-16

017A出土土器

020D-5

020D-2

020D-7

020D-3

竪穴住居017A・020D出土土器

022B-1

025-5

025-1

025-4

027-3

025-6

032-4

032-2

032-7

027-4

竪穴住居022B・025・027・032出土土器

032-5

032-6

035B-7

035B-1

035B-2

035B-4

035B-10

竪穴住居032・035B出土土器

035B-13

035B-3

035B-14

035B-9

035B-11

竪穴住居035B出土土器

035B-12

035B出土土器

037D-1

038-1

039-2

039-1

竪穴住居035B・037D・038・039出土土器

040B-5

040B-1

043-2

043-6

040B-4

042-5

042-2

042-8

043-1

044-1

044-2

竪穴住居040B・042・043・044出土土器

044-4

044-5

044-6

竪穴住居044出土土器

044出土土器

047-5

047-3

047-9

047-26

047-10

047-26

竪穴住居044・047出土土器

047-19

047-17

047-11

047-12

047-27

竪穴住居047出土土器

047-18

047-25

047出土土器

078-1

055-1

078-2

005-2

竪穴住居047、溝005、土坑055・078出土土器

003-5

003-1

003-11

003-4

004-6

006-3

004-1

004-3

008A-4

004-8

009-1

008A-2

竪穴住居003・004・006・008A・009出土土器

008A-5

012-3

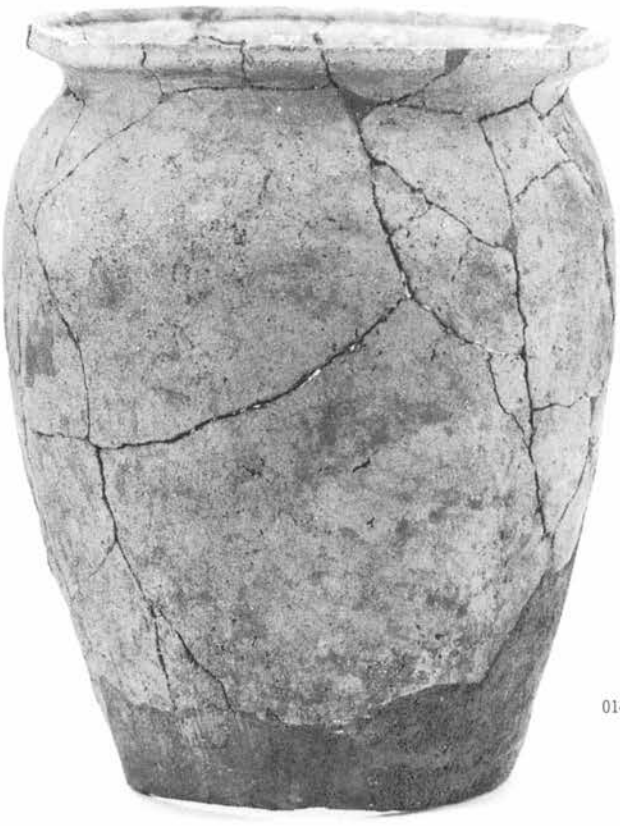
012-6

013-3

013-7

013-5

竪穴住居008A・012・013出土土器

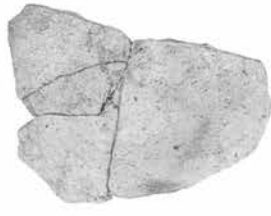


014-6

014-2

014-5

014-5



014-4

014-7

014-8

014出土土器

015-18

015-10

015-14

015-4

015-9

015-8

015-2

竪穴住居014・015出土土器

015出土土器

015-7

015-6

016-5

016-1

016-2

017B-1

017B-2

竪穴住居015・016・017B出土土器

018-3

018-3

018-4

018-6

018-4

020A-1

020B-9

020B-4

020B-1

竪穴住居018・020A・020B出土土器

020C-1

020B-6

020B-5

020B-3

022A-12

021-1

022A-2

022A-8

022A-13

竪穴住居020B・020C・021・022A出土土器

022 A -7

022 A -9

022 A -5

022 A -4

竪穴住居022 A出土土器

022A-10

竪穴住居022A出土土器

023-12

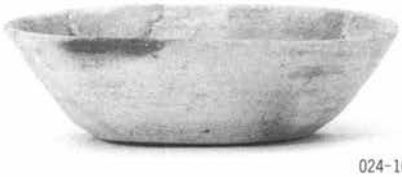
023-17

023-1

023-16

023-6

023-5



024-16

024-15

024-5

024-7

024-10

024-25

024-12

竪穴住居023・024出土土器

026-12

026-7

026-3

028-9

028-2

028-1

031-2

033-3

034-1

034-4

034-2

竪穴住居026・028・031・033・034出土土器

034-3

035A-1

037A-7

037C-4

035A-9

035A-9

036-5

036-2

037A-2

037A-6

041-10

竪穴住居034・035A・036・
037A・037C・041出土土器

040 A -5

041-2

041-6

041-5

046-1

041-11

054-2

067-1

066-1

067-1

竪穴住居040A・041・046・054・066・067出土土器

071-7

070-3

071-2

071-3

071-1

071-9

071-4

071-10

073-2

073-1

竪穴住居070・071・073出土土器

074-4

074-1

074-5

074-3

075-7

075-5

076-2

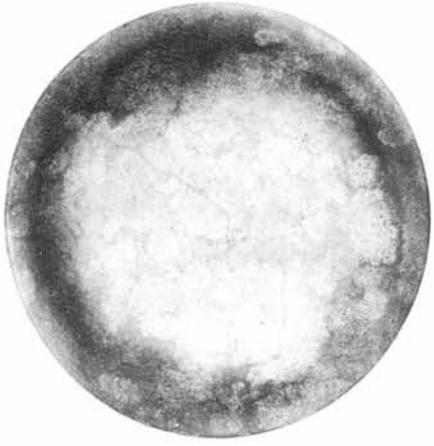
076-2

076-2

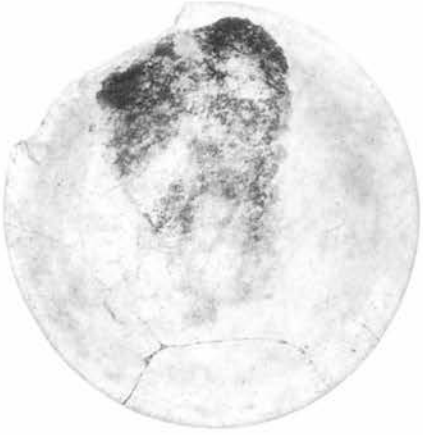
竪穴住居074・075・076出土土器

076-4

076-3



076-4



076-3

076-4

076-3

048-1

076-1

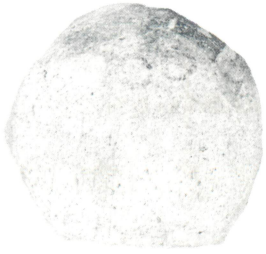
048-2

076-1

077-1

竪穴住居076、土坑048・077出土土器

13



15

13

14

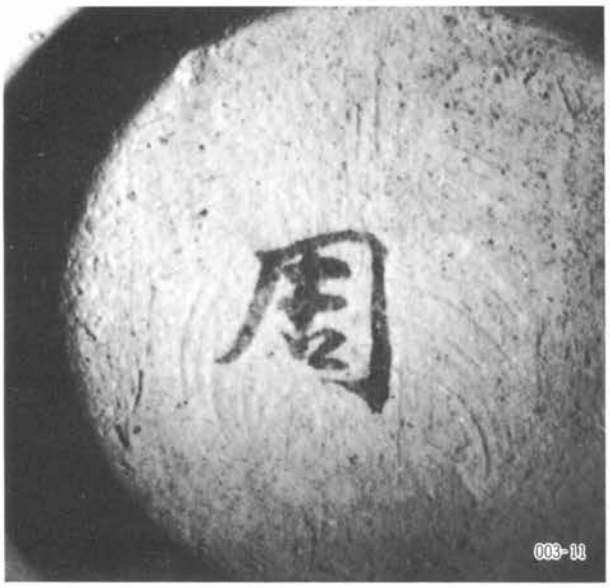
8

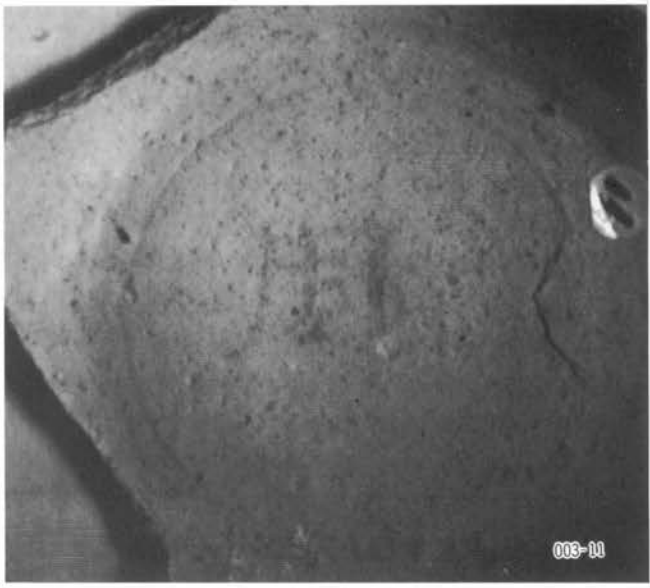
17

38

30

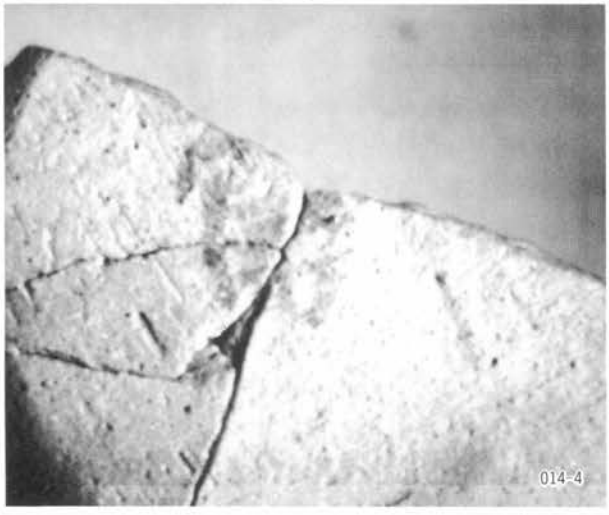
37


周
003-11

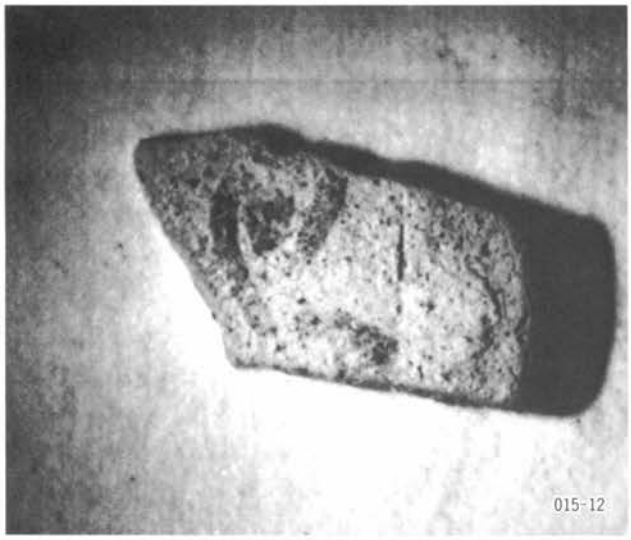

003-11

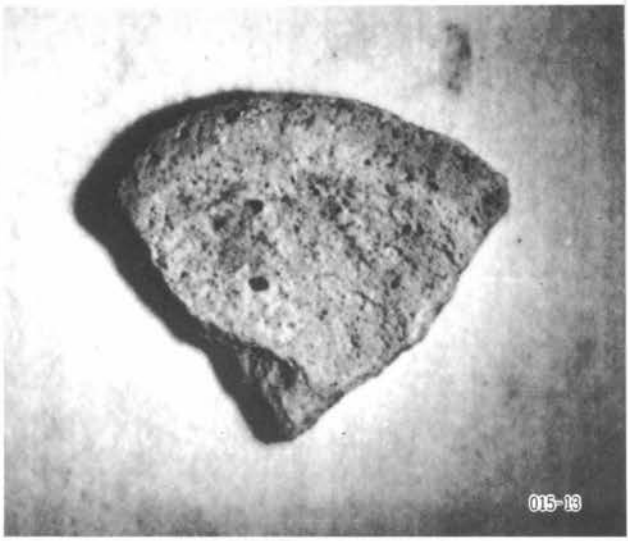
008A-4

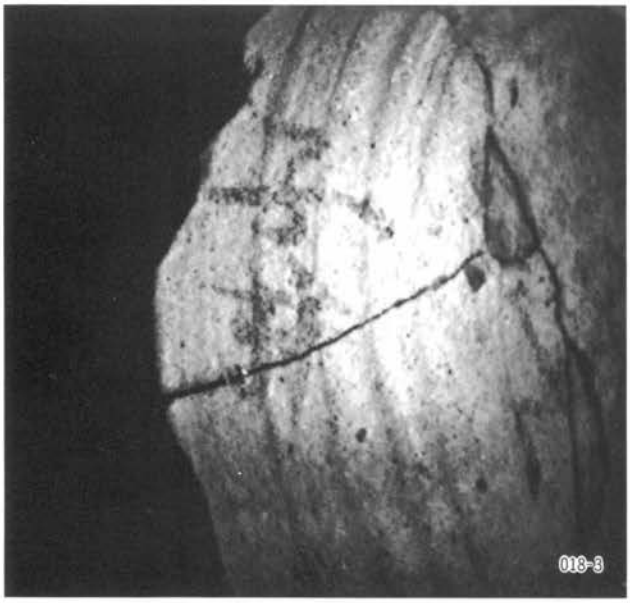
009-1

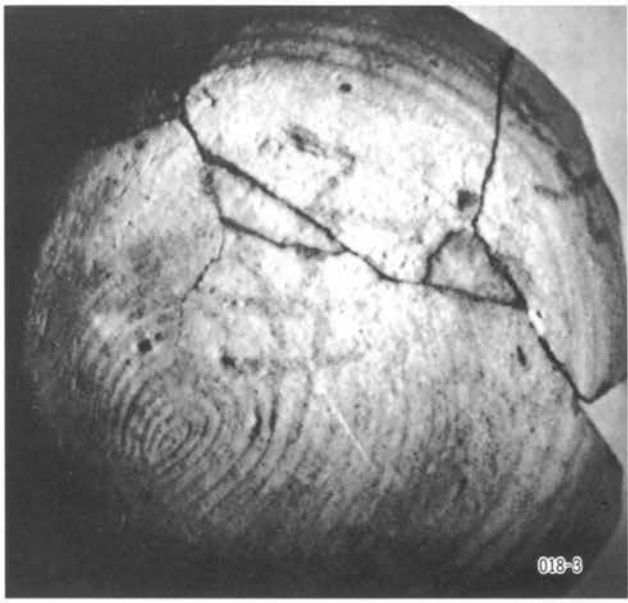

014-4

014-5


015-12


015-13

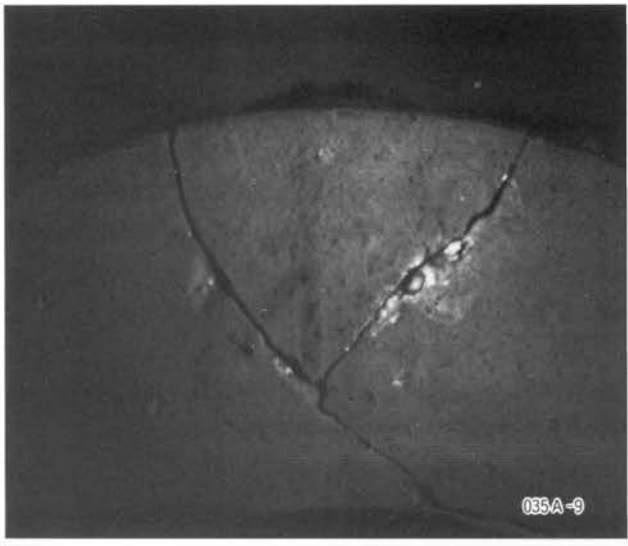

018-3


018-3

018-5

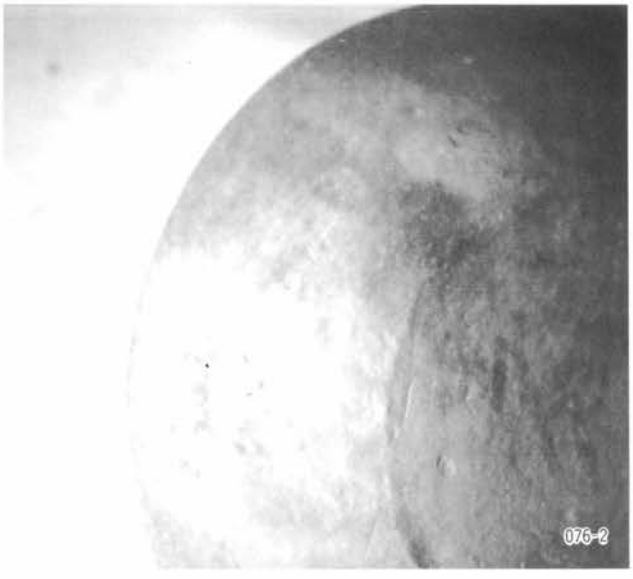
018-4

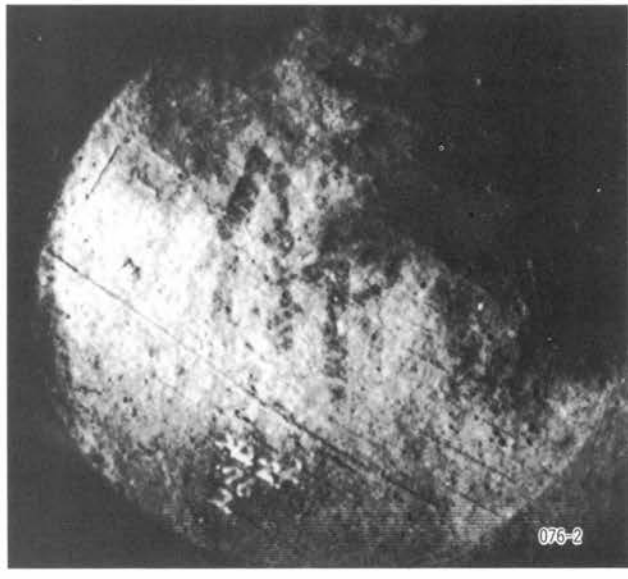
031-2

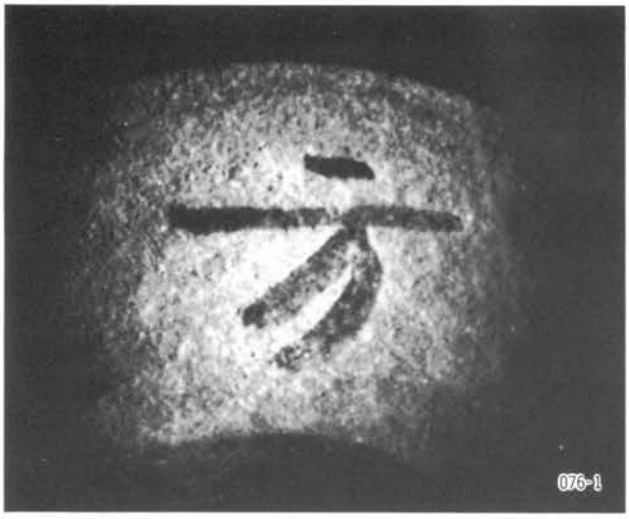

035A-9

076-2

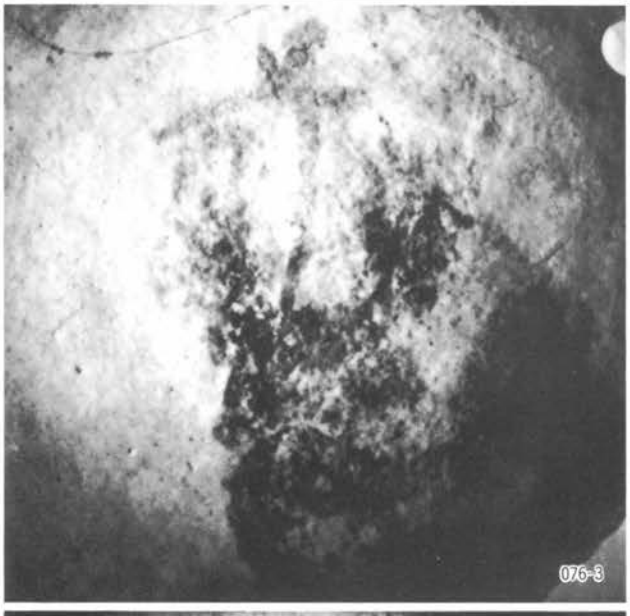
067-1


076-2

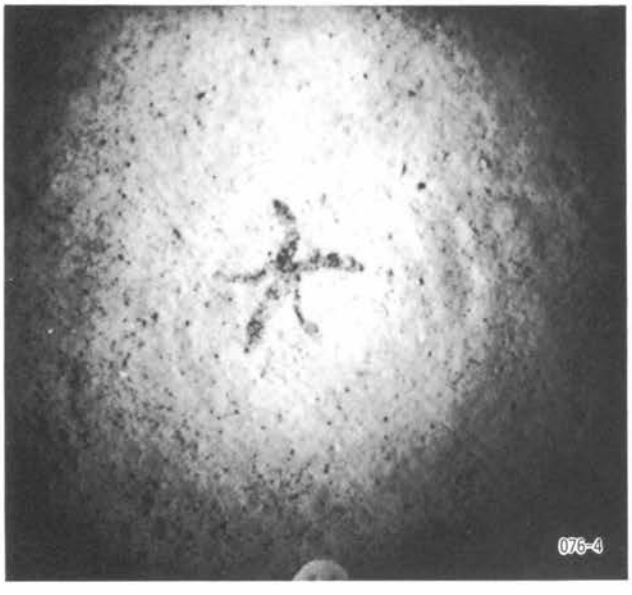

076-2


076-1

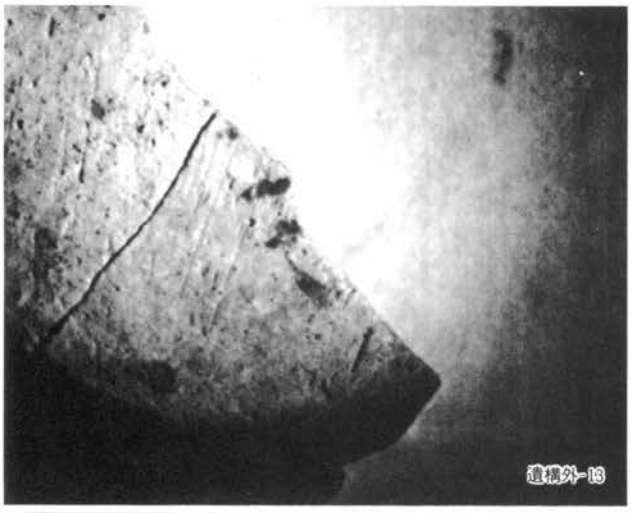
076-1

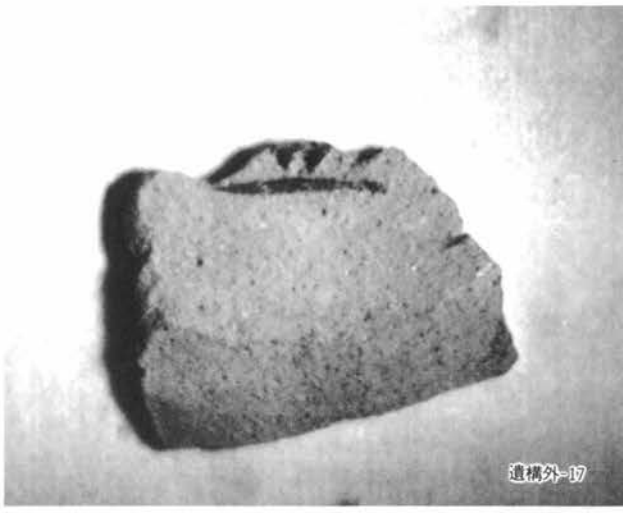

076-3

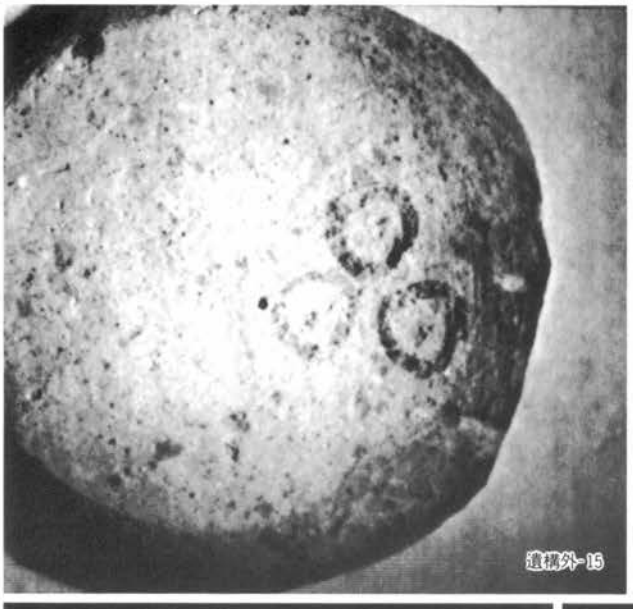
076-3

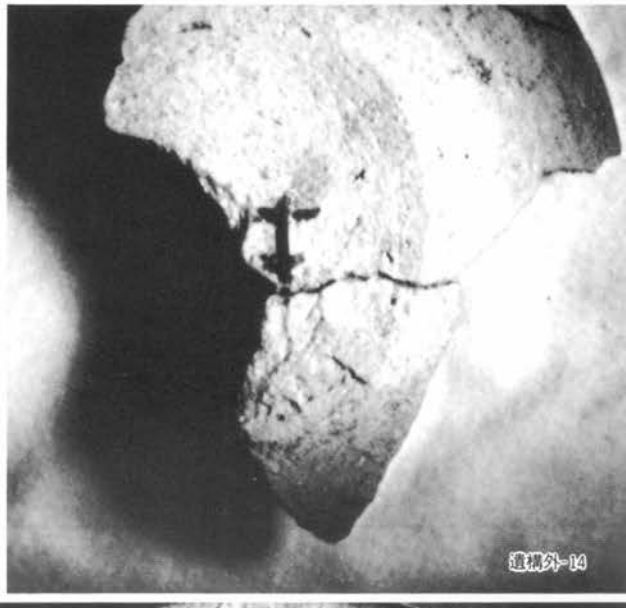

076-4

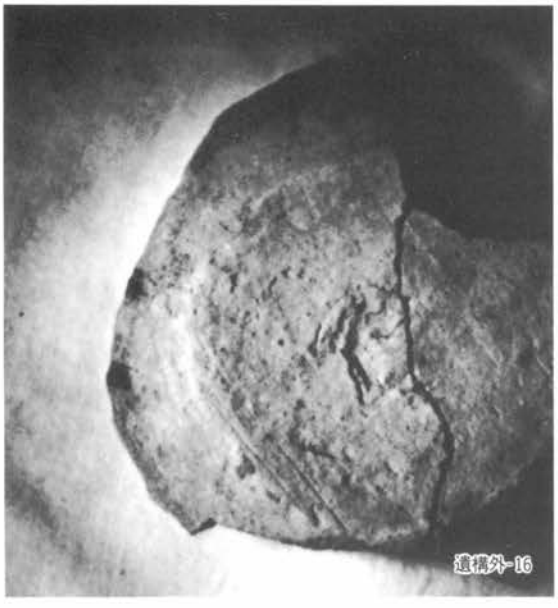
076-4


遺構外-13

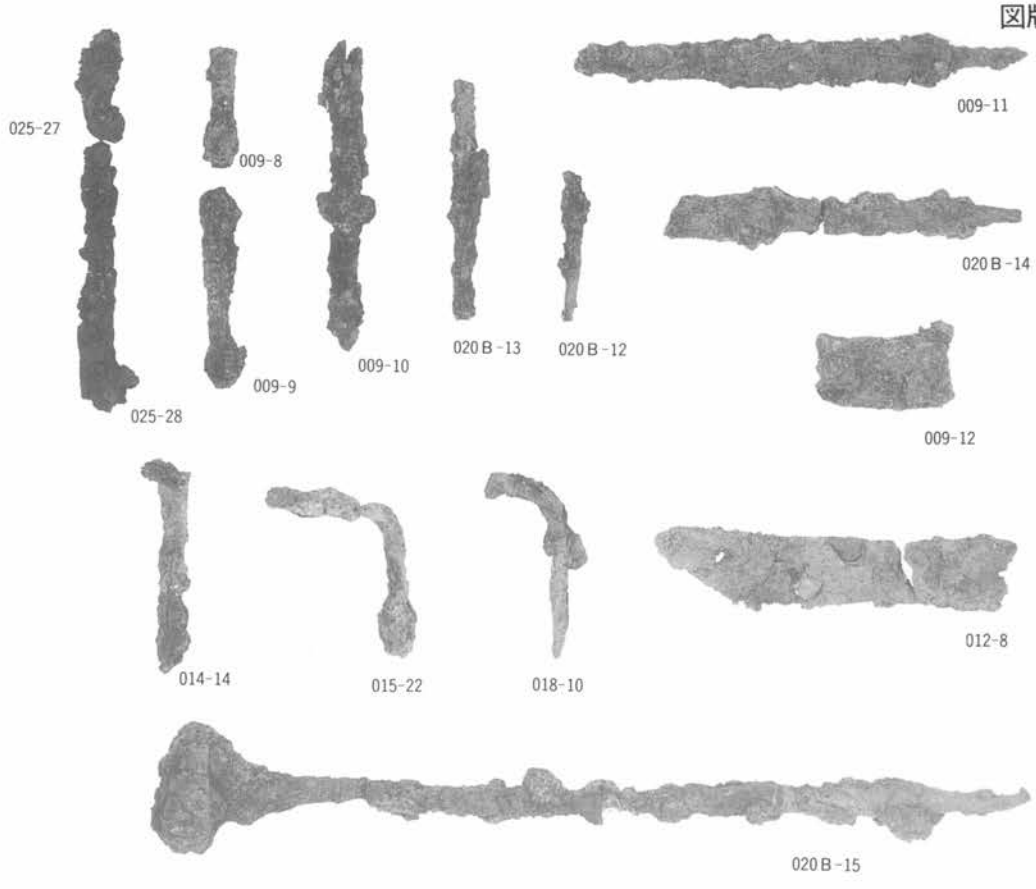

遺構外-17

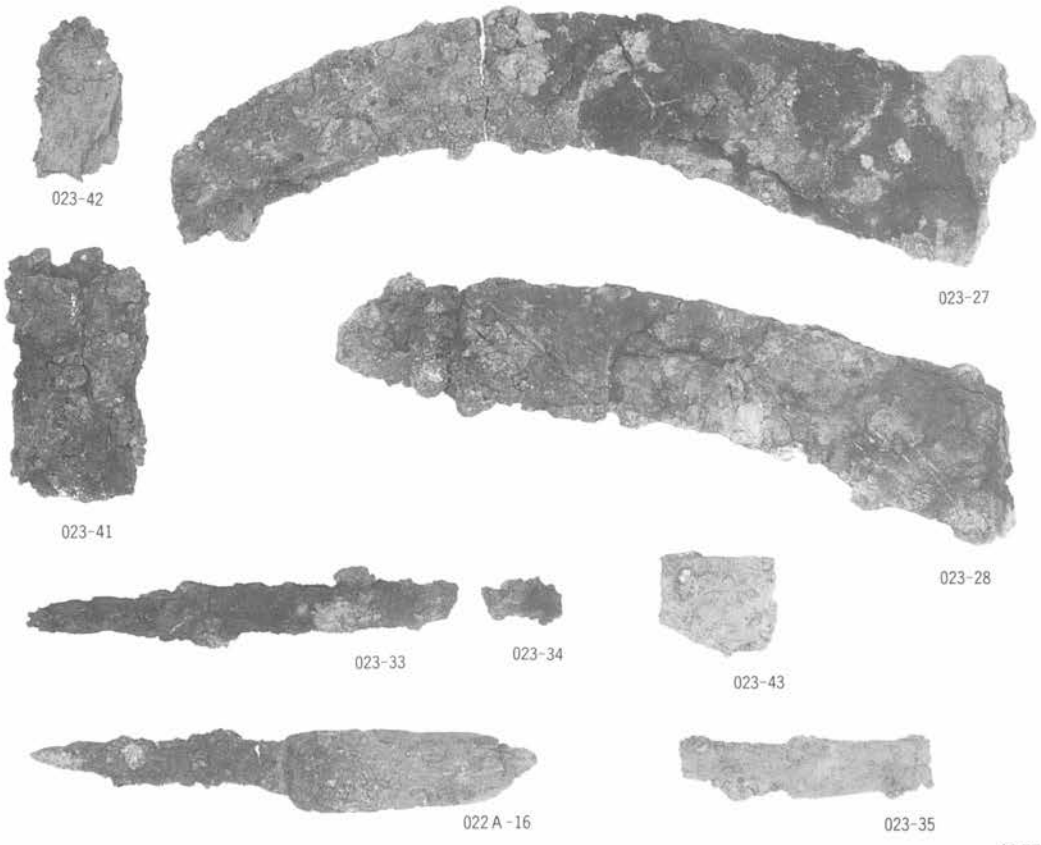

遺構外-15


遺構外-14


遺構外-16

019-10


025-27
009-8
009-10
020B-13
020B-12
009-11
020B-14
009-9
025-28
009-12
014-14
015-22
018-10
012-8
020B-15


023-42
023-27
023-41
023-28
023-33
023-34
023-43
022A-16
023-35

023-40

023-29・30・31

023-32

023-37・38

024-34・35

024-43

024-36

024-37

024-33

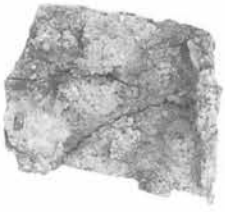
024-40

024-44

024-26

024-46

024-27・28


024-45

024-29・30

024-31・32

026-15

033-5

026-16

028-15

029-4

033-4

028-12

035 A -11

035 A -12

028-14

068-9

070-4

036-8

069-3

073-5

037 C -6

070-5

068-10

070-6

073-4

036-9

037B-2

015-21

014-13

021-7

023-26

紡錘車

1
(032-49)

2
(032-95)

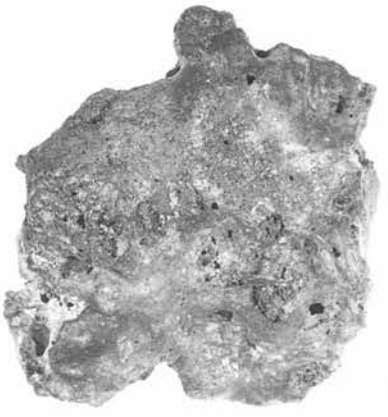
3
(019-604)

3
(019-604)

4
(033-12)

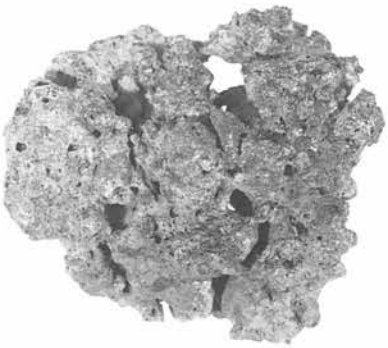
5
(019-605)

6
(019-86)



7
(019-571)

鉄滓 (1)



8
(032-18)

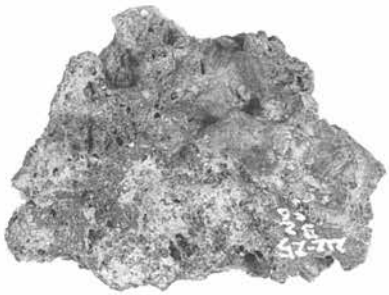
9
(032-6)

11
(032-87)

12
(032-29)

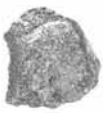
13
(032-143)

10
(032-3)



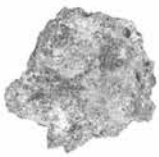
15
(032-26)

14
(032-132)



18
(032-8)

19
(032-239)



16
(032-58)

17
(032-117)

20
(032-527)

21
(032-107)

鉄滓 (2)

001-3

025-9

025-10

025-11

025-12

025-13

027-9

017A-21

025-17

025-18

025-14

025-16

025-15

001-4

017A-23

027-14

027-12

025-21

025-23

025-19

025-20

017A-22

027-10

027-11

027-13

025-22

025-24

025-25

025-26

035B-15

038-8

037D-8

037D-7

037D-6

037D-5

042-13

042-14

037D-11

037D-10

037D-9

遺構外-48

遺構外-49

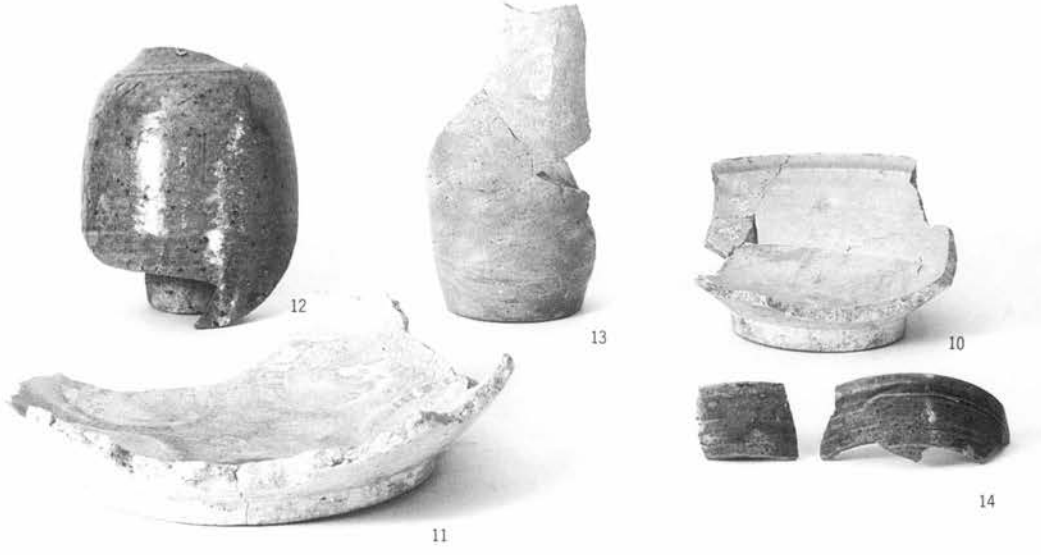
遺構外-50

遺構外-51

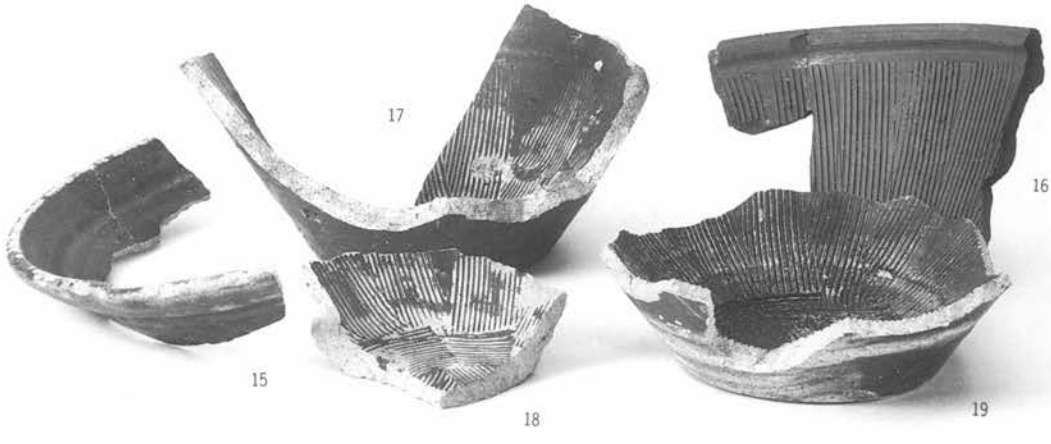
039-7

037C-5

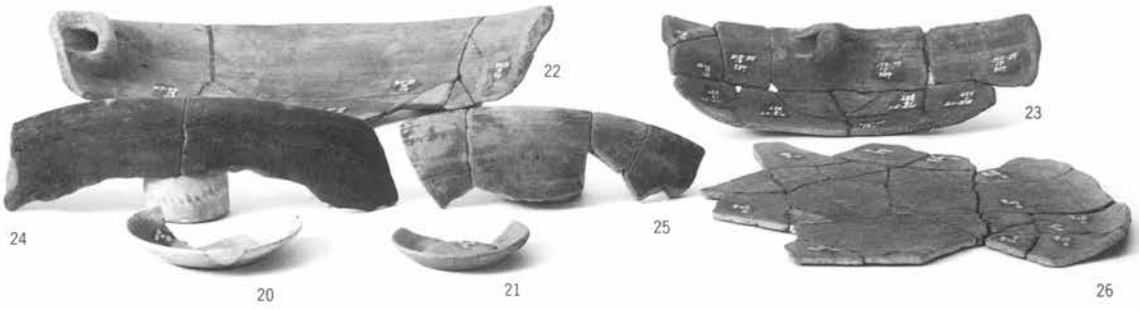
1．近世遺構群019出土陶磁器（椀・皿）



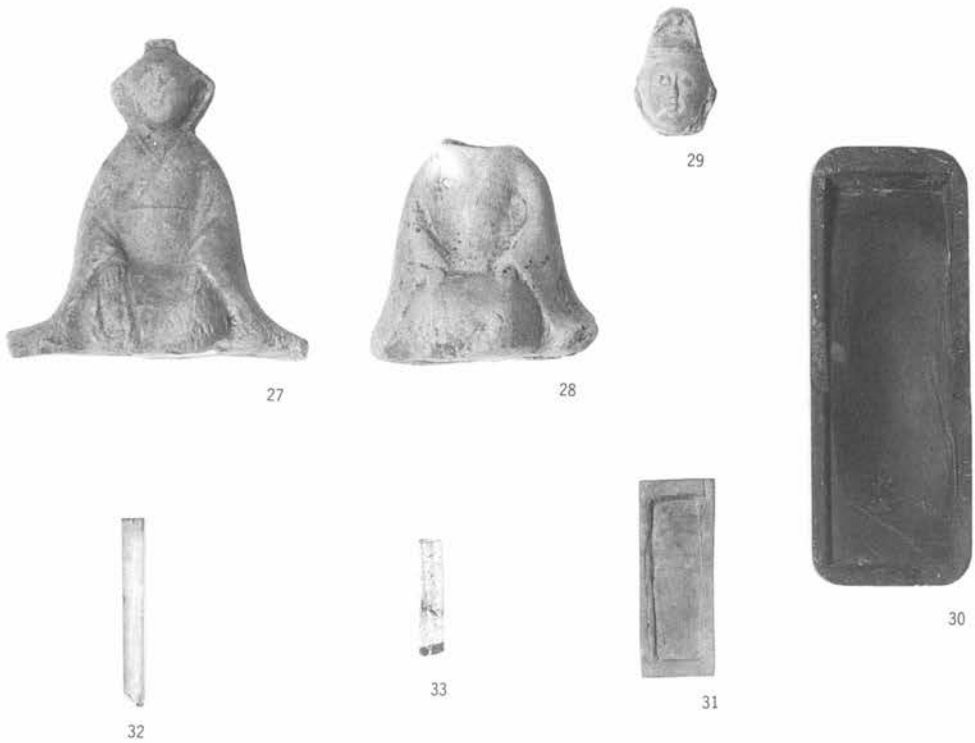
2．同上（徳利・平鉢・香炉）



3．同上（擂鉢）



1．近世遺構群019出土土器（かわらけ・焙烙）



2．同上（土人形・硯等）

34

35

36

37

38

39

40

41

42

43

44

45

46

48

47

49

50

51

52

53

54

55

56

57

58

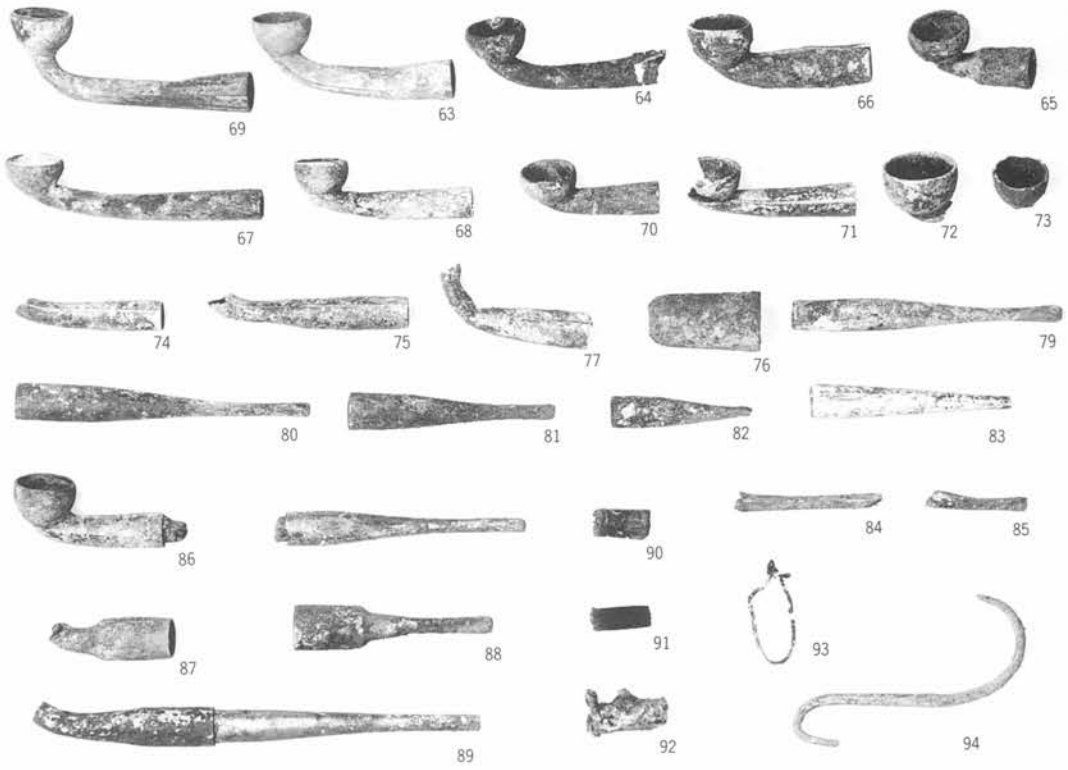
59

60

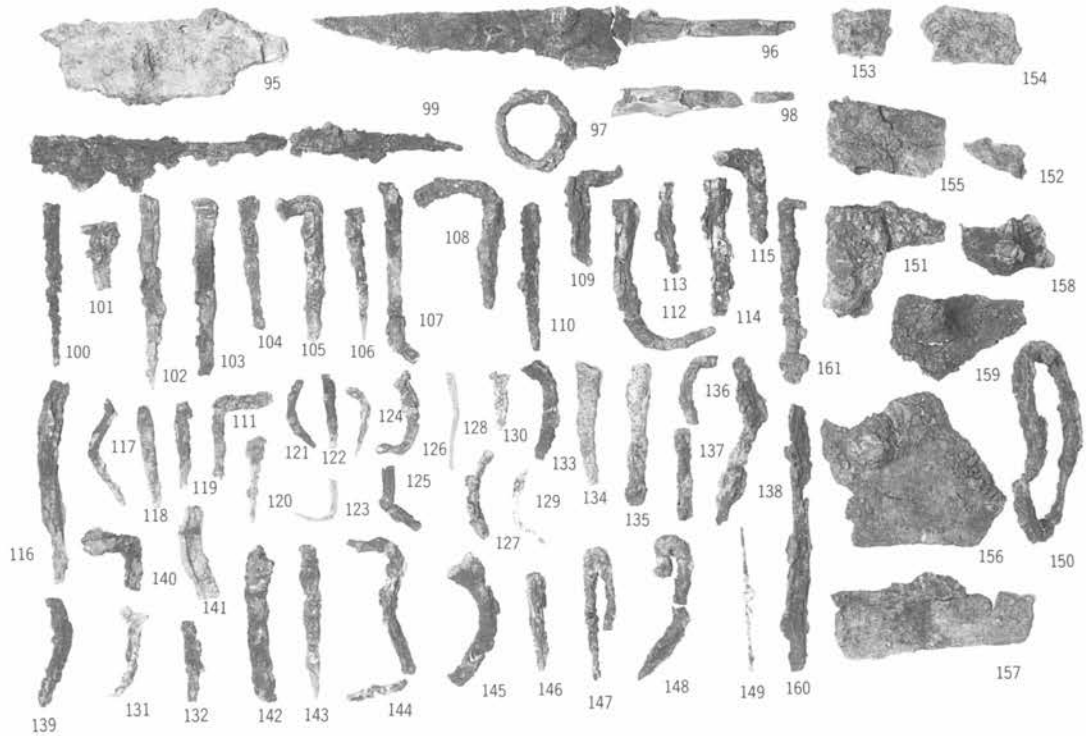
61

62

78



1．近世遺構群019出土銅製品



2．同上鉄製品

千葉県文化財センター調査報告第236集

佐倉市南広（みなみひろ）遺跡

── 佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書X ──

平成5年3月25日　印刷
平成5年3月31日　発行

発行　千葉県土地開発公社
千葉市市場町7-9　☎043(222)9106

編集　財団法人　千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809－2 ☎043(422)8811

印刷　株式会社　弘文社
市川市市川南2-7-2　☎0473(24)5977